續群書類從

第拾八輯下

東京

續群書類從完成會

續群書類從第拾八輯下目次

物語部

日記部

紀行部

續群書類從第拾八輯下目次終

續群書類從卷第五百十三

總檢校保己一集
男 源忠寶校

物語部十三

山口記

此物語題號種々儀在之。古註之說。男女物語云々。其子細者伊勢の二字を男女と讀故也と云へり。此義京極黄門奥書に載られず。然間當流に不用處也。又云。業平狩の使として伊勢に下向せられ。齋宮に逢奉る事。此物語の及肝心之間。有此名云々。定家卿同奥書に破之。又同奥書に。此物語名字。非彼筆者。何稱伊勢乎と云へり。以是當流に用る題號は。或說ニ云。伊勢書之。奉宇多御門之由云へり。此儀可然。伊勢は七條の后宮の宮女たる間。彼宮に書て奉りし作物語也。其內業平身上に在ける事もあり。又万葉集以下の歌。其外さもあらぬ事を。業平を主になして書る處多侍るべし。又或自筆の本の奥書に。此物語古人之說々不同。或稱在原中將自書。或稱伊勢筆作。就彼是有書落事等。上古之人强不可尋其作者。唯可翫詞花言葉而已と侍るにや。黄門の心にも。以往の事なれば。おぼつかなくて思召けるなるべし。雖然於名字用伊勢筆作之義。於心者可翫詞花言葉之義用之者也。學者此義可思者歟。

山口記

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶのみだれかぎりしられす

此段の詞に。狩衣のすそをきりてやるとは。はじめて見初たる女に。心ざしのふかきいろ見えねばなり。五文字に春日野とをくは。所春日なればなり。紫は野に生るもの也。下の句は。そのときき たるかり衣しのぶずりなり。しのぶはみだるゝものなれば。思ひの亂るかぎりしらぬよしなり。

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに

此歌は左大臣源融公の歌なり。たゞ今の返しに似合たれば。心を付かへてをくれるなり。本心は上は序なり。誰ゆへにみだれし我にてはなきものをといふは。君ゆへにこそみだれそめしかといふ心なり。今の女の返しに。其こゝろにては道理かなはず。始てなりひらのをくる歌の返しに。君故にこそ亂れぬらむの心なり。源氏物語にも。當座に歌のことはりをつけかふる事あり。

おきもせずねもせで夜半をあかしては春のものとてながめくらしつ

此段の詞に。その女世の人にはまされりけり。其人かたちよりは心なんまさりたりとあり。それをほのかたらひし後よめる歌なり。おきもせずねもせずとは。おくるともなく。ぬるともなくの心也。思ひのくるしきさまなり。かく苦しみて夜をあかして。ひるはながめくらす義なり。春の物とては。春は霖雨かすかなる物なり。又春は春のあはれに感せられ。世の人みな詠るものなり。大かたの人さへながめがちなるころ。たぐひなき人にしのびて逢て。春の雨の霞とも雨とも

わかぬばかり降たるを見ん心かぎりなく侍るべし。詠と長雨とかねたる歌なり。いかにも此歌をば時節のあはれと。其人のあかぬおもひとを。よくおもひ入て吟味すべし。

思ひあらばむぐらの宿にねもしなんひじきものには袖をしつゝも

此歌は二條の后宮の御かたへ。ひじきもといふ物を。なりひらのまいらするとて。そへたる歌なり。むぐらの宿に思ひをよむことは此歌よりよめり。疎屋のかなしきこゝろなり。但此歌はむぐらの宿に思ひのあるにあらず。むぐらの宿におもひある事ならば。いかてかそれにねがひてねむとはいふべき。此歌の心は。業平二條のきさきを思ひそめしより。なげきはかぎりなく成ゆき。心にはかなはぬ戀路也。さりとてはおもひもやまぬかなしみのあまりに。わざと思ひあらば玉のうてなにぬるともせむなし。思ひなくてだにあらば。しき物には袖をしても。むぐらの宿にこそねめといへる心なり。むぐらの宿もかなしかるべけれども。いまのおもひにまさるべきの心なり。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

これは二條のきさきのまたみかどにもつかうまつり給はぬころ。五條のきさきの西のたいにおはしましゝころ。なりひらのしのびにかよひたてまつりしこと有まじきことなれば。むつきの十日ばかりのころ。外にかくしまいらせられしかば。なりひらちからなく思ひわびつゝ過し侍りし間に。としかへり又むつきに成て。梅の花さかりなるころ。思ひいやまさりになれば。たゞわびて西のたいにゆきてながむるに。こぞに似るべ

きにも侍らねば。いたづらにあばらなる板じきに。おもひわびあかしてよめる歌也。心は月やあらぬとは月もたゞこぞの月。春もまたむかしの春。我身もまたもとの身也。きさきにあひ奉らねば。月も去年の月ともおぼえず。春もむかしの春ともなく。身も本の身ともなきといふ心を。文字は三十一字にかぎり有物なれば。もとの身にしてといひすてゝ。心にもたせてをけるところ。業平の歌のさまなり。なを此歌は梅の花さかりに去年を思ひ出てといふ心をこめて。うちながめて吟じみれば。餘情かぎりあるべからず。俊成卿いくたびも此歌の事かきをき給へり。たれも心をよく付て見侍るべし。

人しれぬ我かよひぢのせきもりはよひ／＼ごとにうちもねなゝん

此歌はかの西のたいに二條のきさきおはしゝとき。しのびかよひ。たびかさなりしかば。人をすへてまもらせたまへるのちよめる。心はあきらかなり。せきもりとは。我にさはる人をいへるなるべし。

しら玉か何ぞと人のとひしとき露とこたえてきえなまし物を

此歌は業平二條のきさきをぬすみ奉りて。大うちを出し夜いとくらきに。草の露をかれは何ぞと男にとひ給ひしに。そのおりは業平こゝろもまどひ。身をも我とも思ひわかざりしを。御せうとたちうちへ參り給ふとて。なく人あるをきゝつけて。とりかへし給ひし後の歌なり。何ぞととひ給ひしとき。露ときえなましかば。かゝる思ひあらじの義也。此歌しら玉かといへる五文字よろしからず。されども何ぞとうけたるにより。子細なく侍る也。物の名をもてことうたがひ

いはゞあしかるべし。たとへば松風遠山かなどのさまなり。此註は兒女子のためにかきをく物なれば。かやうのことまで申侍るなるべし。此段は例のつくり事也。

いとゞし　過行かたのこひしきにうらやましくもかへるなみかな

大かたそのまゝ聞えたる歌なり。猶なりひら流罪の身となりて。行すゑなふいなかへおもむくとき。いまだ見もなれぬ海づらを行に。なみのしろうたつも。目にたつさまなるが。うちよするかと見れば。やがてはかへり〱するが。我歸京はいつをたのむかぎりもなき心あはれにや。此理を思ひ入て。分別あるべきもの也。

しなのなるあさまのたけにたつけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

これも同じく流罪のときの事也。心はあさまの山は世にかくれなき山なれば。うちみるもたぐひなきに。名におふけぶりの立のぼりたるさま。目もおどろくばかりおもしろければ。をちこち人もこの景氣を見とがめぬことあらじの心也。旅のそらにては月雪雲風もかなしき事はめづらしからず。時にいたりて。またかゝる旅にもあらずば。いかてなど心をのぶること侍るにや。

から衣きつゝなれにしつましあればはる〱きぬる旅をしぞおもふ

此段の詞に。その澤のほとりの木のかげにおりゐて。かれいひくひけり。其澤にかきつばたいとおもしろくさきたりなどいへる詞あり。そのときかきつばたを折句によめる歌なり。心は衣はきてなるゝものなれば。なれにしとはいへども。なれにしといふより。戀の心へやりて見るべし。なれにしつまし

あればとは。思ふ人を都にをきて。はる〴〵來ぬる思ひの切なる心。あらはにいはで。はる〴〵きぬる旅をしぞといへる。感ながき也。旅のそらの思ひ。都の妻を思ふ心も。すゑの句にあはれふかくこもれり。これ中將の歌のさま也。

するがなるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

此歌はみやこにてあひ見し人には侍るべけれど。罪にあたりて。みやこをいでしより。行するゑなくはるかに過て。このうつの山までまよひ來しに。こゝの山路もつたかえでうちしげりて。もの心ぼそく。たゞくらき夜のみちをたどるやうのこゝろなれば。今その人のことをおもへば。うつゝにも夢にもあはぬ心地して侍る義也。

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん

此歌は五月のつごもりに。雪のいとしろうふれるといへる。その心なり。時しらぬ山はふじのねにてありけりと云て。さていつとてかかくふるらんと。五月の雪をかさねて不審したる心なり。かく云は此山をほむる義なり。かのこまだらはむら〳〵の雪なり。此歌もあさまの山のごとくの旅行をなぐさむる心也。

名にしおはゞいざことゝはん都鳥わがおもふ人はありやなしやと

此段はことにあはれふかく。其感たぐひなきものなり。まづむさしの國としもつふさの國との中に。いとおほきなる川ありといふより。その河のほとりにむれゐておもひやれば。かぎりなくとをくも來にけるかなと。わびあへるにといへり。あはれ淺から

ず。のりてわたらんとするに。みな人京に思ふ人なきにしもあらずとかける詞。しもと云字など心を付べくや。京には見えぬ鳥なれば。わたしもりにとひければ。これなん都鳥といふをきゝてと侍る。此詞なを思ひをそふるもよほしとなるにや。歌はわきてこもれる事侍らず。古今集の事書に。此詞を長々とかけり。貫之の心おもひやらるゝものなり。

みよし野のたのむのかりもひたぶるに君がかたにぞよるとなくなる

此段まことに此歌などにてつくれるものなり。歌の心。みよし野は田多くて。鴈のやどれる所なり。我心の人によるをおもてにはいはで。鴈にいはせたるものなり。此ひたぶるとは。永といふ字をかけども。たゞ一向にと云心なり。たのむは田面（タノモ）也。五音なれば憑かたへ用ゆるによりてかくいへり。返し。

我かたによるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつか忘れん

鴈はよるなくものなれば。きみがかたへよるとも。我かたへよるとも。いへるこゝろは。たゞわがかたによるこゝろをよろこぶ義なり。

わするなよほどは雲井になりぬともそらゆく月のめぐりあふまで

ほどは雲井になるとは。我人あひとをざかる義なり。さりともめぐりあふまでわするなよといふ心なり。月はめぐる物なれば。空ゆく月のと云て。その下心友たちのことをいふなり。此歌拾遺には橘直幹が歌と見えたり。かやうの相違おほきものなり。その集の義にしたがひて心得べきのよし。師説侍りしものなり。此歌は風情おもしろき歌也。

たゞ歌はいかにもすがた肝要の事とぞ。

むさし野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

前の詞に火つけんとすといへる故によめる歌なり。若草のつまとは。ほのかにもえそめたるをいふなり。是は女の歌也。若草のつまとはいへども。吾妻の心なり。業平も我もこもる野なれば。けふはなやきそといへる心なり。此段殊に作り事也。

むさし鐙さすがにかけて頼むにはとはぬもつらしとふもうるさし

その國の名をさしてよびつけていへる也。あぶみは武蔵より參りそめしによりむさしあぶみといひならはせり。弓は信濃より參初しかば。しなのゝまゆみといふがごとし。當時にもあることなり。此歌は業平みやこに思ふ人のかたへやるふみに。むさしあぶみと書てとあり。かけて思ふ事也。其のち女のかたよりをこせたる歌なり。さすがにとはたのまれがたけれど。さすがにかけて頼むにはの心なり。とはぬもつらしとふもうるさしとは。しのぶ中のあやにくなる心なり。うるさしは只うきなどゝいふと同事也。

とへばいふとはねばうらむ武蔵あぶみかゝるおりにや人はしぬらん

前の歌のあやにくにして一通になければ。いかにすべきぞと思ふに。かゝる折にや。せんかたなくて。人のしぬるかといふ事もあらんといふ心なり。かくのごときの歌おぼえてもせんなくや。むさしあぶみなど。連歌にすまじきと云。

中〳〵に戀にしなずば桑子になるべかりけり玉のをばかり

此歌は萬葉に中〳〵に人とならずば桑子に

もならまし物を玉のをばかりといふを。すこしかへて作りたる段なり。戀といふ物は。まづ逢見むこと本意なれど。かなはねばせめてしなばやと思へば。それもかなはず侍るとき。なか〱かくこひにしなてあらば。せめて桑子にもなるべかりけりと云義也。玉のをばかりは。しばしといふ詞なり。桑子をねがふは。ちぎりのふかきものなればなり。

夜もあけばきつにはめなでくたかけのまだきになきてせなをやりつる

前の歌をあはれと思ひて。業平行てねたる夜の歌也。きつとはきつねなり。下畧したる也。せなはおとこをいふ。夜ふかくにはとりのなきて。思ふ人をほどなくかへする。にくき義也。

くりはらのあねはの松の人ならばみやこのつとにいざといはましを

此歌はをぐろさきみつの小島の人ならばと云をすこしかへていふ也。あねはの松とは女をよそへていへり。松を女によそへたるときは。その人なるを。下にならばといへるところ。かさね詞也。さそはれても行べき人ならばと。詞をそへて心得ぬれば。しかるべきにや。

しのぶ山しのびてかよふみちもがな人のこゝろのおくも見るべく

此歌はまことになりひらのうたなるべし。女のこゝろの中ばかりかたければかくよめる。大かたはきこえ侍る歌也。なを此心は胸中にしのびかよふみちもがなといふ心也。まことにおもしろき歌也。

手をおりてあひみしことをかぞふればとをといひつゝよつはへにけり

此段有常は淳和。仁明。文徳三代はあひ侍りしかども。清和の御代におとろへにて〻。たづきなきころ。年比の妻堪忍の心なくて。尼になりていなんとするとき。心さまするべきたよりさへなければ。業平のかたへ此よしをいひやり侍りし歌也。四十年のちぎりの心也。此歌の中に。かゝるちぎりをすてゝ。世をのがるゝところのうらみのこゝろこもれる也。

年だにもとをとてよつは八にけるをいくたび君をたのみきぬらん

心は年さへ四十年の御ちぎりなれば。そのあいだいかばかりかたのみ給ひけん。しかれば名ごりもさこそおはしますらめと。有常の室の心を。なりひらありつねにいへるこゝろ也。これは女をたすけてよめる歌也。かくいひやりければ。有常。

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

よるの物までつかはすといふに。女のさうぞくなどもそふべき也。それをうれしくもあはれにも思ひてよめる歌也。これやこのあまの羽衣とは。なりひらのをくりたるさうぞく衣どものことを。あまの羽衣とほめてことはる也。業平のきたまへるみけしなればといふ義也。みけしとは上衣と書。また御衣とも書といへり。たてまつるとは着することなり。車などにのることをいへり。よろこびにたえて又よめる。

秋やくる露やまがふとおもふまであるはなみだのふるにぞ有ける

秋やくる露やまがふとおもふまであるとは。なみだの袖にあまるを云也。そのゆへは秋は人をうれへしむるときなれば。そのこ

ゝろにて秋やくるといへり。露やまがふとおもふまては。露は山野草木の上にをくものなるを。まがふて我袖へきて。しぼるかと思ふまで袖のぬるゝは。たゞいまのよろこびのなみだにてありけるといふこゝろなり。雨首ながら上にてうたがひて。下にて其理をことはりたる歌也。

あだなりと名にこそたてれさくら花としにまれなる人もまちけり

これはある女のもとへひさしくたえてのち。花さかりに業平の來たるときよめる歌也。業平かねて此女をあだなるやうにいひけるを。いま此歌に我身をさくらになずらへてよめるなり。惣の心。あだなりと名にこそたてれさくら花と。まづよめる義は。さくらはあだなるやうに名にこそたてれど。かう年にまれにとふ人をもまちえて侍れば。あだには侍らぬものをといふ義也。

けふこずばあすは雪とぞふりなましきえずはありとも花とみましや

なりひらの心には。さくらのあだになきにては侍らず。けふちらぬさきに來ればこそあれ。あすにもきたらば雪とふりぬべし。しかれども木の本などの雪をありとはみるとも。本のさくらとは見まじきものなればといふは。女のうつろはぬさきにきたればこそ。あだにはおはせぬやうなれと。よそへていへる也。

くれなゐに匂ふはいづらしら雪のえだもとをゝにふるかとも見ゆ

これは小町がかたより業平にをくる歌なり。心は好色の人とみれば。いろなき人にこそあれと。業平をいふこゝろなり。くれなゐをば好色にたとへ。雪をばいろなきによそ

そへていへり。返しの歌。

くれなゐににほふがうへのしら菊はおりける人の袖かとも見ゆ

此歌は小町が我をけさうしてよめるとは。業平心得ぬれども。たゞ大かたの歌のやうによめることを。前の詞にしらずよみによみけるとはいへり。此心くれなゐににほふがうへとは。重りたる心にはあらず。世上にそのうへになどいふ義也。くれなゐに匂ひたる處もあり。また本よりの白菊なれば。匂ふがうへとはよめる也。

あま雲のよそにも人のなり行かさすがに目には見ゆる物から

あま雲はよそながらみゆるものなれば。常に見かはせども。業平のたちよらぬにそへていへる歌なり。

天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山のかぜはやみなり

天ぐものやうに。よそにのみしてへぬることは。なをおはします山のかぜがはげしければなりといふは。女の別人に心をかはすをしりていふ心なり。此女は有常がむすめのよし。古今集に見ゆ。

君がため手をれるえだは春ながらかくこそ秋の紅葉しにけれ

此歌はなりひら大和に侍る女のもとより京へのぼるに。女の心たのまれぬものなれば。うつろひやすからんとおぼつかなさに。かえでの若葉の紅葉したるをおりて。付てつかはしける也。君がためたをれるえだのうつろふは。御心さもやあらんといふ義なり。

いつのまにうつろふ色のつきぬらん君がさとには春なかるらし

女の返しの心は。たゞいまわかれて行人の。

いつのまにうつろひたまへるかといふ義也。春なかるらしとは。秋になりはてぬるにこそあれとうらむる心也。

出ていなば心かろしといひやせむ世のありさまを人はしらねば

これは業平とたがひに思ひかはして。すみわたりける女の。まことにあだなる物にて。いさゝかのことをうらみて立出ける時よみをける歌也。心は我かく立出るを。世間の人は心かろしとぞいはん。夫婦のあいだのうらみをばしらてと云義也。世のありさまとは。男女の中の事なるべし。

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我やすまゐし

これは女の立出たるあとに。なりひらのよめる歌也。思ふかひなき世なりけりとは。切に我思ひし人のあさはかに立出たるをおもふ心也。年月をあだにちぎりて我やすまゐしと。業平わがうらみを思ひかへして。我にはとがもなしと思へど。年月をへし中に。なをざりにちぎりてや過けんと。一かたに女のあやまちをおぼせぬ所。業平の心也。

人はいざ思ひやすらん玉かづらおもかげにのみいとゞ見えつゝ

此歌は万葉に。人はいざおもひやむとも玉かづらおもかげに見えつゝわすられぬかも。と云歌をすこしとりかへたる物也。さて心は人は思ひやすらん思はずやあるらんしらず。われは面影にのみいとゞ見えぬる由なり。思ひやすらんのうちに。思はずやあるらんといふ心あるなり。またや見んかた野のみのゝと云歌も。又や見ざらんといふ心侍る也。

いまはとて忘るゝ草のたねをだに人のこゝろ

にまかせずもがな

業平の心に。いまは何せんなどおもひて。わすれやせんの心にて。わすれ草のたねを見。こゝろにまかせずもがなとよめり。

わすれ草うふとだにきく物ならばおもひけりとはしりもしなまし

返しの心は。そなたに忘草をうふると聞ば。我を思ふとしらせんとの義也。女のこゝろははかなくて心みじかきを。なりひらはのどかによめる處おもしろき也。

忘るらんとおもふ心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき

これはかの女にまたいひかはして侍けるのち。女の心なをあだにて。我をや忘るらんと思ひうたがはしさに。こしかたよりなをまさりてかなしきといふ心也。

なかぞらに立ゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな

此歌は前の返しにはあたりても見えず。此心はかの女我身のあだにして。業平の所をたち出しもくやしさに。さらば思ひもとめずして。忘草のたねをだになど。業平をしたふことといとゞあだなるはかなしきを。またわすれやすらんと。業平の歌侍るを見て。我有様のはかなさを。なかぞらの雲のあともなき様にたとへて。我身をなげきたる歌也。

うきながら人をばえしも忘ねばかつうらみつゝなをぞこひしき

うきながらとは。業平のこゝろはうけれど。忘がたければ。かく恨てもなをこひしきの心也。かつはかくと云心也。むかしはかくといふ心にて。かつといへる事多し。古今集にもあまた侍る也。此歌業平見て。さればよと云てと侍れば。我もその心にてこそあれと

云義也。さるほどに返しは行すゑのことに
いへる也。
逢見ては心ひとつを川しまの水のながれてた
えじとぞ思ふ
此歌は上の句はあらは也。水のながれてた
えじとは。水はたえぬ物なれば。それになず
らへて。行末たえじといふ義なり。或義に水
のながれてとは。川島の水はわかれて又あ
ふ物なれば。そのごとくまたあはんのこゝ
ろぞといへり。當流の義は心ひとつを川島
のと云て。島を上に用にたてて侍るほどに。
又下にて島を用にたつるとをばきらふ也。
烋の夜の千夜を一よになぞらへて八千夜しね
ばやあく時のあらん
秋の夜はながきものなるを。其千夜を一夜
にせしほどなるを。八千夜ふたりねてや。滿
足することのあらんと云る心也。返し。

烋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこり
て鳥やなきなん
心はあきらかなり。いかにもやさしき歌也。
つゝゐつのゐつゝにかけしまろがたけ過にけ
らしないも見ざるまに
つゝゐつのゐつゝとは。つゝゐのゐつゝと
云は。なをたらざるほどに。つ文字をそへ
て。つゝゐつのゐつゝとよめり。唯かさね詞
也。惣の心は業平と此女といとけなき時。た
けなどをゐげたに。いかほどにならばなど
契りけるなるべし。おとなになりてかく讀
り。此歌の一二句を古註にわづらはしく云
り。不用事也。定家卿の歌に。つゝゐつのゐ
つゝのつらゝとけぬまにはやくもうつる冬
のかげかなとあり。重詞なるべし。女の返
し。
くらべこしふりわけ髮もかた過ぬ君ならずし

てたれかあぐべき
ふりわけ髮とは童女のかみ也。かた過ぬとは。年をへて漸々かみあげするほどになる心也。女のさかりたちなどするとき。髮あげとて。髮をそゝぎかざりをするやうのことあり。君ならずしてとは。かならず男のするわざにはあらねど。業平ならて誰か手をもふれんの心也。
風ふけばおきつ白なみたつた山夜半にや君がひとりこゆらん
おきつしら波とは。ぬす人此山に立所なるによりて云付たると。顯註密勘に顯昭が云。但し今案に。立田といはんとて。おきつ白波といひ。白なみといはんとて。かぜふけばといふにてこそあらめと云て。萬葉にいせの山のべの御井にてよめる歌に。わたつ海のおきつしら波たつた山いつかこえなん妹があたり見ん。といふをひけり。定家卿此今案可與可仰。やまとにはあらぬから衣のたぐひなりといへり。此歌はころもへずしてあふよしもがなといはんため。上はいひたるもの也。さて此女さしもうらむべき理を思はて。業平をたかやすへ出しやりて。我身をやさしくけさうして。琴をかきならし。夜半にや君がひとりこゆらんといへり。あはれたぐひなくや。歌の詞がらまたたぐひなくや。淸輔奧義抄に云。此歌貫之は歌の本と云りと侍り。いかばかりのことにか侍らん。
君があたり見つゝををらん伊駒山雲なかくしそあめはふるとも
是は萬葉の歌也。高安の女業平のおはしける大和のかたを見て。此歌をおもひよりて詠じたるなるべし。
君みんといひし夜ごとに過ぬればたのまぬも

のゝこひつゝぞふる

これは同じ女のかたへ業平ちぎりて。たび〳〵過しころ。ふるき歌をよめるといへり。心は誠にあはれ也。

あらたまの年のみとせを待わびてたゞ今夜こそにゐまくらすれ

是はなりひら朝家のみやづかへをする人なれば。女のもとへみとせゆかざりしころ。また男の心かけたるにあはんと思ひける折しも。業平來て門をたゝかせしとき。よみてをこせる歌なり。かくいひ出したりければ。業平。

あづさ弓まゆみつき弓としをへて我せしかごとうるはしみせよ

あづさ弓まゆみつきゆみとはかさね詞也。年をへてとは三とせの其間の事也。弓はひくといふ心也。惣じての義は。君にこゝろ引てよりこのかた。年をへてといふ心也。下の句我せしかごとは。汝がせし誓をうるはしみせよと也。かごとはちかひ也。うるはしみせよとは。眞實にして變ずるなと云心也。

あづさ弓ひけど引ねど昔よりこゝろは君によりにし物を

女の返しの心は。君がこゝろは我に引も引ずも。我心はむかしより君による義なり。弓はひけば本末よるものなればかくいへり。

あひ思はでかれぬる人をとゞめかね我身はいまぞきえはてぬめる

女業平をしたひゆけどかなはで。岩にをよびの血して書し歌也。心はあきらかなり。

秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはでぬる夜ぞひぢまさりける

是は業平小町がもとへかよふことしげゝれど。あはずしてかへりのみしければよめる

歌也。炼の野の篠わくる朝の袖は。露しげきものなれば。小町があはでのみかへす夜の袖。ひぢまさりぬるの心也。

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

此歌は小町が返しなり。心はみるめなきとは。我業平に見えぬことなり。それはなりひらにうらみあればあはぬを。我身をうらめしとはしらて。あしもたゆきばかりおはしますと云義なり。我身とは業平の我身なり。

おもほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟のよりしばかりに

おひほえずとは思ひがけず也。もろこし舟のよりしばかりのし文字は。過去にあらず。やすめ字也。當時はかやうによみ侍らず。惣はなみだのおほき義也。

我ばかりもの思ふ人は又もあらじとおもへば水のしたにも有けり

是は業平ゆへもの思ふ女。たらひの水に我かげのうつるを見てよめる歌也。心はあらはなり。

水口に我や見ゆらんかはづさへ水のしたにてもろこゑになく

此女のよめるを聞て。業平のよめる也。かはづは水口にひとつなけば。惣の田のかはづなく物也。そのおもふ人は水口にかはづのよる心也。そのごとく我や水口にみゆらんとは。そなたはおもひの本人ぞといふ心也。

などてかくあふごがたみに成にけん水もらさじとむすびしものを

是はいろこのむ女の業平の所を出てのちの歌也。あふごがたみとは。逢期のかたきをなげく心也。しかもかたみは籠をよせてよめり。水もらさじとむすぶとは。籠は竹にてく

むを結といへり。ふたり水もらさじとむすびしちぎりを。いかでかとうらむ義也。俗に籠に水をくむと云様の事也。

花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふのこよひにゝる時はなし

是は春宮の女御の染殿の后の四十の賀をせさせ給ひし事也。花の賀とは花の時分なればいふなり。雪の時分するを雪の賀と云がごとし。歌の心は。花にあかぬなげきは春ごとにあれど。けふの花のとき。一しほ花を思ふ心切なる義也。下の心は戀也。人を花になずらへて云也。

あふことは玉のをばかりおもほえてつらきこゝろのながく見ゆらん

玉のをばかりとは。しばしと云心也。歌はあらはなり。

罪もなき人をうけへばわすれ草をのがうへにぞおふといふなる

前の詞。業平をある女のよしや草葉よならんさがみんといひけるを聞てよめり。うけへばとはのろひごとなり。とがなきものをかくいはゞ。そなたの身にこそをはめといふ心也。

いにしへの賤のをだまきくり返しむかしをいまになすよしもがな

むかしといにしへと一首にあるは。其用によりてくるしからず。但當時はあしかるべし。歌のこゝろはむかしのちぎりをしたふ心也。

あしべよりみちくる鹽のいやましに君にこゝろを思ひますかな

是はつの國のあしやにありける女。業平の京へのぼるとき。業平の思ひいろのなきをうらみけるときよめり。うへには見えねど

も。思ふ心の下にふかさを。あしべにみつ鹽にたとへたる也。

こもり江におもふ心をいかてかは舟さすさほのさしてしるべき

女の心は下には思ふ心ふかくとも。それをばさしていかゞしるべきといふ心也。思ふいろをあらはにしらまほしき心也。こもり江とは古江などの事なり。

いへばえにいはねば胸にさはがれてこゝろひとつになげくころかな

つれなき女に業平つかはしける歌也。心はいへばえいはれず。いはねばまたむねのうちさはぎてくるしき義也。

玉のをゝあはをによりてむすべればたえてののちもあはんとぞおもふ

此玉のをはしばしのことにもあらず。またいのちの事にもあらず。只をといはんため也。あはをとはあはせたる緒也。むすべればとはちぎりのこと也。あひたる緒はたえはてぬ物なれば。我ちぎりもさやうにあらまほしき義也。

谷せばみ峯まではへる玉かづらたえんと人に我おもはなくに

上は序也。かづらはたえぬ物なれば。たえんとおもはぬ心をなずらへ云る也。此歌は萬葉の歌を少かへてつくれり。心はあきらか也。

我ならで下ひもとくなあさがほのゆふかげまたぬ花にはありとも

色このみする女の心もとなきにつかはしける也。心はあきらかなり。歌のさまえもいはずやさしき歌なるべし。返し。

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまではとかじとぞ思ふ

前にうたがへば隙じて云心也。我心ひとつにてちぎりを變ずまじき心也。

君によりおもひならひぬ世中の人はこれをやこひといふらん

なりひら有常をまちわびてよめる也。心はあきらか也。

ならはねば世の人ごとになにをかもこひとはいふととひし我しも

有常が歌の心は。我もこひといふことはならはねば。世上の人ごとに何をこひと云ぞととひ來つる。我も業平を切に思ふゆへにこひしるよし也。

出ていなばかぎりなるべみともしけち年へぬるかとなくこゑをきけ

崇子内親王かくれさせ給ひし時。葬送を見んとて。業平女車にのりて出しとき。源の到女車とみてよりきて。ほたるを車に入て。のれる人を見むとする時。その螢を業平のゑにてよめる歌也。出ていなばかぎりなるべみとは。此内親王葬所へ出給ひて。此世のかぎりなるべし。其を世の人なげきていふ事は。年へたまへる人かはとてなく聲をきけと也。若くてうせ給へるを。みな人なげく聲のことなり。きけとは到が似合ぬけさう心をいさむる心なり。ともしけちとは。螢の火をけすことなれど。いのちの事也。

いとあはれなくぞ聞ゆるともしけちきゆるものとも我はしらずな

到の返しの心。なく聲をきけと云をうけて。いとあはれになくぞ聞ゆると云る也。きゆる物とも我はしらずなとは。一切衆生は法界の五大がむすぼゝれて人となれるもの也。分散すれども。法界五大の火なれば。常にきゆることはなしと云心也。

出ていなば誰かわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも

此段はある人むすめをもちたるを。業平かよふところにて思ひかけたるおり。我むすめの心にも。業平に心をやかはさんとおもひて。外へをひやりし時の歌也。出ていなばとは。女の出たる義也。たれかわかれのかたからんとは。我もまた此世にあるべきならねばと云心也。さればありしにけふのおもひはまさりける義也。

むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

これは業平の家にをき給へる女のいもうと。いやしき男もちたるが。其おとこのうへの衣をはるとて。はりやりしことをきゝて。ろうさうのうへの衣をつかはすときの歌也。むらさきの色こきときは。我ちぎれる女の寵愛のとき。そのゆかりみなわかたずあはれなる心也。野なる草木とは。ゆかりのことをよめる也。むらさきの一もとゆへにむさし野のといふと同じ心也。

出てこしあとだにいまだかはらじをたがかよひ路といまはなるらん

あだなる女を業平心もとなく思ふ義也。誰をか通すらんの心也。

ほとゝぎすながなく里のあまたあればなをうとまれぬ思ふものから

是は賀陽親王のかたにつかひ給へる人に。業平しのびてかよひけるを。此かやのみこ此女に心かはし給ふをきゝて。業平のよめる也。ながなくは。なんぢがなく里のあまたあれば。なをうとましく思ひはすれどもと云心也。ほとゝぎすに女をなずらへよめる也。

名のみたつしでのたをさはけさぞなくいほりあまたとうとまれぬれば
しでのたをさはほとゝぎすの別名也。心は名をのみたてゝ。いほりあまたとうとみ給ふがつらさに。けさぞなくといふ義也。けさは今といふ心也。

いほりおほきしでの田長はなをたのむ我すむ里にこゑしたえずば

わがすむ里にだにたえずをとづれば。通するかたありとも。たのむべき心也。

出てゆく君がためにとぬぎつれば我さへもなくなりぬべきかな

是は有常が女業平の室にて侍りしころ。有常いなかへ下りけるとき。女のさうぞく出すとて。此歌をなりひらよみて。裳の腰に付てつかはし侍る歌也。我裳をぬぐにては侍らねど。我さへもなくといふに付て。ぬぐとはよめり。もなくはわざはいなきの心也。人をいはひて。我もあしからぬよしの義也。もは裳の字也。もなくと云に。此心万葉五巻に見えたり。依事多略する也。

ゆく螢くものうへまでいぬべくば秋かぜふくとかりにつげこせ

此段はある人の業平をこひてうせしのち。そのいみに業平こもり侍りしころ。みな月のつごもりのおりふし。小夜ふけて尺涼いたりて。暑氣の心露ばかりものこらず。うらふくかぜも。たゞ仲秋の天の心地するに。ほたるの高くあがるを見て。かりもはややがてくべき心ちして。身にしむばかりの空をながめてよめる歌なり。景氣まことにこゝろにうかぶ歌也。

くれがたき夏の日ぐらしながむればそのことゝなく物ぞかなしき

此歌は前のと同時にはよまぬ歌とみゆ。そのことゝなくとは。春秋などは物のあはれも心にうかぶ。夏の空はさしてあはれと思ふべき景氣もなけれども。我ゆへうせし人のあはれを思ふゆへ。このごろの空も物かなしきなり。またかの女は一度の見る目もなく。まして心の中もしらず過にしなれど。我ゆへうせし人なれば。こもりゐぬれど。とありしとも。そのかうありしとも思ひ出すことなきゆへに。其事となく物ぞかなしきと詠るにや。

目かるともおもほえなくに忘らるゝときしなければ面かげにたつ

此歌は有常ひとの國へくだりしのち。忘やし給ひけん。世間の人の心は。目かるれば忘れぬべき物にこそなどいひのぼせしとき。業平よみてをくりし也。忘らるゝときなく。おもかげにたてば。目かるゝともおもほえぬよしの心也。

大ぬさのひく手あまたに成ぬればおもへどえこそたのまざりけれ

業平を思ふ心はあれど。あだなりと思ひて。女のよむ歌なり。大ぬさとはさかきにあさのをゝつけたる物也。御祓などするときは。人ごとに大ぬさをとりて。身をはらひなどしてとりわたす物なり。ひとりの手にとまらぬものなれば。業平のこゝろたのまれぬをよそへたり。

大ぬさと名にこそたてれながれてもつゐによるせはありてふものを

引手あまたの名にたてど。大ぬさは御祓の後ながせば。一かたによる所あり。我も君が身をつゐのよるせぞといへる心也。

いまぞしるくるしき物と人またん里をばかれ

ずとふべかりけり

紀利貞が阿波介に成て下りし時。はなむけせんとて。業平のまち給へるに。をそく來ければよみたまへる也。人まつことのくるしきを思ひ出て。人待といふ里をば。かれずとふべかりけりと云也。

うらわかみねよげにみゆる若草を人のむすばんことおしぞ思ふ

ねよげに見ゆるとは。ねぬるをかねたり。いもうとのいつくしきを〔く悪〕見て。人のちぎりとなるべきをおしして思ふ心也。

初草のなどめづらしきことの葉ぞうらなく物をおもひけるかな

はつ草は若草といふ返しなればなり。めづらしきことの葉ぞとは。兄の身にて。かゝることの葉のあるを思ひかけぬなれば。などめづらしきとよみて云也。下の句はこのかみのことなれば。かゝる人ともしらで。たのみ思ひつるの心也。

鳥の子を十づゝとをはかさぬともおもはぬ人を思ふものかは

前の詞にうらむる人をうらみてと云り。百のかいこをかさねんことはあるまじきことなり。それはかさぬることありとも。思はぬ人を思ふべき物かはと云心也。これより次の歌。みなあるまじきことをとり出て。それはありともと云歌なれば。註に及ばずと也。

朝露はきえのこりてもありぬべしたれかこの世をたのみはつべき

ふく風にこぞの櫻はちらずともあなたのみがた人のこゝろは

行水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

行水とすぐるよはひとちる花といづれまてて

ふことをきくらむ
此すゑの歌。前にこぞの櫻。ゆく水など歌と
とり合よめり。行水も。すぐるよはひも。ち
る花も。みなしばしまてと云ことをきかぬ
もの也。そのごとく思はぬ人を思へといへ
ばとて。きくべきにあらずと云り。此五首は
男女たがひにうらみあひてよめる歌也。

うへしうへば秋なき時やさかざらん花こそち
らめ根さへかれめや

人の庭に菊うへけるときよめる歌也。うへ
しうへばとはかさね詞也。うふるとうふる
ならば。もし秌のなき時やさかざらんの義
也。秋と云秌はさくべきの心也。おもしろく
よめる歌也。

あやめかり君はぬまにぞまどひける我は野に
出てかるぞわびしき

人のかざりちまきをこせたるときの歌也。
あやめにてちまきをばまかぬ物なれど。當
日のものなれば。歌によみよき物にて詠ず
るなり。君はあやめを心ざし。我はかりをし
てつかはす心也。

行やらぬ夢路をたどるたもとにはあまつそら
なる露やをくらん

つれなかりける女にいひやりけると有。心
は夢中にかよふみちの心のまゝならで。た
どるたもとには。天より下る露やはをく。思
ひの露こそをけと。夢の中までくるしきこ
とをかこつ心也。

思はずはありもすらめど言の葉のおりふしご
とにたのまるゝかな

女をえうまじうなりはてゝのちによめる歌
也。思はずこそ成はてつらめど。こしかたの
わすれがたくて。折ふしごとにしのぶ心也。

我袖は草のいほりにあらねどもくるれば露の

やどりなりけり

前の詞に。ふして思ひおきて思ひ。思ひあまりてと侍るに。此歌は大様にてたがふさま也。但切におもふ人ゆへのなみだは。十二時中かはくべき理なし。是はその時にあたる夕暮のさま也。

戀わびぬあまのかるもにやどるてふ我から身をもくだきつるかな

こひわびぬとは。いかんともせぬ思ひのきはまりたるを云也。さるほどに我から身をもくだきつるかなと。うちなげく義也。

あれにけりあはれいく世の宿ならんすみけん人のをとづれもせぬ

是は業平の家の長岡にて。桓武天皇の内親王同じところにあまたおはします。その宮の女ども業平の所へゆきたるに。業平うちへかくれぬればよめる。あるじのなき家の心をよみ奉る歌なり。詞づかひおもしろき歌さま也。

むぐら生てあれたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり

女の歌にあれたる宿のさまを讀ば。業平も我宿なればむぐら生てなどよめり。かりにもおにのすだくとは。かゝる宿はたゞかりそめにも鬼のあつまるより外にとふ人もなしとよめり。女をさして鬼といふ事常の義也。愁也。

うちわびておちぼひろふときかませば我も田づらにゆかましものを

此女どもほひろはんなど。所の秋の折ふしなれば。云あへるを聞て。我も田づらにゆかまし物をと。時のあいしらひおもしろき也。

すみ侘ぬいまはかぎりと山ざとに身をかくすべき宿もとめてん

前の詞に。ひんがし山にすまんといへる。隱遁の心也。

我うへに露ぞをくなるあまの川とわたる舟のかひのしづくか

同段に物いたくやみてしに入たりければと有。たえ入たるに。面に水をそゝぎていき出たれば。大かたの露にはあらじ。あまの川わたるかひのしづくなどにてやあるらんといふ心也。古今に鴈のなみだやおつらんと云同事也。

さ月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖のかぞする

たちばなは五月をまちてさく物なれば。五月まつと云り。むかし見し人なれば。さかりなるたちばなによそへいへる也。

そめ川をわたらん人のいかでかは色になるてふことのなからん

女のすだれの中にして。業平を色このむ人ぞといへるとき讀り。心はあらはなり。

名にしおはゞあだにぞ有べきたはれ島なみのぬれぎぬきるといふなり

女業平を色このみのすきものといふをきゝて。色になるてふことのなどなからんといへば。それををとして。色このむと云名におはゞさにあらじ。たはれ島にうちかへる波をよそより見れば。しら衣のやうなれど。まことはさはなくて。たゞ波のぬれ衣なればといへるこゝろ也。

いにしへの匂ひはいづらさくら花こけるからともなりにける哉

是は業平の我身のむかしにかはりたるを述懐の歌也。古註に小町を業平のいへるとかける。見ぐるしきことなり。

これやこの我にあふみをのがれつゝとし月ふ

れどまさりかほなみ
これは業平の所をうかれ出し女にあひて。我身のをとろへたるさまを。前の歌に業平のよみたまへるを。女ははづかしと思ひて。返しもせざりし時よめるなり。心は我にそふことをうしと出し人の。思ひますこともやと思へば。とし月をへても。思ひまさらでつれなさよと云心なり。これまた古註の義こゝろつたなくや。
もゝとせに一年たらぬつくもがみ我をこふらしおもかげにみゆ
此段は世心つきてやうやくおひ行女。色にふけりたるが。あらぬゆめがたりをしける。その子あはれみて業平にかたりければ。なさけふかき心にて行あひしのち。此女業平のかたへ行て。かひま見せし時よめる也。此女百年に一年たらぬほどの思ひしたる也。
我をこふらしとは。その女我をこふるおもかげにたつの義也。世心つくとは男になるゝ義也。此歌はたゞざれうたなり。
さむしろに衣かたしきこよひもやこひしき人にあはでのみねん
かの女のよめる也。心はあきらか也。上は古今の歌也。是も作り事なるべし。
ふく風に我身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべきものを
おもひかけたる人の有ところをさへしらねば。思ひわびてよめる也。心はあきらかなり。
とりとめぬ風にはありとも玉すだれたがゆるさばかひまもとむべき
とりとめぬ風のやうにおはしますとも。ゆるしてこそと。おさへたる歌也。
思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにし

かへばさもあらばあれ

なりひら切に思ひかけしを。二條のきさきかくなせそなど侍りしときよめる歌也。心はあきらか也。

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

業平の心にもあるまじきことを思ひわびて。おもひをやめたまへと。はらひなどせしに。いとゞおもひのせんかたなき時よめる歌なり。古今には不逢戀の内に入る也。

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ

業平のしのびの名あらはれて。ながしつかはすべきよしのこといできて。二條のきさきをば染殿のきさきのかたにをきまゐらせて。いさめたまへる時よみ給へる歌也。上は序也。我からとねをこそなかめとよめるところ。此道の肝心也。我からと思へば。人にうらみといふことをおもふことなきものなり。人にうらむる事なければ。和のみちによくゐたる也。返〳〵此我からといふこと。此世後世のため。また能知才覺のみちにもいたるべきの理なり。

さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらずして

なりひらのひとの國よりと云は。除名せられてのち。流罪の國にさだまる也。そのさだめありて。しかもまたみやこにあれど。國さだまれる心にて。ひとの國よりとかける。これはなりひら笛をふき野曲などして。もしやきても逢給ふこともやと。思ひうかれたるさまを聞て讀給へる歌也。

いたづらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいざなはれつゝ

是も我心のむかふをたのみて。行かへり行かへりする心を業平のよめるなり。此歌人丸の歌と云り。可尋之。

なにはづをけさこそみつの浦ごとにこれや此世をうみわたるふね

此段業平つの國にしる所あるによりて。みやこより行平を初にて。しる人おほく下侍りしをともなひて。難波のほとりに行て。逍遙せられける時の歌也。なぎさに舟どものあるを見てとあり。上の句は所の眺望也。けさこそと云は。あしたに見えたるさま也。これや此世をうみわたるとは。あまの世にふるをあはれむ事に。みな人の世をわたるを思ひつゞけたる心也。これをあはれがりてとは。業平の歌に感じたる心也。

きのふけふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなりけり

是も前のことをまた一段に書たりと見ゆ。きのふけふと云に心あり。惣の心は。二月ばかりの餘寒に。此山かきくもり。みな人のみる目にさはりつるがはれ行を見れば。木ずゑどもの雪。さらに花のはやしのやうにみえたるをながめて。時もこそあれ。きのふけふこの山を雲のかくしつるは。花のはやしを人に見せんことをうしと。雲が思ひけるよといふ心也。うしと思ふとは。雲がねたむ心也。狂雲妬佳月と云たぐひ也。

かりなきて菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしのはま

此所の眺望の折節春のけしきたぐひなきをいはんとて。鴈なきて菊の花さく秋はあれどゝ云り。菊鴈は世間の義也。

君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

是は業平狩のつかひとして伊勢尾張へくだりし時。齋宮にあひ奉りし朝のことなり。心ははかなき逢夜のさま。おもひ分ぬ心まどひの義也。君がきてあひけるか。我行てあひけるかと云。此二句の心をするにみな云のべたる物也。終に心におもひ分ぬ理也。

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとはこよひさだめよ

上の句は齋宮の歌とひとつこゝろまどひの樣也。下の句はゆめともうつゝともこよひあひてさだめよと云心也。世人さだめよと古今にあれども。この物がたりにては。こよひといはてはおもしろからず侍る也。

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

たゞ一夜にてあはぬ心を。あさき緣と云心にて。わたれどぬれぬえにしといへり。緣と江とをかねたる也。

またあふさかのせきはこえなん

つい松は續松也。すみはきえずみ也。さかづきのさらにかける下の句也。またあふ坂とは。業平歸京にこゆべき山也。それをあふことによそへて。齋宮をなぐさめたてまつる心也。

みるめかる方やいづこぞさほさして我にをしへよあまのつりふね

是はなりひら尾張の國へ行とて。大淀のわたりにて。齋宮のわらはべにいひかけたる歌也。みるめかる方やいづことは。齋宮のわらはなれば。宮の御ことを我にをしへよと云也。わらはをつり舟によそへて云る也。

ちはやふる神のいかきもこえぬべしおほみや人の見まくほしさに

此歌は齋宮の女房のほのすきたるが。業平にやりたる歌也。大宮人にだにあはゞ。神の

いかきもこえんの心也。大宮人とはなりひらを云也。

戀しくばきても見よかしちはやふる神のいさむるみちならなくに

神のいさむる道ならぬとは。いざなぎいざなみの夫婦のかたらひし給ひしより。やをよろづの神も。戀のみちはいさめとゞめぬ事ぞといふ心也。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへるなみかな

心は大よどの松のもとへ。なみのよせ來てはかへり〳〵するが。松をうらむるやうなれば。松は波のためにはつらくもなき物を。何ゆへうらむるぞと云義也。かくいふ心は業平の齋宮をうらみたてまつることを。かくなずらへよめる也。松をば齋宮の我身によそへ。波をば業平によそへたるもの也。

目には見て手にはとられぬ月の中のかつらのごとき君にぞありける

そこにはありときけど。せうそこをもえいはぬ女に。業平のつかはす歌也。心はあらは也。此歌は萬葉の歌をすこしとりかへたる也。

岩根ふみかさなる山はへだてねどあはぬ日おほくこひわたるかな

此歌はやがてあらはに聞え侍り。但それはあまりにやすくや。此歌は相思ふ中は山川をへだてゝもかよふならひなるを。我中は岩根ふみかさなる山もへだてねど。相見ることなきをかなしむ心也。

大淀のはまにをふてふみるからにこゝろはなぎぬかたらはねども

これも業平いせの國にいきてあらんと云けるとき。齋宮の歌也。上の句は序歌也。たゞ

見るからになぐさむものぞ。かたらはねどヽ云心也。業平のあまりにしたひまいらせたまへるを。いひのがれんとてよめる歌也。なぎぬとはなぐさむ心也。業平のすきこゝろをなぐさむる義也。見るからにとは。一たび見え給ひし心也。

袖ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるをあふにてやまんとやする

上三句までは序也。みるをあふにてとは。ほのかに見しをうらみにてやめとや。我はいかでさてやみなんとなをしたふ心也。

岩まより生るみるめしつれなくばしほひしほみちかひもありなん

みるめしつれなくとは。みるはいつもみどりにて變ぜず。我をつれなくと云る其ごとく。心中不變ならば。世は鹽のみちひのやうにかはる理ありとも。心ひとつはしづかにしてよるべきの義也。これも業平をいさめたる歌也。

涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらきこゝろは袖のしづくか

鹽のみちひにはぬれぬ物を。人のつらさゆへにこそ。袖のしづくはあれといへる心なり。

大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいづらめ

これは二條のきさき春宮のみやすどころと申ける時。をしほの明神は春日にて。うぢ神にてましませば。まいり給へる時。業平の歌也。けふこそは神代のことも思ひいづらめとは。明神の御慮をさしていへり。そのゆへは神代に日の神とあまのこやねの御神は君臣合体のちぎりましませり。いま又春宮は日の神の御すゑ。みやすどころは藤氏にて

おはしませば。神代のちぎりかはらぬは。たゞむかしと同事也。ほのかなりし昔のちぎりを。二條の后も思出し給はんの義也。

山のみなうつりてけふにあふことは春のわかれをとふとなるべし

此段は文徳天皇の女御多賀幾子といへる。西三條右大臣良相の女なり。その女御うせ給ひて。安祥寺にて御わざ侍りし時。さゝげものおほく侍りしが。山などのごとく侍りしを。此女御のせうと右大將常行おはしまして。御わざを題にて。春の心ばへある歌たてまつらせ給ふとき。業平よめる歌なり。さゝげものおほきを。まことの山のうつりて。けふのわかれの あとをとふと讀り。さゝげ物は捧物也。

あかねども岩にぞかふる色見えぬこゝろを見せんよしのなければ

是は山科の禪師の宮のかたへ常行のおはせし時也。島このみ給ふ君なればとて。千里のはまより父右大臣へまゐらせける石を。みやこよりとりよせて。禪師のみこへたてまつり給ひし時。岩に書付たる業平の歌也。心は色見えぬ心をしらせんよしのなければ。此石をたてまつるもあかねども。此石奉るも不足なりといふ心也。此段も前の段のたぐひ也。

我門にちひろある陰をうへつれば夏ふゆたれかかくれざるべき

是は行平の女のはらに。淸和天皇の御子貞數親王生れ給ひし。それを我門にちひろある陰をうふるとは云也。ちひろの竹は仙家の竹なれば。壽命をいはふ心也。惣じて竹は王道のたよりある物也。まづ上下のふしをたがへぬ事。第一王道也。またすぐにして空

虚なるところ。又王道の肝要の御心也。夏冬たれかとは。此御かげにかくれて。寒暑のくるしみを一切衆生わするべき心也。此御子天位につぎ給への祝事也。

ぬれつゝぞしゐておりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

此歌は三月の晦日に。人に藤をおりてやる時の歌也。ぬれつゝぞしゐておりつるとは。花をも春のかぎりをも賞する心也。春はいくかもとは。つごもりの歌にいかゞなれど。歌人の心はさふくはいはで。歌の姿を本とする故也。年の内とは一年中の心也。雨をも藤をもいはざる所。むかしの歌のならひ也。

鹽がまにいつか來にけん朝なぎにつりする舟はこゝによらなん

前の詞に此殿のおもしろきをほむる歌と云によくかなへり。此おとゞはとくいかめしくいきほひある人にて。よろづおもしろきことをこのみ給へる中に。みちのくのしほがまをうつして。毎日しほをやかせられし。第一のことなれば。此ところをすなはちまことの鹽がまにして。いつか來にけんといへり。こゝを鹽がまの浦にするほどに。つりする舟もこゝによれとよめる。奇特の心也。

世の中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのどけからまし

惟喬のみこかた野のかりをし給ふ時。なぎさの院のさくらをかざしにして。上中下の人歌よみける時。業平のよめるなり。たえてさくらのなかりせば。春のこゝろはのどけからんとは。さくらを待より。散はてゝあとをしたふまで。春のうちは花に心ののどかならねば。さくらなくばのどかならむといへり。花に心のふかく貪したるなり。

ちればこそいとゞさくらはめでたけれうき世に何かひさしかるべき

業平のあまりに花に着したる心を。有常きらふてかくよめり。めでたけれとは。愛したけれといふ心也。あかぬ心は散によりての心也。下の句まことに理ふかくはづかしき歌也。

かりくらしたなばたつめに宿からんあまのかはらに我はきにけり

これは惟喬のみこかた野をかりて。天のかはのほとりにいたるを歌によみて。さかづきはさせとのたまへばよめる。心はあきらか也。

一年に一たびきます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

一年に一たびきます君とはひこぼし也。それを待間は。宿かす人あらじといへる也。これは有常が返し也。

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん

かくよめるは。みなせの宮にて。三月の十一日の事也。みこゑひてうちへいり給ひなんとせしおりの心也。歌は義なし。

をしなべて峯もたいらに成なゝん山のはなくば月もいらじを

有常みこにかはりてよめる歌也。

まくらとて草引むすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

是はこれたか都にかへり給ひて。その宮にての事也。なをみこ人々をしたひ給ひし時。業平のよめる也。三月つごもりの夜なれば。秋の夜などのやうに。夜なかきころにも侍らねば。まくらをむすばじと云心也。春のわかれをしたふ心のふかきさま也。その夜の

様を此歌にておもふべきもの也。

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけ
て君を見んとは

惟喬親王貞観十四年七月出家したまひし翌年。業平正月に小野へまいり給ひし時。ひゑの山のふもとにて。雪いとふかゝりしをしのぎてまいり給ひて。いにしへのことなどきこえし時よめる歌也。此みこは文徳第一の御子にて。位につき給ふべきを。あまつさへ世をのがれ。山ふかき御むろに。つれ〴〵とこもりおはしますを見たてまつりたまはん。業平の忘れてはゆめかとぞ思ふとのべ出す心。たゞいまも其夜のあはれうかぶ歌にこそ。

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよい
よ見まくほしき君かな

業平の母伊豆内親王より。とみのことゝていひをくる歌也。君とはなりひらをいへり。心はあきらか也。

世中にさらぬわかれのなくもがな千代もとい
のる人の子のため

我身ひとつにいはで。世間の人の上にかけていへる。尤おもしろし。我母のこゝろ也。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつも
るぞわがこゝろなる

此五文字色〳〵のことをいひて後にいふ心也。業平の心には。月をかさねても。みこの御方にあらまほしく思へどもと云心也。朝家の奉公の身なれば。身を分るはかなはで。思ひつゝかへらむとするを。此雪かきくらしふりければ。都へかへりがてにするたよりとなれば。此雪のつもるが我心也と云心也。めかれせぬとは。はれまもなく降雪の心也。

いまゝでに忘れぬ人は世にもあらじをのがさまく〳〵としのへぬれば

世にふれば此理のあるよしの義也。かく云は我はひとり身をわすれぬ心也。

あしのやのなだの鹽やきいとまなみつげのをぐしもさゝずきにけり

此歌新古今になりひらの歌也。此物語にてはたゞむかしの歌と心得べし。いやしきものは髪などけづることもせぬ義なり。さゝずきにけりとは。かみに昔はくしをさす事侍る間かく云也。

我世をばけふかあすかと待かひのなみだのたきといづれたかけん

此歌は行平ぬの引のたきをみてよめり。我世をばけふかあすかとは。命のことにはあらず。行平我身の時にあはずして。いたづらにあかしくらすほどに。我世をばはやけふかあすかにきはまりたる身と思ふ問。なみだと此たきとは。いづれたかゝらんと云心也。

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

たきの白玉の緒ときてみだすやうなるを見て。この外上に玉のをゝぬきて。みだす人ぞあるらんといへる心也。めづらしき心なり。下の句袖のせばきとは卑下の心也。まなくもちるかと云は。袖にあまるばかりなるを。過分に思ふ心にいへり。

はるゝ夜のほしか河邊のほたるかも我すむかたのあまのたく火か

これは布引のかへさに。あしやの浦にたくいさり火の。ことのほかに數もなくおほきがおもしろきを見て。はるゝ夜の星か。また河邊のほたるか。またあまのたく火かとい

へり。みつながらうたがふ心は。大形のいさり火に見えねばなり。眺望の心也。
わたつ海のかざしにさすといはふも丶君がためにはおしまざりけり
みるを海神のかざしにとりなしていへるは面白也。さすとは海神の愛し用るものと云心也。惣のこゝろは。海神の愛しおしみするものながら。都人のためにはおしまでよすると云心也。
大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの
大形といふ詞。心得らるゝ様ながら。その心をいへばいはれぬもの也。おほむねといふほどのこと也。こまかにいはゞ。十の物七つ八つなど。世上に云事の侍るやうに。こゝろえべきにや。月をもめでじとおもひなしたる義也。人の身にはかならず思ふべき事のあるに。くる秋ごとの月をのみめでゝきて。いたづらに老となりて後に我心を思ひかへして。これぞ此と思ひおどろきたる心也。
人しれず我戀しなばあぢきなくいづれの神になき名おほせん
我戀しなば。我ゆへと思はで。いかやうの神のとがめにて死にたるなど丶。神になき名をおほせていはんと云心也。あまりに人のうらめしきまゝに。をして人の心をさつする義也。
さくら花けふこそかくも匂ふらめあなたのみがたあすのよのごと
女のあす物ごしにてあはんといふに。さくらにつけてやる也。心はあらはなり。
おしめども春のかぎりのけふの日のゆふぐれにさへなりにけるかな
ことはりあらはなり。こまかなる歌の詞に

や。

あしべこぐたなゝし小舟いくそたび行かへるらんしる人もなみ

此女の所へ行來るよしをだにしらぬ心を。あしべこぐふねの。かれとしれぬにたとへいふ也。

あふな〱思ひはすべしなぞへなくたかきいやしきくるしかりけり

此五文字心得がたき也。今案に。源氏物語にあふな〱といふ詞あり。念比なる義也。又はまことになどいふ心也。五文字あいうゑを五音にて心得べし。誠に思ひはすべしなぞへなくは。定家卿の義なずらへなく也。心はたかきもいやしきも。戀のおもひはたゞ一つ心なる義也。

秋の夜は春日わするゝ物なれやかすみにきりや千重まさるらん

此段は業平のもとかたらひし人。別人に嫁したるに。子ある中なりければ。いまもいひかはしけるに。此歌をよみてをくりしなり。當時秋なれば。妹を今の男にたとへ。業平我身をば過にしかたなれば春にたとへて。我よりもいまの男をば。千重も思ひまさるらんといへる心也。

千々の妹ひとつの春にむかはめやもみぢも花もともにこそちれ

心はいまの男千人も業平ひとりにはをとるべくの心也。むかはめやは對すまじきの心也。もみぢも花もともにこそちれとは。男の心はいづれもたのまれぬべき理ならねばのよしをいへる心おもしろくや。心をやすんず義なり。

ひこぼしにこひはまさりぬ天の河へだつるせきをいまはやめてよ

これは業平物ごしに女にあひてよめる也。ひこぼしはまことに一年に一夜逢ならひにて悲しけれども。それも逢夜になれば。さはることなきを。我は色々思ひをつくして。たまく\あふ時も物ごしなれば。ひこ星にもまさりたる戀と云也。此歌にめでてあひにけるとぞ。

秋かけていひしながらもあらなくに木葉ふりしくえにこそありけれ

見ずもあらずみもせぬ人の戀しくばあやなくけふやながめくらさむ

しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれ

見ずもあら〔ヲ點〕ずの返し也。しるしらぬとは。いなともせとも。あぢきなく何かいはん。あひもあはずも。思ひこそしるべにならめといへる心也。

わすれ草生る野べとは見るらめどこはしのぶなりのちもたのまん

これは後涼殿のはざまを業平通る時。あるつぼねより。わすれ草を忍草とや云とて。出させ給へばよめる歌也。此心は業平こなたを忘るやと心見給ふ義也。忘たるを忍ぶとやいはんとて出させ給へば。其心を業平しりてかく讀る。忍草忘草別々にあり。また一草をも忍とも忘ともいへり。此歌はそのこゝろにかなへり。

さく花のしたにかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかげかも

此段行平の所にて在中辨良近を請じて。さけのみ歌よみける時。業平のよめる也。かめにさしたる藤のしなひ三尺六寸ありけるがためしなきと。忠仁公の元祖にもこえてさかり也と。取合せてなずらへよめる也。

そむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうきことぞよそになるてふ

世をそむけばとて。雲風などにのることはなけれど。そむくとなれば。世のうさは餘所になると云心也。業平齋宮の世をのがれ給ふをうらやみてよめる歌也。

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

ねぬる夜の夢とは。ほのかに人にあへることなり。其まゝにてはかなければ。まことの夢にも見ゆるやとうちまどろめば。ねもいらず夢も見えねば。我こゝろのいよ〳〵はかなさのまさる心也。

世をうみのあまとし人を見るからにめぐはせよともたのまるゝ哉

目ぐはせとは。目にて心をかはす義也。齋宮の尼になり給へるを。海邊の海士になずらへてよめる也。

白露はけなばけなゝんきえずとて玉にぬくべき人もあらじを

業平のある女のつれなきに。かくては死ぬべしと云やりたりけるによめる。玉にぬくべき人もあらじをとは。取用る人もあらじと云心也。かく云は業平をそむかぬ心也。

ちはやふる神代もきかず立田川からくれなゐに水くゞるとは

此歌は立田川に。神無月ばかり。みむろの山の嵐はげしきころ。紅葉こと〳〵くちりて。此川うづもれはてたるとき。水はたゞくれなゐをくゞるやうに見ゆるを。いはんかたなきにより。神代にこそ神通自然の事はありと聞を。それもたゞいまのやうなる與はきかずと云心也。

つれ〳〵のながめにまさるなみだ川袖のみひ

ぢてあふよしもなし

此歌は業平のいもうとを敏行の思ひ初してころよめり。つれ〴〵とひとりながめゐたれば。いとゞ涙川も水まされば。袖のみぬれて逢事のなきをなげく也。

あさみこそ袖はひづらめなみだ川身さへながるときかばたのまん

心はあきらかなり。身さへながるといへる。優なる歌也。

數〳〵に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

敏行女をえて後やる文に。雨のふるを見わづらひ侍るなど。女のかたへ云やりける。此女は業平のいもうと也。それにかはりて業平よめり。數〳〵とは思ひおもはずといはんとていひ出たる詞也。思ひおもはずもあればやとひがたくなれる。眞實思はゞ。雨にさはるべきことにもあらず。見わづらふと云を。身をしる雨ふりまさるといふ心也。身をしる雨とは。雨によりて身をしる心也。

風ふけばとはに波こす岩なれや我衣手のかはくときなき

女の業平をうらみてよめる歌也。心はあらは也。つねのことぐさとは。何となくくちすさびのやうによめる也。

宵ごとに蛙のあまたなく田には水こそまされ雨はふらねど

なりひらの返し也。蛙のあまたなく田とは。田をば女の方のことによそへて。あまたの人に御心かはす故にこそ。御袖の水はまされと云也。まさるとは涙なり。雨はふらねどとは。業平の我方の思ひならねどゝ云心なり。きゝをひける男とは。かはく時なきと女のいふを。我ごとく業平の思ひえたる也。此

うた面白からず。例の作り事なるべし。

花よりも人こそあだに成にけれいづれをさきにこひんとかみし

友たちの人をうしなへるがもとにやると云へり。たしかに心得がたし。古今には人の花をうへける。その花さかぬに身まかりければ。紀義行がよめると見えたり。それは心もあきらかに。又あはれもふかし。こゝにても大形そのごとくに見侍らんは。

思ひあまり出にし玉のあるならん夜ふかく見えば玉むすびせよ

これは業平を女の夢に見たるよしいへるとき。よみてをくりける歌也。夢はたましひの所作なれば。我君を思ふ玉しひぞみえつらん。玉むすびをせよと云へる也。かく云は我玉しひをそなたにむすびとめてをけとしたふ心也。玉むすびとはうかれたる玉なとみわたるをまじなひすること也。

いにしへはありもやしけんいまぞしるまた見ぬ人をこふるものとは

歌はなりひらのよめるなり。こゝろはあらは也。

下紐のしるしとするもとけなくにかたるがごとは戀ずぞあるべき

人にこひらるゝには。ひものとくることあるに。さもなければ。そなたの云ごとくに。色こひぬにこそあれと云心也。又業平の返し。

戀しとはさらにもいはじ下紐のとけんを人はそれとしらなん

大形心はあらは也。されど前に人をこふるよし云やりたる。そのしるしとするひもしとけねば。さもあらじと返しにあるほどに。我思ふ心は切なれば。紐のごとくはとけん

と思ふほどに。ともかくも詞に出てはいはじ。紐とけば我思ふとしれと云心なり。

すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

女のことさまになりけるとき。業平のよめる也。心はあきらか也。されど人の心の變ずる所を。ともかくもいはで。鹽やくけぶり風をいたみ思はぬかたにといふ所。まことに意詞幽玄。至極の歌なるべし。

長からぬ命のほどにわするゝはいかにみじかきこゝろなるらん

業平ひとりゐて。我ぬる女のことをよめる也。此歌三十一字の中に。長短の二字をよみ入てはあしかるべきに。しかも意詞優に明なること。心おもしろき歌也。

おきなさび人なとがめそかり衣けふばかりとぞ田鶴もなくなる

せり川の行幸のとき。行平大たかのたかゝひにて。かり衣につるをすりてきたるが。はなやかなるさま也。その時六十九の年なれば。大たかのたかゝひにまいること。我身に似合ず侍れど。けふばかりは君の行幸のめでたきにより。かくはなやかに裝束きたるを。人なとがめそといへる也。おきなさびとは。老てわかやぎたるさま也。

おきのゐて身を燒よりも悲しきはみやこ島べのわかれなりけり

業平みちのくより京へのぼりける時。女のよめるといへり。おきのゐみやこ島といふところにてとあり。古今に小町が歌とみゆ。

波間より見ゆる小島のはまびさしひさしくなりぬ君にあひ見て

萬葉にははまひさぎとあり。すこし取かへたるばかり也。上は序也。歌の心はあきらか

也。
我見てもひさしく成ぬすみよしのきしのひめ松いく世へぬらん
　我見てもは業平の心也
むつましと君はしらなみみづがきのひさしき代よりいはひそめてき
　むつましと君はしらなみとは。業平に神の勅ある也。しるべき物と云心也。下の句はあらはなり。前の詞に御神けぎやうし給ひてとは。あらはれ給ひて也。現形したまふ也。
玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬこゝろのうれしげもなし
　玉かづらとは草のかづら也。玉はそへ字也。たよりにしたがひて。何の木にもかゝる物なるを。業平の心によそへて。たえぬもうれしからずと也。たのみがたき心をいふ也。
かたみこそ今はあだなれこれなくばわするゝときもあらましものを
あふみなるつくまの祭とくせなんつれなき人のなべのかずみん
　此段は女のまたよへずとは。いまだ男にもあはじと思ふを。業平の思ひかけたれば。あへる男あるよしを聞てかくよめり。さては男ひとりのことにもあらじと云義也。つくまの祭には。女男にあひたる数なべをかづきてわたると云事あるよし云やれり。此女出てなべをかづくこととあらじとなれども。世のたとへにいへる也。うらむる心也。
鶯の花をぬふてふかさもがなぬるめる人にきせてかへさん
　梅つぼより出る人の雨にぬれて行ば。梅の花がさをおもひよせて業平かくよめり。返し。
鶯の花をぬふてふかさはいな思ひをつけよほ

してかへさん

梅の花がさはいやなり。思ひをつけよとは。心ざしをつけよ。さあらばその心ざしを報ぜんと云心也。ほしてかへさんとは。ぬるゝといふ返しなれば。ことばの縁なり。心は報ぜんの義也。

山城の井手のたま水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

女の業平にちぎりて變じたるにつかはす歌也。井手のたま水をとり出すは。むかし井手にて女をちぎりて。帯をつかはして。つゐにをとづれもなかりし時。女思ひわびて。玉水に身をなげしことあり。變じたるこゝろゆへ。かくいへる也。

年をへてすみこし里を出ていなばいとゞふかくさ野とやなりなん

深草にある女を。かれがたに成てかくよめり。心はあらは也。

野とならばうづらと成て鳴をらんかりにだにやは君はこざらん

かりにだにやは。かりそめのたよりにも。立もやよらんの心なり。此かりを狩場によそへていへるはよろしからず。

おもふ事いはでたゞにややみぬべき我とひとしき人しなければ

此歌を古註にはいろ／＼理をつけて云也。當流にはしり侍らず。前の詞にも。いかなりける事を思ひけるおりにかと云。歌にもいはでぞたゞにと侍れば。とかくいはゞ。あたるまじき心也。いはねば萬法にはづれずと云べからん。

つひにゆく道とはかねて聞しかどきのふけふとは思はざりしを

古註にきのふまではけふとは思はざりしを

と云て。心あまりて詞たらぬ歌といへり。當流にはうちまかせて。たゞきのふけふとは思はざりしをといへり。まことにあはれもふかくや侍らん。これ世上の人ごとのこゝろなるべし。たゞそのまゝの義なるべし。かへすがへす知べくこそ侍らめ。

此一冊者延德之初。防州山口にして此物語之講釋之後。初心之輩所望之間書之。然者形見之やうなる事共なるべし。於餘情者筆舌難及。唯任其耳。但又云。雖損字落字可有之候。本まかせに書之候。

宗祇在判

〔右伊勢物語山口抄舊本闕今以流布印本補之〕

續群書類從巻第五百十四

物語部十四

伊勢物語肖聞抄

一此物語を伊勢といへる事。古註の儀には男女の物語といへり。其故は伊勢の二字をおとこをんなとよむによれりと云り。其下に種々の儀をたつ。當流に不用之。定家卿の奥書に無所見故也。

一伊勢物語といへるは。業平狩の使に伊勢にくだりし時。齋宮にあひたてまつりし事。此物がたりの肝心たり。依之此名ありと云儀有て。是を信ずる輩。結句狩使の事をはじめにかける本有。定家卿皆以破之。又所不用當流也。惣じて此物がたりの作者。故人の說不同也。あるはなりひら自記と號し。あるは伊勢といへる女のかけるよしみえたり。仍定家卿も難決由奥書在之。しかはあれど非彼筆作者。何稱伊勢哉と侍れば。黃門の心も伊勢筆作をもつて此物語の題號とさだめらるゝよしみえたり。されば當流之儀是也。

一伊勢が筆作におきても。ある說宇多御門へ奉るよしを云り。當流に不用之。當流にたつる所は。伊勢といふ女。七條后宮へ業平一期の事をかたりたてまつる事をしるせりと定

之。此うちになりひら自記の詞も相交り。所詮たゞ作物がたりと見侍るべき也。されど源氏物がたりの樣にはあらず。業平一期の事をかけるうちに。少々舊哥などを取よせてかける所は。皆作物語の作法也。一條禪閤の御註にも作物がたりのよしみえたり。作者は伊勢が書るよし可心得なり。仍此題號うたがひなき者也。

一むかし

作物語なればむかしと書る之。遠近によらず。過ぬるをむかしといふなるべし。伊勢集のはじめの詞に。いづれの御時にか。大みやす所とかけり。今時の事をもむかしと云り。心はおなじきにや。一條禪閤御說にも。昨日はきふのむかし。去年はことしのむかしなりと云云。又むかしといふ詞に。なりひらの哥の躰こもる事あり。可受師說。

おとこ

在中將の事也。段々いづれも業平なるべし。

うゐかうぶりして

元服の事也。古註には承和七年十六歲と云云。業平元服は傳に年月日と書て。年も月も日もみえざるべし。依之年月をいつといふと不可用之。又叙爵の說業平廿五之時也。是又不用所也。又古註之儀に。うゐかうぶりして。ならの京にかりしたるとつゞけてみるにや。當流には不然。うゐかうぶりしてとは。業平元服のはじめを云り。又其後いつにても。ならの京に行てかりしたる事を。かりにいにけりと記たるなり。うゐかうぶりの事をはじめにかきて。すゑに終焉の事をかけり。是則此物語一部の肝心也。

しるよしして

奈良に業平の領知のありしなり。別に無所

見とも。此物がたりに記たるうへは其分なるべし。其上業平は平城の御孫也。南都に領知有べき事勿論也。

かりにいにけり

業平なにとなくかりをしてあそびたるなるべし。一禪御說。むかしはこゝろのまゝにかりをしけるなり。

なまめいたる

ほめたることば也。媚。此字也。

はらからすみけり

此兄弟の女誰ともなし。此物語のうへに誰と名のあらはれたるはいふに及ばず。名のあらはれぬをば。誰ともなくてをくべし。當流如此。和歌のよみ人しらずのごとし。古註には此兄弟の女を有常女と云。不用之。一禪御說同當流也。

かいまみてけり

垣間見也。只物ごしなどにほのかにみたる心なるべし。如此いへるゆうなるべし。

おもほえず

かゝる故郷によき女のあるを見そめたるこゝろ也。

いとはしたなくて

あれたる所にかゝる人の思ひの外にある心也。たとへばよはき物につよくあたるなどを。はしたなしといふがごとし。いたはる心也。强字也。

心ちまどひにけり

おもひをかけたる心也。

かりぎぬのすそをきりて

思の切なる躰也。みだれたる思ひをしらせんために。しのぶずりのすそをきりて。うたをそへてつかはすなるべし。

しのぶずり

むかしはかり装束にすりかりぎぬをも用たる也。一禪御說同之。

春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれ限しられず

かすがのゝわかむらさきとは。所春日野なれば也。若紫とは女をたとへいふ也。しのぶのみだれかぎりしられずとは。忍ずりはみだるゝ物なれば。思ひのかぎりしらぬよしをよそへて云也。

をいつきて

人に追付などしたるとは不可心得。彼女の行たる所をしたひて尋つかはす心也。

ついておもしろき

川原左大臣の哥を今女の返哥に用たるは。ついてしかるべき事とやおもひつ覽といふこゝろなり。

みちのくの忍もぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに

融公の哥のこゝろは。誰ゆへにかみだれそめし。君ゆへにこそみだれぬれといふ儀也。上句は序也。古歌にはみな序哥とて。何事にてもいひて。すゑにわが心を述なり。といふうたの心ばへなり。女の返しの註也。みちのくのうたの心。河原左大臣の作意を用かへて返しにしたる事也。いま女のこゝろはたれゆへの思ひにてあるらん。我ゆへにてはあらじと也。源氏玉かづらの巻にも。おなじうたをいひかふる事あり。そのほか此儀おほかるべし。

いちはやき

早卒也。うちつけなる心也。

みやび

なさけをかはす心也。定家卿註也。

二 一むかしおとこ有けりならの京はゝなれ

桓武天皇延暦三年ならの京より今の京にうつらんとて。先長岡に都して。平安城の西京より次第に東京を首尾せし時分事也。先首尾したるにしの京に有ける女と也。

西京に女ありけり

此女誰ともなし。古註には二條后云々。不用之。やむごとなき人なるべし。

その人かたちよりは心なんまさりたりける

誠世にすぐれたる人なるべし。かゝる人なれば。業平のこゝろをつくしたるも。ことはりなりとみるべし。

ひとりのみもあらざりけらし

おとこある人と云也。

まめおとこ

實なる人をまめ人と云心也。そのゆへは人のつまに思ひをかけこゝろをつくすは。眞實に切なる思ひある故也。大かたの思ひにてはかくあるべからずと也。又云。なりひらを實なる人と云心也。

雨そぼふる

春の雨のおりふしのやうを思ひ入てみるべし。

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

心はたゞぬるともなく。おくるともなくて。夜をあかして。ひるは又春のならひに長雨しくらしたるよし也。詠にあらず。長雨なり。されどをのづからながむるこゝろもあらは也。是業平の哥のさま也。前のことばをよく工夫して思ふべし。猶以餘情無限物也。なをざりに見侍るべからすとぞ。

三　むかしおとこ有けりけさうしける女

思ひをかくる心也。二條后也。詞にみえたる也。業平好色の名譽の事なれば。名をあらは

してい へるにや。

ひじきも

海草也。文などのたよりにそへてまいらするなるべし。むかしはかゝる物などをもつかはす歟。

思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじき物には袖をしつゝも

心はかばかりたえがたき思ひあらば。ひつ(き歟)しく物には袖をして。むぐらのやどにても。思ひなくてだにあらばありなんと云心也。思ひあらば玉のうてなもかひなし。むぐらのやどもまさるべき心也。むぐらのやどにおもひのあるやうには。此うたの心はなし。此哥はじまりて後々のうたには。むぐらのやどに思ひのある所のやうによめり。陋屋の心也。むぐらのやどに思ひのあるやうに見侍れば。思ひをこのむ儀になる之。よく工夫すべき物也。

二條后のまだみかどにも

伊勢がかける詞なるべし。業平の所行をたすけて。たゞ人にての時とかけると云々。又女御以前の時分の事にもや侍らん。

四 一むかし東の五條に

今京の東京の事也。

大后宮

染殿后也。淸和母后也。五條の后共申。

西のたい

染殿御所内の西對也。二條の后を此たいにをきたてまつり給へり。

ほいにはあらで

あらはにはあらでなり。又本意にはあらでなり。

ゆきとぶらひける

密通事なり。

ほかにかくれにけり
業平密通不可然故也。古注に長良卿のもと
へと云々。さもやありつらむ。
なをうしと思ひつゝ
猶憂と也。大方もかよひがたき人なるに。あ
まさへほかにかくれたれば。なをうしと思
ふなり。
思ひつゝなん
つゝといへるとばにて。ほどをへたる心あ
り。思ひ〳〵て月日のうつりたる心あり。さ
れば又のとしの正月と次の詞にかけり。
又のとしのむ月に
時節におどろきて。思ひの切になる心也。去
年のこの比までは通じたる事など。さまざ
まにそのかんを思ふべし。
むめの花ざかりに
世間の梅のさかりなり。にしのたいの梅に
あらず。これこゝろのもよほしなり。
あばらなるいたじき
あれたるいたじきなるべし。此時のかなし
き躰にたよりあり。
月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひと
つはもとの身にして
此哥月やあらぬはとがめていへる也。心は
月もみし世の月。春もむかしのはる。わが身
も又もとの身なりといふ心也。みなこしか
たにはかはらぬを。后にあひたてまつらね
ば。月もあらぬ月におぼえ。春もむかしの春
ともおぼえず。我身ももとの身とも思はぬ
よし也。それをいはんとすれば。文字は三十
一字かぎりあれば。そのまゝ心にてもたせ
てをく所。心はあまりて詞はたらずの心也。
此うた猶言語の及所にあらず。俊成卿の筆
跡をみて工夫あるべき者也。

夜のほの〲と
此詞を思ふべし。夜ふかくもかへらざる心尤あはれなるべし。其人故此所をしたふよし也。
五 一むかしおとこ有けりいとしのびて
前の段とおなじ。二條后の事也。
人しげくもあらねど
忍てかよふみちなればなり。
あるじきゝつけて
染殿の后のきゝつけてなり。
人しれぬ我通路の關守はよひ〱ごとにうちもねなゝむ
五文字はつねの人しれぬ身など其心也。ことはりは明也。よく吟じて。いづれのうたをも。其心をしるべきとなり。
心やみけり
心やましき也。染殿后の心に。すこし業平をいたはり。憐愍のやうなる心也。
せうとたち
二條后の兄弟たちのと也。
六 一むかしおとこ有けり
女のえうまじかりけるを。えがたきなり。二條后の事也。
ぬすみいてゝ
思ひのあまりに。女をさそひいてゝゆくなるべし。
あくた川
内裏の中なる川也。ちりなどをながすと云々。まことに一禪の御註にも。此事を一說として如此あそばされたり。實には此名なし。作物がたり作法にや。
草のうへにをきたりける露を
おりふしのみちの躰なり。かゝる道などならひ給はぬ故に。露などをもとひ給へるに

や。心のまどふさま也。
ゆくさきとほく
ゆく道もとをく。思ひも亂たる時なれば。こたへもせぬ也。
おにある所
女をとりかへしたる人をおにといへり。末の詞にみゆ。古註鬼間事不用之。たゞおそろしき心なるべし。又は心なき所の心也。
神さへいといみじうなり
此時神なり雨ふりて。かなしき事とりあつめたる心也。
くらに
いづくにても人なきやうなる所にや。座字をくらともよむと也。此儀可然。一禪御說同之。
弓やなぐひを
心のたけき躰をいへり。一禪御說。此時業平は近衛司なればと云々。此夜弓矢を負べきといかゞ。只近衛の儀にはあらで。作事なれば面のまゝにや侍らん。
はや夜も明なんと
此時は夜をはやく明よ。と思べき事ならず。されども思ひのみだれに忙然としたるなるべし。
鬼はや一口に
こゝに人ありときゝつけたる人の一言によりて。女をとりかへしたる事を一口といへり。余說不用之。
あなやと
女の詞なるべし。かなしむ心也。
あしずりをして
切にかなしむ心也。
白玉か何ぞと人の問し時露とこたへて消なまし物を

五文字に如此よめるは侍らず。此哥にとりては。なにぞとうつしいへばくるしからざる也。心はしら玉とやらん。なにぞとやらんとひしときと云心也。其時の思ひのみだれにかへしせざりしと。尤切なる心也。そのおりきえたらばと云に。今の猶ふかき心みゆ〔三說未〕也。

いとこの女御の御もとに

染殿后の御方なり。禁中にての事也。

堀川のおとゞ

二條の后の兄昭宣公也。

太郎國經

二條后の兄。昭宣公にも兄なり。

まだ下らうにて

殿上人の時分なるべし。

七 一むかしおとこ有けり京にありわびて

業平流罪の時の事也。當流の說。東國下向の分なり。古註に種々譬喩不用之。只作物がたりなれば。そのまゝ見侍るべし。定家卿奥書。可翫詞花言葉而已云云。此詞肝心也。山海處々旅懷可思惟之。

波のいとしろう

此詞又有感也。都をはなれて。よろづ物かなしかるべきときは。なみのしろくよせかへるも。めにたちてあはれなるべし。

いとゞしく過行かたのこひしきにうら山しくもかへるなみ哉

此哥は心あらはなり。波のよせてはかへり〳〵するをみて。都を思ふ心もよほさるゝ樣なり。哥さまあはれふかく侍り。よく吟味すべし。理のやすくきこゆるうたをば。猶ふかく思入て見侍るべしとぞ師說申されし。

八 一むかしおとこ友とする人

誰ともなし。

すみところもとむとて
　都に住わびていへる也。
しなのなるあさまのたけに立煙をちこち人の
みやはとがめぬ
此うたはあさまの山の奇妙なるところをよ
みたてたるなり。業平みやこにのみすみて。
かゝる山のさまなど めづらしきに。名にを
ふけぶりのおもしろきを。わが心に かむじ
て。遠近人も是をあはれと見ざらましやと
いふ心也。旅はかなしき物なれど。時にあた
りての興は 又さる事也。ふかく工夫すべし
とぞ。
九 むかしおとこ身をえうなきものに
なりひらは王孫三代の人ながら。官位もあ
さく。結句流罪の身となれり。仍用なき身と
なるよし也。
もとより友とする人

上の段に友とする人と云るによりて也。
みちしれる人もなく
業平のみならず。同道の人も道を分明にし
る人なきよし也。又道をしるべき人なりと
も。此時の思ひには迷心あるべし。まして此
人々の みちしらぬことはり也。あはれふかく
おもひさとるべし。
三河國
あさまなどをすぎて。此國にうつり行程な
り。
水ゆく河のくもて
　水縦横に行所なるべし。
橋を八わたせる
はしを八わたすにあらず。くもてのあまた
あるなるべし。
木の陰に
羇中のさま。よく〳〵心をやりて思ふべし。

かれ飯
旅行にあるさま也。有間王子孝徳御子。なども。家にあればけにもる飯をなどよみ給へり。旅客のさまおもしろくもあはれにも侍にや。
そのさはにかきつばた
おりふし此所にて花をみたる躰有興にや。
から衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅をしぞ思ふ
此うたにきつゝ。はる〴〵。つましあれば。みなころものえんの字也。常のうたならば秀句おほくてあしかるべし。これはかきつばたを折句にをけばくるしからず。哥よむ人これを思ふべし。さてうたの心は。大方もたびのならひは。おりにふれとにしたがひてかなしきを。思ふ人をみやこにとゞめきぬれば。思ひの切なるよし也。
ほとびにけり
ふかくかんじたる涙の心にてかく云り。
ゆき〳〵て
遠江を過たる心なるべし。
うつの山に
山中の道のさま。此時の人々の思。そのおりふしをよく心をやりて工夫すべし。
つたかえてはしげりて
葉しげるとよむ説あれど。はの字をてにをはによみてかむあり。
すゞろなる
心ならざる也。又辛字をもよむ。
す行じやあひたり
修行者。古註には遍照又寂蓮など云り。不用之。當流誰ともなし。
するがなるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり
上は只所うつの山なればいへり。序哥也。夢

にも人にといはんためなり。心は夢にだにその人をあひみぬなげきをいふ也。うつゝにもとは。うつの山をうけていはんためなり。かやうのこと師說ならではたがふべき。又の說。もと逢みし人なれど。たち放きぬれば。夢うつゝともにあひみたる人とも思はぬ心也。尤面白也。

ふじの山をみれば

時は五月也。奇異なる山の雪をみたる心なり。

時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん

五月に雪あれば。時しらぬ山はふじのねなりけるといふなり。そのこゝろをかへして。さてもいつとてかかくふれるぞといへり。かのこまだらはむら〳〵の雪なり。此うたもあさまの山のごとく。此山のたぐひなきを興じてよめる也。かやうのうたはとがらをよく思ふべしとぞ。

こゝにたとへば

上の富士の註也。追而註するうへは。都にてひゑの山にたとへていはんことうたがひなし。

はたちばかり

十重ばかりなどたとへていはゞ。なをとたらぬ心にて。廿ばかりと云り。

しほじり

俊成卿說。定家等不分明云々。此儀殊勝也。此物語一部の肝心也。學者工夫すべしとぞ。

大なる河あり

業平旅行の躰。こゝにもとまらず。かしこにもやすらはず。遠國にいたり都は遠くなるに。結句大河にむかひて。此川をわたりて又いととをくへだゝりゆかむとを思べし。故

に大なる川と云る詞に心あるべし。以下のことばども。いづれもあはれふかく。よく工夫すべし。餘情かぎりなきものなり。
わたしもりはや舟にのれ
舟にものりかねたる程也。心のすゝまざる儀也。是又なをざりに見侍るべからずとぞ。
しろき鳥の
都鳥の背はくろく腹はしろし。
鴫の大さなる
鴫のやうにて大なるとりといへり。鴫の勢分なるにてはなし。又は鴫のほどなるといふこゝろなり。
名にしおはゞいざことゝはん都鳥我思ふ人はありやなしやと
此うたはたゞむさしとしもつふさの中に。大なる川ありといふより。みな人物がなしくてといひ。さるおりしもしろきとりとゞ
ばにいひたるを。此うたのこゝろにこめて見侍るべきなり。かぎりもなき餘情侍るべし。
舟こぞりて
傍人も感涙を催すなり。舟中の人〳〵也。
一むかしおとこむさしの國
此國にある女誰となし。
ちゝはこと人に
女の父の心には。なりひらにあはせん事を過分に思ひて。こと人にといへる也。なを人とは大方種姓たうとからぬ家の人なるべし。
一禪御說同之。
はゝなむ藤原
四姓の中にも。藤氏は賞翫なればかくいへり。家のたかく思ひあがりたる人は。斟酌の心もなく。風流なる人にあはせんと思なるべし。

あてなる人
　勝人也。ほめたる儀也。
むこがね
むこの器量也。源氏物がたりにも。きさきに
なるべき人を后がねと云同之。
よみて
　よむてとよむ也。是よみくせなり。
みよしのゝたのむの鴈もひたぶるに君がゝた
によるとなくなる
　心は業平をむこにとらむと思ふ心ふかきゆ
へに。所みよし野にて。鴈おほきところなれ
ば。鴈も君が方によるとなくぞとよめり。た
ゞ我心をかりにいはする也。
我方によるとなくなるみよしのゝたのむのか
りをいつか忘ん
　此返しは前のうたに我を思ふ心みえたれ
ば。その心ざしをいつわすれんとなり。

十一
一むかしおとこゝ
　友たち誰ともなし。
忘なよ程は雲ゐになりぬとも空行月のめぐり
あふまで
　此うた拾遺には橘の忠もとが哥とみえた
り。かやうの事は此物がたりにおほし。此物
がたりにては業平のと心得べし。ほどは雲
ゐとは。遠ざかるともと云儀也。めぐりあふ
までとは。我たちかへりてあふまでわする
なと云儀也。月によそへていへり。
十二
一むかし人のむすめを
誰ともなし。
むさし野へゐてゆく
　此段のさまとに作物がたりとみえたり。人
をぬすみてといへるにつきて。からめられ
にけりとも。又火つけんとすともかけるな
るべし。此物語の誹諧也。

みちくる人
滿來なり。
むさし野はけふはなやきそわかくさのつまもこもれり我もこもれり
此段の詞。かゝる哥あれば。つくりごとに云るなり。哥の心はあらはなり。つまは我つま也。
女をばとりてともに
國のかみ女をぐして行なり。
十三
一むかしむさしなる男
業平と也。
京なる女
誰ともなし。古註四條后云々。四條后といふ事不用之。其上淸和の御時立后の事なし。
きこゆればはづかし
戀路のわりなきならひ也。
むさしあぶみと書てかけて思ふといふこゝろなり。むさしあぶみといふ事は。其國より都に奉りそめたるより。此名を用るにや。むかしはその國よりたてまつりはじめたる物をば如此號する事有。一禪御說同。信濃のま弓と云も。其國の御調の所也。
むさしあぶみさすがにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし
かけてたのむといはん枕詞也。とはぬもつらしとふもうるさしとは。思ふ中のさすがしのぶ事ある故也。まことに戀路のわりなきさま也。
たへがたき心ちす
女のうたの心。とにかくにたへがたくくるしきと也。
とへばいふとはねばうらむゝさしあぶみかゝる折にや人はしぬらん

心は思ひの一方になければ。いかさまにせんと思ふにも。猶たへわびぬ。かやうのとのある折にや。人のしぬるといふともあるらんと云儀也。

十四
一むかし男みちのくにすゞろに
すゞろとは心ならずの儀也。

そこなる女
誰ともなし。

中〳〵に戀にしなずば桑子にぞ成べかりける玉のをばかり
心は戀といふ物はあひみるとをたのむに。さも侍らねば。せめてしなんとも思ふに。それも又かなはぬ心也。されば中々にこひにしなであらば。せめて桑子にもならばやと云也。桑子はちぎりふかき物也。又命一とせをすぎざる物なれば。とり合てかくねがふ也。このうたは萬葉にあり。是又作事也。玉のをばかりとは。しばしのほどもと云心也。

夜もあけばきつにはめなてくたかけのまだきになきてせなをやりつる
きつとは狐也。下略也。くたかけは家の鷄といふ心也。但庭鳥と心うる至極也。心は夜ふかく鳴て思ふ人をかへせば。狐にくはせんといへる也。此段みな作物語也。

くりはらのあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを
是もをぐろさきみつのこじまの人ならばといふ哥をいひかへてつくりたる也。心はあねはの松をその人にたとへて。さそはるべき人ならば。いざといはまし物をと云也。又予今案あり。しかはあれど。云いてんとは憚ありてさしをき侍ぬ。

よろこぼひて
東國の詞のさまあり。

思ひけらしとぞ
おとこの思ひけるよと。女のいひてよろこびたる文なり。
十五 一むかしおとこなでうとなき人
なにばかりの人にもあらずといふ心也。枕草子源氏物がたりにも。させる人にあらざる人とみゆ。
あやしうさやうにて
人のめなればかくおもへり。
忍山忍てかよふ道も哉人のこゝろのおくもみるべく
しのびてかよふ道もがなとは。人の胸中に忍てかよふみちもがなといふ心也。尤めづらしうして。しかも詞やさしきうたなり。これらは誠業平の哥なるべし。おほく古哥をわざとつくりて。業平とかけるおほかるべし。

さるさがなき
悪也。不祥也。
えびす心
たはむかたなく。すぐなるやうの心也。さやうの心にて。をしたるふるまひなどありては。いかゞはせんとおもへる也。せんはのはは文字をそへたるばかり也。
十六 一むかし紀有常
業平のしうと也。又朋友也。
三代の御門
淳和。仁明。文徳。
世かはり
清和の御時の事也。有常は惟喬方によれる人也。惟喬は名虎が女静子の腹におはす。有常は名虎が子也。
よのつねの人のごともあらず
女也。おとろへたる躰也。

あてはかなる事を
風流なる事也。有常が性をほめたる也。
こと人にもにず
世のつねの人は貧てはへつらひ。富てはおごる也。有常はさもあらずとなり。
よのつねのこともしらず
世務をもしらぬとなり。
とこはなれ
ふうふ中をはなるゝ心也。常の字也。又は床也。いづれも離別の心也。
あねのさきだちてなりたる
有常が妻のあね也。
おとこまことにむつましき事こそ
有常が妻の性をもはしからず。かゝる時節を堪忍せずしてはなるゝをもつてしりぬ。平生も有常が心にまことにむつましと思はずもありぬべし。されどもわかるゝはあはれなるべし。
ともだち
業平のこと也。思ひわびてと書る詞心あるべし。思あまりて業平の方へもいへる也。
手をおりてあひみしことをかぞふればとをといひつゝよつはへにけり
心はたゞ有常我妻四十年のちぎりなる儀なり。女のこゝろなき事。此哥のうちにこもるなり。
よるのものまで
種々のものを送るとみえたり。
年だにも十とて四はへにけるをいくたび君をたのみきぬらん
心はとしさへよそぢのちぎりならば。いかにそのうちに君をもたのみけんを。今たちわかるゝ心さこそと。妻の心をたすけていへるなるべし。

是や此天の羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ

業平いろ〳〵の衣などつかはしたるを。あはれにしかもうれしさのあまりにかくいへり。心はこれやあまの羽衣ならむと。先大やうにほめて。ことはりえけり。君がきたる衣なればと自問自答したる也。みけしは上衣也。又御衣也。

よろこびにたへて又

一首にて猶不足なるによて也。

秋やくる露やまがふと思ふまてあるは涙のふるにぞありける

秋やくるとは。秋は人をうれへしむる時なれば。秋が來て我袖をしぼるか。又大方の草木の露がわが袖へまがひきてぬらすかと思ふまで。我袖のぬるゝは。只今の悦の涙なりけりと云心也。是も我心まどひを我と思えたる心也。

十七 一年ごろ

此段にむかしと言字なし。書おとしたるか。又年頃と云るにて。昔の心ある歟。只書落にや。

をとづれざりける人

業平也。あるじの女誰ともなし。

あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり

おもてのこゝろは。櫻はちりやすくあだなる名こそたてど。かくまれにくる人をゝ待つくれば。あだにはなしと云也。下の心はなりひら此女をあだなりとかねていひけるを思ひていへる也。我はあだならぬよしを云る也。

今日こずばあすは雪とぞふりなましきえずはありとも花とみましや

業平女のいへる所をうつて。今日わがきたればこそあだにはなきやうにあれ。あすは雪となるべし。それは木のもとに雪とはみゆとも。花とはいかゞみんといふ也。下の心は女のかはらぬさきにきたればこそといふ心也。あすにもならば。人の物ともなりなん。さあらばその人とはみるとも。我物とはみまじきの心也。

十六 一むかしなま心ある女

をんなとは小町也。此段誰ともみえざれども。なりひらのかたへ哥を送などする事。業平好色の名譽なれば。小町と名をあらはす也と云なり。なま心とはよからずあしからずと云ほどの心也。

きくの花のうつろへる

すこしうつろひてしろき花なるべし。うたにみゆ。

くれなゐにゝほふはいづら白雪のゑだもとをゝにふるかともみゆ

しら雪は中將の心のいろみえぬを云也。白色は色の本躰にて。うつろふ色のなき故也。中將をかんべんしたる哥也。好色の人とみれば。さもなきといふ心なり。

しらずよみに

小町がうたを送りたる心を。なにゆへともしらぬよし也。大かたは業平もしるべけれども動ぜぬ心也。

紅にゝほふがうへの白ぎくはおりける人のそてかともみゆ

紅もたゞみるめのたゞち也。又しろきもそのまゝなり。それをおりてをこせたるゆへに。おりける人のそてとはいへり。しらずよみによみけりと云。心えながらしらぬよししたるなり。きくには白衣佳人などいふ事

あればなり。

十九 一むかし宮づかへしける女のかたに

染殿の御かたなどにや。そのゆへは業平は忠仁公に家禮也。されば染殿后などへも通しぬるにや。ごたち。染殿后の内などの女どもの中にてもや侍らん。

あま雲のよそにも人の成行かさすがにめにはみゆる物から

天雲のよそとは。空はとをき物なれば。よそといはむためなり。人のみえながら我にちかづかぬをかくよめり。

天雲のよそにのみしてふることは我ゐる山のかぜはやみなり

我君がかたによらでへぬるは。そなたのあるかたの風のはげしければなりと云ふ心なり。風のはげしきとは。と人のかよふとを云也。此女古今にありつねがむすめ也。

二十 一むかしおとこやまとにある女

誰ともなし。

宮づかへする人

なりひら也。奈良故郷などへかよひて。今京にかへりまいりける也。

紅葉のおもしろき

若葉のいろこき也。

君が爲たをれる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ

君が心もしうつろふか。君がためにおれる枝のかく紅葉するはと。女の心をうたがひていひなせるなり。

返事は京にきつきてなん

此詞はみちすがら此返ごとをまつ心みえたり。うたなどを思人のかたへつかはしては。みちすがら返しを待こゝろあるべし。

いつのまにうつろふいろのつきぬらん君がさ

とには春なかるらし
是は又女たちかへりておとこの心をうたがふ也。さればいつのまにうつろふいろのつくぞ。かゝらば君が里にははや秋になりはてけるよと云心也。

二十一 むかし女いとかしこく思ひかはして

女誰ともなし。又小町などにもや。

いかなる事かありけん
かはるべきことを不審する心也。

出ていなば心かろしといひやせん世の有さまを人はしらねば
女男のあひだの恨あるをばしらで。世の中の人は此家をうかれゆくを心かろしとぞいはんと云心なり。いさゝかなるとゝあれば。女の定心ならぬ也。

けしう心をくべき
恠字の心也。あやしむ也。

門にいてゝと見かう見
こゝの詞ども。上に心をくべき事もおぼえぬをといへるにかなへり。

思ふかひなき世なりけりとし月をあだにちぎりて我やすまひし
上の二句は此女をふかう思へど。立いてぬれば。思ふかひなき世なりけり。人の心はかくある物なりけりといふ心なり。さてとし月をと云より我心をいへり。もし又我もあだにちぎりてやありけんと。一方に人にとがをきせずよめる也。是中將の心なり。世上の儀にも叶哥也。

人はいざ思ひやすらん玉かづら面影にのみいとゞみえつゝ
此思ひやすらんとは。我をもしあはれとも思ひやすらむ。又思はずやあらん。我はわすれがたければ。おもかげにみゆると云心也。

玉かづらは女のかくるものなるにより。万葉にもおもかげとよみならはせり。思ひやすらんは。又や見んかたのゝみのゝと云おなじ心也。

此女ねんじわびてにや

上の詞にいさゝかなるとにいてゝいにしも。堪忍のこゝろなきによりてなり。又今男のかたへうたを送などするも堪忍せぬ性なり。

今はとてわするゝ草のたねをだに人の心にまかせずもがな

今はとてとは。中將のこゝろに。かぎりと思ひなし忘やすらん。さもあらずもがなと云心也。忘草の種を心にまかするとはわするゝ事也。

忘草うふとだにきく物ならば思ひけりとはしりもしなまし

うふとだにきくならばとは。忘んとするは思ふ心のあるゆへなり。されば女の忘草をうふるときかば。おもふとしらむといふ心也。

又〳〵ありしよりけにいひかはして

又あひかたらひける也。

忘るらんと思ふ心のうたがひに有しよりけに物ぞかなしき

心はいまは思ひかはせども。かねてあさはかに立出し人なれば。なをうたがはしきゆへに。ありしよりまさりてかなしと云也。

中空に立ゐる雲のあともなく身のはかなくも成にけるかな

此哥心は此女中將の所をさせるふしもなくてうかれいて。さらばそのまゝにもなく。たちかへりしたがひなどして。さらに定なき我身のありさまを。中ぞらの雲の定なきに

よそへていへるなり。我心を觀ずる也。
といひけれど
又別〳〵の世になりたる也。此詞は哥より
つゞけてみるべし。哥に身を觀じぬれども。
又定心なき事を云り。
二十二
むかしはかなくて
女誰ともなし。はかなくなにとやらんして
絶たるなるべし。
うきながら人をばえしも忘ねばかつうらみつ
ゝ猶ぞ戀しき
これは人をつらしとは思へどもえわすれね
ば。かく恨ても猶こひしといへり。かつとい
ふ詞は且にはあらず。むかしはかくといふ
におほくつかへり。
さればよといひて
同心したる儀也。業平もかく思ふと也。女の
うたをやがて返しなどのやうにいへる心な
り。さて又我心をおこしてよめる也。
逢みては心ひとつをかはしまの水のながれて
たえじとぞ思ふ
心ひとつをかはしまは。心をかはす儀也。水
のながれてとは。水はたえぬ物なれば。その
やうにながらへてかはらじといへる心也。
われて又あふと云儀をば當流に不用。河島
を二度の用にたつるはあしき故也。
といひけれどその夜いにけり
けれどの詞は。歌には行すゑの事をとをく
契たる哥也。かくはいひけれど。やがてその
夜行てねたると也。思ひかねたる心にや。
秋の夜のちよを一夜になずらへてやちよしね
ばやあく時のあらん
これは心明也。只人にあく世あらじといふ
とをかくよめり。箸鷹のとかへる山の椎柴
のはかへはすとも君はわすれじ。などいへ

るうたのたぐひ也。

秋の夜のちよをひとよになせりともことばのこりて鳥や鳴なん

これも心は明也。詞のこりてとは。猶のこりおほかるべきと云儀也。心やさしき哥なるべし。

二十三 一むかしゐ中わたらひ

田舎にかよひ住事也。ならの京などにや。一向にすむにはあらず。

人の子ども

男は業平也。女は有常が女と云り。いかゞ。たれにてもなり。

つゝゐつのゐつゝにかけしまろがたけ過にけらしないもみざるまに

つゝゐつの ゐつゝとは 重詞也。あづさゆみまゆみつき弓といひ。みよしのゝよしのゝ山といふがごとし。上のつゝをば すましてよむべし。これは例の作物語なるべし。如此哥古哥にあるを。中将のと書なせり。此五文字古註説あやまれり。調五とかく などいへる事大なる相違也。 定家卿のうたにも此五文字有。

まろがたけ

たがひに身のたけをばいかほどに成たらん時。ちぎりをかはすべしなど いへるなるべし。としはいくつにてもなり。

くらべこしふりわけがみもかたすぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

是も前 のうたにて其心あらは也。かみをあぐといふは。女おとなになれば かならずする事也。心は君が手をふれんと云心也。可契儀也。

女おやなく

古註説は。おや時をうしなひて。なきがごと

くになりたる也云々。當流にはまとになく成たるごとくにても。又なきがごとくにてもあるべし。
もろともにいふかひなくてやはとて
男女ともにかやうにたづきなくてありへんもいかゞとて。をの〳〵いかやうにもしかるべきかたに成なんなど云心なるべし。大和物語にも。あしからじよからんとてぞわかれけるなにかなにはのうらはすみうき。などよめる人の心も此心也。此段のこゝろもなりひらのこゝろあさきにはあらず。女を憐愍の心なるべし。
思うたがひて
業平をいだしやりなどするも。又さすがにうたがはしく思ふなるべし。
いとようけさうして
身をつくろひやさしきさまなり。古今には琴をかきならしてなどあり。まとにあはれなるべし。
風吹ば興津白波たつた山夜はにや君がひとりこゆらん
おきつしらなみは。盗人の事にむかしよりいへり。しかあれど是はたゞたつといはんとて。興つしら浪と云。興つしらなみといはんとて。風ふけばといへる是序也。心は此女まづしくなりて。業平とあひそふ事をもはぢなげきて。二道のうらみをも思はず出したてゝ。國をへだてゝ過ゆく山のおぼつかなきに。かゝる夜はしもひとりやこゆらむといへる心を。よく思入て吟味すべし。貫之も此哥は歌の本といへり。よく〳〵思ふべし。猶しらなみの立田の事。顯註密勘に顯昭が今案。万葉にわたつ海の沖つしらなみ立田山いつかこえなん君があたりみん。是は

伊勢山の邊の御井にてよめり。序哥なればゞ盜人にあらじといへり。定家卿此今案可與可仰。やまとにはあらぬから衣のたぐひなりと同心し給へり。

心にくゝもつくりけれ

心にくきさまにつくりてみせしとなり。

てづからいひかね

古註には實にとるにはあらず。成敗する心也と云々。當流には此事は物がたりの誹諧也。成敗するにても幽玄ならず。たゞそのまゝ可心得。

君があたりみつゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも

是は萬葉哥也。古哥を我思ふ心にあへば詠じ云事常のこと也。あはれふかきさまにや。次にたのまぬものゝと云うたも古哥也。心明なれば註に及ばず。

やまと人こむと

業平の事也。此段に有常が女と名をあらはすは。貞女の名譽をしらする故也といへり。

おぼつかなし。誰にても也。

二十四

一むかしおとこかたゐなか

田舍はいづくともなし。男は業平也。

みやづかへに

京へのぼるを云也。朝家奉公也。

いとねん比に

こと人に契る也。

此男きたり

業平の來也。

此戶あけ給へ

門などたゝかせたるさまにや。

あら玉のとしのみとせを待わびてたゞこよひこそ新枕すれ

此哥男絕たりとも三とせはまつべき事。さ

だまれる儀にや。みとせもすぐれば。他人に新枕すると云心也。但まことに新枕せんにはかやうにもいひがたし。只中將を恨ていへるにや。前のことばゝ態かやうにかくこと。此物がたりにおほし。

梓弓ま弓槻弓年をへて我せしかごとうるはしみせよ

ゆみを三つゞくること。古註には三年といふ。不用之。重詞也。神樂の哥にも。弓といへばしななき物をあづさ弓まゆみつきゆみしなこそあるらし。といへるがごとし。としをへてといふに。みとせのこゝろは侍る也。さてうたの心は。君に心ひきて年をへぬるを。其あひだのちかひを君うるはしくせよといふ儀也。うるはしきとはまことと也。かごとはちかひ也。

梓弓ひけどひかねどむかしより心は君によりにしものを

心は君が心は我にひきもひかずも。我心はむかしより君によるといへる儀也。弓はひくときは本すゑの我かたへよる物なれば。詞のえんによるといふたよりある也。

しりにたちて

したふ心の切なる也。

清水のある所

子細なし。自然の儀也。

およびのちして

指の血也。途中の故なるべし。心はたゞ切なる儀也。又途中にて筆墨に及ばぬ儀歟。

あひおもはてかれぬる人をとゞめかね我身ぞ今は消はてぬめり

我は思へど人はおもはぬをあひおもはぬといふ也。我身消はつるとは。まことに死するにはあらず。思のかぎりなるをいふ也。次のと

ばにいたづらに成にけりと云も。思ひのかなはぬ心なり。

二十五
一むかし男さすがなりける
女業平を恨みたる心あるにより。あはんとおもへど。さもなき心也。
秋のよのさゝ分しあさの袖よりもあはてぬるよぞひぢまさりける
あはてぬるよとは。人のもとへいけども。あはぬかへさの事也。あさのそでとは朝袖也。心は秋の野も篠も朝も露おほき物なれど。猶あはぬよのかへるさの袖はぬれまさるよし也。
色このみなる女
誰ともなし。古今には此哥を小町と有。
みるめなき我身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくゝる
みるめなきとは。此女中將にみえぬ儀也。みえぬは中將にうらむる事あればなり。されば我みえぬはそなたの科にてあれば。わが身をうらめしとはおもはで。などあしたゆきばかりはきぬるぞといへる心也。我身とは男のわが身なり。

二十六
一むかし五條わたり
女とは二條后也。
わびたりける人
染殿后也。返事とは業平のうた也。業平二條后に思ひある事を。染殿后あはれみわび給し也。戀路なればかゝる事にもあはれをかけ給ふなるべし。それをよろこびたるなるべし。
おもほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟のよりしばかりに
中將二條の后に密通の事は。染殿后いましめたまふべきを。あはれみ給ふ所のうれし

、さにおつる涙を。おもほえず袖にみなとのさはぐ哉といへり。猶ふかう悦の涙をいはむとて。もろこし舟もよりし計にと云也。よりしのしはやすめ字也。當時は此やすめ字侍らぬにや。豊玉姫のほゝでみのみことを戀て。あか玉のひかりはありと人はいへど君がよそひしたうとく有けり。此哥し文字同心なり。

二十七
一むかし男女のもとに
女誰ともなし。

ぬきす
盥のうへに竹をあみて。へりなどをさしたる物なり。それを上にわたして。そのうへにて手をあらふ物也。水のしづくをちらさじの心也。

たらいのかげに
てあらふ女のかげ也。

我斗物思ふ人は又もあらじとおもへば水のしたにもあるかな
心は水のかげにうつりたるを。又もあらじとおもへばありとよめり。

水口に我やみゆらん蛙さへ水のしたにてもろこゑになく
蛙は水口に一なけば惣の蛙のなく物也。なきやめば又なきやむ也。されば惣の蛙のなくは水口の蛙のなくゆへなり。そのこゝろをとりて。そなたに思のあるは。我思ひのゆくゑぞといふ心也。我こそおもひの本人なれと云心也。

二十八
一むかしいろこのみなる女
誰ともなし。

などてかくあふこがたみに成にけん水もらさじとむすびし物を
あふこがたみとは。あふかぎりのかたきな

り。期字なり。それを籠によそへてよめり。心は切にちぎりし事は。かたみにくみたる水のごとくあとなきよし也。

二十九 一むかし東宮女御

二條后事也。春宮の母の女御なれば也。陽成院は貞觀十一年二歳にて立太子。

花の賀

花の時は花の賀と云。紅葉の賀など云は秋なれば也。一禪御說。染殿后四十賀をいとこの女御し給ふなるべし。いとこの女御とは二條后なり。

めしあづけられ

業平奉行などにて申沙汰しけるにや。業平は忠仁公染殿などへ家禮なる故也。

花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふのこよひにる時はなし

面は御賀のときのめでたきけふのさまをいへり。下の心は二條后の御ことを花にあかぬといへり。けふのこよひと云を。つよくはあたりていはて。大やうにうちながめて云べし。餘情かぎりなし。

三十 一むかしはづかなりける

ほのかに逢たる女なるべし。

逢事は玉のをばかりおもほえてつらき心のながくみゆらん

あふ事は露ばかりにて。思ひは切なる心なり。誠に哀ふかき哥也。戀路の本意にや。よく吟味すべし。

三十一 一むかし宮のうち

禁中の事也。わたりけるは業平也。前をすぐる儀也。

よしや草葉よ

かくいふ心は。春の草の若葉なるも。秋にいたりて枯行とを思ひて。業平によそへてい

ひ出して。うらむる心也。一禪御說。人のなきあとには草のおふる心とぞ。

罪もなき人をうけへば忘草をのがうへにぞおふといふなる

つみもなきはとがもなき我身をと云也。うけへとはのろふ心也。女のふかくうらむるをかく云なす也。をのがうへにとは。還着於本人のこゝろなり。とりわけ忘草といふは。この女中將忘けるをうらみて。よしや草ばのなど云にや。

ねたむ女も

かくいひかはすを。かたはらにねたむ人もあるべし。是も女の心のならひなるべし。

三十二 一むかし物いひける

年ごろありてとは。絕て後の事也。

いにしへのしづのをだ卷くりかへし昔を今になすよしもがな

此哥いにしへとむかしは同事也。むかしのうたはかやうに云り。心はたゞ中絕たる人をたちかへりしたふ心也。

なにともおもはずや

伊勢が詞也。この人々の行衞しらねばかく云にや。

三十三 一むかしむはらのこほり

あしやは業平の領知にて。京よりかよひけるなるべし。

このたびいきては又もこじと

業平の京へ上て。又はこじと女の思ひて。わびたるけしきをなぐさめて。業平よめる哥也。

あしべよりみちくるしほのいやましに君に心を思ひますかな

此哥は万葉のうたにすゑすこしかはれり。女の心をなぐさめて。中將古哥をすこし引

かへていへるなるべし。あしべにみつるしほは。うへにみえねど。ふかき物なれば。我思ふこゝろをたとへいふ也。

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さすさほのさしてしるべき

こもり江とは古江などの草おひてみえぬをいふ也。心は下にふかく思ふ心はさもこそあらめ。それをばさしていかゞしるべきと云心を。舟さすさほのと云る也。あらはに思ふ心のしらまほしきよし也。

よしやあしや

子細なしなどいふ心にや。

三十四 一むかしつれなかりける人の

誰ともなし。

いへばえにいはねばむねにさはがれて心ひとつになげくころかな

心はいはむとすれどいはれず。さていはねば又むねにみちて。思ひの切なる心也。さればこれによりて心一をなげくとは云也。つれなき人にと詞にあるに。よく心かなふにや。

おもなくて

つれなき人のかたへしゐての心也。はづる心也。

三十五 一むかし心にもあらでたえたる人

たれともなし。

玉のをゝあはをによりてむすべれば絶ての後あはんとぞ思ふ

玉のをはいのちなれど。こゝにてはたゞをといはんためなり。あはをとはあはせたるをなり。心はかたいとなどのやうにはなく。たえてもたえはてぬ物なれば。かくこそよそへよめり。

三十六 一むかしわすれぬるなんめりととひどしける

とひどはとひうらむる心也。
谷せばみみねまてはへる玉かづらたえんと人
に我思はなくに
此哥は萬葉に。谷せばみみねにおひたる玉
かづらたえんの心我は思はず。といへるう
たをすこしかへてかけり。心はたゞたゆま
じきといふ心也。上は序哥なり。これも作物
がたりの心也。
三十七
一むかしいろこのみなる女
好色にてあだ／＼しき女なるべし。誰とも
なし。
我ならで下ひもとくなあさがほの夕かげまた
ぬ花にはありとも
我ならで下ひもとくなとは。他人にちぎる
なといふ心也。花にもしたひもなどいへば
かくいふ也。あさがほの夕かげまたぬとは。
女のこゝろのあだにして。夕をもまたず。か
はりやせんといふ心をかくよめる也。
ふたりしてむすびしひもをひとりしてあひみ
るまではとかじとぞ思ふ
此哥は前にうたがはれぬる心をちんじてよ
める哥也。ふたりして結しとは。たがひの契
を他にうつすまじき心也。前のうたはいふ
に。此哥はいやしくや。
三十八
一むかし紀有常に
業平有常が家に行て待に。をそかりしに。後
によみてやる哥也。
君により思ひならひぬ世中の人は是をや戀と
いふらん
有常を待わびしと故に。世中に戀といふと
を思ひならふと云也。
ならはねば世の人ごとになにをかも戀とはい
ふとゝひしわれしも
我も戀といふ事をならはねば。世の人にと

ひつるを。君を思ふ心ゆへに。我も戀をしる
といふ儀也。詞は別なれど。心は同やうの哥
也。

三十九 一昔西院のみかど
淳和天皇の御事也。依遺勅御骨を西山に納
奉る。故號西院。

たかいこと申
崇子内親王也。淳和御子。承和十五年五月十
五日薨。

その宮のとなり
崇子内親王の宮の隣也。男は業平也。

御はふりみむとて
はうぶりと可讀にや。みんとは あはれにも
思ひ奉る心なるべし。

ひさしくゐて出たてまつらず
未將出也。さう所への事也。うちなきてと
は。あはれをかけてかへらむとせし也。

あめのしたのいろこのみ
源のいたる。源致。嵯峨天皇の御子定。至。
擧。順。

此車を女車とみて
業平の女とのりたる車の事也。

車なりける人
女なり。誰とはなし。

ともしけちなんずる
如煙盡燈滅の心也。

のれるおとこのよめる
業平也。

出ていなばかぎりなるべみともしけち年へぬ
るかとなくこゑをきけ

いていなばとは。この宮鳥邊野にいてゝ
いなば。此世のかぎりなるべきといふ心也。
ともしけちとは。今螢をけす事を。いのちの
きゆるにたとへよむ也。さてとしへぬるか

となくこゑをきけとは。此別の時みな人のなげく心は。老たる人の死するはせめて也。此宮年をへ給へるかはとなくこゑをきけと。いたるに云なり。

いとあはれなくぞきこゆるともしけちきゆる物とも我はしらずな

いとあはれなくぞきこゆるとは。業平のうたになくこゑをきけといふをもつて。泣ぞきこゆるといへる。中將のなくこゑをきけといふ返しなればかく云也。此下は命はきゆるといへども。法界の五大の火はきゆる物ともしらずと云心也。人の一身は地水火風空にむすばれて。人身をうくる物なり。此姿をうけたるも法界の五大なれば。死するも又空からずと云也。是即非眞滅の儀也。

なをぞ有ける

直の心なり。すぐによめると云心也。

いたるは順がおほぢなり

此詞心得がたし。順は村上時分の人也。後人の註したるにや。但諸本如此。

みこのほいなし

此詞又上につゞかず。猶ぞ有けるのつゞきにや。心は内親王のため本意なき儀なり。なげくべき事なりかし。時宜にかなはぬを嫌也。

四十

一むかしわかきおとこ

けしうはあらぬ女をとは。下すしからぬ也。

女を思ひける也

業平の此女の家にきたよふ所とみゆ。

人の子なれば

業平の事也。さる人の子なればといふ心也。をひやらむとするをとゞむるいきほひなく。ふかく恨心もなき事をほめて云り。此心殊勝也。

女もいやしければ
上詞には下すしからぬとあり。こゝにいふいやしきは年わかき事也。朝廷莫如爵。鄕黨莫如齒。
思ひはいやまさるに
業平の思ひ也。
をひうつ
女をへだていさむる心也。
ゐていでゝいぬ
女をおやのゐていだす心也。
いでゝいなば誰かわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも
五文字は彼女をゝひいだす事也。たれかわかれのかたからんとは。我も世にありへん事あるまじければ。我もわかるべきと云心也。さればありしにまさるけふはかなしもと云り。こしかたはたのむかたあればなり。

たえいりにけり
悶絶したる事。
おやあはてにけり
女のおやの事也。
しんじちに
まめやかにとよむべしと云々。不用之。
猶思ひてこそ
業平を思ひてこそと也。
むかしのわか人は
伊勢が詞也。今の翁とはわか人に對してかけり。世の末の人は人を思ふ事もふかゝらぬよし也。
四十一
一むかしはらからふたりひとりはいやしきおとこ
誰ともなし。
ひとりはあてなるおとこ
業平事也。此女は姉なるべし。

うへのきぬ
　袍の事也。
さるいやしきわざも
　三従の心也。
ろうさうの
　六位袍なるべきにや。
紫のいろこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
　むらさきの色こきとは。わが思ふ女に寵愛の時をいふなり。思ふ人ひとりゆへに。そのゆかりをみなあはれと思ふよし也。むらさきはむさしのなどにあるる草也。女にたとへたる物也。野なる草木とはゆかりの心なり。
四十二
一むらさきのひともとゆへもおなじ心也。
一むかしおとこいろこのみなる女を
　好色なる女なるべし。
にくゝはは たあらざりけり
　好色にてあだなれども也。此段の詞よくよく分別してみるべきなり。
猶はたえあらざりける中なりければ
　又うちたのむべき中ならずとなり。
いてゝこしあとだにいまだかはらじを誰かよひぢと今はなるらん
　是はわが思ふ人のたのもしげなき事をいふ也。我たちいでば。あとよりやがて人をもかよはさんとうたがふ心也。
四十三
一むかしかやのみこ
　賀陽親王。桓武第七御子也。
人なまめきてありけるを
　賀陽親王のおぼしめす女に。業平のなまめく事也。我のみと思ひけりとは。業平の我のみと思ひたる儀也。
又きゝつけて
　賀陽の御事をなりひらのきゝつけたる也。

ほとゝぎすのかたを
繪にかきたる也。
時鳥ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ
思ふものから
心は思ふ人の我にのみちぎらて。他人に心
かよふ儀也。其を時鳥によそへて。なをうと
まれぬとは。切にはおもへど。うとましきと
云心也。うとましきはうらむるなり。
けしきをとりて
業平の氣色をとりて也。
名のみたつしてのたおさはけさぞ鳴いほりあ
またとうとまれぬれば
してのたおさとは時鳥の別名也。名のみた
つとは。時鳥のあまたのさとになくよしの
名の立なり。これも時鳥をわが身にそへて
よめり。心はよそにかよひてはなかず。うた
がはれてうらめしさに。けさぞなくとよめ
り。けさはいまと云心なり。かならず朝には
あるべからず。
庵おほきしてのたおさは猶たのむ我すむかた
にこゑしたえずば
心はかよふかたあまたありとも。我をだに
思ひすてずば。なをたのむと云心なり。
四十四
一むかしあがたへゆく人に
有常とみゆ。
うとき人にしあらねば
業平は有常がむこ也。
女のさうぞく
裳からぎぬなるべし。
あるじのおとこ
業平也。
いてゝゆく君がためにとぬぎつれば我さへも
なく成ぬべきかな
君がためにとぬぎつればとは。はなむけの

心也。我さへもなくなるとは。きたるもをぬげば。裳なくなると云儀也。猶われさへもなくとは。われも わざはひなくなるといふ儀也。人をいはへば我もわざはひなきの心也。喪の字を わざはひとは よむなり。此もなくと云心萬葉五巻にあり。

此哥は

此時此やうを題にて哥よむべきと。常の題などにかはりて逸興なる事也。 よまむも難儀なるべければ。心とゝめてよまするも也。

四十五 此哥を業平によまする時の心なり。

一むかしおとこ人のむすめ

古註には良相女云々。不用之。たれにてもさるべき人なるべし。

物やみ

物思ひの病となる心也。

つれ〳〵とこもりをりけり

忌にこもる心也。我ゆへ死たる人なれば。義をたがへぬ心也。

六月卅日

此段詞以下よく〳〵可思惟之。時節の氣。暑熱のくるしさやう〳〵散じて。夜ふけて凉風うち吹たる時節を思ふべし。

ゆく螢雲のうへまていぬべくば秋風吹とかりにつげこせ

此哥心尤餘情おほく感情ふかき哥也。古註などにいへるはいかゞとぞ。 あつきころほひ。よひはあそびて。さ夜ふくるころ。風いと身にしむばかり吹て。すゞしさ さらに中秋の天の心したるおりふし。ほたるのたかくとぶをみて。はやかりも わたるべきほどの心ちすれば。かりにつげこせとよめる也。いかにも吟味して。時の景を思ふべきにや。

暮がたき夏のひぐらしながむればそのとゝな

く物ぞかなしき
これは さしむきてきこえ侍り。別のこゝろなし。いみにこもり たる折ふしの こゝろを思ひあはせて 料簡すべし。前の哥と おなじときにはよまざる 哥とみゆ。工夫すべき物也。なをそのとゝなきに心あり。

四十六
一むかしおとこうるはしき友
業平の友也。とに思ひかはしたるにや。
人の國へ
受領などにや。 月日のへにける事と讀まるべし。
忘ぬべき物にこそ
我忘れずと云詞也。
めかるともおもほえなくにわすらるゝ時しなければ面かげにたつ
めかるとは。みる事のへだゝる儀也。心は國さとをへだてゝも。我はめかる ともおもほえずと也。いかむとなれば。わするゝ時なければ。いつもおもかげにたつと云心也。

四十七
一むかしおとこねんごろにいかでと思ひける女
此女あだなりと業平を思ふ也。
大ぬさのひくてあまたに成ぬれば思へどえこそ憑ざりけれ
大ぬさとは幣帛の事也。 又大ぬさは榊に麻の苧をながく付たるをいふ。大麻とかけり。ひくてあまたとは。これかれとりかはし祈をする故にいへり。哥の心は 思ふ人のこゝろあまたにうつれば。たのまれずといふ心也。返しはひくてあまたのなにはたてど。つゐに一方による所ある物をと云心也。つゐには君が方によるべきの心也。

四十八
一むかしおとこ
今ぞしるくるしき物と人またん里をばかれず

とふべかりけり
心は人を切に待わびぬる時。人またむさとをばかれずとふべき物なりと。我心に領解したる心なり。惣別の世の事をいへる也。ひとりをばさゝぬ也。

四十九
一むかしおとこいもうと
業平のいもうとなり。

うらわかみねよげにみゆるわかくさを人のむすばん事をしぞ思ふ

ねよげにみゆるとは。ねると根と兼ていへるなり。心は我いもとなれば子細なしとみれど。他人いかゞおもはんやと。猶いもうとをあはれむ心也。人のむすばんとは。人のちぎらむことを思ふ儀也。又の儀いもうとをけさうして云る心もあり。

初草のなどめづらしきことの葉ぞうらなく物を思ひけるかな

などめづらしきことのはぞとは。初草といふえむの詞なり。心はあまりに我をあはれむところのかたじけなきをいふ也。大かた世中に人をあはれむよりもこえて。中將の思ふ所をこれほどまではなどめぐみけるぞと云心也。うらなくものをとは。うらもなくそこにとをりて。我を思ひけりと云心也。此心奥にあらはるべし。又業平のけさうしたるを。とがめてよめる心もあり。

五十
一むかしおとこうらむる人をうらみて
女の業平をうらむるを。又なりひらのうらみてなり。

鳥の子を十づゝとをはかさぬとも思はぬ人を思ふものかは

此鳥の子の事。百卵をかさぬるといふ事もあり。又九子をかさねたるともあり。但此うたに云所は本文をば用ず。たゞあるまじき

とをいひ出たる也。さればかくあるまじき事はありとも。おもはぬ人をば思ふ物かはと云心也。

朝露はきえのこりてもありぬべし誰か此世をたのみはつべき

是もたゞあるまじき事を云り。たれかこの世をたのみはつべきとは。人のこゝろを憑はつまじき儀なり。此世とは夫婦の間の世の事也。

吹風にこぞの櫻はちらずともあなたのみがた人のこゝろは

心おなじ。

行水にかずかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり

心おなじ。

行水と過るよはひとちる花といづれまてゝふことをきくらん

行水も過るよはひもちるはなも。しばしまてといふ事をばきかぬ物也。人のこゝろも又同事なるを。しゐて猶思ふ事はかなきといふ心也。

あだくらべかたみに

伊勢が詞也。

五十一 むかし人のいゑに

其家誰ともなし。

うへしうへば秋なきときやさかざらん花こそちらめねさへかれめや

うへしうへば重詞也。されどすこし心あるべき也。心はかくうふるとうふるならば。秋のなきときやさかざらん。秋といふ事のあらむかぎりはさくべしと云心也。うへたる花を賞する心也。人の梅さくらなどにても。花うへたらむときの哥など。これにて思慮すべし。此哥おもしろく侍る物也。

五十一 一むかしかざりちまき

五月五日いろ〳〵のいとにてむすびたるちまき也。

あやめかり君はぬまにぞまどひける我はのに出てかるぞわびしき

あやめにてちまきをするとはなけれど。當日の事なればかくよめり。心はあやめはぬまにてひく物なれば。我方へ心ざしたるを切に思ふ心也。われは野にいてゝとは。きじをやれば。野にて心ざしをいたすよしなり。

五十三 一むかしおとこあひがたき女に

此詞尤切なるとみゆ。大方の人なりともあるべきに。あひがたき人にあひたる時のこゝろを思ふべし。

いかでかは鳥のなくらん人しれず思ふ心はまだよふかきに

此哥はかくれたる所なし。たゞよくとがきに思ひあはせて見侍るべし。心あはれふかきうた也。おもふ心の夜ふかきは。のこりおほき心也。

五十四 一むかしおとこつれなかりける女に

女誰ともなし。

行やらぬ夢路をたどる袂にはあまつ空なる露やをくらん

行やらぬゆめぢとは。ゆめのうちにも行かよふ事やすからねば。ゆめぢをたどるそてには。大かたの天津空なる露やはをく。かなしき思ひの露こそをくらめと云心也。露やをくらむといふをとがめていへば心得らるゝなり。後撰には天津そらなきとあり。心おなじ儀也。かやうの詞初心にては心得がたき物也。能々工夫あるべき物也。

五十五 一むかしおとこ思ひかけたる女

女誰ともなし。

思はずは有もすらめどゝのはの折ふしごとに
たのまるゝかな
今は思はずこそあるらめど。こしかたのとのはのたのまるゝよし也。古今に。よしや人こそつらからめはやくいひてしとは忘じ。といふ同心也。世上の事にもこのこゝろよく思ふべき心也。

五十六 一むかしおとこふして思ひゝ
此詞切なる心也。
我袖は草庵にあらねどもくるればつゆのやど
りなりけり
此哥の詞は切にして。哥は大やうにきこゆ。但此心は秋の夕ぐれなどの草葉の露をきあまりて。万物あはれなる折ふし。物思ふ身のうちながめたるに。袖のうへはいつもの露けさなれど。たゞ今みる所をかむじて。草の庵にあらねど。くるれば露のやどりになりにけりといふよし。あさく意得ぬれば詞に相違す。

五十七 一むかしおとこ人しれぬ物思ひけり
戀わびぬあまのかるもにやどるてふ我から身
をもくだきつるかな
此五文字誠以肝心也。とし月をかさね。よろづに心をいたましめ。身をつくしけれどかひなければ。うちかへし思ふところを戀わびぬとはいふ也。されば我から身をもくだきつるかなと。うちなげきたる心也。

五十八 一むかし心つきて
業平の好色に心をつくしたる事也。
宮ばら
長岡に伊豆内親王の宮ありし。そのほとりの宮たちの事也。桓武御子に内親王あまたおはします。その宮の事にや。宮ばらといひけるとは宮のおほき心也。純子。萬子。桂子。

中野内親王。高津内親王等也。いづれも桓武の御子なるべし。

こともなき女ども

よろしき女どもなるべし。皆つかはれ人也。

田からむとて

おりふし秋のこと也。なりひらに云よらむとて。たはぶれにいへることばなり。ゐ中びて書なしたる也。

すきものゝしわざや

なりひらの家つくりなどのおもしろきをいふ也。

あれにけりあはれいく世のやどなれやすみけん人の音づれもせぬ

あれにけりとは。あるじなき所をあたりてよめり。あれにけりといふによりて。あはれいく世のやどにてかあるらむとは云也。末句になりひらかくれてをとせぬことをいふ也。

むぐら生てあれたるやどのうれたきはかりにも鬼のすだくえけり

此五文字はあれにけりといへる返しなれば。それに同じてむぐら生てあれたるやどゝいへり。うれたきは愁也。憂也。心はかゝるやどりのうれはしきは。たまさかにも鬼のあつまるよりほかはとふ人もなしと。女のうたにあたりてよめり。おにとは女のこと也。あだちの原のくろづかにおにこもれりときくはまとか。といふも女の事を云り。外面似菩薩。内心如夜叉ともいふ云り。

ほひろはん

前に田からむといひしこと葉の末也。これもたはぶれ也。古註に顕る心とは不用之。前にも女の思ひは顕たり。

うち侘ておちぼひろふときかませば我も田づ

らにゆかまし物を

これは女どものほひろはんといふに順じていへる也。此儀業平の心也。此段は此物がたりの誹諧也。如此所をよく思慮すべき也。

五十九 一むかしおとこ京をいかゞ思ひけん

業平左遷の時分なるべし。先都をいでゝ東山にありしにや。

すみ侘ぬ今はかぎりと山里に身をかくすべき宿もとめてん

心は明也。後撰には爪木こるべきと入にや。

物いたくやみて

物思ひの病氣となりて絶入したるにや。

水そゝぎなど

以涼水灑面となどの心也。

我うへにつゆぞをくなる天川とわたる舟のかひのしづくか

是は面にそゝぎたる水をよめり。すてに絶入するほどの身のいきいでたれば。大かたの露にはあらじ。天川をとわたるかいのしづくなどにてやあるらんと云心也。

六十 一むかし宮づかへいそがしく

朝家奉公事也。

心もまめならざりけるほど

業平の眞實に女を思はざりける時分と也。

いゑとうじ

古註には小町と云々。誰にても侍也。

宇佐使

御代一度奉幣の使あり。こゝに云は清和の御代なり。貞觀のはじめにや。

あるくにの

いづれのくにゝてもなるべし。

しさうの官人

祇承。驛廳にありて御使の雜事などする人也。

五月待花橘のかをかげばむかしの人のそでのかぞする
五月を待てさく物なれば。五月まつと云り。卯月の心にはあらず。心はたゞむかししりたる人といはんとて。むかしの袖のかぞといふ也。

思いてゝあまになりて
此時身をかへりみておどろく心より。あまになりて山にも入けるにや。

六十一
一むかしおとこつくしまで
是も宇佐使の時の事也。

すだれのうちなる人
いづくの誰ともなし。

染川をわたらん人のいかでかは色になるてふことのなからん
そめ川といふ川なれば。わたる人いかでいろにならざらんといふ。

名にしおはゞあだにぞあるべきたはれしま浪のぬれ衣きるといふなり
これは白浪の此しまにうちかくるが。よそよりみればしらぎぬのやうなれど。ちかくみればさもなき也。そのこゝろをもちてよめる也。其故はいろこのむといふ人ぞとなりひらをいふは。かむべんしていへるを。やがていろこのみの返しをしたるを。女かくよめる心は。名にしおはゞそらごとにてあるべし。たはれ〔ト歌〕しまもよそよりはしらぎぬやうにみゆれは。まとはさもなければ。いろこのみといはゞ。さもあらじとおとしてよめる也。

六十二
一むかしとしごろをとづれざりける女
業平のかたへ久しくをとせぬ也。女はたれともなし。心かしこくやあらざりけんとは。あだなる人となり。

はかなき人のことにつきて

中たちの言よく云につきていにける事也。

もとみし人のまへに

業平のまへにての事也。

いにしへのにほひはいづらさくら花こけるからともなりにけるかな

こけるからとは。さくらの花をこきちらしたる枝の事也。業平わが身むかしのやうにもなくなれる事を。花なき枝によそへて云る也。

いとはづかしと思ひて

業平はわが身のとをかくよめるにも。女ははづかしく思ふべし。

是や此我にあふみをのがれつゝとし月ふれどまさりかほなみ

我にあふみをのがれて。とし月をふれど。思ひなをす事なきといはんとて。まさるかほなき人なりけりとよめる也。もとなりひらの所をたちいでたる女なれば。我を思ふ事のもとよりはすこしもまされるやとおもへば。さもなきよしをうらむる也。女をおとしてよむにはあらざるべし。是當流の本意也。

六十三 一むかし世心つける女

嫁したる女の事也。

子三人をよびて

誰ともなし。古註三人の名。悉無正躰跡也。不用之。其名をいひて詮なき事は。實なる事も無曲。田(ま歟)して是はあらぬ事也。

百とせに一とせたらぬつくもがみ我をこふらし面かげにみゆ

此うた九十九になるにはあらず。我心につかず。すさまじき女なれば。もゝとせに一とせたらぬほどの思のしたるなるべし。されどそれをもすてぬ所。業平の人をあはれむ

情ふかきなり。次の段にその心みゆ。
男あはれと思ひてその夜ねにけり
哥にて男女の中をやはらぐる事みえたり。
世中のれいとしておもふをば思ひおもはぬを
ばおもはぬ物とは
世上の人は我切に思ふをばおもひ。さもお
もはぬをばおもはぬを。業平は分別なく人
を思ふ心也。業平の性をいへり。此段又誹諧
也。源氏物がたりに源内侍などのたぐひ也。
六十四 一むかし男女みそかに
吹風に我身をなさば玉すだれひまもとめつゝ
いるべき物を
風はいづくにもひまある所をもとめ入もの
なれば。かくねがひ云也。入べき物をといふ
とばに切なる心あり。よく／＼思ふべし。ま
ことにあたらしき哥也。
とりとめぬ風には有とも玉すだれたがゆるさ
ばかひまもとむべき
とゞめがたきかぜのごとくなりとも。ゆる
してこそいらめと。猶をさへてよめる也。
六十五 一むかし大やけおぼして
大やけとは清和御門の御事也。おぼしてと
は寵愛したまふなり。
色ゆるされたり
三位に叙したまふ事にや。此人は二條后也。
傳にも三品の事とみゆ。一禪の御註には。中
らうなどのあやをりものをゆるさるゝと
有。
いとこなりける大みやす所
染殿后事也。
ありはらなりけるおとこ
業平なり。
女かたゆるされたる
好色の事也。

ざうしにおりたまへば
上つぼねより本のざうしへ出給ふ事なるべし。
なにのよき事と思ひて
又さとへ出給ふをなにのと思ひて。それこそよきとよと思ひて又里へ行也。
つとめて
後朝のやうにきこゆ。然而さとはみえず。早朝にも行たるにや。二條后の御もとへ也。
とのもづかさ
女嬬云々。きよめなどする女也。后の父長良卿の許に。女嬬のあるべき事如何。大家などへは行かよふにやと云々。
くつはとりてゝ
しのびたる儀にや。
師說又一禪の御說も。つとめてとのもづかさのみるに。くつはとりておくになげいれて
と侍るを。二條后のかたへ早朝にも業平かよひけるよし侍り。但今案は。二條后にかよひて。つとめて殿上へ業平かへりての事とみゆ。然ば女嬬のみる所も大内なれば不審なき物歟。此儀三西御同心也。
身もいたづらになりぬべければ
業平の身をかへり見たる也。前にいへるは后の我身をのたまふ心也。
陰陽師かむなぎよびて
一段心をゝこして祈る也。はらへのぐなど。つねのごとくなるべし。古註には諸々ありと云々。不用之。
戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな
猶いやましにこひしければ。神はうけぬにやといふ也。此歌古今には不逢戀に入なり。此物がたりの歌勅撰に入時。心かはるとお

ほし。可受師說。

この御門は

清和御事也。三代實錄云。清和天皇。鷹犬之遊。漁獵之娯。未嘗留意。風姿甚端嚴如神性。定家之本註之。又佛法に歸し給ふ。殊勝の御心也。

女いたうなきけり

二條后みづから嗟歎の心なり。段々の次第は前後不定。

くらにこめてしほり給ふ

おくふかきやうなる所にや。しほるとはいさめしほる儀也。

あまのかるもにすむゝしの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ

上句は序哥也。心はたゞ我からとねをこそなかめ。世をばうらみじといふ也。此我からと云所。尤道の肝心也。我からぞといふ所に心をかくれば。げに人をも世をもとがと思ふべき事なし。人をうらみざるは和の至極也。和は又世をおさめ身をおさむるの中たち也。此哥を忘れず。人はおもふべきことにや。此女君我心を思返し。世はうらみじとよめる心。尤ありがたき物也。

男は人のくにより

當流の儀は。左遷の事さだめらるといへども。いまだ都にありし時の事也。左遷の所さだまるによりて。人のくにとは云也。古註の儀は不可然。

あはれにうたひける

詠吟なるべし。又郢曲にや。

さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらずして

此哥は業平さりとも我にあはんとぞ思ふらん。我はあるにもあらで過ぬる物をとうち

なげく心也。まことにあはれふかきさまにや。

いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいざなはれつゝ

心は明なり。此哥は人丸がうたといへり。業平只今の我心にあたれば。是をうたひけるにぞ。

水尾御時

清和山城水尾に御隠遁云々。御廟の山今に其所にあり。

六十六
一むかしつの國にしる所ありけり

芦屋のさとは業平領知也。

あにおとゝ

業平兄弟。行平。守平。仲平等にや。

なぎさをみればゝ

其興思やるべし。

なにはづをけさこそみつのうらごとに是やこのよをうみわたる舟

今朝こそみつのうらとは。必朝にはあらず。あらたにみえたるさま也。此哥は業平我兄弟その外しる人をもともなひて。此所にうち出たるさまを。先心によく乗ゐて見侍るべし。さるにあまのを舟のはかなうあるはうかび。あるはなぎさなどにあるをみて。其興あるさまの心にうかべるが。しかも又世をわたることとわざのあはれを思ひてよめる也。是や此世をといへるは。たゞいまあらたにみたるさま也。よく〳〵吟じて心得べし。猶眺望を本にして。末に観ずる心を思ふべし。

これをあはれがりて

かんじたる儀也。

六十七
一むかし男せうようしに

前段のつゞき也。せうようはあそび也。

いづみのくにへ
さしていづれの所とはなし。
伊駒の山
おもしろき山也。良暹法師。わたのべの大江のみねにやどりして雲ゐにみゆる伊駒山かなとよめる。其意にて分別すべし。眺望面白也。
たゞひとり
業平なり。
昨日けふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなりけり
心は此山の梢の雪。さらに花ぞとみえて面白を。雲のかくすは。花のはやしをねたみて。雲がかくすなりけりといふ儀也。かくろふはかげろふにはあらず。かくすなり。さてきのふけふといふは。時しもこそあれ。これかれせうようする時分にかくせば。あやにくなる雲のさまやといふ心より。ねたく思てかくすかといふ心出來たるなるべし。これ作意の行所也。狂雲妬佳月。此心歟。

六十八　一むかしおとこいづみのくにへ
前の段と同時也。又一段に書なしたる也。
住吉の郡
住吉の名を三いへる事。所の眺望をいはんためなり。
鴈鳴て菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしのはま
かりなきてきくのはなさくとは。世間の秋の興也。春のうみべは當季の景也。それにしかもすみよしなれば。おもしろかりし秋にまさるよし也。此鴈菊住よしにてありしにはあらず。惣じての秋の興なるべし。定家卿。けふぞみる春の所の名なりけりすみよしのさとすみよしのはま。しら菊のにほへ

る秋も忘草おふてふきしの春のうらかぜ。
此二首にて當所の景をよく工夫すべき也。
みな人〳〵よまず
此哥を感じたる心にてやみたる也。

六十七

一むかしおとこかりの使の事
古註の儀。宮司に尋ぬるにも不覺悟云々。一條禪閤御說にも其儀別なり。狩の使とは光孝天皇御代にも諸國に勅使をもつて狩せさせ給ふ事あり。仁和元年三月。同二年二月也。今のかりの使も其類なるべし。然(者歟)とも業平伊勢尾張兩國の勅使なりと意得べし。天子もかりしましますことありき。それより狩の使もをこる也。古註に狩の使の事さまざまの曲說を云り。皆以惡說也。一切不用之。
齋宮なりける人のおや
親とは染殿后。(齋宮繼母也。) 齋宮は恬子內親王也。文德天皇御子なり。一禪御說には。おやとは惟高みこの母靜子事也。惟高と齋宮恬子と一腹なれば也。しかれども染殿に業平家禮なれば。御詞をくはへらるゝにや。
二日といふ夜
業平下向して二日め也。
われてあはんといふ
わりなくあはんと也。
女もはたあはじとも思へらず
すき心にてあはじと思はぬにはあらず。うゐ〳〵しくて思惟なき心也。末にみゆ。
つかひざねとある人
使器用と也。
子ひとつ
一時を四刻にわる事あるによりて如此云り。
月のおぼろなる
狩使の例は多分二月三月也。これも春なる

べし。古註五月四日夜と云々。子刻に月ある
べからず。不用之。
またなに事もかたらはぬに
實にあひたる事なれども。夢のやうなる心
にてかくかけるなり。天川あさ瀬しらなみ
たどりつゝのうたも。ほどなく別たる儀也。
高階茂緒の子に師尚といへるは。實には業
平の息也。（範高階系圖）齋宮の御腹也。
我人をやるべきにあらねば
はかりやすらひたる心也。
君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝか
ねてかさめてか
此哥はたゞ君やこし我やゆきけんの二句
也。おもほえずといふより下句は。みな上の
二句をのべたる也。よくこの心を見侍るべ
き也。只夢のたゞちのさまなるべし。
かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは

今夜さだめよ（一說よひと）
此哥上句はたゞ前哥心也。夢ともうつゝと
もこよひさだめよといへるは。夕さりあひ
てさだめよと云心也。古今には世人さだめ
よと云り。此物がたりにも兩說を付侍れど
も。今夜尤返哥の心すぐれたるにや。こよひ
あひてさだめよの心也。
くにのかみ
齋宮寮のかみを兼したる人也。
もはら
專也。
かち人のゝ
あさき江也。淺き緣といふ心也。
つい松
續松のきえ墨にて書たる也。おりふし有け
るにや。
又あふさかの

又あふべきと云心也。業平歸京のみちに。相坂をこゆべければ。そへてよめり。

七十
一むかしおとこ

前段同時事也。

大よどのわたり

尾州へおもむく道也。

わらはべに

女童也。

みるめかるかたやいづこぞさほさして我にをしへよあまのつり舟

心は齋宮を今一度み奉らん事ををしへよと。彼宮のわらはべなればいへる也。是思ひの切なる心也。小野篁が八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり舟といへる哥のたぐひ也。

七十一
一むかし男伊勢齋宮に

前段の事也。

内の御使

狩の使の次なり。

すきとは

數奇ごと也。あだなる女のさま也。

千早振神のいかきもこえぬべし大宮人のみまくほしさに

上句は拾遺に人丸が哥也。大宮人は業平を云也。けそうする心也。人をだにあひみば。こえがたきいかきをもこえんと也。

戀しくばきてもみよかしちはやふる神のいさむる道ならなくに

上句は明也。神のいさむる道ならずとは。いざなぎいざなみのみことのとわざより。八百万神だちもとゞめいさめぬ道なればかく云也。

七十二
一むかしゝ

女とは齋宮也。前段同事也。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへるなみかな

此哥は彼うらの松のもとなどへ。なにとなくうちよするなみのかへりては又よせ。よせてはかへるが。松はとがもなけれど。うらむるやうにみえたるさまをよめる也。それを齋宮のわが身にはとがもなきを。業平のうらむるよしをなずらへていへるなるべし。

七十三 一むかしそこには

めにはみてゝにはとられぬ月のうちのかつらのごときゝみにぞ有ける

此哥も万葉のうたにすこしかはれり。例の伊勢が作物がたりの意趣也。思ふ人を月のかつらによそへて云也。

七十四 一むかし男

岩ねふみかさなる山はへだてねどあはぬ日おほくこひわたるかな

此哥はさしむきてそのとはりあらはなり。されどそのごとくにては無曲にや侍らん。今案。あひ思ふ中は山海をへだてゝも。あふならひある物を。我中は岩ねふみかさなる山もなきに。あはぬ日おほく戀わたる事よと云にや。

七十四 一むかしおとこ伊勢國にゐていきてあらんと

我心の我身をひきゐて也。いきてあらんとは伊勢にゆかんとなり。杜詩。

大淀の濱に生てふみるから心はなぎぬかたらはねども

上の二句例の序也。心はみるばかりにても心はなぐさむならひぞ。かたらはずともと。業平のわりなき心をいさめて。思ひやみねと云る儀也。

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみのみるを

あふにてやまんとやする

是も上三句は序也。心はみるをあふ事にして。人はやまんとやする。我心はいかてさてはやみなんと云心也。

岩間より生るみるめしつれなくばしほひしほみちかひも有なん

みるは岩よりおふる物なればかく云り。みるめしつれなくばとは。みるめはつねにみどりにて不變の物也。そのごくわれもつれなくて。思ひをする心なくば。人のこゝろは變じかはるともよかるべきと云儀也。源氏物がたりにも。千尋ともなにかたのまんさだめなくみちひるしほのゝどけからぬをといへるも。人の心をしほのみちひにたとへ云也。これ業平の思ひをやめ〔上脫歟〕といふよし也。かひあるはよらむのこゝろ也。

涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか

此返事はしほのみちひには袖はぬれぬ物を。世の人のつらき心や。そでのしづくとはなれるといへる心とぞ。

世にあふ事かたき

一度あひたりし後はつゐにつれなし。齋宮の數寄心ならぬ所こゝにてみえ侍り。一夜のちぎりにて懷妊ありしもさるべき宿縁にや。又業平の名譽の事也。神に通じたる證據也。その末孫は今の高階氏にいたるまで。太神宮に詣する事もかなはず。そのしるし掲焉也。すでに今年延德三年辛亥にいたりて六百十二年也。

七十六 一むかし二條后まだ春宮御息所と申ける時

陽成院春宮の御時也。貞觀十一年二歳にて立太子云々。

氏神にまうで給

大原野に春日勸請也。嘉祥三年閑院左府冬嗣の申沙汰歟。爲藤氏守護云々。

まうで給

社參事也。

このゑつかさ

在中將事也。此時不可任中將也。後に極官を記したる歟。此時分右馬頭たるべし。若又兼少將歟。〔[illegible]〕二月上の卯日。十一月中子日。つりの事あり。文德御時仁壽元年初而祭の事あり。そのまつりは藤氏の后の宮よりをこなはるゝ事あり。

おきな

業平也。

大原やをしほの山もけふこそは神世の事も思ひいづらめ

神代のことゝもとは。天照太神とあまのこやねのみことは。陰陽二神の末。君臣合躰の神におはしませば。をしほの山もけふの御まいりをうれしくみるらんと云也。春宮の御母儀なればかく云也。下の心は二條后にあひたてまつりし事を。神世のことゝもとは云り。むかしのことゝいはんとて。神代といふ也。

七十七　一むかし田むらのみかどゝ申

文德天皇御事也。田邑山陵の名也。在所未詳。

女御たかき子

多賀幾子。忠仁公御弟西三條右大臣良相女。文德の女御也。天安二年十一月逝去云々。

安祥寺

山科にあり。五條后順子建立也。

右大將常行

良相の一男。多賀幾子の兄也。貞觀八年任右大將。此段は貞觀八年已後事なるべし。彼女御天安二年十一月薨之說おぼつかなし。天

安事誤歟。
右馬頭
業平此時爲右馬頭。貞觀七年任。
めはたかひながら
目將也。かひをつくる心なり。
山のみなうつりてけふにあふ事は春の別をとふとなるべし
心は數〳〵のさゝげ物の山のごとくなるを。則まことの山もけふのわかれをかなしむやと云心也。哥のさまゆうにみえねど。とけて其故ありとみゆる也。
いまみればよくもあらざりけり
●此詞業平自書とみえたり。
七十八 一むかしたかきこと申す女御
上におなじ。貞觀八年の以後の事なるべし。
禪師のみこ
人康親王也。仁明第四御子。母良相妹順子。常行のいとこ也。貞觀元年五月入道。同十四年薨。四十二。
いてゝたばかり給
思案し料簡する心也。
たゞなをやはあるべき
此石をいたづらにそのまゝはいかでたてまつるべきの心也。
三條のおほみゆき
清和貞觀八年三月廿三日。右大臣良相の百花亭に行幸の時の事也。おほみゆきとは御行幸也。しかれば常行の大將の任。業平右馬頭任。禪師の御子の出家の年記。此行幸の年。此四を以てみるに。女御の薨貞觀八年已後たるべし。
右馬頭
業平也。
あかねども岩にぞかふる色みえぬ心をみせん

よしのなければ

哥心は人を思ふ心はいろみえぬ物なれば。かくても満足する事はなけれど。我心を岩にかへてみせたてまつるよし也。かふるはあらはしみする心也。此哥詞づかひ其故あり。只今奉る石に書付歟(行平)哥に。うつくしひれたるなどは不似合やあらん。

七十九 一むかしうぢのなかにみこむまれ給に

在原氏の中に也。行平の女のはらに。清和の御子貞數親王生れ給也。古註に四條后云々。后號事無所見。不可然云々。

御うぶやに人々うたよみけり

うぶやの三ヶ夜七ヶ夜など祝事也。必うたよむ事あり。

御おほぢかたなりけるおきな

生れ給へる御子の御おほぢ。行平の方なる業平のよめる哥也。

我門に千尋あるかげをうへつれば夏冬たれか
かくれざるべき

わがゝどは在原氏の一門の事也。ちひろあるかげは仙家の竹也。壽命をいのる心也。竹は空虚にして直に。しかも上下の節ある物なれば。王道の心に叶也。夏冬は寒暑いづれも愁の時を此陰にてわすれんと云心也。猶心の空虚なる事哥人思ふべく哉。

これは貞數のみこ註也。

貞數親王。延喜十三年薨。四十二とみえたり。貞觀十四年誕生なるべし。一條禪閤御勘には。貞觀十六年誕生。延喜十六年薨とみえたり。

八十 一むかしおとろへたる家に

誰家ともなし。

人のもとへおりてたてまつらす

たが方へともなし。業平のまいらする也。

ぬれつゝぞしゐて折つる年の内に春はいくかもあらじとおもへば

雨と藤とをばまへの詞にゆづりてよめる也。やよひのつごもりを春はいくかもといへる。たがうやうなれど。哥は如此大やうなる所おほし。心はやよひのつごもりに雨のふる日。おりて人につかはす事。春をもしたひ花をも愛し。人をも切に思心也。如此事いかにも思慮して吟味すべき也。

八十一　むかし左大臣源融

嵯峨第十二源氏。貞観十四年八月任左大臣。寛平七薨。此段貞観十四年已後事なるべし。

家いとおもしろく

河原院さま也。

菊の花うつろひさかりなる

盛に又うつろふもある也。

もみぢのちぐさに

色々なる心也。

かたゐおきな

かたくなしきおきなといふ心也。業平自書詞なるべし。

板じきのしたに

座の末の心也。親王公卿の下なるべし。

人にみなよませはてゝ

卑下のよし也。

しほがまにいつかきにけん朝なぎにつりする舟は浦によらなん

いつかきにけんとは。こゝにいたれば。則しほがまに侍れば。いつかきにけんと云也。はからざるに來たる由也。されば こゝをしをがまによくなして。つりする舟もこゝによれと云る也。此おとゞしほがまをうつしたる所をよく賞したる也。されば この殿のおもしろきをよめる哥に相叶也。

みちのくにゝいきたりけるに

此詞註也。みちの國にいきたるとは。業平にかぎらず。誰人にても。如此おもへるなるべし。殊此うらの名譽也。

八十二 むかしこれたかのみこ

惟喬。文徳第一。母名虎女。後號小野宮。

右馬頭

業平也。貞觀七年任。其已後事なるべし。

時代へて久しく成にければ其人の名を忘にけり

伊勢が詞也。官位のいやしきを いたはりて書る也。王舍をいでゝ三代なれど。其ともみえぬ心也。

かりはねんごろにもせで

其様幽玄也。

なぎさの家

なぎさの院の事也。その院の櫻同所也。

世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

心はたゞ花に着したる儀也。春きたりてはいつかはとまち。さけば心をつくし。うつろへば雨風を恨み。ちりはてぬればなごりを思ふ心あれば。春のこゝろつゐにのどかならぬにより。絶てなくばのどかならんといふ心也。

又人の哥

有常哥也。此哥上中下みなよむとあれど。心は業平の哥の返哥也。

ちればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき

是は業平の花にあまりに着したるを思ひてよめる也。めでたけれとは愛したけれといふ心也。うき世になにか久しかるべきといふ心。尤人の可思所也。

御ともなる人
誰ともなし。
天川といふ所にいたりぬ
尤所おもしろかるべし。
右馬頭おほみきまいる
業平の酌をしたる也。
狩くらし七夕つめにやどからん天川原に我は
きにけり
かりして天川原にきたれば。七夕にやどを
からむと云也。七夕つめは七夕つまなり。
返しえし給はず
早卒に返哥をえし給はぬにや。又業平のう
たをふかくかむじ給心歟。有常は宮の御か
たの人なれば返ししける也。
一とせに一たびきます君まてばやどかす人も
あらじとぞ思ふ
一年に一たびきますとは彦星の事也。その
きたらんをまつ所なれば。こゝにやどかす
人あらじと云也。
十一日の月も
おりふし月の入よし也。
あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはに
げていれずもあらなん
心は明也。此哥をたゞ月を惜むうたに。山の
はにげてなどいはゞ。わざとめかしくて。よ
ろしかるまじきにや。こゝにては時の興に
乗するさま。尤めづらしかるべし。
をしなべてみねもたひらになりなゝん山のは
なくば月もいらじを
心は明也。
八十三
一むかし水無瀬に
日ごろへて宮にかへり給ふ。京宮にかへり
給也。
この右馬頭心もとながりて

さま／＼かやうにとゞめ給を。いかなるにかと思ふよし也。

枕とて草引むすぶ事もせじ秋の夜とだに憑まれなくに

草引むすぶ事もせじは。今夜いねじと云心也。春の夜のあかぬ心をいはんとて。秋のよとだにたのまれなくにと云り。みじかきを惜むこゝろなり。

時は三月のつごもりに

三月正當三十日。風光別我苦吟身。共君今夜不須睡。未到曉鐘猶是春の心にかなへり。

かくしつゝまうでつかうまつりけるを思のほかに

此段ことにあはれ也。さかりなる花のちりぬる心ちす。よく／＼思べし。惟喬貞觀十四年七月出家。寛平九年二月二十日薨。號小野宮。

ひえの山のふもとなれば

所のさま。雪のふかゝるべきことさもあるべし。以下の詞どもあはれふかし。よく思慮すべし。

御室

おこなひし給ふ室也。

つれ／＼と物かなしくて

かゝる所のさまは。大かたの人なりとも哀なるべし。いはんやこのみこ風流なりし君の世をそむき給心をよく／＼工夫すべし。猶つれ／＼といふうちに。惟喬の一生の事こもるべき也。

忘てはゆめかとぞ思ふ思ひきや雪ふみ分て君をみんとは

此哥は業平このみこにいにしへより心をよせ奉りて。水無瀨交野などのかりばのともにもしたがひ奉りて。朝夕なれたてまつり

し事などを思ひ。又位にもつき給ふべき君
のかく世をのがれ給心。此うちにこもるべ
し。此哥ことによく沈吟して工夫すべきな
りとぞ。

なく／＼きにける

此時の心切なる儀也。

八十四
一むかしおとこ有けり身はいやしながら

卑下詞也。

はゝなん宮なりける

伊登内親王。桓武皇女。貞観三年九月薨。

京に宮づかへしければ

業平朝家奉公事。清和御時也。

ひとつ子にさへありければ

業平の兄弟はおほけれど。伊登内親王のた
めには一子也。

とみの事

俄なる事也。病などの事を告しにや。

老ぬればさらぬわかれの有といへばいよ／＼
みまくほしき君哉

さらぬわかれとは辭せぬ別と云儀也。心は
明也。

世中にさらぬ別のなくもがなちよもといのる
人のこのため

上は明也。千世もといのる人の子のためと
は。我上をば云ず。一切の人の子のこゝろを
よめる。されば世中にさらぬわかれのなく
もがなといへる也。かくいふうちに我心は
こもるなるべし。

八十五
一むかしおとこありけりわらはよりつかうま
つりける君

惟喬の童の御時より業平つかへしなり。こ
れたかのとしに。業平は廿餘ばかりのまさ
り也。

ことだつとて

祝言也。だつはとばのたすけ也。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわがこゝろなる

此思へどもといふ詞よく思ふべし。心はこのみこにしたがひ。つねはまうでもし。又しばしもあらばやとは思へどもと云心也。されど君につかへてひまなき身は。身をわくるならひなければ。たちもかへらんと思ふに。此雪かきくらしふれば。都へけふかへらずともくるしからじと思へば。この雪のつもるぞ。わが心をしりてつもるぞとよめる也。

八十六 一むかしいとわかき男わかき女を

女誰ともなし。

今までに忘ぬ人は世にもあらじをのがさまざまとしのへぬれば

此哥は理明也。我は忘ぬよしをいへる也。

あひはなれぬ宮づかへに

いづくの事ともなし。但染殿二條后のあひだなるべし。

八十七 一むかし男つのくに

あしやは業平家領なりき。

むかしのうたに

芦のやのなだのしほやきいとまなみつげのをぐしもさゝずきにけり

上句は明也。つげのをぐしもさゝずとは。いやしきものゝいとまなきゆへに。髪をもけづる事もなきよし也。万葉に。しがのあまのめかりしほやきいとまなみつげのをぐしもとりもみなくに。といふを少とりかへたる也。新古今に業平のうたとみえたり。此物がたりにてはたゞむかしのうたと心得べし。

そこのさとをなんよみける

あしやのさとのむかしをよめると也。むか

しの事を註たる也。
こゝをなんあしやのなだといひける
當座云たる詞也。
なま宮づかへしければ
なまじゐ也。時にあはぬ儀也。ゐ中ずみしたるも同心也。
ゑふのすけどもあつまりきにけり
誰ともなし。兵衞等なる入なるべし。
此おとこのこのかみも
行平也。兵衞督なる時なるべし。
いざこの山のかみにありといふ
いざ此山也。いざとはさそふ詞也。
その瀧物よりことなり
瀧をほめたる也。萬物に勝たるよし也。源氏物がたりにも此類あり。
ながさ二十丈ひろさ五丈ばかりなる石のおもてに

彼瀧のさまゝさに如此とぞ。
わらうだ
圓座なり。
かのゑふのかみ先よむ
行平事也。
我世をばけふかあすかと待かひの涙の瀧といづれたかけん
此哥は在原氏の時代にあはずして。都にもひまありて。かく田舍わたらひする事を思てよめるなり。臣下非王命不越堺の心也。けふかあすかとは。必命のかぎりのみにはあらず。我世はやたのむかたなきを。けふかあすかとまつかひと云心也。待かひは待あひだ也。下句は世のうき涙を瀧といづれぞと云る心也。
あるじ次によむ
あしやのさとのあるじ業平也。

ぬきみだる人こそあるらしゝら玉のまなくも
ちるか袖のせばきに

心は此たきのしら玉をみだるやうにこぼれ
おつるをみて。ぬきみだる人こそあるらし
といふ也。たとへば水精などのいとにぬき
たるを。いとをぬきてみだしたるやうなれ
ばかくいへり。下句はかゝる玉のほどなき
そでにおつる事よと卑下してよめる心也。
哥のさまはかはれど。これも述懐のこゝろ
也。

かたへの人わらふとにや

入興の儀也。

かへりくるみち遠く

あしやより布引への間三里ばかり也。

うせにし宮内卿もちよしが家のまへ

其家此道にあるべし。もちよし。系圖不分
明。所用はなけれど。餘情にはなり侍るべ
し。

やどりのかたをみやれば

あしのやのさとをみる也。此時興思ひやる
べし。

はるゝ夜の星か川べのほたるかも我すむかた
にあまのたく火か

心はあしやのさとのいさり火數もなくみえ
て。所のさまもおもしろき當意をよめり。は
るゝ夜のほしかといへる。珍重なる五文字
也。いさり火とはみれども。みるめの奇異な
る所をほめんとて。星か川べのほたるか。あ
まのたく火かなどうたがひ云る也。古今に。
秋風の吹上にたてるしらぎくは花かあらぬ
か浪のよするか。などいへる心におなじ。

家にかへりきぬ

あしやの家也。

つとめて

早朝也。
女かたより
業平の家の女中より也。
たかつきにもりて
高土器と書る也。むかしはつちにてつくりしにや。
わたつうみのかざしにさすといはふも丶君がためにはおしまざりけり
わたつうみとは海神の事也。みるを海神のかざしといへる。おもしろきにや。いはふとは海神の愛するやうのこゝろ也。哥の心は海神の愛し用る藻なれど。今日の君がためには惜まずよせたるよし也。君とは行平其外の客來也。
あまれりやたらずや
伊勢が詞也。批判する詞也。少はさし過たるさまなりといふ心にや。あしやなればゐ中人とかけり。

八十八
一むかしいとわかきにはあらぬ
業平の友だち也。
それが中にひとり
業平の事也。
大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老と成もの
此五文字先は心得がたきにや。大概などいふ心歟。しゐていはゞ。十の物を七八など云儀か。我身を思ひとりたる心にあたる也。月をもめでじとは。當座月にむかへば云り。なににても物一にどんして。一身をわするゝ心のをこたりのつもれば。如此老となる所を思ひかへして。月をもめでじとよめる也。
此哥などは業平のうたにはすぐれたるにや。古今にもみゆ。是をよく沈吟せば。人々の教戒のはしたるべしとぞ。

八十九
一むかしいやしからぬおとこ
業平也。
我よりはまさりたる人を
誰ともなし。やんごとなき人なるべし。
人しれず我戀しなばあぢきなくいづれの神に
なき名おふせん
心はその人を思ふとも。人しれずしてこひしなば。わが思ふ人はいづれのかみのとがめに死たるとかいはんと。うちなげき思ふ心也。およばぬこひぢにいたづらに心をくだき。つゐにむなしくならんあとまでを思ふ心。尤あはれあさからず。

九十
一むかしつれなき人を思ひわたるとは
業平の心也。
櫻花けふこそかくはにほふらめあなたのみがたあすのよのこと
心はあひがたき人のあひなんといふをうれしながら。猶たのみがたき心をよめり。前の詞にて心あらはなり。
といふ心ばへもあるべし
上の哥のこゝろを釋たる伊勢が詞也。

九十一
一むかし月日のゆくをさへゝ
此詞に物思ふ心みえたり。さへといふ詞心あるべし。時節のうつるもかなしかるべし。三月も盡にていとゞ切なるべし。
惜めども春の限のけふの日の夕ぐれにさへ成にけるかな
哥の心は明也。夕ぐれにさへと云る所。切に思ふべし。物思ふ身のうへに。春さへくれゆく心をふかく思慮すべし。

九十二
一むかしこひしさに
あしべこぐたなゝしを舟いくそたび行かへるらむしる人もなみ
たなゝしを舟とはちいさき舟也。あしべこ

ぐは舟のかくれてみえぬなり。心は我思ふ人のもとへゆきてはかへり〳〵すれども。人もしらぬを。あしのなかにこぐ舟のみえぬによそへて云る也。

九十三 一むかしおとこ身はいやしくて

業平卑下也。

になき人とは

やむごとなき人なり。

すこしたのみぬべきさまにや

猶心づくしなるべきほど也。

あふな〳〵思ひはすべしなぞへなくたかきいやしきくるしかりけり

此五文字其心得がたし。たとへば源氏物がたりにおうな〳〵といふに同じ。ねんごろなる儀也。又まことになどいふ心也。なぞへなくとは平等の心なり。なぞへに物などをくはかたさがりなるを。すぐにをけば平等になるやうの事也。惣而の心はたかきもいやしきも。戀ぢのかなしみはおなじくるしさなるよしをよめる也。又なぞへなくとはなずらへなくといふ儀也。是もひとしき心也。定家之勘也。

むかしもかゝる事

今かくあればむかしもと註せり。

九十四 一むかしおとこ有けり

其おとこすまず。業平女を離別したる也。

のちにおとこありけれど

たれともなし。

ろうして

漏の心也。つゝまずもらす也。

秋の夜は春日わするゝ物なれやかすみに霧やちへまさるらん

秋の夜とは今のおとこを云り。此時秋なれば當代のおとこをいふ心也。春は過さりた

る故に。もとの男をたとへ云也。霞は春の物。霧は秋のものなれば。我より今のおとこを思ふやと恨み云也。
千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそちれ
心は今のおとこ千人をあはせても。業平一人にはおよばじと云也。先上句をかく云て。下の句の心はかくはおもへども。おとこのこゝろのいづれもたのまれぬ事をいはむとて。もみぢも花もともにこそちれと云り。又世間につゐに此理あるところをかくよめるおもしろくや。心をやすんずる儀。よく〳〵思慮すべし。
九十五
一むかし二條后につかうまつるおとこ
業平は忠仁公に家禮云々。染殿にも二條后にもつかへけるなるべし。
おもひつめたる事

此ほど又久しく思のつもりたるなるべし。
彥星に戀はまさりぬ天川へだつる關を今はやめてよ
七夕はまれのちぎりなれど。そのよになれば。かならずさはりなきを思ひて。ひこぼしに戀はまさりぬと。物ごしにてあひがたきをうらむる也。
九十六
一むかしおとこに
女身にかさ一二いできにけり。六月のころなれば。温氣の時分など。身もくるしく時節もえんならぬ心也。心下の詞にみゆ。身にかさひとつふたつといへるは。契をいひのべんの心にや。古註太不可然。
その人のもとへいなむず
業平のかたへゆかんといふ事のきこえたる也。
此女のせうと

たれともなし。
かへての初紅葉
初秋の比。折ふしありけるなるべし。
秋かけていひしながらもあらなくに木葉ふり
しくえにこそ有けれ
此哥は前の詞に秋かぜ吹たちなんときあは
んといひし。我ことのはのおもはずさもな
きをなげきて。木葉ふりしくえにこそとよ
めり。えには江と縁とをかねたり。木葉のた
まる江はあさくなるものなれば。あさきえ
んといへる也。
とかきをきてゝ
前の詞にをこせたりとあれど。そのときつ
かはしたるにはあらず。
けふまではしらず
業平のしらぬ也。行末もしらぬよし也。
あまのさかてをうちてゝ

古註に種々儀あり。不用之。一禪の御說に
は。彦火々出見尊の兄の尊に釣はりをさか
てにかへすとて。のろ〱しき詞をのたま
へるとを引たまへり。さもありぬべし。當流
のこゝろは。海人のかづきするときは。さか
さまに入とて。手にてなみをうちて入也。そ
のとわざくるしき物なるを。わか思によそ
へてうらむる儀也。詞に出して切にうらむ
るを。のろうといひなせり。是作物がたりの
作法也。此物がたりはいかにも幽玄によみ
なすべき事とぞ。しかれば物こはくいへる
事をも。やはらかにいふべき事なるべし。
むくつけき事
業平身づから思ひいふ也。ふかくうらむる
心よりかく思ふ也。
人ののろひごとはゝ
業平のいへる也。うらみの切なる故にさま

〳〵思ふ也。女の性はよはきものなれば。かゝるふかきうらみには。なびきおそるゝとやあらんと思ふ心にや。

九十七 一むかし堀川のおほいまうち君
昭宣公基經。貞觀十四年八月廿一日右大臣左大將。卌七。
四十賀九條家にて
堀川左大臣家 九條にもあるにや。又所々うつり住給けるにや。四十賀は貞觀十七年也。
中將なりけるおきな
業平は元慶元任 中將也。此賀時は未可任中將也。所詮業平の極官なれば後にかける詞也。此類おほし。
櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなるみちまがふかに
ちりかひくもれとは。かきくもれといふ心なり。老のくるみちをいとふ心也。まがふかにといふ。か文字を賀のうたによみ入たるを。俊成定家その興あるよしをいへり。是は自然のとはり也。

九十八 一むかしおほき大いまうちぎみ
忠仁公。天安元年二月十九日太政大臣。五十一。
つかふまつるおとこ
業平也。
梅のつくり枝に
おりふしつくり枝ありしにや。烏柴の心也。
我たのむ君が爲にとおる花は時しもわかぬ物にぞありける
時しもわかぬとはつくり花の 梅なれば也。またきじをたて入てよめり。忠仁公をいはふ故に。君がためにおれば。はなもときはになれるぞといふ也。今さける花をも。いはひによせてはかくいふべき也。

九十九 一むかし右近の馬場のひおりの日

一條大宮より東は左近。にしは右近。
ひをりのひ
僻案抄のごとし。五日は左近のひをり。六日は右近のひをり也。褐を引折てきる故云々。又古今集にも此事有。
たてたりける車
むかしひをりのひ。人々見物しける也。
みずもあらずみもせぬ人のこひしくばあやなくけふや詠くらさん
一二句はたゞほのかにみたる心也。惣のこゝろはかくはづかにみそめたる人わすれがたくば。あぢきなくやながめくらさむと云儀也。
しるしらぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ
しるともしらぬとも。なにかいはん。思ひこそしるべよといふ也。業平の思ふこゝろふかくば。あふ事のたよりとはなるべき心也。しるしらぬとは領掌不領掌の心也。あやなくとは。かひなき事をあぢきなくなど云る心也。
のちはたれとしりにけり
後にあひたるよし也。
百 一むかし男後涼殿のはざまをわたりければ
はざまとは御殿のあひだ也。
やむごとなき人とは
誰ともなし。
忘草をしのぶ草とやいふとて
業平の通まいる所にや。とひたる心は。業平の通しあたりをはや忘ぬらん。されどもなをしのぶよしにてしたふとぞ。いつはりてこたへむずらんといふ心なり。
忘草おふるのべとはみるらめどこはしのぶなり後もたのまん

心はそなたには我わするゝとやみたまふらん。我はこひしく思へば。此後もたのまむと云心也。忍草わすれ草は別の物なれども。又一草をもしのぶともわすれともいふと云り。この哥はその心によるにや。

まさちか

百一 むかし左兵衛督なりける

良近。貞観十三正月右中弁。十六年轉左。系圖には不分明人也。

その日はあるじまうけしけり

あるじは行平也。

あやしき藤のはな

奇異なる藤と云儀也。

花のしなひ三尺六寸なり

詞にあやしきふじのはなとかけるうへは。三尺六寸ばかりありけるなるべし。ありがたき事なれば也。

あるじのはらから

業平の事也。あるじしたまふとは。一献などの事也。

もとより哥事はしらざりければ

卑下也。

さく花の下にかくるゝ人をおほみ有しにまさる藤のかげかも

さく花のしたにかくるゝとは。忠仁公のかげをたのむ人おほき心也。ありしにまさる藤のかげとは。三尺六寸の藤なれば。大かたみし藤にまさる心也。又忠仁公の榮花の先祖にもこえたる心也。下には風の心もありぬべしとぞ。

などかくしもよむと

その座の人々のとひける也。

百二 むかしおとこ有けりうたはよまざりけれど

世中を思しりたりけり

哥よまぬとは卑下也。此詞をみるに。うたをよまむ人は世のことはりを思ひしるべき事とみゆ。哥よまん人肝要とまもるべき心也。

あてなる女の
伊勢齋宮也。

しぞくなりければ
親族也。一夜ちぎりありて。子もありしなかなれば親族と云り。あらはにははゞかりてかく書り。

そむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうき事ぞよそになるてふ
心はかならず世をそむくとて。雲風にのる事はなけれども。のがるとなれば。うき事はよそになると云儀也。心は齋宮の世をのがれ給心に。うらやむやうの心也。

齋宮の宮也
伊勢が詞也。

百三
一むかしおとこまめに
實要とは重ていへる詞也。業平の事也。

深草のみかど
仁明帝に業平つかへし也。

心あやまりやしたりけん
上詞に實要といへるによりて此詞有。

みこだちの
何のみこにてもなるべし。

ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさる哉
ねぬる夜のゆめとは。ほのかにあひみし事なり。あかぬわかれのなごりをしたひて。もしまとの夢にやみえむとうちまどろめる。わがことわざのはかなきを。いやはかなにもなりまさるかなといへる也。

さるうたのきたなげさよ
卑下也。

一百四 むかしことなる事なくて
さして世をのがるべきふしなくて。あまに
なり給よし也。
世をうみのあまとし人をみるからにめくはせ
よともたのまるゝ哉
よをうみのあまとは。世をうく思ひて。あま
になれる人の事也。めは海にある物なれば。
めくはせよと云也。目をたがひに見あはせ
て。心かよはす事也。
一百五 むかしおとこかくてはしぬべしと
白露はけなばけなゝん消ずとて玉にぬくべき
人もあらじを
きえば消よとなり。玉にぬく人もあらじと
は。露は玉にゝたる物也。玉をばつらぬきも
つ物なれば。それによそへて愛し用る人も
あらじと。業平をいひはなつ心也。つゆをな
りひらによそへて云る也。

なめしと
びんなき事也。やむごとなき人を思かくる
儀也。
一百六 むかしおとこみこだちのせうえうし給所
立田川よりまへなるべし。みこだち。誰とも
なし。
千早振神代もきかず立田川から紅に水くゞる
とは
此哥はたつた川に紅葉のちりしきて。川の
おもてもみえぬばかりなるに。水はたゞ紅
をくゞるやうにみえたる。當意即妙のさま
をほめて。神世にもかゝる事はきかずとい
へる也。神代は神通自在の世なれど。其代に
もきかぬよし也。此哥業平のうたには心詞
かけたる所なくいへる哥也。かやうのはま
れなるべし。
一百七 むかしあてなるおとこ

業平也。おとこのもとなる人とは。なりひらのいもうと也。初草の哥よみし女也。

敏行

名虎女の腹の子也。貞觀九少内記。十二年任大。

文もおさ〳〵しからず

いまだ手のよからぬ也。

とばもいひしらず

艶書など書事のうい〳〵しき也。

哥はよまざりければ

よくもよまぬなるべし。

あんをかきて

業平の妹の事をねんごろに思ふよしみえたり。初草の段の心こゝにみえ侍るべし。

つれ〴〵のながめにまさる涙川そてのみひぢてあふよしもなし

つれ〴〵のながめとは。しづかに心のうつるかたもなく。女を思ひゐたるおりふしのながめ也。うたの心は明也。

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるときかば頼まん

男ふみをこせたり

此詞又こと時の事也。敏行なり。此詞より又一段とみえたるよし。堯孝法印もいへるとぞ。

えて後の事也

女を我物にしての心也。そのゝちおとこのやるふみなり。

數〳〵に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

かず〳〵にとは。思ひもおもはずもと云詞のおこりなり。心はまことには思ひもせよ。おもはてもあれ。はやとひがたくなれば。我身をしる雨はふりまさるぞと。今ふる雨を

かくよみなせり。涙にはあらず。

しとゞにぬれて

いたうぬるゝ心也。禪閤御說。衣の身につくほどぬるゝ事也云々。

百八 一むかし女

誰ともなし。

風吹ばとはに浪こす岩なれや我衣手のかはくときなき

とはに浪こすとは常住と云心也。とはのはにごるべし。うたのこゝろは。風吹ば常になみこす岩のごとく。我袖のかはかぬよし也。

つねのことぐさに

女のつねのこと草のやうにいふをきゝて也。男は業平也。

よひごとに蛙のあまたなくたには水こそまされ雨はふらねど

よひごとにとは。たゞよごとにと云心也。かはづのあまたなく田とは。女のこゝろあだにして。おとこのおほき心也。水こそまされとは思ひのまさる心也。あめはふらねどゝは。こなたゆへの思ひにはあらぬ也。そなたの心のあだにして。おほくの人に心かよはすゆへに。思ひはまさるぞと云る也。女のうたに。我衣てのかはくときなきと。おとこをかこちてよめる所をあたりて如此よめる也。

百九 一むかしおとこともだちの人をうしなへる

業平のともだちのもとへなり。人をうしなふとは。女などにをくれたる也。

花よりも人こそあだに成にけれいづれをさきにこひんとかみし

心は花も人もあだなる物なれど。その人獨はかなくうせたるを哀て云る也。そのぬしありし時は。花をさきに戀んとも。人をさき

にこひんともやはかみし。思ひのほかの事
にもこそなどとぶらひ云心也。

百十 一むかしおとこみそかに

思あまりいでにし玉の有ならん夜ふかくみえ
ば玉むすびせよ

出にし玉のあるならむとは。夢にみえたるよしを女のいへばかく云也。夢は玉しゐのかよふなり。わが君を思玉しゐのみゆるにてぞあるらむ。その玉を君むすびとめよと云也。しらぬ玉しゐのみえたるときは。玉むすびとて。まじなふ事あるならひを思てよめる也。

百十一 一むかし男やむごとなき

誰ともなし。此女のもとに。なくなりたる人の事をとぶらふよしにて。わが思をよみあらはしたり。

いにしへはありもやしけん今ぞしるまだみぬ
人をこふる物とは

まだみぬ人をこふるはわりなき事也。いにしへはさやうの事もやありけんとは。今の世には我のみかゝるわりなき思ひをこそすれといひやれる心也。

下ひものしるしとするもとけなくにかゝるか
どはこひずぞ有べき

したひもは人にこひらるゝ時とくる物也。されば其しるしとするひもゝとけねば。そなたのいふどくは。こひしとおもはぬにてこそあれと云る也。

戀しとはさらにもいはじ下ひものとけんを人
はそれとしらなん

此返しは女のうたにいふどくには。こひしからねばこそひもはとけず侍れといふを。とかくさわがて。女の心にうちまかせて。したひもとけばこひしとしれと云る也。かく

いふ心は。我思ひ切なれば。かならずひもとけむと思ふ心ある故也。

百十二 一むかしおとこねんごろに

とさまになるとは。他人に心かはす也。

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

心はよ人になびくを。しほやくけぶりにたとへ云也。此哥又餘情ふかくやさしき哥也。

百十三 一むかしおとこやもめにてゐて

ことばづかひなどよく思ふべしとぞ。

業平を思ひすてたる女のありし時なるべし。

ながゝらぬ命のほどにわするゝはいかにみじかき心なるらん

心は明也。此哥にとりて殊勝の心あり。その故は一首のうちにながからぬといひて。又みじかきなど。長短の字をとり入たらば。いやしくなるべきを。さもきこえず。きはめて幽玄のすがたなれば。誠上手のことわざとみゆる也。かやうのこゝろをよき哥をよまん時は思ふべきにや侍らん。

百十四 一むかし仁和のみかど

業平沒後事也。仁和二年芹川行幸御狩也。定家卿奥書に此段の事みえたり。在原氏の事なれば書加たる也。伊勢が書加たる段也。仁和御門光孝天皇仁明第七御子也。芹川行幸は嵯峨天皇行幸例也。さがの山みゆきたえにし芹川の哥も。仁和二年行幸時の哥也。作者行平也。

さる事にげなく

行平此時六十九歳なれば也。

もとつきにけること

鷹飼のみちに達たる人と也。

袂にかきつけゝる

翁さび人なとがめそかり衣けふばかりとぞたづもなくなる

言はおきなさびとは老てされはみたるやうの事也。行平けふの出たちわかやかなるを云り。されば人なとがめそ。かくありがたき行幸のうれしきにより。けふばかりはかやうにいでたつよし也。たづはかりぎぬにすれる故也。

御けしきあしかりけり

此時みかど五十七歳にましますによりて也。仁和二年也。萬事時のけしきをはからひ思惟すべき事也。風雅の道のみならず。交會などに用心すべし。殊勝のをしへなり〳〵。ある註には。此哥を滋春がけふはかりとぞと吟じかへて。御氣色なをりたり。滋春高名の事なれば。此物がたり中に記すと云々。此事大不可然。定家卿も其さたなし。禪閤も御許容にあらざる說也。

百十五　一むかしみちのくにゝて

業平流罪の時の事なるべし。前の一段は業平沒後の事を書加たる。又おもしろし。

男女すみけり

夫婦なりし事也。

をきのゐて身をやくよりもかなしきは都しまべのわかれ也けり

心。此みやこじまを人のわかれてのぼるかなしみは。をきのゐて身をやくよりもまされりといふ也。これらもつくり物がたりの儀也。古今には小町が哥也。

百十六　一むかしおとこすゞろに

京に思ふ人とは女のかたへなるべし。

浪まよりみゆるこじまのはまひさし久しく成ぬ君にあひみて

はまひさしとは。たかきまさごのくづれた

るなどが。ひさしのどくなるよしとぞ。禪閤御說。はまひさしとは。とまひさしなどのごくなるべしと也。師說は眞砂の儀也。但人の所存にしたがふべし。哥の心は明也。

なに事もみなよくなりにけり

文に書たる詞なるべし。業平の身になに事もなく。くるしからぬよしをいひつかはす心也。やすく思へとの心にや。馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安などの心なるべし。

百十七 一むかしみかどすみよしに

文德天皇天安元行幸也云々。此事國史等に不記云々。但此物語に記たるうへは其分なるべし。源氏物語などにも如此儀を禪閤たて給へり。此事新古今にも撰入られたり。此物語を證據に入也。

我みても久しく成ぬすみよしのきしのひめ松いく世へぬらん

心は明也。作者は業平也。ひめ松はたゞ松と云儀也。異說ありといへども信用にたらずとぞ。とはりのつかぬや可然侍らん。

けぎやうし給て

現形也。けぎやうとよむべし。

むつましと君は白波水がきの久しき世よりいはひそめてき

むつましと君はしらずやいふ心也。猶しるべき物をと云心也。みづがきはひさしきと云枕詞なり。久世より祝そめてきとは。當社垂跡の御事也。此哥猶可受師說。

百十八 一むかしおとこわするゝ心もなしまいりこむと

業平のかたより女のかたへかく云也。業平よりかみなる人にや。

玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心のうれしげもなし

玉かづらは草のかづら也。玉はそへ字也。はふ木あまたとは。人の心のこれかれにまとはる儀也。されば我にたえぬもうれしからずと云也。絶ぬはかづらのえん字也。

百十九 一むかし女のあだなる男とは
業平事也。

形見こそ今はあだなれこれなくばわするゝ時もあらまし物を

心は明也。あたなれは仇云々。古今集にはあたをにごりてよめる也。定家卿儀也。彼卿哥に。形見こそあだの大野の萩の露うつろふいろはいふかひもなし。所詮此物語にもにごりてよむべき也。

百二十 一むかし男女のまだよへず
未嫁人事也。業平の心をかけたる女なるべし。

人のもとへ物きこえてのち
此女のと人に契事有て後に。業平のかたよりつかはす哥也。

あふみなるつくまのまつりとくせなんつれなき人のなべのかずみん

此故事は人のあまねくしることなれば。書付るにおよばず。心はわれにつれなくみゆれど。人には心かはすめれば。その人の數もみゆべしと云心也。

百二十一 一むかしおとこ梅壺より人のまかり出るとは
誰にても業平の友なるべし。

鶯の花をぬふてふかさもがなぬるめる人にきせてかへさん

花をぬふてふとは。催馬樂に。青柳をかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ。といふをとりてよめる也。梅つぼよりといふに付て云り。ぬるめるはぬるゝ也。

鶯の花をぬふてふかさはいな思ひをつけよほ

してかへさん
梅の花笠よりも心ざしをつけよといふ心なり。世中はたゞ心ざし肝要の儀也。ほしてかへさんとは。前のぬるゝといふ詞につきて云り。心はそのこゝろざしをつけば。我もそれをほうぜんと云心也。

百二十二 一むかしおとこ
山城のゐでの玉水手にむすびたのみしかひもなきよなりけり
たのみしかひもなき世なりとは。下帯の物がたりにも。約を變じたる事ありと云々。

百二十三 一むかし男深草にすみける女
誰ともなし。古註に二條后といへり。清和崩御後事云々。大なるあやまりの説也。不可用之。清和御門は業平逝去後までましませり。
年をへて住こし里をいでゝいなばいとゞ深草野とや成なん
心は業平いまはと立出ぬれど。猶女をあはれむよし也。
野とならばうづらとなりて鳴をらんかりにだにやは君がこざらん
此哥は業平あきがたになりてたちいづるを。うらむる心なくして。かりにもたちやよらむと云る心。尤あはれふかし。此かりにだにを狩といふは不用之。
めでゝゆかんと思ふ心なくなりにけり
哥は男女の中を和ぐるの理なり。

百二十四 一むかしおとこいかなりける事を
思ふ事いはでぞたゞにやみぬべき我とひとしきひとしなければ
しゐて理をつけば口惜かるべし。古註に種々説あり。當流一切不用之。儀をいはざる所。肝心の心あるべし。

百二十五 一むかしおとこわづらひて

辭世の時なるべし。

つゐに行道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを

此哥ある説に。きのふまではけふとおもはざりしをといひて。心はあまりて詞はたらざるとはりをつけ侍る如何。當流の心はうちまかせてきのふけふとはおもはざりしをと。世間のことはりをよめるときゝ侍りし。

〔以下慶長印本奥書〕

此一册可書進之由。蒙　勅定之時。子細看之。談宗祇法師。所々令添削畢。

夢菴子

右抄者肖柏老人所傳之作也。仍號之肖聞抄。依　後土御門院仰手自書進之云々。爾降世皆弄之。猶元凱注左氏也。彼翁者予祖之餘流廣弟也。今爲校讎。亦有故者乎。新刊之時作三策了。

慶長巳酉季春上浣　　也足叟素然

〔右伊勢物語肖聞抄以慶長印本校合〕

續群書類從卷第五百十五

物語部十五

伊勢物語惟清抄

伊勢物語者在原中將之所作也。或以爲伊勢之作也。世存兩說。未决可否。盖所詠中將。而所述伊勢乎。大率雖賦好色事。玩味之則有含仁者。有懷義者。有存禮者。有感時憂世者。有詠飛花落葉而觀無常者。其歸不一耳。愚見于前。肯聞于後。釋而辨之者既已詳矣。古來詞人歌士唯以情艶論之。猶如唐王建宮詞之類。是可忍乎。今茲大永二載夏五月五日。逍遙老人講此書。以簀鞍後學矣。鉅鄉高客戸履日滿。如腐儒亦齒其末席。以聞得未曾聞。厥談塵之妙。言淺而義深。理近而旨遠。至若錦其心綉其口。以含蓄不盡之意於言外。則非義精仁熟。輙難貫通。烏虖千載之下。雖曰令中將而復生。亦靡歛袵聞言而可尙矣。予雖不敏。其盈耳者書十之八九。暇日屢就老人以糾謬。所謂貧兒慕富也。吁予已耄矣。豈秉燭夜行乎。所希者末子弟讀之、而可知倭歌之爲道不下周詩也。苟有知則必曰。孔孟業平易地皆然。不亦悅乎。林鐘庚寅。金紫光祿大夫拾遺宣賢自序。

伊勢物語惟清抄上

凡書を講ずるに。先題號のこゝろを述る事さだまれる義こ。是を伊勢物語と號する事。京極黃門の奥書に見えたり。彼卿の奥書にいはく。抑伊勢物語根源。古人說不同。或曰在原中將自記云々。因玆有謙退比興之詞等。

謙退とはかたいおきなといひ。又哥の詞しらざりけんはなどいひ。卑下してかけるたぐひをいふ。比興とはいさゝか興じて誹諧のさまにいへるたぐひをいふ。賦比興の心にはあらず。

又いはく。伊勢が筆作也。

或云。生年十三。幼にして書之。

似彼家集文躰。是故號伊勢物語。

伊勢が家の集に。いづれの御時にか有けん。おほ宮す所と聞えける御つぼねに。大和におやありける人さふらひけりと書けり。此物語におぼめいてかける事。筆勢彼家集の文躰に似たりとぞ。

以此兩說案之。更難決之。心中秘密。身上興言。他人推而難注之。可謂其自書歟。

心中秘密とはみそか事をいふ。身上興言とは興じてたはぶれいへる事をいふ。

但疑万葉古風之中。多載撰集之歌。

此物語に万葉の哥代々撰集の哥をのす。

仁和聖日之間。粗記臨幸之儀。

せり川行幸の事をのす。是は業平沒してよりはるかに後の事こ。

此等事又不審。伊勢家集其端文躰偏以同之。是又見先達舊記。庶幾其躰歟。兩不知之。

先達舊記とは。伊勢が舊記の文法を後人が見て。其樣をこひねがふて此物語躰にかける歟。

加之此物語名字非彼筆者何稱伊勢乎。或說云。爲狩使下向伊勢。仍有此名。其說又難信。始則

戴南京春日之詞。
かすがの里にしるよしして。かりにいにけりとかけるをいふ。
次又注西對夜月之恩。
月やあらぬ春やむかしの哥をいふ。
富士山之雪。武藏野之煙。凡非伊勢國事。
此事はならひあり。前途をとげんにや。
多以爲此物語之肝心。仍兩説有不審。古事只仰而可信。又或説後人以狩使改爲此草子之端。爲叶伊勢物語之道理也。件本狠籍奇恠者也。伊行所爲也。不用之。
伊行は世尊寺曩祖也。　建禮門院右京大夫父之。
今師説に用は。伊勢がかくといふ儀之。古き説に伊勢の二字におとこ女といふ字訓あり。男女の物語なれば。伊勢物語と號するといへり。信用にたらず。又此物語に十卷の注有。又知顯集とて經信卿の注也といへども。いづれもひとつとしてまと有となし。此等の注をば後成恩寺皆能破してをき給へり。

むかしおとこ

昔とは大古をもいふ。近古をもいへり。又今日はあすのむかしになり。きのふはけふのむかしになる。今の事をもむかしとかくべき也。源氏にいづれの御時にかと書も。昔とをかん爲之。尙書に古者伏犧氏之王天下也とかくも。古といふを上にかうぶらしめたり。男とは業平也。むかし男と古注につゞけて。業平をむかし男といふなりといへる儀はわろし。昔とよみきりて男とよむべし。

うゐかうぶり

禪閤はうゐかうぶりは叙爵の事とあそばせり。しかれども師説にはたゞ元服の事とす。

人の出身のはじめ也。俗躰の定る所也。元服の初より終焉のゆふべまでの事を此物語にかける也。

ならの京春日のさとに

うゐかうぶりして。ならの京春日のさとに狩するとつゞけて見るはわろし。うゐかうぶりははじめのこと。かりするは其後いつにも有べし。ならの京は平城天皇もおはします也。業平は平城の御孫也。

しるよしゝてとは

業平の知行のありし也。ならの京ははやこの京へうつされて舊都になれども。いまだ業平の舊宅もあり。領知もありし程に。狩しに行てあそぶ也。

そのさとにいとなまめいたる

なまめくとは宬媚とかけり。うつくしくゆうげんなる躰也。はらから。おとゝひの事也。古註に在常が女兄弟有事をいふと也。用べからず。

このおとこかいま見てけり

かいま見とは源氏におほき詞也。日本紀より出たり。かきのひまよりのぞき見たる心也。是はのぞくとは見べからず。物ごしにほのかに見たる心なるべし。

はしたなくて

よはき物につよくあたる事などをはしたなしといふ。此古郷のあれたる處に。かゝるきやしやなる女の有は。似合ざるやうなるをいへり。

こゝちまどひにけり

はや心をかけたるをいふ。

かりぎぬのすそをきりて（おとこのきたりけるイ）

旅の事なり。又馬上の事なれば。かりぎぬのすそを切て。哥をかきてやるなり。又は心ざ

しのせつなるを見せん爲之。

しのぶずりのかりぎぬ

もとはかり装束にすり(摺)かり(狩)ぎぬ(衣)を賞して用ひし事之。

かすが野の

女をむらさきにたとへたり。是は序哥也。しのぶのみだれかぎりしられずといはんとて。春日野のわかむらさきのすり衣とはいへる也。此女をほのかに見てしより。我みだれたる心のかぎりもしられずといへり。

となん

かくよみてやると之。

をひつきて

女の方より哥の返事をやる事をいふ。追付てとはをはへてやるにはあらず。狩の事なれば。業平の行所を尋てやるをいふ之。

ついておもしろき事ともや

融公哥を其まゝ返哥に用んは。ついて面白きとおもへるか。

みちのくの

古今に河原の大臣の哥として入たり。融公の作意は。誰ゆへにみだれそめにし我にてもあらず。そなたゆへにこそみだれそめぬれといふ心之。其心を今女の返事に用ればあはず。さる程に心を用ひかへて。今の返哥にはする之。そなたにしのぶのみだれかぎりしられずといへるは。誰ゆへにてあるらん。我ならなくにとは。我ゆへにては有まじきと之。

といふ哥の心ばへなり

哥の心を用かへたるを云。禪閤ふるき哥を其まゝのせたる事。毛詩などをそのまゝ賦するに准ずべきにやとあそばせり。

いちはやき

早速之。卒に哥を書てやり。卒に返しするをいふ。

みやび

みやびをかはすなどいひて。ゆうゑんにけさうするをいふ。

河原大臣の哥之。左大臣源融。寛平七年八月薨。七十三。定家勘物之。於在中將非幾先達如何とは。業平の融公を先達として。その哥を取てよむべき人にあらずと云心之。みちのくの哥を本哥にとるにあらず。返哥と見せんための勘物之。

二 むかし男ありけりならの京ははなれ此京は人の家まださだまらざりける時

ならの京をこの京にうつさるゝ時に。先西京をひらひて後に東京をひらけり。去程に東京にはまだ人の家ゐも定まらざりし之。

世人

定家卿自筆にも古本にも世人とあり。然共御諱なれば世の人とのゝ字を入てよむ歟。又只人とよみて。世の字をすつるかなるべし。五經に國人をくにたみとよむ類なるべし。

その人かたちより心なんまさりたりける

世人にはまされりと。先容儀たひはいをほめて。かたちよりは心なんまさるといふは。世にすぐれたる人と聞えたり。

ひとりのみもあらざりけらし

主ある人なり。

まめをとこうち物かたらひて

まめは實の字之。好色は實人にては有まじけれ共。業平の自辭なればかく書之。

雨そぼふる

舊くはぶると濁れり。濁べからざるやうにおぼえたり。

おきもせず
夜はおきもせずねもせぬやうにてあかして。晝は春の物とて長雨しくらしつといへり。ながめはながむるといふ心をのづからこもれり。

三 むかし男ありけり
ひじきも。ふみなどの次でに參らするゝ。細々申入る所なれば。加樣の物をもたてまつるにや。

おもひあらば
常には此哥の心を。思ふ人だにあらば。葎の宿になりともねぬべし。引敷物には袖をしてもとよめり。其心は万葉に。玉しける家もなにせん八重むぐらしげれる宿にいもとしすまば。といふ哥の心ゝ。然といへども左樣にしては心あさき歟。此心はおもひなき身にてあらば。葎のあれたる宿に袖をかたしいてねるともたんぬなり。おもひあらば玉のうてなもかひなしといふ心也。其心は万葉に。なにせんに玉のうてなも八重むぐらはへらん宿に獨こそねめ。といふ哥の心ゝ。惣じてむぐらのやどにおもひの有やうには見べからず。

まだみかど（二條のきさきの）にもつかうまつり給はで
物語の作者が前を訓尺する也。いさゝか業平をいたはりて。たゞ人にておはします時と云り。又實にはたゞ人にておはします時なるべし。五節の舞姫たてまつるは十七歳の時ゝ。入内は其後なれば。たゞ人といへるもさも有べし。

四 むかし東の五條
東京の五條ゝ。

おほきさいの宮
染殿の后ゝ。順子を五條后と申す。染殿の后

をも五條后と申す。
にしのたいにすむ人
染殿のすみ給へる所のにしの對之。二條后この對にすみ給へり。
ほいにはあらず
あらはにはあらでといふ心之。ほに出るとはあらはるゝことをいふ。ほいにはあらずは忍てと云儀之。又本意にはあらでといへり。それも儀消すれとも。只あらはにはあらでといふ方まさるにや。
人ゆきとぶらひけり
業平の密通する之。
ほかにかくれにけり
密通をはゞかり女他所へうつる之。其在所をばしれども。行尋んよすがもなし。
なをうしとおもひつゝ
つゝといふ詞にて程ふる心あり。

こぞをこひて
去年のこの比まては。西對まて参りし物をとおもひ出せるなり。
たちて見いてみ
みはやすめ辭也。ふりみふらずみとおなじ。
あばらなるいたじき
おちあれたるやうにも有歟。又あながちさはなくとも。人のすまず主人のなき所は。あれねどもあれたるやうなる物也。業平の心に。其人のなければ。あれたるやうにおぼゆるなるべし。
月やあらぬ
業平の哥にをひても言語道斷の秀逸也。月やあらぬとは。月をとがめて。月は去年の月にてはなきか。春はむかしの春にてはなきかと。春をもとがめて。更に去年に似ざるは。なにとしたる事ぞといふ心之。下句を後

成恩寺わが身ひとつはもとの身にてありとあそばせるか。それは此哥に餘情なき也。我ももとの身にてなきかと思へるが。我身はもとの身にてあるよと。かく見べき之。師說にわが身ひとつはといふはの字をすてゝ見よといへり。俊成卿は哥の事をいへるには。彼月やあらぬ。むすぶ手のしづくににごる。此等を手本にいへり。

夜のほの〴〵とあくるに
爰に心をとめたるほど。夜のほの〴〵とあくるまで居て。いつまてこゝにあるべきとて。なく〳〵歸るなり。

五むかし男ありけりイ
東五條わたり
上にいへると同所之。

いとしのびていきけり
二條の后に密通之。

みそかなる所
隱密したる所なり。

ついぢのくづれより
つゐぢはつゐがき之。門よりもえ入ずして。あらぬ道をもとめてかよふ之。此物語の面白きといふ事。古今にてしれたり。物語の詞を其まゝ入たり。古今にはこゝをかきのくづれよりかよひけりとかけり。是又貫之が奇特なる筆之。是は物語なればわらはべのふみあけたるつゐぢのくづれよりとかける之。

あるじ
染殿の后之。

人しれぬ
哥にとなる義なけれども。よく心をつけて吟味すべし。心につよくわびていへる所有。あはれなる哥之。うちねなゝんはうちもねよかし之。

いといたうやみけり
染殿の后のあはれとおもひて。業平を憐愍の心有之。
二條の后
物語の作者の詞之。
せうとたち
二條の后のおとゝいたち也。
女のえうまじかりける
得がたき女之。二條の后の事之。
からうじてぬすみいでゝ
おもしろうして女をぬすみ出て行。
あくた川
作り物語なれば。禁中のあくたながす川など云儀にも及ばず。只あくた川といふ川にてをくべし。
草の上にをきたる露をかれはなにぞとなん
夜ふかくかゝる道など見給へる事なければ。露をなにぞとなん問給へり。
ゆくさきおほく
行路の遠をいふ也。
おにあるところ
下の詞がきに見えたり。
あばらなるくら
くらは座の字也。人もなきやうなる所なるべし。
おとこ弓やなぐゐをおひて
近衛司はゆみ矢を帯して雷鳴陣に候すれば。業平もさあるにや。
はや夜もあけなんと
人をぬすみて行には。夜を長かれとこそ思べきに。雷なり雨ふりて物すさまじき折なれば。夜もはやくあけよかしと思ふなるべし。
あなやといひけれど

女のあゝといへるこゑ也。

あしずりをして

あはれにたへたる躰之。

しら玉か

草の上にをきたる露をかれは何ぞと問ひし時。返事も申さずして。そのまゝ來りし事とおもへば。是さへ後悔なり。白玉やらんなにやらんと問れし時。露とこたへてきえてな（はてん物）し（をとやイ）といへり。古哥になにかと疑ふ字はなし。（な思）今連歌などにおほくする事之。秋風のふきあげにたてる白菊は花かあらぬかなみのよするか。如此などは尤よむべきなり。こゝも白玉かなにぞと。よくうけてよめれば。此哥には難なし。此哥を新古今哀傷の部に入たり。まとに鬼もくはざるを哀傷に見るは。誠にくいてなき物にしなして入たる事之。

二條の后のいとこ

染殿の后なり。二條の后。勘云。高子。元慶元年正爲中宮。廿六。イ

ほり川のおとゞ

昭宣公之。二條后兄。忠信猶子に成給へり。イ

太郎國經

昭宣公の兄之。下﨟とは雲客の時也。

七 京にありわびてあづまにいきける

業平の左遷の事沙汰ある事なれば。その時歟。又たゞも行ける歟。

いとゞしく

波のうちよせてはかへり〳〵するを見て。我は都にすみわびて。ゐ中もとめするに。あのなみはうら山しくもかへるよとよめり。餘情あり。當位即妙の哥之。山海所々旅懐可思惟。勅撰の詞などにもみえたり。イ

八 友とする人ひとりふたり

世にすみわぶる人なれば。なにかは友もおほかるべきや。

しなのなる
あさまのたけのけぶりのおもしろきをはじめて見るに。さてもえこらへぬよと我心に感じて。おちこち人の見とがめざらんやといへり。

九 身をえうなきものにおもひ
業平のわが身は世の用にたつべき物にもあらずとおもひくだす之。

みちしる人もなくて
業平のみならず。友とする人も道を分明にしらざる也。

三河ニ八橋といふ所にいたりぬ是より下ヒ伊勢イ云上の注セイ

水ゆく川のくもてなれば
水の縦よこにゆくをいふ。

はしをやつわたせる
八にはかぎるべからず。水ゆく川が縦横なるに。はしをあなたこなたへかけたるをいふなるべし。物の數をば八をかぎりにしていふ物なればかくなん。

かれいひくひけり
家にあれば器にもるいひを草枕旅にしあれば椎の葉にもると。有間の王子よみ給へり。

からごろも
きつゝ。つまし。はる〲。皆衣の縁之。常の哥にとりては秀句おほくしてきらふべし。是はかきつばたと折句におく程に。かくよまではかなはざるにや。大かたの旅なりともかなしかるべきに。いはんや故郷におもふ人を殘しをきぬれば。一しほにかなしきとよめり。

かれいひの上になみだおとして
かんるいをもよほす之。

ゆき〲てするがの國にいたりぬ
みかはをすぎてするがにいたる。

つたかへてはしげり

葛鷄冠木は茂と。はをてにはによむべし。葉しげりとよむは辭をとれり。五月末邊の躰之。

す行者

たれやらんと見べし。

京にその人の

よき便宜なれば。ふみをとづけたり。

するがなる

夢にもあはぬといはんために。上句をば云り。哥の心はうつゝの事はいふに及ばず。夢にもおもふ人にあはぬといへり。なりけりといひつめたるがおもしろくおぼえ侍り。

時しらぬ

山の名譽をいひたてたり。時しらぬ山はふじのねにてありけり。こなたは五月つごもり。既に六月になるに。いつとおもひてか。富士のねに雪はふるらんといへり。かのこまだらはむら／＼ふる雪也。此哥も淺間の山のごとくのたぐひなきをほめて讀る之イ

ひえの山をはたちばかり

山の高さは都のひえの山を十ばかりといへり。それにては事たらぬ程に。二十ばかりといへり。

しほじり

勘物に見えたり。「或説云。鹽尻と云物あり。其尻似此山。此物語之習。故好卑詞。寂蓮殊用此説。或本はしりしほの。先人の命雖爲鹽事凡卑也。不可用之。心得ずとてありなん。往年有尋問人。慥不知由云々。御講ィ」鹽やくにしたゝる物ありてかたまれるが。此山のなりに似たり。これをしほじりといふ。寂蓮は此説を信用すれども。定家卿は此事さらに和哥の潤色にあらず。しらぬにてをくべしとかけり。此儀哥道の一のをしへ之。殊に

絶妙なるにや。
しもつふさの國との中にいとおほきなる川あり
大なる川とかける。尤おもしろし。此川をこしては。いよ〳〵古鄉はとをくなるべしとおもへる心あり。
わたし守はや舟にのれ
はや日もくるゝに。早く舟にのれといふ。
みな人物わびしくて
友とする人も。舊里のへだゝる事を思へるならん。
しぎの大きさなる
鴫のやうにて。それよりは大なる鳥といふ心之。
名にしおはゞ
此鳥をとへば都鳥といへり。我古鄉の名にて。一しほなつかしくおもへり。名にしおふ事ならば。都の事とふべし。我思ふ人はありやなしやと。都といふ名をかこちてよめる也。
[とありければ舟こぞりて鳴にけり
かたはらの人も感涙をもよほす心之。舟中の人々也。イ]
ちゝはたゞ人に
父は此女をたゞ人にあはせんとおもへるを。母は業平にあはせんとおもへり。
ちゝはなをたゞ人
さしてもなき人をなをたゞ人といふ。俗姓なき人之。
母なん藤原
四姓の中にも藤氏はたとし。さる程に母はあてなる人にあわせんとおもへり。
このむこがねによみてをこせり
かねは器量なり。

（以下廿四字イ无）よみてとよめり。源氏物語に后がねともあり。おなじ類之。

みよし野の

たのもは田面之。かりがねも君が方へよるとなくぞといふは。そなたへ心のひくといふ心之。

（むこかねかへしイ）わがかたに

我かたによるとなくといへるは。それこそ本望なれ。その心ざしをいつかわすれんと之。

人の國にても

十一 他國にてもかく好色の事やまずといへり。

わするなよ

拾遺には橘の直幹が哥と見えたり。これには業平の哥とす。かやうに古哥又万葉の哥などをかへてかく事おほし。ほどは雲井とは。遙にへだゝるといふ儀之。我立かへりて

十二 又あはんまでわするなといへり。

人のむすめをぬすみて

殊に作り物語の段なれば。なき事をかける之。

國の守にからめられにけり

人をかどはかすとて。國のかみにからめらるゝ之。

みちくる人

滿くる人之。逍遙院御講。昭明院御講。道クル人。兩說。

むさし野は

此哥のあるよりして。此段をばかき出せり。つまとはこゝには男をつまといふ之。古今には春の部に入て。春日野とかへて眺望の哥とす。

〔うはがきにむさしあぶみと。かけておもふと云心之。むさしあぶみと云事は。もとは其國よりまいらせつけたる物をそのまゝ號す

るゝ。さぬき圓座などいへるたぐい之。京なる女。古注に四條の后と云々。淸和の御時立后の事なし。不可然と云々。イ」

十三 むさしあぶみとかきて

かけておもふといふ心也。むさしあぶみといふ事は。もとは其國より參らせつけたる物をそのまゝ號する之。さぬき圓座などいへる類之。

むさしあぶみ

さす。かくる。皆あぶみの緣なり。そなたをさすがにたのむには。とはぬも心にかゝり。とふも又心にかゝると之。

とへばいふ

とへばうるさいといふ。とはねばうらみをなす。進退きわまりたる所之。かゝる時にや人は死するものにてあるらんと之。

十四 中〳〵に

万葉 中〳〵に戀に死なずしてあらんならば。せめてかいこになりとも成たきと也。かいこははかなけれども。妹背の契りふかき物なれば也。又は命一年をすごさゞる物なれば。戀にしなずば。年をこさずして。としの内になに共なりたきと也。玉のをばかりは。ちとの程なりともといふ儀也。

哥さへぞひなびたりける

ゐ中人しきと之。

さすがにあわれとや

業平の人をすてぬ心之。

夜ふかくいてにければ

心とめんやうもなきが。夜ふかく出にけるなり。

夜もあけば

鷄がなかずばしばしもとゞまるべきに。夜ふかくないて。人をかへすほどに。夜もあけ

ば狐にくわせんといふぞ。くたかけは家鶏ゝ。只かけとばかりもよめり。万葉。十一。里中になくなるかけのよびたてゝいたくはなかぬかくれづまかも。

くりはらの

をぐろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましといふ哥を。上句をかへていへるゝ。松のごとく主もなき人ならば。都のつとにさそはん物をとゝ。

よろこぼひて

悦なり。

おもひけらしとぞ

業平の我をおもひけるとゝ。

十五 なでうことなき人

人をあなどりていふ辭ゝ。させる人にもあらざるをいふ。

あやしうさやうにて

此女を見るになびかんとも見えず也。

しのぶ山

うち見はざうさなきやうなれども聊見處あり。忍てかよふ道と云は。人の心の中へしのびてかよふ道もがなといふ心ゝ。しからば人の心のおくも見るべき物をと也。

めでたしとおもへど

あはれにおもへるなり。

えびすごゝろ

えびすはたはむかたなくつよき所あり。左様のふてたる心をもて。をしたる儀ありては。いかゞはせんと思へるゝ。せんはのはの字やすめ辭也。

十六 紀有常

名虎が子ゝ。

みよのみかど

淳和。仁明。文德。

時にあひけれど後は世かはり
　文徳第一の皇子惟喬親王をまうけ奉るは名虎が女之。この親王御位につき給ば。有常はさかへなんを。第二の皇子清和の御位につかせ給しかば。名虎かたのものは衰へぬる之。大かゞみに藤氏がさかふるほどに。紀氏はかれんとてかなしめり。
よのつねの人のごとも
　よの常の人の如くにもあらず衰る也。
あてはかなる
　風流なる事をこのむ之。世上の儀などにかけしろう事なきをいふ。愚見抄には。あてはかはあてかいはかなき事とあそばせども。あまりに訓尺したるやう之。
と人にもにず
　常にはまとしう(貧)てへつらひ(諂)。富てをごる物なるが。さもあらざる之。

よのつねのともしらず
　世務などの事をもしらずしてあり。
とこはなれて
　夫婦の常をはなるゝ之。夫婦は身の一期そふべきに。わかるゝは常はなるゝ儀之。
あねのさきたちてなりたる
　姉のさきたちて尼になりたる所へゆく。
おとこまとにむつましき事こそ
　此ほどもむつましき事はなかりし之。
友だち
　業平之。
手ををりて
　四十年あひそふたるものが(ノイ)。とこはなるゝ所の名殘を。いかにと推量あれといふ心之。
かの友だち
　業平の有常(也イ)が文を見てあはれとおもひて。しなじなのおくり物をやる。よるの物まて

といふまでの字にて。と物をもやると見えたり。

年だにも

女の上をたすけていへり。なれたる事さへ四十年にならば。今こそなにごとをもえせずとも。四十年のうちには。いくたびか君を頼て。其かげにては有つらんと。わかるゝ心さくそと云り。

是やこの

有常悦て又よみてやる。業平の夜の物までをくれるは。此世の衣裳とはおぼえず。是や眞實天の羽衣なるらんといひて。げにも業平の衣裳なれば。天の羽衣とおもふもとはりなりといへり。

よろこびにたへて

一首にては心たらぬほどに。又一首そへたり。

秋やくる

秋は物かなしく人のうれへをもよほす時え。しかれば秋の來り袖をしぼる歟。露のをきて袖をぬらす歟とれもへば。今我が悦にたへずしておつる涙にて有けりとなり。

十七 年ごろをとづれざりける

此段にむかしといふ字なし。昔おとせる歟。又年ごろにてむかしともたせたる歟。作者の心はかりがたし。

あだなりと

古今には春の部に入て戀の哥にあらず。花をばあだなるものと名にたちしが。かやうに年にまれなる人をも待ける物にて有よといへり。もと業平の女にあひたりし時。此女をあだなる人といひし事ある歟。それを今おもひ出して。我はあだにあらずといふ心をよめる也。

けふこずば
けふ我きたればこそ花とも見れ。あす來らば木のもとの雪とはみるとも。花とはみるべからず。今日女のうつろはぬ時に來ればこそ其人とはみれ。あすうつろひて後來らば。其人とはみるべからすと之。

十八
なまこゝろある女なま〳〵しきと云心之。生の字の心之。
物ずきの女なり。小町といふ一儀あれども。惣じて段々の女を。これはたれ。かれはそれといはん事。たとひたしかに知ともおぼつかなし。とに時代をへたる事を。いかんとして慥に知べきや。習處集のよみ人不知と同じといへり。よみてあれども。其集にては其まゝよみ人不知にてをくべし。

男ちかうありけり
業平その女のとなりにある也。

こゝろみんとて
業平の心をひいて見んとおもふ之。

くれなゐに女
いさゝかうつろふ所はくれなゐに見ゆれども。大かたは枝に雪のふりかゝるかとみゆると之。白は色の本にて。うつろふ事なき正色なり。白雪を業平の心の色見えぬにたとへたり。更に業平の心はこなたへうつらぬといふ心之。

しらずよみに
此哥は我心を勘弁してよむとしれども。しらぬよしにてよめり。ちとも動ぜず返事せんため之。

くれなゐ業平
紅ににほふ白菊は。おりける人の袖もかくぞあるらんとおもひやると。いさゝかも動ぜずよみてやる之。「菊に白衣佳人と云事あれば之。イ」

十九 宮づかへしける女
染殿の后の御事之。業平は忠仁公へ家禮申さる。染殿の后は當代母后にておはしませり。ごたちなりける人とは。染殿の后の召仕はるゝ女之。
あま雲の
あま雲のよそとつゞくるは。そらに（はイ）高き物なれば。よそといはん爲之。女の目には業平をいつもみれども。業平は女をそこにある物ともおもはざるをいふなり。
あまぐもの
我がよそに有て近づかぬは。そなたに風のはげしき故之。風がはやきほどに。雲のおりゐんやうもなきといふは。そなたには主があるほどに。我ちかづかんやうなきといふ心之。（此女古今に有常が女也。イ）
二十 やまとにある女
ならの京に有女にや。
宮づかひする
業平の事之。ならの京より今の京へ歸る之。
君がため
君が爲にとおもひておれる枝の。春ながらかくもみぢするは。君が心のうつろふゆゑにやと云心之。
返事は京にきつきて
返事を今や〳〵くると。（と道すからまつ心見えたりイ）道すがら待きたる心之。
いつのまに
上のかくこそ秋のもみぢしにけれといふを。そのまゝうけて。いつのまにそなたにはうつろふ色のつきけるぞ。さてはそなたには春もなくなりけるやとなん。
廿一 かしこくおもひかはして
よくおもひあへるなり。

いさゝかなる事
女の堪忍もなき性にて有歟。
出ていなば女
こゝを出ていなば。我を心かろびものと人のいひやなさん。えかんにんせぬいはれのあるを。人のしらざればといへり。
けしう
あやしく之。私云。恠の字の心なりと云々。イ
おもふかひ
加様に出ていなんとは。おもひの外の事也。誠に思ふかひなき世なりといへり。但身にはおぼえねども。我にも又あやまりやあるらん。随分年月を契ると思へども。もし不足なる事もありぞしつらん。我やあだにもちぎりしといへり。
[といひてながめをり。程をへたる心之。イ]
人はいざ業平
おもひやすらんは。おもひやするらん。おもひやせざるらんといふ心之。出ていにける女の我をおもひやするらん。おもはずやあるらん。面影にのみいとゞ見えぬると之。玉かづらは女のかくる物なれば。万葉にも玉かづら面影とつゞけてよめり。又や見んかたのゝみのゝ櫻がり花の雪ちる春のあけぼのとよめるも。又や見ん又や見ざらんといふ心之。萩の哥に又や見ん又や見ざらんと。家隆のよまれたれば。定家のかやうにはよまれまじき物をと難じたる事あり。
ねんじわびて
おとこのかへれといひやするらんとおもへども。さもなきほどに。こらへかねてよみてやる。
今はとて　私云。上詞にいさゝかなる事に出ていにしも。堪忍のなきよりて。又今おとこのかたへ哥をおくるかとするを堪忍せぬ性なり。

我出て來たるに。今はさらばさもあれとてうちをくは。忘草を生じて。我をありとだにも思はぬもの也。あはれ忘草を人の心に生せずもがなと云り。

返事　わすれ草　此段又立田山の明眼也。イ

上の哥をはたらかさずしてよめり。おもひある上にこそわすれ草をばうへれ。忘れ草をうゆるならば。我思ふといふ事をば知べしといへり。又そなたにも忘れ草をうゆるならば。こなたをわすれぬと知べしと也。

ありしよりけにいひかはして

もとよりも猶あひかたらひけり。

新古今　わするらん業平

今又かたらへども。又や我をすてゝいなんと。人の心のうたがはしさに。ありしより猶すぐれて物かなしきと也。けにとはすぐれてといふ心也。

なかぞらに女

女の我心を観じてよめる也。我心かろき事をして。さしもなき事にいでゝいにしか。さらば其まゝにてもなく。こらへかねて立歸りたるは。雲のねもなく半天にたゞよふがごとく也といへり。

をのがよゝになりければ

離別して別々の世になるをいふ。

うとくなりにけり

いもせの契りもなきをいふ。

廿三　うきながら

一たびわかれて後に。うき物にはおもひはてたれども。猶えわすれざれば。かく恨つゝ猶こひしといへり。かつはかつ〳〵にあらず。かくといふ心也。古今に。かつこえてわかれもゆくかあふ坂は人たのめなる名にこそありけれとよめるも。かくこえてなり。

さればよといひて
業平のこなたもさやうにありといふ心之。
あひ見ては
こゝろひとつを河しまといふは。又よそへもやらず心をかはす儀之。水はながれがたえぬ物なれば。其ごとくにたえまじきと之。河島は川の中に有島之。河しまはゆきめぐりてあふ物之。わかれて又あふといふ儀あれども。次なる說之。
とはいひければ
哥には行末をかけて契れども。念せずしてやがてその夜いにけり。いにけりはいきけり也。狩にいにけりもいきけり之。
いにしへ行さきのことども
後成恩寺是より一段にきり給へり。定家卿の自筆の本にも。是をあけてかけり。されどもこゝはよみつゞけて見べきにや。このかはりに依て。愚見抄よりも一段すくなく見ゆる之。
秋の夜の
秋の夜の千夜を一夜にして。それを八千夜ねたりともあくべからずと之。深切にいはん爲之。
秋の夜の
心分明之。
廿三 ゐ中わたらひ
常にはゐ中にゐずして。時々ゐ中へ下るをいふ。
つゝ井つの
つゝ井の井つゝといはん爲之。此外別義なし。文字よみばかり也。
くらべこし
髪をあぐる之。女は其年きたれば笄する之。
上と同。

女おやなく

女親の卒するえ。又は親のなきが如くなるえ。

もろともにいふかひなくて

たがひにいふかひなき躰にてあらんより。もろともによき方にゆかんとえ。大和物語に。あしからじよからんとてこそわかれけれなにかなにはのうらはすみうき。とよめる心え。

あしとおもへるけしきもなくて

嫉妬する氣色も見えざるえ。

いとようけさうして

古今をかきならしてとなり。

風ふけば

白波は盗人の事え。たつ田山に盗人の有をいふといへり。顯注密勘に注するに。たつた山といはんとて。おきつ白波とつゞけ。なみたつといはんとて。おきつ白波とつゞけ。風ふけばとをけるえ云々。盗人を白波といふは荘子より起れど。緑林白浪といへり。此哥を盗人の事と見ずして。枕詞と見たるが面白き也。定家卿も左様に見るを感ぜられたり。哥の心は風波はげしひ時に。たつた山をこえて。艱難をへて君がひとり行事よといふ心え。

はじめこそ心にくゝもつくりけれ

心にくきさまにつくりしえ。

手づからいひかひとりて

手づから取事はあるべからず。ほどらひをはからふをいふといへども。其はなを優ならず。たゞそのまゝに見べし。物語の俳諧のやうなれども。さぞ有つらん。

君があたり

いこま山は高き山え。わたのべのおほえの

きしにやどりして雲井に見ゆるいこま山かな。と能因がよめる之。
やまと人
業平之。此段をば紀有常が女の事といふは。貞女の所をあらはさん爲之。
廿四 かたゐ中にすみけり
業平の事之。
宮づかへしにとて
京へ上るなり。
みとせこざりければ
令に夫が外蕃にありて來らざるに。子あればば五年。子なければ三年にして。嫁をあらたむる事をゆるせり。さやうの心にや。
この男きたりけり
業平來る之。
此戸あけ給へと
門などたゝく歟。
あら玉の
かくす所もなくいへり。
あづさゆみ
弓を三つゝけたるは。三年の心など云はしからず。只かさね詞之。弓といへはしなゝきものをあづさゆみまゆみつき弓しなこそありけれ。と神樂の哥によめり。ひくといはんとて。弓を三ついへり。君に心ひいて年をへぬるほどに。我せしちかいをうるはしくせよと之。
あづさゆみ
そなたの心我はひくやらんひかざるやらん知らぬ。我はむかしより心君によるといふ之。
をよびのちして
をよびは小指なり。
あひおもはて

此にて死にはあらず。
廿五 あはじとも
あふまじきともいひはなたぬ之。
さすがなりける
業平を戀る心ある歟。さすがきれはなれたるやうには見えざる之。
秋の野に
秋の野も朝もさゝも露おほき物なれども。たづねいきて。あはで歸る夜の袖は。猶ぬれまさるとなり。
みるめなき
我身をとは男の身をさしていふ。我見えぬはそなたへうらみあるゆへなり。そなたの身を恨めしいとしらざるにや。かれずあしたゆきばかりなど來るぞと之。古今には小町が哥と見えたり。
廿六 五條わたりなりける女
二條の后之。
わびたりける人
染殿の后之。業平のあらぬおもひする事をふびんにおもひ給へる。其とに業平のよめる也。
おもほへず
戀路は及ばぬ事をおもふならひなれ共。染殿后のいましめ給べきを。我心をゝしはかりてあはれみ給ふを。ありがたきよろこびのなみだをながすなり。よりしのし文字はやすめ詞之。過去のしには非ず。
廿七 ぬきすを
たらひの上に竹をみすのやうにあみて。へりをさして。それを打わたして手水つかふ物之。
我ばかり
たらひの水にかげのうつりたるを。水の下

にも又ありといへり。
みなくちに
水口に蛙が一なけば。惣の蛙がなくぞ。鳴やめば又惣がなきやむぞ。水口のかはづがなけば。惣のかわづがなくやうに。我がおもひがそなたに有によりて。そなたの思ひが有ぞ。我おもひがそなたの思の初になるなり。
もろこゑ。
廿八 などてかく
あふこは逢期ぞ。それをかごによせてよめり。なにとてあふとのかたくは成つらん。さしも水もらさじとこそ契しか。かごに入たる水のあとなきごとくなれるよと也。
廿九 春宮の女御
春宮の母儀の女御ぞ。二條后の御事ぞ。
花の賀
別に无訓尺。文字讀斗也。

めしあづけられたり
業平の奉行などする事ぞ。
花にあかぬ
上には御賀の躰をよめり。底には花にあかぬとは。二條后御事ぞ。かゝる折にもまぎれぬおもひの有所をいへり。此花の賀はたが御賀といふ事しらざるぞ。
卅 あふとは
玉のをばかりはいさゝかばかりぞ。あふ事は露ばかりにて。つらき心はながしといへり。あふこととは玉のをばかり。名のたつはよし野川のたきつせのごとくぞ。
卅一 宮のうち
禁中ぞ。
よしや草葉よ
業平の盛なりとも。秋風の吹て。しほるゝ時あらん物をといふ心ぞ。

づみもなき
うけへとはのろふ心之。とがもなき人をのろはゞ。還着於本人のことはりにて。忘草はそなたの上におふべしと之。

といふをねたむ女
かくいひかはすを又ねたむ女もあり。

卅二 いにしへの
いにしへとむかしとは同事之。今などかやうによまんはよろしからず。これはむかしのしづのをだまきといひて。むかしを今といふほどに。句をへだてゝ心がかわる也。

なにともおもわずや有けん
女は何とも思はずや有けん。

卅三 此たびいきては又はこじ
業平の京へのぼらば。又は問はれまじき氣色とおもへるを。女をなぐさめて。業平のよめる之。

あしべより
万葉に。あしべよりみちくるしほのいやましに思か君がわすれかねつるとよめり。これは下句ばかりをかへたり。あしべの鹽は。上へは見えね共深き物之。上にはうすく君をおもふやうに見えてぞあらめど。底にはふかくおもふ心有と之。

こもり江に
こもり江はふるき江之。落葉もつもり。草もしげりて見えぬ江をいふ之。眞實のしたの心をば。何としてさしては知べきぞ。さりとては淺く見えたるを。あはれさして深き心を見ばやと之。

よしやあしや
子細なくよみたり。

卅四 いへばえに
詞がきを心にをひて此哥をば見べし。いは

んとすればえもいはれず。又いはねばむねにみちて。おもひがむねにさはぐやう之。去ほどに心一になげくといへり。

おもなくて

此つれなき人に。なにとよみてやるとも。なびくべきにあらずとおもへども。しいてよみてやる也。

卅五 玉のをゝ

玉のをとは命をいへども。これにはたゞ緒と云はんためなり。あはをとは合たる緒之。かた糸はむすぼるゝが。堅く合てよりたるは。引はなせども。やがてもとのごとくよれあふて。たえはつる事なし。其ごとくにたえて後も又あはんとよめり。

卅六 谷せばみ

万葉の。谷せばみ峯に生たる玉かづらたえんの心我はおもはぬ。といふ哥をすこしかへて云り。谷ひろくば。よそへははいまとはりても行べきが。せばき程に。峯までおふる之。たゆまじきといふ心をよめる之。

卅七 うしろめたくや

好色の女なれば。あふてもうしろめたくやあらんと思へり。

我ならて

夕かげまたぬとは。女のあだなるをいふ。我ならで人に契るな。夕かげまたずしてかはるやうに。あだにはありともと云り。

ふたりして

女の陳法してよめる也。そなたよりいふに及ばず。二人してたがひに契りしを。一人してはとくまじきとは。他にうつるまじきと云之。

卅八 かりいきたるに

業平有常がもとへ行けるに。有常よそへ行

てをそく歸る也。
君により
君をまつによつて。けふ初ておもひならひぬ。世の中の人はかやうなるをや戀といふらんと也。
ならはねば
我も戀といふ事をならはねば。世の人ごとになにを戀といふぞととひ來る也。
卌九 西院の御門
淳和天皇の御事也。
たかいこ
勘物にみゆ。
御はふり
はうぶりとよむべし。
いと久しうして
しばらく逗留ありて出し奉る也。
此車を女車と見て
業平の女とのる車也。
ほたるをとりて
五月の比なれば。螢を紗のふくろなどに入てもつ歟。
出ていなば
今崇子の親王を葬り奉るが。鳥部野へ出給はゞ。是が限りにてましますべし。ともしけちとは如煙盡灯滅の心也。命のきゆるをいへり。年へぬるかとは。此宮は年をへ給へる事にもあらず。わかくして世をさり給ふ事。世間の無常はかゝる物なりと。皆人のなきなげくこゑをきけと也。
いとあはれ
なくこゑをきけとよめるをうけて。誠哀になくこゑの聞ゆるよといひて。さりながら我はさらに眞實に寂滅とはおもはず。一切衆生は法界の五大をかりにむすんて來れ

り。法界の五大は消るものとは我はおもはずと之。是則非眞滅心之。

なをぞありける

なをは直之。ありのまゝすぐによめる之。定家卿自筆には猶之。是もよき之。

いたるは順がおほぢ之

是一の不審之。古き本にも註のやうにちとさげてかけり。註に見ても心得がたし。順は天暦の帝の時の人之。延喜の時分よりも有て。天暦の比の人歟。遙に後の順が事を此物語にのする事いかゞ。もし後人の書歟。いたるが系圖をいはんとて。順がおほぢとは書なるべし。

みこのほいなし

あめの下の色このみの哥にては猶ぞありける。みこのほゐなしと。上につゞけて見べきにや。其心は崇子の親王の爲にはあまりほいなし。死給へるもそれまでよとよめるは。あまりなりといへり。

四十 けしうはあらぬ

源氏にてはけしうを淸くよめり。

人の子なれば

業平をいふ。

とゞむるいきおひなし

をひやらんとするを。をしてとゞめんともせざる之。

女もいやしければ

年のわかきをいふ。鄕黨莫如齒の心之。

をひうつ

逐の字之。儒書史漢にも逐ををひうつとよめり。

血のなみだ

つよく哀きには血の涙ながしなく也。大和物語に。僧正遍昭泊瀨にて血になきし事あ

り。
出ていなば
此女を追出さば。我も又此世に跡をとゞめまじきほどに。我もわかるべければ。別はかたからずと之。さあればありしにまさりて。けふはかなしきと之。
おやあはてにあり
女のおや之。
猶おもひてこそいひしか
業平のことを思ひ申てこそよそへはやれと云之。
むかしのわか人
四十一
わかうどゝよめり。
はらから
兄弟之。
あてなる
業平之。

いやしきわざ
女は三従とて。中年にしては男にしたがひ。加様のいやしき事をもするなるべし。毛詩にも服澣濯之衣をと云り。
ろうさう
六位袍之。
むらさきの
紫をば女にたとふ。業平の女に寵のふかき時は。其ゆかりまでもわけられずあはれにおもふと之。野なる草木とは其ゆかりを云。
むさし野の心なるべし
むらさきの一もとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る。といふ哥と同心之。
四十二
にくゝはたあらざりけり
我ばかりをたのむまじきものと知ながら。にくからぬなり。
さりとていかで

うしろめたくあるとて。其まゝゆかずして
もゐられぬ也。
なをはた
うちたのむべきやうにもなき也。
出てこし
此色このみの女は。我出てこし跡より。誰人
のかよひぢとか今はなるらむと也。
四十三かやのみこ
勘物に見ゆ。榮花物語に。むかしかやのみこ
といひし人こそ。さいくはかしこかりけり
と書り。
人なまめきて
業平也。
又人きゝつけて
業平の我のみとおもひたるに。かやのみこ
の御寵愛と聞つくる也。
ほとゝぎすながなく

ながなくは汝がなく也。郭公汝がなく里が
あまた有ほどに。うとまんとおもへども。猶
思わるゝと云り。
けしきをとりて
我をうたがふかと。業平のけしきをとる也。
名のみたつ
しでの田をさは時鳥の別名也。古今に。いく
ばくの田をつくればか郭公しでの田をさを
あさな〳〵よぶ。此哥は時鳥ならで別にし
での田をさとてあるやうに聞え侍りと。禪
閤のあそばせり。此哥にて別名とは決せる
也。ほとゝぎすのなく里あまたあると名に
たつる程に。そのゆへに我はいまなくと云
り。けさは今といふ心也。
いほりおほき
よしそなたにはいほりあまたにありとも。
我にだにたへぬならば。なをたのまんとい

へり。

四十四 あがたへゆく人

ゐ中へ下る人之。有常が事なり。

うとき人にしあらざりければ

業平は有常がむこなれば。うとき人に非ずといへり。

いゑとうじ

我妻をいふ。

女のさうぞく

裳からぎぬのやうなる物之。

出て行

出て行人の爲に。衣をぬぎてやれば。我さへもなくなると之。もは喪の字之。喪の字をばわざはゐとよめり。衣裳のもなくといふをもて。禍なくといふ心をよめり。人によき事をあたふれば。我にもよき事あり。陰德陽報也。万葉に。玉きはるうちのかぎりは。たひらけく安けくあらし。ともなくもなくやあらんを。世の中のうけくつらけくとあり。もなくに。裳の字をかけり。

此哥はあるが中に

時の花に對し月にむかひて。其當躰をば誰もよむもの之。是は旅行の人に女の裝束を〔ひ[illegible]〕たすとよめば風情もなし。一大事の難題なるを。やすくおもしろくよめる之。

はらにあぢはひて

業平の沈吟してぞ案じつらんと之。

四十五 人のむすめのかしづく

いつきの女之。

かくこそおもひしかと

此女めのとがなくに。ざんげするなるべし。

なく／＼つげたり

女のおやが業平の方へ。御出有て御らんじて給はれといふ之。

つれ〳〵とこもりをりけり
業平の仁心之。一目も見ぬ物なれ共。いみにこもりをる之。
時はみな月
六月下旬の比之。よひは納涼する之。
夜ふけて
六月晦日なれば。はや秋風もをとづるゝ之。
ほたるたかくとびあがる
なにとやらん風情がおもしろき也。
行ほたる
後撰には秋の部に入たり。鴈を本にしたるにや。これは夏の哥也。
よひのほとは
暑氣甚しきやうなるが。夜ふけて身にしむ風の吹て。仲秋八月の天のやうにおぼゆるに。折節ほたるたかくとぶ之。蒹葭水暗螢知夜の躰之。とく鴈をもよをしたてよといふ心之。
くれがたき
忌にこもる躰之。上の哥は夜の哥之。是は晝の躰をよめる哥之。其事となく辭面白し。我を思ふゆへになくなると云。人の忌にこもれるが。あひそふたる事もなし。何事を名殘にせんともなきに。かなしきは其事となく物ぞかなしきなり。
四十六 うるはしき友
業平の友也。明友の交は親子よりもむつましきもの之。
人の國へいきける
任にをもむくに。一任四ヶ年や五ヶ年なり。さやうの時のと成べし。たゞ随意に人の國へ下には有べからず。
月日へてをこせたるふみ
ゐ中よりをこせたるふみ之。毛詩にも一日

不見如三秋兮といへり。

めかるればわすれぬべき

さい／＼見えしたがはねばわするゝ物之。

めかるとも

こなたはめかるともおぼえず。わするゝ時しなければ。つね／＼面影のはなるゝ事なしと之。

四十七　おほぬさの

太麻は祓の具之。あれこれの手をふるゝ物之。あれ是が引手おほき程にたのまれずと之。

おほぬさと

太麻はあれこれの手をかくる物にてはあれ共。祓してながせばよるせあり。つゐのよるせにはそなたをこそ思へといへり。

四十八　むまのはなむけ

旅へ行人に馬のはなむけせんとすれば。をそく來るを待なり。

今ぞしる

人を待事は苦しき物之。人にまたるゝといはゞ。萬事をさしおきて行べき事にてあるよと。我心に領解する之。此句法面白。

四十九　うらわかみ

常には業平の妹をけさうしてよむといへどもしからず。妹をふびんにおもひて。憐愍の心にていへる之。ねよげは草の根によせてぬる方を云り。我妹を子細なしとしれども。人の心は万差なれば。なにたる幸をもひかずしてやあらんと。心くるしくおもふ之。此心末にて見えたり。

はつ草の

めづらしきといはんとて。初草とをけり。業平のおもひもよらず詞をかくるものかな。此ほどまでうらなく底に徹して。我事を思

ふ事のありがたさよとえ。源氏のあげまきに。にほふ兵部卿の宮の一品の宮に繪見せ參らせらるゝ時。うらなく物をといひたるを。ひめ君もされてにくゝおぼさるゝといへり。

五十
うらむる人を恨て

人の方より業平を恨て。其人をうらみ返すえ。是より四五首は有まじきと共をつらねてよむえ。

鳥のこを

卵を一ツかさねんも。すべりてなりがたし。百のかいこはなにかかさねらるべきぞ。有まじき事をいふえ。世間のあぶなき事を累卵といふ。文選註に說苑を引。晋平公が時に九層の臺を作る。荀息がこれを諫めんとて。臣はよく碁子を十二かさねて。其上に卵九をかさぬる事をすると云。平公云。それはあやうき事え。荀息云。是あやうからば。公の九層の臺を作て百姓を煩す。是甚あやうき事えと云。平公領解して臺作る事を止たり。文選注には平公を靈公とし。碁子の術するといふ物を孫息としたり。こゝは故事機緣の方にはあらず。成まじき事はありとも。思はぬ人を思ふといふ事は有まじきとえ。

あさ露は

雷光朝露はあだなる物に云り。露は朝ばかりをいて。日影に消てのく物え。自然あさ露は消殘ても有ぬべし。いもせの中などは頼みはつまじきとえ。

吹風に

今年の櫻なりとも。ちらずしては有がたし。去年のさくらは何か殘る事の有べきぞ。それは殘る事有とも。人の心はたのみがたし

と也。去年の櫻といへるは。一重起していへる也。

ゆく水に

經文に。亦如畫水。隨畫隨合。

行水と

前の哥にいへる物を取集てよめり。日月のゆくは山水のごし。過るよはひ又とゞめられず。散花さゝへがたし。是等は思ふばかりの袖あつてもとめられず。いづれもまてといふ事をきかざる物之。

あだくらべ

物語の作者の詞之。

しのびありき

身を治ずして。好色をもてありくものゝしける事と云り。

五十一 うへしうへば

うへしうへばとはかさね詞之。うへをくならばと云心之。春秋はきはまる限なし。此花を植をくならば。秋のなからん事はしらず。花こそちるさかぬといふ事は有べからず。花こそちるとも。根のかるゝ事はあるまじき之。千秋万歳たるべしと云り。人の花などうへたらん時は。此心をもてよむべし。

五十二 かざりちまき

粽を糸などにてまきたるをいふ。拾遺の詞などに有事之。

あやめかり

あやめにて粽をする事はなけれども。今日はあやめを賞する日なればかく云り。先かざり粽をこせたるを謝したり。そなたはぬまにまよひ出て粽をして給はれり。我は野に出て狩をするとて雉をやる之。

五十三 あひがたき
詞がきを心におひて。此哥を見れば勢あり。細々あひあふて物語せんだにも。其殘多からんに。あひがたきにあへる心さぞと思ふべし。

いかでかは
餘情あり。

五十四 行やらぬ
たどる之。天福本にはたのむとあり。せめて夢にあはんとおもへば。夢にもあはずしてたどるほどに。たもとに露をゝく之。此たもとの露は常のあまつそらなる露にては有べからず。おもひの露こそをくらんと之。露やをくらんといふをとがめて見べし。後撰にはあまつそらなきと有。

五十五 えうまじう
つゐに我手にまはるべきやうなきを云。

おもはずば
そなたには有つる物とも思はずも有やすらめど。こなたにはこしかたのとばの。折ふしどにたのまるゝ之。

五十六 ふしておもひ
詞がき深切なり。哥はあさ〳〵として。詞書に相應せぬやうに見えたれ共深き哥之。

我袖は
わが袖はなべての露もをきあまりたるやう之。草の庵をみれば。ふかき露のやうなれ共。我袖はそれよりも猶まさりてふかき露之。いづれも干がたき露をいふ。

五十七 戀わびぬ
五文字が肝要之。年月いかさまにせんと思來れ共。何のかひもなく打過て。すぢなきとに辛苦して年月を送たり。是は我から身をもくだきつるよと。身を觀じてよめり。

五十八 こゝろつきて色このみ
物おもひに心をつくしたるなり。
宮ばら
不審。
〔長岡に伊豆内親王の宮ありし。そのほとりの宮の事にや。宮ばらとかける。宮をゝき心也。純子。万子。桂子。中野内親王。高津内親王など也。ィ〕
ともなき女
宮づかへの女ども之。
田からむとて
業平のすむところをも見。又いひよらんとていへる詞之。此段誹諧のやうに書なせり。
すきものゝしわざや
業平の家居の興あつてすみなせるを云。
あれにけり
業平のかくれたる程に。あるじのなき心にて。おさへてあれにけりといふ。あるじもなく人もなきは。いくよの宿にてかあるらん。住けん人のをとづれもせぬよと云り。
むぐらおひて
前にあれにけりといふ哥をうけていへる之。鬼とは女をいふ。むぐらおひてあれたる宿のうれはしきを。女どものあつまるが。更に本望にもあらずとよめり。女を鬼といふは。あだちのはらのくろづかに鬼こもれりといふはまとか。とよめるも女のと也。
ほひろはん
前に田からんといひし程に。又こゝにもほひろはんと云。
うちわびて
そちにをちぼひろふと云。我も同道せん物をと。悉皆誹諧也。
五十九 京をいかゞおもひけん

前にも京やすみうかりけんとありし也。

すみわびぬ

義はあらは之。後撰には爪木こるべき宿もとめてんとあり。俊成卿の。すみわびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜半の月かな。今はとてつま木こるべき宿の松ちよをば君と猶いのるかな。二をとれり。

おもてに水そゝぎ

冷水灑面の心之。絶入する物には。面に水をそゝげば蘇生する也。

我うへに

水をそゝがれていき出て。是は世のつねの露にはあらじ。天河のとわたる舟のかいのしづくにてぞ有らむと之。

いきいでたりける

絶入して哥よむ事かたかるべきにや。造次顚沛其道をわすれぬ所の奇特なるもの之。

六十 宮づかへいそがしく

朝家奉公の身にして。家に入事なきを云。

こゝろもまめならざりける

業平の家をかへりみる事なき之。

まめに思はんといふ人に

ひとりずみのやうにあらんよりは。よく思はん人あれば。それにつけなど。媒のいへるについて。人の國へいにけり。

此おとこうさのつかひにて

業平の宇佐の使にたてる之。上古は宇佐へはしげく使たてり。何時も朝家に事のあれば。使をたて給ひて尋申されて。其神勅によりて定られし之。然るを孝謙天皇恵美押勝道鏡法師が事などに亂りなる事ましませば。向後返答申すまじきとて。其よりして神勅は止りし之。されども猶朝家に重事の有時は。宇佐へ使をたてらるゝ。又代のはじめ

にも使たてり。こゝは代の始の事か。又たゞの時の事か。

ある國の

道すがらの國なるべし。中國たるべし。

しそうの官人

しそうは祗承也。職掌の官の下に。しそうの官いくたりもあり。まかなひなどをする者之。宇佐の使に限らず。齋宮などにもあり。

女あるじに

もとの家童子がしかと見んために。酌をとらせよといへり。

かはらけとりて出したり

宇佐の使の祗承の官人なれば。異儀に及ばざるにや。

さ月まつ

さ月まつといへるとて。卯月とは心得べからず。橘はかならず五月にさく物なれば。花橘といはむとて。さ月まつとをけり。もとしりたる人にいはんとて。むかしの人の袖の香と云り。

あまになりて

よからぬものゝいひなしに依て。為中に居ておちぶれたる事を面目なしとおもふにや。

六十一
つくしまていきたりける

是もうさの使の事か。

これはいろこのむ

業平を見て。あれこそ色このみのすき物よといふ詞之。

そめ川

つくしにそめ川といふ川有。そめ川をわたりて來たるほどの人が。色にならぬは有べからずと云り。色このみといふを。さやうになくてはと云之。

名にしおはゞ
色このみといふを。さはなしと業平の陳ぜば。又別にもいふべきに。色好なりとうけこえるほどに。をさへてよめる之。そなたから好色とうつて出していはゞ。させる好色にてはあるべからず。たはれしまをよそから見れば。なみのかくるが。白絹のやうにみゆれども。近く見ればさもなし。そなたに色このみと名にしおはゞ。そらごとなるべし。たはれしまの白絹のやうなどいへるが。さもなきがごとくなるべしと也。

六十二 をとづれざりける女
業平のかたへをとづれざる之。

こゝろかしこくや
媒のよさまに物をいふによそへゆく之。

いにしへの
我身はをとろへて。むかしの匂はいづくへか行らん。花などをこきちらしたるやうになると覺る之。

これやこの
我にあふ事をのがれて年月をふる程に。おもひなをさんかとおもへども。おもひなをす事もなき之。我を思ふ事のまさるかとおもへ共。さもなしと之。女をあてゝいふやうに見る儀は。業平の性にあらず。

六十三 世ごゝろつける
世界へ心おほきやうなる儀之。

まとならぬ夢
見ぬ夢を見たりといふ事之。

けしきいとよし
歡然たり。

こと人は
三郎なる子の心之。我母をよ人にあはせんも思はしからず。在五中將にあはせたきと

思へり。
狩しありきける
業平のかり之。
もゝとせに
あながちに九十九といふ儀にあらず。つよく年の老たるといはん爲之。つくもがみとは。髮をみじかくして。藻などのごとくなるを云。
いてたつけしき
業平のさらばいかんと出たつけしきを此女の見て。むばらからたちにかゝるをもいはず。家ににげ歸る。
男をんなのせしやうに
女の所へ行て。女のせしやうにかいま見したり。
さむしろに

けぢめ見せず
業平の性をかけり。人は好惡が別なる物なるに。なりひらはけぢめ見せぬ人なりと云り。
六十四 ふく風に
風はいづくにもすきひまあれば吹入るもの之。我身をふく風になさば。ひまもとめて入て見ん物をと云り。
とりとめぬ
隙もとめつゝ入べきと云をさへて云り。風は手には更にとられぬ物之。取とめぬ風なりとも。玉すだれの隙をこなたがゆるして。もとめさせんにこそ入べけれと云り。
六十五 おほやけおぼして
御門の御寵愛ありて召仕る女之。
色ゆるされたり
禁色をゆるさるゝ之。

大みやすん所
染殿の后ゝ。
在原なりける男
業平ゝ。
女かたゆるされたり
業平は好色の方ゆるされたりと。舊からよめるが。此はわかい上達部の中に。女のある簾中に召入て仕ふ事などゆるさるゝ事を云ゝ。
女いとかたわなる
我身のために然べからず。又はそなたの爲もいかゞと。諫していへるゝ。
思には
分明ゝ。
ざうしにおり給へれば
つぼねより出るゝ。
れいのこの
業平ゝ。
なにのよき事と思て
女のさとへ行てそよき事よと。業平のおもへるゝ。
とのもづかさ
此儀をもと事外に勞していかゞみんと云り。后の里は長良卿ゝ。そこには主殿司は有まじきなどいへり。こゝはやすく心得られたる所ゝ。むかしは宿侍とて。藏人頭以下雲客はみな殿上に宿直するゝ。殿上に夜は幕をたれて。臺盤を取のけてうへふしするゝ。晝は幕をまきあぐるゝ。この時業平の殿上にある躰をして。女のさとへゆいて。あくる日とく歸るゝ。主殿司のみるに。沓を奥へなげ入て。夜はこれにつめたるかほして居ゝ。かやうに見れば。なにの造作もなきにや。
戀せじと

古今には不逢戀に入たり。
くらにこめて
ぬりごめなどの內にをくㇾ。しほるとは。責勘するをいふ。
あまのかる
我からとねをなひて。世をば恨むまじきと也。哥よまん者は此哥を心に持べき事なり。唯人は我からとおもふ心あれば。恨みを人にはかけぬ物ㇾ。
さりともと
業平の我にもしやあふとぞおもひてするらん。我身は此哥に有にもあらぬ躰なる物をと云り。
いたづらに
古今にあり。人丸哥ㇾ。
水尾
勘物にみゆ。

六十六
津の國にしる所
業平の知行なり。
あにおとゝ
業平兄弟五人有。行平。守平。仲平。大江音人ㇾ。
なにはづを
けさは今朝にあらず。今こそといふ心ㇾ。舟のなぎさにかゝるも有。海士のれうするも有。行も有。歸るもあり。たゞはかなく浮もあり。是を見てよめるㇾ。
六十七
せうえうしに
前段の次ㇾ。
きさらぎばかり
二月餘寒の時分ㇾ。
きのふけふ
折ふしもこそあれ。昨日今日雲のいこま山をかくすは。此雪のおもしろく木ずゑに見

ゆるは花のごとくなるを。此花のはやしをおしみて立かくすかと云り。狂雲妬佳月の心之。

六十八 いづみの國へ

是も前段のつゞき之。

すみよしの郡

只すみよしのはまを行とばかりには。餘情有まじきに。すみよしの郡住吉の里すみよしのはまとおもしろくかけり。京極黄門。けふぞみる春の海べの名なりけり住吉のさとすみよしのはまとよみ給へり。住吉郡は今はなし。上古のなをかへたる事多ほどに。此物語の時分までは有ぞするらん。

かりなきて

住吉に鴈なき。すみよしに花さくをよむにはあらず。世間の秋の景氣を云り。世に鴈なきて菊のはなさく秋はあれども。今春の海べにすみよしのはまは。なをまさりたりといふ心之。

みな人によます

感概をおこして。是に及も有まじければ。贈答申さんに非ずとて。みな人々哥をよまざる之。

六十九 かりの使

此段事題號の時述たり。伊勢物語と云題號に合せん爲に。此段を端にあめる本有。これは伊行が所爲之。用ひざる說之。狩のつかひとは。昔は諸國へ狩をさせん爲に。勅使をたてらるゝ事。國史にのせたり。業平は今伊勢尾張の兩國の狩の勅使に行之。異朝にも巡狩とて。自身國々をめぐりてかりするは。其國の治否を見んため之。此國も一任三年にて。吏務をもしつべき器にたへたるものに國をもたしむるに。當任のものなにと國を

治るぞ。又民もしたがうかを見せん爲に。狩の使としてつかはさるゝ事なるべし。

齋宮なりける人のおや

齋宮は怡子内親王之。惟高親王と一腹也。其齋〔宮歟〕のおやは紀靜子之。されども此れやをば染殿后と見べし。齋宮繼母之。繼母なれども齋宮を實子のやうにし給へり。

ねんごろにいたわりけり

京よりいへるとて。別して心をそへられたり。

われてあはんと

われても末にあはんとぞおもふと。崇德院御製たり。わりなくあはんといふ心之。

女もはたあはじともおもへらず

おさなき時より齋宮にて。夫婦のかたらひをも知給はねば。あふまじき事ともおもひ給はざる之。

女のねやちかく

ねやもちかくと。もの字有もあり。なきも有。

月のれぼろなるに

狩の使は大略春二三月之。古注五月四日と有歟しからず。

また何事もかたらはて

たしかにあひ奉るとかゝず。されどもあひ申事はありぞしつらん。

君やこし

君やこし我やゆきけんの二句のみ之。そなたがこちへくるか。我そなたへ行かと。此二句を下句にていひのべたり。

かきくらす

君やこし我や行けんといへる事。我もなにともおぼえず。夢かうつゝか。今夜あふて定めよと云り。古今には世人さだめよとあり。

よ所に定めよといふ心也。此にも兩說を付たれども。こよひは猶まされるなるべし。
國のかみ
　國の守にて齋宮の守を兼たる人也。
夜一よ酒のみ
　饗應する也。
もはら
　專一にあひ奉らんとする事もえせざる也。
おはりの國
　伊勢の狩はてゝ尾張へ行也。
ちのなみだ
　懇切の所をいはんとて。血の淚とかけり。
かち人
　上句ばかり書たり。心は淺き緣といはん爲也。一夜あひ見たるを云。是等を連歌の起りにするにや。
つい松
　たい松也。續松と書也。松を相ついてともす程につい松といふ。其きゑ墨にてかく也。
又あふ坂の
　又あひ奉る事のあらんと云心也。
七十
かりの使より
　前と同時の事也。尾張へ行て又伊勢へ歸る時也。
大淀のわたり
　伊勢と尾張の道也。
みるめかる
　齋宮を今一度見奉らん事を。我にをしへよと云心也。わたの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまの釣舟。と小野篁が配所へをもむく時よめり。物を問事も。そこに熟したるものに問ずしては知がたし。みるめかる方を問んならばあま也。春日野のとぶ火の野もり出て見よ今いくかありて若菜

つみてん。若菜はいつもえんぞと問はんならば。野守が案内者たるべきゑ。

七十一 内の御使

同狩の時の事歟。又いつにても只御使の時歟。

千早振

神のいかきはこえん事にあらね共。越て成共業平を見たきといへり。垣を越るは法度をそむく心ゑ。法度を越ても見たきと云心ゑ。

戀しくば

こひしくばこなたへ來ても見よかし。神のいさむる道にもあらずとゑ。天の浮橋にて女神男神となりしより。神の制する道に非ずとゑ。

七十二 大よどの

大淀の浦に松の有を。其本に浪のよせかへり〳〵するは。恨みあるやうなれども。さらに松はつらくもなしと云は。業平の我をいみじく恨みらるれども。我に恨みん事はなしと云心ゑ。

七十三 目には見て

月の桂を女にたとへて云り。

七十四 いはねふみ

千山万水をへだつれども。心のかよふ道あればあふ事あり。我中には山川をへだてざれども。あはずして戀わたるゑ。

七十五 伊勢の國

我身をひきゐていきてあらんとゑ。

大淀の

みるからにといはんとて。大淀のはまにおふてふとは云り。心はなぎぬとは。心はなぐさみぬゑ。かたらはざれども。見るばかりにても。心はなぐさむと云り。

袖ぬれて
序哥之。みるをあふにしてやまんとするか。
我心はみたるばかりにてやまずと之。
岩まより
みるは岩間より生る物也。みるはみどりにて不變物之。心だに不變にあらたむる事なくば。たれかあはざらん。人の心は變じかはるともよからんと之。みちひる鹽ののどけからぬをと。源氏にも云り。
なみだにぞ
我袖はしほのみちひにはぬれず。そなたのつらき心が袖のしづくとなりてしぼると也。
世にあふ事
面白趣向之。
七十六
春宮のみやすん所
東宮の母儀をいふ。

氏神
大原野の社は。閑院冬嗣公の初て我氏の神春日を勸請申されたり。藤氏の后宮は必行啓あり。五條后順子始て行啓也。
近衛づかさ
業平此時はまだ羽林にては有べからず。後に極官を書か。作物語なれば何共書べし。
大原や
たけの有優なる哥也。東宮のみやすん所行啓ある程に。天照大神と春日明神との契りたまひし。相殿の昔をおもひ出すらんと也。底には二條后のたゞ人の御時參り通せし事を。思しめし出ずやと云心之。神代とはもとの心也。久といはんため之。風の哥などは是等ぞ本なるべき。上ははたとして。底に心をつけて見れば。心の深き所有之。江次第にも東宮行啓の所にのせたり。名譽にや。

七十七 むかし田村みかど
文徳天皇を申奉る。
安祥寺
人々さゝげ物
寶物とて。御願の時。宮々公卿殿上人の參らするもの之。或はうち枝につけ。或は木の枝に付たり。
山もさらに堂のまへに
おもしろくかけり。動ぜぬ山が俄にうごき出たるやう之。
右の馬のかみ
業平之。
目はたかひなから
目將かいをつくりながら也。後成恩寺目は違ながらと見給へり。山のうごき出たるやうに見えたりと云は。業平の目はたがひながら之。

山のみな
山もけふ別をかなしむなるべしと之。
よくもあらざりけり
是等業平の自記と見えたり。今見ればよくもあらず。其時はよかりしやらん。人のあはれがりけりと之。
七十八 山科の禪師
人康親王之。勘物に見ゆ。
よるのおまし
出てたばかり給ふ
三條のおほみゆき
清和天皇の西三條の百花亭へ行幸有し事之。此行幸のために。紀伊國の千里の濱の石を取よするに。行幸以後到來するほどに。人の局の前にすてをかれし之。
きゝしよりは見まされり
物は聞しよりは見をとりする物なるが。此

石は聞しよりは見まされりとぞ。
右の馬のかみ
　業平ぞ。
あかねども
　是にて滿足する事はなけれ共。我心を岩にかへて見せ奉るとぞ。
七十九 氏の中に
　在原氏の中に親王の生れ給ふぞ。行平の女の腹に貞數親王の生れ給ふを申ぞ。貞數親王は業平の甥にあたり給へり。
御おほぢかた
　貞數親王の御おほぢは行平ぞ。行平方なる男とは業平ぞ。
我かどに
　千尋の竹は仙家に有。竹は空虛にして廉潔ぞ。仙家の竹の千尋有やうに。久しくあらんと云心也。夏冬は嚴寒炎熱にして人の苦痛なる時ぞ。夏の炎天にも冬の極寒にも。此陰にかくれば。愁なくして千秋萬歳ならんと云心ぞ。
八十 むかしをとろへたる家
ぬれつゝぞ
　雨をばぬれつゝといひ。藤をばしゐて折つるといひて。雨をも藤をもいはざるは。詞がきに讓ればぞ。やよひつごもりを。春はけふのみとよみては曲なし。春はいくかもあらじといへる尤面白し。
八十一 左のおほいまうちぎみ
　勘物に見ゆ。
賀茂川のほとり
　かも川は末まであるほどに。六條にてもかも川のほとりと云り。
うつろひさかりなる
　紅などの移ろふ。又さかりなるもありと云

り。
ちくさ
うすくこき之。
かたいおきな
かたくなゝる翁之。業平の自稱也。
いたじきの下に
天福本にはだいしきの下とあり。武田所持の定家の自筆の本に。こゝをすりていたじきとなをせり。然ば舊はだいしきとありし歟。舞臺などのやうなる物をいふ歟。こゝにいたじきの下といふは。親王上達部の下にありと云心之。末座に有儀之。
しほがまに
こゝを端的のしほがまにしなして。我はいつ此しほがまの浦にはきぬらん。つりする舟もこゝによらんとよめり。しほがまに似たるなどよまざる所尤面白し。山谷が惠崇が畫夾ニ題する詩に。惠崇烟雨蘆鴈坐。我瀟湘洞庭欲喚。扁舟歸去故人道。是丹靑と作れるに同きにや。古今に。みちのくはいづくはあれど鹽がまの浦こぐ舟のつなてかなしも。

八十二　これたかのみこ
勘物に見ゆ。小野にましますによて。後に小野宮と申す。みなせといふ所に宮有。別業をかまへたり。
右の馬のかみ
業平之。
其人の名わすれにけり
其右馬頭の名をさへわすれたりといふ。業平の賤官をかくすにや。
大和うた
世の中に
春になれば花はいつかはさかんと待心有。

はやさきぬれば。そゞろにあこがれて。いづくの花にもと思へり。やゝうつろへば。風雨に心をいたましむ。是皆櫻のあるゆへ之。櫻のたへてなくば。春の心は長閑ならんと云り。

又人の哥

有常が哥也。

ちればこそ

めでたけれは愛したけれと云心之。ちるをこそ櫻の上にはとに賞翫すべけれ。浮世は皆盛者必衰のことはり之。其理を見するは花に有と云心之。

みこに右馬のかみおほみきまいる

業平の酌をとる之。

かりくらし

こゝのぬしは七夕つめにてあれば。日もくるゝ程に。七夕つめに宿をからむと云り。

返しえし給はず

當座に倉卒に返哥をえし給はぬにや。又沈酔し給へる故にや。

一とせに

七夕はひこぼしにこそ宿をかせ。たゞの人にはかさず。そのひこぼし待つる所なれば。人に宿かす事は有まじきと云り。

あかなくに

これはみこの今ちとおはしませかしと云心をよめり。山のはにげては誹諧のやうなれ共。此時に臨てはおもしろし。今などよみては宜かるべからず。

をしなべて

山のはにげてをあひしらひてよめり。こゝには惟喬親王一首もあそばさゞれ共。哥は古今にも見えたり。さくら花ちらばちらなんちらずとて故郷人のきても見なくに。白

雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそありけれ。是みな彼御詠之。

八十三 宮に歸り給ふ

京の宮に歸り給ふ之。

枕とて

今夜は草枕を引むすぶ事をもすべからず。秋の夜こそ長けれ。今は彌生晦日之。春宵一尅買千金なれば。ねずして明さんと云り。今宵の夜は秋の夜とたのまれずと云り。未到曉鐘猶是春と唐人も春をおしみ侍之。

御ぐしおろし給ふ

勘物に見ゆ。

小野にまうでたるに

小野はをはら之。こゝに閑居してまします所へ參る之。

みむろ

をこなひし給ふ室之。弘法の南都にある時。をこなひ給ふ所を御室と云。寛平法皇の仁和寺にまします所をも御室と申て。今に號し奉る。

古の事など思ひ出

もと水無瀬へ常に參りしが。今は山居して雪中にまします事よと。數々おもひつゞけたるなるべし。堯孝法印は此段をよみては必落涙せしと之。片岡近江守が堯孝をなかせんとては。わざと此だんをよむと云り。

わすれては

忘れては夢かと思て。更にうつゝとはおぼへず。加様に閑居幽閒の御すまゐを。雪ふみ分て見奉らんとはおもはざりしと之。

八十四 母なん宮なりける

伊豆内親王の御事之。

子は京に宮づかへ

業平は朝家に奉公之。

ひとつ子

業平は兄弟五人之。行平。守平。仲平。大江音人之。阿保親王の御子はおほけれども。伊豆内親王の御爲には。業平は一子之。

とみの事

とみは急事なり。

老ぬれば

さらぬ別は無常のならひ之。一たび寂滅はなくては叶はざれ共。老ぬればとにたのまれぬ程に。いよ〳〵見まくほしと云り。

世の中に

我身一ッの上はかけずして。世間へかけて云之。世に生死のなくもあれかし。一切衆生の子たる者の爲によからんと云り。此内に

八十五 わらはより

我も即こもれり。

惟喬のわかくましします時より。業平の仕へ申さるゝ之。惟喬に業平はさばかりまされり。

ぞくなるぜんじなる

ぞくは俗人之。ぜんじは法師之。惟喬の御ぐしおろし給ふ時。御供して法師になる者にや。

ことだつ

正月なれば引つくろふ之。

おもへども

思へどもとはつよく思ふ心之。思へども思へどもと云心あり。源氏に思へども猶あかざりし夕顔を露わすれ給はずと云り。こゝに此まゝも有たきと思へども。京に宮づかへする程に。身を分るならひなければ。暇を申さんとおもふに。雪のふりて。京へかへさじと留るは。眞實こゝに有たきと思ふ心のする事と云り。

八十六 今までに
そなたには忘れぞするらん。我は聊も忘れずと也。

八十七 あしのやの
つげのをぐしもさゝずは。いやしき者はつげのをぐし取あげて。髮などいふことなきをいふ之。

とよみけるそこの里をよみける
今の古哥によめるは。あしやの里をよめると之。よみけるぞと句をきらずして。よみけると切て。そこの里とよむべしと也。

ながさ二十丈ひろさ五丈
孫綽が天台山の賦に。カ樣なる見所を筆のとゞこほりなくかけり。今こゝの書やうも。あり／＼として妙なる物之。

わらうだ
圓座之。

わが世をば
あながち命のけふかあすかと云にはあらず。業平の爲中わたらひして。人數にもなくおちぶれたる躰は。今日か明日かと待やうなりと云り。待かひは待間之。涙と瀧とはいづれがたかきぞと云り。涙のたきとつゞけてよむを。心の内に句を切て。涙のと切て。たきとよむべき也。

あるじ
業平之。

ぬきみだる
此瀧の水精などを緒につらぬけるを。其緒をといてみだすやうに落る之。左樣にぬき乱る人こそあるらんと之。下句はちと卑下せり。間斷もなくちるは。我袖のせばきには過分也と也。

この哥にめでゝやみにけり

是に上こす哥は有べからず。ふしぎの瓦礫はいかゞとてやみけり。

もちよし

なにたる者やらん。系圖に見えざる程に知られず。景など見すまして。家作て居たるものにぞ有らん。

やどりのかたを見やれば

あしやのなだのかたを見やれば也。

はるゝ夜の

晴天の星か。又川邊の螢か。我住かたの海士のたく火かと云。

わたつ海の

わたつうみは只海の異名に云事もあり。又海神の事に云事も有之。いはふは愛するやうなる心之。海神のかざしにして秘藏する藻なれ共。今日都のまれ人にはおしまざると之。折しもこそあれ。今此藻を吹よせけるは。君に參らせんためなりといふ心之。

あまれりやたらずや

物には有餘不足あるが。此哥はいかんと之。

八十八 これかれ友だち

中年にかゝり。中年に過たる友だち之。

大かたは

大かたと云は。十の物七つ八つと云心也。人は物に著し貪する故に。月日の行をもしらず。空く殘生を送る也。然れば月にもめでじとは云り。

八十九 人しれず

及なき思ゆへに戀死なば。なにたる神のたゝりにて死たるぞと。神になき名をやおせんと也。

九十 つれなき人

なびきがたき人也。

櫻花

花は今こそかく匂へども。あすをば知らず。明日逢んと云るも。たのみ難しと也。
心ばへも有べし
心にはちとたのめども。たのみがたきと思ふ心もあるべし。
九十一 月日のゆく
月日のゆくをば歎くべき事成を。人生はそう〳〵としてすごせり。此男は物をもい有て。いつか其人にあふと思によつて。月日のゆくをさへなげく也。
九十二 あしべゆく
たなゝし小舟は小き舟也。小船をあしべの中にこぎ入たるは。よそよりはみへず。我が思ふ人のもとへ行てはかへり〳〵すれども。人のしらざるは。たなゝし小舟を芦の中へこぎ入て。人の知らぬが如しと也。
九十三 二なき人
一なる人也。
すこしたのみぬべき
一向されはなれざるやう也。
あふな〳〵
天福本あふな〳〵と聲をさせり。たとひ定家自筆の本たりといふとも。聲をば後人のさすことも有べければ。必聲を信じがたし。まづ此はあふな〳〵とよみ來れる之。念比なる心なり。なぞへなくはなぞらへなくと云義之。懇に思はすべし。戀路はたかきいやしきになぞらへなくくるしきと之。
九十四 すまずなりけり
業平の女を離別する也。天福本には女の字なし。
後に男ありけれど
他人に嫁すれども。子ある中なれば。時々云ひかよはす也。

ろうして
禪閤抄に嘲弄の弄とみたまへり。あざけりてよみてやると也。又はうちあらはしてよむゝ。漏の字の心なり。

秋の夜は
秋をば今の男にたとへ。春をばもとの男にたとふ。秋の夜は春の日をば忘るゝゝ。當季に心のうつる故ゝ。霞は春の物。霧は秋のものゝ。霞には霧やまさるらんと云は。我よりも今の男やまされると云心ゝ。

千々の秋
秋を千合たり共。一の春には及ぶべからず。我は業平をこそ思へ。今の男をばおもはずと云て。され共男の心はいづれもたのみがたき事。花や紅葉の共にちるがごとしと也。

九十五 おもひつめたる事
日來のつもれるおもひ也。

ひこぼしに
七夕は年にまれなる契りなれ共。其夜をたがへず必あへり。我はものごしへだてゝ。直にあふ事なければ。ひこぼしよりは戀はまさりてかなしき也。

九十六 岩木にしあらねば
人非木石。必有情。

身にかさも一つ二つ
六月の濕氣の折ふし艶にもなし。秋に成あはんと云。

其人のもとへいなんず
業平のもとへゆかんとするなど云口舌ゝ。

かえでのはつもみぢ
紅葉せん時分に非ず。されど早く色付も有物なればさも有にや。

秋かけて
秋風吹立なん時にあはんといへるが。さも

なきを云。木の葉ふりしくえとは。あさくなる江也。縁によせてよめり。
かしこより人をこせば
上にをこせたりとあれども。其時やるにはあらず。やらんとて書付て置て。使あらばやれと云てをく。それを今をこせたり。
けふまでしらず
よきさまやらん。あしきさまやらん。又何たる所に有やらん。行末もしらず。
あまのさかてを打てなんのろひをる
後成恩寺抄に。地神第四代彦火火出見尊の兄の火闌降命の釣針を失給ひて。海中へ行て取て歸り給ふ時。海神のをしへにさまざまのろ〳〵しき事を云つゞけて。此釣針をうしろ手になげ返し給へとありしを。其をしへのごとく出見尊のし給ふ。是よりして人をのろうとて。手をうしろへやりてたゝく事有。其事をあまのさかてをうつと云と註し給へり。さも有ぬべし。師說に海士のかづきしに海底へ入時。さかさまになりて入とて。手にて波を打てゆくえ。いきをもえせず苦敷事なり。業平のおもひの切なる事。あまのさかてうちて千尋の底に入やうに苦を云也。のろひをるとは。其人を切に怨を云え。
むくつけき
業平の我のろひ事を我とむくつけき事といへるえ。女はよはき所ある物なれば。おぢてかへりあふ事やあらんとおもひて云るえ。此物語は狂言又いやしき事などをいへども。詞花言葉を翫といへれば。うちのべてよみて。そこに心をつくべからず。但人の好む所にしたがふべき歟。
九十七 堀河のおほいまうちぎみ

勘物に見ゆ。

四十賀

堀河の大臣の家九條に有。四十賀は貞觀十七年之。

中將

此時業平未中將に任ぜず。後に極官を書けるなるべし。

さくら花

いづくもかきくもりて見えぬやうにあれ。今老の來るべき道のまよふやうにとよめり。かにといふかの字。今日の御賀の賀を自然にもたせてよめり。俊成卿定家卿も自然により來れるが面白と評せられし之。

九十八 おほきおほいまうちぎみ

忠仁公之。

つかうまつる男

業平之。忠仁公に家禮之。

我たのむ

作枝をよめり。今なが月は梅のあるべきにあらざれば。時しもわかぬと云り。ときしもと雉をかくし題によめり。古今にはよみ人不知の哥にて。前太政大臣忠仁公とす。忠仁公の詠草などに有を見て勘入てをく歟。

九十九 右近の馬場のひをりの日

ひをりの事。和哥の一つの難義とて。秘する樣にいへども。又秘すべき事にもあらざる歟。毎年五月にあらてつがひとて。左右近衞が二たび馬にのりて弓いる事之。三日は左近のあらてつがひ。四日は右近のあらてつがひ。五日は左右〔衍字〕近のま手つがひ。六日は右近のま手つがひ也。是をひをりの日と云は。ま手つがひの時。とねりども褐をひきおりてきるほどに。ひをりと云之。あらてつがひ同躰なれども。それはそとの儀式ばかりな

ればまてつがひをひをりと云。賀茂のあしそろへはそとして。競馬はしきじやうを用がとし。後成恩寺。左右近の馬場におとゞやとて。近衞中少將の着座する所有。業平おとゞやにつきて。女のかほの車の下すだれよりはづれたるを見けるにや。但それは程遠くてよくも見ゆべからず。又哥をよみかはさん事もいかゞとおぼゆるうへ。大和物語には。その日中將見物に出たるよし見えたりとあそばせり。

見ずもあらず

はづかに見たるばかりなれども。其人を忘れがたくば。あやなくけふやながめくらさんと也。

しるしらぬ

知ともしらぬともいふ事なし。戀路はたゞ思のみこそしるべなれと云。大和物語には

此返哥別の哥也。されども此哥が本なれば。古今には是を入る也。

後にはたれとしりにけり

後にあひたるなり。

百後涼殿

清涼殿のうしろにあたれば。後涼殿と號す。清涼殿とよむが後涼殿とよみ付たり。はざまは御殿のあはひ也。

忘れ草を忍ぶ草とやいふ

わすれ草忍ぶ草一ッなり。そなたには忘れたれども。忍ぶとやこたへんと云心なり。

わすれ草

そなたには忘れ草おふるとやみるらん。こなたにはいつも忍び申せば。後も猶たのまんと也。

百一行平

業平の兄なり。

まさちか
勘物に見ゆ。良近。藤氏系圖に見えず。實錄などにのるか。卿位にのぼらぬ程に見えず。弁官補任などに有べき歟。
花のしなひ
藤の咲たれたるやうなるを云。催馬樂に青柳のしなひを見ればとあり。柳糸をもしなひと云り。
あるじのはらからなる
業平なり。
あるじしたまふ
行平の饗應ときくえ。此等の詞業平の自記と聞えたり。
さく花の
忠仁公の榮花の一家一門に及をよめり。
百二 世中を思ひしりたり
是をもて知ぬ。哥をよまんひとは有爲無常をしり。世のことはりをも勘弁して。敎誨の端ともなり。天下の治をもいたすべき事之。古今の序に。いきとしいける物。いづれか哥をよまざりけるとかけり。人倫としては禮法道理を知ざるべけんや。
しぞく
親族之。次に齋宮と其人をあらはせり。もとあひたてまつれる中なれば親族といへり。一夜の契に依て子をうみ給へり。師尚とて高階氏になれる是之。今に高階氏の參宮せざると云此儀也。
そむくとて
尼になりて世をそむくとて。雲風に乘て世を外にする事はなけれども。さすが俗中にある樣にはなし。世のうき事はよそに成行と云り。
百三 まめにじちようにて

まめに實要とは。同じ事をかさねて云る也。
深草の御門
　仁明天皇を申奉る。
心あやまりや
　前に實要といふ程に。心あやまりやと云り。
ねぬる夜の
　ねぬる夜の夢とは。一たびほのかにあひて
し事をいふ。ほのかにあひみし夢をはかな
みて。今まことの夢にやみんとまどろめば。
いやはかなきとのまさると也。
きたなげさよ
百四　謙退の辭也。
となるとなくて
　子細はなく尼になる也。
世をうみの
　尼を海士によせてよめり。めをば海士がか
るものなればめくはせよと云り。世をうし
とて尼になれる人ときく程に。めくはせし
て。心をあはせよとたのむと也。
見さしてかへり給
　はづかしく思て。見さして歸り給ふ也。
百五　しら露は
　しら露はきえばきえん共まゝ也。露は玉の
やうに見ゆるが。其玉をつらぬく物も有ま
じきぞと也。
なめしとおもひけれど
　及なき人を業平のおもひかけて。なをこれ
をすてえぬはびんなけれども。心ざしはい
やましになると云り。如此見よといへども。
只是は白露はけなばけなゝんといへるは。
存外には思へども。心ざしはいやましにな
ると見べきなり。
百六　ちはやふる
　當位即妙の哥也。たつた川に紅葉のちりし

けるを浪の所々くゞるは。神代にもかゝる
とはきかずと之。神代には神變ふしぎはあ
れども。それもかゝる事はきかずと云り。首
尾相應。言語同斷。
百七 あてなる男
業平之。
その男のもとなりける人
業平の妹之。はつ草の返哥せし人之。業平の
ねよげに見ゆると云哥よみて。妹をけさう
したると云儀は。さなきと云は此段にて見
えたる事之。
とし行
勘物に見ゆ。哥よみ之。後撰巻頭の作者也。
一切經かきし人之。
ふみもおさ／＼しからず
ふみなどかく事に長ぜざる也。
哥はよまざりければ

前になどめづらしきとの葉ぞの哥よめり。
一向よまざるに非ず。
案をかきて
敏行は哥よみなれば。おかしきさまなる哥
よませて。見をとさせじとて。案をかけるな
るべし。
つれ／＼の
しづかに紛るゝかたもなく。此女をおもふ
折節の涙川は。袖のみひぢてあふよしもな
しと云り。
あさみこそ
淺みなればこそ袖はぬるゝらん。それを頼
まん事に非ずと之。これら、返哥の本と云
り。源氏物語に贈答の本と云。袖ぬるゝ戀路
とかつは知ながらおりたつたごのみづから
ぞうき。淺みにや人はおりたつ我方は身も
そぼつまでふかき戀ぢを。

男ふみをこせたり
ちと心得ざるか。是は此女を我がものにして後の事也。こゝは又一段に見べきと堯孝も申と也。
かず〳〵に
誠におもひもせよ。思はずもあればや。問がたきといふ。そなたの心は見えたれば。我身をしる雨はふりまさると也。とひがたみ。問がたくなると云心也。雨ふらずばきぬべし。ふらばこじと云を云る也。
しとゞにぬれて
ひた〳〵となる程にぬるゝ也。
百八 風ふけば
とはとはとことはにと云心也。とはのはの字。にごりてよむ也。風ふけばとはに波こす岩のごとく。風のふかぬまもなく。浪のたゝぬおりもなく。常住風波にぬるゝ我袖也と云り。
きゝおひける
業平の我身の上にきゝをひける也。
よゐどに
よゐごとにとはよゐのまの事に非ず。夜ごとにといふ心也。夜な〳〵に蛙が雨をねがふてなく田には。雨はふらねども。水はまさるやうにおぼゆる也。蛙のきざしよりして水のまさるやうに。業平の思のきざしよりして。そなたの衣手のかはく時なきぞと也。又の義には。此女の心おほくして。あまたの男をかよはす程に。それによりてそなたの衣手のかはく時なき也。水こそまされとは。そなたのおもひのまさると云心也。雨はふらねどは。こなたゆへの思ひに非ずと云儀也。
百九 友だち

業平の友だちゑ。女にをくれたる歟。

花よりも

花はあだなる物なるが。花よりも人は猶あだになりたり。〔肖云。その人のありし時は。〔一〕花を前に戀んとも。人をさきにてひんとも見ざりしが。思の外なる事よと云り。

百十 おもひあまり

夢はこなたのたましゐのかよふによりて見ゆるなり。そなたを戀しくおもふによつて。我魂ぞゆきつらん。夜ふかく見えば。其魂をむすびとゞめよとゑ。人の魂などを見ては。たまむすびとてまじなふ事の有をいふ。

百十一 やんごとなき女

人のなくなりたるを。とぶらふよしにて。哥をやるゑ。

いにしへは

むかしはありしとやらんなき事やらん知ず。まだ見ぬ人をこふるといふ事はためしなし。我ぞはじめにてあらんとゑ。

したひもの

人に戀らるゝ時は。下ひもがひとりとくるといへるが。我したひもは今までとけたる事なし。そなたのかごとは戀もせず。そらごとにてあらんとゑ。

こひしとは

女の返しに。こひしからねばぞ下ひもはとけぬと云るほどに。さらばこなたよりこひしとも申べからず。我思ひは深切なる程に。かならずそなたの下帯はとくべし。其時こふるといふ事をしれとゑ。

百十二 ことさまに

すまのあまの

哥に取ては上品ゑ。古來稱美したる哥ゑ。よ所へなびく事をけぶりにたとへてよめり。

百十三 やもめにて
女にすてらるゝ時歟。
ながゝらぬ
長からぬといひて。下に短といふに對せり。今よまば見にくかるべき歟。此哥はさもなく優にみゆる之。

百十四 仁和御門
定家之奥書に。仁和聖日之間と書し事之。芹河の行幸は。業平卒して七ヶ年後の事之。業平一期の事をかくには。此事をのせん事にあらずと云儀有。是等が作り物語之。伊勢が七條后へ業平の身上の事語り奉るをしるせし物語也。然者此事も在原氏の事にて。業平兄弟の儀なれば。其よせあるによつて書加たる之。芹川の行幸は嵯峨天皇行幸か始之。後撰に。嵯峨の山みゆきたえにし芹川の千代のふるみちあとは有けり。今此行幸は光孝天皇之。
さる事にげなく
行平六十九歳の時なれば。鷹飼似合ぬ事之。
もとづきにける
鷹飼の方堪能にしてしつけたるを云。今日行幸には功者を賞せらるゝにや。
すりかりぎぬ
後撰のとがきに。鶴のかたを縫て書付けると有。
おきなさび
おきなさびは只翁なれ共。是は老のされば うたると云心あるべし。行平の今日の出立をわかくするを云り。今日は一代一度の邂逅の行幸なれば。加様に出立を人なとがめそ。今日計こそたかゝひをもすべけれと之。
御けしきあしかりけり
御門御氣にかけらるゝ之。行平が我六十に

餘り。七十に及事をよめれども。此時の御門五十七歳にておはしませば。けふばかりとぞたづもなくといへるを。不吉におぼしめす之。我身の上の述懐をよむとも。向の氣にあたる事などをば斟酌すべき事之。一切の事に此心つかひ有べき事也。

百十二 おきのゐて

古今には物の名の部に。すみけしの哥に。小野小町が哥也。業平に別申は。火を身にすへてやくよりもかなしきと之。

百十六 波まより

序哥之。久しく成ぬ君にあひ見てといはんとて。上句をば云り。されども浪路へだつるほどに其緣もあり。はまひさしは。愚見抄には濱にある家をいふべし。とまひさし。板ひさしなどいふがごとし。定家卿庭上冬菊と云題にて。霜をかぬ南の海のはまひさし久しく殘る秋の白菊。此哥は濱の家の心ならねば。題の庭の文字落題になる之と云々。師說には。高き砂の下の打かけたるが。ひさしのごとくなるを。はまひさしといふと也。

なにごともみな

業平の身に何事もなくよくなる。心安くおもへと言傳之。馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安の心之。

百十七 すみよしに行幸

文德天皇天安元年行幸といへども。國史にも實錄にも見えず。新古今に此詞書の如く。住吉に行幸ありし時とのせたれども。いづれの御門の行幸とは見えず。又國史にもしるしおとすとにや。

我見ても

姬松はちいさき松といへども。只松と云心之。姬に心なし。

おほん神
住吉はうしほにつれてあらはれ給へる神にて他に異なり。異國退治の時擁護の神之。住吉に勸請ははるかに後の事之。和哥の道をも子細あつて守り給へる也。

けぎやう
現形之。

百十八 久しくをともせで
業平の女の方へ久しく音信もせずと之。

玉かづら
たまかづらは女にたとふ。後撰には老懸を玉かづらと云と見えたり。これは草のかづら之。玉は物をほむるにそへる字之。草のかづらは木ひとつにはまとはらずして。あちこちへ取ついて。あまたにゆいて一ッにとどまる事なし。去程に我にたえずして。参りこんと云も。うれしからずと也。

百十九 かた見こそ
あだは仇之。もとは此物語にては仇とよみ。古今にてはあだとにごりてよむといへるが。あながちさは有まじきか。定家卿の。かた見こそあだの大野の萩の露うつろふ色はいふかひもなしとよめり。此哥を仇とよみたれば。女の簾中よりあらおそろしやと云といへり。是も詞がきが女のあだなるとあれば。濁てよむべきにや。

百廿 世へず
男のはだをふれぬとおもふものが。人にあふと云事を聞て。業平のいへる之。

近江なる
あまねく人の知事なれば。述に及ばずとなん。

百廿一 梅つぼより
鶯の

催馬樂に。青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠。と云を取てよめり。梅つぼより出るを見て。鶯の花をぬふてふ笠もがなとよめる。尤似合たり。

うぐひすの

鶯の花をぬふてふ笠はほしからず。そなたの心ざしのふかきをつけて給はれ。さあらば其心指を我も報ぜんと之。後撰に。雨ふれどふらねどぬるゝ我袖のかゝる思ひにかはかぬやなぞ。是もおもひにて袖をほす心之。

百廿二 ちぎれる事をあやまれる

契りをく事のちがへる之。

山しろの

一儀には井手左大臣の境地面白きによつて。井手に新造有て。山ぶきを植などして。此水を愛せり。我一期の後にも。我をおもひ出さば。此水へ來て見よ。影をうつして見せんなど云り。後に行て見れども。其影の見ゆる事もなし。さやうの事を思出てよむと云り。又井手の下帶の事。大和物語に。大神の使に下るものが。おさなくうつくしい者を見て。帶をとひてとらせて。其者の帶をばこちへ取て歸れり。其後その行末もとをらぬと。只一口かいて。末を書さして。井のもとに女のあるがかたるとかいたり。惣じて井手の物語ありと云ども未みざるとゝ之。

百廿三 年をへて

年比へてすみこし所をばはなれていなば。いとゞ深草の野とやならんと之。すてゝ後の女の事をもさすが思へるにぞ。

野とならば

野とならば鶉となりてなくべし。かりそめにも立よらぬ事はよもあらじと之。狩の字にみるはわるし。只かりそめの心也。應有春

魂化爲燕。年々飛入未央棲と云るごとし。

百廿四 いかなる事

なに事をおもひけるにや。古註に色々の儀を云。或眞言の大事など云は。悉ちがふべし。すでに詞がきにいかなる事をとかけり。其をば何として知べきにや。一切の事知音にあらざればあらはさぬもの也。業平の存生するに。問と云とも云べからず。然るを後におしはかりて。何事をおもふなどいへるは。さやうこつといふべきか。伯牙絶琴。此事を引たまへり。略之。 慈鎮和尚の。おもふ事など問人のなかるらんあふげば空に月ぞさやけきとよめるも。此哥よりしてよめり。

百廿五 つゐにゆく

昨日までは今日とはおもはざりしと云儀は大にきたなし。たゞきのふけふとはおもはざりしと見るべし。是則一切衆生の辭世也。かくとはしれども。其きはにならてはおどろかさる也。大和物語には。中將此哥をよみてなんさて果にけるとかけり。此物語も業平の始終をあぐるほどに。元服の始より獲麟の夕までにしてかきとゞめたり。古今伊勢物語とかゝれたり。業平は元慶四年庚子五月廿八日。五十六歳にして卒す。自然に當月正忌にあたれり。

右加一見。老懶僻案之臆說。不漏一事。截而抄之。恰如破竹如瀉水。却雖有恥。來者儻同志者須潤色之。名曰惟淸抄。不可出窓外而已。

大永壬午曆重陽前一日

槐陰曆苾芻堯空誌八十六歲

〔右伊勢物語惟清抄以内閣記錄課藏本校合〕

續群書類從卷第五百十六

物語部十六

源氏物語千鳥抄

昔四辻儀同三司光源氏物語講讀の席をひらかれて。（後小松）至德三年の秋より（後小松）嘉慶二年の冬にいたるまで。五十四帖の秘義を述させ給しに。亞相之末座につらなりて。一日といへどもをこたる事なかりき。後に又おぼつかなきふしぐをたづね奉りて。しるしをける草子二帖あり。名付て千鳥といふ。卅餘年身をはなたずして。九十一歳の齢にをよべり。まぼろしの世のはかなきを見つくして。夢浮橋かゝるうき身をのこせり。一度ひらきみては懷古の涙を數行の字にそゝぎ。二度思めぐらしては妄報にをそる。今是を匠作尊閣の席下に奉りをきて。世をかさねたる覆廕の高恩に酬たてまつる。縱老の波此世中にたちわたるとも。濱千鳥の跡後にとゞまらば。又なにはのうらみをか此道にのこさんや。

源氏物語聞書（至德三年七月廿八日）

桐壺

一いづれの御時にか　と云は延喜御時を云之。

一更衣の事　承和皇より始たる事之。
一更衣四位。命婦五位。女藏人六位。
一あつしく　よはくなやみたる躰之。靈運。當遷と云之。又廷の字一をあつしくとよむ之。煩。同。ほとをる共。
一あひなう　無愛之。
一めづらし　と云る起は。神功皇后新羅征伐の時。今度の軍に可勝ば。魚此釣に付てあがれとて。御裳のすそを解て釣の糸にして松浦河に入らるゝ。やがて鮎くひ付てあがるとき。めづらしと仰らるゝによつて。元は此河をめづらし河と書ける也。めづらしと云詞。此時により始云々。珍。愛共。
一まうのぼり給　參のぼる之。参昇と書之。
一すほう　修法之。延喜廿四年傳敎弘法入唐の間。於紫宸殿圓澄法師五佛灌頂の法を修畢。御修行之初之。
一ゆきかふ　交加と書之。行歸之。往通共。
一よろしき　諸事中品の事を云也。宜の字。
一をたぎ　愛宕と書。宕。音タウ。人の死たる昔は皆陵始之。珍皇寺。寺號也。
一おもたゝしき　面立しき之。只面目らしき之。
一よこさまなる樣にては　橫死の樣にてと云之。
一さう〴〵しく　寂莫と書。閑をもよむ之。
一すが〴〵ともまいらせ給はず　清字之。さはやかとよむ間。さは〴〵とやがてもまいらせ給はぬといふ義之。
一とのゐか（三聲）　夜行戌より子の時までは左近司の役之。丑より卯時までは右近司の役之。宿直と書。
一よるのおとゞ　淸涼殿之。

一かいとぼし　掻灯と書。終夜火をけたずとぼす也。神璽守護のため也。
一ひたぶる　聊(イサヽカ)(カン)(敢歟)死と書。一切とも書。又永の字をもよむ。又頓の字をもよむ。只一へんと云心也。一向共。偏共。二ッなき心也。
一めでたし　可感と書。妙共。
一くはざ　冠者也。小宮仕衆也。
一みさほ　操と書。心操。心ばせとよむ。みさほたる(つ脱歟)とは情識を立たる也。
一すげなう　無人望と云。
一靫負命婦　左衛門佐など也。
一媼嬪(クワンクワ)(ヤモメ)　六十已上にして無妻を媼(鰥歟)といふ。五十已下にして無夫を嬪(寡歟)といふ。
一こどく　孤獨。六十已上にして無子を獨と云。十六已下にして無父を孤と云。
一いはけなき　稚と書。をさなき也。
一すりしき　修理職。

一あさがれい　朝飯と書。あしたの供御也。餉共。
一大床子のおもの　ひるの御膳也。
一そこら　幾等と書。多き義也。
一さゝめく　私語と書。万葉には耳。
一御をば　祖母也。
一めどう　女童。
一なまめく　㝡媚(イトナマメク)と書。
一鴻臚館　鴻の聲は遠く聞え。臚は傳る心也。異國の申言を此館にて聞て可奏之間如此名付也。
一ざえかしこき　才覚也。又俊の字をも讀。是は本書の義也。
一凡俗　ぼんぞく。日本紀にたゞうどゝ讀。但人とも。
一藤壺を飛香　梨壺を昭陽舎　已上貴女の候する所也。

一桐壺を淑景舎　梅壺を凝花舎　已上下﨟女房の候する所之。
一雷鳴壺　襲芳舎　已上貴女の候する所之。
一うけばりて　承諾之。
一あかぬ事なし　不足の事なしと之。
一こよなう　無此世之。閑雅とも書。うるせき義共云。只事外之。無越共。
一なめし　輕字也。又無禮共。なめげ同事。
一らうたく　いとをしき事之。良書。
一にげなう　似氣無と書。
一きびは　稚の字。をさなき之。
一うつくしき　万には愛常と書。
一なづさふ　馴押と書。呢(ムツマシ)共。
一そひぶし　遊仙崛には横陳と書。元服の夜はそひぶし女まいる事之。
一かもする　釀の字之。かうじや米をかひさせて酒に作之。應神天皇より始る之。

一あせたる　色のかはり損する之。又庭家池などの時は荒たる儀之。
一人の家には必三徑有べし　門。井。東司。此三の道之。荒哉(スサメルカナ)三徑の菊。陶淵明が言之。
一籠物　こもの。菓子等之。
一とんじき　屯食と書。つゝみ飯と云物。下﨟にたぶ飯之。包飯をいふ。
一致仕大臣　官を辭て後。尚其職に仕るを致仕といふ之。
一二なう　無二之。一池の心と云々。二なうしなしてと有。
一うしろめたく　影護書之。かげのごくまぼるとよむ之。

箒木

一すきヾ　數寄事之。
一まめだち給　穀色(シンショク)と書。遊仙崛にあり。

一なよび　麗字之。やはらかなる躰之。なよびか。なよらか。なよびやか。何も同事之。

一かたの丶少將　一說。業平。一には英明人の名。物語にも有作者の名之。

一なが雨　三日降を霖雨と云之。十日降をついりといふ。兩共になが雨之。

一おさ／＼　日本紀幹了と書。粗共。凡共云心之。長々とも。

一かたはなる　頑字之。かたほとも。

一をのがじゝ　各競書。各自身共。

一そこ　足下と書。ちと人をさげしむる心之。足下。懦盜。秦始皇本紀に有之。

一もんざうのしやう　文章。式部下官也。

一おひさき　小大するとゑ。女のをさなき事を云。生先。老前共。

一かたかど　片才と書。日本紀などにも才覺之。

一おほどか　穩字之。おほどき共。

一くちとく　口利書。

一けわひ　形勢と書之。

一位みじかく　位のいやしき之。

一なほ人　諸大夫之。

一たづき　便之。又緣字之。

一かゝづらひ　かけとろふ之。懸絆と書。

一おはさうず　御座書。おはします之。

一けしうはあらぬといふは　げすしくはあらぬと之。又恠の心も有べし。

一ひさんぎ　非參議と書。前官事之。何の官にても。

一かはらかなり　さはやかと之。淸字之。

一はぶらかさす　不放埒之。放埒共。

一にぎはう　縎〔[illegible]〕字也。にぎやかにと讀。

一ふいに　不意之。

一せうと　男の兄弟何をもいふ之。

一まつはす　なつくる心之。綣字之。
一なよゝかなる　なへ〳〵としたる事之。
一御ほかげ　側影と書。日本紀火影共書。ほのか。
一あふさきるさ　あちするもこちするもたらはぬといふ之。
一適　あるじと讀。毛詩に書之。適。
一ことが中に　異中と云也。
一びさうなき　無美相之。
一涙さしぐみ　なみだぐむ之。
一おほやけはらたゝしき　公事に腹立也。
一まいて　ましてゝ之。
一あはつかに　淡。あは〳〵しき之。少人交甘如醴。君子交淡如水。醴こさけ。酒之。
一こめきて　ふるめきて之。古字之。莊子にいへり。
一ねぢけがましき　佞人の事之。
一ゆへよし　故由之。
一うみづら　海濱。海面共。
一ふるごたち　古後達と書。古女之。女は夫の後にある間後達と云之。
一ひそむ　ヒソム嚬シンソク戚。眉を顰。
一ひたすら　太と書之。
一うなつく　領狀。漢書。又顏許。淮南子諾之。うなつく。
一心やまし　心勞之。
一ひゞらきゐたり　鵯字之。
一ひゝちゐたり　輕粧居たり。かろ〳〵しくゐたる之。ひゞらきゐたりといふ同事之。
一さればみたる　宿。宿老。日本紀。ゆがみかたぶきたる躰之。曲斜。同。
一すぐよか　健字之。
一心しらひ　只心仕之。心知共。
一まほ　眞帆。まとしき心之。

一いひそし　云斂と書。いひころす之。
一せうそこ　消息之。いんしん。消息と書てありさまとよむ。白氏文集。
一よきふし　吉折節之。
一ひたやごもり　眞隱書。只こもりにこもる事をいふ。
一つなひきて　妬領に云。嫉妬の女男の足に綱を付て外へ遣。或時此綱を引時羊に付て來。女仰天して占とき。博士云。あまりに嫉妬ふかきによりて。夫は失て羊來れりと云時愁歎す。其時博士向後嫉妬の心をやめば可來之由申時。様々誓言する時。夫來て。此謂云々。
一くすしからん　わづらはしき事之。
一とばかり　しばし之。少程之。
一ねたます　ねたましがらする之。
一えんにあへかなる　艶字之。よは〳〵しき躰之。あへかはあだなる心之。弱字之。
一いまさりとも七とせあまりが程に　と云は。檪梓七年といふ事學にあり。强て七年を限事なし。雨木は異木よりもはやくさかたつ物なる間其喩に云之。此故に七年あまりには思しらんと云之。
一しれもの　只わろきもの之。化者と書。惡者とも。
一さすらふ　流離。日本紀。伶俜。經に書之。
一くさわひ　種字之。
一ほうげづきて　佛法氣付て之。
一くつしからん　くす〳〵しきと云事之。世俗にくせ〳〵しき云同事之。
一二の道　貧福之。
一むくつけき　蠢字之。きたなくおそろしき心也。
一なかとみ　中神。長神。兩様之。天一神の

方塞の方之。さす神ともいふ。
一中河　京極川。二條より上を云之。御堂殿と法成寺との間なる故に。中河とつけらるゝ也。所詮二條以北を云之。
一なめげにや　無禮之。
一きちざう天女　びしやもんの妹之。
一おまし　御座。又は席。蘇席。花布べり。以上如此書之。
一中河にゐ中家だつ柴墻さかなもとむ　肴求之。有催馬樂。
一むつかる　勘當。令に書之。
一ほゝゆがみ　方曲と書。
一まうと　眞人書。性共。
一ふい　不意と書。心ならず之。
一なみ〳〵の人　次々と書。
一とうて給　取出給之。
一そゝきあげ　そゝめきあげたる之。

一あて人　妙人書。富貴人。
一みくしげ殿　御匣殿。裝束する所之。
一めいぼく　面目之。
一ふようなるさま　不用之。
一さばれとおぼせど　さらばさてあれと云心之。さはあれと之。
一すゞろ　無端書。座共。
一つゝしりうたふ　呪書。呪謠之。
一ものけ給　物承之。
一しもや　雜舍之。前にある事之。

空蟬

一かゝづらひ　懸綺書。
一めざまし草　目さめたる躰之。目覺種と書。
一うれたふ　うれへたき之。愁字之。
一たばかる　將許と書。
一ついせうせず　只禮をもせずと之。追從

と書。
一こきあやの一重がさね　こきとは紅の事之。濃字之。
一ふたあひ　二藍之。むらさきのこき色之。紅と藍との色之。
一ばうそく　傍側。あらはなる事之。
一そゞろかなる　するとなる之。尖と書。たけ高き事之。
一さがりば　かみのさがり所之。下場と書。
一さうとけば　早速と書。
一ねびれて　ねほけたる躰之。
一かひま見　日本紀。覗其私屏。万ニ垣間見と書。
一あかるゝけはひ　別之。氣色之。
一こたびは　今度と書。
一うちみじろく　身動。
一あへか　よはき躰之。弱字之。ひはつなる事。
一なを〳〵しく　よき程の事之。
一おもと　侍者と書。近習人躰之。
一うつせみ　ひだり右の寄合之。
一ざれたる心にも　なれたる心之。

夕顔

一めのと　乳母。天竺より始之。鵝羽ふさあはせずのみことを他人の乳をもつて養給。是日本のめのとの始之。
一ゆもかみ　物をして養事之。湯女と書。
一はじとみ　半蔀之。
一さきの聲　さきをふ事之。前驅。
一やうめいの介　國の介之。揚名介と書。
一きりかけだつ物　たてしとみ之。〔ハカ脱歟〕しとみやと云之。夕貝ははせたるおりけ垣などの事之。
一白扇のこがしたる　薫の香にしめたる

之。

一かたほ　頑之。

一つきじろふ　めくばせする之。突尺と書。

一くだ〳〵(と歟)しき　細研(碎歟)と書。

一おほしきて　穩字之。

一おろち　小蛇と書。

一世づかず　世になれぬ之。

一えんだち　艶立と書。

一ごぼ〳〵となるかみ　雷なる音之。渾々と書。

一されたる竹　屈竹之。ゆがみたる竹之。

一こちたし　眵字之。はれがましき心之。

一ゆくりなく　思やりもなく之。不意の間。卒爾とも書。

一けいめいし　驚たる義之。又朝をきしたるをもいふ。

一しもけいし　下家司。

一まかなひ　饗之。

一おき中川　河のみほ(と脫歟)の事之。

一のら　藪と書。原も野等とも。

一べちなうの方　別家之。小寢殿之。

一しとゞになりて　しほ〳〵とぬれたる心之。汐。しとゞ。

一なたいめん　侍臣亥時之。名對面。

一みつわくみて　罔象と書。鬟組同上。支離とも。老かゞまりたる躰之。一說。いざなぎのみことと水神をうめるに。老嫗の形之。これを罔象といふ之。

一かごやかに　かご〳〵とかこひたる之。圍字之。

一さゝやかにて　狹々やか也。

一かりの御ぞ　かりぎぬ之。短裳。かりぎぬとよむ。

一ふくいとくろうして　ふくらかに色黑之。右近の事云へり。

一ぬさ　袚麻。道祖神に手向をするなり。餞道の席をば祖神と云之。道祖神の起。黄帝の子遊子と云人諸國を遊行して。死後道祖神になる之。仍旅行の人を守之。

若紫

一わらはやみ　痁と書。ぎやへいの事之。瘧。

一きた山　万ニ向南山と書。

一なにがし寺　鞍馬寺之。

一しゝこらかし　爲發と書。仕損共。しそびらかしたる事之。

一おいかゞまり　老死と書。樂府ニあり。

一さるべきふん作りてすかせたてまつる　すかせ奉るとはのませ奉る之。呑字之。

一つゞらをり　盤折。九折共。

一なにがしの僧都　覺惠僧都を北山の僧都と號。榮花物語にあり。

一なにがしのたけ　大峯の釋迦のたけ之。

一よぎりおはします　過來給之。

一ゆをびかに　寛字之。ひろき心之。ゆるやかなる心之。

六帖 みよしのゝ大河水のゆをびかにあらぬ物から浪はたつらん

一いといたし　かたはらいたき之。

一おくまなる　奥の事之。

一さいつころ　をとゝひよりさきの事之。

一くらまに　旅寢可付之。

一いぬき　人の名之。きは公字之。犬公と書。なに公と云之。昔上東門院の上童の中にも此名あり。

一をくらす　露をくらかす之。後字之。

一草の御莚　只草座也。樹下集。當初のいもゐが庭にあまれりし草のむしろもけふやしくらん。

天台大師御忌日。慈惠大師讀給ふ哥之。

一さいなむ　罪之。

一さかしら　万ニ進〔に脱〕心と云。

一數珠の脇息　てかゝる音云々。

一すこししぞきて　退て之。

一さしぐみに　さしよりに之。

一かしこければ　無便ば之。忝共。

一ひとぞう　一孫と書。一族の心之。

一さだすぎたる　央過たる之。さかり過たる事也。

一ゆくての御とは　ゆくては過さる之。

一ふりはへては　打はへて之。態書也。

一いまだ難波津をだにつゞけ侍らずと云々　いろはの字をだにつゞけえぬと云也。

一ひがたう　涙のひがたくと之。

一つき〴〵しう　方便と書。遊仙崛にあり。

一はなちがき　文字一ヅヽを書之。ひろひがきと云同事之。

一わうみやうぶ　王は姓之。四位は内侍。命婦は五位之。女藏人六位之。

一そゞろさむ　雞皮と書。鳥はだの事之。

一によろしく　につかはしく宜之。

一かゝるきほい　かゝるまぎれ也。次之。

一あづますがゞきて　和琴をすがゞきてと之。

一もどきおひてん　人にもどかれてんと云心之。屓(チイテン)。

一そは心なり　それは心なりと之。

一おとゞ　殿之。

一にび色　鈍色と書。うすはなだの色之。祖母の服にきたる之。一緋色共。

末摘花

一わかんとをり　王家無等倫と書。王孫の事之。一説和漢通と書。不用之。異說之。

一貴戚臣　王の餘流の臣之。

一かいひそめ　潜字之。龍未出を潜龍と書。蟄居之躰之。
一三の友　琴。詩。酒の三の友之。
一すいがひ　すいがきの事之。
一かさやどり　雨やどり之。笠之。
一らう〳〵し　上臈しき之。
一よひゐ　宵居と書。
一されくつがへる　されたるもくつがへるもよからぬ躰也。
一えひのか　衣被香と書。薫の異名之。褒被香とも書。
一いくそたび君がしゞまにまけぬらん　しゞま。日本紀進退と書。進退せられたる心之。一説無言之。秘説と云々。
一あさへて　淺々しき之。
一ゆるびすぎにける　油斷。赦免共。
一御かゆこはいひ　粥（カユ）。鬲（コハイヒ）。文集二三在此字。

一はえをくれたる　光と書。色のをくれたる也。榮後（ヲクル、）と書。光薄共書。
一さくはちのふえ　一尺八寸の笛之。但舌四寸八分之。遊仙崛にあり。
一ひそくやうの物　もろこしの物の色のよき茶碗之。秘色と書。
一まかでゝ人に　退字之。くう膳をおろすをまかでゝといふ之。
一ないけうばう　今は大とのゐにあり。管絃者の居所之。内教房と書。
一ほのぐらし　衝黑と書。
一さをき　小靑と書。白色の事之。
一梅の花の色のごと　如之。もとめこの哥之。神樂曲。
一かいねり　搔練。紅の色之。ふくさにて表裏紅之。
一ゑびぞめ　蒲萄と書。紫の色の最あさき

之。
一おとこたうか　男踏哥之。天平元年正月十四日。　聖武天皇。
一をんなたうか　同十四年正月十六日。同御宇ニ。
一ねび人　年より女之。ゆひゆく。(ね歟)調行と書。年老行とも書。
一かゝげの筥　搔上筥とも書。鬟かく具足入物之。
一むもんの櫻の　無文は平絹の事之。櫻のほそながは　おさなき上臈女房のきる物之。櫻色の事。表裏蘇芳色の。おもてはうすく。うらはこき之。
一こだい　古代也。
一ゆるし色　紅紫二の色は賞する物にて。ゆるされてきる故に。ゆるし色と云之。
一ふるきのかはぎぬ　貂裘之。貂。音はてう之。せう共。てん。
一ぎしきくわんのねり出たる　儀式官之。弁者之。外記史などの事之。神事に先へねる者之。
一みちのくがみ　檀帋之。檀。奥州より渡始たる紙之。
一いまやういろ　紅のうすき之。
一袖まきほさん　人もなきと云々。
六帖
白雪は今日はなふりそ白妙の袖まきほさん人もあらなくに
一つまかけ　かたはしの躰之。
一かやうのかいなで　かいなではそとうはべばかりの心之。平仲文そらなきの時妻が哥。
我にこそつらさを君がみすれども人にすみつくかほのけしきよ
紅葉賀

一おもゝち　かほのもちやうなり。
一青海波詠(迦陵)　小野篁作之。
桂殿向初歳。　桐樓媚早年。
花花櫻樹下。(仁明)　蝶鶯畫梁邊。
舞者承和御時 大納言 良峯 朝臣 安世奉作(勅說無)
之。
一家の子(良家の子也。)　良家とは攝家以下上臈の家
之。
一いうそく　右族と書。花族の心之。
一いりあやの程　しよきやう(マゝ)でんとよむべ
し。そきやうでんとも。
一かの若草　紫の上の事也。
一そゝきゐ給へるは　そばめきゐたる也。
一なやらう　追儺。鬼おふ事之。儺は鬼と讀
之。儺。論語ニハ此一字を鬼やらひと讀
也。
一内宴　内裏にて春の季定て詩の宴有。但近年絶
畢。
一さんざし行　參座之。元三の參賀之。
一うけはい　呪咀と書。
一ゆし給　絃をゆるす事之。
一ほそろくせり　長保樂の破の事之。急を
ばかりやす(賀利夜須)といふ之。保曾呂倶世利と書。
一おふなくしき　女々しき之。
一さだすぐる　半過之。五十を半といへば。五十すぐる之。貞す
ぐる。是もさかりすぎたる之。
一女　若きをばをんなとはねてよむ之。老たるをばをふなとひきてよむ之。
一さもふりがたう　難舊之。年寄がたき之。
一かはほりのえならず　蝙蝠之。扇の異名
之。
一まかは　まかぶらの事之。匡。まかぶら。文選に。高
匡。かうきやうとまかぶらたかし。
一夕立しき　なごりすゝしきと云々。
一がくしう　鄂州と書。大國の州の名之。女

哥うたふ一ッの事を云之。

一あづまや　門柱四あるを四屋と云是之。

一まや　門柱二あるをまやと云是之。

花宴

一南殿　紫宸殿。

一中殿　清涼殿。

一たんいん給て　探韻之。

一をくしがちに　鼻白めたる。臆したる躰之。

一地下の文人（モンニン）。

一源氏の君の御をば　御詩をば之。

一ほそどの　庇の事之。丙丁（ホツトン）と書。

一くるゝ戸　樞戸。

一きこえたがへたるもしかなとて　然之。さりなとの事之。物毎納得の心之。

一かのわたりの有様　葵上の父攝政太政大臣の事。

一かの有明の人　朧月夜の內侍の事之。

一櫻の三重がさね　檜扇の兩方上三枚を櫻の薄様にてつゝみて。上を糸にてとぢてあはち「ひ歟」むすびをしたる之。

一明王の御世四代　陽成。光孝。宇多。醍醐。是之。

一きやうしやく　湿迹と書。只をしはかりて考を定之。考とはかんがふるなり。かうさく共。きやうさく共云々。

一ゆみのけつ　結之。結番（答）之。

一さくらのからのき　唐綾の事之。

一えびぞめのしたがさね　赤色襯。したがされ。

一わうぎみすがた　王姿之。宮姿之。

一ふさはしからず　不祥と書。

一扇をとられてからきめをみる　さまかへたると云々。催馬樂の哥に石川と云哥に。石川のこまうとに帯をとられてからさく

ひする。いかなる帯ぞ。はなだの帯の中綿入れたる。如此の問さまかへたると云之。扇と帯とさまかへたる之。

葵

一たみしかはら　共に卑賤者之。たみしは渡守。かはらは細川之。日本紀仁德天皇卷ニ書之。河原共書り。是も渡守之。

一かざみ　汗衫と書。衣の上にきる薄き物也。

一人だまゐの奥にと云々　出車の奥にや。出車とは女車の後車之。人給(ヒトダマヒ)と書。

一殿上のぞう　藏人將監之。

一つぼさうぞく　市女笠にきぬをきて中給(結歟)たるを云。今の中結の躰之。

一ねびゆく　調行書。老行之。

一おぼしうんじけん　惱字之。うれへ之。

一本のみや　卜定所(ホクチヤウトコロ)(ウラナヒスルトコロ也)。齋宮に成給はんずるうらなふ所の名之。

一さかき　坂樹と書。日本紀にみゆ。龍眼木。是本字之。榊とも。

一うきもんのうへ　ふせんれう。浮紋綾之。

一右近のばゞ　一條大宮。

一左近のばゞ　一條西洞院。

一物のけいきすだま　窮魂ト書。遊仙崛に魂に通ずるを云と云々。たとへば生靈躰の者之。

一袖ぬるゝ戀路とかつは知ながらをりたつ田子のみづからぞうき（此物語ノ中秀逸之と云々）

一たけく　猛之。

一いかき　辛之。怒。いかき。

一ひたぶる　ひたやぶり也。一向共。偏共。永共。

一うつし心　現心之。うつゝの心之。

一芥子の香　邪氣祈時は芥子を護摩にたく

ゆへ也。
一ゆする　湯あぶる事之。沐字之。
一秋のつかさめし　京官の除目之。
一春の司召　縣召除目之。
一にばめる　にび色の事之。薄はなだ之。あ
(に鈍)をあひの紙。うすはなだの色之。
一正日とは　四十五日の事之。
一さのもの　さやうの物之。
一あてき　上東門院の上童に此名あり。妙
公と書。
一くはんさうのはかま　萱草色の袴之。紅
の紫色。紅の黄色とも云り。
一思くつして　思苦之。
一ゑいまき　卷纓。非常式。諒闇の時の事
之。
一子のこのもちの事　別に記。
一かうごの筥　たきもの入筥之。香壺筥之。

一けそくの臺　花足臺也。
一おさ〳〵しくだにもなし　おさ〳〵は長
字之。
一みぞかけ　拖架(イカ)。衣懸る竿之。禮記云。御
衣男女不同拖架。不敢縣於夫拖架。竿拖と
いふ。

賢木

一齋宮下向は　九月十六日。御祭以前にさ
だまりて下事之。
一かう〳〵しう　神々しき之。
一黑木作事　仁德天皇より始れり。くろ木
とはくろもんじやうと云木之。但何の木
も皮つきたるを云之。
一ひたきや　炬舎書。順和名。雨のふる時庭に火
を燒べき料之。𪍿鋪。
一しめ　注連。日本紀。御總繩。舊事。日本紀。七五三共
書。

一けこ　縁事之。
一ゆゝしき　忌字。いまく〳〵しき之。
拾遺 榊葉の香をなつかしみとめくれば八十
氏人もまどゐをりけり
引哥貫之集 をく露に色もかはらぬさかき葉の香を
やは人のもとめきつらん
一ぬけ出たる　挺出と書。我とし出たる躰之。
一ちやうぶそうし（長夫送使）　斎宮送に下向の勅使之。道より不歸。伊勢まで送る之。
一女別當　斎宮官女之。
一たかみくら　高御座と書。
一別のくし　斎宮の群行の時。主上御櫛を都の方へ趣給ふなとて投させ給を。額にさして瀬多迄ひるのやみまで御下向。
一八省の事　孝德天皇大化四年二月始之。
一とそぎて　さして執せぬ心之。さだまりたるとを残心之。除く心之。事除と書。
一ふぢ衣　諒闇の時主上は十三日めすと之。十三ヶ月を十三日にかへらるゝと云々。
一とのゐ物の袋
一弘徽殿　登花殿　兩殿は后町の西の殿之。女御更衣等の曹司之。
一觚稜（コロウ）　文選のかたちよに。
一いたつき聞え給　いたつきはいたはりもてあつかう躰之。
一むかいばら　當腹の事之。
一そんわう　王の孫之。孫王。眞子内親王。文德天皇の孫。惟彦親王の女也。仁和五年に斎院に立。孫王の斎院に立事是許之。
一はらぎたなきは　腹ぐろき之。
一ひれふす　漢高祖の后之。うるはしき后。呂后。高祖死後戚夫人を手足を切。耳をふすべ。目をくじりて捨。物をいはぬ藥をの

ませて厠の中に捨畢。

一拵藥（カコウ）　井垣と見えたり。

一夜居の僧　御持僧之。二間に候する僧之。

一しばふる　薪のために木の葉などかきあつむる賤者の木葉がつきたるを打ふるうを云之。又阿佛の說。しはふるび人云々。皺のよりて古き之。皺古人之。

一くろき御車　板車とて服者の乘車之。板にてくろくぬりたる之。

一柳のけしきばかりぞ時をはすれぬ　漢武帝苑中に蒋人柳。一日に三臥三起。帝を拜し奉る躰之。非情にて心あり。仍人柳と名つく。

一左右にこまどりに　こま鳥（取寄）はゑびすかけの事之。あなたこなたへ一人づゝかへる之。

一したとに　舌のはやき之。舌利と書。

一あはつけき　あは〳〵しき之。泡沫共ニ。

一かるめろうせらるゝ　輕哢之。嘲哢せらるゝ也。

花散里

一さゝやかなる家　ちいさき家之。狭々書也。

一花散里は　中川のあたり之。

須磨

一ひたゝけ　叨。放埒躰之。こんらんしたる心之。

一入道の宮　藤壺の事之。圓融院后。三條關白賴忠女。天祿四年三月十四日落飾。世に號入道宮。不限男女。出家を入道といふ之。

一三台（星の事也。）　上台。中台。下台。此三台之。左右內大臣を三台にたとふる之。是を云三公之。

一七星を司七弁　七弁は〔左右の大弁（事）〕左右の中弁。左右の小弁。中弁小弁の間に權一つ。已上是を七弁といふ之。
一こしをのべて　官位の辭して不仕事之。
一こしを屈する　當官にて仕を云之。
一いちはやき　寂强と書。急速の心之。又すみやかなる心也。
一身のをこたり　過怠事。非懈怠の義之。
一ひたやごもり　直隱と書。
一とばかり　片時の心之。只時の間の躰之。
一むもんのなをし　平絹の直衣。
一さすらふる　伶俜と書。漂泊の心之。流人之。流の字之。
一かずまへ給て　數にして也。知共。
一なげ櫛　いむ事。いざなぎのみことと黃泉へ行て。ゆつのつまぐしをとり。は一をひきかけて火をとぼして。いざなみのみことを見給時。膿沸虫流間。きたなしとて此櫛をなげられたる其故之。木一に火をともすをいむは此故之。
一しば〳〵　屢は數々と論語在之。あまたの義之。
一けんだつものなど　文書めきたる物之。券字之。
一みなは　水の泡。又水のめぐる所之。
一つかさとけて　解官之。官ニ有三解。甍解。病解。現解。
一まかりまうし　いとま申之。辭見と書。
一おさめみかは　おさめ。みかは。何もおしなべて下女之。
一をさふる　商人之。水原の說之。
一厠長女　行幸の跡にまいる下女之。又洗女之。
一日本の船の初は　神武天皇御代也。其後（垂仁）崇神天皇御時。伊豆の國に仰て舟をつく

らす。長十丈。枯野と名付。伊豆出付と云り。

一わたのべの大江の岸とは　ろうの岸の事之。

一から國に名をのこしける人よりも　是は屈原が事のたとへ也。

一かとりの御なをし　只絹の装束之。只絹のなをし之。生の衣之。

一しらかさね　更衣の時たゞ絹のしらがさね（白重）之。

一屛風表裏　宇多はすはうの方をおもてとす。西宮は繪書たる方をおもてとす。

一千枝　常則　繪かき兩人の名之。

一つくりゑとは　下繪之。朽木書之。

一白澤王（ハクタクワウ）　朝ニ三千。夕ニ三百の鬼を合する王之。

一しろきあや　直衣之。

一とこよ　常世。蓬萊山之。

一驛の長にくしとらする　驛長に。天神つくしへ御下向の時。明石驛にて口詩を給之。かき付ぬを口詩と云之。口宣といふが如し。口宣といふ心は。帝王の直に勅定あるを書付たる之。仍口宣と書。是も書付させ給はで。御口にて詩をつくられたる之。又別のくしをたぶと云説もあり。但異説之。

一おほやけのかうじ　考辭と書。勘當の事之。

一鹿を二世皇帝へ馬とて進するは　趙高といふ之。當時人をはかるを馬鹿と云る此故之。

一帝の御め　后の事之。

一ゆるし色のきはやかなる　紅に黄なる色のまじりたる之。きばみたるといふは少

黄なる事之。
一だんき　だき共。彈棊と書。局は石をもて方二尺中高にして。將碁の馬のやうにして。各六枚にてはじく物之。白黑二色之。
一かいつもの　かづきしたるもの之。或は海津物之。
一たつかなき　無便之。
一ぜんじやうばかり　軟障と書。きぬのひき物之。必松を繪に書之。まんまくの類也。
一ひぢ笠雨　袖笠雨之。
一をとたちばな姬　日本武尊の御世之。
一ことなし草　忍草一名之。
一ほこりか　誇。ほこる。をごる。ほこらかしとも。

明石

一空のみだれは　雲の亂之。
一ひふり　氷降。火雨。雷電。日本紀。

一しほのやをあひ　鹽のおほきあひ之。
一とうで給　取出給之。
一かうれう　廣陵散。琴の曲の名之。
一はいわたる　蔓延と書。
一せんわう　先王之。或は貞保親王の御事之。南宮の譜といふ是之。
一山ぶし非僧。　只山にふしたり。野臥。同。
一酒しいそさして　しい殺之。
一あき人の中にてだに　琵琶引の心之。
一かとりの直衣　縑書。
一しいそつして　そつしては欽の字也。醉欽と書。
一くるみ色のかみ　裏は白く表はうすやうの色之。くるみ色のかみの事。後拾遺の哥にあり。
一宣旨書　仰書之。
一御藥の事　天子の御惱を云也。
一中の絃　當調子の緒之。發の緒と云之。
一あはめられて　淡惡。

一みぞびつ　御衣櫃之。
一しほどけし　とけたる之。
一かずより外の大納言　員外と書。權大納言あまたをかるゝ之。
一まくなぎ　蠛之。虫の名之。蚊のごとくなる空に多物之。日本紀。目の前にかろ〳〵しく振廻也。
一あさてばかりになりて　明後日歸京と之。明日去。

澪標

一あひなく　無愛。うれしき事に眞實にうれしくなり。あひそうのなきとも。
一令外の宮　内大臣。權中納言已下。
一御はかし　三條院皇女禎子生れ給ふ。陽明門院の時。内裏より御太刀を被引。女子に引此例之。
一こもちの君　明石上之。
一いか　五十日なり。
一つかみじかき筆　旅の硯筆之。職事等は硯筆隨身故之。
一みふ給せ給　御封之。封戸なり。太政天王二千戸。三后千五百戸。大皇太后。皇太后宮。皇后宮。已上三后之。
一たゝはしき　嚴重の心之。
一樂人とをつら　十列之。
一紫すそごのもとゆひ　かたはしのこき色之。
一ゐんしども　其院々の主之。院司と書。
一わらは隨身　童躰隨身之。花族の義之。
一あそびども　遊女之。
一ひまある中　中のわろきを云之。

關屋

一せきいる日　關に入之。常陸よりのぼりの時。
一あを　襖字也。かりぎぬのみじかき物也。

旅の裝束之。
一せきむかひ　關までの御迎之。
一さかしら　進心と書。
蓬生
一そこそは　其こそは之。
一宗廟之器者不鬻市。禮記在之。
一おなじき法師　木法師之。
一あげまき　總角。十五六の齡の者を云也。
一ふようのもの　不用物之。
一はこやのとじ　からもり　かぐやひめ
已上物語の名之。藐姑射刀自。唐守。赫奕姫書之。
一かんやがみ　紙屋川にてすく之。綸旨をかく薄黑色之。平野北野の間に在川之。
一なを〳〵しき　ちと下品人也。直人之。
一いたうついえたり　至費と書。
一こちたき　ひろき躰之。又まばゆき之。

一うけひ　のろふ心之。呪咀書之。
一ついえたり　損たる心之。
一くのえかう　薫の惣名之。黑方共書。
一むとく　無德之。
一たうこぼちたる　顏叔子(隆家)の人の妻來時。家を風に吹破れて。我家を壞燒あかくして。人にうたがはれじの爲之。堂兩音之。
濁時は佛閣を云。淸時は人家之。
一いたがき　はた板也。
一ちかきしめの柱　領したる也。
繪合
一前齋宮は　秋好中宮。六條御息所の女。
一前齋宮入内例事　元正天皇御時。井上内親王聖武天皇女。養老五年齋宮たり。後に光仁天皇后に成給事の始之。
一中宮　うす雲。藤壺。
一大殿　源氏。

一院　朱雀院之。
一うちみだりの筥　巾箱と書。女房の具足入筥也。
一百ぶのほか　百歩外之。遠く匂之。
一こゝろば　心葉。銀を以て梅をうち物にしたる之。菊をもうつ之。箱の緒付るざ之。大嘗會小忌をする時冠をさす物之。
一しゆりのさいしやう　修理大夫參議を兼する之。此例橘の常主。在原友于。
一いたつかまし　いつきかしづかまし之。寵。又勞をも書。辱。かしづく。
一こゝろばへ　意見とかく。
一ひめて　秘して之。
一うつぼのとしかげ　物語の名之。源順作。
一ひねずみ　神異經曰。唐に南方に有火山。長さ卅里。晝夜火あり。風雨にも不滅。火中に鼠あり。重さ百斤。毛の長さ廿三尺。此毛を布に作べし。若不淨なれば燒之則淨之。號火洗布。號火鼠布。
一あべのおほし　人の名之。
一名をばえくたすまじ　腐字之。朽共。下共。
一女房のさぶらひ　臺盤所之。
一せんかう　淺香之。
一あをに　青丹之。
一ふんのつかさ　圖書寮之。文司。

松風

一東の院とは　二條院の東なるによつて云之。六條院御座所之。
一寢殿は　妻の居所之。禮記。聘せるを妻と云。奔れるをば妾と云之。聘は問之。妻の言は齊之。齊の心は夫と居所を齊する之。妾の言は接之。帝王にもまみゆる事を不憚。不齊躰。
一この若君のをうぢ　中務宮領し給ける大井川のわたりにありと云々。前中書王の小

倉の山庄をなずらへて云之。

一兎裘地　魯隱公辭官隱居所之。仍日本紀にも閑居をば兎裘地といふなり。ときうちとよむ。

一けさはがしう　さはがしき之。騒字之。

一かたかけ　人につかはるゝ事之。肩を息と云。

一つなしにくき　強顔(ツレナク)。にくきかほ也。悩。つれなしとよむ。

一はちふきいへば　撥撫之。譬ばばちはらふなどいふ心也。

一けん　劵字之。文書之。

一たきどの　泉殿之。

一張騫といふ者(張博望申こと也)　浮木に乗て天河の水上を見極よと云。漢武帝使之。

一晋の王質山へ薪をきりに行に。(斧柯のくちたる事)童子碁をうつ所に行。棗の實のやうなる物を與るを食て碁をみるほどに。其間斧柯爛之。

一山口はしるかりけれ　山口とは事の始を云之。伊勢造營杣山の山口祭を云。是初之。

一いさら井　小井と云。日本紀。

一にはかなるあるじ　饗の事之。俄事之。

一小鳥を草の枝につくるは三所に三づゝ付之。已上九付之。十の内一ッをとりかいたる心之。

一木の末(エダ)　草の末(エダ)　日本紀。可秘之。

一五日六日の御物いみ　天一神の方違也。

一こんゑつかさの名たかきとねり　御隨身也。

一あまそぎ　かみのふかそぎ之。

薄雲

一あまがつ　天兒書。人形之。三歳迄身にそへて持物之。悪神を彼にうつすと云り。

一ゆふたすき　襷(タスキ)。おさなき者の上にかくる物之。かけ帯ようの物之。

一さねこん　實來と書。
一ひきくんじ　薫修之。切の入たる之。
一かうじなどを　柑子之。
一がうけにことよせて　豪家と書。万人に越たるを俊と云。千人に越たるを豪と云之。百人に越たるを英と云。千人ある里を豪と云也。
一大納言後位につく例　光仁天皇。號白壁大納言。
一桓武　從五位下大學の頭の後。
一光孝　二品式部卿の後。
一宇多　源氏の姓を給て侍從ニなる。
一門ひろげ　蒙求于公高門の事。
權
一もゝぞの　一條大宮より西北のつら。
一ふつゝか　太の字之。
一こちく〱しくは　無骨之。

一せんじ　官女之。
一かみさぶる　神宿。日本紀。神閑共。閑さびたりと讀之。（かみさぶると讀。）鐵のさびには衣を云之。上久。
一しなとの風　科戸の風と書。乾の方のかぜ之。
一おもなく　おもてつれなく之。
乙女
一へいしとる　しやくとる之。
一をしかいもとあるじ　儒者の饗之。垣下の饗の事之。只庭の饗也。凡垣下饗と書。
一壁下（垣下）の饗　緣のすのこ之。公卿の座之。
一作文事　公卿は絶句。儒者は四韻。
一入學　初て大學寮に入之。
一いとひこもりゐて　集。あつまる。つどふ。日本紀。
一れうしうけさする　寮試。史記内に晴によまる卷あるをいふ之。

一もんにんぎしやう　一經に通ずるを儒者と云。古今に通ずるを通人と云。書を連るを鴻儒といふ。
一くはんじやの君　くわざの君共。六位をば冠者と云。
一しりうごと　後言と書。うしろごと之。
一かへりよみ　書をふくする事之。
一さくじりをよすげたる　齰(サクシリ)。唐人のをとなしきは耳くじりを帯のさきに付也。此雲井の雁のをさなくて。夕霧の大將を夫にしたるが。をよすげたるを云之。をとなこそ鬠(ミヽクシリ)を付べき事にそへていふ之。
一さばれ　さはあれと云心之。
一わらはべ　五節の童女之。
一ましが　汝が之。
一きんじが　是も汝が之。きんじらは汝等也。
一麴塵の袍　山鳩色也。

一つるばみの衣　橡宇之。赤。白。黒。三色。
一かえどの　柏梁殿之。后の御座所之。
一御たうばり　御給之。
一御としみ　御年滿と書。十ニ滿たるなり。何にても御賀の事之。
一風の心けだしすくなし　詩あり。玉葛
一潜龍の德ありて　隱たる事と云々。人の才學ありて隱たるをいふ之。
一をとしあぶさず　落溢(コホス)と書。をとしこぼすの心也。
一蛵蜺(ケイゲイ)　あら〳〵しと讀。白氏文集。
一桓山の鳥四子を生ず　羽翼旣成て分離す。悲鳴して以て相送る。是を四鳥の別といふ之。桓。垣ニ同。
一我身のけう　孝養之。
一ねんさう　年三之。正五九月の事之。
一だみたる　迹。舌はやく訥たる躰之。

一けさう　假借と書。貞觀政要には（毫髮廿六云）なつかしとよむ。人のかほのけしやうにも書之。
一はう　簟草（タカムシロ）かつらなど。
一はう〳〵　蚊虫のはう之。
一すやつばら　しやつばら之。奴等と書。
一はらから　親と書。万葉八巻。兄弟の事之。
一はやふね　舸とかく。
一このちのせいし　胡の地の妻子之。させ同音。
一すて〳〵つ　弃損之。
一いちめ　市女。
一ごし　五師之。八幡宮供僧の官之。八幡筥崎に遷座。延喜廿一年三月廿一日之。
一かいねりに　紅のうす色の裳きぬきて之。
一のしひとへ　ねりたるひとへぎぬ之。
一藤原のるり君　玉葛のおさなき名之。

一こまがへる　若返とかく。万十一。
一御あしまいり　御足洗人之。
一りうじの人　臨時人之。
一おうなに成て　老に成て。おんなは若之。
一いきまきし　いかりたる躰之。
一いまやう色　紅なり。
一あさはなだのかいふの文　はなだに大波をおりたる之。
一くちなしの御ぞゆるし色なるそへてと云々
禁色ゆるさるゝ事也。禁色ゆるさるゝとは綾をゆるさるゝ之。くちなしに綾を重たる衣之。
一あふよりて　奥へよりて之。昔様の躰之。
一まどゐはなれぬみもじぞかし　身ぞかし之。但三百文字ぞかしといふ說有之。
初子
一年立かへる　只年の改之。

一打けぶり　煙にはあらず。只くもりたる躰也。曇の心之。
一はがための祝　口の齒にはあらず。年の齒の事之。
一えならぬとは　艶なる之。よき事之。
一ふところで　懷へ引入手之。
一とぶき　言吹。日本紀。祝言之。壽。文選いはひの事之。
一さんざ　參座之。參賀之。
一うゐことならふ　初て琴習之。
一からのとうきやうき　唐の東京錦之。すぐれたるにしき也。
一じゞうをくゆらして　薰の方之。
一えびかう　浥衣香。薰の方の名。一說麝香の異名之。
一さはらかなる　かみのすきたる之。
一けやけし　尤字之。好物共書。面白物のすこしけうとき物を云之。惣じてちと事過たる物をいふ之。
一りうじかく　臨時客之。攝政關白公卿などを集て。大饗をもてなすを云之。朱器饗といふ之。
一ゆうそく　優息之。右族共。くわしょくの心也。
一このとの　催馬樂。此殿也。
一わかゞみ　若髮之。
一けをされて　氣色をされて之。
一水驛にて　水驛には道程さだまらざる間。饗を用意したれども不食之。仍饗應にあふをば飯驛と云。饗應せざるをば水驛にあふといふ之。
一しらがさね　凡は夏の物之。是は袍の青ニ白を重たるを云之。男踏哥の時の事之。正月十四日之。
一かざしの錦（綿歟）　錦（綿歟）をもて花を作て冠の額に

さす。高巾子の冠と之。
一かよれるすがた　舞の袖返す躰之。
一うるはしき袋どもしてひめをかせ給　琴琵琶の袋錦之。秘し置之。
一かうこんじ　高巾子之。よはなれたるとは悪き心之。又すぐれてよき事にも云用。

胡蝶

一あやめもしらぬ　白黒をもしらぬと云心之。
一かへりこゑ　律之。
一七世の孫に逢と云事の起に。漢名帝時。永平五年劉晨阮肇二人天台山へ薬を尋に入時。道に迷て飢にのぞむ時。桃をみつけて行て食す。則ちからを得て山谷を一里ばかり行時。仙女に逢て夫婦と成て。半年ばかり過て舊里に歸たる間。仙女道を教て返し畢。半年ばかり過ると思所に。七世の孫に逢と云々。是は源氏にあらず。引事之。
一ひの御よそひ　緋の装束之。
一ひらばり　平張と書。樂屋のむねもなきの上に。縵をはりたるをいふ也。
一あぐらをめして　幄〔マヽ〕と書。布にてしたる縵の事也。
一こしさし　腰差と書。一疋の絹之。巻絹の事也。
一戀の山　只戀の事之。
一くしのたふれ　孔子人につめられたるたとへ之。
一めしうと　召人と書。思ひ人の事之。
一花にをれつゝ　花にをれつゝ之。

螢

一わらゝか之　やはらか之。和字之。
一うすきかたに　木丁の帷は三重なる物之。うらの方之。表はあつき綾。中はたゞの絹之。裏は顯〔如斷〕紋紗之。
一あのごと　扣案之。

一めをやだちて　母めきての心之。
一くすだま　薬玉之。續命縷と云之。又靈糸といふ。又綵糸と云。只命をのぶる祝ごとにする之。內裏には糸所より薬玉を献ず。去年九月五日。菊花茱萸(茱萸)を撤して薬玉にとりかへて。九月是を置。夜るのおとゞの御丁の東の柱に付之。
一かちのしり　褐裾とかく。
一菖蒲重　表は青。裏は白。さうぶがさねとあり。
一大ぎみけしき　王の躰之。大なる儀之。
一にほどりにかげをならぶるわかこま　わかこまとはこも之。こまにそへたる之。
一この物語　こは古之。ふるき物語也。
一みそか心　ひそか心之。
一うつゝの人　今現在の人之。現人と書。
一てんつかれ給　人にわろき者といはれ給之。點付れ給之。

一はらきたなき　腹黒之。
瞿麥とこなつ
一つりどの　釣殿。六條院之。今の万壽寺なり。
一西川　桂川の事。
一ちかき川　賀茂河の事。鮖（イシブシ）。
一ひみづ　氷の御ものを水に入たる之。
一すいはん　水漬の飯之。
一むらいのつみ　無禮のとが之。
一ふれはい　只ふれたる事之。
一けそん　家損之。家のきずなるべきといふ心之。
一ふくつけや　欲のふかき之。貪生とかく。遊仙窟に有。
一次第みだらぬをば　雁烈と書。鴈は兄より先にはゆかぬ故に。みだらぬと云之。
一ろうし給　嘲哢するなり。
一すがゞき　和琴をかきならす之。

一とつび　琴粒。ひきたる躰之。只其すがた也。ことさい。ことつき。是も皆其すがた之。已上和琴の事之。くちにくひげにする之。とさきはばち之。
一ぬき川　催馬樂の躰之。
一厭乞（イデ）　いて。日本紀に出。物をこふ心之。をしてこふ物を乞に。いてやなど云事之。
一かうさく　還迹也。
一うたゝね　寤（ショ）字之。
一ぬるくか　さのみ急にもなき之。人の心のぬるき之。
一てうたぬとは　無心元心之。向〔拍歟〕掌。日本紀ニかく。
一おほみおほつぼ　大小便のまろなどやうの物之。
一おこめき給　おこつく之。
一てんがちに　直字（マナシ）がち之。

一へに面子のかほつき　荏苒。遊仙窟ニ書之。荏。油しぼるゑの事。

篝火

一うちまつ　松炬と書。只たいまつのと之。

野分

一冠巾子　綏。纓。
一いろくさ　色種之。
一くろ木（黒木）　あかき（赤木）
一名だゝる　名に立之。
一さとゐし給　里居之。
一かばさくら　朱櫻と書。樺櫻共。
一くたに　苦膽。りんだう之。一名又岩藤也。
一風こそげに巖も吹あげつべき　史記高羽本紀。大風西北より起て。木をゝり屋を放て沙石を上ぐ。
一おとゞのかはら　殿の上の瓦之。大臣ならでも殿をおとゞと云。

一むらさめ　白雨と書。揚氏が漢語求給ニ書之。琵琶引には急雨と書。
一ほの〳〵　會明と書。
一をゝしき　雄壯と書。日本紀。をとこ〳〵しき之。
一いといたし　いたしはよくしたる之。至之。
一ほうづき　酸醬と書草之。又洛神珠咕。和名。赤酸醬と書。日本紀。
一しべ　花のしべ之。蘂と書。
一からのけもんれう　花の文の唐綾之。
一かみひとまき　紙一重之。無復風藁。日本紀。御幸
一このをとなしの瀧こそ
拾 とにかくに人めつゝみをせきかねて下にながるゝ音なしの瀧
いかにしていかによからん小野山の上より落る音なしの瀧　元輔
此哥を引よせていへり。
一かたちたけたち　たけたちはたけのほどなど之。
一あしよは車　只輪のよはき之。
一やつがれ　臣や某といふ心之。
一いできえ　出消之。廣座に出てをとるをいふ之。
一出ばへ　出榮と書之。
一おほみき御へ　御へとはにゑ之。
一鳥つくる柴の事　柴のたけ七尺五寸。枘より葉せばく。まろくして裏面に毛生たり。是をとりしばと云。鳥柴 又はたもん柴とも云。年の内は立枝をへだてゝ。雄を上に鳥の左を木にあてゝ付。年明ては雌を上に付。柴の上四尺と三尺五寸に付。此外梅柳などにも付之。

一小鳥をば　紅葉。荻。薄などにも付之。
一雀をば竹に付。
一たはやすく　たやすき之。
一こらうのすけ　古老のすけ之。
一こゝしからず　大儀ならずと之。
一まうちきんたち　大夫と書。公卿の事之。
一こだいなる　昔様なる之。古代。
一からのたき物　唐合香之。唐にて調合之。
一をちぐりの色　赤きはかまのこき之。ちと黒色之。
一あはせのはかま　中へ物いれぬはかま之。
一蠹　紙くらふ虫之。又衣魚共書。
一紫のしらきりみゆる　紫のちと白色に見ゆる之。
一しどかみは　ちゞみたる躰也。
一うはも　女ははかまの上に裳をきる式之。仍うはもといふ。
一あふなげに　奥なげに之。
一まじり　眦と書。皆同。目尾之。
一いそしく　いそしく之。閙。
一つまごゑ　物申聲のかたはし之。
一いはほも淡雪になし給べき　有秘説云々。

蘭

一内侍のかみ　玉葛之。
一うけひ給之　のろふ事之。呪咀之。
水のうへに数かくごとくわがいもにあ
はむと我はうけひつるかも
呪咀と書て。うけはしとよむ。日本紀。
一そらせうそこ　御使なるが仰られぬ事を云之。書付ずして口にて云をも云り。
一うつたへ　うちつけ也。同事。やがて也。
一女は三にしたがふ　三従と書。幼ては父兄にしたがふ。嫁しては夫にしたがふ。老

ては子にしたがふ是也。
一まが〳〵しき　いま〳〵しき也。化字之。
一いもせ　妹兄と書。いざなぎいざなみのみこと。兄弟夫婦に成たるが故に。如此妹兄と書之。
一御おほいぎみ　御嫡女之。
一かじけたる篠に　文を付て兵部卿の宮より玉かづらの方へやられける文之。悴。かじけたり。憔悴。
枝柱（マキヘシラ）日本紀ニ書之。
一かのせはよぎ道なかんなる　過路。一説よけ道。除。
一やさしかるべき　はづかしかるべきと之。
一しうねし　强の字之。日本紀。
一おほけたり　飽。ほけたる之。
一むかひ火　向燒と書。日本武尊駿河國にて賊主を殺さんとて。野に火を付て発るゝ事を得たり。
一なごやか　婀娜。日本紀。和共。
一おほきなるこの下なる火取をとりて　六帖
たきものゝこの下煙ふすぶとも我ひとりをばしなすべしやは
一さながらまうづ　更啓と書。日本紀。
一見あふる程もなう　見合る間もなくと之。
一檜皮色の紙　紫のこく少黒之。
一文選別賦に　高木を古里にかへりみると云々。
一ふかうなる　不幸なる之。
一らにの花　らんの花之。蘭花書。
一このさうのめいぼく　今生の面目之。
一しかひきゝり　ひきはりつよき心之。
一あをにびのさしぬき　地はもえぎにて文

は黄なる物之。青朽葉のさしぬき之。大將
檢非違使の別當きる物之。
一平中は　平貞文之。
一うたかた人を忍ばざらめや　泡。未必。遊
仙屈によむ。うたかたとはうたて人をと
云心之。
思河たえずながるゝ水のあはのうたか
た人にあはて消めや泡也。
新千 おもひきやうたかた浪の消かへりむす
ぶ契は末だにもなし
一かりのこ　鴨の子之。かると云る鴨あり。
かり。かる。通ずる之。
一御もぎの事　着裳。明石中宮十二歳。
梅枝
一あやひこんき　綾緋金錦と書。高麗人の
奉し金襴様の物之。
一そんわうのふたつのはう　そん王はあや

まり之。承和の方之。二の方は侍從烏クロ方
之。御秘藏の間男に傳ふべからずと。承和
仁明。仰事ある之。相王之。仁明。文德。
一東の中のはなちいで　はなちいでとは出
居之。放亭之。
一薫の合事　四季。春は梅花。夏は荷葉。秋
は菊花。冬は烏方又侍從之。此外薫衣香。
承和の百歩の方躰身香。是は口にふくむ
物之。
一しどろもどろ　不合不調と書。遊仙崛ニみ
ゆ。
一ねぐらの鳥もほころびなまし　ほころぶ
るは發の心之。たとへば高く聲のきこゆ
る之。
一おぼしきざす　きざすは萠の字之。思初たる之。
一とよりては　外へよりて之。末に成て之。
又取寄之。

一女手とは　假名字の事之。
一草紙
一よろひ　一双也。
一あして　葦手。繪の中文字をゑに作なして書事之。
一けちえんなるひら　ひらは枚の字之。紙一枚二枚の數の事之。万二。枚(ヒラ)の湖。けちえんは揭焉と書。
一御との油みじかう　短は灯屋のひきゝ事之。
一なを／＼しき　直人の事之。げすしきの諸大夫の事。
一まみのわたり　眉間と書。所の字をわたりと讀。
一かなうす　鐃字。
一もろゑ　藤裏葉【この歌】　左近衛と書。相思戀之。伊勢物語眞字本。

一ごくらく寺　深草ニ在之。昭宣公御建立。
一あま風　雨氣の風之。
一文籍は書籍之。かれいは家令と書。其家の管領ごときのもの之。
一たをやか　婦人と書。日本紀第一には手弱女人と書。又幼婦共。万ニ。
一くきた(菊多)のせき(關)　關也。弘仁式ニ書之。能因哥枕に云。菊多と書てくきたと讀。俗にはきくたといふ之。
一あさがほ　朝の顔之。槿にはあらず。
ねくたれのあさがほの花秋霧にをもがくれつゝ見えぬ君かな
一くわんぶつ　卯月八日佛にうぶゆあびせまいらする事之。灌佛と書。
一みあれ　御生と書。又形と書。賀茂大明神の御誕生日之。申の日之。
一はかぜならては　哥に桂を折てとあるに

そへたる之。は風之。
一こきむらさき　中納言着する袍之。
一ましみづ　眞淸水。又まさる淸水と云之。
增水共。
我宿のいさゝ小河のまし水のましてぞ
思ふ君ひとりをば
一いさゝ小河　ちいさき河之。いさゝ井。小
井と書。同心之。
一かしはて　膳部と書。供御の料理する人
也。
一おもの　御の字をおものとよむ之。飯字
をもよむ。依所之。
一つるばみ　橡と書。とぐりと云木之。衣の
色。
一うたのほうし　宇多の法師之。うたと云
和琴あり。又哥の拍子と云之。兩說。
若菜上

一御そうぶん　御處分之。
一御心ばへほころぶべからむ　御心顯るゝ
之。
一あだげ　あだなる氣之。
一窈窕淑女。君子好仇。毛詩。淑は善。仇は匹。た
ぐひの心之。
一しか〴〵いふ　云々と書。日本紀。
一は（媒）いしや（妁字立ノ人之）くなくして　夫をするをば野合
とて。女のきずにする之。
一御心たゝせ給　思たゝせ給之。
一いきまき　いかりたる之。
一かえどの　柏梁殿とて。〔[illegible]〕後の御座あるべ
き所之。朱雀院の内にある之。
一女にも髮をあぐるをば理髮といふ之。あぐ
るとはそぐ事之。
一そんじやの大臣　御裳の腰ゆふ人之。
一せんかうのかけばん　洗香にてつくるか

けばん也。淺香共。

一ほうゆがみ　四方なるもの丶ゆがみたる之。方曲也。源氏四十の賀を玉かづらのさたある之。

十二種の若菜

若菜。あざみ(薊)。さしや(白菅)。芹(セリ)。

わらび(蕨)。薺(ナツナ)。葵(アチヒ)。蓬(カラヨモギ)。

小蓼(タデ)。水雲(川菜)。菘。小大根(タカナ)。芝。

已上十二種之。

七種

なつな。はこべ。せり。あをな(若菁)。

御形(邪蒿)。すゞしろ(須々代)。佛座。

一かべしろ　防壁と書。壁一間に渡て懸たる絹之。

一ぢしき　地敷と書。うちしき之。

一かゝげ筥　掻上筥と書。びんくしなど入物之。びんをかくといへり。

一かざしの臺　かざしの作花の臺之。銀山。銀水。金銀の花樹二本あり。

一ざうやくし給　雜々の役之。

一こものよそへ　籠物四十枚之。

一蟬聲のおきな　蟬丸の事之。

一琴ののぼりね　調子のかりたる之。

一ぎやうでん　宜陽殿。昔累代御物置納殿之。

一かへりごゑ　律之。

一おひらかにおほしたて給　養立之。おひらかはをびれたる由之。老らかにとはあらず。おどろきたるやう之。

一むづかり給　腹立給之。又むづかしがると云之。

一らでんのいし　螺鈿倚子と書。青貝すりたる倚子之。

一いりあや　入舞の事之。

七大寺の事
東大寺。興福寺。元興寺。大安寺。
藥師寺。西大寺。法隆寺。

一しうとく　宿徳之。異成したる躰之。仁和寺の宿徳といへり。

一六ゑふ　左右近衞。左右衞門。左右兵衞。

一からの手本　唐の手本也。

一よしめきそして　由めき存て之。

一むかへゆ　對湯と書。御うぶ湯をめす時。湯をかくる花そくの義之。是は祖母御前明石さたある之。

一かへりまうし　賽の字之。朝祈暮賽。樂府ニあり。祈事のかなひたるに悦申心之。

一らうし奉るとは　領し奉る之。

一かやすき　たやすき之。

一ふくちのその　福地薗之。
やすたらがふくちのそのに種まきてあはむ必有爲の都に

一鞠の日本にての初　天智天皇鎌足入鹿など元興寺にて槻の木をかゝりにてあそばし畢。魚名。鯙鯆(イルカ)。河獱(同)。本草ニアリ。

一ぬさぶくろ　物へまかりける人のもとに。
ぬさむすび袋に入てつかはすとて。
淺(お)からぬ契むすべる心葉は手向の神と
しるべかりける
道祖神に手向する具足等入袋之。あひかたらひける人のあからさまに越こへまかりけるに。ぬさぶくろなどつかはすとて。
齊禮。(タムケトヨム)。手蔡。同。享禮。同。
麻袋。(ヌサブクロ)。米袋(ヨネ)。同。幣袋。同。

一すぎ〳〵に　つれ〳〵に之。次々。

一いとおひらかに　ねをびれたる躰之。

一つばきもち　椿の葉を合て。中にて飯の粉に甘葛を入て。色〳〵の薄様をきりて

ゆひたる物之。つばきもちといへる物之。
一さるべきからもの　から物とはほしもの之。干物之。
一はことり　一說かほとり云々。定家卿は只うつくしき鳥と之。万には杲鳥。早鳥共書。毛詩。流離をふくろふとよむ。
流離(フクロフ)はいとけなうしてかほよゝし老てはさらにみぐるしき哉
如此間一名ふくろふ之。
一みかきが原　あながち名所にあらず。大内の事之。應徳二年三月十六日。中殿御會ニ京極殿。
千世までと咲ぞはじむる櫻花御垣が原にほりうへしより
如此間たゞ内裏仙洞已下の御垣の事之。
若菜下
一すけたち　中少將達之。

一かちゆみ　歩射之。特心的の名之。李太刀歩射の法之と云々。
一としふかき　年たけたる之。
一かぶりをかへる　七十已後之。
一まどろむ　睡の字之。遊仙窟ニアリ。
一人の御涙をさへのごふ袖云々　下官の將衣袖與娘子拭涙。遊仙窟。
一ふるゝ　誑と書。たぶらかさるゝ之。
一はぶき　省と書。かへりみるとよむ之。
一さをき　小青之。至て白物は青之。
一もぬけ　蛻の字。蟬蛻。だつ。
一つまはじき　彈指と書。日本紀。
いかばかり戀の山路のしげゝればいりと入ぬる人まどふらむ
一空にめつきたる　目付之。天に四智有。天。(作物)地。人。我也。何事も隱なき之。
一つくも所　木の道の物。

一摩訶毘盧遮那　種々の說ありといへ共。朱雀院のおはします西山の寺の本尊大日にてあるによて也。御誦經ありと云心に。如此とまりたる之。

柏木

一なけのあはれ　ないがしろの哀之。
一つしやかならぬ　をも〳〵しからぬ之。
一えんのわかをつの　役若小角と書。役の行者の名之。
一つべたましゐ　つべ〳〵しき也。たとへば人にくさうの躰之。惡。つべたましゐ。
一御しうの身にとまりたる　執心のとまりたる之。
一れいはむごにむかへすへて　無期之。
一はんそう　伴の僧之。
一ふすま　被の字之。
一ざうげん　讒言之。

一わうけつきて　王氣付て之。王の相なる之。
一おはしまさへば　おはしませ之。(をはしませ)脇息をさへてまさへとあり。是をもさへておはしませ之。
一ゑみがちなる　わらひがちなる之。
一まなこゐ　眼子と書。眼の定たる躰之。
一しづかに思てなげくにたへたる云々

樂天之詩

五十八翁方有後。靜思堪喜亦堪嗟。持盃祝願無他語。愼勿頑愚似汝爺。樂天は五十八歲にて始て子を生す。仍此子を生遲となづく之。
一すみすぎて　よき事の過たる也。
とにかくに物は思はじひた〻くにうつ(古哥)(み歌)
すみなわのたゞ一筋に
一おやのけうよりもげにやつれ給へり　孝

之。孝經ニ親の喪にはかたちつくろはずと云々。此心之。

一いうしやうくんがつかにはじめて草あをしと云々　時平のおとゞの子。八條右大將保忠薨テ後。紀あり昌時に。天與善人吾不信。右將軍墓初秋青。此詩の心之。本説は秋と云字なるを。當季四月なる間。青の字に取かへられたる之。

横笛

一そのわたりにほるところなど　拾遺十六ニ云。賀朝法師。春の野を行時。つぼさうぞくの女野べにありけるを。なにわざすと問ければ。ところほると云をきゝて。

春の野にところもとむといふなるはふたりぬばかり見てたりやきみ

返事
春の野にほる／＼みれどなかりけり世にところせき人のためには

一らいし　罍(ライシ)さかづきのすがたにて。上はぬり桶の盖(モトイ)あをのけにをきたるやうなるもの之。菓子をつむ物之。内藏寮にをかるゝ物之。

一すだきあはて給　集字之。あつまりあはて給之。

一中のを　和琴第二の緒之。

一つたみ　哯吐と書。おさなきものゝこゝちかへす事之。乳あます事之。

一うちまきちらして　散米事之。散供に米をまく事之。

一ふたあゐのなをしばかり　ふたあゐとはあかばなあをばなに只直衣ばかりきたる之。

一よるかたらずと云々　夢をば夜かたらぬ事之。孫眞人。夜夢不須説云々。

鈴虫

一めそめ　目染之。紫のめゆいの事之。
一蜜をかくしほゝろげて云々　みつをかくしとは甘葛を不入といふ之。ほゝろげてとはほろ〳〵としたる之。乾字之。
一佛の御ちやうだいのうへに　佛の御いたゝきの事之。但帳臺の内に經札を置たりと云說有。是よき之。
一ぎやうがうの人に　行香之。御八講の時。公卿達僧ニ抹香をすくひて引て廻事之。
一七僧の法服　御八講の人數七人之。
一あやの御よそひ　御装束之。
一さゝら　舌字之。弁舌の事之。
一そぐとおぼし　そぎたる也。除すつる之。
一へだて心ある　松虫は人におづるゆへ之。

夕霧

一まめ人　文選。展季と書。まとしき人之。
一かり衣　かりぎぬの事之。
一やらう　逐の字。
一御つかさのぜう　右近將監之。
一かうぶりえたるとは　叙爵したる之。右近の大夫將監の事之。
一ごしん　護身。加持の事之。
一こゝろばせびと　心操をたつる人の事之。
一ぞうるい　孫類之。一族の事之。
一女郎花に一夜の宿
一とりのせうやうの物のやうに　鷹は大鷹がまさりたる之。仍妾のかちた羽を云之。
一おきなのなにがしまぼりけむ　叟。竹とりの叟かぐや姬をまぼりたるたとへ之。
一おこへりとらん　誘字之。日本紀。
一あさりとらで　求とらで之。
一あだえかくして　あだにかくして之。
一けうしたまひし　孝養し給し之。
一やうのもの　同樣のもの之。

一さらがへりて　更がへりて之。
一くろきいまだ　服の人は經営もくろふする間如此云之。
一いとおにしう　鬼のやうに之。
一かしこけれど　便なけれど之。
一すぎ〳〵し　次〳〵し之。
一なごむ　和字之。
一うつし人　現人之。空人共。

御法

一ほいあるさまとは　出家の事之。本意あるさま之。
一あさへたる　淺事之。
一れうわう舞て急になると云々　樂の序破急のきうになるにはあらず。此きうは早くなると云之。
一やゝましきとは　心やましき之。
一乞巧奠　天の村々に白くみゆるが。五色に成て水にうつるを。詞得たるしるしにする之。七夕の事之。
一河皷　牽牛の名之。
一御正日　常には四十九日を云。こゝにてはー周忌の事也。
一あをずり　青摺也。山藍にてすりたる之。
一やればおし　やぶればおしき之。破バ惜と書り。
やればおしやらねば人に見えぬべしなく〳〵もたゞかへすべら也　元良親王

幻

一ひきさけとは　ひきはなつ也。さけとは離の字。放共書り。
一明ぼのにしもざうしにおるゝ　しもはてにをは也。助字也。
一うなひ松　文選。馬鬣松。青蔭とあをやか也。

うなひ松の事也。雖多說只墓の上に殖たる松也。五粒松とて五本殖と也。生苗松と書。

一花をしみ給　惜給にあらず。只花を見給也。てにをは也。しはたすけ字也。

一おぼしたつほどにぶきやう侍らんや　にぶきは鈍の字之。おそき之。

一よるべの水　諸社にありといへども。鴨に限べき事之。

一(考要)仙名　寶龜五年始。又天長七年十二月始。

一かたみ　信字之。

一わかみやのなやらはん　儺の事。節折命婦。內裏女官之。

雲隱

一此卷は本よりなし。只名を以て其心をあらはす之。此名題にて六條院光かくれ給ふ事をしらする之。此雲隱の詞代々の集にあまたあれども。万葉集に人の逝去を皆雲隱と云り。關東人哥之。

大君は神にしませばあま雲の五百重のしたにかくれ給ひぬ

百傳いはれの池になく鴨をけふのみみてや雲がくれなむ

左大臣長屋王賜死時哥

大君のあはれかしこみおほあらぎのときにはあらねど雲がくれます

天平七年大津郎女新羅尼現願死去を悲歎歌

とゞめえぬ命にしあれば敷妙の家よりいでゝ雲がくれにき

迦旃延經非有非空門。毘勒論ニ亦有亦空門。天台大師此經論をば見ねどもさとらるゝ之。此文のごとくに卷をば見ねども。義をもつてしる之。

一源氏實に死給事不知。其故宇治宿木の卷に。

故院うせ給て後。二三年ばかりの末に。世をそむき給ひし嵯峨院にも。六條院にも。さしのぞく人の心おさめんかたなく侍けりと云り。如此なる間遁世して嵯峨にもおはしましける也。說々多。猶可尋之。

匂兵部卿

一とにかくに　左右とかく。

一いとなく　いとまなく也。

一くいたいし　羅睺羅の母耶輸多羅の事也。

一ひとつおとゞ　弟にあらず。大臣也。

一うつしをしめ　香の匂をうつししめたる也。一說うつしは薫の惣名云々。

一のり弓のかへりあるじ　賭射。大將ののり弓の御かへるさに。饗を用意したる也。此あるじは饗也。

一賭射は　淸和天皇貞觀二年正月十八日より始也。內裏の弓場殿にて射之。四府舍人射府（左右近衞。左右兵衞。）也。左右大將〔射[illegible]〕取手奏。

紅梅

一其比とは　今上御位の比也。橋姬の卷の初に。其比世にとある。おなじ時代の事也。

一のちのおほきおとゞ　野路の太政大臣。又後の大臣と云說有。但行成卿の自筆本に野路と被書間。野路の說よき也。

一つまびき　琵琶の撥ならで爪にて引事也。

一かはぶえ　うその事也。うそ笛とてくちにてうそをふく事也。

一はしがはし　端が端也。

心ありて風のにほはすその丶梅にまつうぐひすのとはずや有べき

一ふところがみ　たたふがみ也。

一もとつかの　本の香。つは助字也。

一御ふさひ　祥也。御心にあふ事也。心に相

当したる之。
一いづれもおなじごと　ごとは如之。
竹川
一源氏の御ぞうに　ぞうは孫之。
一のちの大臣　野路之。後と云は異説也。ひげくろの大臣の事之。
一わろごたち　悪後達之。女房の名之。
一さだすぎて　貞年とは盛なる之。仍盛過之。
一もぎ木　柾（紅葉）と書之。木の枝なき之。順野宮の哥合判の詞に云。したにほゝゑむ。千種に匂ふ花のあたりには。もぎ木のやうにてまじりがたく侍と云り。
一おもなけれ　面つきなき之。
一せんかうのおしき　淺香之。わろき香之。沉にて折敷をしたる之。
一とぶき　言吹と書。祝言之。壽。日本紀ニみゆ。
一なれき　女の名之。馴公と書。
一まへまうし　前にて物執申之。
一けんそうなる　顯證と書。あらはなる躰之。
一心ときめきに　心けしやうか。譬ばきもつきたる躰之。
一右のかとう　歌頭之。
一わた花　挿頭の花を綿にて作之。男踏哥の時さす之。
一ばんすらく　萬春樂之。
一またかたなりなる　未調之。
一つかうまつり人　奉公人之。
一かうがへさせ給　勘當させ給之。又かんがへさせ給之。
一あはの御とはりや　あはあはしき之。
一大きやうのゑかの君達　大饗の垣下の君

達之。

一かへり立のあるじ　歸立の饗之。

橋姫宇治十帖

一ぞくひじり　うばそく之。淨名居士云。身在家。心出家。是優婆塞之。

一かうさく　還迹之。吉事也。

一こだい　古代之。

世をいとふ心は山にかよへどもやへたつ雲を君やへだつる

一詞だみて　迚の字之。

一きすくにて　健字之。こはき心之。

一しげきの中　野之。

一なにがし　何然。

一かんなぎ　巫カンナキ。男。音ブ。覡カンナキ。女。音ゲン。

一さうじおろして　請下之。

一いらゝぎたるかほ　鳥はだの躰之。雞皮と書。

一こめかしき　古めかしき之。

一こちく〵しき　こと〴〵しき之。

一ろなふ　論なう之。無論書。

一さゝやかにをしまき合たり　細々サヽヤカ許と書。遊仙崛ニあり。ほそく少き事之。

一松のおひさき　生末と書。是は卷にあらざる事之。靫負命婦とは左衞門佐が五位に成たるを云之。四位を朝臣といふ。六位を藏人と云之。

一ぎ　儀も阿闍梨ニ問結(論議)。法門の難儀之。

一らうたけなる　上﨟しき事之。良氣と書之。

椎本

一かんすいらく　酣醉樂之。又河水樂と云々。兩說。右の舞之。

一あじろ屛風　莚屛風と書。障子の骨のやうにして。黒塗にして。あじろをくみ糸に

てとぢ付たる之。
一なまそんわうめき　只王孫の末之。王といふ姓の人四位之。
一へいしとる人　酌とる人。
一すをしよせて　簾押寄之。
一うへばらは　殿上人の子息之。上童と書。
一きほいかへり給　我さきにといそぐ躰之。前(キホフ)。
一世をさり給なんうしろの　後之。
一おほをしき　おどろ〳〵しき之。
一みだりあし　あなたこなたへありく躰之。
一かづらひげ　おもつらひげ之。凡俗の随意之。

総角

一名香の糸　行香の机の四角に結たれたる糸也。行香とは八講の結願に公卿八人して抹香を僧の手に入るを云之。

一たゝり　糸をかくる臺之。
一さはりおほく　碍。さはり。
一伊勢の御　伊勢の御とは女房のかしつく心之。
一する〳〵と　すみやかにと云心之。速之。
一世ごもりたる　とは。若ければ行末に世のこもりたる之。
一かたほ　頑の字之。かたおもひの心之。
一すきて　とはのみ入る事之。吸の字之。呑共。喰共。松の葉すきてと有。
一とのこいたる　とは言残たる事之。
一ひろばかり　八尺をひろと云之。左傳ニみゆ。
一ちかおとり　近付て後思捨たるを云之。近劣(チカヲトリ)。又近増(チカマサリ)といふ所もあり。
一けせうに　顯證と書。あらはなる心之。
一ざうやく　雑役。細々に召仕るゝ之。

一かべしろ　壁に夏はすゞし。冬はねり絹を一重間ごとにかくる之。

一常不輕をなんつかせ給　ぬかつく心之。おがむ之。法花經の說。

一なにがしの念佛　引聲の阿彌陀經の事之。

一なよびかなる　麗の字也。美麗の心之。早蕨

一はかしなど奉給へり　女房も太刀を持るゝ事也。

一しなてるやにほの水うみ　湖光(シナテル)。白氏文集。只水うみの惣名之。にほてる。同事之。宿木

一つしやか　重々しき之。

一あそびなど　管弦のと之。惣じて只御の歌をうたひて管弦するを御遊と云之。

一めゝしく　目たゝしく之。たとへば目に立といふ心之。

一ゐてありく　將行と書。つきてありく之。

一あしこ　あそこ之。

一さしぐみ　やがての心之。初の心之。

一世をそむき給し　嵯峨院と云々。

一いのちみじかきぞうなれば　命短孫なればと之。

一そしり　誹書。

一御心しらへ　心しり之。

一綾のれう　綾をるべき糸之。

一いとかしこけれども　びんなけれども之。忝といふ心もあり。

一こだに　木蝈。だにと云字。苺の類之。だにの物にくひ付たるやうにはひたるかづら之。かゞみつたといへり。

一やどり木　とは木にはあらず。但宿木ニそへたり。寄生(ヤトリキ)。ほやの事之。

一つくもどころ　作物所と書。大内の中殿

の中にあり。
一なをしもの　直物と書。除目の時執筆の違たる事之。直物とて申給之。
一たうのはい　答拜と書。人の拜賀に來時。主人おり立て拜するを云之。
一ごてのぜに　圍碁手錢之。皇子御誕生にて碁をうつ。其かけ物の儀之。
一ふずく　粉熟。粢の樣なるもの之。一切の祝の時出る物之。食物之。
一御いし　御倚子。いす之。主上の御腰かけらるゝ物之。
一やうき　楊器と書。塗たる朱器と云。白木をば楊器と云之。引入之。
一御盃さゝげてをしとの給へるこはづかひ　唯稱(ユイセウ)の事之。たとへば上より仰ある事を。さ承といふ心に。おふと申事之。
一ごぜんども　前駈之事之。

一若苗色のこうちぎ　萠黄色之。衣の色の事。
吾妻屋
一かんのこども　常陸守が子之。守をかんと云る之。
一すぎ〳〵　次々之。
一はやりかなるこく　曲(コク)(キョク)。馬(萬歟)秋樂。
一あこ　吾子書。
一こたび　今度(コタビ)。
一御くちづからごち　ひとり言云心也。
一ゆくりかに　不意と書。おもはずとよむ。思かけもなくふとしたる事之。
一御ゆする　髪あらふ事之。沐字之。
一屛風ひとひら　一枚之。
一かじけたるめのわらは　憔(かじけ)たる女童と書。
一がまのさう　降魔の相。おそろしき事之。
一うつし馬　前駈の馬之。うつしとは鞍の名之。朱さしたる之。鞍をき馬之。やまと

鞍とは金にて幅輪かけたる之。
一あて人　上臈の事之。高貴人之。妙人と書。仇人とも。
一あじろ屏風　簁屏風と書。ぬり骨に車のあじろをはりてくみてつがひたる之。
一いがたうめ　伊賀多部女と書。媒の人之。中媒人の事之。或說ニ伊賀刀女と書り。たうめは狐の事之。又云。まつりする者也。いなりの返坂といふ事あり。
一やかのたつみ　家のたつみ之。作者家持とあれば之。左作者之。
一よもぎのまろね　奚仲蓬轉するをみて車を作初之。然ば車の榻まろねの心之。

浮船

一またぶり　木の枝之。
一やまし　心やましき之。心病。
一ついたちごろの夕月夜　涅槃經ニ云。初月二日月三日あれば。朔ゝ月は有へき之。
一しびら　褶字也。
一さばみん　さらばみむと之。

蜻蛉

一やさしくとは　はづかしきと云事之。
一めゝしく　目たゝしき之。
一いかなるそこのうつぼ　空瀨と書。
一いたきものにおぼして　いたくほめたる心之。致書。至也。
一五卷の日　中日の事之。
一ばうそく　傍側と書。あらはなる事也。
一ありへはんべらむ　有侍らんの心也。有經侍らん也。
一おきなごと　老人の言也。翁言也。

手習

一(横川)なにがし　惠心僧都の事也。
一うぢの院　平等院也。

一こだま　魑魅と書。大日經。木神共。樹神共。空谷の響也。あまびこ。山びこ同也。
一いかき　猛字。
一てうじて〔大系〕　調伏也。
一よそめい　よそをひ也。
一無慚―愧也。　むざんぎとは人目もはぢぬ心之。
一はすのみやう　蓮子。盞の名之。はすのみとて。酒ののみやう也。
一ひはだ色のはかま　尼君のきるもの之。茶染色の黒ばみたる色之。
一世をこめたる　末の遠き心之。年の齢の遠心之。
一尼公まつちの山となむ見給ふかと
　誰をかもまつちの山の女郎花秋と契し人ぞあるらん
一いづらくそたち　下女の名之。屎達と書。

一あだわざ　徒事の心之。
一かへり申　賽と書。悦申之。
一碁勢大德　昔圍碁の上手之。
一ひとつはし　狼梁と書。一橋共。
一不意　おもはずとよむ。日本紀。
一あたら　可惜事。日本紀。
一いのちは葉の薄がごとし　薄葉命の事之。陵園妾が事を云にあり。
一くはんさうなど　萱草色の袴の事之。紅の黄ばみたる之。出家若は服者の着するなり。
一いつへのあふぎ　櫻の三重がさねの心之。檜扇の端を五重かさねて。扇の糸にて是をまとふ之。
一をとうとゝは　いもうとをもいふ之。
一いちのところ　左大臣の事之。一の人と申に依之。一の所書。

夢浮橋

一夢のわたり　徑(ワタリ)。をのゝわたりと云之。又云。遊仙崛ニ所の字を讀。

一谷の軒端　谷の端之。軒端同事之。只家之。家共の谷のはづれより見えたる之。一說。只谷のはづれを云と云々。

一谷の戸　同前。谷の口を云之。

一たまどのにをきたりける人のたとへ　殯殿と書。魂殿共。万葉ニ大殯と書。死たる人をゝく所之。

一ひきぼし　曳干と書。精進物之。海草之。しんはさうといふ物と云々。

一三月ばかりはなき人のやうにて　只三月とはみつき之。彌生にはあらず。三月みつきばかりとよむべし。可尋。手習の君うせ給しは三月(ヤヨヒ)之。兵部卿は此月の晦日比にむかへんとし給之。やよひ晦日之。薫大將は卯月の十日となむさだめ給ける。此兩方に思わづらひて身をしづめ給しに之。

一見たてまつる人もつみさり所なかるべし　見る人も惣をおもふと之。

此物語桐壺より手習にいたるまで。或は詞をもつて名付。或は歌をもつて名付らる。此卷夢浮橋といへる事。詞にも歌にもなし。古來より不審之。可尋。凡夢浮橋といへる事は。夢の徑のうき橋とある歌に付いていへるにや。手習の君薫の文をもみずして返されしに依て。ふみゝぬといへるに付て。夢のうきはしと名付るにや。この卷に夢といふ事。五十ヶ所あまるべし。又大將歌も山にふみまよふとあり。惣じて物語といふは。色にふけり身をあこがらすにはあらず。盛者必衰のとはりをしらしめむがためなり。世中になにか夢にあらずといふ事なし。しるす

にいとまあきあらず。此巻ひとつの名あり。法の師ともいへり。歌によれり。

法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ
山にふみまよふかな

依て法の師とも可名付歟。夢のうきはしといへるも。此歌のふみまよふかなといふに付て名付にや。有無ともに夢之。猶可尋之。

本云

此一札二條家之秘書。宗祇庵主自筆之本。宗長傳之。努々不應有他見者也。

于時應永廿六年春下澣書寫之訖。

源氏の物語のおこりは。村上天皇の御むすめおほゐ齋院選子内親王上東門院に御消息ありて。春の日のつれ〴〵に侍るに。さるべき物語たまはらんと申させ給へるに。女院の女房越後守爲時が女式部の局をめして。いかなる物語をかたてまつるべきと仰あはするに。式部申さく。おちくぼ。いはやなどはめづらしげなくや侍らん。あたらしくつくり出て御覽ぜさせ給たらんは。申させ給たるかひも(侍る)僞なむと申に。さらば思はからひてむやと仰られければ。心みにもしやとて。石山にまうで、この事をいのり申に。おりしも八月十五夜の月水海に浮て。ことさらあきらかなるをみて。そゞろに心のすみけるまゝに。六十帖のうち第三の巻をとにたぐひなくつくれり。これによりて紫式部といはれたり。是をつくりたる心ざしは。かの業平の中將とて。阿保親王の御子伊豆内親王の宮にむまれて。そのしなたぐひなし。又かたちきよげに。やまとわざにたへなりしをまなびて。光源氏の君となづけいたせり。そのふるまひかの二條五條のふたりの后にまい

りしになぞらへて。薄雲女院二條内侍がみにかよはせ。六條の御息所のむすめの齋宮にともなひくだり給し別をおしむ。これのみならず。さま〴〵なさけをかけちぎりし。ある說には。西宮左大臣高明のおとゞは醍醐の御門の御子第一番の源氏にて。みめかたち世にすぐれ給へりしを。叉光源氏にたとへ。我心にしめたてまつるによりて。紫式部の名によせて紫上をあらはし。大宰權帥にうつされ給しを。須磨の浦にしづみ給ふわかれになぞらへたり。

まことにおもふよしなくて。いたづらにかきいだせるにあらず。たゞさりげなくておほやけわたくしにつけつゝ。人の心をつけ。やまともろこしかねて。ものゝなさけをしらしむ。六十四帖のうちに男女のよきあしきふるまひをあらはし。三四代のあひだに君も臣も身をあはせ事をのせたり。おほよそ管弦のみち詩歌のおもむき。時につけてさとらしめ。ことの葉によせてをしへずといふ事なし。

續群書類從卷第五百十七

總檢校保己一集

男源忠寶校

物語部十七

類字源語鈔

以

いと

㝡。文集。

いたう

甚。傷。萬。痛。万。

いたし

痛歟。野分ニ明石ノ上ヲ云ニ。ウチギ引ヲトシテ。ケチメミセタルイトイタシ。若紫巻ニ。明石新發家イトイタシトイヘリ。漂洽巻ニ。乳母ヲ下ス所ニ。哥ノ返哥ナレテキコフル。イタシト覺スト云。御幸巻。又三條宮玉鬘方ヘノ文ヲ源氏見給テ。古躰ナレドイタシヤ。

いさめ

諫諍。禁。イサメ。制ス。

いかめし

[illegible]。文選。[illegible]々。

いたつく

勞也。煩也。イタハリカシヅクニモ用。心ヲイタツカシウスルニモ用。

いむ事

戒也。私云。物ヲ禁ズルハイム也。

いひそし　哥字二ハ両義有

云欽也。シヌバカリ云ヲイヒソシト云。又云。訴。是ハ云ヒウタウル也。心別也。云ソスモツヨク云也。私云。凡ソスト云コトヨロヅニワタル也。シイソスト云ハ。酒ヲツヨクシキタル也。笑殺。愁殺ナド詩ニ作ル同心也。

いはけなき

幼稚形(イトケナキスカタ)。日本紀。無意分。

いとなく

無暇也。私。隙ナキ心。私。空蟬ヲ云ニ。春ナラヌ木ノ目モイトナク。

いはけ　両義有

意分。驚騷。イワケタル。日本紀イトマナキ。紅葉賀巻ニ。心ナゲニイワケテキコエ。イヒワケテ也。螢巻ニ。マタイワケタル。私云。詞ハ同ケレドモ。心ハカワルコトアリ。ヲサナキヲモイワケト云。幼稚心。

いざよふ月

山ノハヲ出ントスルヲ云。私云。ヤスラウ也。十六夜月ヲモ云。私云。夕ニ月ノ影ノ指出タルヲモ云歟。

いつき

卌(イツク)。カシヅク心。嚴。是ハ嚴重莊嚴心也。私云。雨ナガラ詞同ケレドモ心カハル。所ニヨルベシ。花宴巻。アザレタルオホ君姿ニテイツカレ入給ト云ヘリ。又イツキノ宮ハ齋宮ノ事ナリ。別事也。

いかき

辛。忿怒。フンヌノイカモノ。葵巻ニ。六條御息所人ニ付時。夢ノ中ニタケクイカキヒタブル心出來テトイヘリ。私云。猛烈ノ心也。ヒタブル心ハ純一ノ心。太字。

いきすだま

遊仙窟云。窮鬼故調人。注云。魄與鬼通云々。
葵巻。御息所靈也。私云。生靈也。イキスダマ。

いでたち　両義各別

世ニ出立交ル也。若紫ニ明石入道ヲ云ニ。大臣ノ御後ニテ。イデタチヲモスベカリケルヲト云。私云。是ハ出身ノ心也。又ハ旅ナドニ出立心別ナリ。

いまやう色

有花鳥餘情。

いりあや

入綾。舞ニ綾取手トテアリ。紅葉賀ニ見ユ。

いぶかし

不審也。ヲボツカナキ也。

いちはやき

スミヤカナル也。

いつゝのにごり

五濁。

いふよしなう

無云由。

いましめ

ツゲシラスルナリ。誡告。警命。明石ニ。イマシメノ日ヲスグサズ。此由ヲツゲ申侍ラン。入道ノ夢ノ告ヲ云也。私云。所ニ依テ心別ナリ。

いちめあき人

市女商人。私云。市女笠キテ物ウル鬻女也。

いそしく

イソガシク也。私云。カルラカナル心ナリ。近江君ヲ云。

いますかりけり

オハシマスナリ。私。イマシマス也。

いきまき給

意氣巻。息巻。イカル皃ナリ。若菜ノ上ニ。大后ノ坊ノ始ノ女御ニテ。イキマキシ給シカ

ドヽイヘリ。

いろう

求子。神樂ニ名。

いうそく

優息。（両義）又族。乙女卷。若菜上。亦有職。所ニヨル。若菜下ニ。只今有ソクノ。

いもい

齋也。精進。文集云。十三年來坐ㇾ對山。唯將無事他人間。齋時往々聞鐘笑。一食如何不可閑。若菜ノ下。山御門御賀ニ。サマ〳〵ノ御法服イモイノ。又イモイノ御鉢トアリ。

いちこちてうにはちのをたてゝ

撥絃ハ調子ヲツカサドル宮ノ絃ヲ撥ノ絃ト云歟。八絃一越調。箏ハ八緒ニテ。發合モ手ズサミニモアレバナルベシ。壹越調土用ニトル。

いかたうめ

伊賀刀部女。中媒也。齋宮寮部女狐也。或云。ヲマツリシケル者也。イナリノ返坂ハカレガツクレルトナン。

いらゝぎ

橋姫ニ。サムゲニイラヽギタル。私云。身ノ毛ナドノ竪テ。膚ノ如粟ヲ云之。

いむつくる

印也。眞言印。常夏。

（家）い（左）とさこと（様々）〳〵しきは

嚴重ナル涯。私云。若菜ノ下。イトヽ句ヲ切テ。サトヨミ切テ。コト〳〵シキハト可讀。

いそ寺

若菜下。イソ寺ノ御誦經。或寺ノ名也ト。不用。私云。五十寺也。源氏四十賀時。四十寺ト云同事之。

いか

五十日也。百日ヲモヽカト云。

いますからうや

ヲハシマスヤト云也。タケ川。

いたちの侍らん

東屋。ヒタチノ詞。マカケサシタル心也。

いつへの扇

手習ニ。カミハ五重ノ扇ヲヒロゲタルヤウニ。私云。手習君尼ニ成タル髪ノ躰ヲ云。五重扇事。三重ノ扇ノ所ニ註ス。

いきたえし（う歟）

イキタウシト思シヅミタマヘル。不生。玉葛巻。

いびき

鼾睡。

いで

厭乞。常夏ニアリ。俗ニ人ニ物ヲ乞トテイデト云。又イデ我ヲ人ナトガメソ大船ノ。古今ニアリ。イデハ發言ノ詞別也。

いつかしき

玉葛ニアリ。天下ヲ御心ニカケタル大臣ニテ。イカバカリノイツカシキ御中ニト云。私云。嚴字。

いとゞしく

私。イツシカ也。イトハヤキ心之。

（ヨコフエ）いてはなち給

私云。弓ニテ矢ヲ射放心歟。

いてゐんが

出居。榊巻御息所ノコトバ。

（トコナツ）いしぶし

鰕。

（若菜下）いみをだに心の鬼に

忌字歟。人ノ思ハン事ヲ忌ハヾカルコトカ。

若又諱名歟。

（サワラビ）いひくたさまほしき

言腐也。イヒケツ心。
いらへし給へ
私云。サシイラヘノ心歟。トキト云心。
呂
六十巻と云文
天台宗本書也。玄義。文句。止觀。各十巻。天台大師御作。尺籤。疏記。弘決。各十巻。妙樂大師尺。
ろうせらる
嘲哢。
ろなう
無論。
波
はしたなめ
鬼鬼。日本紀。私云。ハシタナゲニ云ハヂシムル心之。イマシムル心モアリ。
はしたなき
半無。非常儀。私云。ハシタナキハ。カラクハチガマシキ心歟。
はかなき
無道。日本紀。墓無。私云。アダナル心ナリ。
はださむき
膚寒。タノ字濁 極寒入骨。將寒。タノ字澄 秋風大入。
ばうそく 同心兩說
傍側。私。飽足。ノキバノ荻ヲ云。
はねをならべ
比翼鳥。
はらから
兄弟。日本紀。
はふれ
放埒。私云。ヲチブレタル也。
はなちがき
放書也。文字ヒロヒトモ云。私云。手本ヲ放レテ心ノマヽニ書ヲ云歟。
はうし

拍子。

はなしろめる

臆シタル貞ナリ。

はなましろき はなまじゆけれど一紅葉賀

追從シタル心。私云。追從シテ虛言ヲ云人ニハ。鼻ノウゴキホヤメクナリ。目ノウゴクヲ目ノマジロシクト云ガ如シ。

はらぎたなき

腹グロキ也。

はつしやう

八省也。

はうとう經

方等經。

はちふく

發腹。ハラタツ也。紫明ニ蜂ヲ拂心也云々。蜂吹。

はゝふき給 兩義ニ訓

省。濁。羽菅別心也。澄。省。々略心也。又ハ羽菅心。私云。若菜ニ。御息所ノ物ノ氣ニ出テ云。コト人ノ云ヲトシメンダニ。ハブキカクシ給ヘトコソトアリ。是ハブキハ只見カクシ給ヘト也。別心也。

春の鶯囀

ト云舞。春鶯囀。壹越調。

ばんすんらく

万春樂。踏哥曲之。

はこ鳥

杲鳥。万。貞鳥。容鳥。春鳥。或ハカホトリ。

はる秋ノ行幸

朝覲也。禮記云。春見云朝。秋見云覲。

ばう

春宮坊。桐壺。

はなのなかのやどり

ハチスノ世界。

はかりごちて
私云。アザムク心歟。
はやうは
ハヤウスミシ所ナド云ハ。ムカシ住シトコロナリ。モトノ事ヲハヤウト云也。
はいあひかたき紫の（灰 合 難）
槇柱哥ニ云。カクバカリハヒアイガタキ紫ノト云々。紫ヲ染ニハ。椿ヲ焼テアクニスル也。古歌云。柏木ノイハタ染テウムラサキノアハンアハジハ灰ノ心ニ。
はちのを
一越調ニハチノヲヽタテヽ。私云。其調子ノ位ノ絃也。
はむそう
伴僧。
ばうがね
匂宮。坊ガ子也。

ばい給はず
奪也。夕霧ニ。アリシヤウニモバイ取給ハズ。
はすのみ
蓮子。手習ニ。スイバンハスノミヤウノモノト云。私云。蓮子ノ如ナル青磁盃也。
はくこう
白ヲツラヌク。燕太子丹故事。
はかせ（両義葉風 太刀）
藤裏葉ニ藤内侍ノ返哥ニ。ハカゼナラデハトキコエタリ。折桂葉風ニ博士ヲソヘタリ。
又太刀ヲ云。

仁

にげなく
無似氣。無人間。私云。少シホムル詞ニモイヘリ。ニゲナカラズトモ云。ニツカハシク宜ト云詞歟。

になく
無二。第一ト云心。ナラビナキ也。
にぎはゝしき
富饒。箒木雨夜物語ニアリ。
にし河より 西川部
桂河也。
にこやか 梅かえニニコヤカナル方ノナツカシキヘトイヘリ
濃艶也。莞爾。ニツコトワラウ之。
にほはし給はざりける
カネテイハヌトイヘル心ナリ。
にばめる
服ノ衣ノ鈍色メカシキヲ云。
にのまち
二町。ツギノ町ト云ナリ。御厨子ノ重々ナル内。第二ノ品也。
にげついたる
似氣付。ソノ人ニ似アヒタルヲ知ラントト云心ナリ。

保

ほうじ
法事。
ほのめき
髣髴トホノカナリ。
ほそなが
未通女ノキルカリギヌノ。クビカミノ様ニタテヽミワタソノ物也。水原云。未通女着用也。然ドモ可然人。モシハ后立女御參時。ヲトナシキモ着用スルナリ。組ニテ紐ヲツクルナリ。
ほそろくせり 保曾呂久世利
長保樂ノ破也。急ハ賀利夜須。右樂。名ハニクケレドホソロクセリ。紫上ニ等ヲシヘ奉給フ所。
ほんさい

本才。文集。夕霧ノ一條宮柏木ノ本上。カヨヒタマウ所ニ。僧都云詞。又本妻。

ほきたる

模規タル。メヅラシキ也。

ほがらかに

朗。アキラカナルナリ。

ほうさう寺

法成寺。法性寺。宇治邊也。用之。

ほぐ

反古。私云。ホングトヨムベシ。

ほろゝけ

ホロメキタル也。私云。明香ニ蜜ヲマジヘズシテ。ホロヽケタル事ハ。蜜ハ生類ノ成故也。乾キタルコヽロ。

ほうげづく

法氣付。箒木ニ。吉祥天女ヲ思カケントスレバ。ホウゲヅキクスシカラントト云々。心ハ天女ナレバ佛法メカシク。醫師毒ナドヽテ物嫌ナドスルヤウナラント云也。

ぼんじとかいふ

柏木ノ手ヲ云。梵字ナリ。

ほそどの

弘徽殿ノホソドノ。廊。秘說。

ほうゆがめて

方曲也。

へ

へいしなど取らせ

瓶子。シヤクトル也。

べいじう

倍從舞。

へん

（傍注）篇突也。玉篇ノ中ナニヘンノ字トサダメテ。シリタル字ノ多少ニテ勝負スル也。

篇。橋姫ニ。コトヲシヘ。恭打。ヘンツキ。オ

ホヒ君中君事。
へんもはなれぬ
宿木ニ。弁尼薫ニ。東屋ニ故北方ノ御メイ。
ヘンモハナレヌナカラヒニト云。
止
とじき
トンジキトヨムベシ。屯食。ツヽミイヽ。桐
壺。源氏元服所ニアリ。
とうて給
取手給。
どうもなく
動無。ウゴキナク也。
ところせき
所狭也。
といて 両義各別
外出。取出。常夏ニ。姫君ヲスコシ外出給ト
テ。物ヲトリイダス也。

とけて
ツカサトケテ。解官ナリ。私云。解官ニ在リ。
とをつら
理―。喪―。病―。
十烈。童隨身十ツラ。
と(十)をは(廿)たみ(卅)そよそ(四十)
簷バノ荻ノ碁打所。指ヲ龜テ地ヲ算ル也。
とりゆ
取由。箏ノ左手ニアリ。七ノ絃ト爲ノ絃トハ
由スル也。コトヲホムルニ。由ノ音フカクト
イヘリ。
とりてう
鳥蝶舞。
とうをひねりて
筒。双六ノ賽ヲ盛竹也。常夏。近江君双六打
所。トウヲヒネリテ。セウサイ〱トコウ。
とりのせう(小)

夕霧ニ。物ヲヂシタル鳥ノセウヤウノモノヽヤウナル。鷹ニハ雄ヲ小ト云。雌ヲ大ト云。俗ニセウニナル。セウカウヒネルト云常詞也。鳥ノセウカウヒネルト云ハ。鶏ノ負テ背ヲクヽメテニグルヲ云。

とのもりのくそ
手習ニ。トノモリノクソアヅマトリテト云。クソハ女名也。古今作者ニモアリ。トノモリトハ。其所ヲマボル人ヲ云。

とぢめむ
閉ナリ。ヤミトヾマルナリ。

どこ
獨鈷。三—。五—。佛具。若紫。源氏中將ワラハ病マジナイニ。北山ニヲワス僧都。ドコタテマツルトアリ。

とうたまはぬ 間絡不
トイタマハヌ也。

とのゐ物の袋
秘事ナリ。別ニ在口傳。

とし
初音ニ。千年ノカゲシルキ。トシノ中ノイハイゴトヾモヲシテト云。ヲノガトシ也。トウ例ノ事ナリ。

ときよくて
御時ヨゲナリツルハト云リ。御幸ニ。三條宮ニ六條院内大臣ト對面ヲ云。

とみ
イソギト云心ナリ。

知

ちやうぶそうし
齋宮司人也。長奉送使。

ちしのへう
致仕ノ表。

ちえだつねのり

千枝。常則。二人繪師。在高明錄。

ぢしき

ヒロムシロ。地敷。御茵。脇息。

ちうさすこと

柱。琵琶左手。私云。ビワノ柱ハ四也。四絃ヲ一柱ゴトニノセテ。各四々十六也。一乙行上一柱。口下七八二柱。凡十比ト三柱トツ乞之也。四柱突歟。

ちす

帙簀。チスノカザリト云ヘリ。竹ヲ簾ノゴトクニ編テ。錦綾ヲ裏付テ經一帙ヲ置也。チツス也。

ちかきまもり

近衛大將。

ぢぶつ

持佛。

ぢ〔兩義〕

地也。持也。夕顏巻ニ空蟬碁打所。ソコハヂニコソアラメ。〔以歟〕次持正トスベキ歟。卅四十トカゾヘテ劫ヲタツル也。或云。ソコハ地ニコソ。以地爲正。

ちりぼひ

玉鬘ニ。筑紫ニテハ口惜カラヌ人京ヨリチリボヒ來ルト云。私云。塵バミ來也。サシモナキモノヽチリニ交ル心ナリ。

利

りうじ

臨時。初子ニリウジカクト云。

りうじかく

臨時客。子日ニ。ケフハリウジカク。

りんのて

〔臨イ〕輪說。樂ニメヅラシキ手ヲ引ヲ云。箏琶。

りんじのまつりのてうがく

調樂。箒木。臨時祭。十一月中午。賀茂ニテア

ルベキ樂ヲ。內裏ニテトヽノヘラルヽ也。臨時祭ハ寛平九年ヨリ始。北祭ト云也。南祭トハ八幡ノ臨時ノ祭也。

奴

ぬかつく
額突。稽首。

ぬき河
催馬樂律。

ぬさ
幣。麻。旅行ニ出時。道祖神ヲ祭テ錦錢散米ヲマクヲ云也。勸酒テ祭神。人ニモ勸之。餞送ト云。

ぬさぶくろ
拾遺ニ。人ノモトヘ。ヌサヲ結テ袋ニ入テツカハストテ。

ぬすまはれ
末摘巻ニ。ヌスマハレ給トアリ。ヌスマレ給ヘト云ナリ。ヌスマレイデ給ト云ハ。吾身ヲ人ニ知レズシテヌスミ出ル也。

留

るい
親類也。玉篇ニ大夫監ヲ云ニ。ルイヒロクテトアリ。

遠於合入。私云。をハ音緒。平聲。於ハ音尾。去聲。以此平去之響自余之詞モ可知也。

をよすげ
助及。日本紀。

をもやう
若紫ニ紫ノ上ヲ云ニ。ツラキオモヤウ。(ツ脱歟)イトラウタゲニテト云ヘリ。

をもたゝし
ヲモテヲコシト云心也。面立。面目アル躰也。

をば
北方。祖母。和名オバヲトヽ。或大北方ト云。

祖母ヲオホハヽト云。祖父ヲオホチヽト云。

をかしき
ヨキ事。メヅラシキ事。ホムル詞也。夕顔ニ。ナキ給サマイトヲカシ。小野篁記ニ。ヲカシキ事ヲヤサシカラマシト云々。私云。此詞類多シ。ヨキ事ヲウラヲカヘシテ云也。惡事ヲユヽシト云フガ如シ。

をりゞつ物
折物。

おほそう
大惣。箒木。

おさ〳〵
漸々。和名。幹了者。日本紀。軌制。同。治天下。匡房記。優。長。私云。此詞所々ニ多在之。依所心カハルべき歟。

おのがじし
各競。日本紀。各自恣。各寺師。人死スラシイモニコヒ日ゴトニヤセヌ人ニシラレズ。万葉。人丸。秋風ノ四方ノ山ヨリヲノガジヽ吹ニ散ヌル紅葉カナシモ。新六。私云。各自身歟。我モ〳〵ト云心歟。又我ドシト云心。

をいさゝこもれる（小大籠）
窓ノ中。小大（チイサキ）。苗。同。箒木雨夜物語ニアリ。

をぞまし
形遠。文選。をずまし同。私云。ウトクヲソロシキ心也。

をそき人
ヲソロシキ人也。宿木ニ在。

をとなひ（兩義各別音義也　生長義也）
喧響。日本紀。箒木ニ。衣ノヲトナイハラ〳〵トシテ。私云。をとなひ。ヒヲ濁テヨメバ生長也。別心ナリ。

おほどか
令序ニ。義穏（オホトカ）ニシテ情理難通云々。

おほどき
同。カトキト五音通。
おはそうず
ヲハシマス也。
おまし所
寝殿。茲。ヲマシムシロ。私云。尙書云。衞康
叔敷茲（ミマシチ）。只おまし共。御座也。
おぼしくだける
又ハたせる。思下ナリ。思砕也。
両義　おもと
侍者。ヲモト。ヲモト人。某ノオモト丶女ヲ
云稱號常ニ在リ。或御許也。
をれ〳〵しき
ホレ〳〵シキ也。ヲレ物ト云同心ナリ。をれ
てとしふる同。
をれもの
ヲロカ者也。繪合ニ。筆トルワザト碁打事ト
コソ。フカキラウナクミユルヲレモノモサ
ルベキニテ。書ウツトアリ。
おほい君
大君。王姓也。諸王孫王ヲモ云。おほ君。同。
玉鬘ニ。和琴ヲシヘケルフルヲホ君ト云ヘ
リ。
両義各別　おほしたち　思立歟
生立歟。ヲホシタテ也。チトテト音通。
おほしく
男々シク。大ヤウニケタカキ也。私云。雄略。
チホシク。日本紀。雄。同。抜。同。
をどろ〳〵しく
驚心也。
おほとなあぶら
オホトナアブラ。オホトノアブラ。所々ニ云
替ル也。同。
おほ君すがた

直衣姿也。

をさめみかは

八雲抄云。ヲサメハ下女也。ミカハヽヒスマシ也。私云。ヲサメ。古注ニ箴(布織具)。ウル女ヲ云也ト云々。不用。家中ニ物ヲ納ル下女也。ミカハヒスマシト云々。不淨ヲ河ニ持テ洗ヒスツル下女也。丸ト云桶ニ不淨ノアルヲ。生好絹二幅ヲ縫連テ。兩ノ端ヲムスビ合テ。此丸ヲスヘテ臂ニ懸持出ナリ。此女ヲヒマスシト云。スマスハ濯也。

をひれ

小ヲサナヒレ也。ヤハラカニヲヒレタルモノカラト在。

おほみあそび

オホミキアソビ歟。私云。大ナル御アソビ也。古今雜部ニ在。

をこたり

浮舟ニ。ツキセズ戀シキニモ。身ノヲコタリトナゲキソヘタリ。懈怠ノ義ニハアラズ。身ノオロカナルナゲキ也。

(兩義)おくたかき

奥高。臆高。乙女ニ。オクタカキ物ト云ハ。物モヲポヘズト云々。物ニ臆スル也。奥高トハ奥義ヲキワメタル高才者ト云々。臆高トハ臆病ノ高也。私云。モノモ不覺トアレバ臆高歟。

おむとしみ(おほんイ)

御賀也。德大寺公繼公ハ試樂也云々。或注云。御年滿ト書之云々。

おほみをつぼ

御ミ大壺。御ノ重就。近江君詞。私云。小便筒也。

おむ

詩哥タキ物ナドニ。ミナ誰ヲカカント在。若菜

下ニ。大將ノ御。內侍ノスケバラノ次郎君。紫式部記云。上東門院御產所ニ。內侍ノカミノ御。中務ノメノト。ヒメギミノ御。少納言ノメノトヲシ入キテト云々。是モ御ヲ上ニ付テヨムベシ。人ヲ御某ト不可云哉。

をちぐり色（落葉色）

コキ紅ノ袴ト云々。但紫歟。隆行源氏上句落栗袴應紫云々。下句三野加賀紫ノネリ袴歟。行幸ニ云。ヲチグリトカヤ。昔人ノメデタクシケルアハセノハカマ。

おにしき人

鬼メカシキ人也。玉カヅラノケサウ人筑紫大夫監ヲ云。青表紙本ニハヲソロシキ人トアリ。

おほどけたるこゑ（兩義心別也）

抄ニ馬カヒヒサイメナドノ大デヲヨバヽル聲ト云々。私云。又オホドカナル聲トハ。上臈シクケ高キ聲也。ソレハ別也。所ニヨルベシ。

おきなごゑ

翁言也。

おほきみけしき

大樣ニノサナル歟。

おひらか

眞實コト云心ナリ。誠云心歟。老人ハコトウルハシケレバ云歟。此コトバ所々ニアリ。同心也。

おやなしに

ふせる。不恭也。科照ヤ片岡山ニ飯ニウヘテフセル旅人アハレヲヤナシ。

をしかいもと

凡垣下。乙女ニ。ヲシ（凡）カイモト（垣下）アルジ（主）ハナハ（甚）ダヒザウ（非常）ニハベ（侍）タウ云。垣下公卿歟。

おほんべ

贊也。御幸。御べ同。私云。古今集事書ニ。オホンベトイヘル。大嘗會ノ事也。

をし

宿木ニ。盃ヲサヽゲテヲシトノ給。進食。日本紀。神功皇后夏四月壬寅。到火前國松浦縣。而進食於玉島里小河之側。

おして

押手。紅梅ニ。琵琶ノ押手。柱サス事也。

をのら

己等。若菜上。

おいやきゝし人

宿木ニ。薫大將宇治ニ來ル車ヲ問給ヘバ。常陸前司姫君ト申ス。ヲイヤキヽシ人ナンナリト云々。領納ノ詞也。

おい

同詞。玉鬘大夫監詞ニ。オイサリ〱トウチウナヅキテ。領納詞。

おほひちりき

大篳篥。末摘ニ大ヒチリキ。サクハチノフエ。天台大師作。今無。一尺八寸。舌一寸八分。

をとしかけ

東屋。オトシカケノ高キ所ニミツケテ。紫明。自高至低也。道ノ凸凹也。

をくらさせ給

殿字也。論語鞭殿。北山へ君達御迎ニ参給。若紫詞ニ。アサマシウヲクラサセ給ト恨テ。

おほけたる

ホケタル也。毻書之。披柱云々。

をいかれたれど

老枯也。總角ニ。阿闍梨老カレタレド。イトタウトククウツキテ。

和

われかのけしき

我歟。我ニモアラヌ也。

わざ
事。行幸。

わらはやみ
瘧病也。

わろもの
虛俗。遊仙窟。

わうみやうぶ
王命婦。王氏也。命婦女司也。

わらけて
童氣。

わかんとをり
皇孫也。王家無等倫。法花經云。世雄無等倫。
是佛御事也。說々雖多。以王孫爲正。

近江のせたなてくしをさし給ふイ
わかれのくし
齋宮下向ニアリ。

わららかに

和字歟。玉葛事。

わたり川
ミツせ川。三途川。

わかな
若菜ニ。正月廿三日子日ナルニ。右大將北方
若菜マイリ給。源氏四十賀同云。廿三日御ト
シミノ日ニテト云々。

わうけづく
王氣付。柏木ニ。女御ノ宮タチハ。御門御方
サマニワウケヅキテ。

わかゞみ
・若髮。花散里ニアリ。

わうばむ
宿木。中宮御産ニ。カホル大將。産養ニ屯食
五十具。ゴテノ錢。ワウバム。

わかなへ色
宿木ニアリ。薄萠黄色也。

わらうだ
圓座也。
わけなう
無飫氣。
わらわけて
方分。朝顔卷。
加
かよはく
猶使蚊負山。莊子。
かしこき
賢。威。左傳。
かたえ
片方。片枝。傍輩ヲモ云。
多義かごと
誑。カコツ。誓言。加言。カネゴト。コトバチクワウ。私云。此詞
所ニヨリテ心カハル也。カコツクル也。カコチガマシキ也。スコシキ也。

かくろへど
隱事ナリ。
かくれば
隱庭。
かゝづらふ
カヽリヘツラウ也。私云。カケシロウ也。
〔左三行據イ本補〕かえふ
荷葉ハ夏ノ薰物也。春梅花。夏ヽヽ。秋菊花。
侍從。冬玄方。
両義かきほ
垣尾。垣蘸。垣外。
かいまみ
覗其私屛。日本紀。第三。ウカヤフキ不合ノ尊
ノ產屋ヲ火々出見尊見給シ也。又垣間見。
かわらか也
ナマメクニ對シテ云詞也。
かうれう

廣陵散。琴ノ秘曲也。夢ニ老人來テ嵆康ニ授シ曲也。

かたほ

覘也。凡也。片耄（カタホシ）。延喜式。私云。イトケナクカタ〔リ歟〕ナリナルヲモ云（カタクナシ）。

かるの御ぞ

狩衣

かゝげのはこ（ヒンクツクスルハコ也）

掻上函。男具。

からくしげ

唐匣。私云。賭弓日着用スルナリ。

かんやがみ

紙屋紙。

かいねり（搔練）

両面フクサハリニテ。ナカエナシ。タヽ絹ノフクサハリ也。白モ赤モ。或本云。カイネリハ紅ノフクサニテ表裏同色ナリ。

かいしろ

垣代。輪臺舞ニ在。或廿人。或四十人。舞臺廻ニ立。

かれうびんが

迦陵頻迦。卵中有聲勝衆鳥。

かはほり

扇名也。私云。蝙蝠ヲミテ扇ヲ造初ル也。

かたむ

奸。カタマシキナリ。

かるめろう

輕弄。

かいつ物

海物。日本紀。髻廣物。髻狹物。礒物等。須广。

かへさひ

覆。ウケヒカヌ詞也。乙女ニ。寮試ウケンニハ。博士ノカヘサウフシ〱ト云々。私云。是ハクツガヘス也。又冊子ナドノ丁ヲヒロゲ

カヘス心モアリ。又カヘサヒ申ト云ハ。ウケヒカヌ心モアリ。所々ニヨルベシ。

かうさく

遑迹。須磨ニ。イトカウサクニネビマサル。藤裏葉ニ。（夕霧大將）眞人ヲイトカウサクニネビマサルト云。或キヤウサク。同コトバナリ。

（兩說用意）かうこのはこ

香粉筥。香ノ粉ドモ入也。源氏㝡秘抄ニ。香壺函。圖ヲ出ス。用之。

がくさう

學生。

（兩義各別）かうし

考辭。勘當也。又講師。鈴虫ニ。堂カザリハテヽ。カウシマウノボル。

かごかなる

私云。圍ヤカナル也。

かみながらの人

上ザマノ人也。

からのとうきやうのき

唐東京錦上品也。初音巻ニモ在。或說。東京ノ錦ハコヽ錦也。仍テ唐ノ字ヲ加ト云說アレ共。只唐ノ東京上品也。

かざしの綿

男踏哥。十四日。以綿花ヲツクリテ。冠ノヒタイニ指也。ワタノ花カザスト云。私云。高巾子。幞冠トモ云。

かへどの

柏梁殿。東宮御所也。

かけ（霧）りこ（來）まほしげに

來タゲナル。

（兩義各別）かて

難キ也。私云。カヘリガテニ。イネガテニト云心ナリ。又カツ〳〵ノ心モ在。淡雪ノツモレバカテニクダケツヽト云ハ。カツ〳〵ク

ダケ消也。

からのけもんれう

俊成卿本云。唐花文綾。以眞名書也。私云。ケモンレウトヨムベシ。

かじけたる

カケチイサキ也。蘭ニ。カジケタル下ヲレノ霜モヲトサヌ小ザヽ也。私云。憔悴歟。

かざしのたい

かけはなれたべる

カケハナレ給ヘル也。

かしはぎ

俊成卿自筆本ニハカシハギ。定家卿本ニハカシワギ。源氏方ニテハ。ハワノ文字沙汰アルベカラズ。

兩說詞別心同

かよへるすがた

タヲレル也。初音ニ踏哥所ニアリ。匂宮巻ヤドリニマヒテカヨヒケル袖。紫明ニ。求子舞テカヨレル袖トアリ。舞ノ袖カヘス事也。初音ニ。竹河ウタヒテナヨレル姿。ナツカシキ聲々ト在。私云。ナヨレルカヨレル同詞也。

かすいらく

アフテ。河水樂。一越調。或ハ酣醉樂。右樂。何モ時ノ興ニ合ヘドモ。酣醉樂ハ右ノ樂ニテヒリメキタル。イカヾト覺ユトイヘリ。

かいせんらく

海山樂。近代海青樂。黃鐘調。

かんわざ

神事也。

かや〳〵

カヒ〳〵シキ也。カヤ〳〵ト云ハ。カシガマシキ義歟。宿木ニ。カヤ〳〵ト云ヲセイシ給フ。

かまのさう

降魔相。

かほどり

良鳥。容鳥。春鳥也。若菜上。深山木ニネグラサダムルカホ鳥モ。又ハハコ鳥。杲鳥。ハコ鳥ヲ万ニハ用也。宿木ニ。カヲ鳥ノ聲モキヽシニ通ヤト茂木ヲ分テ今日ゾ尋ル。或云。常州ニカホ鳥ト云鳥アリ。此鳥鳴テ後郭公來也。下說ニハカツホウ鳥ト云。又カキツバタヲカホヨ花ト云。此花サク時此鳥來云々。仍カホ鳥ト云々。カホ鳥有口傳。

かちゆみ

大弓也。若菜下ニ。コユミトノ給シガ。カチ弓ノスグレタル上手ドモ在ケレバ。メシ出テイサセ給ト云々。私云。カチ弓ハ步弓也。又ハ勝弓ト云說アリ。弓ニ眞草行アリ。ムユミハ眞射也。カサカケハ行ノ射也。犬ハ草射也。

かづらひげ

抄ニ雜色ナドハ鬚ニ鬘ヲカクルナリト云々。又ハ葛ノ如ニ生ヒロゴレルヲ云歟。

かずより外の權大納言

還任。員外納言。明石。源氏任給。

かうさしの

カウサシノイトモ世ハナレタルハ。初音ニ在ㇾ開也。此詞定家靑表紙ニナシ。可ㇾ勘。

からもり(唐守)はこや(藐姑射)のとじ(刀自)かぐや姫

皆物語名。繪合。私云。眞名ニハ唐守ナレドモ。ヤワラゲテカウモリト云。或カラ守。

かくごむ

トテタチ。藤袴。格勤給文。

かべしろ

壁代。

かうせつ

講說也。

かうぶり（冠）をかけて
若菜下。年深キ身ノ冠ヲカケテト云リ。
かん〳〵（カウ〳〵シキ）しき
神々也。夕霧ニ。此鬼コソオソロシクモ非ズ成ニタレ。カム〳〵シキケヲソヘバヤト在。カウ〳〵同事。
かとう
歌頭。竹河ニ。右ノカトウ。男踏哥ノ哥頭也。源侍從。
かしけたるめのわらは
東屋。未サカリナラザル童。私云。悴字歟。然ラバスミテ讀ベシ。本ニケヲ濁テ讀。ヒガ事歟。
かざみ
片衫。童女ノ上ニ着物也。汗（除脱歟）歟。葵卷。
かとりの御なをし
縑ハ上下ヒトシク悲歎ノ時ナド着用スト云々。基長卿說。私云。縑ハ夏ノ下襲ニ用也。悲歎ノ時ノミニアラズ。
かはぐち
催馬樂。
かやしく
浮舟。カヤスク也。
かたかど
片廉也。
かたかけて
松風。人ニ仕ル事。肩掛也。人ニ奉公スルヲ肩入トモ。肩懸トモアリ。
かこ
御法。犎牛名也。私云。河鼓事歟。
かはぶえ
紅梅ニ。カハ笛フツヽカニナレタルコエシテ云々。說々多トイヘドモ皆不用。秘事也。別口傳。

與

よせ

縁。日本紀。桐壺。

ようせずば

不能也。アシウセバ同事也。桐壺。

よすが

便。私云。ヨスガサダマルト云ハ。人ノ女ナドマウクル事ヲ云也。

よぎり

過。ヨギル。スグル也。よきて。除心之。私云。ヨギリ行トハ。來ルヲモ云也。

よるひかる玉

夜光玉也。齊威王與梁惠王會。惠王云。吾國雖小國。有徑寸珠照車十二乘十枚。奈何万乘國而無寶乎。

よきみち

其所ヲ去テ過也。吹風ニアツラヘツクル物ナラバコノ一モトハヨキヨトイハマシ。同心ナリ。過ト云注。除心歟。

よし〳〵しう

由シアル心。

よそぢ

四十也。若菜ニ折櫃ヨソヂトイヘリ。源氏四十賀所。

よづかはしく

世ヅカハシク。ヨシメキナドモアラヌ。若菜。ヨヅキタリガマシクモアラヌハ。世ヨヅカヌナリ。

蓬丸寢 よもぎのまろね

東屋。蓬皐屋ニカリニヌル也。

ようし給

箒木ニ。源氏中將內ニノミ侍ヨウシ給ト云リ。

世籠 よこもりて

明石。オヤタチモヨコモリテスグシツル。ヨコモリテスグシツル年月コソト在。

太

たゆげなる

随嬾。史記。ヲチブレヲコルケシキ。ヒマナキ義也。嬾ヲバ石マト史記ニヨム。土器ヲ作ニ石マナキ詞也。タユゲハ音也。俗ニ訓ト思ヘルハ謬也。桐壺。

たい〳〵しき

退々。

たうまじう

不可堪也。

たづき

便也。鶴寸。箒木ニ。世ニタヅキナク云。

たけ河

催馬樂。

たくみ

内匠寮。桐壺ニ。里ノトノハモクスリタクミ云々。

だいしやうじのおもの

大床子飯。朝夕ノ供御。

たき口のとのゐ申

名對面也。

たむけ

禓。餞別送物也。ヌサノ注ニミユ。

たとしへなし

無喩也。シハ辭字也。

たいめ

對面。私云。タイメントヨムベシ。口傳。

たゆたひ

浮動。盪々也。ユタノタユタニ物思比ゾ。浪ニ船ノユラレタル心也。

たうか

正月十六日行也。持統天皇七年正月。漢人奉

踏哥事在。男踏哥ハ圓融院天元六年正月十四日男踏哥在。其後絶而無之。

たんゐん

探韵。各分一字詩也。小野宮記云。重陽宴。各分一字於御前。取韵字。探得何字云々。以之可知之。

たびしかはら

山ガツ。タビシカハラマデモ云々。民氏河原。タミ也。ミトヒト同音。セミセヒト云ガ如シ。河原ハエタ也。河原ニアル人ハヂノエタマデモト云也。或本タミシカハラト云々。清少納言枕草子云。タミシカハラ。貫之白河大相國亭子日會序云。草枕タビシカハラマデ松ノ千年ヲ君ニトノミ祈リ云々。或云。民代也。シハ辭字也云々。紫明ニハカハラハ渡守網引也ト註セリ。

だきのばむ

彈碁也。後漢書藝經云。彈碁ハ兩人對局。白黑各六。先別碁相當。更先彈也。其局以石爲之。

兩義　たきどの

瀧殿ト云所別ニ有之云々。又ハ瀧ト殿ト歟云々。又瀧ト野トヲ云ト云説在。私云。大覺寺ノ南ニ全ク瀧無シ。只泉殿ヲ云ト口傳セリ。

たゝり

總角ニ。ムスビアゲタルタヽリツマ。丁ノホコロビヨリスキテト云々。糸操器也。

たいゑき

池名。桐壺ニ。太掖芙蓉。長恨哥ノ句ヲヒケリ。

だみたり

玉鬘ニ。大夫監ヲ云ニ。詞ダミタリ。私云。言ノナマルヲ云歟。孝經序ニ語迩（コトハタミ）タリ。

たまもかづけ給

玉ハホムル義。浦邊ナレバヨソヘテ云也。玉藻。

たうばり
御給年官爵也。私云。太上天皇ノ御給ニ。除目之時。官位ヲ御分ニナサルヽコト也。冠給バルトハ。始テ爵スルヲ云。爵トハ勅授ノ〔從叙〕始。位五位下叙スルヲ云也。

たすきひきむすび
襷。タスキ。少人ノ姿ヲ云。薄雲ニ。明石姫君ノ着袴所。

だいひざ
大悲者。觀音也。玉鬘ニ。三條ト云下女ノ詞也。長谷觀音ヲオガム也。

たれとき
アレハタレトキ。タソガレ時也。

だいぞう
大乘也。

たゆうのけん
玉鬘卷。玉カヅラノ姫君ノケサウ人。太宰府ニ帥大貳小貳大監小監々代ナド云司アリ。五位ニ叙スルヲ大夫ノ監ト云。

だきう樂
打毬樂。

たまどの
殯殿。私云。葬禮先出ス所也。夢浮橋ニ。タマドノニヲイタリケン人云々。見源秘抄。

たうぶ
乙女卷。アルジハハナハダビサウニ侍リ。タウブバカリノシルシトイヘリ。又同所ニ。大ヤケニツカウマツリタウブ。〔嗚呼〕ヲコナリ。給也。

禮
れうし〔兩義各別〕
寮試。寮司。一試也。又れうし。大學寮ノ司

也。乙女ニ。今ハレウシセサセントテ。同所ニ。レウシウケント云。是寮試。同巻ニ。レウシニカンタチメノ車ト云々。或レウモン。寮門也。大學寮門也。

れんし給

練也。宿木ニ。トリタテレンシタルル心ナラネバ。私云。註ニ戀字ヲ付タリ。練ナルベキ歟。

曾

そひぶし

副臥。見李部王記。桐壺ニ。引入大臣女（葵上。十六。）

ソノ夜ヤガテソヒブシニナリ給ウ。

そのこま

神樂名。

そは〳〵しき（或褒房）

觚稜。文選。コレウトソハ〳〵シキ。

そこにこそ

足下也。史記ニ此詞多シ。文選廿一ニ李陵答蘇武書。陵頓首。子卿足下云々。等列ヲ恭詞也。私云。下字ヲコト讀事。毛詩ニ宗室窓下ト云ヘリ。

そや

初夜。

そろゝか（そゝろかイ）

尖。スルトナル心。又御幸ニ。タケタチソロゝカニ。

そち

帥。太宰帥。々宮。

そゝきゐ給へり

楚々。ソゝメキ也。又蛤虫ニソゝキアヘルトアリ。互ニ營アヘル心ナリ。紫上ノヒイナヲソゝキヰ給ト云ハ心別也。

ぞう

將監ノコトヲ云ヘリ。殿上ノゾウ。左近藏人ノゾウ云々。私云。ゾウハ將監ニカギルベカ

ラズ。何ニモ官ゴトニ。カミ。スケ。ゼウ。サウクワンハ有ベシ。近衛府ニテハ將監ゼウタルベシ。大將ハカミ。中少將ハスケ。中將ハ大スケ。少將ハスナイスケ。

そよ

領納ノ詞也。宿木ニ薫ノ詞ニ。ソヨ繪師モイカデ心ニハ叶ベキト云々。

そぼち

ヌレテカハカヌ也。心カラ花ノ滴ニソボチツヽ。

そしらはしげに

宿木。女二宮大將へ參給事ヲ云ニ。イソギ參タマウ事ヲ。ソシラハシゲニ云人モアリト云々。ソシル也。

そしうなる

花宴ニ。ヲホイ殿ノ詞ニ。タヽ大ヤケゴトニソシウナル物ノ師アリト云々。如在心也。紫明ニハカタン物ノ師ト云ヘリ。

そぼれゐたる

タハブレザレタル也。又そぼたれサレタル也。ホ字濁テヨム。

そうぶ

處分。そうぶんとも。讓與事也。

そして

敎。言ソシテ。存。繹。酒シキソシテ。明石。訴。ウタウル也。此心卷ヲ引ベシ。私云。心各別也。箒木。イヒソシテ。酒ヲシイソシテハ殺字也。詩ニ愁殺。笑殺ナド云心也。ツヲクイヒ。ツヲクシイタル也。ヨシメキソシテ。明石尼公ヲ云ニ。若菜上ニアリ。是等ハ存也。心ナケサウソシテ。繹也。ソシル也。宿木ニ。六君ノ所ニコノミソシテ。

そこひ

底モシラヌ也。ソコヒナキ淵ヤハサハグ山

川ノアサセニコソハアダ浪モタテ。私云。ソコヒ。ソコ爲兩說。

そほひやかに
ヒソヤカニ。

そゑのたかゝひ
諸衞鷹飼。

そがならはし
タカナラハシト云也。

そひ〳〵しき心ちすれど
人ノ姿ノチキサカナルヲ云ヘリ。是モ物ハヅカシクテ。身ノスヘラルヽト云心歟。河海關屋卷。

そきやうでん
承香殿也。蘭卷ニ內侍督君ノ御局ニナル。

ぞくのかたの
若菜ニ。コナクゾクノカタノト云。俗也。外典ヲ云。

兩義
ぞう
孫。族也。玉鬘。大夫監ヲ云ニ。ゾウ廣クカシコニ付テオボエアル。是ハ族也。竹河ニ。コレハ源氏ノ御ゾウニモ。是モ族也。宿木ニ中君懷妊事ヲ云ニ。イミジク命短キゾウナレバ。是ハ孫也。孫所々ニ多シ。

そくらう
ソクラ。賄賂心也。東屋ニ。大臣ニナランソクラウヲトラム。常陸介詞。

そんじやの大臣
尊者。若菜下。致仕大臣ツカウマツルト云々。

そこら
多也。御幸ニ西對姬君物見給ニ。ソコライトミツクシ給ヘルト云。此詞所々ニ在。ヲホシ也。

そく
メ之字ニモ入。しげきそく。重職事。シゲキ

職也。

津

つと

集。日本紀。都。ツト。桐壺。私。ツフトヽ讀ベシ。

つれなく

強顏。ツレナク。

つなしにくき

ツレナクニクキ也。中略詞。俗ニツラニクシト云也。松風桂ノ宿守。ヒゲガチニツナシニクキ顏ヲ。鼻ウチアカメテト云。漂凙。ツナシニテコソミエ給フ。ツナシニクム。

つぼさうぞく

市女笠ニキヌヲキテ中ユヒタル也。玉鬘ノ長谷詣姿。玉葛卷。

つくも所

造物所。內裏仙洞ニ在。若菜下ニ。ツクモ所ノ人メシテト云。

つゞらをり

九折。盤折。文集ニ。山下望山上。初疑不可攀。誰知中有路。盤折通巖嶺。遊仙窟。盤龍トワダカマル。若紫北山事。

つねのり

經範。繪師。在高名錄。千枝。ツネノリ。須磨卷。

つましるし

文ノ不審ナル所ニ。爪ニテシルシヲスル也。

つばいち

大和國長谷ノ道ニアリ。海石柏市（[illegible]）ノヤソノチマタニタチツラン結シヒモヲトカマクヲシモ。万葉。玉鬘ニ瑠璨君長谷詣ニ。右近ニ行逢トコロナリ。

ついきり

フツキリ也。若菜下。柏木小侍從ニカタラヒ給詞。

つしなき
マコトナキ也。ゲニ〳〵シキモノヲバ。ツシマナルト云々。ツシマナキ也。マヲ略ル詞。
つまごゑ
ノヤウニテ。近江君詞。
つまかけなどを
末摘花ヲ云ニ。折々ツマカケナドヲシニ。折折ノツマ歟。カケハツキタル詞也。面影ナド云同儀也。近江君ノ詞ニ。ツマゴヱト云モ同躰也。河海抄。
つばいもちゐ
椿餅也。鞠座ニ献椿餅事見舊記。ホシキヲ粉ニシテ。丁子ノ粉ヲ加テ。アマツラニテカタメテ。椿葉二枚ヲ合テツヽミテ。上ヲ重タル薄ヤウヲ細切。二分斗ノヲビニユヒタル也。公世二位申ハ。近衛關白ヨリ尋ラレタリシニ。造テマイラセキ。ハウニコソ様ハアレ。人不知云々。箸ヲソウベアニヤ。私云。ホシイハ少炒ルベシ。昔ハ沙糖ナシ。今時分ナラバ沙糖ヲ入テ可珍重。カラミヲモ加テ可然。葉上ニ覆ヲ龜甲ニ切テ。少々マジヘタルモアルニヤ。又枝ニ片葉ヲ付ナガラ。片葉ヲオホヘルモアリ。二三葉。
ついたち比の夕づくよ
浮舟ニ。朔日比ノ夕月夜。サムキスサキニト云。藤裏葉ニ。四月ツイタチ比。御前ノ藤花イト面白クサキミダレタルニ。七日ノ夕月夜。カゲホノカナル云々。阿佛日記ニモ。七日月ヲツイタチ比ノ夕月ヨト云ヘリ。朔日ノ月ト云ニアラズ。朔日ハ始也。月ノ始ノ月ナルベシ。
つねからず
若菜下ニ。ナウナル人ハ久クツネカラズ。私云。不常也。初音ニ。サエカラズト云ガ如シ。

つたみなどし給へば
横笛。小兒ノ乳アゲナドスルヲ云。津字ナルベシ。
つきしろう
花宴。咎詞ニ不出メ。タガヒニ心ヲシラスル也。此詞所々ニ多シ。
つべたましく
マブシツベタマシク。柏木。

ね

ねぢけ
佞人也。表裏アル也。メヂケガマシク。ネヂケテ。ネヂケ人。此詞多シ。奈良坂ヤコノテガシハノ二ヲモテトニモカクニモネヂケ人カナ。万葉。
ねたます
ハゲマス心也。妬聞。ネタマシキコエ。
ねびれて
ねびたれ。同心。ネビタレヨシバミテ。
両義ねびたる
又ねびまさる。生長。
ネビ人
老人。紅葉賀。御門御幸。ネビタル年預。
ねうばうのさぶらひ
大盤所。
ねぎごと
禰宜言。アマリキヽケン社コソ。古今。
ねさう
ネンサウト可讀行。玉鬘。年三也。正五九月。一年中ニハ此三月。一月中ニハ六齋日。取ワキ行べキ月日也。年三長年經ニ見ユ。
ねのこの餅
葵卷。紫上新枕所ニ見ユ。是ニツイテ有秘說。有口傳。私云。亥子ノ翌日ノ夜ナルニ依テ。子ノコノ餅ト。惟光時ニトテ云也。三日

祝ヲ子ノコト云ニアラザル歟。

ねこめうつろふ

早蕨。匂宮哥。袖フレシ梅ハカワラヌ匂ニテねこめうつろふ事やコトナル。根籠也。後撰ニ垣越ニチリクル花ヲ見ヨリモ根コメニ風ノ吹モコサナン。根ナガラ風吹越セト云也。

奈

なよ〱

ナヘ〱也。柔々。桐壺。

なべてならず

不並也。ヲシナベテ。駒ナベテ。

なよびかに

シナヤカナル也。

なだらか

兩義心別

朽。論語。糞土墻不可朽（ナタヲカニシウ）。

なを人

直人。諸大夫。河海。箒木ニ。ナヲ人ノ上達部マデナリアガリ。ワレハガホニテト云々。伊勢物語ニ。父ハナヲ人。母ナン藤原成ケル云々。私云。ナヲ〱シキ人ト云ヘルハ。正直ニ實アル人ヲ云。心別也。

なま〱の上達部は

不用

ナマメキタル也。私云。此註心不叶。ナマジイノ上達部ト云也。未熟心也。ナミ〱也。マトミト通音。是ハ心叶也。

なく

無難也。ナンナクトヨムベシ。

なめげなる

滑。無禮。私云。ナムメゲナルト可讀。

中澄長濁

なか神

中神。日フタガリ。又一夜廻天一神也。一說長神。箒木。ナカヾミ内ヨリコナタニフタガリ侍トアリ。私云。手習ニ。イトセバクムツカシクモアレバ。キテタテマツルベキニ。中

神フタガリ忌ベカリケレバ。宇治ノ院ト云シ所思出テ。二三日ヤドラント云ヤリ給ヘリト云々。二三日アルハ一夜メグリニハアラザル歟。

なかゞは

京極川也。李部王記。古人稱中川云々。行成記。法成寺始稱中川御堂。賀茂河東。桂河西。仍京極川ヲ稱中川。

なけの（兩義兼）

フデツカイ。ナヒガシロ也。ナヲザリ也。用。私云。ナケト云詞万ニアルベシ。

なりはひ

農。順和名。民業。日本紀。家業。遊仙窟。

ないけうばう

内教坊。内裏女樂舞妓居所也。別當在。今ノ大トノキニアリ。

なやらう

追儺。ナヤラウ。チニヤラウ。文選。論語。

なごやか

逶迤。遊仙窟。私云。ヤハラカニ穩ナル心也。古万哥。アツブスマナゴヤカニシテネタレドモ。君トシネヽバハダエ寒シモ。

なごう（或濁用或澄）

梅ガ枝ニ。コマカニナゴウ。ナツカシウ。ウツクシウ。ナメラカニ。ニコ〳〵ト云。私云。コレモナゴヤカナル。ヲナジコトバ歟。

ないえん

内宴。弘仁四年始有―。唐太宗之舊風也。正月二三日間ニ有子日者行之。私云。内―ハ内々儀也。藏人或淸涼殿記等云。廿一二三日間有子日。便用之。

なそり

納蘇利。右樂名。私云。ナツソリト可讀。君臣（以下同十二字イ内宴之注）獻詩哥奉祝君也。此事癈而久シカリシヲ。白

河院御時。信西法師申行キ。再興アリシ也。其後廢畢。

なれてきこゆ（両義可聞）
物馴テキコユル也。又ナラシキコユル也。此詞所々ニアリ。

なれき
馴公。女房名也。冷泉院女御。鬚黒大臣ノ女房。

なかさだ（両説）
中定。中比也。長定。能書也。末摘ニ。御手ハサスガニ文字ツヨク。ナカサダノスヂニテト云々。私云。手ノ模様ヲ云ニ。中昔スギテト云説。長定ト云人ノ模様ト云両義也。先ハ中比スギテヲ用也。サダスギテト云モ。（中昔歟）比過テト云。盛過タル心歟。中定ハ中古ノ心ニヨリタルニヤ。

なれすがた（両説　馴姿　成姿）
ナレル姿。ナレ〳〵シキ姿。コレヲミヨ人モトガメヌ戀スト音ヲ鳴虫ノナレル姿ヲ。是ナレル姿ナリ。

なを〳〵し
直々也。末摘ノ源氏ニヤル直衣ナヲ〳〵シク。質朴ナル躰也。私云。スナヲニカザラザル姿歟。

なかばなるげ
半偈。諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂。雪山童子半偈ニ投身死事。總角ニ。ナカバナルヲ、シヘケン物ニモカケ云々。

なでもの（撫物）
宿木ニ。祈ニコナタヨリ身ワレノ物。鏡帶ナドヲ陰陽師方へ遣スヲ云也。

なたいめん
有花鳥餘情。

なずらひ

ナラヌ。明石。岡邊ノ御文メデタシト。ナズラヘナラヌ身ノ程ト云々。卑下ノ心也。私云。ナズラヘナラズ。ナズラヘ哥。擬也。準也。ナラブベウモアラヌ也。

なよれる　又加字ニ入同心

初音。竹河。ウタイナヨレル姿。踏哥。此詞加字ニモ入。カヨレル姿。初音。カヨレルハ袖カヘス也ト註タル。同註タルベシ。又タヲレル姿トモ。

なみ〳〵の人

篝木中河方違ニ。ナミ〳〵ノ人ナラバコソ云々。私云。次々ノ人也。次字ヲナミト讀。日―月―歳―等也。又並々同心。

なへばみ

宿木ニ。匂宮人々ノケハヒハヅカシキ程ニ。ナヘバミタメリシヲ思遣給テ。私云。衣ノナヘバミタル也。損テフクダミタル心。又人ノ貞ニモ通ズベシ。宿木ニイヘルハ衣裳事也。健ナラヌヲナヘバムト云。

な

宿木ニ。コレナトヲ起コセ。ヲキネバミ云々不起。私云。ナウト云心也。人ヲ呼起詞也。

良

らうたし

勞。（イタハル）（ナ無）良。桐壺。私云。ホケヤカニヤハラギノサケノアルヲ。ラウタゲナルト云之。

らう〳〵しき

亮々。良。ナツカシキ也。蘭ニ玉鬘ヲ云ニ。ケハイノラウ〳〵シウト云々。私云。ヲホドカニヤハラギナツカシキ姿。上藹シキ方ニヨレリ。

らうし給

領スル也。

らでん

螺鈿。貝スリタル也。
らざう
亂聲。私云。ランザウトヨムベシ。
らにの花
蘭花也。蕙蘭ノ蘭ハ別也。藤袴ニ。ラニノ花ヲミスノツマヨリ指入テト云。私云。ラン也。假名ニハイツモムヲニニ用。駒膽(クタニ)。紫菀(シホニ)。牽牛子(ケニコシ)。樺櫻(カニハサクラ)。
らうらう
若菜下。督君詞。カヽル折〳〵ラウロウナラデハ。牢籠。
らいし（左四行據イ本補）
罍子。衡重ノ上ニカハヲ立テ。四方或六角ニ色紙ヲ立テ菓子等ヲ盛也。横笛ニ。御前チカキライシニ。
無
むぐらのやど
葎宿。戀スル人ノ住所ヲ云トイヘドモ。只アレタル宿ヲ云。葎ノ門トモ云。八重葎トモ。
むべ
宜。諾。承諾也。ムベシコソ。サコソ也。私云。ゲニモト云也。ムベモトミケリ。ゲニモトミケリ也。ムベ山風モ同心。
むくつけ
貪。遊仙窟ヲソロシト云詞也。
むく〳〵しさ
同上。夕顏。蠢々。
むねこがるゝ
三教指皈云。寧莫衍婆伽之燒胸中。見紫明抄。
むとく
無得。
むご
無期。柏木ニモ。レイハムゴニムカヘテ。ス

ペテスヾロゴトヲサヘノタマウヲ。今ハ言スクナニテ云々。柏木ノ對小侍從事。

むかひびつくりて

向火也。槙柱又竹河ニ。ムカイビツクリテ云々。日本武故事。野火來時。我方ノ草ヲヤキテフセグ事ヲ云ナリ。私云。一説ニハ。カタハライタキニハ。向火ナガライタク物イハヌヲ云也云々。人ニ物ヲ云ハセジトテ。イタクニコヤカニ物ヲイハヌハ。來ル火ヲフセグ心ト同ケレバ云歟。

むもれいたからむ

明石ノ岡邊ヘノ御文ヲ云ニ。ワカキ人ノメデザランモ。イトムモレイタカラント云々。私云。ウヅモレタラント云心也。埋痛。

字

うけばり

諾。桐壺。

うちぎ

袿。大小アリ。宮。一ノ人。或家アルジノキルナリ。私云。袿ハウハギヨキ上。(リ點下同)褶ヨキ下ニ着スル也。桐壺。加冠祿。引入大臣祿ニ白キ大袿ヲスルハ流例也。

うちつけに

ヤガテヨリト云也。

うつくしみ

愛也。

うけはし

ウケハシゲニノ給。若菜上。うけふる。呪咀也。又ウケハシメ。是ハ諾也。別心也。

うけへば（哥二人ヲウケヘトアリ）

皆同詞。ノロフ心也。伊勢物語。ツミモナキ人ヲウケヘバ忘草ヲノガウヘニゾヲフト云ナル。

うつしさま

現心。ウツシ心ハマコトノ心也。ウツシ心ナラヌハ狂亂心也。

うつし人

同心。ウツシ人ナリ。貝カイスラモイモセハミエテアル物ヲウツシ人ニテワレヒトリヌル。

うつぼのとしかげ

物語ノ名也。順作卅卷。繪合ニ。ウツボノトシカゲ。アベノオホシ。ヒネズミクラモチノミコト云々。

牛ぐるまゆるされて

牛車宣。私云。中重ノ中ヘ牛ヲカケナガラ出入スル也。

うすゝきいてきて

口ヲツボメ肩ヲスヘタルケシキ也。身ノサムキ躰ナリ。

うへの御五節

或本。ウヘノ五節ト在。恒年ハ公卿二人。殿上受領二人。代始ニハ受領五所也。殿上人マイラスレバ。上ノ五節ト云歟。

うちきらし

打霧。御幸ニ。ウチキラシ朝曇セシミユキニハサヤカニ空ノヒカリヤハ見シ。拾遺。家持。打キラシ雪ハフリツヽシカスガニ我家ノ園ニ鶯ノナク。

うつたへ

ウチタヘ也。藤袴ニ。ラニノ花ヲミスノツマヨリサシ入テ。トミニモユルサデモタマフレバ。ウツタヘニ思ヒヨラデトリタマウ。マメ人玉カヅラニ奉リ給事。

うたのほうしの

カハラヌネニ。宇多法師。和琴也。餘情ニ在之。宇多御門ノ御名ニ差合バ。ホウシノシノ字ヲ濁テヨム。是口傳秘說也。

うたゝある

ウタテアル也。古今ニ。ウタヽアルサマノ名ニコソ有ケレ。

うちたれがみ

哥。ウナヒコガウチタレガミノ五月雨ノ比。

うつせ

蜻蛉。イカナルサマメ。イヅレノ底ノウツセニ交ケン云々。私云。ウツセ貝ハスハノ海ニコソアルベケレドモ。水ノ底ナレバカヨハシテ云也。

うみの面ふすまをはりたるやうにて（不字ニ可入）

須磨。

うちみだれのはこ

巾箱。（塔面）サジリシノハコ。（箱）ウチミダレノ箱。（巾箱）カウゴノ箱。（香莞）コヽロバ。（繪合巻）綬字。

うちどの

玉鬘。コヽカシコノウチドノヨリ。擣殿也。綾打所。

うたつかさ

雅樂寮。橋姫ニ。ウタツカサノ物ノ師云々。

う

鵜。藤裏葉ニ。ウヲロサセタマイテ。

うちまき

横笛ニ。若君ツタミナドシタマヘバ。ウチマキシチラシテト云々。オサナ子ノ事有時。ヲシ桶ト云物ニ白米ヲ入タルヲ取出テマキチラス也。

うるせかりし

箒木。ウルハシカリシト云也。蛉虫。

うらしまの子

夕霧。浦島ガ子ノ心チナン云々。有別。

うない松

幻巻。馬鬣松。馬ノタチガミノ如クナル松也。墓所ノ松ト云々。見寂秘抄。

うるせく

若菜ニ。女樂ノ後。紫上ニ源氏問給ニ。宮ノ御琴ノネハイトウルセクナリニケルカナト云ヘリ。

うみ松

漂泊ニ。明石君イカ(五十日)送哥。ウミ松ヤトキゾトモナキ陰ニキテ。

うつしのむま

東屋。ウツシノ鞍ヲキタル馬也。

うもれいたき

蓬生ニ。常陸宮ヲ云ニ。心バヘナドハタウモレイタキマデヨウヲハシマス。埋痛歟。

うづち

卯槌。或本ウツヱ。江次第ニ云。春宮被献卯杖。大進着腋陣。付藏人進之。次大舍人進卯杖六十束。次糸所進卯槌。御帳組并縫覆打敷料糸十両二分。(参河糸。)結組料一両二分。(丹波糸。)已上申請納殿。藏人取之。結付晝御座帳角柱。副立細木為柱。槌末出五尺(寸歟)計。マタブリ。杈椏。音砂鵶。

うむじて

漂泊ニ。カノ宮ス所モ。思ウンジテ別給ニシトオボス云々。螢卷ニ。内ノヲトヾ夕顔ノ上ノ事ヲ云出スニ。ハカナキ物ウンジヲヌ。

うまやのをさにくしとらする

須广。驛長口詩トラスル事者。昔天神筑紫へ赴給シ時。驛長ニ口詩ヲ賜ハス。其詩云。驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。只今五節君哥ヲ奉ルニ。源氏返哥ヲ口ヅカラモキカセザル事ヲ恨テ云之。

ゐなみくつして

為

居並屈スル也。苦イ。クツスルヲクシテト云。又ハクント書歟。

院司トモ源氏ニアリ
ゐんしども
判官。廳召次所。別納所。御服所。進物所。々衆。武者所。御隨身所。

ゐんをつくりて
手習ニ。物シリゾクベキヰンヲ作テ。印也。眞言。

ゐたち
居起。桐壺。

ゐんふたぎ
掩韵。古詩ノ字ヲフタギテ。下句ノ末字ヲ何文字ト推シテ勝負ニスル也。

ゐやしく
イヤ〳〵シク
恭。日本紀。ウヤ〳〵シク也。

の

のら
草。万。野原イ。

のしひとへ
玉鬘ニ。ウヘニノシヒトヘメクモノキコメ給ヘルカミノスキカゲト云々。定家靑表紙本ニハ。ウツキノヒトヘメクモノトアリ。ノシヒトヘハ布カタビラ歟。サレバコソ田舍ビタル姿トハアレ。淸少納言枕草子ニ。ヤセ色クロキ人ノスヾシ(シ歟)ノヒトヘキタルハ。イトビンナシ。ヲナジコトスキタレド。ノモヒトエハカタハトモ見ヘズカシ。ホウノヲトリタレバニヤアラン云々。

のばりて
繪合。延也。

のりもの
賭。勝負ノ懸物也。賭弓。宿木ニ。御門薫中將ト碁打給所ニ。ヨキノリモノハ。アリヌベケレド云々。女二宮ノ御事ヲノ給之。以菊爲賭。

後撰野路濁
のちのおほいどの
竹河巻云。ノチノオホイドノ。或說野路大臣

夏野。ト云ヘリ。不然。鬚黒ノ大臣ノ事也。後大臣ヒゲ黒ウセ給トミヘタリ。男子三人女子二人。玉鬘腹。紅梅巻云。イマモノシ給ハ。ノチノオホキヲトヾノ御女。槙柱。ハナレガタクシ給シ君。後鬚黒太政大臣。非野路歟。

のばゝりて

或本のばりて。延也。繪合ニ。源氏御身ノ事ヲノ給ニ。中比ナキニナシテシヅミタリシウレヘニノバヽリテ。今マデモナガラフル也ト云々。

のり弓のかへりあるじ

匂宮巻ニ。夕霧六條院ニテシ給トミユ。賭射還饗。私云。ノリ弓ノカヘリニ饗ヲメ。射手達幷上達部雲客ヲ招請スルナリ。飯ヲアルジト云。

久

くらづかさ

内藏寮。桐壺云。くらづかさ。穀倉院。

くわざ

冠者。桐壺。クワザノ御座トモ。クワザノ君。乙女。夕霧云。

くら人所のたか

桐壺ニ。左ノツカサノ御馬。藏人所ノ鷹。スベテト在。御鷹ハ藏人所ノ役也。

くさわひ

種。玉鬘云。右近玉鬘ノ事ヲ語ニ。源氏スキ物ドモノ心ツクスクサハヒニセントノ給。

くま

隈。曲。阿。熊ハ獸ノ名ナレ共黒キカゲ也。

くつろぎがましう

箒木。アバラナル也。紫明注。私云。極信ニ實ナルハ。ツヽマヤカニツマル也。其對メアバラニシドケナキハ。クツログ也。仍云也。

くれなひのこし

女ノ袴ノ腰ナリ。
くだ〳〵しう
細碎。文集。石竹金錢何細碎（タ〳〵シキ）。
くだら
百濟國也。
くるゝ戸
ナムド。
くし給
苦。屈。薫。具。種々心在。私云。若紫ニ紫上ヲ云。夕暮ニナレバイミジウクシ給。是ハ苦也。或屈。退屈ノ心。薄雲ニ明石ノ上ノ琵琶ヲ云。イカデカククシケン云々。是ニ兩義アリ。一ニハ薫。クンジケン。薫習心。クント讀ベシ。二ニハ具。濁テ讀ベシ。箏ト琵琶トヲ具シケン也。二ツトモニヨクスル心ナリ。薫說ヲヨソクシケントカクトモ。濁テグムトヨムベシ。

くろき車
服者車也。
くろほう
黑方。玄方トモカク。冬薫也。梅ガ枝卷ニ。サハイヘドモ。前ノ齋院ノミ御クロホウトイヘリ。
くむゑかう
くのゑかう。同薫衣香。百歩ノ外スキ匂フ薫衣香。タキ物ノ方。梅ガエニ。クンエ香ノ方ノスグレタルハ。前朱雀院ノウツサセ給テ。公忠ノ朝臣ノコトニエラビツカウマツリシ百歩ノ方ヲト云々。朱雀院公忠此道長也。
くつをれ
退屈心。
くしいたう
苦痛也。屈痛也。若菜上ニ。柏木女三宮ヲ見

奉テ。此タヨリクシイタウ物ヲモハシクテ
云々。

くわむ佛
藤裏葉。灌佛。四月八日。

くさのむしろ
草席。若紫。古ノイモヰノ庭ニアツマリシ草ノ席モ今ヤ敷ラン。慈恵大師。

くうつきて
功也。

くね〳〵しき
クネ〳〵シキ本上。御幸。スグヨクモナクヨハキ心也。私云。クネリガマシキ心ナリ。

くわろ
火爐。御幸。野行幸ノ所。

くみはかり給はぬ
鈴虫ニ。クミハカリ給ハヌ。斟斗也。推察心也。

くそたち 民遣
屎。女屎。手習ニ。トノモリノクソメ。同巻ニ。イヅラクソタチ。コトヽリテマイレ。但定家青表紙本ニイヅラゴタチトアリ。一所ヲ滅也。古今作者ニモ在。クソ濁テ可讀。口傳。貫之童名。內敎坊。阿古屎。今世ノ人クスト云。ストソト同音。

くいたいし 羅睺太子
匂宮巻ニ在。羅睺羅尊者。佛出家ノ後六年ヲヘテ誕生。大臣疑之。抱兒投火入之。全テ不燒。悲花經。

くるすのゝさう
大將殿御領。久留守野莊。夕霧。

くぢう
椎下ニ。クヂウナドニテ。九重都也。

くわんず
巻數。蜻蛉巻ニ。カノクワンズニ書付給ヘリ

シ。浮舟君ノ母ノ方へ返事。

くわ
紅葉賀ニ。末摘ノ返事ヲ大輔命婦ニトラスルニ。クワトアリ。篝火ニ。對姫公。人ノアヤシト思ラントワビ給ヘバ。クワヤトテイデ給。

櫛押垂
くしをしたれて
笄髮アゲタル也。末摘花。源氏カイマミ給所。

御チホン
くすりのこと
御門御惱也。明石。

くしとらする
スマ。驛長ニ口詩トラスル上注。スム字。

くさじるし
椎下。僧都芹蕨奉ル。所ニツケテ。カヽルクサジルシモミスルト在。只證本此詞ナシ。也

やむごとなき
無止事。キリツボ。

やまがつ
箒木。山ガツノカキホアルトモ云々。山兒。

やうめいのすけ
夕顔ニ。ヤウメイノスケナリケル家ニトアリ。源氏第一秘事也。

やそうぢ人
八十氏人。

やまのざそ
山座主。

又古字ニ可入
やはたのごし
八幡五師。寺官也。貞觀八年別當安宗以蓮如法師補五師。玉鬘八幡詣ニ。昔ノゴシヲ尋テト云々。

やゝましき
ヤウガマシキ也。胡蝶ニ。オホミヤス所ヤア

ラムトヤヽマシキヲ。浮舟ニ。ヲソロシウ。ヤヽマシケレバト云々。

やさし

槇柱ニ。人ギヽヤサシカルベシ。私云。ハヅカシ也。古今哥。年ノヲモハン事ゾヤサシキ。松浦仙人哥ニ。玉島ノ此川上ニ家ハアレド君ヲヤサシミ見セヌナリケリ。是皆ハヅカシナリ。

やらう

追ハラウ。日本紀。追儺。文選。夕霧ニ。立トマルベウモアラズ。ヤラハセ給。同云。カウワリナウヤラハセ給。大和物語ニ。シネトテヤトリモアヘズバヤラハルヽイトイキガタキ心チコソスレ。

やうのもの

夕霧ニ。サシモヤウノモノトアチラヒ給ハン。ウタテアルベシ。此詞所々ニアリ。私云。物ニ付詞也。ハスノミヤウノモノ。

やましげなり

病也。初音ニ。ハチスノセカイニマダヒラケザランモ。カクヤトヤマシゲ也。私云。心ヤマシキナド云詞。

やヽましき

心ヤマシキ心也。御法。又疑心。

やうき

様器。土器也。今様ノモノ。宿木産養。銀様器。

やつがれ

某ト云詞也。御幸。私云。神代詞。

やヽみて

宿木。常陸泊瀬ヨリ歸時。宇治ニ來。大將ノゾキ給。車ヨリヲルヽニ。此人々ニヤヽミテ久クオリイサリヌ。良歟。

末

まうのぼる
參上。昇進。參進。桐壺。
まばゆく
目モアテラレヌ心也。
まめだち
皺。マメダチ。遊仙窟。皺目。同。眞立。文選。マコトシキ心。
まめ〳〵しき
眞々敷心。同上。
まめ人
展季。マメ人。文選。眞人。夕霧大將ヲ云。
まほに
眞直。万。眞帆。舟ニ片帆眞帆トテ隨風テ曳ナリ。正シキヲ眞帆ト云心可知。
まうと
眞人。朝臣ナンド云類也。餘情ニ委クアリ。
まどころ
政所。家司。
まかはら
高眶。カウキヤウトマカフラタカニメ（皮歟）眶字目波也。マカブラ。マナブタノヲチ入タルヲ云。源内侍ヲ云。
まが〳〵しき
魔香々々敷。總角。私云。イマ〳〵シキ心也。
まぶし
柏木ニ。マブシツベタマシク。
まかり申
辭申。日本紀。イトマ申也。私云。賽カヘリ申ス。字也。
まくなぎ
或說。春木。如卷數也。不用。瞬。マジロク。メクハス。蠛。此云魔愚那岐。日本紀。物ヲ人ニ忍テ隱スニハ。目クハシヲス。忍タル心歟。又奥州ニハマクナギト云虫多クテ。狩スルニモ薪ヲトルニモ。アラヽギト云草ヲ笠ナドニ取付タレバヨラズト云。私云。此虫ノ事ヲ云モ。如蛹ニシテ

少ナル虫飛テ目ノマハリヲアリクヲ猒テ。目ヲ茂クタヽク也。仍目クハシスレバ。此虫ヲマクナギト云也。イヅレモ瞬ノ字ノ心ナルベシ。

まさぐり物

モテアソビ物。手マサグリト云。弊字也。

まし

イマシ。爾。ナンヂ也。イマシトヨムヲ。イヲ略シテマシト云。惟光我ガ子ヲ云詞。冠者君使ニ妹ノモトニ文持テ來時。

まへしりへとさうぞきて

繪合ニ在。弓イル時。左右ヲマヘウシロト云。サレバウヘノ女房ニテ。左右ニサウゾキワケテ。若菜ニ。六條院ノ小弓ノ所ニ。マヘシリヘノ心ニ。コマトリニカタワカチテト云。

まうちぎみ

大夫ヲマウチギミト云。惣テ殿上人ヲ云也。御幸ニ。キンタチムツマシウ。サルベキマウチギミタチ。

まづの人

先ノ人也。若菜ニ。ヤンゴトナキマヅノ人云々。

まてこ（みイ）えて

詣籠也。カシコニマデツキテ。京ニマデコシ。此皆詣也。柏木ニ。一條ノ宮ニマデタリシ云々。

まかびるさなの

若菜下終ノ語也。摩訶毘盧遮那。言語道斷ノ心ト書留ル所ナケレバ。摩訶毘盧遮那ノ如ト云ハテタル也。此詞深キ心ナルベシ。胎藏界閼伽觀ノ文ニモ。無始無終。極重罪苦。忽然蕩除ノ心ナリ。

まなこゐ

眼睛居也。横笛。

またぶり

杈椏。音砂鴉。浮舟。ウヅチ(卯槌)マタブリ山タチバナ。私曰。禁中ニアル卯槌マタブリ等ヲマネビテ。宇治ノ浮舟ノ方ヨリ中君ヘ送ラルヽ也。

またゝきて

玉鬘ニ。泊瀬詣。右近姫君ニ行逢物語ノ詞ニ。ヨミヂノホダシニモワヅラヒ聞エテナンマタヽキ侍ルト云。私云。長生メイマダ目ノハタラクト云心ナリ。又夕顔ノ巻ニ。ナニガシノ院所。火ハマタヽキテ。両説。一ニハ灯ノ風ニフカレテ動ガ。目ヲタヽクニ似タルヲ云。一説ニハ火ハイマダ焼テ也ト云。目タヽクヲ用口傳。

まとゐ(的射)

凡ハ團欒云坐スル也。又的射。若菜下。此院ニカヽルマトイアルベシトキヽツタヘテツドイ給。是ハ弓イル也。古今哥ニ。マトヰセル夜ハ唐ニシキトアリ。是圓居也。

まてや

玉鬘巻。大夫監詞ニ。マテヤイカニオホセラルヽ事ゾト云々。マテハマテシバシト云詞。筑紫郷談也。

計

けぢめ

結目。桐壺。チヂメミセヌト。伊勢物語ニモ云。ソノキハヲイチジルクミセヌ也。

けしうはあらず(両儀各別)

不下習。濁。不恠。澄。人ノミメ形ヲ云所ニテハ不下習。濁。病ナドヲ云所ニテハ不恠。澄也。御幸ニ。三條ノ宮ヲトブラヒ給ニ。物ヨクキコユルハ。ケシウハヲハシマサズト云々。是ハ恠也。所ニヨルベシ。

けいめい

嫈嫇(ケイメイ)。遊仙屈。經營。夕顔。敬命。ウヤマイシタガフ心也。

けんぎ

嫌疑。横笛ニ。ヨノツネノケンギアリガホニ。柏木ノ笛ノ事ヲ云也。

けそく

花足。葵卷。ネノコノ餅入物。

けせう

見證。顯證。玉鬘ニ。ケセウニ人シゲクモアルベシ。私云。ハレガマシキ心也。イチジルクアラハナル心也。

けそむ

家損。イヘノキズト云心也。常夏ニ。カヤウノコトコソヲノヅカラケソンニ侍ケレ。

けやけし

尤字。ケヤケウハシタナシ。イチジルキ心也。藤裏葉。アシ垣ウタウヲ。乙戸ケヤケウモツカウマツレルカナト在。

げざう

見參也。濁。又ケサウビ(濁)タルト云。心別ナリ。

けそう

化生。夢浮橋。ケソウノ人ナンイカナル鬼ニカ。又顯證人。

けちえん

掲焉。乙女卷。ハレガマシキ也。イチジルキ也。

げさく

外戚。

けうのこと

希有。

けうやく

カリソメニ物ヲ作ヲ云。又物ヲカヘタルヲモ云。狡易。

けうの菩薩

・脇菩薩。鈴虫巻。
けかけたる金
鈴虫巻。偈掛。
けはい
箒木。ジネンニ其ケハヒ。氣。日本紀。形勢。新猿樂記。
景氣。
けんそ
武川。碁打見所。
けちさす
結也。空蟬ニ碁打所。
けうせんの心
オヤニ孝センノ心。常夏。孝行ノ心也。
けさはがしう
氣噪シク也。松風ニ桂ノ預云詞。内ノ大殿ノ御堂チカクテ。カノワタリハケサハガシウ。
げんざ
驗者。

不

ぶたう
舞踏。桐壺。所々多シ。餘情ニアリ。
ふいに
不意。日本紀。
ふよう
ナルヨシキコエ。不用。
ふむつくりて
符。若紫瘧病所。
ふるきのかはぎぬ
黒貂。フルキ。順和名。豹(フルキ)。ヘウ。毛詩。取彼狐狸。爲公子裘。注云。以居孟冬。則天子始裘也。玉造小町衣裘ヲ云ニ。菟裘。豹裘。偈(ウタ)ウ時。紅藍色濃也。高光少將入道如覺也。集云。中宮ヨリ御裝束ヒタヘレ。フルキノカラノ御ゾトテタマハセケル。夏ナレド山ハサムシト云ナレバコノカハギヌハ風ヲフセガン。古ノ御門ハ

着給へリケル云々。

ふりがたく
難舊。源内侍スケヲ云。年老タレドモ。フルビガタキ也。

ふぢのたもと
素服也。藤ノヤツレ同。乙女。

ふむのつかさ
圖書寮。收納樂器所也。繪合。藤裏葉。ケウセツナル程ニ。上ノ御アソビ始テ。フムツカサノ御事共ト云々。

ふつゝか
ゲスシキ也。

ぶむじんぎさう
文人ハ文章生也。擬生。擬文生。擬進士ト云。乙女ニ。ブンジンギサウトイフヨリウチハジメ。六條光書之招月

ふくつけき
ヨクガマシキ也。權卷。童オコシテ雪マロバサント。フクツケカレド。エヰウゴカサデワブルヲミ給云ナリ。

ふればい
フレバミ也。又フルバイ給ヘシフルマイ也。野分。

ぶんず
文集。

ふればゝせ
觸字也。若菜上。カノ御アタリニコソフレバヽセマホシケレ。宿木ニ薰詞ニ。昔ノ御ケハヒニカケテモフレバヽン人ハ。シラヌ國マデモ尋シラマホシキトアリ。

ふずく
粉熟。金谷苑記云。献赤粉餅。寄生ニ。中宮五夜產養。薰ノサタノ所ニ。センカウノヲシキタカツキドモニテ。フズクマイラセ給。同卷

藤壺ノ藤宴ニ。宮御方ヨリフズクマイラセタマウ。

ふところがみ

紅梅ニ。フトコロ紙ニトリ交テトアリ。

ふたつの道

箒木ニ。ワガフタツノミチヲウタウヲキケ。

ふる物あつかひ

玉鬘ニ。内ノオトヾ御女トモシラデ。源氏ヲヨクムヅカシキフルモノアツカヒカナト云ケチ給。私云。舊縁ヲ尋悦テモテナスト云也。

こ

こうらうでん

後涼殿。桐壺。

こきでん 濁口傳

弘徽殿。同。

こうろくわん

鴻臚館。在七條坊西朱雀。貞觀十四年五月十七日。鴻臚舘芳問渤海客。伊勢物語。渤海トハ高麗也。七歳ニテ逢高麗作文例。ウツボノトシカゲニアリ。桐壺。

こくさうゐん

穀藏院。

こよなう

無越。閑雅コヨナウ。幽玄ノ義也。

こもの

木物。籠物。或献物。桐壺。コモノヲリビツ物。籠物ハ八目籠ヲ方ニクミテ打合テ。中ニ色々ノ薄様ヲ敷覆テ。菓子ヲ入タル物也。木物トハ栗椽ハシバミ。椎ナドヲ入故ニ木物ト云也。或献物ト書ク。コンモツトヨム。高倉安元御賀記。隆房卿作也。又圓融院子日御幸。寛和元年二十三小野宮右府記云。籠物云々。口傳用籠物。

ことえり
言バエリ。言撰。
両義 こといみ
言忌。事忌。可依所。
こゝら
巨々等。多キ也。
ごいし
御倚子。天子ノ出御ノ時。御座ノトコナリ。
こゝしき
巨々。古々。若菜下。柳ノ葉ヲモヽ度アテツベキトネリドモノウケバリテ。イトムシムナリヤ。スコシコヽシキテツキドモヲコソマセメトテ。大将タチヨリ初テヲリ給ト云々。古々ノ心也。
こゝしく
同詞也。乙女ニ。ニホヤカニコヽシクウツクシ。是ハ濃ナル心也。キトクト同音。イヅレモ同。
こめき
古メキ。コメカシクハシキ也。私云。コマヤカナル心。コヽシキ同心也。
こめかしう
同心也。乙女ニ。イトコメカシウ。シメヤカニウツクシ。古フルメカシキ心モアルベシ。
こゝろしらひ
心ヅカヒ也。
このもかのも
此面彼面。タガヲ。
こゝのしなのかみ
九品。上品上生。夕顔大貳乳母所。源氏詞。
こゑたてぬ念佛
夕顔。万歳身後抄云。葬送以前無音念佛立蹄之。則限佛事勤之。
両義 こたい

古代。古躰。用之。末摘ヲ　衣箱　ヲモリヤカニコタイナル。

こまやかなる

濃。コマヤカナル。

こまのくるみ色のかみ

高麗胡桃色紙。コマノウスヤウノカミ。ウチハ白シ。外ヨリハ香色ナリ。

ことなしび

無爲。コトナシビ。古今。村鳥ノ立ニシ我名今更ニコトナシブトモシルシアラメヤ。

こゝろば

繪合ニ。サシグシノ筥ノコヽロバ。又云。エンニスキタルチンノハコニ。同ジコヽロバノサマナド。梅枝ニ。チンノ筥ニ。ルリノツキニスヘテ。大ニマロガシツヽ入給ヘリ。コヽロバ紺瑠璃ニハ五葉ノ枝。シロキニハ梅ヲエリテ。同引結タル糸ノサマト云々。拾遺哥。淺カラヌ契結ベルコヽロバヽ手向ノ神ゾ知ベカリケル。私云。コヽロバノ事。多聞ハ筥ニ付タル緒ノクミト心得タリ。然ヲ或人五葉ノ枝梅ナドヲ金銀ニテエリタリトアルハ。箱ノクリカタトミエタリ云々。又コヽロバニ哥ヲカクトアルハ。クリカタニハ云ベカラズ。緒ノクミカト覺ツカナシ。其モ組ニハカキニクシ。書テ付タル歟。所詮金銀ニテエルトアレバ。クリカタヽルベキ歟。又答云。或云。金銀ニテエルクリ方勿論也。其クリカタニ結付タルクミ也。詞ニモムスビ付タル糸ノサマトアリ。組ノ糸ノサマヲ云ヘリ。既緩ノ字ヲコヽロバムトヨマセタリ。猶クミタルベキ歟。私云。此兩其謂アレドモ。ムスビ付タル糸ノサマトアリ。組ヲ以テ爲正。

こちく〳〵しく

槿ニ。フツヽカニコチ〳〵シク。女五宮ヲ云。玉鬘ニ。ヰナカビテコチ〳〵シウヲハセマシカバ。初子ニ。コチ〳〵シクサスガニワラヒ給テ。皆同心。

こまかけ

コマカニ也。乙女ニ。女房ノザウシ（曹司）マチドモ。アテ〳〵コマカゲゾヲホカタノコトヨリモメデタカリケル。或本アテ〳〵コマケウトアリ。私云。コマトル儀也。女房曹司マチドモ。アテ〳〵コマゲゾトアルハコマトリ歟。若菜。左右ニコマトリテト云モ。アテ〳〵ヲ左右ニ分タル也。是モ局〳〵ヲワケタル儀歟。コマカナリト注スル。或本ニ。コマケウトアルニ付テ注スルカ。コマケウ。コマカナル心ナリ。

（太ノ字ニ入ヘシ）ことばだたり

訛。孝經序ニ。詞ノナマル也。拾遺哥。アヅマニテヤシナハレタル人ノコハシタヾミテコソ物ハイヒケレ。玉鬘大夫監申事。

ことぶき

言吹。壽。日本紀。文選。祝言也。虚壽。文集。天平元年正月四日。始有踏哥。言吹者。初音ニ源氏詞。ワレコトブキセントウチ笑給。餅鏡トリヨセテ。トモノ中ノ奉リ給時。三種神器ヲ授奉リシ時壽シ給フ。私云。天照太神天御孫天降シ。

このさうのめいぼく

今生ノ面目。

こうらう

古老。或耆老。

ごくらく寺

極樂寺。在深草。昭宣公建之。私云。昭宣公芹河行幸仁明天皇。時。筝ノ造爪　落シマシ〳〵テ求ニ遣ス時立願。仍求出テ奉リ給。果シテ後

ニ其所ニ建立シ給シ寺也。

ことつび

琴粒。秘抄云。事粒也。狛氏十秘抄云。コトツキ。コトツビ。コトサイ。三説在。コトツキハ人ノカホツキナド云心也。事粒ハ其姿カキツボミタル物カラ。モノ〳〵シクケダカクコマヤカニアル心也。コトサイハ人ノアシク讀付タル也。不可用之。

ことども

絃物名也。藤裏葉ニ。圖書寮。フムノツカサノ御コトドモメス云々。

ともなく

ヨキヲモ云。柏木ヲ云ニ。サイナドモコトモナク。ツイニハ世ノカタメナルベキ人。若菜。

ごかのしらべ　兩說廿ヶ調

若菜ニ。琴ハゴカノシラベ。アマタノナカニ琴ニ有五ヶ調。搔手。片垂。水瓶。蒼海波。鴈鳴ノ調。或胡歌調。胡笳調。

ごろくのはら

若菜ニ。ゴロクノハラヲ。イトヲモシロクスマシテヒキ給。万秋樂五六帖。ハジメコソカハレ。皆破ニ返付也。仍五六ノ破等ト云也。或云。五六ノ撥。々ハ調子ニツカサドル絃也。不用。

こたち　兩義別也

女房ノ惣稱。後達。御達。子達。女ハ夫ノ後ニ居スル也。後漢書鄭玄注ニ云。禮記云。在夫後云々。故ニ后ト云モ後義也。仍女ヲ後達ト云。御達ハカシヅク儀也。母御姉御ト云ガ如シ。濁テヨム。子達ハ女ノ實名ヲバ何子ト云。仍子達ト云。澄テヨム。又木立。庭ノコタチ。家ノコタチ。別心也。コヲ澄テ。タヲ濁テヨム。

両義
こうさう
業障也。又興盛。夕霧ニ。コウサウニマドハシテ。
こまうど
高麗人。
こつれなくて
こせん
御前。々駈。随身。
こたみ ひイ
今度也。或コタビ。
ごち 編言
ヒトリゴチ。キコエゴチナド云詞也。
このとの
此殿。催馬樂。
こて
東屋ニ。御門ノクチヅカラコチ給ヘル。御門ノ御チヤウ御定。アルト云。ゴチ同心也。言歟。
ごのかうのきみ
権守君。私云。ゴンノカウノ君トヨムベシ。
こゝろはしりて
ムナサワギスル也。
こまとる
狛取也。若菜下。左右ニ分ツ也。コマカケ同心也。
ごてのぜに
寄生ニ。中君ノ産五日夜養。薫ノサタノ所ニ。屯食五十具。ゴテノゼニ。ワウバンナド在ト云ヘリ。此事有口傳。別注儺打事云々。又親王誕生圍碁ヲ打出錢。
こだに
宿木ニ。コダニナドスコシヒキトラセテ。草類歟。注云。木蚋。木ニツクトモ云。可勘。

こうじて
須广。源氏ノ御門ノ夢ニミエ給所ニアリ。蜻蛉ニ。物キヽコウジテ。屈シタル心也。
こに女こそ
若紫ニ。コヽニ女コソ。コヽニ也。
ごしむ
若紫ニ。北山僧都ゴシンマイル。護身。加持スルナリ。
こんがうじのずゞ
金剛子念珠。若紫。僧都ノタテマツル。
こもき
女名。手習。小野尼君ノツカウドニシリケルイヌキ。アテキ。ナレキ。同公字也。
こむじ
巾子冠—。初音ニ。サルハカウコンジノヨハナレタルサマ。言吹ノミダレガハシキトアリ。高巾子。蟹冠トモ。男踏哥ノ冠ノコトナリ。

江上聲ニ可讀。へ平聲。ゑ去聲。但下ノ字ニ引カレテ聲不定事モアリ。

え
エニクミ給ハズ。キリツボ。吉字。往ノ吉。日吉。
えもいはず
同心。

天

てぐるまのせんじ
輦車宣旨也。輦ヲ手グルマト云。如輿ニテ手カキニスル也。尊者蒙宣旨。乗ナガラ宮中ヲ出入スル也。牛車宣ハ猶上ノ事也。牛ヲ懸ナガラ内裏出入スル也。桐壺ニ。更衣マカデサマニ宣旨アリ。又槇柱ニ。尙侍出給ニ。御テグルマヨセテト在。
てかく
手搔也。人ニシラレジトテ。言ニハ出ズメ。

手ニテマネグ也。夕顔ニ。アナカマトテカク。

ては紀のつらゆき

紀貫之。能書。繪合ニ道風ニ番。ツガウ。

てん上ののりゆみ

殿上賭射的。正月十一日式日也。

てんげむ

天眼。冥鑒也。テンゲンヲソロシク。冷泉院御詞。

てんぐ

天狗。夢浮橋。テングコダマ。

てうがく

調樂。箒木。賀茂臨時祭ノテウガクニトアリ。私云。賀茂臨時祭自宇多御門始ル。十一月午日。北陣ニ幄有儀式。有饗膳勸盃。

安

あつし

廷。アヤウキ心也。ヨハキ心。靈運。當遷。日本紀。桐壺巻。更衣ヲ云劣。

あひなう

無愛(コレモウラチ云詞)。無問。桐壺。私云。無間ハ心カハルベキ歟。タエマモナキ歟。

あぢきなう

無爲。日本紀。漢書。無事。万。

あさがれい

朝餉。朝ノ供御有清涼殿。夕供御大床子。オモノハ皇居ニ隨テウツサル。

あだ人

且。万。別人(アタヒト)。西域傳。佗妻。異心。異國。日本紀。佗邦。禮記。信邦(アタシクニハ)名ナ云。丹合(アタナレ)。万。菅家。私云。アダ〳〵シクタノミナキ人也。命ヤハ何ソハ露ヲ。

あさまつりごと

早朝。長恨哥。君王不早朝(アサマツリコトシタマハス也)。キリツボ。

あはつかに

アハ〳〵シキ也。淡々敷。頓。日本紀。迅。永。古語拾遺。

あはつけ人

常夏。近江君ノ舌トウコエアハツケサト云。
淡付。アハ〳〵シキ同心。

あかるゝ

散也。箒木。マカリアカルヽニ云。預別也。ワトカト同音。

あかれ

花宴。朧月夜ノマカデ給ヲ云。弘徽殿ノ御アカレニ侍メリト云。御ワカレト云也。ナカレト云心ナリ。

あへかなる

ヨハキ。夕顔ニユウ顔ノ上ヲ云。ラウタゲニアエカナル心チシテト云。八雲ニ。ウツクシクヒハツナル也。若菜ニ。マダイトアヘカナル御ホド。女三宮事。

あへか

アキラカ也。

あはめにくむ

淡悪。カルメニクム也。箒木雨夜物語。

あざへたる

近江ノ君ヲ云。サレバアザワラウ。あざれかくれば。ザレカヽル也。アハサヽゲ物。誹諧心。皆ザレタル也。あさりありく。夕顔ニ惟光ヲ云ニ。タノマズ。アサリアリケドモ。ザレアリク也。

あひだれ

愛垂。

あてはか

嫕姸。日本紀。テハカ。アタエニハカナキ心。タヘニウツクシキ也。

ありか

當。古語拾遺。スミカ同心也。在所。夕顔ニ惟光ヲ尋ルニ。アリカサダメヌ物ニテトアリ。アリ

カミム。

あやめ

綾目。綾文也。夕顔ニ。物ノアヤメミワクベキ云々。八雲抄ニハ。善惡ヲモミツカヌ也云々。

あてき

妙君。葵上童也。又公字用。紫式部記ニ。タクミノ藏人ナゲシノシモニキテ。アテキガ縫ヒモノヽカサネヒネリヲシヘナドストモ云。如此記者。アテキハ司人惣名ト見ヘタリ。私云。何キト云類多シ。其時ノ司人ヲアテキト云ケル歟。

あをむま

正月七日。靑馬節會。私云。靑馬七疋。靑陽色。春。七ハ陽數。馬ハ陽獸。見之除年災。

あをに

靑丹。私云。アヲニヨシ奈良トツヾケタリ。委見袖中抄。

あを

關屋ニ。タビスガタ(毛歟)ドモ(摺染)ノ色(々ノ歟)ヲアヲノツキ〳〵シキヌヒキノ。クヽリゾメノサマ云々。

あそびめ(女)

漂冷。住吉詣ニアソビドモマイレリ。靑表紙本ニハアソビトアリ。

あまそぎ

フカソギ也。薄雲ニ。此春ヨリヲホス御グシ。アマソギノホドニテ云々。或本ニハアマノホドニテトアリ。

あるじ

饗。賭射還饗。人ノマウケノ饗。諸社祭ニ飯スヘヨト催ス。上卿詞曰。ミアルジツカウマツレ云々。

あまがつ

松風ニ。御ハカシ。太刀。アマガツ。天兒。明石

君行所ニ。天兒。小兒三歳マデハ用之。

あをじ

青磁。

あざれたる

餒。アザレタル。論語。魚ノ餒タル。私。損タル也。此詞心アマタアリ。直衣ノフクミアザレタルト云ヘルハ。フクダミ損タレバ。此餒字ニ叶歟。花宴ニ。人ハ上ノキヌナルニ。アザレタルオホギミ姿ト。源氏ヲ云ニハ此字不叶。又鮮。アザヤカ也。宿木ニ。右大臣六君ニ匂宮初テ渡所ニ。モノ〱シクアザヤギテトアルト。花宴ノ心トハ同。アザレ。アザヤグ同詞歟。又アザレタルトハ。裝束ノシヾラノ井タルガコト〱シキヲ云。口傳セリ。所ニヨルベシ。又紅葉賀ニ。アザレタルウテギ姿。是モ花宴同心。

あざやいたる

同前。注見前。

有説 あざれ

誹諧ヲ俊頼ザレ哥ト云心。箒木ニ。アザレカヽル。ザレカヽル也。ザレタル也。アハサヽゲ物也。河海。

あざゑ

幻ニ。サヤウニアザエタルコトハ。同詞也。

あふさず

玉鬘ニ。オトシアブサズ。河海ニハ放埒。フレカサス也。孝經ニ滿而不溢。ミテレドモアフサズ。

あふより

アナタヨリ。玉鬘ニ。御手ノステハアフヨリニタリ云々。昔ニヨリ古樣ナル歟。

あくら

幄等。舞時樂所。

兩義心有之 あまへたる

甘得。末摘ノ所ニ。源氏ト頭中將ト歸所ニ。

アマヘテ共ニカヘルトアリ。—卷。アマヘタルタキモノヽカ。アマクサキ也。

あさゝむ

朝寒。

あくらう

惡靈也。

あげまき　催馬樂名

兩義。童髮ノ總角ナルヲ云。末摘。蓬生ノ宿ニハナチカウアゲマキト云。童ノ牛馬飼也。頭ノ總角ナルニヨテ云。東ニ在。棟トヲシト云。私云。催馬樂名。又車ニモ在。童ノ總名。

あのごと

如案也。私云。アムノゴトト讀ナリ。

あたへかくして

ホコリタル義。又アミタ歟。

あらましき

荒也。寄生ニ。アラマシキアヅマヲトコノコシニモノヲハル云。浮舟ニ。風ノヲトモイトアラマシク云。

あちらひ

あけたてば

朝立。

あじろびやうぶ

籧篨。宇治。竹ニテクミタル屏風也。

あべし

アルベシ。若紫。私云。アムベシトヨム。

あへまし　兩義

篅木。七夕ノタチヌフコトヲノドメテ。ソノタエヲ契ソアヘマシ。私云。アヘ物ト云ハアヤカリ物也。アヘマシハアヤカラマシ也。

あへなん

初音ニ。末摘ノ裘ヲ山臥ノミノシロ衣ニ讓テアヘナン。敢南心別。

あふさきるさ
左右ト書。コナタカナタ也。古今。シカリトテトスレバカヽリカクスレバアナ云シラズアフサキルサニ。
あいたちなき
無愛達。
あはせのはかま
古ハ練袴ニ綿ヲ入ル。サレバ取分テアハセノ袴ト云ハネリタル歟。今ノ女房ノ馬上ニキルサシ貫ト云ハ是也。
あべのおほし
繪名。繪合ニ。ウツボノトシカゲ。安倍多(チホシ)。ヒネズミクラモチノ御子。
あしゆひのくみ
花足ノ心ハ行香臺ノ事。足ユイニ花足ノ足ヲユウニアラズ。スヾシノ糸ヲスソゴニ染テ。アハビ結ニシテ。行香ノ臺ノ四方ヲカラミ。花足ノアシヨリ長クウチハヘタリ、
あかの花
幻ニ。アカノ花ノ夕バヘシ。閼伽十器ニ佛ニ供スル花ノ夕バヘナリ。
あて人（左ニ行擡イ本補）
妙人。アテヤカニウツクシキ人。
あつかはしき
オボエモテナシ也。是ハ心ツヨクモテハナレ。アツカハシキ也。螢巻。又熱。蟬ノ聲ノアツカハシハ熱也。
あしがき
催馬樂。藤裏葉ニ。弁少將アシガキウタフ。ヲトヾケヤケウモツカウマツルカナトノ給。
あくるまさきて
明間開也。宿木。アサガホノ事。
あいしう

愛執。夢浮橋ニ。アイシウツミトアリ。

あかゝららむはあへなからん

末摘。アリナント云詞也。

あふなげに

無奥。澄。又危心。濁。御幸ニ。アウナゲニノ給へバ。無奥也。スミテ讀。又危心。ニゴリテヨム。

あゆまい

歩様也。御幸ニ。内ノヲトヾヲ云。ヲモヽチ面持。アユマイ。

あだげ

アダナル氣色歟。若菜上。イキ(テソ歟)ハノフリセヌアダゲコソイトヲシケレ云々。

あかれぬ

玉鬘ニ姫君哥右近行合。泊瀬河ハヤクノ事ハシラネドモケウノアフセニ身サヘアカレヌ。又アカレヌ詞不審。思ワカレヌ歟。分別心也。ヌハ不字也。

あゝ

若菜上。明石尼公ヲ云ニ。耳モオボ〳〵シケレバ。アヽトカタブキヰタリト云々。

あしこもと

宿木。アソコモト也。シトソト音通之。

あかとき

曉也。宿木。弁常陸室泊瀬歸ニアヒテ。アカトキヲハシツキナント。待キコエシト云々。

左

さがなみ

恐。惡。桐壺。

さけず

不遠。

さぶらひ

殿上ヲ内ノサブライト云。

さうじみ

正身。正員也。所ニ付テソコノ主人ヲ云。

さすらう

伶傳也。又玲瓏。タヽヨウ也。箒木。

さゝやか

少々。狹々。細々許。サヽヤカニシテ。遊仙窟。ホソクチイサキ心。

さしすぐいたる

サシスギタル也。

さんしごさやう

史記。漢書。後漢。三史。周易。禮記。毛詩。左傳。尙書。五經。箒木。

さがりば

下場。カミノサガリバ。

さうとく

早速。イソガハシキ也。常夏ニ。水飯ナドトリ〳〵サウトキツヽクウト云。

ざえ

才。

さくら人

風俗。

ざれたる

物ナレタル心。ザレ人ナド云如シ。俊頼口傳ニ。誹諧ヲザレ哥。タワブル、ガ如シ。私云。紅葉賀ニ紫上ヲ云ニ。クチヲホヘルサマ。イミジウザレテウツクシ。是ハザレ（誹諧）タルニヤ。又ハイツシカカクレナクサレ（曬）タル氣色ノウツクシキト云心モアルニヤ。夕顏ニ。サスガニサレタルヤリ戸ト云々。兩義在。踈ニ實メカシクモ造ヌヲ。ザレ（誹諧）タルヤリ戸ト云歟。濁。又垣モナクアラハナル。サレ（曬）タルヤリ戸ト云歟。澄。兩說也。又物ナレタルニモ此兩義アリ。人ニユルサレカクレナキ人ヲサレタルト云漢〔義歟〕歟。又シトヤカニモナキザレ（誹諧）モノト云心歟。濁。トコロニヨルベシ。

さうと〱太子
聖德太子。若紫。北山僧都金剛子念珠事。

さらぼいて
髏。サラボウ。莊子。老サラボヒテ。

さうのこと
箏。

さう
タ、サウトモ
繪合ニ。昔ヨリサウハ女ナンヒキトル物ナリケル云々。

さう〱し
サウサシキ也。閑書之。サビシキ也。寂寞。

さが
樣也。サマ。マトカト同音。世ノサガハ世ノ習。世ノクセ也。

さくらのからのきの御なをし
キノ字ニ可入
えびぞめ下がさね。綺。ヲリモノ。カムハタトヨム。カラヲリモノヲ云也。直衣ニ下襲常ノ事也。綺ハヲリ物ノ唐織物ナルベシ。後嵯峨院高野御幸ノヲリ。此御直衣事メサントテ。諸人ニ御尋アリシ也。義ハシアルヤラン。

ざうぎやうさんまい
常行三昧。

さくじり
鐫。解結器也。如錐。冠者ノ君ヲ云。小人ノヲトナ心在ヲ云。私云。毛詩云。童子佩鐫。々ハ成人ノ佩也。小人ノ大人ノ佩ヲ帶ト云心叶歟。

さうかの殿上人
サウカノ殿上人アマタ侍フ。唱哥殿上人ト云々。唱哥ハ上首所爲也。アマタ不審。床下殿上人歟。或人云。藤裏葉云。サウカノ殿上人。御階ニサフラウ中ニ。弁少將ノ聲スグレタリト云々。若菜云。サウカノ人々御階ニメシ

テ。スグレタル聲ノカギリイダシ。返リゴエニナル。ヨノ深ユクマヽニト云々。猶唱哥タルベシ。上首所爲トアレドモ。所々ニ殿上人御階ニテトアリ。

さとびたる

或里ビタルト云説アリ。不用。キナカビタルナリ。イナカ聲ノナマリタルハ。サトゲニキコユ。浮船ニ。里ビタル犬トアルヲ。里ナレタルト思ッケタル僻事也。サトゲニトガムル犬也。悟。覺利。

さうふれむ

想夫戀。樂名。常夏ニ。サウフレンバカリコソ心ノ中ニテマギラハス人モアリケメ云々。又夕霧一宮所ニモ在。昔ハ男ヲ思テ戀ト云樂ナレバ。女ニハイミテ傳ヘズ有ケル歟。孝道雅談抄云。妙音院相國名ヲイミテ御臺盤所ニヲシヘ給ハザリシ。尾張ヘウツサレ給シ後譜ヲ書テ。今ハ此譜ニテイカニモタウレバ引給ヘト申サレケル。遠所ヨリ譜ニテ敎ヘタル例也云々。

さゝのと

少様事。

さゝめく

箒木ニ。ウチサヽメキテ。耳言。サヽメク。万。

さゝめごと

私云。文集云。琵琶引。小絃ハ切々トシテ如私語。

さらぬわかれ

不去別。不遁避別也。スマ。

ざけ

邪氣。

ざえがらず

初音ニ。明石上ノ見給所ニ。サウガチニモザエガラズカキスマシタリト云々。不才。才ガ

マシカラズ也。

さみだれがみ
螢ニ。サミダレガミノミダルヽモシラデ云々。
拾。郭公ヲチカヘリナケウナヒコガウチタレ
髮 五月雨ノ比。 躬恒。

〔兩義〕さかし
サゞカシ。領納詞。又賢。カシコキ也。

〔兩義〕さまよふ
様(サマヨウ)好。容儀ヨキ也。又吟(サマヨウ)。立サマヨフ。依所。

〔兩義〕さうやく
雑(雑役)役。雑々ノ役送。若菜。濁上聲。箒木ニ。コ
ク熱ノサウヤク。草藥(草藥)蒜ノ事也。澄平聲ニヨ
ム。

さばのほか
娑婆界ノ外。若菜上。

さくぢやう
幻ニ。サクヂヤウノコヱ。錫杖。

さ
若菜下。イトサコトヽシキヽハト云。イ字
所ニモ入。

ざうげん
讒言。柏木ニ。督君夕霧ニカタル詞。イカナ
ルザウゲンノ有ケルト云々。

〔兩義〕さだすぎ
私云。此詞アマタアリ。年ノサカリ過タル
心。又トクサシスギタル心モ在。若菜下ニ。
六條院我トサダスギ人ヲモヲナジクト在。
又若紫ニ。北山尼ノ所ヘノ御文ヲシツヽミ
給ヘルサヘ。サダ過タル御目ニハ。メモアヤ
ニミユト在。是モ年ノ過タル心ナリ。

さしぐみ
サシヨリニト云心也。若紫橋姫ニ。サシグミ
ニフル物ガタリ。薫ト弁ト。

されくつがへる

シトヤカテラヌサマ也。俊頼口傳心。クツガヘルハ顚倒也。シヤレクツガヘル。

さらども
皿也。葵巻ニ。ネノコノ餅惟光タテマツル所。御サラドモイツノマニカシイデケントアリ。

さらぬかがみ
スマ。鄭人曹父行遠國時。破鏡テ一片ヲ妻ニ與シ也。

さへかひ申さてなん
若菜上。優也。

さうじをろして
請下。橋姫。アザリモサウジヲロシテ。

さがの院
宿木ニ。サガノ院ニモ六條院ニモ聖カクレテ。サガニヲハシマシケル。

さば見ん
浮舟。サラバミム也。

さうし〳〵（兩說庄盃曹司）
常陸所領庄々也。東屋ニ。サウシ〳〵ニアル物ドモメシイデヽ云々。紫明ニハ曹子ト註ス。私云。庄々ナラバ字アマル歟。

さくはちのふえ
末摘ニ。大ヒチリキ。サクハチノフエ。

さうに
玉鬘。大夫監詞。サウニナヲボシハヾカリソト云。サヤウニ歟。國ノ院淡歟。

さかしら
玉鬘末摘ヲ云ニ。カタハライタキ心ノツキ給ヘル。サカシラニモテワヅラヒ給ト云。

さび〳〵しく
初音ニ。光モナク。クロキカイネリノサビ〳〵シクハリナシタル。

さはがいたさま（深）

御幸ニ。三條ノ詞。中將君ノ思ヒアツカヒ。心ヲサハガヒタサマト在。サハギタル心也。
さねこん
薄雲卷。催馬樂詞。宿來(サチコン)トカク。
さるべきかうの物
若菜上。注云。干物魚也云々。可勘也。若ハ味噌付歟。
さすがね
懸金。ヨコ笛。
さはりおほみなる
碍多也。總角。匂宮。今夜々々トサハリオホミナル程ハ。
さぐりもよゝと
總角ニ。大君ノナヤミ給所ニ。中納言サグリモヨヽトナキ給。
幾
さよら
淨阇羅。キリツボ。
さずをもとめ
吹毛求疵。漢書。桐壺。後撰。ナヲキ木ニマガレル枝モアル物ヲ毛ヲフキヽズヲ云ガアヤナキ。高津内親王。
きびは
稚。日本紀。桐壺。キビハナルホドハアゲヲトリモヤ。源氏元服事。
きよろしき
淸宜。箒木。
きやうさく
かうさく同。形跡。還迹。又敬策。若紫。ワカケレドキヤウサクニヲイサキタノモシ。眞人ヲ云也。私云。還迹。ウルハシクサリヌベキ心也。
きりかけだつ物
人不知トテ秘ス。私云。ダツ物トハ何メカシ

キ物ト云詞也。家ダツ。メイダツナドイヘリ。別有口傳。

きんもち
公望。繪師名。高名錄。當代。

きんぢ
汝也。ナムヂ。キムヂ同訓。乙女ニ。惟光ガ子ノ童殿上スルヲ父ノ云詞。

きうしらく
喜春樂。

きのはて
玉鬘ニ。三月ヲキノハテトテイム。四季ノハテ也。大夫監ガ云詞。

ぎしきくわん
末摘ヲ云ニ。ギシキクワンノヒヂモチノヤウニト云。儀式官出仕ノ時。召具スル火長ナドノコワバリ着タル臂持也。

きうだい
及第。乙女卷。

ぎさう
文人擬生。乙女卷。

きなるいづみ
黃泉。

きびう
常夏。スコシ引給フコトツビ。キビウイマメカシウヲカシト在。定家本ニハ此詞ナシ。コトツビイトニナクト在。コトツビ等事。古ノ字ノ所ニ注之。

ぎやうがう
行香。蛤虫。私云。行香事。法事時。殿上侍臣ナドノ所役ニテ。明香ヲ臺ニ入テ燒テメグル也。

きすく
健也。淳朴ノ體也。

きんのふ

琴譜。宿木巻。

きせい大とく

手習。イトキセイ大德ニナリテ。肥前掾良利。法名寛蓮子。碁上手也。

ぎ

橋姫ニ。薫中將宇治宮ニ詣テ。法文ノ給所ニ。阿闍梨モサウシヲロシテ。ギナンドイハセ給ニ。儀也。難儀。

由

ゆるし色

聽色。延喜式。論語。紅紫不褻服。

ゆけいの命婦

靫負。餘情在之。長恨哥云。内外命婦。焜燿景從。（如クシダカウ）（コンヨウトカケノ）

ゆくりなく

不意。日本紀。

ゆくりか

若紫。スギサマニアカラサマナル心也。

ゆほびかなる

寛。若紫。

ゆくて（ゆくての御こと葉過さまの事也イ）

若紫ニ。ユクテノ御身ハナヲザリ云。ミカサ山キテモ止ラヌ道人ニツラキ行テノカゲゾツレナキ。

ゆたけき（ゆをひかにイ）

寛也。ユタカニヒロキ也。

ゆするつき

土器。鬢水入器。泔器。

ゆのね

由音。箏左手ニ在。私云。七ト五トノ絃也。

ゆみのけち

結。

ゆめ

努々。若菜下ニ。ユメ宮ヅカヘ。

ゆする
沐也。風ニカミケヅリ雨ニユスルアミスト
云。湯アミ髮アラウナリ。沐ハ髮アラフ也。
浴ハユアムル也。匂宮中君ノ事ヲ云。

ゆすりみちて
動搖心。各々在。

女

めさまし
目醒。私云。此註心不叶。目サマシ草ナド云
ハ愛之興ズル心也。澄テ讀。桐壺更衣ヲ云心
ハ嫉妬シ惡心也。濁テ讀ベシ。

めをそばめつゝ
側目。長恨哥云。京師長吏爲之側目。桐壺更
衣事。

めづらかに
メヅヤカニナキハレテ云々。

めもあやに
定家說ニ綾文也云々。目モアテラレズ。アヤ
ノ文ノウツクシキ樣ニ喩タリ。私云。必シモ
綾ニカギルベカラズ。物ノ紋ノアテニ嚴キ
心歟。後拾遺ニ。紅葉バヽ錦ニミユト聞シカ
ド目モアヤニコソケサハナリヌレ。

めぞめ
鈴虫。メゾメモナツカシウ。目染。紫ムラゴ
ニ染タル也。

めいぼく
面目也。此生ノメイボク。

めゝしく
蜻蛉ニ。タヾメヽシク心ヨハキ云々。私云。コ
メカシク心ヨハキ樣ノ心也。

めしうど
召人也。可然人御思人ヲ云也。胡蝶ニ。兵部
卿宮ヲ云ニ。カヨイ給所アマタキコエ。メシ
ウドガニクゲニナノリスル人數多聞ルト云

々。又蘭ニ。メシウドダチテツカウマツルモクノ君トアリ。是ハ召出シテツカウ人ヲ云カ。

めぐらい侍る
橋姫ニ弁ガ詞。カホル中將ニカタル詞。廻也。

めをに
目鬼也。紫明云。文殊樓無目兒事也。手習ニ。昔アリケン目モ鼻モナカリケンメ鬼ニヤ。

美

みすべしたらむ
箒木ニ。ミスベカシタル也。空蟬ニ。ヌギスベシタル衣ト在。ヌギスベラカシタル也。河海。

みつのつかさ
三位也。

みさをつくりて
操。私云。此心叶歟。心バセヲ心操ト注スルハ叶ヘリ。ミサヲツクルハ。心ニクゲナル姿ヲツクル也。別心也。古哥云。夕サレバミサヲニモユル螢カナ聲タテツベキコノ世ト思フニ。コレハナヲザリノ心也。松柏ノ操ハスミテヨム。

みちのくにがみ
檀紙。ミチノクマユミノカミ。

みうちきの人
御裝束師。紅葉賀ニ候ケルヲハテケレバ。上ハミウチキノ人メシテ出サセ給ト云々。紫明云。御ケヅリクシノ人。童頭紙ナル無紋紫ノ直衣ヲ結(絡歟)ヲキタル。是ヲミウチキノ人ト云ト云々。

みぞかけ
御衣架。梳架。延喜式。

みふ

御封。封戸事。依位多（差歟）ミアリ。

みこき

御國忌。天子ノ崩御日ヲ云。私云。ミコツキト可讀。

說々アリ心得

みき

酒也。神酒（ミキ）。御酒。三寸。邪風三寸去故也。三季。冬作。春焚。夏飲故也。神代詞也。澄チバクロキト云。濁チバシロキト云。

兩義

みちがひ

見違。道衢。チマタ。スマ。私云。此註心各別也。見違ハチガヘタル。道衢ハチマタ也。只道路心也。可依所也。

みやびか

閑。麗。都。若菜。督ノ君モノヽミヤビフカク。カドメキ給ト云々。

兩義　三徑　三途

みつのみち

三徑。閑居。三輔決錄云。蔣詡之ハ御舍中丞歟。竹下開三逕植柳云々。三逕ハ門ヘ行道。井ヘ行道。厠行道也。陶淵明歸去來辭云。三逕就荒。松菊獨存云々。松風ニ。天ニ生ル人ノアヤシキミツノミチニカヘル。是ハ三途也。

みづむまや

水驛（スイエキ・ミツムマヤ）。俗ニスイエキシタルト云詞也。初音ニ。夜モヤウ〳〵明ユケバ。ミヅムマヤニテ。コトソガセ給べキヲ云々。槇柱ニ。コナタハミヅムマヤ也ケント心ケサウシテ。私云。水驛事ハ宇佐ノ使ヨリ起事也。見水原。

みのしろ衣

初音ニ。カハギヌハ奏。山臥ノミノシロ衣ニユヅリ給ヘ。蓑代也。

みてこそ

玉鬘ノ上童。青表紙或本ミルニ。胡蝶ニ岩モル中將ノ文トリ次人。

みやうのめしつぎ所

聽召次所也。或本チヤウノメシツギ所ト在。

みあれ

賀茂祭前三日。賀茂山ノヲク垂跡石上ニ出給テ有神事。號御跡。私云。又御靈。々々紫上マウデ給。

みやうがう

總角ニ。ミヤウガウノ糸ヒキ亂リテ。行香ノ臺角ニ結タレタル糸事也。ミヤウ香ニハ不入蜜也。ミツヲノゾキテ。ハラヽカシテトアリ。私云。案之。蜜ハ生類ノ故歟。但甘蜜ヲ用ニ何有妨ヤ。不審也。

みとも

東屋ニ。御車ミトモノ人ト云々。御共人也。

みおもひ

御思也。夢浮橋。

みえがさねの扇

淸少納言枕双紙ニ。ナマメカシキ物ハ。三重ガサネノ扇。五重ニ成ヌレバアマリニアツクテ云々。檜扇ノ兩方上三枚ヅヽヲ薄樣ニテツヽミテ。色々ノ糸ニテトヂテ。糸ヲアウミムスビニシタル也。五重モ同風情也。花宴ニ源氏朧月夜ニトリカヘ給扇ハ。櫻ノ三重ガサネ。コキ方ニカスメル月ヲカキテトアリ。

みや柱めぐりあひけん

明石。伊勢宮造廿一年也。

みあるじ

御饗也。飯ヲアルジト云也。諸社祭ニ飯スヘヨト云ニ。上卿詞云。ミアルジツカウマツレ云々。玉鬘ニ。泊瀨詣ニ日クレヌトイソギ立テ。ミアルジ事ドモイソグト云々。或本ニア(カイ)ヤシトモ在。ミアルジハ夕ベノ飯也。

みあかし

御燈事也。玉鬘泊瀨詣所ニアリ。

みあふる

槙柱。火取ノ灰ノ文ニ。ヤヽ見アフル程モナウト云々。見合也。

みえしらかう

總角ニカホルノコトヲ云所ニ。ミエシラカウ人モ在云々。

みつわくみて

嬛組。支離。年フレバ我黒カミモ白川ノミツハクムマデ成ニケルカナ。年老ヌレバ腰カヾマリテ。二ノ膝ノ中ニ頭マジハリテ。三輪ヲクミタルガ如シ。又云。伊弉冊尊産水神マス。罔象(ミツハ)ト云。其貞老媼ノ如シ。夕顔。
之

したひ

桐壺。從。戀慕。

じやうずめかし

上ラウメカシ也。上手メカシ。

しげいさ

淑景舍。桐壺也。シツケイシヤトヨムベシ。

しやうさむゐ

正三位。繪名。繪合ニ。君ノ心タカクト云々。上三井ノ。私云。シヤウサンミト讀ベシ。

しれもの

箒木ニ雨夜ノ物語。頭中將シレ物ノモノガタリセントアリ。夕顔事。

しぞきて

退也。私云。シムゾキテトヨムベシ。

しびらだつ物

褶(シビラ)。ウハモ。延喜式。褶覆袴衣。私云。ダツ物トハメカシキト云詞。キリカケダツ物。家ダツ。此類所々ニアリ。

しろき扇をいたくこがして

夕顔ニ。花スヘヨト云扇也。タキモノヲコガルヽホドタキタル也。白扇事有秘說口傳。

しゝこらかし

アヅマ詞。若菜。

じゝ
オノガジヽ。各自恣。各競。ヲノ字ノ註ニ見ユ。

しぼち
心發。明石入道事。若紫。

しづ心なき
無閑心。

しゞま（警也）
末摘哥ニ。イクタビカ君ガシヾマニマケツラン物ナ云ソトイハヌ憑ニ。俗ニ無言シヾマカネツクト云。止島也。

しはふる人（頭髮）
紫明。木艸ニウヅモレタルシヅノヲ也云々。或皺古人歟云々。シハタヽミタル老人。柴。シバ。皺。シハ。

しば〳〵
數々。シバ〳〵。頻也。鳥モシバ〳〵鳴ト云々。

したと（したゞやに早言する也）
舌迅。

しふ
執也。執着心也。柏木ニ。サルシウノ身ニソヒタルト云々。

しげきそく
重職也。

しづけき
靜也。橋姫ニ。玉ノウテナニシヅケキト云々。

しみづの寺（清水寺）
玉鬘ニ。三條ガ云。シミヅノ寺ノ觀音。在筑前。

しうとく
宿德。

したいならぬ
不進退也。

しばやすむべき
暫可休息也。竹河。
しみといふ虫
橋姫。蠹魚。
じやうふ輕
常不輕。法花經品名。橋姫。
しうども
集也。浮舟。艸子也。
しそく
紙燭。夕顔ニ。惟光ニシソクメシテト云。扇哥み給所。
しりゐ
梅枝ニ。イトシリヰニハカユカズト云也。或ハシリヒ。
しかみゑりふかう
御幸ニ。シカミエリフカクカキ給ヘリ。シカミハフルヒチヽミタル姿也。エリフカウハエリ入タル様ニ書スガタ。文字ツヨナル也。
しちそう
蜻蛉ニ。七僧ノマヘノ事。七僧法事。
しらつるばみ
白橡。舞裝束。若菜ニ。アヲキアカキ白ツルバミト云々。諒闇ノ時ノハクロキ也。說々多シ。源中㝡秘抄ニ委註之。
しらぎ
新羅。蜻蛉ニ。モロコシシラギカザリヲモシツベキト云々。
しらぎりみゆる
御幸。玉鬘ノ方ヘ常陸宮ノ送給ニ。紫ノシラギリミユル。アラレヂノ御コウチギト在。
しもつかた
松風ニ。明石ノ姫君ヲ紫ノ上ニヤシナイ給ヘト云所ニ。シモツカタモマギラハサントト思ヲ。メサマシトオボサズバ。ヒキユイ給ヘ

カシトアリ。シモツ方ハ腰ツキ也。着袴事。
しいづ
作出也。所々多在。葵ニ子ノコノ餅ノ所ニ。イツノマニシイデケン云々。宿木ニ。匂宮ノ若宮ノ五ケ日ヲ薫ノシ給ニ。道々ノサイクサマ〳〵ノ事ドモシイヅメリ云々。

惠江通用

ゑい
詠。紅葉賀ニ青海波源氏舞給所ニ在。詠小野篁作。本ハ平調。今ハ盤渉調。

ゑいまき
纓。冠——也。着服人巻冠纓。

ゑんず（又えんず両義）
怨也。箒木。物エンジヲスルトアルハ嫉妬也。同所ニヱンタチ物ハヂスルト云ハ艶也。又縁。皆心別。可依所也。

ゑかのきんたち
垣下公達。處々在之。竹川云。大饗ノヱカノキンタチ云々。公事等ニ在之。大饗大臣來公卿達事ナリ。

ゑかう
廻向。督君尼ニ成處ニ。源氏詞ニ在之。總角。イトタウトクツクヱカウノスヱトナリ。

ゑびかづら
ヒタヒノカヅラ。私云。只蘡也。初音ニ花散里ヲ云。エビカヅラシテツクロヒ給ト云ヘリ。私云。伊弉冊尊御カヅラヲ投給シガ葡萄トナル。

え
吉字也。住吉。住吉中皇子。仁徳天皇第二皇（子履中）。日エ。桐壺ニ。エニクミ給ハズ。源氏君事。エサラヌ。同巻。エモイハヌ同心。言モ不及也。

えさらぬ
吉不去。桐壺。

えならぬ
吉不並タグヒ也。ホムル詞也。エモイハズ也。
えんず
エンズ同。見前。
えこゝろ
艶心也。
えびのか
衣被香。裛被薰衣香。有口傳。タキ物也。
えびかう
同。
えがちにをはす
若菜ニ若公ヲ云ニ。ヨスゲテエガチニヲハス。笑也。
比
ひたすら
ヒトヘ。太。毛詩。正如云集大。左傳。

ひたぶる（ヌヒたふるに）
甚振。永。頓。日本紀。一切。偏。
ひぢて
泥。漬。
ひとのみかど
佗國帝。唐朝。
ひとのくに
日本ニ對スルヲリハ異國ヲ云。京ニ對スルヲリハ𛀆中ヲ云。松風ニ明石入道詞ニ。世中ステハジメシ。カヽル人ノ國トイヘリ。
ひときえ
一重。一涯。
ひだりのつかさの御馬
左馬寮。桐壺。
ひきいれの大臣
加冠事也。桐壺。
びさうなき

無美相。箒木雨夜物語。或無貪相。澄也。

ひたやごもり

直隠。ウキニヨリヒタヤゴモリト思ヘドモ近江ノ海ハウチイデヽミヨ。

ひゞらゐたり

輕々也。ヒエ鳥ノ嘯カマフル時ノ姿云々。或本云。ヒラヽキタリ。羽タヽキテ鳥ノ囀キタル姿也。

ひるこのよはひ（蛭子）

日神ノ御弟。西宮夷。カゾイロハイカニアハレトヲモフラン三トセニ成ヌ足タヽズシテ。明石。

ひとやりならぬ

人ノヤル道ニアラヌト云也。古今。人ヤリノ道ナラナクニト。

ひとが

人香。人ノウツリガ也。

ひそみ（両義）

竊。眉ヲヒソム也。顰。ヒソム。口ノ出也事。（事也歟）私云。泣時ハ眉間ノアツマルヲヒソムト云也。竊。私云。物ヲトリヒソムナンド云ハ。ヒソカナル義也。泣心ニハアラズ。依所也。

ひえのほうけだう

比叡法花堂。

ひとそ

一絲也。

ひそく

末摘ニ。御タイヒソクヤウノモロコシノ物ト云々。秘色。磁器。世言。錢氏自越州燒進。不得臣庶用之。故云秘色。

ひなび

夷ナビタル也。或雛。不用。イナカメカシキ也。

ひたゝけ

叩。ヒタヽク。混。若菜也。

ひぢかさ雨

聚雨。俄雨。袖ヲカブル故ニ臂笠雨ト云。須广巳日祓ノ所ニアリ。催馬楽妹門哥ニ見ユ。

ひめをく

秘蔵也。

ひめて

同秘スル也。

ひの御よそひ（緋也又其日ノ心）

ニカヘ給。其日ノ装束ニ着カユル也。故注。私云。緋ノ御装束歟。其ノ日ノ定レル装束歟。不審。但可依所也。緋色ノ装束事。所々在。緋色。火色ハ表裏トモニ打物ナリ。中倍在。掻練ハ中倍ナシ。

びなき事

便無也。私云。ビンナキト讀ベシ。

ひぢゝか

土チカナル也。神代ノ詞ニ土ヲヒヂト云。乾土ヲバスヒヂ。泥土ヲバウヒヂ也。私云。土チカナラバ。ヒノ字ヲ濁テヨムベキ歟。然ドモ普通ニハヒヲ澄テヨム。人ノ意業ニヨムベシ。土ナラバチ字モ濁ベシ。

ひらばり（幄等同事歟）

平張。左右楽人ヒラバリウチキト云々。楽屋也。

ひら

枚也。梅ガ枝ニ。白キ赤キケチエンナルヒラハト云。冊子ノ事也。

ひこむき

緋金錦。梅ガ枝ニ。コマウドノタテマツリケルアヤ。ヒコンキ。

ひじりこと葉

聖言。

ひはりご

檜破子。

ひいろ
在花鳥。

ひだのたくみ
万葉云。トニカクニ物ハ思ハジヒタヽクミウツスミナワノ只一スヂニ。

ひざう
乙女ニ博士ノ詞ニ。ハナハダヒザウナリ。非常也。

ひつじのあゆみ
居所羊事也。無常心。

ひきヽり
引切也。夕霧ニ。ヒキヽリニハナヤイ給へル。

びらうげ廿
檳榔毛車廿兩也。女二宮ノ薫大將へ渡給時事。私云。毛車也。公卿車。

ひすいだちて
椎下ニ。薫中納言ノ君ノ髪ヲ云。末スコシホソク。ヒスヒダチテイトヲカシト云々。翡翠也。

びはのほうし
琵琶法師。明石ニ。明石ノ入道ヲビハノ法師ニ成テト云々。平兼盛集。四ノ絃ニ思フコヽロヲシラベツヽ引アルケドモシル人モナシ。

ひだ
手習ニ。ヒダヒキナラスト在。鹿ノオドロカシ。

ひきほし
夢浮橋。ヒルアナタニヒキホシ云々。引干。今常ニアル物也。

ひ
氷也。蜻蛉ニ。御手ニヒヲモチナガラト云々。

女一宮事。年中行事。四月一日ヨリ氷ヲ献也。

ひとしなみ
玉カヅラニ。大夫監詞ニ。スヤツバラト。ヒトシナミニハシ侍ランヤト云々。

毛

もく
木工寮。桐壺。サトノ殿ハモククスリタクミツカサト在。内匠寮

もゝしき
百官座ヲ敷故云々。又百城。桐壺。

ものけたまはる 雷説
箒木。物承也。河海。物ノケシキウケ給也。宿木ニ。モノケ給ハル。食物給ハル。物クウナリ。

ものへだてぬおや
祖父ヲヘダテタルヲヤト云歟。物不隔親。

もろごひ
チハヤフル神モマサシキ神ナラバ我片戀ヲモロ戀ニセヨ。

もんざうはかせ
文章博士。

もとつ人
本ノ人ナリ。

もとつか
本香。紅梅ニ。モトツカノニヲヘル君ガ袖フレテ花モエナラヌ名ヲヤ散サン。

もとめこ
求子。神樂。

もじやう
梅枝。文字樣也。

もくのきみ
女房名。槇柱卷ニ。鬚黑ノ大將ノ室事歟。不審。螢。兵部卿宮ノ上式部卿宮御女。イデ給所ニ。モ

クノ君ハ殿ノ御方ノ人ニテトアリ。
世

せうそく
消息。所々ニ多シ。玉鬘ニ姫公ノ事ヲ云ニ。イナカ人セウソクヤル。

せうよう
逍遙。アソビ也。常夏ニ。近キ河ノ石ブシナドヤウノセウヨウ。

せんじがき
宣旨書也。人ニカヽスルヲ云也。所々ニ多シ。

せむ
先。手習ニ碁打所ニ。センサセタテマツル云々。又—巻ニ。センセラレテトアリ。

せんかのおきな
蟬哥翁也。蟬丸事也。若菜上。

ぜんけうたいし
匂宮巻ニ。ゼンゲウ太子ノ我身ニトヒケン云々。見源中寂秘抄。

せちぶ
宿木ニセチブトカ云事ト在。節分也。セチブムト讀ベシ。

せし侍なむ
施也。若菜上ニ。明石入道クマヲヽカミニモセシ侍ナム云々。我身ヲ彼等ニ施シナント云也。

ぜじやう
又ぜんじやうトモ。軟障也。障子代ニ用之。唐綾ニテ張ル。纐纈ニテメグリヲス。又注云。殿上ノ引モノ也。白絹ニ松ヲ繪ニカク。高松ト號也。須广ニ巳日ノ祓ノ所ニ在。又藤裏葉六條院所。玉鬘泊瀬詣ノ所等ニ多シ。

せうわの御いましめのふたつのほう
梅枝ニ。承和ノ御イマシメノ二ノ方トアリ。

承和ハ仁明天皇御事也。薫物ニ長ジ御ス。二ノ方トハ。侍從ト黒方トモイヘリ。又ハ侍從ノ内ニ四種合六種合ノ二シナヲ。御イマシメノ二ノ方トモイヘリ。兩說也。イカデキヽツタヘタマイケントハ。此方ヲ男ニ傳ジノ御イマシメアレバ。源氏イカデ聞ツタヘ給ケントモ。八條式部卿ハ仁明第七皇子本康親王母種子。名虎女。御事也。サレバオヤコノ方ノアラソヒヲ。ヲヤケナキ御アラソヒ心ト云也。

せう

鷹ノ雄ヲ小ト云。雌ヲバ大ト云。注止字處ニ見ユ。

すぐし給

過也。桐壺ニ。女君ハ過シ給ト云々。葵上十六。源氏君ハ十二歲。是ハ年ノ增也。又日月ノ過行ヲモ云。

すが〳〵

速々。淸々。スガ〳〵シ。日本紀。

すげなう

無人望也。

すがやか

速也。

ずいぶに

隨分也。箒木。ズイブント讀ベシ。

すり

修理職。桐壺ニ。サトノ殿ハモクスリト云々。

すき〴〵しき

數寄々々。

すべなく

爲僳無。無便。無爲。

すさび

愛スル義也。駒モスサメズカル人モナシ。山タカミ人モスサメヌト云ガ如シ。花宴ニ。頭

中將ノスサメヌ四君ト云々。

すさむ
又荒淫。心別也。倦心也。俗ニ似可爲事。是ハ愛スル義ニハアラズ。取蛇尾。手ズサミト云ガ如シ。

す[illegible]がて
難過也。

すぎやうざ
修行者。

すやつばら
シャツバラ也。奴原也。筑紫大夫監詞。玉葛卷。シャハサヘゲモノ。

すがゞきて
菅攪。和琴ニ在。私云。和琴ニ限レリ。余ノ絃ニアルベカラズ。

すだく
多集。後拾遺ニ。河原院ニテ惠慶。スダキケン昔ノ人モナキ宿ニト在。

すく〴〵し
鈴虫ニ。カバカリスク〴〵シウホレテ年フル人。

ずして
誦也。箒木ニ。哥ズシガチニト在。私云。ズンジト可讀。

すくよかなる
又すくよかならぬ。同詞也。健。クノ字澄。

すきたはめらん
數寄撓。色メキ物メデシテ。心ツヨカラヌ也。

ずきやう
誦經。

すくよう
宿曜。陰陽師也。桐壺。

すみの山

須彌山。若菜上。

すけたち

若菜下。私云。大將ノスケト云ハ中少將事也。近衞府。カミハ大將。スケニハ中少將。ゼウハ將監。サウクワンハ將曹ニアタル。官每ニカミ。スケ。ゼウ。サウ官ハアルベシ。

すまひのあるじ

相撲饗也。竹河。私云。賭弓還饗ナド云同心也。

すにをしよせて

簾押寄。椎下ニ。二間ノスニオシヨセテ。

すきて

總角ニ。松ノ葉ヲスキテツトムルト云々。食スルナリ。若紫ニモ在。

すいばん

水飯。ユヅケ。手習ニ。スイバン。ハスノ（道子歟）ミヤウノモノト云々。

すなとる人

橋姫ニ。アヤシキスナトリ人ナド。ヰ中ビタル山ガツドモ云々。但或本ニアヤシキ下ストアリ。

すみすぎて

若菜下。能事過ヘル事ナリ。

すゝい給はん

御幸ニ。源氏三條宮ニテ中將事ヲ申給ニ。イカヾハサモトリ返シ。スヽイ給ハザラントハ覺ナガラト在。洗フ心歟。スヽグ。

此一冊則依有可相傳之子細。改舊本錯亂而難見。忘老昧之懃勞而呵凍筆。以新所寫出也。秘决口傳等悉以注之。云斯道之奥區。云製作之根源。尤以可尊重者哉。縱雖親戚長友。輙不可許一見者也。身後相殘經眼路者。敢莫忘懇眞而已。傳授子細。別紙注之。

永享三年季冬日

釋竺源在印
惠梵在印
行年七十一在判

以

いはほも山ものこるまじう
長阿含經說。〔已原本〕

いぬ
公也。上東門院ニイヌキト云者有ケリト見ヘタリ。昔ウヘワラハヲバ何キト云ヘリ。此物語ニモ其類多シ。俊成卿說。キト付ルニハ。犬公ノマヘナド丶ハ云ハズ。世俗ニアネキ。ヲヂキト云ハ同心也。

いづみ川
木津也。モトハイヅミ川ト云ヘリ。

いつく
寵也。

いたがき
板ヲ並テ。フチヲシテ打付タル墻也。

いさり
廻鳴。イサリ。日本紀。求食。同上。万。

いさら井の水
小サライ。日本紀。可爲小水歟。

いゑとうじ
主人女。遊仙窟。

いどみ
挑也。

波

ははうちすきて
歯透也。

八條式部卿宮
本康親王事也。

はゝき木
ソノ原ニハヽキヾノ杜アリ。木滋クテ杜ノ

下ニテハアリトモ見ヘヌ也。又說ニハハキヾニ似タル木アリ。近テミレバ失ル也。私云。親行注也。可用初說也。

はれたるまみ

腫眉也。空蟬ニ。メスコシハレテトアルハ晴也。末摘花ニ。ヒタイツキコヨナウハレタルトイヘルハ腫也。愚案ニ。ヲトメノホカイヅレモ晴也。スエツムノ下ノ詞ニ。ナヲシモナカナルヲモヤウハトイヘリ。腫ニアラザル歟。

はづしてむは

サテハヅテンハトアリ。トリハヅシテンハト云也。

はなやかなる

聲花。

はなふらせたるたくみ

飛彈ノ巧花ヲフラセタル事アリト云ヘリ。

はらぎたなき

繼母ノ――。ハラグロキ也。

はむさいのおび

班犀帶也。

白虹日をつらぬけり

漢書文也。史記ニモアリ。太子ヲ源氏ニタトヘタル也。紫明云。虹蜺ハ內姪ニツカサドルト云ヘリ。愚案。凡ソ此文ハ燕太子丹荊軻ヲカタライテ。始皇帝ヲ殺サントシケルニ。其象天ニアラハレテ。如此アリケレバ。事ノナラズシテ害ニアハンコトヲ恐タル也。史記ニハ白虹貫日不通侍シヤラン。然ラバ源氏サル企ハナケレド。春宮ニ心ヨセテ。ミカドノタメ腹グロキ事アリヌベキ人ト思テイヘル也。又內姪義モカナヘルニヤ。虹ヲ婬亂ニタトヘタル事。毛詩ニモ見エタリ。此義ナラバ源氏內侍ノカミニ通フ事。人モヤウ〳〵

知リタレバ。カヤウニイヘル歟。又奥ノ詞ニモ頭弁ノシツル事ヲ思フニ。煩ラハシクテ。カンノ君ニモ久シクキコエ給ハズトアリ。是モタヽナベテノ世ニツキタル斟酌歟。又カヽルスヂニカギルベキ歟。レウケンニシタガウベキ也。

はまのたち
濱館也。

はえある
榮。ハエ。光同。無見。ハエナシ。日本紀。所ニシタガフベシ。

仁
にうがく
入學也。

保
ほと〳〵
殆。

ほとりばみたる

ほそびつめく物
絹櫃也。

ほうむの僧都
法務也。

法界三昧普賢大士
大唐西院和尚禮拜日。南無法界三昧普賢菩薩トアリ。菩薩ト大士トハ同事歟。此外經文ナドアルニヤ尋ヌベシ。

ほうし
ヲナジ――。木法師也。キ文字ヲ下ニツケテ讀ベシ。木男木女ナド云同事也。タトヘパコハ〳〵シクテ。ヤハラグ所ナキ也。或說。キ文字ヲ上ニ付テ。同キ法師ト讀ベシト云々。此義可然也。

へ

へ
御へ。奠也。愚案。定本ニハ此句ナシ。古今ナドニ御ヘトイヘルハ嘗義也。イヅレモ祭ル心ナレバ相違スマジキ也。

へむぐゑ
昔アリケン物――。三輪明神物語幷江記ニアリ。クヅ〔イ崩〕レモヨル〳〵カヨイケル男ノ。誰トモシラザリケレバ。衣ニ糸ヲツケテ行末ヲシリケルナリ。

べちなう
別納也。同所ナガラ各別ナル心ナリ。

止

とばかりながめて
時也。シバシバカリ也。

とにかくに
左右。トニカクニ。日本紀。

とゞろかす
轟。トヾロク。動同。

どち
共也。ワカキドチ。女ドチ。ワレドチナド云ヘル皆同。

とゞめし
人ノ心マゲタル事。――ハ停也。或說。不可留惡事於後代也。シカラバトヾメジトヨムベシ。極樂寺入道所持本定家卿自筆ニ。トヾメタルトアリ。此上ハスミテヨムベシ。愚案。ニゴリテヨムモ誠一義也。シカレドモ定本ニハ人ノ心マゲタル事ハアラジトアリ。定家說ニヲキテハ無異論歟。

とを君
芹川ノ大將ノ遠君也。紫明ニハヲホ君トアリ。ヲボツカナシ。

どよむ
響。

とうきやうき
カラノ――。唐ニモ東京西京アリ。東京ノ錦勝タル歟。又云。是ハ日本ノ錦也。カラノトイヘル。ヲボツカナシ。舒明御宇ニ模用トイヘリ。
とこよ
常世。日本紀。
としまかりいりて
▲十ヨリテト云也。
としみ
御――。試樂事也。
知
ちうげになりぬべき
中間也。
ちりがましげなる御丁
塵ノツモリタルト云心也。
ちやうこぼちける女
カツラノ中納言ト云物語ニ。キ丁ノ幬ヲキヌニ縫テキタル女也。ソノ事ヲイヘル也。一本ニタウト書タルアリ。ソレハ顔叔子ト云者ノ事也。塔ト書タル本アレドモ。堂ニテアルベキ也。愚案。定本ニ塔トカキタル。誠塔ハ人ノ居所ニアラズ。堂字ヲモチユベシ。定本奥書ニ載タル分ナヲ不審也。毛詩說已下イサヽカ替リタルカ。
丁子そ(ゐ歟)そ
カウノクロキ色也。丁子ソヽキナドイヘルモ同色ナルベキニヤ。
留
るり君
瑠璃君。玉カヅラノ童名也。
遠
をいこれはまして
えいと云也。五音カヨヘリ。
をほよそ

大都也。又凡也。

をいすがひぬれ

オヒイヅル心也。愚案。ヲイツヾキタル心歟。定本ニハヲイスギヌレトアリ。過タル心ナラバアマリコトニヤ。

をろす（をとめ）

トガメイデツヽ――。クダスト云心也。トガメ出ツヽトハ。ナニ事ヲモハヾカル所ナクトガメタル也。又ヲホナ〳〵トリタマヘルヲ。カシコマリタルケシキトモイフベキ歟。

をほゝれゐたり

溺也。ヲホドレタルトアル所モ同事也。愚本此注尙不審。

をほうち山

仁和寺邊ニアリ。俊成卿哥ニ。カメ山ヤヲホウチ山トイヘリ。

をほぢ

大路。万。御路。日本紀。

をほやしま

日本國也。

をほきみ四位

正四位也。愚案。正四位ヲバヲホキ四位トコソイヘ。ヲホキミトハ王也。此詞ノカミニモ。ナマソン王メクトアリ　紫明水原イヅレモ正四位也トテ。王ノ義ナシ。ヲボツカナクコソ。又ヲホキミ女トイヘルモ王母也。

をたぎ

愛宕。山城國ニアリ。

をうなになるまで

嫗也。

をくまり

奥也。チクフカキト云心也。イ

をこめいたる

鳴呼也。

をやそひてくだり給れゐはことになかりければ

圓融院御時。村上皇女規子内親王。齋宮ニテ下給ケル時。母ノ齋宮女御トモナイクダリテ。又モコエケリ鈴鹿山トヨメル。例ナシトイヘル。ヲボツカナシ。毎ニト云説モ有歟。

をこり

カヽル事ノヲコリ。驕也。又起ト云説アリ。シカラバヲコリト可讀。愚案。下説宜歟。

をさめ殿

納殿。

をしとの給へる

進食。日本紀。

をきなか河

奥中川。又息長川。(古今)右抄物ニモ國慥ナラズ。名所ト見ヘタリ。是ニツキテ料揀スルニ。イカナル日デリニモ。枝川ハヒル事ナレバ。身川トテ本躰ノ川ノツキ中ハタエル事ナシ。此哥心モ是ニ叶ヘリ。定家家隆哥ナドモ此詞心也。然バ長ノ訓不可用歟。

をぎの枝つとにして

荻也。を文字ヲ上ニ付テ。木ノ枝トヨム物アリ。不可用之。播广房西圓ガ物語別ニアリ。

をしつゝみ給へる

文ヲタテフミタル心也。愚案。水原ニ是モ宸筆ニテムスビタル文ヲ裹ムトカヽセ給ヘリ。

(浮舟)をすかるべき

ヲソキ心也。又云。追付ク心也。紫明ニハヲイスガルベキトカキテ。追ツク心ナリト註セリ。愚案。此註心エガタシ。定本ニハタスカルベキトアリ。

をほえどの

大江殿也。ワタノベノ橋ノ東ノキシニ。ムカシ驛樓アリケリ。今モ樓ノキシトイフ。ヲホイドノ。ヲホキドノナド書タル本不可用之。

ねさめみかはやうなどまで

ヲサウル女。ミカハタトテ。大ナル桶ニ物ヲ入テ。イタヾキテアリクヒサイメ也。又長部。チサメ。長女。同。書子也。御河。ミカハ。ヒスマシ也。故人ノ說ナリ。又云。イヅレモ大臣家ノ執權ノ人也云々。愚案。シリヲヨビ給マジキトイヘリ。執權ニハアルベカラズ。又御カハ。定本ニハミカハヤウトマデトアリ。御厠人トイヘルニヤ。記錄ナドニモ長女御厠人トゾカキテ侍ルメル。

和

わりなく

無別。ワリナク。日本紀。無破。同。

わた花

綿ニテ花ヲ作テ。踏哥人冠ノヒタイニサス事アリ。

わうけづき

王氣付也。

加

かど〳〵しう

才也。日本紀。才學。同。又云。廉也。

かたむ

奸。カタマシキ也。

かほに見えつゝ

古哥ナドノ心ニハアラズ。タヾ今見ル山ブキノ花ノカホニ見エツヽトイヘル歟。愚案。猶心ユカズヤ。万葉八巻。高圓ノ野ベノカホ花ヲモカゲニ見エツヽイモハ忘カネツモ。此哥ハ家持ガ坂上大孃ニツカハス哥也。是ハ叶テコソ侍ラメ。本哥ノ心ナドニテモナクテ。タヾ山吹ノカホニ見エツヽトイハム

事イカヾ。此哥ハ秋ノ花ヲイヘル哥。春日ヲ山吹ニ引カヘテイヘル心。一キハヲモシロクコソ聞エ侍レ。カホ花トハ容花トカケリ。カホ鳥ノ註ニクハシクミエタリ。

かよれる
タヲレル也。或說。此人々ノ聲ノカヨヒタルトモ云ベキ歟。愚案。イヅレモ不叶。猶可尋。

かたの丶少將
英明少將カタノニ一宿ノ事アリ。

かたきいはほをもあは雪になし給べき
物ノタトヘ也。或說ニ經文也云々。可尋之。愚案。日本紀第一云。踏堅庭踏肥(陷股(書紀))。若沫雪蹶散。是ハ素戔烏尊ノ天ニノボリシ時。天照大神怖畏ヲナシ給テ。威ヲフルイタマヘル御姿トイヘル也。女神ノ御事ナレバコ丶ノタトヘニヒケル也。經文歟ナドイヘル。ヲボツカナシ。

かれず
不離也。愚案。不斷心也。

からうす
碓也。

からさきのはらへ
近來此儀內野ニテ陰陽師勤之。

かむやがみ
紙屋也。

から人の袖ふること
ウラ人ト云說一義ナレド。下詞ニモ人ノミカドマデトイヘリ。猶カラ人ニテ侍べキ歟。愚案。即天ノ事歟ナドイヘドモ。タヾ此舞ヲマヒケル唐人ト心得ウベキ歟。猶クハシクハ人ノ御門ノ註ニアリ。

かむすいらく
河水樂ト書タル本アレド。此所ニテ酒宴ナドアレバ。カタ〳〵タヨリアルニヤ。勸盃ハ

後ノ事也。水ニノゾミタル廊ナドカヘルモヨセアリテキコユ。愚案。定本ニモ酣醉樂トカキタレド。紫明義可然ウヘ。一越調ノ心トキ歟。櫻人アソビ給フトアリ。旁河水樂ニテ侍べキ歟。

かむたちめ
上達部。公卿也。

かうこむじ
高巾子也。

かいなで
カヤウノ――。ヲモナヘタルヲ云也。又平均ノ儀也。此註尙不叶。カキナデトモ同事歟。

神などの空にめで給べき
延喜御子。時平公女。雅明親王。大井河行幸ノ時。七歲ニテ舞ヲ面白ク舞タリケレバ。神ノメデヽウセタル事アリ。

かみの色にこそとゝのへ侍けれ
紙ト同色ナル花ニツクベキカト見ヘタリ。其證據所々ニアリ。

賀茂のいつきにそむ王ゐ給れば
文德孫女。惟彥親王女。眞子內親王。仁和五年卜定。其外例可尋之。

風のをとも秋に成ぬと聞えつるふえのね
秋キヌト目ニハサヤカニトイヘル哥ノ心ナリ。愚案。是ハ秋風樂ヲ吹ケルトキコエタリ。次ノ詞ニモ。盤涉調ニイトヲモシロクフキタテタリトイヘリ。カタ〳〵子細ナシ。タヾイツモ出ルフルコトナリトバカリコヽロエンハ。無念ニヤ侍べキ。

與
よろしき
ホメタル詞ニモ。又ホメヌ詞ニモ通ツカヘリ。樣ニヨルベシ。

よるべ
縁。ヨルベ。日本紀。
よるべの水
社邊水。俊成女說。
よゝ
シヅクモ――。能々也。愚案。此註太不審。
よもぎのまろね
アサクラヤ木ノ丸殿ニワガヲレバト云哥ノ心歟。シカレドモ此哥カケアハズヤ侍ラム。愚案。此哥マコトニキノマロドノトコソアレバ。不叶ノ様ナレド。イヤシキ家ヲ蓬屋ナド云メレバ。カク云ナセル歟。又此詞ノカミニモ。イカニトモキヽシラヌナノリヲシツヽ。ウチムレテユクナドゾキコユルトアリ。是ニマサル證哥ナンドイデキザラム程ハ。此哥ニテコソアラメ。
（張紙）よひゐの程
宵居也。

太

たゝはしきかむたから
器重也。紀。タヽシキ。愚案。定本ニハイツクシキトアリ。
たどられし
尋也。
たゝして
目サヘコヒ――。爛也。
たうのはい
答拜也。
たきのよどみ
シラガノ事ヲイヘル歟。古今ノ哥ニ見ヘタリ。

禮

れう門
大學寮門也。

曾

そは心なり
ソレハコヽロ也ト云也。

そらよりいできたるやうなる事
天運事歟。

そゞろ
無端。和名スヾロト云モ同詞也。ソヾロハシ。ソヾロサムクナド云モ同心歟。愚案。所ニヨリテカハリタル所アル歟。一向同心ト難定。

そのかたのふみ
愚案。夢ノ事ヲ云タレバ。ソノ方トハ夢フミナドヤウノ物歟。定本ニハソ文字ニアリ。シカラバ一ヲバ上ニツケテ。ソノ方トヨムベキ歟。又ソクトアルベキヲカキアヤマレル歟。下ノ詞ニモ内教ノ方トカキタレバ。俗典トイヘルトモ心エヌベキニヤ。

津

ついせう
追從也。

つらつえ
支頤。ツラツエ。文集。

つくりゑ
ナニヽテモカヽムト思フ物ヲ。シルシバカリ書テ。エノグニテ書樣アリ。是ヲツクリヱトモ。ウハエトモイフナリ。

つき物
ヲホム――。御器也。

つしやき
實法心也。

奈

なにがしがためし
昔ノ――。紫明云。昔男ノ命ニカハリテ。母ヲ扶ケタル物ノ事歟。愚案。此事難信。尙

可尋之。

ないしのすけ

典侍ト書テ。內侍ノスケトヨム。尙侍ハナイシノカミ也。

なをしなどさまかはれる色ゆるされて

六位ニテ禁色雜袍ヲユリタル歟。

なかのほそを

愚案。水原ニモ。ナノヲヽ(カ脫歟)巾ニ用ニヨリテ。中ノホソ緒ヲ云(ト歟)トアリ。紫明ニモ。平調ニハ柱ヲサゲタル也云々。シカレド猶ソノイハレ慥ナラヌニヤ。只今ノ調子ハ猶一越調也。是ヲ柱ヲバウルハシキ一越調ノヤウニタテ。ハチノヲヽバ平調ノ位ニ立テ。コマ一越調ノ樂ヲヒク事アリ。カクテヒク時ノ巾ノヲ。平調ニヲシクダシテヒク時ノ十ノヲニアタル也。十ノヲ又中ノヲナレバカクイヘル也。是ハ一ヨリ七マデハフトヲ。八九十中ヲトス。巾ハホソヲト云說ニヨレリ。今ノ世ノ妙音院ノ流ニハ。一ヨリ四スヂヅヽ。フトヲ中ヲホソヲト分テ。巾ノヲヽバ猶ホソクスル也。カヤウニテハ又義モカハリヌベケレド。大方中ニホソキヲト云說モアルベシ。タトヘバイヅレノヤウニツキテモ。巾ノヲノ事ト心(ヱ脫歟)フベシ。

なかの

シヤウノコトノ事ハカミニ見ヘタリ。和琴(中ノ脫歟)ノヲトハ二絃也。

なづさひ

眤近也。

なよ竹を見給かし

ナヨ竹ノ夜フカキ上ニハツ霜トイヘル哥之。愚案。此哥カナヘリトモ見ヘズ。

なまめく

媚。ナマメク。ヤサシキ也。紅葉賀ニ。コヽシ

ウナマメイタルトアルハ。生ノ義アラント
云心也。愚案。是モ艶ニヤサシキサマトコソ
覺侍歟。

なでしこのわか葉の色したる
ヨモギノウスキ也。

なごみつゝ
和也。慰也。

なめし
無禮。ナメシ。菅家萬葉。輕。同。日本紀。

良

らうあり
勞也。若菜下ニ。フカキ御ラウノ程トイヘル
モ此心也。

らうがはしく
亂也。狼藉也。

らうけにはかにをこりて
母ノ尼 ―― 。老氣之。紫明同之。

無

むかひばら
當服也。

むらい
無禮也。

むらさきの色。吉凶に通ずる歟。
此事所々ニ見ヘタリ。愚案。尙不審。可勘。

無言太子
釋尊因位也。其外說々注文在別。

むざんの法師
無慚。

宇

うへつぼね
對屋ナラデ殿舍ヲ一ツトタルヲ云也。勘之。舊[illegible]之
中宮マウノボラセ給ヘリハ。清涼殿ノ二間
ヲウヘノ御局ニシツラウ也。ヒノ御座ノカ
タ〳〵ノ二間也。

うたかた人
末必人。日本紀。ウタカタ。定ナキ人ナリ。又ハスコシト云心也。万葉ニモ此心アルニヤ。
うたゑ
哥繪也。
うなづく
頷許。又領許トモ。
うりう院
紫明云。定本ニハ雲林院トカケリ。此院淳和ノ離宮也。後ニ常康親王ニツタハリテ佛閣ニナレリ。愚案。定本古今ニハうりう院トモカケリ。如此かなともかくも有べきにや。
右近君
將監ニアタル下﨟名也。
うめき給
詠也。
うす物
羅也。
うしろめたし
影誰。護イ
久
くろ木の鳥井
クロモムザト云木ニテ作ル也。
くだしける
ヲボシ――。思下也。
くしのたふ（九脱黒）
孔子ノタウレナル。盗跖詞也。
くせ
癖也。
くむじけん
イカデカクヒキ――。薫也。物ノ功ノ入タル心也。法師ナド薫修ヲツムナド云同事也。愚案。定本ニハヒキグシケントアリ。イヅレヲモイカデカクヒキト、ノヘケント云也。

具トカクベキ歟。此外群歟訓歟ナド註タレドモ不可用之。

也

やかのたつみ

家巽。ヤカタツミ。

やうめいたる舟

龍頭鷁首船也。定本ニハカラメイタルトアリ。

やまとさう

和國相也。

やまびこ

山彦。コダマナド云同事也。

やまぶし

山臥。又常ノ山伏ニハアラデ。大方世ヲノガレテ。野山ヲ家トスルモノヲモ云也。

末

まかなひ

賄賂。愚案。此註所ニヨルベシ。

まきばしら

柀柱。日本紀。又眞木柱。

まつのした葉の紅葉

或說。下葉ニアラズ。下思紅葉云々。愚案。定本ニ松ノ下葉トアリ。義ニ及バズ。大方松ノ下紅葉ニツキテ義ドモアレドモ。下紅葉スルヲバシラデ松ノハノ上ノミドリヲ憑ケル哉。ト云哥ニテキコヘタリ。松ノフルキガ色カハルヲイヘルナルベシ。

まくらごと

枕言也。如枕草子事也。ツネニ見ル心也。一說ニアケクレノコトクサ也。

計

けいし給へ

啓也。

けむせう

現證也。ケソウトカキタル所モアリ。同事也。

家禮といふこと

文籍ニモ――――。漢高祖朝太公。以家禮敬之。愚案。此事尚不叶。可尋之。

けゝしう

賢々也、

けさやか

寒。サヤム。淸。同。明。伶亮。同。

けしのか

芥子香也。護广ニケシヲタク事也。

けもんれう

唐ノ――――。花文綾也。又云。唐顯文紗也。

不

不動のもとのちかひありその日數をだにのべ給へ

正報盡者。能延六月住ト云經文也。

藤はこなたのつまに

或說云。藤ヲバ東ニウフベシト云也。

ふかう

我身ノ――――。不幸也。

ふてうなる女

不調也。

ふさはしからず

不祥。日本紀。

ぶくいとくろうて

俊成卿ト光行ト談合シテ。句ヲ切。聲ヲサシケルニ。スミテサシタリケリ。ソノイハレハ。初參ノ人着服シカルベカラヌガ。フクラカニコエタル人也、フクトバカリ云テ。ラ文字ナキ事。和語ノ習也。シカルニ俊成女說ニハ服也云々。相違ヲボツカナシ。阿佛房モ服ト云ケリト云々。愚案。フクラノ義尤不審也。此女官ノタメニ初參スルニアラズ。彼夕顔

ノ形見トテ召ヨセケルト見ヘタリ。黒服ナニノ憚カアラム。其人ノ心ヲ思ニ。イク程ノ日數ヲスグサズ。服ヲ脱ステヽ宮仕ニ出タツベキモノナラヌニヤ。其上カタワナラヌワカウド也トイヘリ。色ノイト黒カラムコトイカヾ覺侍也。イトヽイヘルニテモ料揀アルベクヤ。

ふてのしりとるはかせぞなるべき

侍從ツクシヘ下ナバ。タレカハ哥ヲモ詞ヲモ教フベキゾト也。愚案。侍從ガ筑紫ヘクダル事ハ蓬生ニ見ヘタリ。只今源氏ハイカデカ思ヤルベキ。イカニイヘルニカ。又筆ノシリトルトハ。ヲサナキ物ニ物ヲカヽスルトテ。手ヲトラヘテ書スル事ヲイヘルナルベシ。

ふびやう

風病也。愚案。服病トモイフベキ歟。

巨

ころの御てなきやうなれば

イマダ盛ニハアラヌ也。或說ミヅカラ也云々。愚案。或本ニ孤露ト付タリ。ゲニト覺ヘ侍リ。

こだま

木神。コダマ。空谷響。

ごうに

ヲモキ――。刧々ツム心也。

こむぢのふくろ

琴琵琶ノ袋コムヂヲ可用。

ごうつきにけり

業盡也。

このみの心

好心也。愚案。定本ニハコノミ心モミマホシウトアリ。此御心トモ可讀歟。サレド此所ニテハ好色心ナヲ叶ヘル歟。

こまのくるみ色のかみ
高麗ノスハウノ色ナル紙也。面ハ白ナリ。
こまけは
アテ〳〵ノ――ハ細分也。
こゝろばへ
意見。日本紀。
こゝろばせ
心操也。
五十寺御ず經
或說。五十寺ト云寺アリ。其寺ニテヲコナイタル也。此儀不可用之。五十ケ所ノ寺也。
こせのあふみ
巨勢ハ姓也。

江

えたうまじく
叵耐（エタウマシク）。遊仙窟。
ゑびぞめ
紫ノクロキ色也。エビカヅラノ色也。

天

てうはい
朝拜也。
てうじいて給
調出也。
てうたぬ心ちし侍
心モトナキ心也。人ヲ呼トテ手ヲ打バ。心元ナカルマジキ心也。愚案。此註難信之歟。料揀モ及ガタキヤウナレド。手ウツハホコリヨロコブスガタ也。抃悅ト消息ナドニカキ侍ルモ。此心ナルベシ。抃舞トツカウモヨロコビマウ心也。抃ヲテウツトヨム也。又眞言師行法ニ拍掌トテ手ヲ打モ。歡喜ノ心トゾ申侍メル。
御てのさきばかりひきたすけきこえん
始テアヒタル男。三途川ヲヒキコスト云事

アリ。本文尋ヌベシ。
安
あいぎやうづき
愛敬付。愛形トモ。
あはたゞしき
周章也。
あをばの山
青葉山。陸奥ニアリ。又云。尾張ニアリ。又云。只青葉ナル山ヲモ云ヘリ。夢ノウキハシニモミヘタリ。
あをすりのかみ
青文アル唐紙。五節ノ比便アル歟。
あなかま
穴喧。
あづまをすがゞきて
和琴。大夫狀云。アヅマト申名ハ和琴ヲバタヾモ申候ムヘドモ。東調トテ道ノ秘事ニテ候。常陸ニハ田ヲコソ作レト。御風俗ノ秘事第一ニテ候。アヅマノシラベニテ。スガヽキゾ。是ヲウタウ事イマハシリタル人モスクナク候ラン。ソレヲ知ラム人ハ心得ヨトテ。(頭注)カキヲキ候ヤラムト思候ヘバ涙難止候。
或本云。上總國ヨリタテマツル也。弓ヲ六張ナラベテ。引ハジメケル也。
あこ
吾子。
あてへ侍べし
過分ノ義也。
あづまあそび
和琴也。愚案。此註難用歟。可爲東遊也。
あざなつくる事
藤寮。源榮ナド云名也。
あふみ
コセノ——。巨勢相覽也。金岡同人也。但

高名錄ニハ金岳以前ト見ヘタリ。紫明ニハ
相見トアリ。

あざむかれ

欺。又詐。愚案。此詞二義アルベキ由。八雲抄ニハノセラレタリ。一ニハヘウスル心也。タレカハ秋ノクル方ニアザムキ出テトイヘルハ此義也。一ニハアイスル心也。ナニカハ露ヲ玉トアザムクトイヘルハ此心ナリト云々。大方此詞本書ナドニモヲホクハ人ヲイツワリイダシヌクヤウナル心ニイヘリ。タトヘバ有コトヲナシト云。無事ヲ有トモ云テ。人ヲハカル心也。アイスル心ハヰタクミ侍ラネドモ。八雲ニノセラレタレバ。所ニシタガヒテ料揀スベキ歟。

あせすば

ヒズバト云心也。

左

さいつごろ

近曾也。一日比ナド云ヨリハ遠キ心歟。

さがなく

不良也。

さをゝまてしろく

色ハ雪ハヅカシク――。小青也。

さのごときひしやう

シカノゴトキ也。

さくひやうし

笏拍子也。

さくらのみへがさね

清少納言枕双紙云。ナマメカシキミヘガサネノ扇。イツヘニナリヌレバ。餘ニアツクテ。モトナドノニクゲナルトイヘリ。私云。ヒ扇ノ兩方三枚ヅヽ。春ハ櫻ノウスヤウナドニテツヽミテ。色々ノ糸ニテトヂテ。末ヲナガクアハビムスビニシタル物也。可然女

房用之。愚案。定本ニハサクラガサネトアリ。

さしぐしのはて

搔頭。

さじき

桟敷。

幾

き

イヌキ。

き

コモンノキ。小文綺也。カラノキ。

き

競也。

きたの院

二條院。カホルノ居所ヨリ北ニアタル。

きたのまん所の別當

紫上ノ結構ニヨリテイヘリ。

きた山

鞍馬寺ヲ云也。

きつねならん

イヅレカ――。欽明天皇御時。美濃國ニアリケル者ノ事也。水鏡ニ見エタリ。愚案。キツネ人ヲハカリテ妻ニシタル事。扶桑記ニ見ヘタリ。

きなるすゞしのひとへ

ヲミナヘシノヒトヘ也。

由

ゆへつけゝん

故付也。ユヘ〳〵シナドモ同事也。

ゆるべるを

緩絃也。

ゆくりなく

不意也。日本紀。ユクエナキカ。又云。フトヽリアヘヌ心也。大和物語ニモ見エタリ。又云。

サマ〲ノ事アリ云々。

ゆゝしき

忌也。イマ〲シキト云同事也。

女

めい王の御代四代

宇多ヨリ四代。貞信公ニナズラヘタル歟。忠仁公ナラバ淳和ヨリナルベシ。

めづらか

梅豆羅。日本紀。長今東西水。珍同。

めくはす

瞬。

美

みを

水尾。万。水漾。日本紀。

玉かつら
みるこ

見子。童名也。愚案。定本ニハ此事不見。可見合他本。

ユクリカニト云モ同心也。愚案。ユクリカニト云ト。ユクリナクト云ハ。心相違スベシ。ユクエノナキ云尺不叶。下説不可用之。思ひやりなくゑ。いざよふ詞につゞきたり。ィ

ゆくかたもかへらむ里もわすれぬべう

劉晨。阮肇。天台山ニ入テ路ヲウシナヘル事也。愚案。此事サモコソトキコユ。仙女樂ヲトヽノヘ。天氣ツネニ二三月ノゴトシトアレバ。ナズラヘテモ云ツベシ。人ノ名劉晨カヽトゾ覺侍ル。晨字誤歟。

ゆげた

伊豫國溫泉アリ。其湯ニ桁ヲワタシタル也。タトヘバシゲクヲホカルベキ事也。或說。五百三十九云々。十月ゴトニ神事アリ。神人ウタフ事アリ。哥云。イヨノユゲタハイクツエゾシラヌ。左コヽノツ。右ハヤツ。中ハ十六。ヤレカトウトク。ヽリカエシ謠テ。酒宴以下

三日にあたる夜のもちゐなむまいる
中君ト大將ト會合ニヨリテ此事アリ。愚案。此事不心得。宮ノ事也。物語ノ面ニモ分明ニ見ヘタリ。大方大將事アイテコソアレナド云人アル歟。シカレドモ此巻ニモ。ツレナキ人ノ御心。イマヒトタビ見ヽテムノ心ニ思ノドメツヽ。ノチセヲ契リテ出給トアリ。サワラビニハ。マホナラネトモイヒ。宿リ木ニ。腰ノシルシノ心グルシサニトモ。又イタヅラニ分キツル道トモ云タレバ。ウタガウベキ所ナクヤ。

みかさの山のをとめ
求子哥。春日社ニテハカクウタフ。賀茂八幡ニテハ又詞カハル也。

みたけさうじ
金峯山精進也。愚案。御嶽トカケルトモ。タケトハヨマズ。御タケトヨムベシ。

みそぎの日
賀茂祭ノ日ヲ云。又云。御禊ノ日ヲ云。

みあかしぶみ
願書也。

三にしたがふ
三従ト云事也。女イトキナキ時ハ親。サカリニテハ夫。老テハ子ニシタガフ也。禮記文也。愚案。定本ニハ三従ニシタガウトアリ。重説ナルヤウニ覺ツルニ。三ニシタガウトアルコソ心ニアヒ侍レ。桐壺ニモ三ツノクライトアルハ。是ニ三ノ位トアリ。是モ此タグイナルベシ。

みくしあげのてうど
可然女房。クシノ箱ヲ始テ。サマ〲ノ具足ヲヒロフタニイル。是ヲ云也。又ハカンザシノテウドヽモ云也。

御やす所

始ハ更衣。後ニハ御息所ト見ヘタリ。昇進儀歟。勘云。是ハ昇進ノ儀ニアラズ。惣ジテ女御更衣ヲ御息所ト云。女御トダニイハセヌトアレバ。シナノアガリタルニハアラジ。

御子はかくてさふらはせ給れゐなき事

親範説。人王七歳マデ無服殤也。退出何故哉。但大神事時。不似例人。故退出歟。愚案。神事ニヨリテイデタル由ハ見ヘザル歟。追可勘之。

忘

しはぶきやみ

嗽病。

しかな

コトハリ也。キコヘタガヘタルモ———。モト讀切テヨムベシ。シカナハサナト云也。

しふねき物のけ

强カウ也。

しみふかく

采深。日本紀。

ひ

ひはつに

乏也。アツシキ也。

ひとたまひ

人給。ヒトタマヒ。出車也。行成説。枕草子ニモアリ。

ひかる源氏

敦慶親王。亭子院第四子。二品式部卿。玉光宮ト號ス。好色無双人也。是ニナズラヘタル也。

ひおけ はつね

タキ物ノ火トリ也。愚案。タヾ普通ノ火桶トテ。火ヲコス物ニテヤ侍ラム。火トリヲバイヅクニテモ火トリトコソ申タメレ。椎ガ本ニモ。墨ゾメナラス御火ヲケトリイデヽ。チ

リウチハライイナドスルニモトアリ。猶レウケンスベシ。

未央柳

此句俊成ガ見セケチニセリ。ムカシ親行ガ父光行ノ使トシテ尋侍シハ。楊妃ヲバ芙蓉ト柳トニタトへ。更衣ヲバ女郎花ト撫子ニタトフ。皆二句ヅヽニテヨク侍ヲケタレタルハ。イカナルシサイノアルニカ。俊成答云。イカデカ我ハ自由ノ事シ侍ルベキ。行成自筆ノ本ニ見セケチニシ侍キ。紫式部同時人ナレバ。申合スルヤウ侍ツラン。我モワカナノ巻ニテ意得タル事アリキト云々。縦バ女三宮ヲ柳ニタトへタリ。此タトへアマタニナルニヨリテケチテ侍歟。後ニ心得侍ヌ。シカルニ定家本ニ此句ヲケタズ。俊成卿女ニ尋侍レバ。書寫ノ誤也。餘ニ對句メカシクテ。ニクゲシタル方モアリトテ云々。是ニヨリテ愚本不用之。愚案。定家マサシキ自筆ニテ。太掖芙蓉未央柳モゲニカヨヒタリシカタチヲ。カラメイタリケムヨソヒハ。ウルハシウコソアリケメ。ナツカシウラウタゲナリシヲオボシ出ルニ。花鳥ノ色ニモ音ニモ。ヨソフベキ方ゾナキトアリ。書寫ノ誤ト云ベキニ非ズ。其上イクタビニテモ替ン事。何ノ妨カアラム。又是ニツキテ一ノ不審アリ。此タトへハ楊貴妃事。長恨哥ノ文也。此物語ニアマタアリトイフベカラズ。然ニ定本ニゲニカヨヒタリシ形ヲト。更衣ノ事ノヤウニイヘリ。ヲクノ詞ニモヨソフベキ方ゾナキトコソ見へタレ。イカニ意得分ベキ。又ナデシコ女郎花ノ句定本ニ見エズ。此句アラン本ニトリテハ。イヨ〳〵更衣ノタトへニアラザルベシ。然ラバケツマデハアマリノ事ニヤ。

ひやくぶのほか
百歩ノ外也。百歩ハ六十丈也。百ぶのゑかうとイヘルハ百歩衣香也。愚案。此註不審。

ひあやうし
誰何火行。史記。

毛

（こうはい）もとく
本苦。愚案。定本ニモトツカトアリ。本香也。水原ニ無此句。紫明若書誤歟。可見他本。浮舟ニモトフ人トイヘルモ本人也。モトヨリノ人也。右哥モトツ葉トヨメルハ本ノ葉ナリ。

物忌
神名也。此名ヲ書テ身ニ付ヌレバ。鬼神侵サズト云ヘリ。又六日ノ御物忌トイヘルハ。ナカ神ノ御物イミノ御方違也。

もむ人
文人也。

世

成王のなにとの給はむとすらむ
文王子。武王弟。成王叔父。我於天下不賤。魯世家文也。周公ノミヅカライヘル詞也。愚案。誠ニ子細ナシ。然ヲ成王ノナニトカノ給ハントイヘルハ。冷泉院ハヲトウト、モコトモ云ガタケレバ。何トカノタマハントスラムト。不審シタルヤウニイヘルカ。シカラバヲボツカナカラント云ベキニ。心モトナキトイヘル。心得ガタシト云不審アリキ。誠ニヲボツカナキヤウナレド。是ハ其事ニテハ侍ラズヤ。周公旦ハ成王位ニツキテ三王ノ子ノ弟叔父トナノリタリ。冷泉院イマダ位ニツキ給ハネバ。ナニトカノ給ハント。心モトナク思ハムト疑アルマジクヤ。

せり河の大將

古物語也。
せな
夫也。背男。万。兄。日本紀。
せん王
カノ――。先王也。延喜御事ヲ申也。愚案。定本ニハセン大王トアリ。心得ガタカリツルニ。此說可然侍ケリ。タイ王トハ帝王ト書タルヲ。大王ゾト心得テ書誤タル歟。又此註ニビハヲ延喜ヨリ傳テ三代トアリ。是ハシヤウノコト也。イカニイヘルニカ。又定本ニハ四代ニ成侍トアリ。
せんからのかけばむ
淺香也。
せうと
男ヲバ兄ヲモセウトヽ云。女ヲバアネヲモイモウトヽ云。
せまりたる大がくのしう
大學衆也。セマリタルトハ才學ノウスキ歟。愚案。此儀心得ガタシ。タヾ儒者ノ道セバキヤウニ。ツネノ人ノ心ニヲボユベカメル事ヲ云也。

寸
ずいしんかうこそ
是ハ常ノ隨身ニ非ズ。隨逐儀也。
すほう
修法也。
すかせたてまつり
ノマスル也。
ずむながる
巡流也。サカツキノジユンノクダル心ナリ。
ずさ
タイフガ――。從者也。
すぎ〳〵をとなび給
ツギ〳〵ト云也。

すざく院
朱雀院也。三條朱雀四町々也。號後院。延喜六年十月。或説十一月。此院ニ行幸有テ御賀行ル。又同十六年三月行幸御賀アリ。重明親王延喜御子。敦忠左大臣子。舞之。此度ノ事是ニナズラヘタル歟。愚案。南北四町ナドコソ舊記ニモ見ヘ侍レ。四丁町ナドイヘルヲボツカナシ。
すゞりにはかきつけざなり
萱御記。硯面不書物云々。
すさび
荒也。

右目安抄出類字ニ所無之詞書求之。爲首尾一巻處也。
文明十一年霜月廿九日書之。
法眼紹永
以傳々寫本書之間。不審等繁多。追加校合可直也。
明應庚申仲商上澣終書功。
〔右源語類字抄以賜蘆拾葉校合〕

續群書類從卷第五百十八

物語部十八

源氏和秘抄

一きりつぼ

いづれの御時にか　　色々の說あれども。桐(きり)壺(つぼ)の御ときをば延喜の御門になぞらへ。朱雀院をばやがてしゆざく院になぞらへ。冷泉院をばむらかみの御門になぞらへたる也。ひかる源氏をば西の宮の左大臣たかあきらになぞらへたる也。此人ながされはべりき。延喜の御帝の御子にて。とにみめよかりき。紫式部たぐゐなきためしに申侍る人也。

女御　きさきよりはつぎの人なり。

更衣　御やす所と同じ事也。又女御よりはつぎの人なり。かういとは衣をかふるとかけり。そのゆへは御門のきさきの御かたへわたらせ給ふ時。まづこのかうゐの御つぼねへなりて。わろき御服をぬぎ捨て。よき御ふくをめすなり。又あしたかへらせ給ふ時にも。この御局にてよきをぬぎすてゝ。わろきをめして御かへりある也。此御局にてやすませ給ふ程に。御やす所とはいふなり。

やんごなき　しなたかき人をいふ之。

ときめき給ふ　時にあふ也。めくはとば也。
めざましき　めのすさまじきなり。めもあはせられぬ心之。
いとあつしう　やまひのとなり。
かんたちめ　くぎやうの事なり。
うへ人　殿上人なり。
もろこしにもかゝるとのおこり　唐の玄宗楊貴妃の事之。
あぢきなう　せんかたなきこゝろ也。
はしたなき事　こは〳〵しき事なり。
きよらなる　きよくうつくしき事之。
上ずめかしけれど　したりがほなるをいふなり。
まふのぼらせ給ふ　まいりのぼる之。
ばうにもようせずば　ばうとはすなはちとう宮の事をいふ之。
ようせずばとは　あしうせばといふ心之。

きずをもとめ給ふ　けをふききずをもとむるといふ事なり。人のとがを見あらはす事之。
おほんざうし　ざうしとはつぼねをいふ之。
きりつぼ　きりつぼとはしげいしやといひて。大りにあり。きりをうへらるゝゆへにきりつぼとはいふ。源氏母御やす所のすみたまへる所なり。
うちはしわた殿こゝかしこの道にあやしきわざをしつゝ　天りやく帝の御時。せんようでんの女御とあんし（安子）の中宮と御物ねたみにて。御かた〴〵の女房ども。たがひにまさなき事共をせしをいふなり。
とにいてゝも　とのはにいださぬ之。
てぐるまのせんじ　こしにわをかけて。手にてひく車をいふ。大裏の門のうちなどを

のるゝ。昔女御のありける。やまひをして。うちをまかで侍る時。てぐるまをゆるされたるなり。

おさめたてまつる　さうそうの事ゝ。

をたぎと云所　たう國をたぎと云こほりゝ。とりべのなどゝ。

ひたぶるに　ながくといふ心ゝ。

おほきみつのくらゐ　正三位をゝくり給ひしなり。

なみだにひぢて　袖をひたしたるゝ。

ゆけいのみやうぶ　ゆけいとはさへもんう衛門のヿを云。みやうぶとは。大裏に中らうふぜゐの女房を云。さ衛門のすけ殿。右衛門の佐殿などいふやうなる事なり。昔ゆけいのみやうぶと云女もありけり。新古今のヿばに見えたり。

げにえたうまじく　げにたへがたくといふこゝろなり。

もゝしき　大りをいふ。

かたへはかくばかり　かたへはかたばかりなり。

をもたゞしき　めんぼくらしきなり。

まげたるヿをとゞめしと　まがれる事はとゞめたるゝ。

もよほしがほなる　あはれをもよほすゝ。

かごと　かごとゝいふにあまたの心あり。一にはかこつゝ。二にはちかごとゝ。三にはいさゝかのヿをいふゝ。こゝにてはかこつを云ゝ。

御さうぞく一くだり　女房のきぬ一かさねなり。

御くしあげのてうどめく物　かみあげのぐそくゝ。

さう〲しく　さび〲しきゝ。

すが〳〵　はや〳〵となり。
をまへのつぼせんざひ　御にはのつぼに草花うへられたる所也。
ちやうこんかのゐ　たうのげんそうと申御門の。やうきひといふ人にをくれ給ひて後。まぼろしをつかひに蓬莱へつかはして。しるしのかんざしをえてかへりて。玄宗に奉りし事を。白楽天の詩に作るをいふ也。
ていじの院かゝせ給て　ていじの院とは宇多の帝の御事也。
まくらごと　あけくれのとぐさなり。枕草子などいふがごとし。
しるしのかんざし　女房のかみあげの具也。楊貴妃のかみのかんざし也。
たづねゆくまぼろし　楊貴妃をほうらいさんへ尋行しとを。まぼろしとはいふなり。
太掖の芙蓉　びやうのやなぎ　ちやうこん哥の詞をとりてかけり。譬ば太えきとは池の名也。ふようは蓮の花を云。びやうとは宮の名也。ふようの花。やなぎの糸のやうに。楊貴妃のかたちはありしと也。
からめいたりけん　からやうをいふなり。
けふら　うつしきなり。
らうたげなりし　ほけ〳〵としたる也。
なよび　たをやかなる也。
右近のつかさのとのゐ申のこゑ　とのゐ申は。やぎやうとて。内裏をまはりてなのりする事也。ゐねの時は左近のつかさまはる也。丑刁は右近のつかさのまはる也。さてうしになりぬるとはいへり。
あさまつりごと　くにのまつりごとなり。
あさがれゐ　内裏に御ぜんまいらする所也。
大しやうじのおもの　これも大しやうじと云物をたてゝ。その上にて御ぜんたてまつ

る事之。
いとたい〳〵しき　たえ〳〵しきといふ心なり。
さゝめき　さゝやくなり。
いとゆゝしう　いま〳〵しき之。
ばうさだまり給ふ　朱雀院のとう宮にたち給ふ事之。
世人もきこえ　世の人と。のもじをくはへてよむべし。又人と斗もよむ之。
かのをばきたのかた　おばはうばの事なり。
こまうど　かうらい人之。
うたの御門の御いましめ　うたの御門の御ゆいかいに。いこくの人をば内裏へめさるまじきよしをあそばしをける之。
こうろくわん　七條しゆじやかに。もろこしよりきたる使をやどす所也。
ふみなどつくりかはして　ふみとは詩の事也。
やまとさう　我國にならひつたへて。人をさうする事也。
みこ　しん王を申之。
げさくのよせなき　げさくはゝかたの人なり。
すくようのかしこきみち　すくようだうとてありし之。ほくとだうのほうしなり。
源氏になしたてまつる　御かどの御子のたゝ人になりて。みなもとゝいふしやうを給はるをいふ。嵯峨の天王の御時よりはじまる。
三代の宮づかへ　くはうかう。うた。だいごの三代なり。
うけばりて　うけひくなり。
こよなう　とのほかにと云心也。又みやびかなる心をもこよなきといふ。

さけさせ給はぬ　とをざけぬ之。
なづさひ　なるゝ也。
なめし　ぶれいなるをいふ之。
にげなからず　にたる所あるなり。
かゞやく日の宮　上とう門院の十二にて入
内し給いしを。時の人かゞやく藤つぼと申
侍るなり。
ゐたち　たちゐ之。
おぼしいたつき　ほねをゝると之。
くらづかさ　こくさうゐん　かやうのぎし
きにつかふまつるつかさ共之。
御いしたてゝ　御いしとは主上の御こしを
かけ給ふ物なり。
くわざの御ざ　くわんざとはげんぶくする
人をいふ。
ひきいれの大じん　かくわんの人なり。
大くら卿のくら人　色々の說あれども。く
ら人の頭の大藏卿など云心之。
きびわなる　いとけなきなり。
あげをとり　わらはにてよき人の。けんぶ
くしてわろきをいふ。
そひぶし　御かいしやくの事之。
さぶらひ　内裏のてんじやうをいふ之。
おほうちぎ　きぬのうへにきるものなり。
色しあせずば　色のかはるをいふなり。
ながはしより　御殿より南殿へゆくあはひ
のはしなり。
ぶたうし給ふ　内裏にてはひする事之。さ
ゆうと云事あり。
左のつかさの御むま　さまれうの御むまな
り。
くら人どころのたかすへて　むかしは人の
ひいて物にたかをもしたる之。くら人所の
鷹はいはれある事なり。

をりひつ物　おりひつにいれたるくひもの之。

こもの　籠にいれたるくわし也。

とんじき　つゝみいゝとて。ぎしきの時下らうにくはするくひ物也。

ところせき　ところもなきまてといふ心也。

おんなぎみはすこしすぐし給へる程　源氏の君十二。あふひのうへ十六になり給へるをいふ也。

にげなう　につかはしからぬをいふ。

こゝら　おほくといふ心なり。

もどのしげいさ　きりつぼのと之。

もくすりたくみ　これはみなざうさくのかたをつかさどるなり。

になく　たぐゐなき也。

もとのこだち　うへ木のこだち之。

二はゝきゞ

なのみと〳〵しういひけたれ給ふ　名のみと〳〵しうはよきと之。いひけたれたるはわろき之。と〳〵しうとよみきりて。いひけたれ給ふとがおほかるなるとよむべし。

すきごと　すき〳〵しき事也。

かろびたる　かろ〳〵しきとなり。

かくろへ事　かくしごと之。

まめだち給ける　まとだつ也。

おかしき　是は物のおかしきにあらず。おもしろくよきことをいふ。ほめたる心之。又わらいたる所もあるべし。

かた野の少將　色々の說あれども。なりひらの中將かた野にとまりたるとあり。これをかた野の少將といふべし。

さぶらひようし給て　だいりにはべるがよきと云意也。

御ほんしやう　もとのこゝろ之。

くせ　人のくせなり。
ながあめ　三日にすぐるあめをながあめといふ。
御物いみ　つゝしむ日をいふ之。
御よそひ　御しやうぞくの事なり。
なにくれ　なにやかやといふ詞之。
すみか　人のめをいふ之。
あだ人　あだなる人なり。
おさ〳〵　やうやくといふ心之。又すこぶるといふに（心也イ）。おさ〳〵しきといふ詞あり。それは心かはれる之。
まつはれ　なれむつぶることなり。
かたはなる　見ぐるしきをいふ。
をのかじゝ　をのれがこゝろざしなり。
えんずれば　うらむる意なり。
おほぞう　うちはなちたる心なり。
二のまち　つぎといふこゝろなり。

心あてに　をしあてなり。
はしりがき　さうにものをかくと之。
れひさきこもれるまどのうち　草などのおひいでたるやうに。人のいとけなき時をいふ。まどのうちとは。おやの家にある程をいふ。
かたかど　一のかどなり。
おほどかに　おほやうにのどかなるを云なり。
思ひくださん　思ひさぐるなり。又こゝろにくだすなり。
うめきたる　うそぶきたる之。
なを人　いたく上らふにてもなきしなの人なり。
たづき　たよりなり。
けしうはあらず　げすしくはあらぬ意之。
なま〳〵のかんたちめ　なまきんだちなど

いふ心之。
もとのねざし　この人のもとのほんしやう之。
かはらかなりや　さはやかなる也。
にぎはゝしき　たのしきをいふ之。
御ほかげ　火のかげなり。
あふさきるさ　あふさまくるさま也。又とするもかうするもといふこゝろなり。
よるべ　よる所なり。
とえりをし　文をかくに。ことばをえらびてかくなり。
すべなく　びんぎなきなり。
ことがなかに　となるなかといふ心なり。
ひさうなき　びんさうなきなり。ふく〳〵しき之。
いゑとうじ　家の妻をいふ。
あはつかに　あは〳〵しき心なり。

こめき　こまやかによき之。又おさなくかたほなるこゝろ也。そろはぬ心也。
そば〳〵しき　たゝしからぬ之。思ふやうならぬ心なり。
ねぢけがましき　よからぬこゝろなり。
えんに　うつくしくやさしきなり。
みさほつくる　しらずがほ之。
うみづら　うみのへんなり。
ふるごたち　女房のとしよりたるをいふ。
うちひそみぬ　かいつくるとて。くちの出たる之。又まゆをひそむるとて。しはむるをいふ。
ひゞらひたり　ひらめきたるていなり。
ざればみたり　たゝしからぬ之。ゆがみたるていなり。
まほにも　うるはしきなり。
をぞましき　をそろしきなり。

しへたぐる　人をしへたげたる之。
いひそし侍る　つよくいふなり。
てうがく　十一月にかものりんじの祭にある事之。
あかるゝ　わかるゝなり。
つめくはるれど　人にはぢ〳〵しきなり。
さうじみ　ほん人といふこゝろなり。
つなびきて　つけすまいしたるこゝろなり。
ひたやごもり　やがてこもりたる之。
とばかり　時ばかりなり。
かげもよし　さいばらのあすかいのことば之。
ねたます　そばにていひそゝのかしてねたまする之。
あざれかゝれば　たはぶれかゝるなり。
おはさうず　おはしますといふことば之。

しれもの　しれたるものと云ことばなり。
さすらふらん　世にある空もなくて。まよふこゝろなり。
人やりならず　我こゝろからといふこゝろなり。
むねこがるゝ　おもひをいふ之。
くさわひ　くさのたねをいふ之。
ほうげづき　ほとけにちかきなり。
くすしからむ　わづらはしきなり。くすみたる心也。
わがふたつのみち　哥詩のことなり。
むべ〳〵しく　よろしき之。
ふぴやう　風のやまひなり。
こくねつのさうやく　ひると云もの之。六月のこくねつの時ふくするもの也。
むくつけき　おそろしきをいふ之。
あはめにくむ　あは〳〵しきをにくむな

り。
えならぬ　たよりならぬ也。又物の云れず
うつくしきをもいふなり。
まめ人　まとしき人なり。
あなかま　あなかしがまし也。
なかがみ　天一のはうふたがりの方をい
ふ。
中がは　いまのきやうごく河也。
きよろしき　きよくよろしきなり。
おまし　御ざをいふ也。
ことさらびたる　ことさらにつくりて物をい
ふなり。
むつがりて　はらたつ也。
あてはかにて　あてやかにうつくしきな
り。
まうとの　御へんなどいふこゝろなり。
ふいに　こゝろならずなり。

物けたまはる　ものうけたまはるなり。
いもうと　こゝにてはあねをいふなり。
さゝやかにて　ちいさやかなるなり。
なみ／＼の人　なべての人といふ心也。
どうもなくて　うごくともなきなり。
おぼゝれ　そらおぼれなり。
あて人　あてやかによきなり。
ふつゝか　げすしきなり。
御くしげどの　御ふくなどをたちぬふ人な
り。
ふようなる　もちゐざるこゝろなり。
うつせみ
いとらうたし　いとをしきなり。
うれたくも　うれへたきなり。
ごたち　女ばうなり。
こきあやの一えがさね　紅のこきあやゝ也。
一えがさねはひねり重也。

二あひのこうちぎだつ物　二あひはむらさき也。こうちぎはきぬの事也。だつはとばなり。

ばうぞくなる　あらはなるこゝろなり。

そゞろかなる　するとなり。長程なり。

さがりば　かみのすそなり。

けちさすほど　ご（碁）のけち之。

さうどけば　物さはがしきなり。

ぢにこそあらめ　ごのぢになるをいふ。又地ともいふ。

いよのゆげた　伊與の國のいてゆのけた之。譬ば數おほき事之。

めすこしはれたる　はれ〳〵としたる事なり。

かいまみ　かきのぞきなり。

すべしたる　ぬぎすべらかしたる之。きぬの事也。

おもと　女房をいふ。

あなはら〳〵　あなはらいた。はらいたといふ心之。

人かうつれる　うつりがの事なり。

ゆふがほ

このもかのも　このをもてかのをもて之。又あなたこなたの心もあり。

こがしたる　あふぎをたきものにしめるなり。

たゆたふ　ゆられたるこゝろ之。

されたるやりどぐち　家のとのゆがみたるなり。

つきじろふ　さしつぎてとばにいださぬなり。

めくはす　目合するといふとなり。

さらぬわかれ　えさらぬわかれなり。

やうめいのすけ　げんじのひじなり。

はらから　をとゝいの事也。

しびらだつ物　女房のきるうはも也。

なげのふでづかひ　なげはないがしろのこゝろなり。

しをん色　おもてすわう。うらもよぎをしをん色といふ也。

さしぬき　女房もおとこのきるやうなるさしぬきをきるなり。

なかや　中ゐの事也。

てかく　てにてあはくなり。

ことねりわらは　つねのわらは也。

かりの御ぞ　かりぎぬなり。

なりはゐ　田つくるとなり。

ぬかつく　おがみするとをいふ也。

みたけさうじ　吉野のきんふせんへまいらんとて。しやうじんする事也。

うばそく　おとこひじりなり。

ちやうせい殿のふるきためし　やうきひの事なり。

こちたし　おほきなり。

ゆくりなく　心ならず也。又ゆくゑなく也。

なにがしの院　六てう河原の院なり。

けいめいして　いとなむなり。

おきなか川　つきぬ事也。又ひぬことゝ也。

べちなう　べちの屋なり。

けうとく　おそろしき也。

あひだれたり　あまへたるなり。

山びこ　こだまなり。

われかのけしき　我か人かのやうなる心なり。

ひあやうし　夜まはりする事也。

またゝきて　ともし火のひらめく也。

みつはくみて　としよりてこしのかゞまれる事を云なり。

いとかごかに　かご〳〵としたるなり。
ふくいとくろく　ふくよかに色くろきなり。
たむけ　たびのはなむけ之。
ぬさ　はらへなり。
三わかむらさき
わらはやみ　をこり心ちなり。
なにがしてら　くらまでらの事なり。
しゝこらかし　しそびらかすといふこゝろなり。
つゞらおり　くらまのなゝまがりの事なり。
ゆほびか　ひろきこゝろの事なり。
いといたしかし　かたはらいたき事なり。
さいつごろ　ちかごろなり。
かうぶりえたる　六位の人の五位になるをいふ。

山ぶきなどの　きぬの色に花山吹。うら山吹など云事有。
いぬき　わらはの名之。
くさの御むしろ　ほうしのしく物なり。
さしぐみに　さしよりになり。やがてといふこゝろもあり。
ごしん　かぢのとなり。
うどんげ　三千年に一たび咲花之。佛の出世に譬る之。
くだら　百さいこくなり。
ひとぞう　一ぞくの事なり。
さだすぎたる　よはひのなかば過たるをいふ。
ふりはへ　うちはへたる之。
はなちがき　もじを一づゝ書たる之。おさなき物のものかきたるをいふ也。
しもづかへ　しもにつかふ女なり。

くつして　くるしみたる心之。
あづま　わごんの名之。
さてはづしてん　とりはづすなり。
にび色のこまやかなる　ぶくしやのきる色之。むらさきのうへぶくにき給ふ也。一にはひ色のこまやかなるとよむべし。ひいろは紅の事也。

すゑつむ花

いどましさ　いどむ之。あらそふ也。
わかんどをりのひやうぶの大ゆふ　たとへば王そんにてある人のひやうぶの大ゆふになるをいふ。
おほうち山　内裏をいふ也。
おもきこうに　ごのこうにたとふる之。人のいたむべきこゝろ也。こうにうつといふとなり。
御かさやどり　あまやどりなり。
よひまどひ　ゆふまどひ之。
ざれくつがへる　しどけなきこゝろなり。
えびの香　たきものゝ名なり。
しゞま　ものいはぬ之。
かねつきてとぢめむ　ろんぎの時。かねをつけばいひやむ之。
はひをくれたる　むらさきのあくのたらぬ之。
なかさだのすぢ　中ごろのてかきをいふ。
ひそく　ちやわんなどやうのうつはものを云なり。
くしをしたれて　はいぜんの女房のかみあげたるが。くしをさしたる也。
ないけうばう　女ハまひならふ所之。いま大とのゐと云は其跡之。
そゝや　すはやなり。
いさとき　人のさときさ之。

ふけんぼさつののり物　ざうのはなのながきなり。

さをきまでしろく　さをきはあをきなり。あまりしろきはあをく見ゆるなり。

さらぼひて　やせてから〳〵としたるえ。

ゆるし色　こうばひの事なり。

ふるきのかはぎぬ　けだものゝかはにてつくりたる衣え。

ぎしきくはむ　こと〳〵しき人をいふ也。

はしたなるおほきさ　中なりなるせいぶんなり。

みちのくにがみ　だんしをいふ。

こだい　ふる〳〵しきなり。

いまやう色　くれなゐとこうばいとの中の色あひえ。當世やうの色といふなり。

かいなで　をしなべてといふこゝろなり。

かいねり　くれなゐの色なり。

ゑびぞめ　むらさきにあかみのあるえ。

ねび人　としよりなり。

おとこたうか　正月十四日にある事え。今の世にはたえてなし。

かゝげのはこ　びんかくいれものゝはこなり。

うはぎ　うへにきるきぬなり。

さくらのほそなが　おもてしろく。うらはこきすはうをさくら色といふ。ほそながはをさなき人のきる衣え。

へいちうがやうに　たいらのさだふんといひし人。おんなに心ざしあるけしきをみせんとて。すゞりのかめに水を入て。それにてめをぬらして。なくまねをしけり。女心えてすみをすりていれけるを。へいちうかれをばしらで。れいのやうにめをぬらしければ。おもてすみになりにけり。其時女のよめる

之。
我にこそつらさを君がみすれども人にすみつくかほのけしきよ
はしがくし　はしのまなり。
四もみぢの賀
しゆざく院　三條しゆじやかにあり。
しがく　まいのならし也。
ゑひ　せいかひはといふまひに。ゑいといふ事あり。
かれうびんがの聲　かれうびんがとは鳥の名之。かいこの中より鳴聲のいづれの鳥にもまさりたる之。是を佛の說法の聲に譬る也。
こゝしう　ふるめかしきなり。又かどある心之。
御きさきと葉　ふぢつぼの宮きさきがねにておはしませば。きさきとばといふ。

もろこしこま　左右のまいなり。
まひのくさ　舞のしな〳〵なり。
かひしろ　せいかひはにかひしろとて。かきのやうに立めぐる事なり。
いうそく　よき人なり。
りんだい　せいかひはのじよなり。
いりあや　舞に入あやとて。さらにとつてかへしておもしろふ舞を云なり。
てうはい　こてうはいなり。正月一日の事なり。
なやらふ　十二月卅日におにおふ事之。
ないゑん　正月廿一日におこなはるゝ事なり。
さんざしに　さんがなり。
うけはしげに　のろ〳〵しくいふなり。
たゞちりばかり　すこしばかりの事之。
うちぎすがた　なをしをぬぎて。きぬばか

りきたるゝ。
ゆし給て　とのてなり。
ほそろくせり　がくの名なり。
うねべくら人　みな女房の名なり。
御けづりぐし　御ぐしすます事なり。
うちぎの人　御けづりぐしの人は。わらはくひのむもんのなをしをきるなり。
かはほりの　夏のあふぎゝ。かはほりのはねをひろげたるやう也。
まかは　まかぶらなり。としのよりたる女のめのおち入たるを云。
うんめいでん　むかしはこゝにないし所まします也。
うつし心　まとのこゝろなり。
おもなのさまや　かほのあつき心なり。
五はなのゑん
たんいん　花のえんには。もんにん(文人)をめして詩つくられしなり。たんいん(探題)とはゐんの字をさぐりてつくるゝ。
はなじろめる　おくしたる事をいふ。
もんにん　じゆしやのとなり。
こきでんのほそどの　ほそどのとはうらのかたをいふなり。
くるゝと　くるゝさしたるとなり。
すさめぬ　あひせぬ也。もてなさぬなり。
あふぎはさくらのみへがさね　ひあふぎのりやうはう三まいづつを。うすやうにてつゝみて。いろ〳〵のいとにてとぢて。すゑにあはびむすびにむすびたるゝ。又五へのあふぎといふは。五まいをつゝめるゝ。
やはらかにぬる夜はなくて　さいばらのぬきがはのうたのとばなり。
きやうさく　あらはなるこゝろゝ。さとくしるきなり。

あり明のきみ　おぼろ月夜のないしのかみなり。
さくらのからのきの御なをし　さくら色のからあやのなをし之。
えびぞめのしたがさねしりいとながくひきて　なをしにしたがさねしりひくとは。ひきつくろふときの事之。
あざれたるおほぎみすがた　あざれはあざやかなり。又しくとくのすがた也。おほぎみ姿はたけたかきこゝろなり。
ふさわしからぬ　よからぬ也。
わびにて　わびたるなり。
あふぎをとられて　さいばらのいしかはの哥に。おびをとられてとあるを。源氏の君のあふぎをとられてとはいひかへ給ふ之。

六あふひ

世中かはりて　きりつぼの御帝御くらゐをすべりたまふ事を云也。
せんばうのひめ君　さきのとうぐうをせんばうといふ。
御けいの日　賀茂のさい院の御けいとて。毎年四月のなかのむまの日。河原にいで給ひて。はらへし給ふとある也。一條のおほぢをとをりたまへるなり。
山がつたびしかはら　色々の說あれども。たびしはわたしもりの事之。かはらはあみひくもの也。すべてはいやしきものなり。
御ぜん　ぜんくうの事之。
かざみ　わらはのうへにきる物なり。
ひとだまひ　しゆつしや（出車）の事之。
さゝのくま　かげをだに見ぬといふこゝろなり。
大將のかりのずいじん　てん上のぞうなどすると。是も人しらぬと之。

つぼさうぞく　おんなのあしつゝみなどを云。昔はいちめ笠にきぬをきて中ゆひたるゝ。
おぼしうむじ　おもひうれへたるなり。
うきもんのうへのはかま　わらはのうへのはかま也。「くわんにあられ。ィ」
みるふさ　かみのうつくしきをたとへたる也。
むまばの屋　一條大みやにあり。
いきすだま　いきたる人のりやうなり。
いかきひたふる　をそろしきこゝろなり。
のゝ宮　伊勢のさいぐうの野の宮はさがのありす川にあり。賀茂のさい院の野の宮は紫野にあり。こゝにて野の宮といふは。いせのさい宮の事也。
けしのか　ごまにやくものゝ。
御ゆする　ゆあむるなり。

秋のつかさめし　秋のぢもくなり。
あしをそらにて　空をあゆむなどいふこゝろなり。
左衛門のつかさ　大だいのうちにあり。
こきあをにび　はなだにあをげのまじりたる色なり。
むらさきのにばめるかみ　紫のくろくてにび色にかよひたるゝ。
おばおとゞのうへ　源内侍のとしよりたるをいふ也。
にび色のなをしさしぬき　ぶくしやのきる物なり。
そら色したるからのかみ　にび色のかみ也。ぶくしやのふみなり。
くはんさういろのはかま　きなる色なり。かうじ色ゝ。
むもんのうへの御ぞ　うへのきぬのもんな

きなり。
えいまき給へり　かうぶりのゑいをまくはぶくしやのわざなり。
ころもがへの御しつらひ　四月一日に夏のしやうぞくになすをころもがへといふなり。又十月一日冬のしやうぞくになすをもかく云之。
ねのこはいくつかまいらすべからん　ねのこのもちゐの事也。又源氏のひし之。
御ぞかけ　ころもかくる物なり。
七さかき
くろ木のとりゐ　のゝ宮にあり。かはつきたる木にて作れるを云。
ひたきや　火をたく小屋之。
ちやうぶそうし　いせのさいぐうの御くだりの日。内りより御うちをくりの御つかひに。しかるべきくぎやうをつかはさるゝ事なり。
わかれのくし　さいぐう御いとまごひにうちへまいり給へるとき。しゆ上御みづからくしをさいぐうのひたひにさし給ふ事あり。これをさしぐしとも。わかれの櫛ともいふ之。
八しやう　大だいりにあり。
ふぢの御ぞ　重服の事之。昔はふぢのかはにてをれる布をしける也。
とのゐものゝふくろ　これ又源氏のひじなり。
いちはやく　をそろしきとなり。
そんわう　しゆ上の御まごなり。
はらぎたなき　はらあしき之。
まがへば　ゆきちがふ之。
せきふじんがみけんめのやうに　うはなりのをそろしきためし之。

よゐのそう　内裏の御ぢそうのふたまといふ所にて。よひの御かぢにまいる事なり。

うんりんゐんの　紫野にあり。

しはぶるい人　いやしき下らうなり。

くろき御くるま　ぶくしやの車之。

ぢす　きやうをつゝむもの之。

たきゞこるほど　御八かうの五巻の日之。

あをむま　正月七日に御むま御覧ずる事なり。

くちなしのそでぐち　くちなしぞめ。あまのきる物之。

ちしのへう　むかしはとし寄てのち。今よりはつかへまじきよしを。へう（表）といふとばにかきてたてまつりしなり。それをちしのおとゞなどいふなり。

ゐんふたぎ　故き詩のもじをおほひかくして。そらになにもじといひあてさする事なり。

したとに　はやごとするを云之。

うすふたあひなるおびの　なをしのおびなり。

あこへはべるべし　あこやかすといふとなり。

かるめろうせらるゝ　てうろうする事なり。

八はなちるさと

よのさが　世のならひ之。

よべのかきね　かつらの木のありしかきねなり。

九すま

ひたゝけたらむ　物さはがしきをいふ之。

こしのべて　こもりゐたる人のほかへいづるをいふ之。

あさはかなる　あさきつみなり。

うつしざま　よのつねさまなり。
はなちつかはす　ながす事なり。
いへばえに　いはんとすればえいはぬ事なり。
むもんのなをし　くらゐなき人のきるなをし之。
となしびに　なに事もなきなり。
けんだつふみ　けんとはしよりやうのてつぎもんぞ之。
おさめみかは　おさめはしも女之。みかはゝひすまし之。みないやしき人なり。
御いたはり　はぐゝみなり。
おほえどの　わたのべといふ所なり。
かとりの御なをし　かとりはへいけん之。すなはちむもんのなほし之。
つみふかき身のみこそ　さいぐうにてはきやうほとけ近付ぬ事之。

千えだつねのり　ゑかきの名之。
つくりゑ　色とりゑ也。
しをん色　おもてうすむらさき。うらあをきをいふ之。
とこよ　世はなれたる所也。かりがねのふる郷をいふなり。
をんしの御い（衣）今こゝにあり　北野の天神のつくしへながされさせたまひし時の御詩のことばなり。
むま屋のおさにくしとらする人　是も北野の天神の御事之。むまやとは旅のむまや也。おさとはそのむまやをつかさどる人なり。くしはせつ〳〵あれども。たゞ口ずさみに作る詩の事之。
かうじなる　御かんたうをいふ。
しゝをむまといひけん　かをさしてむまといふ事之。

しものゝちの夢　わうせうくん（王昭君）が事なり。
だきのばん　いしはじきのばん之。
あさりして　くひものもとむる事之。
かいつもの　海士のかつぎたるもの。いそ物之。
ぜんじやう　まくのやうなる物なり。糸をかくなり。
ひぢかさあめ　にはかにふるあめなり。ひぢをかさにする也。

十あかし

そぼちまいれり　ぬれ／＼まいれるなり。
みちかひ　みちのゆきちがひ之。
みてぐら　御へいの事なり。
こうじ給　くたびれたるなり。
くにのとくい　とくいはしる人なり。
はひわたるほど　ちかきをいふ之。
いねのくらまち　いねおさめたるくらなり。
かうれう　がくの名之。
びはのほうし　びはひきあり、ほうしなり。
あき人のなかにて　びはいんといふものにあり。
さけしゐそし　つよくさけをしいたる也。
こまのくるみ色のかみ　かうらいのかみ之。うすかうの色をくるみ色といふ之。
たまも、　女のもなり。
せんじがき　おほせがきなり。
よこもりて　うちこもりたるなり。
てしども　あかしの入道のつかふ人をでしといふ之。
しをどけし　しほれたるなり。
御ぐしすこしへがれたる　かみのうすらぐなり。

もとのくらゐ　もと參議にて大將かけ給へり。
ひるのこのあしたゝざりし　三とせになるをいふ之。
まくなぎつくりて　たれともしらせてといふ事之。
十一みをつくし
御はかし　たち之。昔はひめ宮の生れ給しにも。御はかしを奉りし也。
つれにくゝ　つれなくにくきなり。
いかにはあたらん　このむまれて五十日のいわゐなり。
うみ松　みるの事之。
いけるかひ　いける世のかひ也。
やみのよにて　やみの夜のにしきといふ心あり。
たゝわしきかんだから　げんてうのしんほうといふ心なり。
がく人十つら　十つらとははしりむま十疋なり。
あかぎぬすがた　ていゐのすけのはうなり。
わらはずいじん　わらはをずいじんにする之。めづらしきためし之。
あそびども　ゆう女の事之。
よもぎふ
ほしのひかりをたらいの水にうつしたる　七夕祭の時の事之。
はなち給ふてんやと　うりはなち給ふべしやといふなり。
きほうし　きすくなるほうし之。きおとこなどいふがごとし。
あげまき　うしかふわらはなり。
かぐやひめはこやのとじからもり　是皆昔

物語の名也。
かんやがみ　しゆくしやうのかみゑ。
くのゑかう　くんえかうといふたきものなり。
ちりがましげなる　ちりのつもりたるなり。
ちやうこぼちたる女　一にはまとしきたとへゑ。一にはやもめずみの事也。
　せき屋
かきおろし　かけはづすゑ。
なにぞやうのおりのもの見　賀茂の御あれなどのやうなる物見をいふゑ。
あを　かりあをゑ。かりぎぬとおなじ。
くゝりぞめ　色〳〵にくゝりてそめたるもの也。
　十二ゑあはせ
御くしのはこ　くしいるゝはこなり。

うちみだり　びんのぐそくなり。
かうご　かう入たるつぼなり。
こゝろ葉　くしのはこに花の枝をかねにて打そへたるゑ。
ひめて　かくす事ゑ。
おれものも　をろかなるものゑ。
ふんのつかさ　和琴の名なり。
　十三まつ風
中務の宮　かねあきらの親王と申人なり。
はちふき　はらひのくるこゝろ也。
たきどの　つりどのなり。
かつらのゐん　うづまさにあり。
おのゝへさへあらため給はん　をのゝえくつるはひさしき事也。
いさら井　ちいさきし水也。
おぎのえだなどつとにて　小鳥をば荻などのえだに作る也。

ものゝふし　かぐらをするこん衞のめし人をいふ。

十四うす雲

あまそぎ　ふかそぎなり。

たすき　昔はをさなきものはこ袖をばきず。たすきと云物をきたる也。

せな　おとこをいふ也。

さねこん　はやくこん也。又まとにこん也。

うつしざま　つねのさまなり。

がうけ　けん門の事也。

ひとつ色にくろみわたりて　天下りやうあんの事也。

てんけん　てんにんのまなこなり。

かどひろげさせ給て　しそんの高きくらゐにのぼるべきを云也。

十五あさがほ

かみさびにける　ひさしくふりたるをいふ。

らう　ほうこうのらうなり。

しなとの風　いぬゐより吹風なり。

まかり申　いとま申す也。

おやのおや　うばをいふなり。

わらはけて　をさなげなり。

ふくつけかれど　ふくやか也。

十六おとめ

さらがへり　いまさらたちかへるなり。

あさぎにて　六位の人のうへのきぬ也。

おいつかすまじく　とりをくやうにせうしんするをいふ。

大がくのみち　じゆしやのみちをならふなり。

つぎ〳〵　世々といふ心なり。

やまとたましひ　我がくにのたましひ也。

せまりたる　きはまりたるなり。

あざなつく　大がくしうになりて。べちに
名をつくる事有。
をしかいもとあるじ　これもげんじの難儀
也。
ひざうにはべたうぶ　ひざうはつねならず
といふ心なり。
なりたかし　をとなせそといふこゝろ也。
たちたうびはべなん　たち給ひ侍らんとい
ふ心也。
さるがうがまし　さるがくなどやうなり。
けさうし　人にうやまひついせうせらるゝ
心なり。
おとゞのおほんは　おほん詩といふ心な
り。
にうがく　大がくれうへ入事なり。
れうし　大がくれうにてがくしやうをこゝ
ろむる事也。

かへさふべき　かへしとふとなり。
いたらぬても　ふみのてんなり。よみやう
なり。
つましるし　哥なんどにてんをあはせんと
て。つめにてしるしを作る也。
しれゆく　をとりゆくなり。
れうもん　大がくれうのもんなり。
もんにんぎさう　じゆしやのなるくはむな
り。
わかんどほりばら　宮ばらといふこゝろな
り。
なにのみこくれのげんじ　なにくれといふ
とばなり。
かんざし　かしらつき也。
ゆのてつき　とのての名なり。
さくはうし　しやくにてひやうしをうつな
り。

おれたる事　すぐにもなき事なり。
しりうごと　うしろごとなり。
おかしく　すぐれたることなり。
きはたけく　たけ〳〵しきなり。
むなしき事　そらごとなり。
いとさくじりおよすげ　さか〳〵しきこゝろなり。
とよをかひめ　あまてるおほん神なり。
あをすりのかみ　あをきかみにゑうをもつて文をすりたるなり。五せつの舞ひめはあをすりのからぎぬをきるゆへに。よせあるかみをもちいるなり。
ましが　まろといふこゝろなり。なんぢといふ也。
きんぢ　なんぢなり。
はまゆふばかりのへだて　はまゆふとはみくま野の浦にある草也。きちやうのかたびらをへだてたる心也。
あを色にさくらがさね　あを色のうへのきぬに。櫻の下がさね也。
あか色の御ぞ　あか色のうへのきぬをしゆ上にたてまつる也。
おくたかきもの　おくびやうなるものなり。
いけにはなれゆく　はなれじまの心みといふとば也。
かへどの　しゆざく院にあり。
御たうばりのつかさかうぶり　御たまはりのつかさくらゐ也。
きうだい　よくしをつくりたるをいふ也。
御としみ　御賀の事なり。
むまばのおとゞ　ばゞの屋なり。
らちゆひて　けいばのらち也。
じやうめ　すぐれたる馬なり。

こちたき　こつなきなり。
こまけう　こまかに也。
十七たまかづら
かいひそめたる　ひそめたるとは人のさしいでぬをいふ。
おとしあぶさず　はふれさせず也。
ふなこ　舟こぐもの也。
ねさう　ねんさうといひて。年に三たびせうじをする也。又當年しやうをまつるとをもいふといへり。
いとだみたりける　だみたるとはいなかの人の詞づかひを云。
ひとしなみ　人なみなり。
この地のせいしをばむなしくすて　詩の詞也。
みあかしのと　佛にとうみやうたてまつる事也。はつ瀬には十万とうをたてまつると

みえたり。
のしひとへ　うすぎぬなり。
みあかしぶみ　とうみやうたてまつるぐわんもんなり。
るりきみ　玉かづらのきみのわらは名也。
こまかへる　年よりの二たびわかくなるなり。
けそふに　あらはなるこゝろなり。
かいはなて　かけがねをはづすなり。
うちどの　きやうき所也。
かいふのもん　大なみのかたおれるなり。
そこひある　かぎりあるこゝろ也。
げににげついたる　にたるけあるなり。
わかのずいなう　哥よむべき事をかきたるふみ也。
はつね
春のおとゞ　おとゞは御所をいふ也。春の

おとゞはむらさきのうへのすみ給ふなり。
とぶき　いはゐごとなり。
えびかづら　よのつねのかづらをいふ。
けやけし　すぐれたる也。
りんじかく　正月二日に大臣の家にておこなふ事なり。
あれはたれとき　たそがれときなり。
たきのよどみ　かみのおちほそりたるをいふ。又しらがのまじりたるを云。
みのしろごろも　みのゝしろにきる衣也。
みづむまや　おとこたうかにつきたる事なり。是も人しらざる事也。
しらがさね　あを色のうへのきぬに。しろきしたがさねをかさぬる也。おとこたうかの時のしやうぞくなり。
かざしのわた　わたにてかざしの花を作りて。かぶりにさす也。

かよれるすがた　袖をひるがへす心なり。
かうこんじ　是もおとこたうかの時にきるかぶりの名也。
まんすらく　さいばらのうたなり。
ごえん　おとこたうかのごえんとて。二三月にあるとなり。
こてう
そらみだれ　そらゑいなり。
さうどき　はやりこゝろなり。
ひの御よそひ　人しらざる事也。
ひらばり　あくの屋などのたぐひ也。
あぐら　こしやうとて。こしかくる物なり。
こしさし　まきぎぬをろくに給ふをこしさしといふ。
くしのたふれまねびつべき　これは色〳〵の説ある事也。譬へばいかなるじつほうなる人も。戀の道にはかなはぬと云心也。

この比の花の色なる御うちぎ　夏の時さく花也。うのはな。なでしこなどの色也。
みるこ　女房たちの名なり。
めしうと　おもひ人をいふなり。
あな心とく　こゝろときなり。
そこひしらぬ心ざし　ふかき心ざし也。そこいは水のそこ也。
ほたる
わらゝかに　やはらぎたるこゝろなり。
ほたるをうすきかたに　きちやうのかたびらのうすきヿを云也。
けちえん　あらはなるこゝろなり。
あのごと　あんのごとくといふヿば也。
いけみころしみ　いけつころしつといふヿば也。
つやも色も　つやとはいとなどのうつくしきをいふ。
てつがひ　五月五日こん衛のくわん人の馬に乗てまといるヿ也。
さうぶがさね　あやめがさね也。おもてあをく。うらこきこうばひ也。
あふちのすそご　おもてうす色。うらあをきをあふちといふ。
なでしこのわか葉の色　おもてすはう。うらあをし。一にはおもてこうばいをなでしこといふ。わかば色とはうすもえぎ也。
とねり　ずいじむの事也。いゑ人なり。
身をなげたる　これはけいばのヿなり。
だきうらくなそり　けいばの時。かちまけのらんじやうとて。これらのぶがくをするなり。
わかこま　わかこもなり。草の名也。
みそかこゝろ　ひそかにわろき振舞をするをいふ也。

大ばんどころ　女房のゐる所なり。
　とこなつ
にしかは　かつら川なり。
ちかき河　賀茂川なり。
いしぶし　いほの名也。
ひみづ　ひの物なり。
すいはん　夏のくひものなり。
むとく　かひもなきこゝろなり。
けそん　家のきず也。
おち葉　らくいんはらのむすめなり。
ひまありける　人の中わろきをいふ。
とつび　とのしなをいふ。
みみかたからぬ　みみつよくもなき人をいふ。
てうたぬ心ちして　心やましき也。双六のよきてをうたぬやう也。
大つぼ　小べんするつゝの事也。

あまへたるたき物　あまつらの過たるなり。
　かゞり火
うちまつ　たい松なり。
くはやとて　さらばとてといふことばなり。
　野わき
おぢこうじて　物におぢてくたびれたる也。
しをん　うすむらさきの色。
をみなへし　おもてき。うらあをき色なり。
けいせさせ給て　中宮とう宮へ物申をばけいするといふ也。
ねびごたち　としねびたる女房也。
ほそびつ　きぬびつなり。
からのけん(イ无)もんれう　からあやのもんあるをいふ。
　みゆき

あしよは車　わのよはきをいふ也。
あてなる人　たとき人也。
御べ　御にへなり。くひものをいふ也。
からのたき物　たきもの丶ほうはからくによりつたはれるゆへ也。
おちぐり　こきくれなゐをいふ也。
あはせのはかま　中へをいれぬをいふなり。
むらさきのしらきりみゆる　紫の色のしらみたる也。
あられぢの御こうちぎ　くわんにあられのもんなり。
しゞかみ　ふるひちゞみたる也。
ゑりふかく　ゑりいれてかきたる也。もじつよげなる心也。
あふなげに　おくふかゝらぬこゝろ也。
いそしく　いそがしくなり。

むねにてをきたる　むねをゝさへたるやうに思ふ事のある也。
ふぢばかま
かはらへいでさせたまふべき　ぶくをぬぎたるには。かはらにてはらへをする也。
うつたへに　うちつけなどいふとばなり。
いとれんし給へる　てうれんしたるなり。
三にしたがふ　女は三にしたがふといふ事あり。わかき時はおやにしたがふ。さかりなる時はおとこにしたがふ。老ては子にしたがふと云事也。
まきばしら
けゝしき　うやまふこゝろ也。
やさしかるべし　はぢがましきなり。
むかひ火つくる　人のはらたつをみて。こなたよりはら立かへすをいふ也。
ちうげんになりぬべき　二ぶつの中げんと

いふ心なり。

ひわだ色　紫のいさゝかきばみくろき色なり。

このさうのめいぼく　こんじやうのめんぼくなり。

あをにびのさしぬき　大しやうべつたうなどきる色也。

みあるじ　きやうのこと也。

うたかた人　せつ〳〵ある事也。

かへりしかいの　かいはとりのかいこなり。

かりのこ　かのこなり。

十八むめがえ

ひこんき　かねにてをりたるにしき也。今の世のきんらん也。

そんわうの御いましめ　八條しきぶきやうもとやすのみこと申人なり。たきものゝほうをつくりたまへる人也。

はなちいて　しんてんにはなれたるていなり。

くま〳〵しく　おぼつかなくおもふなり。

あえもの　あやかりものにする也。

みかはみづのほとり　内裏のうちをながるゝやり水なり。たき物は水のちかきつちにうづむがよくにほふ也。

さしいらへしたまひて　こはたすけなり。

ほころびなまし　鶯の朝とくなくをほころぶといふ也。

とよりてこそ　すゑの世になりてこそといふ也。

ひとよろひ　さうし二てうをいふなり。

あして　あしてのもじとてあるなり。

こきこもんのきのへうし　きはきぬなり。

十九ふぢのうら葉

ぶんせきにもかれゐといふ事　ぶんせきとはよむふみのと也。かれいとはいゑのれいせつ也。
ちやうじぞめ　ちやうじにてそめたるなり。
くはんぶつ　四月八日佛にうぶゆをあびせたてまつるを云也。
水ももらんやは　物のすきまもなくきびしき事なり。
御あれ　賀茂のまつりのまへの日。ほんしやにてある神事也。賀茂の御たび所を云也。
ひつじくだるほど　ひつじの時也。
あをきあかきしらつるばみ　あをきしらつるばみ。あかきしらつるばみといふこゝろ也。あかき色あを色のはうをいふ也。
うたのほうし　わごんの名なり。
甘わかな

にし山なる御てら　にんわじなり。
こゝろうつくしきさま　御うしろみのなき事をいふ也。
みなほがらかに　よろづにあきらかなるなり。
いきまき　いかるこゝろなり。
かべしろ　しろききぬをかたびらのやうにしてかくる物也。
ぢしき　さしむしろのとなり。
ぎやうでんの御ものにて　代々のてうほうをばぎやうてんにをかるゝ也。
きはなるゝ事　ぬきいてたる事也。
しのだのもりを　いづみのかみをいふ也。
われょりかみの人　としのまされるをいふ也。
もえぎのかげ　あを木だちなり。
わらうだ　ゑんざなり。

からもの　からくだ物なり。
わかな下
まとゐ　ゆみゐる事なり。
かちゆみ　むまにのらでゆみいる也。
山あひにすれる竹のふし　あづまあそびのまい人のあをすりのはうのもんなり。
いもゐの御まうけ　しやうじ物也。
やうこつなかるべき　やんごとなき也。
あをじ　あをきちやはんの色したるをいふなり。
あをに　こきあをにきをさしたる色也。
はちのを　一のをなり。又八のをとも。
五かのしらべ　きんに五のしらべあるなり。
ついきりなる　ふつきりなる也。
みだりかくびやう　みだり心ちなどいふ心也。かくびやうはおこりの事也。

廿一かしは木
まぶしつべたましく　まかぶらたかきこゝろなり。
わうけづき　ていわうのそんと見えたるこゝろなり。
まなこい　まなこなり。
廿二よこぶえ
らいし　たかつきのうへにふちをたかくしたるものなり。
やなぎをけづりて　色のしろきをいふ也。
つだみ　おさなきこのちをあますをいふ也。
すゞむし
めぞめ　めゆひなり。
みつをかくしほろゝけて　たきものにあまづらのすくなきは。ほろ〳〵と有也。
ゆたけき御きゝ　ゆたけきは事のひろき心

なり。御さゝはよのつねに御さゝもなきなどいふ詞也。

廿三ゆふぎり

をのといふところ　くるすのをのやらん。又ひえの山のすそのをのやらん。いづれとさだめがたし。

ぞうるい　一ぞくなり。

とりのせうやう　せうと云はたかのめとり也。鷹はめ鳥がをとりをしたがふる也。

むねはしりて　むなさはぎなり。

うつしをかせて　うつしはくらの名也。

かう〲しき　かみ〲しき也。

廿四みのり

なたいめむ　ぎやうけいの時。くぶの人々の名乗てまいるをいふ也。

しぼりあけて　めをしぼりてひらくことなり。

やゝまし　やむといふ詞也。

廿五まぼろし

うなひまつにおぼえたる　これも源氏のなんぎ也。

よるべの水　これ又說〲ある事也。

めゝしく　めにたつなり。

廿六くもがくれ

名はありてまきはなし。

廿七にほふひやうぶ卿

なにかはやうのもの　なにかやうがましくといふこゝろ也。

いつゝのなにがし　女の五のさはりといふこゝろなり。

うつし　たきものなり。

こうばい

のちのおほきおとゞ　ひげくろの大臣の事也。

かはふく　うそをふくとなり。
　たけがは
おさ〳〵しう　これはすぐれたる事をいふ也。
もきゞ　葉もなき木なり。
つめかくすべき　はぢたる心也。
すみたるさまして　すご〳〵としたる心なり。
こまのらんじやう　けいばに右の勝たるときは。駒のらんじやうをする也。
のどまりて　しづ〳〵としたる心也。
ゑかのきんたち　ゑんかとて。かきのもとにざをしてつく事のある也。
　一宇治はしひめ
すなとり人　いほとる物なり。
いり日をかへすばち　げんじやうらく。れう王といふ舞のてなり。

これも月にはなるゝ物かは　びはのばちをば。はん月と云あなにさす也。
ひをむし　しろきてうのやうなる虫の。朝にしやうじて夕にしする物也。
ぎなどいはせて　ろんぎをせさすると也。
はかりごちて　たばかるなり。
かびくさき　物のかびてくさくなるなり。
しみといふむし　ものゝほんなどさす虫也。
　二しゐがもと
あじろのびやうぶ　車のあじろをもて。びやうぶをはりたる也。
くぢうにて　こゝのへをいふ也。
よこもれる　わかき人の事也。
さゝのくま　さゝのおひたる所なり。
みだりあし　みだりにあなたこなたへあるくこと也。

かづらひげ　ほうげのながきをいふ也。
いろなり　かみを千いろ八しやくといふこゝろなり。
ひすいだちて　ひすいといふ鳥はうつくしき鳥也。
三あげまき
みやうがうのいと　もろ〳〵のかうをかみにつゝみて。五色の糸にてむすびつけて。ほとけにまいらする也。
たゝり　いとくる物也。
いせの御　いせといひしうたよみの女房の事なり。
あげまき　これはいとをむすびたる物也。
まつのはをすきて　すくとはのむ事なり。
ひろばかりのへだて　ひろは八しやくをいふ也。
山なしの花　世をのがれむかたなきといふこゝろなり。
はゝうちすきて　としよりのものいふ事也。
かべの中のきり〳〵す　あげまきのきみをたとふる也。
おいつきがきたまて　ふみの上ひとしくかくをいふ也。
とを山どり　ひとりぬる事をいふ也。
ざい五が物がたり　伊勢物語也。
さぐりもよゝと　さくりなきなり。
おいかれにたれど　としおひてこゑのかれたる也。
常不輕をなんつかせ侍　ふきやうぼさつとは人をおがむ也。つくとはぬかつくなり。
ゆるし色のこほりとけぬかとみゆる　くれなゐのきぬのうちたるが。こほりのやうにみゆる也。

四さわらび

いはせのもりのよぶこどり　人づてならて物いひし事也。

まろうどゐ　きやくてんなり。

ねこめ　ねながら也。

五やどり木

あかずもあるかな　ふそくなるとなり。

のりもの　かけものなり。

よをそむき給ひしさがのゐん　これ又こゝろへぬ事也。

さぶらひのべたう　てん上のべたう也。

おもかくし　しらぬかほしたる也。

こしのしるし　しるしのおびなり。

花ふらせたるたくみ　ひだのたくみのとをいへり。

かばねをつゝみてくびにかけて　くわんをんせいじのいんゑんといへり。

かたしろ　人かた也。

こだに　木につきたるむしの名也。

なにがしのみこのこの花めでたる　たかあきらのみこの事也。

なをしもの　ぢもくのゝちある事也。

ふずく　くひものなり。

しろがねのやうき　御まへの物にあるかはらけにこをぬりたる物也。

おしとのたまへる　天はいを給ときの事也。

さし返し　御さかづきのさけをうつすかはらけ也。

わかなへ色　うすあをのすこしすぎたる也。

六あづまや

ほとりばみたらむ　そはふるまひなどいふこゝろ也。

こち　ひとりごとなり。
こたみ　このたび也。
こてたまへり　きこえごつといふ心なり。
がまのさう　いかれるかたちなり。
ゆする　ゆあぶるとなり。
けつりたらん　けをされたるこゝろ也。
はゝぎみだつや　はゝぎみのゐたるいゑ也。
いがたうめ　たうめは女の名也。いがたうめはいがの局など云心也。
やかのたつみのすみ　家のたつみなり。
おほどれたるこゑ　ひさいどもの行かふこゑ也。
よもぎのまろね　よもぎのやどにねたる也。一にはくるまをよもぎふといふ。くるまのうちにまろねしたる也。
おとしがけ　くるまやるみちの事なり。

七うきふね

つゝみぶみ　ふみをうすやうにて。くすりのやうにつゝむをいふ也。
うづち　正月の上のうの日の事也。
またぶり　木のえだ也。
ことねり　ずいじんのやうなる物也。
さのごとき　さやうのごときといふ詞なり。
さとびたる　さとげなる也。

八かげろふ

よづかず　世にためしなきなり。
なかごもり　ゑにふれてさしいてぬ也。
うつせ　うつせがいなり。
はんさいのをび　さいかくのおび也。くぎやうはぶくの時さす也。
ひをものゝふたに　ひの物なり。
とみの事　きとのこと也。
せり川の大しやう　むかし物がたりの事な

り。
九てならひ
めおに　もんじゆろうのめなしちごの事
也。
ようめい　よそをひ也。
ぬるみ　ぬるげなり。
つくもがみ　としよりのかみなり。
はすのみ　さかづきの名也。一にはたゞは
す也。
たりたんなちり〳〵　ふえのこゑのかくき
こゆる也。
きせい大とこ　ごうちの上ずなり。
まろなるかしらつき　ほうし也。
世中の一のところ　せつしやうくわんはく
けをいふなり。
きなるいづみ　ぢごくの事也。あのよ也。
十夢のうきはし

らうけ　としよりたる人の病をいふなり。
たまどの　なき人をまづしばしやどしをく
屋なり。
ひきぼし　くひもの也。
いきてたづねよ　ゆきてたづねよ也。
をゝと　いらへたるこゑなり。
かたみにおもへかし　かたみはたがひに
也。

源氏の物語はひとへに色このみの道とのみ思ふべからず。ないきうげてんのふかきむねをはじめとして。おほやけのとのたゞずまゐ。やまとうたの道。いとたけのしらべ。しやうぞくの色あひにいたるまで。世にありとしあるとゞ。一としてしるしあらはさずといふ事なし。この物語よくよめらんは。わが國のことおもひなかばにすぎ侍べし。又五條の三ぼんはうたよみのげんじみざるは

ほいなきことに申され侍りき。そも／＼河海。すいげん。しめいなどいふ抄は。事ひろきによりて。しよしんの人はみることたやすかるべからず。これによて一ふしあること葉の心えがたく侍を。あら／＼この一てうにしるしあらはして。道にいるものゝなかたてとし侍り。たゞしこれにきはまれりと思ふべからず。すべて五十四てうのつくりざま。よみやう。くでん。こじつなどは。せん達にならはずして。たやすくさとりしらんことは。いとおぼつかなくおぼえ侍り。ほう徳元年しも月中の五日にしるし侍り。

一條大閤兼良公製作也。

可謂初學入門。珍重云々。

〔右源氏物語和秘抄以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百十九

總檢校保己一集
男源忠寳校

物語部十九

帚木別注 又稱雨夜談抄

光源氏名のみことゝしういひけたれ給とがおほかなるにいとゞかゝるすき事どもを末の世にも聞傳へてかろびたる名をやながさんと忍び給へるかくろへ事をさへ語つたへけん人の物いひさがなさよ

此卷を帚木と名付ることは。源氏の君中川のやどりへ。方たがへになずらへておはしましたりしに。うつせみのつれなくして。あひたてまつらずなりしかば。はゝ木々の心をしらでその原の道にあやなくまどひつるかなとよみ給ひしに。女。ふせやにおふる名のうさにあるにもあらずなど。返しにたてまつりし哥にて付たる名也。坂上是則が。その原や伏屋に生ふるはゝ木々の有とは見えてあはぬ君哉。といへる哥をとれるうた也。空蟬が有ながらあひ奉らぬを。ありとは見れどなき心に見る也。此卷の名なれ共。此物語五十四帖にをよぼす名也。其ゆへは。此物語はつくり事にて。なき事にはあれども。又昔有こし事どもをおもかげにしてかける也。先此物語の桐壺の御門。　朱雀院。　冷

泉院三代は。延喜。承平。天暦のみかどをかたどり。光源氏は西宮左大臣高明公の太宰にうつされ給しをなずらへたり。此外源氏の君の左遷には。もろこしの周公旦の東征し給し事。白樂天が事。我朝には菅丞相。野相公。在納言のためしをよそへたり。是のみならず。所々にものをなずらふる事限なし。されば五十四帖。とく〳〵有物かとみればなく。なき物かとすればある物なれば。此帚木一部の名になるもの也。天台に四門を立る中にも。亦有亦空門。この物語にあたれり。夢の浮橋の巻も。其一巻の名といへども。五十四帖の名に成物也。いかんとなれば。此物語に上中下の人々。もろ〳〵の行跡。皆夢の内のたはぶれ也。たとへば荘子が夢に胡蝶となり。しらず又胡蝶が荘子となるかといふがごとし。此物語はいにしへの夢ぞともいひがたく。此世にある我人の今の身の現とも定めがたく。ともに夢のわたりの浮橋。はゝ木々のありなし也。されば紫式部の筆の跡。その色ふかく其心はかりなき物也。扨此巻の始に光源氏といふより。片野の少將にはわらはれ給ひけんかしと云までは。物語の作者の詞也。是のみならず。紫式部の詞所々おほかるべし。名のみことごと敷とは。光源氏と云名は。いかめしうとほめたる心也。云けたれ給ふとがおほかるとは。世に其名高く道のほまれ有人をも。世上に云けつ習ひ也。かゝるすき事共を末の世にも聞傳へて。かろびたる名をや流さんと。しのび給ひけるかくろへ事をさへかたり傳へけん人の物いひさがなさよとは。源氏の君は好色の人ながら。おもては實をもとゝして。下には色このむ心まし〳〵けるなり。

さるによりて世にしのび給ふ事を。誰かかたり傳へけんと。紫式部が云也。さるは世をはゞかり。まめだち給ふける程。なよびかにをかしき事はなくて。片野少將にはわらわれ給けんかしとは。下の心は好色にして。上に實をたつるゆへに。なよびたる所のなきを。好色の本意にはあらずと。かた野の少將はわらはんと。藤式部が思ひてかける也。片野の少將の事。色々の儀侍れど。作物語に片野の少將と云有。その人かぎりなき色ごのみ也き。光源氏と片野少將と同じ時代にはあらねども。紫式部かくとり合。かくいへる也。作物語の人にて作物語の人に對する事。面白く書る物也。こゝ迄は此一卷の序分也。

まだ中將などに物し給しときは

源氏の君。此卷にて十六歲。官は中將也。紅葉賀卷に。宰相にて中將もとのごとし。花宴迄は中將なり。しかれば此卷までは勿論中將なるを。まだ中將などに物し給し時とかけること。不審あるべき事也。しかはあれど。かくかけるに心あり。其ゆへは。紫式部此物語をかく事。我作りたる物のやうになさずして。昔有し事どもを。さま〴〵に傳聞し事を書寫しなどして。取あつめ一部にしたるやうにかけり。さる程に卷々の末おほくそれをあらはせり。昔の事にいへるものなれば。中將などに物し給ひしの。過去のしうたがひなき物也。たとへば伊勢物語に。業平の極官を貞觀年中にかけるは。彼物語なり平沒後に伊勢かけるゆへに。極官をかきし其たぐひ也。此儀を分別すれば。不審なき物にや。

うちにのみさぶらひようし給ひておほい殿にはたえ〴〵まかでたまふ

源氏の君。左のおとゞの姫君あふひのうへをよすがとし給し事は。源氏十二歳の時の事。其時葵の上十六也。すこし源氏の心とまり給はぬ故に。大内にのみあり。よくおぼして。おほい殿へはたえ〴〵まかて給ふとみえたり。

しのぶのみだれにやとうたがひきこゆることも有しかど

とは。葵の上かたの人。わが方ざまへうとくおはしませば。内にて是かれに御心もうつるにやと。うたがふ心也。

さしもあだめきめなれたるうちつけのすきずきしさなどはこのましからぬ御本性にて

とは。かやうに人のうたがひ思ひしかど。源氏の君の御心には。なびきやすき人に心とめ給ふ事なき御本性なるにより。さもなかりけるといふ儀也。おほん本上にてと書すてゝ。亂れ給へる心はなしと云心をもたせて書り。かやうに詞をいひすてゝをくと。此物語におほかるべし。さるによりて幽にもきこゆる也。

まれにはあながちに引たがへ心盡しなる事を御心におぼしとゞむるくせなんあやにくにてさるまじき御ふるまひもうちまじりける

まれにとは。なびきやすきをきらふ御心なれば。すき心なきやうなれど。又とき〴〵われになびきがたき人を。心におもしろく覺すにより。そのかたにてあるまじきふるまひもありて。名の立事も有成べし。

ながはれ間なき比

五月ばかりの事也。

うちの御物いみさしつゞきていとゞながゐさぶらひ給おほい殿にはうらめしく覺したれどよろづの御よそひ何くれと

内の御物いみとは。禁裏の御ものいみ也。物忌といふは。怪がましき事などある時。物いみと云字をかきて。簾などにつけて。ありきなどもせてつゝしむ事あり。ながゐさぶらひ給とは。内に久しくおはします心也。よろづの御よそひなにくれとは。さうぞくの何やかやと。左のおほい殿御心にいれ給ふ事也。

御むすこのきんたちたゞ此御とのゐ所の宮づかへをし給ふ宮腹の中將は中にしたしくなれ聞え給て

御むすこの君たちとは。左のおとゞの御子ども也。宮ばらの中將とは頭中將也。極官は太政大臣。若菜に致仕して。ちゝのおとゞと云り。桐壺の御門の御いもうとを。左のおとゞ取給て。御子ふたりもたまへり。ひとりは葵のうへ。ひとりは此中將也。よりて宮腹の中將とは云也。源氏君とはいとこにておはします。さるにより中にしたしくして。學問をもあそびたはぶれをも。人よりは心やすくし給とみえたり。

右のおとゞのいたはりかしづき給すみかは此君もいとものうくしてすきがましきあだ人也

頭中將は右のおとゞの御むこなるよし。桐壺に見えたり。いたはりかしづき給すみかは。此君も物うくしてとは。右のおとゞの四君の方に。頭中將かよひ給へども。心につかぬ事也。此君とは。源氏の葵上に御心とまらぬ事をいはんとて。此君もすきがましきあだ人なりといへる也。

君のいで入し給にうちつれきこえ給つゝ夜ひる學問をも遊をももろともにおさ〳〵たちをくれず

これは源氏君と頭中將の中よくおはして。

よろづ心のうちをもかくしあへ給はぬ事也。是が頓て雨夜の物語の序なるべし。

おほとなぶらちかうて文どもなど見給つゐてに近き御づしなる色〳〵の紙なる文どもを引出て中將わりなくゆかしがれば

文どもなどみ給とは。學問がたの文也。色々の紙なる文とは。艶書の事なるべし。

さりぬべきすこしは見せんかたはなるべきもこそとゆるし給ねばそのうちとけてかたはらいたしとおぼさんこそ床しけれをしなべたる大かたのは數ならねど程〳〵につけてかきかはしつゝも見侍りなんをのがじゝうらめしきをりおり待がほならん夕暮などのこそ見所はあらめとゑんずれば

さりぬべきと云より。源氏頭中將のたがひの詞にて。あらはに聞え侍り。たゞしゑんずればと云すてたる次に。源氏の詞有べきを。頭中將の詞也。心得がたきは文字也。さりながらやすらかに云すてゝをく詞。此源氏物語のならひなれば。そのたぐひとみてをくべきにこそ。

やんごとなくせちにかくし給べきなどはかやうに大そうなる御づしなどにうちをきちらし給べくもあらずふかく取置給べかめれば是は二のまちの心やすき成べし

頭中將源氏の方に有艶書を見給とていへる也。人見てもくるしからじとおぼすをぞ。これにはをき給ふらんと云心也。二のまちは次のまちと云心也。又やんごとなくと云より。二のまちの心やすきと云までは。草子の地とも云べきにや。しかればまへのゑんずればと云捨たるにもよろしきにや。

女のこれはしもとなんつくまじきはかたくも有かなとやう〳〵なん見給ひしるたゞうはべ

ばかりのなさけにてはしりがきおりふしのいらへ心得てうちしなどばかりはずいぶんによろしきもおほかりとみ給れどそもまことのその方をとりいでてんえらびにもるまじきはいとかたくや

女のこれはしもと云より。頭中將の詞也。これはしもとは是はと也。なんつくまじきとは。難なきはあるまじき心也。やう／＼見給ひしるとは。頭中將わかくをはしながら。世上の女のさまを次第にしるの心也。はしりがきとは。女の文かきの事。おりふしのいらへとは。哥よむ事也。分にしたがひてする物はあれど。手かく人と云べくもなく。哥よむといふべきもなきと云儀也。これよりしなさだめ也。此品さだめの事は。世間の女の心をおほく見あつめたる人が。源氏の君にあひ奉りて。世にはかかる心ある女も有と云ことをかたりたてまつる事也。頭中將は世をくはしくしり給程はなけれど。源氏君よりはすこしこのかみにて。女のさまもよく知給へる故にかたり給へる也。大かた此巻は心得がたきにや侍らん。たとへば當時も年老たる人は。五十年六十年の間の事を云とては。其人の心はかくこそ有しか。さやうにこそ侍りしかと云がごときの事也。それに當時の人の心。こし方の人の心に似たるがあるが。もし此ことはりにもとづけは。わづらひなく心えらるゝ物なり。

わが心得たる事ばかりをゝのかじゝ心をやりて人をばおとしめなどかたはらいたき事おほかり

是もまへのつゞきなれど。かやうなる人有よしの義也。

かたちおかしくうちおほどきわかやかにてま

ぎるゝことなき程はかなきすさびをも人まねに心をいるゝ事もあるにをのづからゆへづけてしいづる事も有見る人をくれたるかたをば云かくしてさて有ぬべき方をばつくろひてまねびいだすにそれしかあらじと空にいかゞはおしはかり思ひくださんまとかとみもて行に見をとりせぬやうはなくなん有べきとうめきたる氣色も

是は品さだめの第一也。●心は人のむすめのかたちをかしく。わかやかなるやうの人の。何にてもしいづるわざの有をいふ也。ゆへづけてとは。しぜんきよう有て也。さやうなる人を。その方なる人のと〳〵敷いへるが。見おとりする事有よしを云る也。此段は末摘にあたる也。末摘はよろづをくれたる所おはしけれど。琴を引給ひしを。大輔の命婦が源氏の君にかたり申たりし事よく似たる也。又此段の始に。かたちおかしくわかやかなる程といへり。末摘はかたちあしき人也。ちがふやうなれど。こと〳〵く似る事はなけれど。一所なれど詮とする所似たるをば。それにあたるといへる也。

なりのぼれどももとよりさるべきすぢならぬは世の人の思へる事もさはいへどなをと也

此段は源氏の君頭中將に問給へるは。やんごとなきが世くだりたると。下つかたの人のなりのぼるとは。いかゞわくべきとの給へるを。おりふし左の馬のかみまいりあへるが。物よくいふ人の。世の中の人の有さましれる人なれば。中將左の馬頭にゆづりいはせらるゝ也。心は。なりのぼる人をば。世間よりは昨日けふまで下﨟にて有し人ぞなど思ひいへど。すでにはや官位もあがりたるうへは。云おとすべきにあらずと云とを。

猶となりとはいふ也。惟光女藤典侍これにあたれり。

又もとはやんごとなきすぢなれど世にふるたづきすくなく時世うつろひて覺えおとろへぬれば心は心としてとたらずわろびたる事もいでくるわざなればとり〳〵にことはりて中の品にぞをくべき

是は末摘にあたる也。さきにも末摘にあたるあれど。それはしわざについて也。是は種姓のくだるたとへ也。うつせみも納言の子ながら。受領の北方になればあたるべきにや。此まへの段よりする迄。大略馬の頭がことば也。

又ずりやうと云て人の國のとにかゝづらひいとなみて品さだまりたる中にもきざみ〳〵ありて中の品のけしうはあらぬとり出つべき比ほひ也

此品は軒端の荻にあたる也。ころほひ也とは。當時ずりやうの人のむすめに。可然がおほき由也。

なま〳〵のかんたちめよりも非參議の四位どもの世のおぼえくちおしからぬがやすらかに身をもてなしふるまひたるいとかはらかなりや家のうちにたらぬ事はたなかめるまゝにはぶかずまばゆき迄もてなしかしづけるむすめのおとしめがたくおひ出るもあまた有べし

非參議とは宰相にならぬ人なるべし。かはらかなりやとは。さはやかなる心也。はぶくとは省の字也。はぶかずとは。身より過たる事をもかへりみず。しんしやうやかにもてなしたる儀也。これは明石のうへにあたる也。

宮づかへにいでてたちて思ひかけぬさいはひとりいづるためしどもおほかるならしなど

是はきりつぼの更衣にあたれり。

もとのしな時代の覺えうちあひやんどなきあたりのうち〳〵のもてなしけはひをくれたらんはさらにもいはず何をしてかくおひ出けんといふかひなく覺ゆべし

是には女三宮あたれり。朱雀院のみこにて。六條院の本臺におはしけれど。手などもあしく。心もをくれたまへりし也。

うちあひてすぐれたらんもとはり是こそはさるべきとゝ覺えてめづらかなる事とも心もおどろくまじ

やんどなき人の。時の覺えもいかめしきが。心もしはざもうちあひたらんは。もとよりの事なるべきの儀也。薄雲女院これにあたれり。

さて世にありと人にしられずさびしくあばれたらん葎の門におもひの外にらうたげならん人のとぢられたらんこそかぎりなくめづらしくは覺えめ

夕顔のうへこれにあたれり。

ちゝのとしおい物むづかしげにふとりすぎせうとのかほにくげにおもひやりことなる事なきねやのうちにいといたく思ひあがりはかなくしいでたることわざもゆへなからずみえたらんかたかどにてもいかゞ思ひの外におかしからざらん

是はしゆ姓させる人ならぬ人の中にも。しかるべきが有べき心也。かたかどにてもとは。かけたる中にもとるかたの有べき儀也。これには藤式部が妹あたれり。物語のおもてにも見えたり。

いでやかみのしなと思ふにだにかたげなる世をと君は覺すべし

君とは源氏の御事也。葵の上。ちゝは左のお

とゞ。母宮はみかどの御いもうとなれば。上の品にはならびなけれど。源氏の君の御心にあはぬ所ありし儀也。

ひもなどもうちすてゝ

紐をさゝぬ事。源氏の君うち亂て。物語給時の様なり。

女にて見たてまつらまほし

源氏の君を女に我なりてみたてまつらば。なをたぐひなく思ふべきの心也。此下詞あらは也。

とすればかゝりあふさきるさにて

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに。此心そへにとは。我心に物をりやうげしたる心也。さやうにしてよからんとおもへばちがふ。さらば又かやうにやせんとすれば。又たがふ事ある儀也。あふさきるさとは。行さま來るさまのやうの事也。只こなたかなた物のちがふ世のならひなり。それを女のうへのこゝはよしと思へば。かしこたがひ。かしこよしと思へば。こゝたがふ事に引哥なり。

かならずしも我思ふにかなはねど見初けるちぎりばかりを捨がたく思ひとまる人は物まめやかなりと見えさてたもたるゝ女のためも心にくゝをしはからるゝ也

此詞男女のうへのみならず。君臣朋友の中にも大切のことば也。

君たちのうへなき御えらびにはいかばかりの人かはたぐひ給はんところせく思ひ給へぬにだに

馬頭おほくの人のうへを語りて。世にしかるべき女のなき事を申さんとてかくいへる也。所せく思ふ給へぬにだにとは。馬頭がわが身の事也。所せきとは。上臈はよろずに身

をやすらかにし給はぬものなれば。其身はせばき儀也。いやしき身は所せばき事なきよし也。惣じての心は。いやしき身にだに。思ふことかなふ女はなきの心也。思ふ給へぬにだにと云て。心をもたせて句をきりて。下へはつゞかぬ詞也。

かたちきたなげなくわかやかなる程のをのがじしはちりもつかじと身をもてなし文をかけどおほどかにことえりをしすみつきほのかに心もとなく思はせつゝ又さやかにもみてしがなとすべなくまたせわづかなる聲きくばかり云よれどいきの下に引いれとすくなゝるがいとよくもてかくすなりけりなよびかに女しとみればあまりなさけに引こめられてとりなせばあだめく是を始のなんとすべし

此一段のうち。塵もつかじと身をもてなし。文をかけどとえりをしてと云所は。伊勢のみやす所など是に似たるべし。ことえりとは。詞をえる儀也。御やす所は文かき上手にておはしける也。これより下。とりなせばあだめくといへるは。木枯の女にあたる也。はじめのなんとすとは。第一の難と云儀也。此段のつゞき惣は一段なれど。その事〳〵のかはりめに。そこはそれに。かれはこゝに似たる様の事あるべし。

事が中になのめなるまじき人のうしろみのかたは物のあはれ知すぐしはかなきついでのなさけ有をかしきにすゝめる方なくてもよかるべしとみえたるに又まめ〳〵敷すぢをたてゝみゝはさみがちにびさうなき家とうじのひとへにうちとけたるうしろみばかりをして朝夕の出入につけても大やけ私の人のたゝずまゐよきあしき事の目にも耳にもとまるありさまをうとき人にわざとうちまねばむやはちかく

てみん人のきゝわき思ひ知べからんにかたりあはせばやとうちゑまれ泪もさしぐみもしはあやなき大やけはらたゝしく思あまる事などおほかるをなにゝかはきかせんと思へばうちそむかれて人しれぬおもひいでわらひもせられあはれともうちひとりごたるゝに何事ぞなどあはつかにさしあふぎゐたらんはいかゞはくちおしからぬ

とが中にとは。とりわけなど云心也。物のあはれをしり。なさけにすゝむが。あしき事にてはなけれど。實なきはかひなければ。實なる所をつよくぞたてんとていへる詞也。されども又まめ〳〵敷すぢをたてゝとは。うしろみに心をいれて。わが身をもやさしくもたず。みゝはさみがちに。びさうなきをばきらふ心也。みゝはさみとは。びんの髪などを耳にはさむやうの事也。みぐるしきさまなり。家とうじとはさだめたる妻の事也。此びさうなきと云には。馬頭がゆびくひ切たる女あたる也。されど彼女はみめかたちはあしかりしかど。身をかきつくろひなどして。心も下しうなかりしなり。朝夕の出入にも。大やけわたくし目にもみゝにもとまる事をば。我つまにこそかたらまほしき心也。大やけはらたゝしきとは。主人などもちたる身の。その主にうらみ切なる時も。又傍輩朋友などにくちをしと思ふとある習ひ也。さやうならん時は。心ある妻などにはかたりもすべきを。心なき女などにはいひてもかひなきあまりに。思出わらひなどする有べし。思いでわらひとは。くちおしく思ひしあいてなどを。なんてうそれがなど思ひて。そらわらひすることある儀也。あはれともひとりごつとは。あはれ我身わがみならば

など。述懐の事あるならひ也。さやうに男のあらん時は。女の心にも大かたの事にはあらじなど。ふかく思ひいれて。男をもなぐさめなどすべき事なれど。その心もなくて。とく〳〵敷是はなぞなどゝあは〳〵敷いひたらば。口惜かるべき事也。されば只つゐのよすがと思ふべき人は。心たらはであしかゝりなん事を。馬頭君たちにかたるなるべし。此段はさし過たるをなだめ。をくれたるをすゝめんとかける也。

たゞひたぶるにこめきてやはらかならん人をとかくひきつくろひてはなどかみざらん心もとなくとゝなをし所有こゝ地すべし

是は天性心だての思ふまゝなるはあるべくもなければ。かやうに又一段をかける也。こめきとは。ちいさきにあらず。巨の字也。おほきやかなる性をいふ也。紫の上のおさなおひたちなど是に當る也。

げにさしむかひて見んほどはさてもらうたき方につみゆるしつべし

心はいとをしき女なりとも。立はなれて男のためにいたりなくば。あしかるべきの心也。此心は前に侍りき。

つねはすこしそば〳〵敷心づきなき人のおりふしにつけていではえするやうもありかしなど

そば〳〵敷心づきなきとは。心の事にあらず。みめかたちのよろしからぬ事をかくいへる也。さほなるかたちと云はよきをいへば。それに對して。そば〳〵敷はあしき也。心づきなきとは。かたちあしければ。人の心につかぬ物也。かゝる人もおりふしのいではへするとは。うちふるまひの心だてにて。人にまさることのある儀也。是には花ちる

里よくあたれるなり。

いまはたゞ品にもよらじかたちをばさらにもいはじいと口惜くねぢけがましき覺えだになくば只ひとへに物まめやかにしづかなる心のおもむきならんよるべをぞつゐのたのみ所には思ひ置べかりける餘りのゆへよし心ばへうちそへたらんをばよろこびに思ひをくれたる方あらんをもあながちにもとめくはへじ

あまりのゆへよしとは。心だに實ならば。あまりのゆへ／＼敷事あらば。よろこびにすべきの儀也。

うしろやすくのどけき所だにつよくばうはべのなさけはをのづからもてつけつべきわざをや

是はあふひのうへにあたれり。

えんに物はぢしてうらみいふべき事をも見しらぬさまに忍てうへはつれなくみさをつくり心ひとつに思あまる時はいはん方なくすごき言のはあはれなる哥をよみをきしのばるべきかたみをとゞめてふるき山里世はなれたる海づらなどにはひかくれぬかし

これは伊勢物語に。なり平の方にありし女。出ていなば心かろしといひやせんと云て。うかれ出しやうなる事也。此物語に夕がほのうへ是に當れり。哥などをよみ置たりし事はなけれど。大かたの心だてよく似たるべし。

わらはに侍し時女房などの物がたりよみしを聞ていとあはれにかなしく心ふかき事かなと泪をさへおとしはべりしいま思ふにはいとかる／＼しくことさらびたる事也

是は馬頭がわらはにて有し時といへり。たとへば此段にいへるやうの事を女房などのよみしを。哀に聞しがあしき事也けりと。馬

頭が思ひ返したる儀也。此ことはりを君たちにしらせ奉らんとて云る也。
心ふかしやなどほめたてられてあはれすゝみぬればやがてあまになりぬかし思ひ立ほどはいと心すめるやうにて世にかへりみすべくもおもへらず
心さだまらぬ女のさま也。是は古今におとこをうらみて。みつの寺にてあまに成て。うきめをみつのなどよみしごときの心也。此下の詞はかゝる女の心だてをかけるも也。
にごりにしめる程よりもなまうかびにてはかへりてあしき道にもたゞよひぬべくぞ覺ゆる
此ことばの引哥に。はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく。此哥あひたりとも見えぬを。あはせやう侍る也。たとへば蓮は先濁りにそみてしかもしまぬ物也。あまになる物は。にごりにそまぬやうなれど。心はにごりにそみたる物也。しかればかゝる人は蓮の濁にしめるよりも。なまうかびなるべきの心也。さればあしき道にもたゞよひぬべしと云也。
あまにもなさでたづねよりたらんもやがてその思出うらめしきふしあらざらむや
是もおなじ女のことをいへり。あるはあまになると。又尼になさで取かへしても。みなよろしからぬとはおなじ事也。さるにより下の詞に。とあらんおりも。かゝらんきざみをも。見すぐしたらん中こそ。契ふかくあはれならめとはいへる也。
われも人も心をかれじやは
とは。さきのごとく。たとひ又そひてありとも。さやうならん女は。うしろめたくて。心をかれぬとはあるまじきの心也。是もいせ物語に。業平を捨て出し女の。又云かはした

りしかど。うたがはしく覺えて。なり平のわするらんと思心の疑にとよみしやうのたぐひ也。其心にても紫式部かきつらんと見えたり。

又なのめにうつろふ方あらん人を恨てけしきばみそむかんはたをこがましかりなん心はうつろふ方ありとも見初し心ざしいとをしく思はゞさるかたのよすがに思ひて有ぬべきにさやうならんたぢろぎにたえぬべきわざ也

前の段は。男の心ざしあるを見しらずして。そむきうらむる事をいへり。是は又男あだ人にてうつろはんを。同じやうに恨みそむかば。男はをこがましく思ふべし。されば男の心はたのもしげなくとも。見初し契をちからなしと思ひて。堪忍すべきの心也。

すべて万の事なだらかにえんずべき事をば見しれるさまにほのめかし恨むべからんふしをもにくからずかすめなさばそれにつけてあはれもまさりぬべし

すべてと云は。まへのあまたの事を以て。かんようよかるべきやうをかける也。此段は紫の上に當れり。さるにより世にたぐひなき人とは云る成べし。

あまりむげにうちゆるべみはなちたるも心やすくらうたきやうなれどをのづからかろき方にぞ覺侍りし

是又女の物えんじもせず。男の心にまかせたらんは。只男を思はぬにて侍るよし。心かろき方にぞ覺え侍と云る也。下の詞につながぬ舟のうきたるためしとは。舟は浪の千里をも行むこそ本意ならめども。つなぐ事なければ。舟のためあやうきにたとへ云也。

さしあたりてもをかしともあはれとも心にいらん人の頼もしげなき疑あらんこそ大事なる

べけれ
是は頭中將のこと葉也。おぼろ月夜是にあたれり。まことにたのもしげなき所有し人也。
我心あやまちなくて見すぐさばさしなをしてもなどかみざらんと覺えたれどそれさしもあらじ
此心たとへばわがをかしとも思ふ人もたらん人の。うらむべき事もなきを。あやまち有やうにうらみなして。それをかごとに。他人に心かはしなどするとあるを。誠に大事成べきと云也。されぱわがあやまちなくて見すぐさば。たとひ一たん恨みありとも。などか思ひなをして見ざらんの心也。それさしもあらじとは。心不調にしてあだなる女はさしもあらじと云也。下の詞にともかくもたがふべきふしあらんを。のどやかに見忍ばんよりますことあらじとの給ひて。わが妹のあふひのうへをほめて覺す成べし。
よろづの事によそへおぼせ木の道のたくみの万の物を心に任せてつくりいだすもりんじのもてあそびものゝその物とあとも定まらぬはそばつきざればみたるもげにかうもしつべかりけりと時につけつゝさまをかへていまめかしきに目移りておかしきもあり
馬のかみが詞也。女の色々のさまをいひて。猶たとへをもちて。源氏の君に云きかせたてまつる也。木のみちのしわざの實ならぬ物をば。宮づかへ人などにたとへ云也。
大事としてまことにうるはしき人のてうどのかざりとするさだまれるやうなる物をなんなくし出る事まことの上手はさまことに見えわかれ侍り
うるはしき人のてうどのかざりをば。人の家あるじといはるべき女のかたにたとへ云

也。
又繪どころに上手おほかれど墨がきにえらばれて
すみがきとは。とりわき墨書は大事なればいふる也。
よのつねの山のたゝずまゐ水の流れめに近き人の家居ありさまげにと見えなつかしくやはらびたるかたなどをしづかにかきまぜてすぐよかならぬ山のけしき木ぶかく世ばなれてたゝみなしけぢかき籬の內をば心しらひをきてなどをなん
まへにいへるゑのさまは。その物ともなき女にたとへ。是はさるべき人の心をきての有べきやうをたとへ云也。
手をかきたるにもふかき事はなくてこゝかしこのてんながにはしりがきそこはかとなくけしきばめるはうちみるにかど〳〵敷氣色立たれど猶まことのすぢをこまやかに書えたるはうはべの筆きえてみゆれど今一たびとりならべて見れば猶じちになんよりけるはかなき事だにかくこそ侍れまして人の心の時にあたりてけしきばめらんみるめのなさけをばえたのむまじく思給へて侍る
此三のたとへを云事。馬頭源氏の君に。世間の女の有様を。とあるも有かゝるも有とかたり奉れど。まだとしわかうをはしませば。直に其ことはりをしらせまいらせがたく思ひて。たとへを引て云る也。これひとへに女のことを云のみにあらず。源氏の君。頭中將は世をまつりごち給ふべき君たちなれば。女の上にて世間の人の心をゝしへたてまつる物也。文集大行路註に。借夫婦以諷君臣不終也と云り。
はやうまだ下﨟に侍りし時あはれと思ふ人侍

き聞へさせつるやうにかたちなどいとまほにも侍らざりしかばわかき程のすき心には此人をとまりにも思ひとゞめ侍らずよるべとは思ひながらさう／＼しくてとかくまぎれありき侍りしを

是は馬頭むかしあひなれし女の心有樣を云る也。

此女のあるやうもとより思ひいたらざりける事にもいかて此人のためにはとなきてをいだしをくれたるすぢの心をも猶口惜くは見えじと思ひはげみつゝ

此人のためには馬頭が事也。女の心に。我男にしたがふさまを。此人のためにはと。心にいれ思ひはげむ心也。此末の詞に。うとき人にみえば。おもてぶせにやと云も。他人にわがさまを見えば。馬頭がおもてぶせにやと。かたちをもひきつくろひしと語る也。

すこしをとなびんにそへて又ならぶ人なく有べき樣など

をとなびんとは。官位もあがり。人々しくもならば。いよ／＼あひ思ふべきと。女の心をとる儀也。

すこしうちわらひて万に見たてなく物けなき程を見すぐして人かずなる世もやと待かたはいとのどかに思ひなされて

是は女の云詞也。見たてなく物けなきとは。官位のあさき事也。官位はをそくとも。必のぼるべければ。そのかたをまつ事は。心やましからずと也。つらき心を忍びてとは。馬頭があだなる心を見ん事は。忍びがたければ。たがひに別べききざみ也と云はなつ也。

はらたゝ敷なりてにくげなる事共を云はげまし侍るに女もえおさめぬすぢにてをよびひとつをひきよせてくひて侍りしをおどろ／＼敷

かこちて
下の詞にあらはなり。
手をおりてあひみしことをかぞふればこれ
ひとつやは君がうきふし
えうらみじなどいひ侍れば
うきふしを心ひとつにかぞへつゝこや君が
手をわかるべきおり
はらたゝしくにくげなる事をいひはげましとは。女にあひて馬頭が云ける也。女もおさめぬすぢにてとは。のどけくなき心一筋にてと云儀也。さてたがひに此哥をよみて立別るゝ也。されど馬頭が心ぞ實にかはらんとはおもはぬ也。
りんじの祭の調樂に夜更ていみじうみぞれふる夜これかれまかりあるく所にて思ひめぐらせば猶家路と思はんかたはまたなかりけりうちわたりの旅ねもすさまじかるべく氣色ばめるあたりはそゞろ寒くやと思ふ給へられしかばいかゞおもへると氣色も見がてらゆきを打はらひつゝまかてゝ
臨時の祭は北まつりの事。十一月中酉也。調樂は午の日也。大内にて有事也。うちわたりの旅ねとは。内裏にたびねせん事也。氣色ばめるあたりとは。木枯の女のもとの事也。そゞろ寒きは。心につかず。身の毛だつやうの事也。いかゞ思へるとは。ゆびくひたりし女の心をゆかしく思ふ故に。彼家に行ける成べし。
火ほのかにそむけて
女の家のさまなり。おもしろかるべきさま也。
こにうちかけて
なへたるきぬどものあつごえたるおほひなる
あつごえたるは。綿などの入たるにや。それ

をふせごの大なるにかけたるべし。

さうじみはなし

本人の事也。馬頭がつま也。

ひたやごもりに

なにゆへともなくこもる也。哥などをもよみをかぬ心也。此衣は馬頭がためにしをきける成べし。

たづねまどはさんともかくれしのびず

とは。此女馬頭にふかくとをざかりて。たづねまどはさせんともせぬ也。

かゞやかしからず

とは。はぢかゞやくなど云は。只はづる事也。ふかく馬頭にはぢずの心也。

いたくつな引て見せしあひだにいといたく思ひなげきてはかなく成侍しかばたはぶれにくゝなん覺え侍りし

いたくつなひきてとは。女は馬頭きたらば。さこそとうちなびきぬるを。猶女をこらさんと思ひて。わざとのけひきてよりつかぬ儀也。たゞにはよらで春駒の哥にてかける也。たはぶれにくゝとは。ありぬやと心みがてらあひみねばたはぶれにくきの哥の心也。あはんとは思へど。とかく女の心をこらさんとしたるは。たはぶれたる心也。

たつた姫といはんもつきなからずたなばたの手にもおとるまじく其方もぐしてうるさくなん侍りしとていとあはれと思ひいでたり

うせたりし女の。物をよくそむる方の事を龍田姫といひ。をりぬふとをいはんとて。七夕の手にもおとるまじくといへる也。うるさくとはうるはしきといふ心也。眞の字也。此詞伊勢物語にあまた侍べし。

中將その七夕のたちぬふ方をのどめて長き契にぞあへまし

たちぬふかたは似ずとも。長き契にあやからせたきのよし也。たちぬふわざはあへずぞ有けると云哥をとりていへるなり。

そのたつた姫の錦には又しく物あらじはかなき花紅葉といふも折節の色あひつきなくはか〳〵しからぬは露のはえなく消ぬるわざなり

又しく物あらじとは。馬頭が妻の物などよく染させけるをほめたる儀也。はかなき花もみぢと云もとは。春の花秌の紅葉は。雨露のしはざにてあるうちにも。花も色なくさき。もみぢも色あひあしければ。露のはえなきならひなるを。さやうにうつくしく染させけるは。ありがたき事にこそと。頭中將ひはんしてほめいへる也。

さておなじ比まかりかよひし所は人も立まさり心ばせゆへ有とみえぬべくうちよみはしり書かいひくつま音みなたど〳〵しからず見きゝわたり侍き見るめもこともなく侍しかばこのさがな物をうちとけたる方にて時〳〵かくろへ見侍しほどはこよなく心とまり侍き

是は木がらしの女也。ゆびくひたりし女よりはおほくまさりけめど。心のをきてのあだ〳〵しければ。かひなきとみゆ。是又人の心のをしへにいへる也。

神無月のころほひ月おもしろかりし夜内よりまかで侍るにあるうへ人きあひて此車にあひのり侍れば大納言の家にまかりとまらんとするに

うへ人たれともなし。木枯の女にかよへる人也。大納言たれともなし。

此女の家はたよきぬ道なりければあれたるくづれより池の水かげ見えて月だにやどるすみかをすぎん人もさすがにて

木がらしの女の家のさまなり。

菊いとおもしろくうつろひわたりて風にきほへるもみぢのみだれなどあはれとげに見えたりふところなるふえとり出て吹ならし影もよしなどつゞしりうたふ

かげもよしは飛鳥井の哥也。やどりはすべしの心にてうたへるにや。つゞしりうたふ。嚥。此字をつゞしりとよむといへる心は。文章を口にてなす事とあり。但こゝにていふつゞしりうたふは。式の郢曲の様にはなく。うちみだれうたふ心にや。飛鳥井は二條万里小路にありと云々。

よくなる和琴をしらべとゝのへたりけるうるはしくかき合せたりける程けしうはあらずかしりちのしらべは女の物やはらかにかきならして

律は秋をつかさどる。女も秋をつかさどる也。此比は神無月なれば。冬は又秋に属する物也。

庭の紅葉こそふみ分たる跡もなけれどねたまず菊を折て

ことの音も菊もえならぬ宿ながらつれなき
人を引やとめける

庭のもみぢこそふみ分たる跡もなけれど。ねたまずと云詞。大かた心得がたきにや。庭のもみぢのふみ分たる跡あらんこそ。誰をかよはし給ひつらんと。ねたむ理も侍べきを。跡もなきをねたむ心は此哥にて見え侍り。惣じて此女の所へ別にかよふ人ありと。此うへ人聞ていへる儀也。心は琴の音も菊もたぐひなき御宿ながら。御ためにつれなき人をば。えやはひきとゞめ給へる。かゝるおりふしも。われこそ庭の紅葉をもふみ分て見はやし奉れと云心なれば。ねたまずの儀聞え侍るにや。

木枯に吹あはすめる笛の音をひきとゞむべきことのはぞなき

まへの哥は別にかよふ男を上人しりて。つれなき人をひきやとめけるとよめるを。女はそのかよふ人のことをば何ともいはで。つれなき人と云を。今のうへ人にしなしてよめる也。此うへ人をひきとゞむべきことのはなしと。琴を立入ていへる也。

にくゝなるをもしらで又さうのことをばんしきてうにしらべていまめかしくかいひきたるつま音かどなきにはあらねどまばゆき心地なんし侍りし

にくゝなるとは。此女うへ人になまめきかよはすを。馬頭聞て思へる事也。此女は馬頭がつまなりし故也。ばんしきてうは冬の調子なれば。おりにあへる儀也。かどなきにはあらずとは。一かどある儀也。

御心のまゝにおらばおちぬべき萩の露ひろはゞきえなんとみゆる玉ざゝのうへのあられなどのえんにあへかなるすき〳〵しさのみこそおかしくおぼさるらめいまさりとも七年餘りが程におぼししり侍なん

萩の露。玉笹の霰に。河海に引哥を書り。更にあたらざる事也。只心はうつくしく。やうそうよは〳〵とするさまの人をぞ。御心にはおぼしめさんの儀也。七とせあまりの程とは。馬頭七年ばかり源氏の君にましたてまつる儀にて。我等が年ばかりにならせおはしまさばの心也。又七と云は。數多き事にいへば。七とせ八とせもおはしまさば。しろしめすべきの心也。

中將はしれものゝ物語をせんとて

しれものとは。つねにたがひたると云心にや。

いと忍びて見初たりし人のさても見つべかりしけはひ成しかば絶々わすれぬ物に思ひ給へしをさばかりになればうちたのめるけしき見えき

さてもみつべかりしけはひ成しかばとは。なにとなくはじめてあへる人の心につくさま也。ながらふべき物とも思ひたまへざりしかば。行末遠くとまではおもはねど。なれゆくまゝに哀と覚えて。わすれぬ物にし侍れば。女もうちたのむけしき見えしなど語り給へる也。是より下の詞あらは也。

おやもなく心ぼそげにてさらば此人をこそはとことにふれて思へるさまもらうたげなりき

此女は夕がほの上なり。おやとは三位中将なる人のよし。夕顔の巻にみゆ。さらば此人をこそとは。おやなくたよりなきさまゝに。頭中将をうち頼むよし也。

このみたまふるわたりより情なくうたて有事をなんさるたよりありてかすめいはせたりける

見給ふるわたりとは。頭中將北方。右のおとゞの四君也。うたて有人にて。夕がほの上をおどしたる事也。さるに此夕貌の上は物おぢをする人にて。ゆくゑなく成し也。

おさなきものなどありしに思ひわづらひてなでしこの花をおりてをこせたりしとてなみだぐみたり

おさなきものとは玉かづら也。

さてそのふみの詞はと問給へばいさやことなる事なかりきや

山賤の垣ほあるともおり／＼にあはれはかけよ撫子の花

さてその文の詞はと。源氏の君の問給へる也。文のことばにて。その人の程のしらるべ

ければ。何となく問ひ給へる也。いさやとなる事もなかりきやは。頭中將のこたへ云る詞也。おもしろきふづかひ也。さて哥の心は。山がつのかきほあるともはあるゝとも也。ひげの心也。わがありさまのはかなきやうの事也。下句は玉かづらの事にかけて。哀はかけよと中將をかこつ心也。哥さまあはれなるものにや。

思ひ出しまゝにまかりたりしかばれいのうらもなき物から物思ひがほにてあれたる家の露しげきを詠て虫のねにきほへるけしき昔物語めきて侍りし

れいのうらもなきとは。夕顔の上の本性のくせ也。恨むべき事をも。さぞと云んははづかしき心にて。いひ出ぬ儀也。

さきまじる花はいづれとわかねども猶とこ夏にしく物ぞなき

咲まじる花とは。床の庭のさま也。しくものぞなきとは。ほむる心ながら。床のえんにて云る也。

やまとなでしこをばさしをきて先塵をだになどおやの心をとる

なでしこをばさし置てとは。玉かづらはわが御子なればさし置て。いもとわがぬるの哥にて。夕顔の君の心をとる儀也。夕がほの哥は。我身をばさしをきて。なでしこの露に哀をかけよといへるを。かやうにあひしらへる。尤おもしろくや。

打はらふ袖も露けきとこ夏に嵐吹そふ秋はきにけり

是又女の哥也。大かたの床も露けきに。嵐吹そふ秋もきにけりと云る。あはれふかし。此嵐吹そふは。頭中將の北方の忍びておどしいはせたりし事のはげしさを。とに出ては

いはずして。嵐ふきそふと思ひわびいへるさまかなしくや。

吉祥天女を思ひかけんとすればほうけづきくすしからんこそ又わびしかりぬべけれとてみなわらひぬ

是は世中の女のいづれも心にかなふやうなければ。吉祥天女こそかぎりなく侍らめとおもへば。また佛法めきてくすみたる方なれば。それも心にかなふまじきよしをいへる也。

また文章の生に侍し時かしこき女のためしをなんみ給へし

是は藤式部が物語也。是より下の詞あらはなり。

おや聞付て盃もて出てわが二の道うたふをきけとなん聞えごち侍しかどおさ〱打とけてもまからず

二道とは。文集に。富家女易嫁。々早輕其夫。貧家女難嫁。々晩孝於姑。此心は我女は貧家なれど。御ためにはせちに孝あらんと云儀也。

をのこしもしさいなき物は侍り

をのこ程よきものは侍らずの心也。

月ごろふびやうをもきにより

腹病など云事にや。

こくねつのさうやくをふくして

草藥はひると云物也。夏の暑氣などに用る物にや。

さゝかにのふるまひしるき夕昏にひるま過せと云があやなき

心は。此香のうせん時。立より給へと云へるをとがめて。くべきよひともまたずして。此香うせて後と云るは。もしあらぬかこつけにやと云也。

逢ことの夜をし隔ぬ中ならばひるまも何かまばゆからまし
　心あらはなり。

五月のせちにいそぎまいるあした何のあやめも思ひしづめられぬにえならぬねを引懸て九日のえんにまづかたき詩の心をおもひめぐらしいとまなきおりに菊の露をかてちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせ

　五月節には。天皇あやめのかづらをかけ。武徳殿に行幸在。內弁外弁節會のごとし。宮內省献菖蒲。內侍女藏人續命縷を群臣に給ふ。三献おはりて。六府騎射の事あり。何のあやめも思ひわかれぬにとは。かゝる折ふし。大やけごとにこゝろ思ひしづめぬ儀也。えならぬねをひきかけとは。えんならぬねと云心也。五日にはえんなる事なれど。かゝるいそがはしきおりには。えんならぬ心成べし。

九日のえんにまづかたき詩の心を思ひめぐらすとは。重陽宴には。天皇南殿に出御ありて。內弁外弁等あり。文人博士等をめして題を奉らしめて。をの〳〵韵の字をさぐりて。詩を作て講ずる事有。如此の折節に。菊の露などをかけて。人に哥よみかゝる事也。

さならでもをのづからげに後に思へばおかしくもあはれにもあるべき事の

　哥などよみかけなどする事は。後の哀にもなることとなるを。おりふしのつきなき時。よみかくるあしきと云也。皆これ男女のをしへにいへる也。

よろづの事になどかはさてもと覺ゆる折から時〳〵おもひわかぬばかりの心にてはよしばみなさけたゝざらんなんめやすかるべきまへはすさまじく似あはぬおりなどをきらひいへり。こゝは又一切そのおりかのおり。

ひとへに心もなく思ひわかぬいやしき心ばかりにてはなどかはあらん。よしばみなさけたゝん事が。めやすかるべきといへる也。

これ又人のをしへ成べし。

からうじてけふは日のけしきもなをれり

これは雨夜の物がたりの翌日也。からうじてとは。長雨のはるゝに。俗にやう／＼して晴たるなど云同事也。

こよひは中神内よりはふたがりて侍りけりときこゆ

左のおとゞの御所の事也。二條院も同じすぢにてといへる。大内よりはたつみの方に此御所有けるか。花鳥に二條院をば二條東洞院たるべきよし見えたり。中神は天一神を云といへり。

あるじもさかなもとむとこよろぎのいそぎありく

風俗の玉だれの哥に。あるじもさかなもとめにこゆるぎの磯にわかめかりあげになどあり。これは中川のやどの事也。あるじは紀伊守也。

おぼす事のみ心にかゝり給へれば先むねつぶれてかやうのつゐでにも人のいひもらさんを聞つけたらん時と覚え給ふ

同じやどにて。源氏の君のたちぎゝし給ふ時。わが御上をいふを聞給ふ時の事也。おぼす事とは藤壺の宮に密通の事也。

式部卿の宮の姫君にあさがほ奉り給ひし哥などをすこしほうゆがめてかたる

式部卿宮は源氏の君の御伯父也。姫君は槿の齋院の事也。ほうゆがめては方曲也。すぐにもかたらぬ也。

戸張帳もいかにぞはさる方の心もなくてはめざましきあるじならんとの給へば何よけんと

もえうけ給はらずとかしこまりてさぶらふ
これは我家と云さいばらの哥に。わが家は戸張帳をもかけたるを。大君きませ。むこにせん。そのみさかなに何よけん。あはびさだをかなどゝ云詞也。今源氏の君の給ふ心は。こよひたれにても御そひぶしにまいらせよと云心にて。大君きませむこにせんと云哥のはしをの給へる也。紀伊守が何よけんともえうけたまはらずと云は。さるべき女などは有べきとも覺えぬの心也。
けはひあてはかにて十二三ばかりなるもありいづれがいづれなど問給ふに是は故右衛門督の末の子にていとかなしくし侍りけるをおさなき程におくれ侍りてあねなる人のよすがにかくて侍るなり
十二三ばかりなどいふ事は。うつせみのおとゝ小君也。父は中納言にて。右衛門督かけたる人也。
此あね君やまうとの後のおやさなんと申
このあね君とは。こ君があねと云儀也。まうとゝは。しやうくわんしての給へる事也。後のおやは繼母なり。
中將の君はいづくにか
つかはれ人の名也。空蟬が尋ねて云詞也。中將めしつればなん人しれぬ思ひのしるしある心地してとの給ふを
源氏の君たち聞給へば。空蟬が中將はいづくにぞと。女房をよぶをきゝ給ひて。わが御身の官中將にておはしませば。われをよびつるやうにとりなしての給へる也。
かやうなるきはゝきはとこそ侍るなれとて
心はぬしある物にはかゝるたはぶれせぬならひのよしを申也。源氏の君聞給ひて。そのことわりをもしらぬよしにおぼめき給ふ

也。

いとかうかりなるうきねの程を思侍るにたぐひなくおもひまどはるゝ也

かりなるうきねの程とは。空蟬は公卿の子にて。伊與の介がめとなる事は。はかなき契なれば。それをかくうきねとは心の内に思ふ也。ねはぬる心也。

鳥もしば／＼なけば心あはたゞしくてつれなきを恨もはてぬしのゝめにとりあへぬまで驚すらん

取あへぬ迄は。鳥をそへていへる也。つれなきを恨もはてぬとは。こよひの契を實なきよしに。中將にきかせんとて。かくよめる也。うつせみの返しとりかさねても。鳥をよそへたり。

ひきたてゝ別給程心ぼそく隔つる關のと見えたり

あふ坂の名をば頼みてこしかどもへだつる關のつらくも有かな。實なきよしのかこつけに。よく叶へる引哥也。

月は有明にて光おさまる物から影さやかにみえて中／＼おかしき明ぼの也

月の光おさまるとは。やう／＼明方ちかうなれば。月の光のほのかに成行ど。猶かげさやかに見えたるおりふし成べし。中／＼おかしきとは。夜半の月などより。影うすき曉月のおもしろき心也。源氏の君のたちわかれ給ふおりふし也。此下の詞へ付て。よく心をつけて見侍べきもの也。

あこはしらじなその伊與のおきなよりはさきに見し人ぞされどたのもしげなくくびほそしとてふつゝかなるうしろみまうけてかくあなずり給なめり

あことは我子と云心也。小君をかく源氏の

君のの給へる也。伊與のおきなよりさきに見し人ぞとは。空蟬伊與の介が妻にならぬさきに。わがあひ給ひし人ぞと。さもなきことを小君にの給也。くびほそしとはひわつなる事也。ふつゝかとは。下すしくふとりなどしたるさま也。われをばひわつに物けなしとて。ふつゝかなるうしろみの伊與の介になれて。われをあなづりぬると。小君にかなしくおもはせんとて。の給へるなるべし。

元文二丁巳年仲夏　七十三叟白里書

〔宮内省本奥書云〕

文明十七のとし文月のはじめつかた。兒女子のために注し侍り。さだめてひが事おほく侍らむかし。

宗　祇在判

〔右雨夜談抄以宮内省圖書寮本校合〕

續群書類從卷第五百二十

物語部二十

布勢屋乃塵

後水尾院御作

一桐壺のみかど。いかなるゆへにかゝる御名をさだむるといふと。世々の先達も覺悟おぼろげにして。その心わきがたかりしを。通村このことにあきらけくさとときおのこなれば。よくこそおしへけるなり。桐壺はもとよりしげいさにして。五舍の一舍なるを。その名をかりて。實は桐葉のおしへよりもとづけり。周公旦成王のたすけとして。世をまつりごちけることなどを故實にして。源氏一生のしよい。多くは周公旦になずらふこと多し。さればその名は幽玄より出て侍れば。かくいふなるべし。みかどをかく名づくることも。其緣をかりてなるべし。更に桐つぼの帝を周公旦に比するにはあらざるべし。

一藏人所の鷹すゆると。むかしは主鷹司侍りて。わきてつかさとれるを。仁明天皇の御宇よりぞ。藏人のあづかりとなりて。鷹飼の長六位の藏人つとめける。されどもなべての親王二世三世の源氏元服には。鷹屋の院よりすぐに給りて侍るを。いかにぞや源氏の

君にたまはるといへるとぞ。二條爲忠爲兼などもいぶかりおもひ侍りけるにや。三條實隆が抄には。おぼろげならず。これを引用ひたり。されども物語のならひはさにはあ(らイ)らず。四辻の宮の源氏提(拾イ)要抄を家にもちひ傳へしには。ことさら比例に越たるを物語のならひとすることなれば。東宮の元服にかはらず用ひられしを。此草紙の本意に書たる事必定せりといへり。

一はゝ木々の卷に侍るかたのゝ少將の事。在中將にひするを。さあるまじきといへる事。物語の本意しらざるものゝ所意なり。紫明抄にすでにかたのゝ中將と同じことゝいひ。又はかたのゝ少將の草紙にも。中將のまうのぼりてさすらふといへるも。少將にてつかふまつれるを。もとのつかさとして侍るといへり。又右近が父をいへども。是は同名異人成事分明之。

一ひたやごもりの事。說あまた侍り。また催馬樂などにも心得たがへること多し。寛文三年卯月の比。故鄕の卯花といへるうたさぐりてよみ侍るに。ふるさとのひたやごもりにむかひみんまどの外面の雪の卯の花。かくよみけるに。飛鳥井雅章。烏丸資慶まいりて。をの〱申けるは。ひたやごもりのこと。いづれの字義にてかと心得ず申せしに。物語の上心得ず侍ることゝ。あざみ(嘲イ)たはぶれてありけるが。直隱。秘居など水紋紫明抄などにも文字をあらはし侍れども。此字義分明ならず。直休籠にてこそ侍れ。上日のものゝ休番してわたくしに侍るを申侍る。さてこそ物語の心にもかなひぬるといへば。兩卿かしこまり申て。よろこびてまかでぬ。

一揚名介のこと。いかなるとに傳授とする事。

先輩さだかに申侍らずありけるを。通村にかたらひあひてなんよくさとしきはめたり。もとより揚名は孝經の言葉にして。介にかぎらず。なべて四分三分の官に揚名の官あり。攝政。關白。大臣。納言もまた揚名あり。其所職をしらず。そのとにあづからぬを揚名といふこと。さして秘するにあらず。この物がたりの揚名の介なるものゝ留守なりといふを。秘して申さぬことにや。又はしらずしていはざるにや。揚名介ならば權の介なるべし。其國に下らずして。權は在京する公達殿上のおのこなどの其國の守介を兼帶し。あるは三宮幷院の一分召にあづかることなれば。國に下るわけにあらざるべし。それを傳授とするなり。しかれば此權の介。いづれの國とはしり侍らねども。正の介さはることとありて。かはりて權の介が下りたるを秘事となすばかり成ことなるべし。揚名の名を傳授とするにはあるべからず。かへす〳〵此事あさきよりふかきに入事のならひ。なべてかくのごとくなるべし。

一きりかけだつ物の事。寔のきりかけにはあらず。まめだつなどのたぐひにてしるべし。きりかけといふものに似たるさまなればいへるなり。ごぼ〳〵となる神といひ。ふくろふはこれにやどかき柴といふものなどいへる。文法同じさまなり。たゞふとの身ならぬは。下品のわけさだかにしるべきたよりもあらざるべし。きりかけは稻垣とかきて。大嘗會の時か。あるは兩宮の齋王おらるゝ時のいもゐの屋などしつらひかこふものにして。そのとしのわらをあみて。中にいくつらも竹をかこひはさみてをく。まことにきりかけたるわらのやうにみゆればいへる也。

それに似かよふ故に。きりかけだつとはいへる也。今もあやしき民の屋に。かべといふものをかこふたよりなきは。わらにてかこふたぐひなるべし。

一とのゐものゝふくろは。よるのきものゝとをいふといへるはとをこのめる也。ことばのつゞき。ものがたりにたよりていへる成べし。寔にはさには侍らず。とのゐとは宿直とかけり。漢語抄にも晝勤ヲ曰直。夜恪ヲ曰宿。合せて謂止乃伊云々。しかれば晝夜の朝服を入るものをいへるなり。夜の服にはかぎるべからずとかたりける〔こゝ脱歟〕。照門まいりて。これをうれしくかし事にてならひぬ。

一みつがひとつの事。子のこのもちゐ同じ事也。三盃一具のことは大に附會の説也。三光院かたよりの傳來にも。かくは侍らずとなん。通村存る所もしかなり。畢竟紫のうゐ事のある夜のつとめてのことぶきながら。又あからさまにもいひちらすべきならねば。これみつがひとつ心のはからひにて。とかくによくしつらひてまいらせよとのことなるべし。子のこは亥のこのつとめてのこと。たゞうちまかせてねのことといへるなり。これみつをみつとかけるも。みそかごとなれば。うちつけならずいはれし言葉なり。大夫の監をたゞ監とばかりいへるたぐひなり。かやうの言葉づかひあまた侍るなり。此とかたく物語のうちの大事とおぼえ侍るなり。

延享元甲子年臘十二夜寫之畢。

水竹居主介依、

〔右源氏物語伏屋塵得一本校合〕

源氏物語竟宴記

〔右源氏物語竟宴記正編卷第三百十九所收也故從省略〕

續群書類從卷第五百廿一

物語部廿一

さごろも下紐

此下紐といふさごろもの抄は。ながらの橋のあたりより。万の物がたりをあつめ給へる中にも。筆のあやまりをうつしけるまゝ。ことはりたしかならざる所々をしるすべしと有しかば。古本をみるに。心もことばもわきまへがたくて過行に。かもの神がきちかきふげんだうの僧衆にちからを合て造營の次に。ねはん經の箱の底に。下紐と外題にある双紙を見るに。明神のあたへ給へると懷中してかへりけり。抑光源氏の物語の心見とけなば。此抄に及べからず。一條禪閤。宗祇などもてあそび給はぬにより。こうしやくなどたえたるべし。系圖は逍遙院殿あそばしけり。つれ〴〵のまぎらはしに御覽あらん人々。猶あやまりをあらためらるべし。天正十八年初冬に書寫の功をはんぬ。沙彌半醒。

狹衣系圖

醍醐天皇　六十

朱雀院　六十一

村上　六十二

冷泉院　六十三
圓融院　六十四
花山院　六十五
一條院　六十六
三條院　六十七
後一條院　六十八
後朱雀院　六十九
後冷泉院　七十
小一條院　無御即位

一條院長德之比。源氏物語作之。寛弘。長德。長保。寛弘。

顯光。兼任右大將。時右大臣。

堀河殿。此物語にみれば。圓融院の二の御子成べし。

師輔。右大臣。九條殿。坊城殿。

伊尹。謙德公。一條攝政。

兼通。太政大臣。忠義公。堀河殿。

今上。狹衣大將也。

父堤中納言越前守。爲時。

紫式部。源氏物語作者。左衛門權佐宣孝に嫁。大貳三位生。狹衣作者。

一此物語は源氏物語の面かげ也。夕霧の大將冷泉院殿などににたり。又花山法皇。或はうたのみかどいまだ王侍從と申奉りし時。かりし給ひけるに。かもの明神げんじ給ひて。臨時の祭をし給ふべきよし申させ給に。我はさやうのこともしり侍らずと申させ給へば。やう有て申成とてあがらせ給ひけるが。いく程なくして。覺しもよらず御位につき給ひければ。寛平元年十一月より臨時祭あり。

一時代はたしかならず。一條院寛弘の比源氏物語作れり。四十年ばかり後歟。げんじ物語心得たらん人は注釋に不及也。

一少年の春　此發言踏花同惜少年春にてかけり。少年とは若年の心也。是は花を踏といふ心成べし。

一中將の藤は　夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にのみとも思ひけるかな。ことば斗也。

一ゐてのわたり
春の池やゐての川せに通ふらん岸の山吹底もにほへり。げんじてふの巻の面かげ也。

一侍童　同前。

一源氏宮狭衣のいとこ。　堀河大臣の上は先帝円融院のいもうと也。齋宮にておはしましけり。おりゐの後。大臣のえ給へり。さごろもの御母也。中納言中將は源氏宮の宮女也。

一そひふさせ　二人の宮女へ也。

一春宮　後一條院也。

一藤のしなひ　級字也。かたくだりとよめり。級照や片岡の心也。

一花こそはなの　万葉のうた有べし。此詞にて定家卿。
匂ふより春は暮ゆく山吹の花こそ花の中につらけれ

一くちなしにしも
山吹の花色ごろもぬしや誰とへどこたへずくちなしにして

一さるは　中納言こたふ也。

一いかにせんの哥　大將の御心を山吹にたとへ給ひて獨吟也。

一たつをだ巻
谷ふかみたつをだまきは我なれやおもふ心のくちてやみぬる。此哥第三卷にあり。知人のなきと云心也。

一もやの柱により心くるしきやまて。双子の地成べし。

一むろのやしま　引哥未勘。心はかくれな

し。
いかてかはおもひありともしらすべきむろのやしまのけぶりならでは。詞花。實方の哥也。後に加筆。
一さるはそのけぶり　思ひをあらはさんも及なきにあらで。二ばより姉妹兄弟のごとくにしてと云心也。當時は夫婦を妹背と云へり。
一大殿母宮なども　可然覺しめさじと也。
一今はじめ　是より双子の地也。けれまで成べし。
一故院の御ゆいごん　此へんはやうは中すみの侍從などいふ異本在之。
一故先帝のいもうと　さごろもの御母也。
一洞院　太政大臣。後一條院御祖父。
一坊門　先帝御子。式部卿宮の御むすめ也。
一今上　さがの院。一宮春宮也。坊門の上の御孫也。
一かゝる御中にも　堀河殿の齋宮のおりゐの比。おやめさてえ給へる御腹に。さ衣の生給へる事を書出せり。男君さへからさ衣の事也。
一二位中將　さ衣の當官也。天道を覺し召て。納言にゝなし給はぬと也。
一第十六　三千塵點劫の昔。大通智勝佛と申佛まし／＼ける。此佛未王位の時御子十六人あり。成道の後佛所へ詣て御弟子と成給ぬ。入滅の後十六人𦬇たち。衆生をりやくして。十方にして佛に成給けり。第十六番めの御子。則この娑婆せかいにして成道をとなへ給へり。則今日の釋迦如來也。
一おほふばかりの
大空におほふばかりの袖も哉春ちる花を風に任せじ

一此世をばかり初に覺し召て。御道心あるゆへ。世に有とある人をば覺し召かけぬと也。さる程に世上人もの冷じく思ふと双子にかけり。

一かごと　そとばかり也。

一秋の夜の千世を一夜になせりとも詞のこりて鳥や鳴なん。ことば斗也。

一しほみてば入ぬる磯の草なれやみらくすくなくこふらくのおほき

一いなぶち
年をふる涙かいかにあふ事は猶いなぶちの瀧まされとや
大和の名所也。さ衣のあやにくに心を盡し給ふと也。

一野をなつかしみ
春の野に菫つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一よねにける

一梵網經
花嚴經の結經也。一見於女人。能失眼功徳
花嚴經文也。又尋し。上卷に在之。

一さだには
如經文はいかでと也。

一琴は　時ならぬ霜雪降也。相傳あらでは罰が當る也。

一あめわかみこ　降臨。日本紀下卷第一に在之。天稚彥。

一源氏宮　先帝圓融院。内親王。御母中納言佐。さ衣と御いとこ也。さ衣の御母宮。元齋宮。の御めい也。

一中將とおなじごとくにはぐゝみ給へる也。

一いたゞの
万葉。をばたゞのいたゞのはしのこぼれなばけだよりゆかんこふなわぎもこ。源氏の宮の事にはあらず。萬にたるも有かと。かいまみめさるゝ也。

一音なし

戀わびてひとりふせやによもすがら落る涙（州兒）
や音無の瀧
をとなしの川とぞついに流出るいはて物思（清原元輔哥）
ふ人のなみだは。此哥叶へり。又いかにして
いかによからんをの山のうへよりおつるを
となしの瀧。是城州。
一忍ぶもぢずり　たゞみだれたる心にても
なし。忍ぶ心成べし。
一大おとゞ　太政大臣の御むすめ。今姫君
やしなひ給て。後一條院へまいらせんとし
給へり。東洞院上堀川のおとゞの北方。
一春宮は後一條院。内と申は一條院なり。
一中將内より出給ふみちに　菖蒲手にさげ
ぬ賤のおはなき也。
一十市の里　引哥未勘。八雲の抄に在之。只
遠くと云心也。十市に別に心なし。
一かほなども　あやめおほくもちて。我か
ほもみえぬと也。随身にとゞめられてかし
こまりたるも。いたくをひはらひそと御制
禁也。
一ならひにてさふらへば　随身こたへ申詞
也。
一こひの道をば　くるしきならひと。大將
御身をつみて仰らるゝ詞也。
一あふぎを笛　あふぎにてふく事。俗にす
る也。
かはぶえ。源氏にあり。口にてうそをふくを
云也。
一はじとみ　半蔀。源氏夕がほの巻に似た
り。
一あれが　女房ども随身がみにてだにと。
大將御車の過るをあかずしたふ心也。
一軒のあやめを引落て　をくれたる随身に
追付て奉る也。

一しらぬまの　白沼歟。しらざる間とかけたるか。白沼未勘。しらなみなどの心か。哥はかくれなし。
一心とき　利根なる随身すゞりもとめ出たる也。
一たゝんがみ　源氏にも此詞有。かたかな。源氏になし。草のもじ也。俗にやまとがなと云々。
一みもわかての哥　軒のあやめもみえぬばかり葺しゆへと也。
一うちつけけそうなどはわざと御心にいらずたゞ有まじき　あやにくに源氏宮入道の宮などに御心とゞめ給へり。
一色はだへ　かみのはだへよきと也。めづらしき詞也。
一御哥ども　さうしの作者の卑下也。
一左大將の女御　後一條院當春宮也。さ衣にしのびてあひ給へり。げふはあやめと哥にあそばしけり。
一こひわたる哥　五日にはねさへと根をかねて也。
一一條院の姫宮　三巻にさ衣へ參給へり。四巻にうせ給へり。
一ほのか成しかば　よくもみさだめ給はぬと也。少將のかたへの文の中に。源氏若紫への御文。少納言への御文の中にとある面影也。
一思ひつゝ哥　ことなる事なし。
一おなじ　筆者もらしつと也。
一丁子にくろむまでぞそぎたる　事そぎたる心成べし。
一をとはの山にはなど　引哥あるべし。
一うきにのみしづむ哥　しづむ身は中〳〵音もなかれぬと也。うきは淤泥の心成べし。

一その夕さり　五日に御參內と覺召にめされたると也。宣耀殿への御心ざしに也。

一父公へ　けふはまだみえまいらせざりし也。

一中宮の御かたに　さ衣の御妹。御母式部卿御むすめ。坊門の上也。御わづらひこゝろもとなく覺召に。御ひきかぜとて參り給はず。又おとゞも御煩と也。みやう〳〵日御養生有て參らんとなり。暑比御退出あれと覺召せども。御暇出がたからんと也。

一何しに　暑比めさるゝがくるしきと。二所してつぶやき給ふ。

一さうかん　しらず。

一ふせんれう　浮線綾。

一うちには　節會などあらぬ雨中の御さびしさ成べし。

一大おとゞ　當宮權中納言。四巻に一の大納言一品宮を心にかけて。中納言君にかたらひて。ぬれ衣いひ出給し人。春宮の大夫也。

一左兵衞督中納言御弟。宰相中將左大將御子。宣耀殿御連枝也。

一源中將　さ衣也。

一こよひのえんには　合奏なくして。獨々との勅定也。

一中務宮　少將。　姫宮。弘徽殿にて大將たちきゝの夜。人々姫君の御前にて。天若御子のありさま。ゑにかき給へる人也。

一中にも　さ衣はたはぶれにも横笛はまねび給ぬまゝ。獨々は如何と也。

一こよひ　こよひはじめて吹給へと勅定也。

一いとかばかりの　如此勅定をそむかれん

とは覺召れぬ也。おとゞにもおとらず思召たるに。此ことさへ御同心なくば。曲事と仰らるゝ間。かしこまりて横笛とり給へる也。
一こと人々も　さ衣の四五番め程もなき才にて。ことなど中〳〵と仰られて。みなのかはりに。さ衣へことをも申されければ。笛をさへ心とはきにとの勅定也。
一かうとしらましかば　中將の心。笛など御所望ならば參るまじきとて。わざとうゐ〳〵しく吹給ふ也。
一うへは　おもしろきとおどろかせ給ふ。聞人々も殘多覺めせども。おとゞのをしへもたゞたはぶれとて。さのみ吹給はぬ也。
一いとうたて　虛言をあり〳〵しく申さるゝ也。おとゞの笛にまさりたるを。吹ぐるしく思はれば。仰られじとの勅定也。

一皇太后宮　さがの院。皇太后宮は先帝の御いもうと也。
一おとゞの　いま〳〵しく覺さんは中將の心。御袖は天子成べし。
一雲のはたて　幡手のごとくなびける雲也。
一いなづまの　雷電せんと思へば音樂空にきこゆる也。
一あざみ　俗にあざむといへり。源氏にもある詞也。
一いなづまの哥　狹衣の歌也。雲の梯わたりて。合奏あらんとの心成べし。
一いとゆふ　日かげにいとなどみだしたる躰也。
一我も　さ衣もさぞはれんと。心ぼそく思召也。
一かなしく　さ衣の此世をいとはしくは覺

しめせども。御門父母の御心を覺して。まいるまじきよしの詞を仰給ふ也。
一雲のこし　雲輿。可尋。
一あやうく　御門の御心也。此世にさ衣の心とゞめざらんとを覺召也。
一一宮は　齋院。
一此宮をば　女一宮也。御門母后も取分かなしび給也。天わか御子の下し夜の身の代にと。天子のさ衣へと覺召を。源じの宮に心そめ給ひて。うけひき給はて。弘徽殿のかいまみの夜〻奉て。さ衣忍びよりわか宮をうみ給。御母我身になさせ給ひて奏し給ふ。此御歎に御誕生の七日めに母后かくれ給を。うき事に覺して。御病にことつけて御ぐしおろし給也。
一后もこのみや　女二宮也。此宮をさ衣にまいらせられて。天上のほだしにと覺しめす也。
一大殿には　堀川殿にはさ衣の退出を待かね給へるに。いよの守來て。天わかみこの下給へる事を申をきかせ給へる也。
一ゐ給へらん　天上と申まゝ。跡をだにみんと覺召御心の中を。母宮おどろき給へる也。
一世はいかに
一ちくま川　引哥未勘。ほり川殿禁中への道すがらの御涙の事歟。
一へいのつら〳〵　此あたり異本在之。壁の類なるべし。
一中將　おとゞの御迎に。殿上の口まで出給へる也。
一ためらひて　涙に咽給へるを。すこし思慮有て。御前へ參給ひて。何事もいひからおとゞの詞也。本才の外。琴笛などはをしへ給

はぬと也。
一たはぶれにても　爰もとてにはむづかし。たはぶれにもまねばじと思ひしと也。
一いかに又　たゞ御一男と也。
一つらくなんおもふ給へらるゝ　異本ありいかゞ。
一中將　こと／＼しき御遊にくたびれ給へる成べし。
一みのしろも　天のは衣の代に女二宮を參らせんとの御哥也。
一さにやと　女二宮の御事と推量ながら。むさしのゝゆかり。源氏宮ならばと也。思ひくまなき心ちながらかしこまりて。
一紫の哥は　さ衣の心は。源氏宮ならばとの心を。何とも天子にはえ心得させ給はぬ心也。
武藏野のむかひの岡の草なればねをたづねてもあはんとぞ思ふ。小町。何も御ゆかり也。
一よういかたち　双紙の地也。
一二宮は　みかどの御心也。
一なく一こゑ
夏のよの臥かとすれば時鳥鳴一こゑに明る篠目
一母宮いかにかうじ　困。せめつめらるゝこゝろ也。くたびれたる心也。窮。同。源氏明石巻にあり。
一御てづから　御膳などとりまかなひ給へど。ふよう。不用也。用ひ給はぬ也。わが方へとあれと母宮とゞめ給へり。
一木幡の僧都　三井寺末寺。名は不知也。御堂關白殿御孫。
一家つかさ　家司。職事成べし。
一御いのりのさまいとこちたげに　ことごとしく覺召を聞て。さるまじきは。源氏宮ゆ

へ身をいかゞと。さ衣の歎給ふ也。
一うへのいみじき　女二宮は心につかず。源氏宮おさなき時よりなれ給へる面かげ忘れがたくて。御身の代はかたじけなくもなくて。たゞ源氏の宮ならばと也。
一色々に哥　是よりさ衣と號す。紫に御身の代はかさね給はじと也。
一ねぬに
夏のよをねぬに明ぬといひ置し人は物をや思はざりけん
一山ぎは　みねの雲也。うす雲の巻にあり。當時は山もとの心に用也。
一花たち花
今朝さなきいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなん
一夜もすがら　さ衣。時鳥のごとくに。鳴ねを聞知人のなきと也。

一身色如金山端嚴甚微妙　法花經序品。釋尊法花を說給はんとの瑞に。白毫相の光にて。東方八千世界を照し給へる時に。東方の國土佛の身相のいみじき事をいへる文也。
一あまりなる有樣かな　又都卒天のむかへにこそなどかうしもと。いま〳〵しく思召也。
一さ月の空
一水こひ鳥　極暑の比鳴鳥也。三笠山にあり。
一齋院　さがの院第一。源氏の宮の御いとこ也。
一在五中將　此日記見えず。伊勢物語なるべし。
女一宮と匂宮との事。源氏宇治ににたる所あり。
一我ばかり　室の八島の烟は昔よりたえず

立也。さ衣もとしへて源氏宮に忍びこがるゝと也。

一岩きり
吉野川岩きりとをし行水の音にはたてじ戀はしぬとも

一かよはぬさと　引哥未勘。

一君も　さ衣の御顏色かはらんと也。

一さるべき人々　眞實の御おやならぬ事を覺召也。

一たれも　めのとなども。さ衣の御心をしらぬよと也。

一ありてうき世　引哥未勘。

一うへも　御門のさ衣を同車にて退出の後參らずとぞ被仰也。

一げんじの宮を　春宮へ參らせぬと御門恨給ふと也。

一右大臣　當春宮へと也。系圖相違歟。

一何かは人の　右大臣殿のむすめにきしろはんもいとをしと。さ衣へ父おとゞの御談合也。

一ついのことぞかし　終に春宮へと覺召ながら。さ衣の胸ふたがる也。

一權中納言　太政大臣。一條院女院。東院上。左大臣。今は權中納言。春宮大夫兼官歟。御兄弟也。

一右のおとゞのひすらんむすめ　此御方源じの宮におとらんと也。

一みづからくゆる　なま孫王とあれば。王孫を今姫君自悔歟。

一はなたか　鼻高。さ衣かいまみに。前推量にたがはぬと覺召也。

一ほゝゑまれ　さ衣の顏色をおとゞ御らんじて。わかかりし時の事仰出さるゝ也。是より女の相論也。

一故院の　別事は御憐愍ながら。好色のかたはかたく御制禁なれど。かしこく身をぬすみ出てみし人有しを。三人のうへにをしけたれてやみしと。むかしがたり也。おとゞの今のうへ三人也。

一ひとりあるは　自然好色のかたへも。かろ〳〵しき事出來と也。

一かの御けしき　ふゑの祿。女二宮の事也。

一うち〳〵にも　女二の宮の御事。こなたより仰られよらんと也。

一あなむづかし　さ衣の心也。中〳〵なめげならんの心に。おとゞ御覧じて成べし。

一心にから　おとゞの心たちまちにこそ詞也。

一わづらはしくて　ひが〳〵しかるべきとのけしきをみて立給也。

一外ざまにの哥　げんじのみやをきて。よそへは心うつすまじと也。

一年をふる涙かいかにあふ事はなをいなぶちの瀧まされとや

一母宮　さ衣の參給へば。暑氣にややせ給へると。母宮の御詞也。

一殿のさばかり　母上のわかくすぐれ給へる也。

一夏やせは　さ衣の御詞。かたへすゞしき風にしたがひて。行衞なくならんもあしき事かはと也。

一わたし守　未勘。

一めづらしからん　母宮の女房衆なるべし。

一中務

東路の道のはてなるひたち帶かどばかりはあはんとぞ思ふ。そとばかりに恨をかけんと也。いかにぞや殘りゆかしきと。さごろも

の御詞にてみわたし給へる也。
一とのゝ　堀河殿の女二の宮へほのめかし給へとあれども。大宮（さ衣の御母先帝の御妹）はしたなく覺しめすと也。
一たゞさばかり　女二を身のしろにと有しを。めんぼくにてあらん。天子にもあはれとや覺しめさんと也。
一數ならぬ　すきぐしき事このまで。かげの小草のかずならぬをたづねいでばやと也。
一さらずば又いくよも有まじきとあるを。母上の御顏色もかはりて。たはぶれにもゆゝしき事なの給ふそと也。
一ものうく　女二を物うく覺しめさば。しいてまいらせ給はんや。まして母宮すゝまずばあるまじき事と也。
一一日三位　母宮御心にたがはゞ危也。去ながら一日坊門の上の御兄弟の申されけるは。笛のめでたきに。女二宮のさかりにおかしくましますを。行末のたのもし人にゆづらんと。天子の宣へるとかたられし也。忝聞過されんもいかゞと也。
一かくだに　如此あらばいかゞとて。さ衣の立給へる也。
一暮ぬれば　内へまいり給へるついでに。あやめの哥よめる所を尋給へば。みをさし隨身申也。長門守家にて。其むすめは中務宮の少將の御めのと也。大納言殿の五節まひしと二卷にある也。此物語は後の事をまづ書出筆法見分べき也。
一中宮　堀河殿の御むすめ。春宮の御母。坊門上がちに殿もおはします也。宮の。春宮の御事成べし。
一おほきおとゞ　洞院上中の第一と云也。

本柏は根本の心也。礒上ふるからをのゝもと柏もとの心は忘られなくに。同心なり。ほこりかにて。又わらゝかなるは和字也。源氏玉かづらを云也。

一かくさま〳〵　春宮などをもてあつかはるゝをうらやみ給へり。

一中將　さ衣は源氏宮のふしめに成給へる時の面かげ。てさぐりににたるもやと。忍びありきし給へど。にたるもなさになぐさめかね給へる也。わが心なぐさめかねつ更科やをば捨山にてる月を見ての心なるべし。

一春宮に　さ衣まいり給へば。入ぬる礒。しほみてば入ぬる礒の草なれやみらくすくなくこふらくのおほき

一みだり心ち　さ衣暑氣により參り給はぬ也。

一なにごゝち　春宮の御詞。物思ひならばへだてなく申されよと也。

一物思ひに侍らず。只やつれたると。かいなをみせ給へり。

一げんじの宮　春宮の御心成べし。

一なかすみ　古物語なるべし。未勘。大かた此物語にて可知。

一人のとふまで　忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまで

一さらぬ　中すみの物がたりに有べし。有がたき戀の山にはまよひ侍らじと也。いか斗戀の山ぢのふかければ入と入ぬる人まどふらん

一とすくなゝるけしきやしるかりけん。いてあるやうあらんとの給すも。御心ならひとて。

一わが心　かくれなし。

一誠ならぬ御連枝と也。源氏宮は御兄弟のやうにはあれどもと也。

一せんようてん　さ衣の忍ぶ事かひ有まじとて御退出也。

一二條大宮　仁和寺威儀師。うづまさに飛鳥井君の御參籠を。めのとかたらひて。ぬすみて行にあひ給へり。おくにてよくきこゆる也。丸がしら。法師也。圓頭と云也。さ衣の御車をみる也。

一わらはべ　供の童僧具を持たるべし。

一がや〳〵　源氏物語にあづま人などの物云聲也。

一しばしをしとゞめて　とゞめずして。車禮慮外ととがむる也。

一母上は　飛鳥井君を云。童のある故。尼公かみんと也。

一法師かほをかくして　威儀師にぐる也。

牛飼をとらへて尋に。佛のばちにてみ付らるゝと有のまゝ申也。たゞとく車やれと。威儀師君をぬすみえて。牛飼にいそげといふゆへ。み付られたると也。

一師にしたがへ　師匠にはしたがふと云法文を聞たる故。車を急ぎたると申也。いまよりはしたがはじと。をそれたる間ゆるせる也。

一君に　ありさまを申に。常に制するに。あらけなき事と仰らるゝ也。

一そのわらはに　童にとはんも。にげて行かたもしらず。こゝもとに法師かくれてゐて。つれにこんと云て。御繼松もまいらぬ間。くらけれど車まいれと也。

一ぬすまれたらんは　さ衣の御詞也。主の心にもあらぬ事ならばわびしからん。くらき道にまどはんを。法師本意のごとくにつ

れてゆかん。さなくばこよひかくてあらんはいかゞと覺召也。殿へ先こよひはつれてやかへらんと也。威儀師がけさかづきてにげたるすがたにて。道中手もやふれつらんと也。

一あすか井に（うたひ物也）。やどりはすべしかげもよしみもひもさむしみまくさもよし。やどりせよともいかゞ覺し召ながら。車へ乘うつり給へる也。

一いとなよ〳〵　飛鳥井の君の躰也。あないとをし。さ衣の御詞也。

一もろこしの吉野の山にこもるともをくれんと思ふ我ならなくに。うちすてゝ心うくにげたると有心也。

一ありつるかしらつき丸犬とこそみ分つれと也。

一なをほい　法師と心あはせられし事ならば。さ衣のかへり給はんとの給ふ御聲。さはかりはさ衣と覺えながら。又誰にかはとはづかしければ申さぬに。又すてゝおはせば。法師きてつれてゆかんと思ひて。ほの〳〵覺えたる所を申さんと思ひながら。わなゝかるゝけしき。さ衣の覺召たるより。たゞならぬ人のさまなればくるしく成給也。

一さらばかへらん　御心ならぬと聞まゝに。いとをしさになんと也。

一何かなき給ふ　心みに法師此邊に有べしとの給ふ也。

一おはしぬべき　さ衣のすてゝをきて歸り給はんが佗しきと也。

一ほり川といづくとかや　飛鳥井の詞。さていかにといふよりさ衣の御心也。こゝもと異本あり。さていかにと云けはひ。いとらうたげにおかしうみまさりしぬべき人にや

と。こよなく心とまりて。をくらんと思召つれど。心やすきさとの名なれば。車よりおり給はて。堀川へさ衣も入給へり。

一さていかゞとさ衣のとひ給へど。飛鳥井の君なくより外の事なければ。をしあてにさ衣の仰らるゝ也。

一いまゝて　宿の人の詞也。さて戸をあけたれば。蚊遣火の烟たるを。さ衣の御覧じての御歌也。

一わが心かねてや　思ひの空にみちたると也。行方しらぬは。姫君に御心とまると也。

一物おぼえ　飛鳥井の法師にみえじとて。こゝをいしへつると。さ衣をはづかしく思はるゝ成べし。

一大輔の君　むかへの車にそへたる人成べし。

一覺えなき　さ衣の詞也。

一うちもこそすれ　うちたゝくと云心也。

一あやしう　〃さ衣の御心中也。さるべき宿世かと也。

一いてや　法師に手なれつらんと覺しめす也。

一有つる　法師に思ひおとし給へるかと也。

一とまれとも　道のしるべうれしと思はれば。とまれとはの給ひなましとある詞の哥の心也。飛鳥井のうたひのみまくさもよしと申さん所にてもなしと。卑下なるべし。かりそめのやどりと也。

私ニのちに書加ル。ちぎりありて立とまるらんと前句に。それとみてうち過ぬべき飛鳥井に。定家句也。

一その水かげ　かげもよしの心ふくめり。

一飛鳥井の哥　かげみたくてやどらば。御秣がくれは法師がくれゐてとがめやせん

と也。
一車まつほど　人にみせてをき給へとの詞也。さて車よりおり給へる也。
一御車　二條よりをそくまいるほど也。
一家の人〳〵　あやしがるほどに。御車まいりたる成べし。
一物ぎたなく　法師に心清くなれずは。さ衣の宿執と思召也。
一かねていみじう　げんじ宮など成べし。
一このをんなは　例の系圖を今かけり。帥中納言の娘。今姫君のいとこ也。
一主斗頭　かぞへの頭がめにて有しが。德有事を思ひて。仁和寺法師にあづけけるに。法師おほけなき心付て也。
一車なども　威儀師かりけるたよりと也。今根元をあらはす也。
一有つる牛かひの　めのとのもとにきて。二條までの事かたりければ。さ衣を誰ならん。姫君いかになどいひけるほどに。さ衣はかよひ給し也。
一そのゝち　威儀師は無音也。めのと人やりけれど返事もせぬ也。思ひなげくとも。めのとの心成べし。
一この人　いぎしが事也。今はまかなひする人もなし。源氏宮内參るに人尋給に。まいり給へ。めのとはいづちへもまからんと申也。さ衣は誰にておはしますぞ。姫君はしり給はんと也。
一しらず　不慮の御身上と泣給へば。めのともさすがうちなきて。ある人一日御門をそゝあけたれば。檢非違使別當息少將とさ衣の名をかり給ひたる也。内大將外別當とて近代諸司代也。別當殿子をあなづるか。門役(傍イ)にをしてあけさせんと云也。さるほどに

まれ〳〵まいる女などもおぢて不參也。
一年老て　めのとの申也。我は年老ぬ。あづまへさそふ人にやつれてゆかん。此君を誰にかみゆづらんと也。
一うちなきて　姫君はいづくへ成共めのとの行かたへと也。
一まことにしる人も　奥州の將軍のめに成てくだるべし。君は別當殿の御子の少將殿かたらひ給へと也。
一さるは　是よりさ衣の御心成べし。姫君におとる人もみなれ給はず。此事のめでたしとは覺しめさねども。心にかゝらぬひまなく。物ぐるおしきまで覺しめすも宿執かと也。
一またるゝ　飛鳥井君にまたるゝよな〳〵なく紛て通給也。
一御ともの人　吉祥天女ならん　源氏品定に吉祥天女を第一にせり。さりながら法氣付くすみて如何と云々。ものげなきやどり成といへり。
一かくいふほどに　東へくだるべきに。君を殘してもいかゞ。又ぐし奉らんもいかゞと也。少將殿通ひ給へども。おぼつかなきと云躰也。何として世をすぐし給はんと泣なるべし。
一しばしの程だに　姫君の詞也。我身をうしなひて下給へと也。
一さらばいでたち給ふべきにこそ　又少將殿の心深きをみすて給べきもいかゞ。又あさましき人にぐして御下も有まじき事也。いづれもことはりと也。
一いまいくか　姫君の心也。
一たれとだに　さ衣の御名かくしゆへ。淺き契りとて。みちのくへ下事もほのめかさ

れぬまゝ。さ衣も名かくしなどをおぼつかなく思へると。深くこの世のみならぬ契をいひなぐさめ給也。しら波のよする渚に世をつくすあまの子なれば宿もさだめず。夕がほの巻におなじ。

一源氏宮ふるき跡　在五中將のふるきゑ御覽じほのめかし給へる好色也。侘ぬれば今はたおなじ難波なる身を盡してもあはんとぞおもふ。

一人めこそ　源氏宮在五中將の時のやうなるうき事をみゝにもきかじと覺しめす也。

一岩間の水　引哥未勘。つぶ〳〵と聞え給べき人間なき也。

一大宮　さ衣の母宮と恭うたせ給へる時分也。

一けんそう　顯證。あらはなると源氏抄弄花にあり。俗にもくさんのこゝろ也。

一千夜　宮の御かたちは。秋のよの千世を一よになせりともことば殘りて鳥や鳴なん。久しくといはんためなるべし。飛鳥井と覺し召くらべらるゝ也。

一さてまぎらはしに　さていづかたの御せんぞ。かちは又いかゞなどとひ給へど。恭のこたへはなくて。母うへのさ衣を見付給ひては。一切別の事は覺召ぬ也。源氏宮は御返答なし。母上もとかく聞え給はて。內よりさ衣をよべ度々尋給へるとの詞也。

一なをかの　侍從の內侍。二宮の人也。二宮へ御文など參らせ給はぬはひが〳〵しきと。むづりながら。母宮はさ衣のまゝと覺召也。

一その御いらへ　二宮の事は何とも仰られずして。殿の。堀川殿のれいならぬは。二宮への事に御勘當かと也。

一東院　太政大臣御むすめ。東院の御しつらひを何事

ぞと問給へば。いま姫君の事仰られて。それをむかへ給へる用と也。宮の少將といふににたるとの給へり。

- 一先帝
  - 式部卿宮
    - 後式部卿宮
      - 宰相中將
      - 姫君　藤つぼの后さ衣の御位の時一宮うみ給へり
      - 男子　式部卿の宮の御子めさるゝ也今姫君の一腹宮の中將に似たり母は宰相中將の子と名乘故系圖如此此母は常磐の尼公の妹也
    - 坊門上　堀川殿の北方に成て中宮うみ給へり
  - 源氏宮

系圖は式部卿宮の中將とあれども。堀川院の御子にてあらむと。さ衣の御詞也。

一忍ぶべき　御子などの有まじきとあるを。大宮いまく／＼しく覺召也。世の中をあだに覺召事はつねの事ながら也。

一かばかり　忍ぶべき人などゝあるさへ。大宮かく覺したるに。世をのがれんの心をなど覺しめして。涙ぐみ給へる也。

一こゑたてゝ哥　さ衣。心はあらは也。

一蟬鳴黄葉漢宮秋なり

一さばかりからは　双子にみる心也。あらきゑびすもさうしの地也。

一日の暮行
百種の花の紐とく秋の野に思ひたはれん人なとがめそ

一我だにもと　ねにたてられぬにと。もどかしく覺召也。こゑたてゝの哥の首尾なるべし。

一かの程なき　飛鳥井の小家を覺しめしいづるは。大かたならぬ覺えなるべし。

一おはして　やがてあすか井のやどへ也。

一こざらましかば　引哥未勘。

一ひるの　源氏の宮と思ひくらべ給へり。思事かなはずは源氏宮の事也。飛鳥井君世のほだしとやならんと覺しめす也。

一涙のもろきをいかゞ心得らんと。物なげかしげなるが。いよ〳〵哀に思召也。奥州へ下べき比なるゆへ成べし。

一久しう　物あはれなるを御覧じて。世をのがれんと覺召まゝ。例の人の心中ならぬをみ初てからみすてんと。さらに覺されぬと也。

一さらば　古今あかてこそ思はん中ははなれなめそをだに後の忘れ形見に

一逢には　思ふには忍ることぞまけにける逢にしかへばさもあらばあれ

一これはさ衣にてあらんと也。わが身に似あはずと也。

一かりのはかぜ　引哥未勘。

一花がつみ　かくみるだに不似合に。みちのくにへ下たらば。あさかの沼の水のたえなんと也。

一年ふとも　みちのくへ下事はしり給はず。淺と斗心得たり。

一かくいと　さ衣の御詞也。なをざり事はしらざりけり。句。心より外の不慮のさはり有とも。さ衣の御心はかはらじと也。いとかなしくは飛鳥井君の心中。かくなんとは。くだる事をほのめかさばやと思へども。人々しき事にもあらずと。思ひとるかたはつよき心ながら。淺ましき心と思ひ給はんと。せきやるかたなし。

一君は　たゞ名乘もし給はぬを。たのみが

たきと思ふかと覺召て。はし鷹のとかへる山の椎柴の羽かへはすとも君は忘れじ。とかへる。十字鳥と云々。未決。

一まことや　東院のうへ今姫君をむかへ給へり。はたちなれども。おほどき過給へる成べし。はなく\〵ともてなし給へるに。いかゞと双子のお也。又なき物にもてなしかしづかれ給へる。母にもめのとにもをくれ給へるに。まめやかに後見する人なきに。はればれしくてほれ〵\〵しきと也。

一うせにし　今姫君の母のなまじゐのゆかり。物みしりがほなる有けり。伯母の尼公。常盤の尼の妹。今姫君の母上也。

一ゆへ〵\〵しげにて母代にしたり　東院の上時々母代を御覧ずるに。御心につかねども。あまり人の心のこまかなるは見しり給はぬ也。心をやりてうへはかしづき給へる成べし。母代よくせずば何ごとぞしいださんと也。

一心にまかせ　作名親共を云て若女房達多也。殿上人などゝ參會有なるべし。

一君は　今姫君はあがこのごとくと也。しつらひ有さまなどを。母めのと世にあらばみせんと。心のうちに覺召也。よしなき母代などにまかせられてと打なげき給也。さりながら人のみるにはおほどきておはします也。

一九月なをしもの　縣召除目に未落居等之事かきなをす心也。末代斷絶也。源氏寄生にあり。

一よろこび申に　中納言參賀也。内又春宮へ也。先大殿へ見え給へるに。こといみもならず。ゆゝしく覺召也。

一おほき大臣殿への次に。今姫君の西の對へ

行給ふ也。
一かの后　中宮也。今姫君御連枝也。中宮の女房達もこなたへと人々申つると也。
一ひもどもの　木張の紐どものよらはれ。よられたるをとひきかくひき。とみかうみなどの詞也。
一いまやそゝきやむ　そよめくをとのやむかと也。
一やう／＼のどまる　しづまる也。
一からうじて　さ衣をみて。あな物ぐるはしや。此間の殿上人はさ衣に見合に土などの色と也。楊貴妃のたとへにある詞也。源氏に有宇治巻。
一此みすの　さ衣の詞なり。
一そこらいしく　いしくしと世話に云。ひしと又俗に云。ひし／＼と居たる心也。
一そゝや　先は不用也。君の給へ／＼とて。にぐるも有べし。
一物にくるふ君かな　丸はふようとて。そろ／＼ばしりにて逃に。きぬのすそをとらへたるに。たふれふしたる也。
一ぎふ／＼　俗にわらひ入ぬれば。喉かぎめくと云詞成べし。
一このみすの　あへず。不似合也。
一なをたゞ消入　絶入と云心成べし。
一こはいかに
おぼつかなうるまの島の人なれやわがことのはをしらずがほなる。琉球をうるまの島と云と也。
一たゞうらみ哥
一はゝと　母代と云心也。わう君。源氏物語に王命婦と云に同。
一たうしは君なし　たはぶれは君なし。はと云詞筆誤歟。

一いづくならん　これよりさ衣の心也。
一いてやさぶらふ人。句。人がらこそよき人はおかしきも。さ衣をさしての詞也。
一かばかりにては。句。わかき人たち。これにさし出ぬがよからんと也。
一さすがに　母代がみな〳〵をにくみわたしてさしよりて也。
一めづらしき　母代の詞也。覺したがへたるかとまで。めづらしきさまヽ思ひたがへたるかと成べし。
一よしの川の哥　いもせとは兄弟の事に用る也。さ衣と今姫宮御兄弟ながら。うと〳〵しき人たのめなる名とよめり。
一げにはヽと　母に成てよめる舌利と也。のどかはくは。老人口中うるほひなくて喉乾也。きこしめしたる母代と也。
一うらむるに哥　人だのめなると恨給へるに淺なると也。
一又ある本
しらせばやいもせの山の中におつるよし野の川のふかき心を。源氏物語にも本に侍るなどあり。其文躰がおぼつかなかりしに。うれしき御けはひと思ひ給へるに。ものをあしざまに母代の哥によめるとの給へば。母代うちわらひて。今より御見參をつとめ給へ。わかき人々おもひむせぶと也。
一犬もとき
一けふは　中納言參賀の次也。おまへにかくと聞えさせ給へと也。みすのまへにいかゞなれど。かくごん宮づかへのらうもなきゆへと也。
一あれをば　さ衣をみ給へといひつヽ。我も〳〵きぬをかづきて。一所にまろびあへるに。さ衣のどかにみ入給へる也。

一かうぞめ　今姫君のめしものゝ色也。

一ひるねしたりけるが　人々のさはぐにめをさまし給へる也。

一あふなく　奥もなき心也。とみにえそむき給はて。さ衣とみあはせ給へり。近所の女房衆よりはよきと也。

一かのせうと　今姫君一腹。式部卿宮の御子と名乗出し少將也。それによくにたり。おとゞにはにずと也。同やうに心も中將に似たるべし。

一又の日殿の御前にて　今姫君の事申出し給へり。

一うち〳〵の　おとゞの御心也。さ衣は御子ながらもはづかしく覺召成べし。

一几丁の　おかしかりしを念じ給へるさ衣の御氣色を。おとゞ御覽じてうちわらひて。おとゞ覺えもなきまゝ。姫君などのなきにもとり出ぬ物を。ありつかぬ有さまとうめき給へり。

一あさましと　ねおきのかほを御らんじ。たしかにおとゞの御むすめと名乘て。又さすらへんはいかゞと也。

一いざや　おとゞの詞成べし。

一まこと　飛鳥井の事也。此邊異本おほし。君をもまことにとゞむべくもなきに。人しれずから君の心也。みるめにはめのとのみるめ也。京にも獨ずみこそうしろめたからめ。おやめのと千人より。おとこのあるはたよりと申也。男のおはせぬ程こそなれば。いまはやくなし。用にたゝずと云也。

一いかに思ひ　めのと御門の鑰うしなひたるなどいひて。さ衣をいとひがほ也。御ともがらはさ衣の御供衆。もんをふみこぼちて入なまほしき折々有けりと。さ衣へ申上に。

めのと又威儀師にとらせんとするかと覺召て。女のさやうの事に思ひむすぼるゝかと心得給へり。
一いと心つきなくゆゝしけれど　女君のありさまのいてやさらばとて。異本。覺召すてらるべくもあらねば。
一人しれず　源氏の宮の事也。
一いまをのづから　さ衣と知ては　いとはじ。又かくしてをかるゝ所も有べしと覺すなるべし。
一女君にも　さ衣の御詞也。めのとがにくむ成べしと也。
一音なし
戀佗ぬねをだになかん聲たてゝいづく成らん音無の瀧。いざ給へ。わづらはしさのあれば忍ぶ故。おぼつかなく思はるゝも理と也。
一我は何事にて　さ衣の御詞也。あながちにもしられじと覺めさず。名をもかくし給はぬと也。いやしきにも契はかはらぬ心なるを。猶こなたをたのまるゝ心のなきと恨給へば。此別當の少將と思はせ給へる也。さ衣とをしはかる也。
一さそふ水
佗ぬれば身を萍の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思。又さそふ水あらましかばと。物あはれに思ひて。
一せいすべき人などあるは　少將殿にてはなしと也。
一かりそめに　東へくだるをやむべきにもあらず。又めでたき御ありさま成に。行かたとてもめやすからんもしらずと也。
一もりのうつせみ　引哥未勘。
一かくいふあひだに　懷妊成べし。東へ下の思ひとみるに。つけ帶あらはるゝまゝ。少

將殿へほのめかし給へとめのと申也。
一たのむべき　さ衣を眞實たのまばこそと君の詞也。
一みえぬ山ぢとは思ひながら　懷妊をほのめかさんとは思ひながら。かけてもまして云出給ふべきやうもなくて。下の日をかぞへて歎給へり。
一此殿の　さ衣のめのと。大貳北方。式部大輔道成。三卷に顯也。道季。さ衣の御身ちかく召つかひ給へる也。常陸守北方。
一めもなくて　獨住也。
一みづからは　君はきゝ入給はぬに。めのとはみゝに付たる也。
一たゞいまは　心はうづまさにての事也。かく事共。威儀師も相違也。公達とてもたよりならずと思へり。さて東へ下などおどして此頃申成べし。
一いひをこせ　めのとのあたりへ成べし。

いとおもふさまも。今さかりなどなるべし。
一寺　うづまさにて有まじき事とめのと云し也。
一ほそきんたち　やせ公達のかけめ。手かけ物と俗にいへり。
一おとゞ　殿の字をよめり。
一いてたち　料などよげにをくる也。
一つくしへの出たちはして　姫君には東への出立はとゞまりぬ。御懷妊にてあるといひなせり。
一うちはへ心ち　命も惜からざりしに。御懷妊の身ゆへ。少我ながらいたはしく成給へる也。
一野分だち　さ衣の忍び入給へり。かやうのからさ衣の御詞也。隙なくうちかさねても。へだつるよやあらんと也。
一あひみては　さ衣の御哥。かくれなし。わ

りなき心いられはならはざりしと也。

一へだつれば　飛鳥井君。心かくれなし。

一よしみ給へ　さ衣の詞。世中の命はしらずとの給を。さしもあらじと。こと〳〵しくもいはずして。心のうちに目のまへに同さまながら。たしかなる御名乘なし。又わが身の行ゑもたどらず。たゞわかびたる躰成べし。

一行衞なく哥　飛鳥井より夜ふかく歸り給ひて。又ねの夢中に女の腹をみせての哥也。哥の異本多也。行衞なく身こそ成なめ此世をば跡なき水を尋ても見よ。又。此世をばいつかみるべきうきしづみ跡なき水をたづねとふとも。水に入らんのずいむ也。

一殿の物忌の事仰らるゝに御夢覺たる也。物忌にはよそより物もとり入ず。又いだしもせぬ也。物忌。鬼の名也。源氏に在之。

一いまぞ　御懐妊を覺召合らるゝ也。

一あすか河哥　心かくれなし。さ衣の哥也。

一御ふみこまかなれば　返哥ばかり也。

一わたらなん　水まさらばあすのわたりもかはらんと也。

一かしこには　道成がつくしへのむかひの車也。たがふと云詞はいむと也。これを随分と思へり。

一女君　むかしは井堀所を忌か。空ごとをめのといふか。威儀師にくるまかるべき物をなどいへり。

一かくのみ　世中にたよりなき時は山林の栖求と也。かゝれば宮づかへ人なども男をもつと也。

一まこと〳〵　隣家に駿河守が女君情あると。みな虚言なり。

一さてこの　別當の少將殿とさ衣の名乘給

へる間。此めのとゝ古知音と云也。なんてう事かあらん。可然所と也。少將殿通ひ給ふとて。此比は無音と也。

一ありきも　うづまさにこもりて。如此成くだると覺召也。土用をいまずともと覺召也。

一あなまが〳〵し　あなおそろしやと云心成べし。懐妊ならぬ人さへ。土用はいむにと申なせり。

一かの少將殿と　さ衣を誠に少將殿とめのとは思ふ也。さ衣の仰らるゝ共。めのとが心に合ぬ也。去程にとかく仰られぬ也。

一かくまても　御誕生もあらば。さりとも思ひすて給はじと也。

一の給ひちぎる　異本有。このたのもし人めのと也。源氏宮へ宮仕にと有しかど。さ衣などへ見えん事はづかしさに。心こはくして出たゝざりし間。今は彌と覺召也。山なしと云本有。

一いひ〳〵

世中をかくいひ〳〵てはて〳〵は如何にやいかに成らんとすらん

一京のうち　京中は一夜斗にてはあらじ。井つゝなどいるゝ日かずへんと也。

一君このゝ給ひ　少將殿のめのとの所ならば。いくまじきと仰らるゝ也。

一ときは殿　帥中納言。尼公の兄也。

一久しう　土用いみ給まじきならば。御心まかせ也。めのとの申事ははか〳〵しからじと也。

一とかうおはし　御誕生まではいきて侍らば。あやしき女の身ながらも。よくみ奉らんと思ふ也。さらぬだに土用は忌に。かたも惡也。少將殿御産の事などあづかひ給ふべくもなきと也。

一おもへば異本あり。　女の苦具イとははか〳〵しからぬと也。

一かやうの君たちは　おやなどのうしろみおろそかなれば捨らるゝと也。

一戀こそ　未勘。

一かくほかへ　いきにくゝするも。少將殿ゆへとめのとは思ふ也。少將殿への名殘おじさにはあらず。うづまさごもりにこり給へると也。うづまさごもりゆへにこそかゝる幸もと又申也。

一かしこは　ときはゝ御忍所にもよし。又とゞむる下女にも。何がしそれがしへをしへよと申をくと也。

一さまで　女君の詞。げに行ゑから心也。昔物がたりなんど忌るゝならひ也。さして何の物がたりともなし。

一かはらじと哥　心かくれなし。とかへる山のとちぎり給し物を。いかにめのとのしなすぞと覺しめす躰也。

一心もしらぬ　式部大輔にそへて。西國へとさすがに思也。

一あかつきに　車來て門敲をとするが。駿河殿の女君はま心あるといひなす也。

一飛鳥川の哥　さ衣より夢中の朝をくり給へる哥の事也。さてけふの暮に御出あらばいかゞとの心中也。物うきにさ衣へ名殘あると心ながら覺しめすにも。めのとの物いふもはづかしき心ながらうごきかね給へり。

一久しう　送物などかへらんにと申也。

一御くるま　異本。

一あまのとを哥　さ衣のとひ給ふ時に。鳥のこたへよと也。

一なをたゞ　さ衣へ申たき事も有べし。

一めのと又一人　女の同車。
一門ひきいるゝ　道成が所成べし。やなぐゐは武官具也。
一行かたしらず　蚊遣火の御哥。二條にて初ての時也。
一そゞろかなる　すぐやかなる男也。道成也。
一大貳殿　攝津國鳥かひ也。
一中納言殿　さ衣の當官也。
一きそく　さ衣の御きしよく悪は。物忌故飛鳥井へ御出なき心成べし。
一かうめうの　高名の御馬拜領と申て。大貳殿御急あるほど。江口の逍遙なるまじきとをくり衆と申也。
一何ものならん　けびいしの行幸などに供奉する也。武官成べし。
一めのとは　ゑみわらひなどする也。おきあがり河へはしりいらんと覺召ながら。さもなさじと也。
一何がし　少將殿かげめにて。道行人ごとに行あひなど有し人に心をつくし給ひやはせん。あやしき身ながらも。又なくかしづき奉らんを句。とり所に思召せと也。殿のとはさ衣也。此威光に道成をばえあなづらはしなどゝ申也。
一少將とは　年來地下に成たれ共。又昇殿して藏人に成て。かの少將殿と見くらべさせん也。
一いまはいふかひなしおひらかにもてなして句。　しな〳〵しからぬやうにてもいまはかひなし。御心にあかぬことなきを取所に思て。やすらかにすぐさせ給へと也。
一またこそ　公達ならねども。女ににくまれぬと也。

一おとゞこそ　めのとをさして申詞也。
一女君　あきたく覺召を。めのとあらみさき。荒神といふ。中の障をなす神と云々。此神の女君をみはなたぬと也。
一おとゞだに　めのとをさして云也。かくまて心うき御心ならんとは思はざりしがと也。かくまて心うき事はっほいなくめのとも思はれぬかと。いとあやしく思躰也。
一かはご　皮子より餞の扇薫物などとり出てみする也。
一女のさうぞく　さ衣の誰やらんゐて行とおほせられて拜領也。女君の涙にぬれたるに。めしかへさせ給へと云也。
一此御扇　あたらしきよりはと申取たる。句。目はづかしき人もやとおしませ給ひたると也。馴たるはふりたる心也。
一これ御らんぜよ　萬人さ衣の御筆をば一字もみたがると也。
一まことに　我みし物にやと床しけれど。かほの見えんかと臥給へり。
一我君をこそ　さ衣をこそ道成戀しく思也。
一あをびれ　青侍などいふにおなじ。
一あだへて　ひそまぬ心也。源氏にあり。
一むづかりて　腹立て歸たる間にみれば。たゞ一夜さ衣の持給へるあふぎ也。
一まなかな　眞草字にて。

ゆらのとを渡る舟人かぢを絶行ゑもしらぬ戀の道哉

其折はたゞ何となく書給へるに。今能似たると也。
一かぢをたえ哥　身をしづまんと覺召心也。
一そへてける　扇の風に波の立歸に身をた

ぐへんと也。
一など思ひつゞけらるゝ　心も有かと。我ながら思はるゝと也。
一けさ御ふみあらん　御文の使をば何といひてか返しつらん。飛鳥川の哥の時は。かゝらんとは思はざりしと也。
一海までは思ひやは入し
一心得ぬ夢と有しいかなりし事ぞや　たゞならぬは懐妊の事成べし。又うち返し。殘命あらば聞及ばせ給ひても心うからんと也。
一などて　さしはなれたるあたりならて。彼家禮の道成にと思はるゝ心成べし。
一とをきつくしへ行つかぬさきに。身をうしなはんと也。
一おとこも　しばしびんなしと覺しめさんも理也。あまりとけがたさに。あやにく心も付也。いのちもあやしくみゆると也。

一思ひわびて　身の程を思ふに。似合ぬとは思はねど。れいならぬ心のいとゞまされば。御心とゆるし給へ。人のちかささへくるしきと也。
一げに消入給ふべきさまなれば　懐妊の間不食などはいかゞと思也。
一京には　さ衣の夢のあやしさに。御文つかはしたる也。
一つくしの　小貳といふ人の買得と申也。小貳豐後と云異本。
一それや　小貳殿の行衛はしられんかと也。
一となりの　隣家にもしらざるよしをさ衣へ申上也。
一いかにもめのとが　めのとがはからひ也。みづからの心にゆきかくるべくもみえざりし心也。いみじくともわが心とさやう

にはあらじ。異本多。今までさ衣のゆだんと也。

一あすの淵せ　あすか川の哥成べし。

一下草　源氏のみやの下草也。

一しきたへの哥　かくれなし。さ衣也。

一かの夢　懐妊の事也。誕生ありて。いかやうなる所にて。おひ出たらんと覺し召也。なれがほはわが御子をわがものにして成べし。

一かゞみのかげも　さ衣ににるべき也。

一なにしに　さ衣の御子ぶんにはなされじと。しゐて覺召なせども。御誕生ならばとむねふたがるべし。東などきこしめし。さらばふせやにおひ出たらんと覺召也。

一そのはらと　母のふせやに生出んとのさ衣の御哥。はゝ木々にはゝをもたせ。そのはらは腹の字を含めり。ふせやは御誕生ならばと也。

一つねより　双子に人のみたる心成べし。

一心のつまと　思ひのつまと心同。

一夕ぐれ　雲のありか定たるを御覽じける也。

一西の山は　秋のかた也。

一せく袖に　さ衣の涙にて梢をもそめたると也。

一夕暮の　心のつまの詞より成べし。

一此世の　双子にみるめ也。

一又是涼風暮雨天　かのときはの杜に秋またんと。女君の哥有し也。しづみはてんも哥の詞也。

一かの舟　からどまり也。今は彼名所に人もよらず。船もつかぬと也。

一此大夫　道成也。ころもの關は衣のへだて成べし。

一大貳のふねに　よき女のあるに大夫心をかくる也。

一よひ過るまで　大夫みえぬを。めのとは君の心こはさに。大貳の女房に心をかくると腹立也。

一とざまかうざまに　女君身を御心づからせため給ふと也。かゝるごと懐妊中は物思ひしづみ給はいむ習成べし。御存命ならば。思ふ人に又あひ給はんと申也。

一いてあな　めのと大方にしてをかずして。かくうきめをみすると覺召也。うちまかせてをかざると也。

一うちむづかりて　めのと腹立して在ける間也。

一むしあけのせとへ　からどまりにて成べし。備前名所歟。

一ながれてもあふせやあると。身をなげんと也。

一かみかひこし　肩よりこす躰成べし。

一ありしあふぎ　さ衣の大夫に御はなむけに下されし扇也。

一すゞりを舟のせがい　背涯也。

一はやきせの　さ衣へ風の傳にもしらせまいらせたきと也。源氏手習の君の入水の面かげなり。

下紐第二

一物思ひの　躬恒家集に。

草〳〵も吹はらひぬる木がらしにさきこそまされ物思ひの花

一尾花がもとの　和泉式部

野邊みればお花がもとの思ひ草かれ行冬に成ぞしにける

一たづぬべき　飛鳥井の君の行衛也。

一かのくだりし

大貳乳母
中納言内侍佐

┌式部大輔道成 肥前守が弟と二巻初に在之肥前守は系圖には無之
├道季
└常陸守北方

一つくしへゐて行ともいはず。道成に飛鳥井へ通ひ給ふともいはざる事を。今爰にてかきあらはせり。

一大貳道より文にそれがし　此段は大貳便宜に道成文言也。道成事大殿もきこしめしたるべし。

一道成　道季が申上也。うづまさにてみし人をゐて行と申せしと也。

一げにさもや　道成知ながらもゐて行しと覺召て。御氣色惡まゝ。不慥事を申たると後悔也。

一此事　道季が前にてとかくの給はざりし也。

一さ月の夜の　あめわかみこのくだりし事也。源氏宮の事かきいだしふとある也。

一母宮のたよりはなし　御腹からにはあると也。堀川殿の上と源氏宮の御母と御はらから也。坊門の上の御腹の大殿の御むすめの中宮參り給ひて時めき給へば。源氏の宮のあたりへむつび給はんもいかゞと也。このあたり心得がたし。

一御かりするかたのゝみのゝなら柴のなれはまさらで戀ぞまされる　なれぬと云心の引哥なるべし。

一笛の　女二宮をさ衣へあづけ給はんと也。

一かしこまり　此あたり異本あり。卯月ば

かりにとの勅言をかしこまり申ながら。かの御心の。さ衣のかひ〴〵しく思はずと。大殿の心也。

一まづいかにも　大殿の年來の御本意也。かく覺しとは天子の御勅言など忝なしと也。

一心にいらぬ　仰られずしてかなはずと覺しながら。御門の御こと成共。さ衣のいかにぞ思召ん事は。なま心やさしく打嘆かれ給ふと也。

一それよりまさりて　よのつねの御心ざしならぬ間。又えいなび給はじと。さ衣の御心也。何事にから詞也。

一さて大宮

先帝――式部卿宮――後式部卿宮

一堀川大臣殿上 式部卿宮御妹坊門上當春宮へ参給中宮の御母又さ衣の御母也源氏宮御をは也

一嵯峨院皇太后宮 女二宮御母

一そはたかきも　異本不用。たゞ御門の御心にある也。さらては后腹におはすれども。さしてあるまじき事にもなしと也。

一いまはじめて　大殿の平人に成たる斗にこそあれ。今初たることならず。女二宮の行末よからんと也。

一さしならべたらん　さ衣にならべてみぐるしからぬまゝ。女二宮をと御かどの覺召よれると也。

一うつくしと　大殿のけしきの哀なれば。女二宮へみえ奉らまほしけれどゝ也。我もはさ衣。人は源氏宮也。かの御心を見さだむるほどは。うきたるさまにてながらへんを。源氏宮へえ忍ばずしては如何と也。

一さばかりの　女二宮さまを見奉り初ては。身を捨るほどだしならんと也。

一はゝみや　女二の御はゝ后也。こうき殿にすみ給へり。
一宮の　后のうへゝまいり給へる成べし。
一中務宮
一少將 五月五日の御遊に笙笛吹し人前にも注之
姫君 こうきでんにて大將立聞にあめわか御子のさまゑにかき給へると云人也
一大將のかたちは　筆及ばぬとて破給へると也。かたち大將の具と也。
一此三宮と見給へり　さ衣の御めに。三宮にや。少おきあがりての詞也。
一宰相　中務宮の姫君のめのと。一巻にあやめの哥をさ衣へ奉し人。こよひ又あやめの哥もかたる也。
一大宮のおはし　うへにまいり給へる御留守にさへしこう申さずしておるゝ也。宮殿イ。女二宮の御めのと也。いざとく。俗夜さとく云々。
一ものいひ　女房衆御丁へ入せ給へと申せども。うたゝねにふし給へり。丁へ入給はぬ也。女二宮はことを引給へり。ことを枕にてふし給へるやうだいなど勝給へるを見奉りすてゝ。かへり給はんはくちおしきと也。
一みすのと　外也。
一かの御みゝ　女二宮の御みゝなるべし。
一しにかへり　中〳〵たのめずば命もかゝらんと也。身の代にと前言にて死にかへりつるが。又いのちもあやしきと也。
一きゝや　さ衣としろしめして。いとゞはづかしき。女二宮の御心也。
一そこらはぶき　省也。異本。
一かのよはの　身代衣を覚しかへさんやはと。たのもしき成べし。
一心のみだれ　苦。異本、苦のみだれて物を

こそ思へ。源氏物語にある哥。
一大宮の御心のつゝましさに。文にても申かねければ。人傳ならてと也。
一心のどかに　おほけなき心はづかはしと。さ衣の詞也。
一げにうとまし　さ衣の躰也。
一げにこれこそ　女二宮ほどにてうつくしきと也。
一むろの八島　源氏宮のかいなをとらへ給へると一巻にあり。それに思ひなずらへ給へる也。
一いかにしつるぞもし　若也。けしき也。只今のけしきをみて。天子へめされたらんはと也。
一いのち
ながゝらぬいのちまつまのほど斗うき事茂く思はずもがな

一又かうは　女二宮の御心を思ひとりながら也。後行末の分別もいかゞ成にけんと也。
一おもひくまなき　おもてむきならて。うへの御心にたがふべきとは覺しめしながら也。
一左近は　明がたのとのゐ申也。名謁。
一かつらぎの神　葛城一言主大神申行者云。自形醜。夜の間につくらんと云々。上下略。岩橋を人めはづかしければ。よる〳〵わたさんと也。絶間やはと心得べし。
一こちたき　こと〳〵しくば人のとがめんと也。
一くやしくも　よべ戸口のあきたるゆへ。あやまりし事くやしさと也。やすらひにてすぐさん物をと也。
一そのすなはち　面白詞也。むかしは如此の名目あるか。可勘。

一ふところ紙　色紙などいへど。をしなべてのにはあらぬ成べし。
一大將　さ衣へさへかろ〳〵しきと思へるに。こはいかなる人ぞと歎給へる也。しるべせし人あらんと也。
一ものにすこし　面白詞也。きはたけくすぐよかにおはします也。
一中宮　御連枝也。おまへは中宮の御前也。中宮御文かゝせ給へる折ふし也。おろしの筆。つかひならさせて。下々に遣筆と云心也。
一うへの　皇后宮。さ衣の御母。いまよりさばかり異本多也。うしろめたかるべき御心と。の給はするやうあめるをとて。うちわらはせ給句を。かばかりなるはかたきと中宮をみ給へり。
一ほゝゑみて大かたいまより　さ衣の詞也。

一ゆたの万いて我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふ比ぞ
一おぼろげならぬ　さ衣のうつくしさをみるめなるべし。心ぐるしは女二宮の御躰也。
一かきほに古山がつのかきほにはへる青つゞら人はくれどもことづてもなしあな戀し今もみてしか山がつの垣生にさける山となでしこ
一うたゝねを中〳〵　かくれなし。
一こきでん　女二宮也。
一とをき人　中納言は大貳のめのとのいもうと也。西國へ大貳の乳母はくだりし也。
一かすまん空の　引哥未勘。
一木のまろ殿　未勘。行はたが子ぞのにて叶歟。

一若無比丘　安樂行品。末世安樂行を佛のをしへ給へる文也。入里乞食。將一比丘。若無比丘。一心念佛。
一宮の　女二をさ衣の御覽じてはと也。
一外道の　佛の成道の時。女に現じて妨をなせる也。若は女人又盛なる老女と成たる也。
一ありつる　女二へ後朝の御文なるべし。
一鴫と云鳥の跡　水鳥の跡はみえぬ心なるか。猶可尋。
一それは中〳〵　女二へまいらせたりともかひあらじと也。
一あが君　女二御覽じたらばやぶり給へと也。
一まことに　さ衣の詞。女二をけちかくみせたまへとつねに申也。
一からうじて　一段めやすき御心とうれしけれど。はやく目ならしてはいかゞと也。
一おこがまし　御覽じたる物をと也。
一あふ坂を　行かへり忍びあひ給へ共。面むきはさなき事をよみ給へり。さ衣の哥也。
一男のたゝう紙　さ衣のよべのたゝんがみなるべし。
一御文とり出たらば　中納言中だちと人々も覺しめされんと也。
一よべまで　女二の何のけしきもなかりしかば。宮うへに參り給へるに。俄にいかなる御心ちぞと覺召て。御心ちいかにと歎き給ひて。いつも〳〵何事にてかは中納言事也。
一中納言すけ　女二の御枕もとへ參る也。
一あまもつりする
戀侘てねをのみなけば夜もすがら枕の下にあまも釣する
一たゞさなり　さてはさ衣に過し夜誰ぞあ

はせたるかと也。
一かごと
東路の道のはてなるひたち帯かごとばかりもあはんとぞ思ふ
一しのだのもり　未勘。
一御かへりより　けだいまては詞也。道心おこさんと。さ衣の仰らるゝ御心もうしろめたきと也。
一戀の道哥　あふ坂までたづね入給へるは。道心はいかゞと也。
一御こゑのいと　双子の地也。面白にて句を切べし。いかなることの有けるは。女二の御かたに。文の行衛もおぼつかなく覺しめす心成べし。なを中納言かたへもおほせられざると也。
一雲の
夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふうはの空なる人をこふとて
一一かたには　道心の御事成就しがたく成と也。源氏宮歟。
一此御ことは　源氏宮也ゆくりかに春宮にゐ給へらん事歟。いとゞものごりは草子にいへり。
一おもひよそへんは　上品。源氏宮など。又少中品を御覧じ盡し給ふまゝに思召出すと也。
一道芝の露　まへの哥也。
一あふ坂山
名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしられてくるよしもがな
一いかさまにして　女二の宮をのがれんとは。今は覺しめさぬ心也。
一たゞ有しやうにて　女二にあひ給ひし夢のごとくなる夢をたゞちに御らんずると

也。今眞實の夢也。
一人しれず
枕より跡より戀のせめくればせん方なみぞ
床中にをる
一うへのおまへ　天子の御事也。
一とびかふ　鳥類虫などは飛ちがふほどに
て子を生也。
一こはいかにすべき　こは子を含めり。古
哥の心成べし。
一ゑんだう　禁中行幸の時。道に敷莚也。
一わたらせ給ひて　女二へ大宮のわたらせ
給ふ也。
一いとかういみじき　女二は我御身の御懐
妊をしり給はぬ也。
一いてやいとけしからぬ（異本有。）　大貳のめのと
の妹。内侍のすけ申詞也。御心づかひぞと思
ひ侍れば。いと心うく侍也。たゞ御文などを
やちらしてまし。さ衣の御文など落しちら
さんと思ひ給ふるをと内侍申せば。我さへ
さ衣の御詞也。たが上もしらぬやう。我なら
ぬ人もあらんを。よの人はさあらじ。さ衣ひ
とりをにくまるゝとの御詞也。
一あやしかりし　しるしはふところがみな
るべし。
一そが　それがなるべし。
一なをざりの　かいまみはあながちにも覺
しめさで。ちかきほどにておとしたるかみ
也。
一岩にも　種しあれば岩にも松は生にけり
戀をし戀はあはざらめやは。此心なるべし。
一心得ぬ御心かな　内侍心也。さ衣の御心
を也。
一大宮の　御懐妊と出雲のめのとなど思案
したる也。

一なべての　月のさはり也。老ての子は大事也。
一ひつじのあゆみ　引に不及。
一吹はらふ　かくれなし。
一りんだうの　をりうかされ。浮紋也。
一たつたひめ　そめ色なり。
一おどろきながら　此ながらはつゝといふ心也。
一さきにとは　女二より先だち給はんと也。
一をのゝ
淺茅生のをのゝ篠原忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき
一みだれたるあふぎ　如何。
一人しれず　かくれなし。
一みゝくせ　俗言にみゝくせといふ。
一心から　ぬるゝも御心から也。いつも時雨のふる山なれどもと也。

一雲井までおひのぼるらん　人も尋ぬは。さ衣しらざるよしと也。
一つれなき　さ衣のつれなくしておはします也。天子の女二をまいらせんも。うけひき給はぬ也。
一この御事　女二の御たんじやうきゝ給はんと也。
一行末にみやたち　さ衣なれば宮たちにても似合たると也。殿上人などならば成べし。伊勢物語。源氏に此類からの古事引給へり。
一たがふ所なきにさて　不知躰にてさ衣のおはしますと也。
一御ゆかり　かほつき。此御年比如此さ衣のおはしまさんと也。
一いてや　中納言がしわざと思ひて。めのとわざとさ衣には不似と云也。わうげめきたるといひなす也。

一ながれての　引哥に不及。

一げにみはて　御誕生をみんと覺召たる念にて。いまゝて御存命と也。

一姫宮さへ　御門の御心中。今一度御門へ見え奉らんと覺召なぐさめとて。人々などまいらせらるゝ也。

一などいまゝて　さ衣の御詞也。御懐妊と聞召事はやくば。かくのごとくせまじき物をと也。

一げに身のほどしらぬ　おほけなくちかづきまいらせたるが。つみに成と也。

一ことの外にも　さ衣をいとひ給はぬと聞たらばと也。

一まいて内など　おもてむきゆるしなきに。ちかづきたるをなめげに覺しめさんと忍びたる也。そのほどゝ時々きこゆるに。中納言したがひたらば。みしる事あらん物をと也。

一をのれつら〳〵　引哥未勘。

一おなじさま　大宮とうちぐしてならばと也。

一はぢにしせぬ　俗言にいへり。君辱臣死。

一あまのかるてふ　我から大宮なく成給ひしに。心つきなさは世にしらずも。姫宮の御心成べし。心より外ならんけぶりは。さ衣へなびきがたく覺し召也。

一まぼろしならでは　眞實あはぬ事也。又夢にもと也。ことばつゞきかね侍るか。

一こよひのほどに　尼に成給はんことを奏して案内申せと也。

一かうながらは　さりともなり。

一きろ〳〵　御ぐしの尼かみのきらりとしたる心也。みにくゝなし奉りても。御いのちを時の間もかけとゞめ奉らんと也。

一あながちなる　源氏の宮故也。おもふ事

かなひなばも。源氏の宮の事なるべし。
一しはすの月　清少納言枕草子。源氏にも
ひけり。
一つらゆきがいもがり行ばイニ有。
一思ひかねいもがりゆけば冬のよの川かぜさ
むみ千鳥鳴也
一我ばかり　我ほどつがはぬ鴛も物思ひは
せじと。さ衣也。
一玉もかるあま　あま入道宮也。
一わた〳〵　俗にわた〳〵とふるまふとい
へり。
一かたしきの哥　さ衣。かくれなし。
一ふせこの少將　古物がたり成べし。
一あげまきやひろばかりやさがりてねたれど
もころびあひにけりかよりあひにけり　源氏宇治
在之。
一しらざりし　源氏わか紫の巻に。紫上の
あしわかの浦の面影也。あし原のたづを雲
井にきかんと也。天子の御子ぶんなれば也。
一雪山源氏。朝がほの巻をふくめり。
一われもかう　むかし此色有べし。永孝へ
可尋。
一いつまてか消ずもあらん　きえんと也。
烟はふじの山成とも也。
一雪山に　むすぶの神いかゞ。
一もえわたる　さ衣の哥。かくれなし。
一なむ平等大會　法華經の異名也。
一けぶりも今はたゞず　不斷也。口傳有。さ
衣には思ひもあらじとの心也。
一こほりがさねのからのうすやう
一雪いたう　げんじには霜雪イもおとさずとあ
り。
一もてなやませ　さ衣の御母。春宮よりの
御文をもてなやませ給へる也。

一けふはまいて見所侍らんかしと床しげに覺したれば　さ衣の御心也。
一いと有まじき　とまては詞成べし。源氏の宮の御自筆は有まじき事と覺召に。さ衣けふはましてゝ被仰ゆへ。有まじきことゝ覺召べし。東宮父源氏宮歟、
一わちはせ　母宮也。さ衣をしへ給へと也。
一ゆかしげに覺召に。さ衣にをしへ給へと有にて。御文の哥如此。
一たのめつゝいく世　消もせずたのめて久しきとの春宮の御哥成べし。
一げにいとおしくうちをき給へば　是母宮の御詞也。まいてからさ衣也。の給はすれど。さりとてをしへ申さてはとて。
一末の世も　消もはてなてあるごとくなる心はたのみがたき也。
一そよさらに　小篠はさ衣の御身にあてゝ。春宮の御事を含ませ給へり。
一みじかき
難波がたみじかき蘆のふしのまもあはてこの世を過してよとや
一何事も　及べきならねども。ことに春宮へ源氏宮ゆへ今一きはと。むづかしき詞也。
一ことはりといひながら　如此のおとりたる物哉とて。いかゞ御覽ずるとてまいらせ給へり。あたりの衆。さ衣覺召まゝなるとわらへば。我もはさ衣也。
一えさぶらふ　こゝほどにちかづく事有まじき事と也。
一うちそばみ　源氏宮也。
一引やり　さ衣のあはてこの世などあるゆへ也。
一いでや　源氏宮御覽も入ぬと也。
一つくば山端山しげ山茂けれど思ひ入にはさ

はらざりけり

されども大殿の御心など憚給ふと也。

一ためこそ
戀しなん後は何せんいける身の爲こそ人はみまくほしけれ

一れいの心うくよそ人の　大貳のめのとの妹成に。心にも入ぬと也。

一正月に　上洛して飛鳥井の事聞たく覺召に。面白事など申次に。三川になるも心うきとあると申上次に。八はしより。くもでにこなたかなたにものおもふと也。

一飛鳥井君御母にて誕生あらば。若宮のさまならんをと覺召也。

一つたへよと　哥にかきそへられし成べし。おこせよ。句を切べし。

一れいのつれなく　そばへもよらずとかたりしには如何と也。

一いけてみん　飛鳥井の詞也。我をいけてみんと思はゞ。そばへよる事をゆるし給へと也。

一さそふ水　あふぎにかける事。前にあり。

一からどまりの哥　かくれなし。

一あさりする　同源氏みざらん人は心得行がたし。

一かぎりなき御歎のもり　源氏宮ゆへ何事も思ひけち給へりしと也。

一いとすなはちのやう　うせにし後覺召は忘給はざりしも。則刻のやうにはなかりしが。此扇御らんにて其時のごとくなると也。

一かほに　からどまりにて女の顏に扇をあてし跡と見給也。

一涙川　かくれなし。

一かの若宮　女二の御子。五十日御祝言也。

一いかの夜　女三宮若宮をぐして御參内也。

一なきが　世中にあらましかばと思人なきがおほくも成にける哉

一こりずまに　又女三をさ衣へと覺召成べし。

一大將のこゑ　さ衣のこゑせしをめし出されて也。

一むさし野の　引哥可勘。ゆかりの心成べし。

一袖の中にや　引哥可勘。

一いとくるしくて　御出家より中〳〵御返事なきと。さ衣へ申理也。

一一かたこそ　女二こそ也。そこのもくづは。飛鳥井君の誕生ならばと也。

一しのぶ草　御子はねじけたる母かた也ともと也。

一思ひうるかた　分別はなくともと也。

一中宮いと　覺しなげきたるも。いと心ぐるしくは。中宮の御心を院の御心ぐるしくみ給へると也。

一大やけわたくし　天子の行末たのもしかりしも。けふともしらぬ有さまにて。思ひはなれ聞まじきとてもいかゞ。句。さてこそいまはのきはにも。思ひはなれめと覺しきりて御出家と也。

一齋院　女一宮也。

一さおぼし　さ衣へ女二を也。

一わか宮を　なま〳〵の孫王よりも。さ衣にあづけ給はんと也。

一おもふ心ことなる　天子の御詞也。獨住もゆへあらんと思めせども。内々はしらず。御遺言ならばをろかにはあらじと也。

一うちかはり　一卷にもある詞也。たゞかへて仰らるゝ心也。

一齋院のおはし
一さしはなれ　　女二御入道に又女三と也。
一袖にそよめく
一春宮のゐさせ　　めでたきにも。さがの院
、を覺召やりて。春宮の御心中はあはれなる
と也。
一女御代
一しき島ややまと　立ゐ
一我もはさ衣也。そゝのかしは。源氏宮きんひ
かせ給ひしに。猶と笛吹給へども。おなじす
ぢながらおとりたるとて引給はて。さ衣へ
大納言の君してひかれよと也。
一しのぶるを　　こよひ音にあらはせ給へ。
こゑのかぎりにねにあらはせとやと也。
一くやしきや又やと心みまほしけれど。此ふ
もとよりだにこそ山へあがらでと云心なる
べし。

一衣がへやせんさきんたち
わがきぬは野はら篠はら萩が花ずりやさ公
達催馬樂。
一わたりおとして　　落字成べし。又調子を
くだしての心也。
一かくれみのゝ　　古物語歟。
一宮漏正長空階雨滴　　朗詠。
一齋宮　　誰ともなし。一品は一條院かくれ
させ給へるにより。大膳より又おりさせ給
へる也。一條院源氏宮歟姫宮也。
一宮の御夢　　大宮也。神代より。堀川殿夢中
に御覧ぜし哥なり。心はかくれなし。
一心ち中〳〵　　さ衣の御心なり。
一あらばあふ世　　引哥未勘。
一から國の中將　　納言歟。古事未勘。
一大貳　　歸京して三河へ下し歟。
一はゝ宮は　　齋院に成給はゞ。おぼつかな

き月日へだゝらんと覺しなげくを。院はいかでかはさは。へだゝらんと覺召心をうらめしく覺召を。理とくるしくみ給ひて。尼にならざらん限りは。如何でかおぼつかなくはあらんと。詞をかへ給へり。齋院へは尼法師出入不叶故也。命の限りに得あひ給はじ。今より忍びがたきと也。

一神山の哥　しのべばぞ。したふゆへにゆふをかくると也。忍べばぞにて忍び〳〵の心こもれり。

一大津皇子　可勘。大和物語も水鏡も。

一我戀の

わが戀は向後もしらずはてもなし逢を限と思ふばかりぞ

一齋院御まいりの日　女房衆の躰也。

一一乘の門をさへ　法花一佛の門の事成べし。二乘は聲聞縁覺を云。三乘は菩薩を加事也。

一みたらし川

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずも成にけるかな

心もとなくとは本哥の心也。神はうけずもの心ならんかと也。

一けふやさは　むかしわかれたらば。けふのうき別あらじと也。

一よし御らんぜよ　此世にながらへじと也。又とんせいの心成べし。此おなじさまにてやのてにはゝやは也。

一大將のとのゐ所に　常に。にもじ入本可然也。

一野にも

古いづくにか世をばいとはん心こそ野にも山にもまどふべらなれ

一殿にても　源氏の宮のおはしませし所也。

一ゐんに　齋院へさ衣のまいり給ても也。
一ほうらい　楊貴妃をふくめり。源氏宮を貴妃。齋院を蓬萊也。
一いまはいとゞ　大宮は齋院又一條とかけておはします間。さ衣の御獨住心もとなきと也。
一三宮の御事は　さ衣の御心に叶はず。前齋院はいかゞ。女一宮なればと大宮思召也。女二宮御入道。三宮不叶。又御姉宮は一やうのごとく也。
一弘法大師入定所。三會曉を待給ふ高野山也。
一我もさやうに　れいならずおもふ給へらるゝと。さ衣の詞をうけて。殿もさやうにみえ給へると也。
一よしの川あさせ　源氏宮にあひ給はぬ中と也。
一わきかへり　同心也。かの底から飛鳥井君を覺召なるべし。
古冬川のうへは氷れる我なれや下にながれて戀わたるらん
一うき舟のたより　からどまりをゝしへよと也。
一是人命終　普賢品に。法華書寫の功徳によりて。天に生るゝ事を。是人命終當生忉利天ととけると也。
一たゞ石山とぞ　此寺江州石山に似たると也。
一堂僧修行者
一藥王汝當知　如是諸人等　法師品偈云。是經難得聞。信受者亦難。如人渴須水。穿鑿於高原。猶見乾燥土。知去水尙遠。漸見濕土泥。決定知近水。藥王汝當知。如是諸人等。不聞法華經。去佛智甚遠。
一我爾時爲現　淸淨光明身

若說法之人。獨在空閑處。寂莫無人聲。
讀誦此經典。我爾時爲現。淸淨光明身。
若忘失章句。爲說令通利。

下紐第三

一谷ふかみたつをだまきは　枝もなき木なるべし。口傳在之。源氏の宮の事をふくめり。
一うしろめたく　大殿母宮なるべし。
一をし明
天の戸ををし明がたの月みればうき人しもぞ戀しかりける
一戀しさもつらさもおなじ　源氏の宮など也。
一かみさうじ　紙障子也。
一たなゝし
堀江こぐたなゝしをぶね行かへりおなじ人にや戀渡るべき

一ゆきかへり　いもせに思ひはなるゝ道もがなと也。
一やすの河原　引哥未勘。
一わがおもひ　御遁世なるべし。
一雪やけを　湯にて御養性也。俗に日やけと云心なるべし。
一阿私仙人　かための法師を被仰也。釋尊因位の時。大王として法の爲に位を捨て。阿私仙人に逢て法花經をえ給へり。さて千歲の間菜摘水汲て仙人につかへ給へり。仙人は今の提婆也。
一いなぶち　和州名所也
年をふる涙かいかに逢事は猶いなぶちの瀧まされとや
一ありなしの　飛鳥井の行衛也。池の玉藻。猿澤に身を投げん采女の事歟。
一忍草　御子の事也。

一斎宮　女三の宮也。
一前斎院　女一の宮也。
一やう〳〵住吉の里
一一かたより外に　源氏宮より外に心を分ざりしと也。
一もしほ草かくと云詞より　海士の濱やと也。宮やゝ同心成べし。
一おがみわたすにも　斎院を也。
一さがのゐんこそ　入道の御門は。御ぐしきろ〳〵として見にくし。女二はうつくしきと被仰也。かみはみじかきとは。さげ尼のかみ也。
一うきふしは　哥かくれなし。さても女二はいかやうに覺召ぞと也。
一めさし
一ちりつもり　女二宮の古枕と也。此心をゑにかき給へり。

一かうのみつもる　是より入道の宮の御心中也。
一こよなかりける御心ふかさ　母宮の御心を覺召也。
一うき事は　母宮はなくならせ給へるに。入道宮ながらへ給へるがうきと也。
一あらぬには　双子の地也。一夜の契のあらぬになしがたき也。
一つねよりは　中納言のさ衣への御返事を御らんじて。え覺ししづめぬと也。
一おぼさるべしは　双子の地也。
一まことの御子　殿は眞實の御子とは覺しめさねども。養母の御ためには。さもありてよからんと。殿の御子ならねども。とても御養子は同事成べし。
一母はうちにも　眞實の母をば御覽ぜしと也。堀川殿物いひ給へる事有し故。御子と名

乗し也。天子も殿の御子にてはなき御心ならんと也。

一きさいの宮と

太政大臣後一條院御祖父

一條院女院

東院上 堀川院北方 今姫君養母

一おとゞのゆかり　太政大臣。

一かのおとゞ　是は堀川殿也。

一かやうの御けしき　天子の御心に叶はざるを。女院の御覧じしりて。故院崩御已後は花〳〵しき事は思召入ず。乍去堀川殿の被仰たらばよからんと也。

一ことさら　堀川殿方にもあらず。只女院の御心にこそと。しゐて仰らるゝ也。

一いまおとゞのけしきみてこそは。句。思ふかたおとゞの別に覺召かたあらんを。女院のすゝみ出てはいかゞと也。

一さくらのかた

一つれ〴〵から　さ衣へ被仰詞也。女院して天子仰らるゝとそら事を也。いづれの御事をもからさ衣の詞也。

一いまやうの人は　おさなきよりびわなど引ならし給に。今姫君は廿過まで内わたりなどの事もうと〳〵しき也。琴などをしゆる人もがなと尋を聞て。此びわの後見今參あると也。

一すぎ〳〵　次々也。

一まきの馬　牧馬。くるふ躰也。

一かみは　色がみとて上品也。

一いふべきとも　いま姫君の心也。

一はじめ　さ衣御出の時。いらへ遲くしたるとて。母代腹立たる也。

一かのはゝと　さ衣によみかけたる哥を。

東院のうへほめ給しかど。今姫君まれ〳〵思ひ出給ふ也。こゝもと詞くだ〴〵し。

一吉野川何かは渡るいもせ山人だのめなる名のみながれて　前の母代が哥をそのまゝじゆし出し給へり。給へるをまてさ衣の心也。げに人の忘れぬふしやよみ出たりけん。是まてさ衣の御心歟。又草子の地たるべき歟。

一吉野川かへす〴〵　または又也。源氏末摘から衣又から衣の等類歟。さ衣はいもせの返事を我ながら忘れ給へり。

一瀬に入たつも　とがめあるまじければ。

一わたりも心おとりし給へり。

一先猿をつなげ　かなてを〳〵と。肱してつくめれば。さるかなて。いたち笛ふく。いなごまろはひやうしうつ。きり〴〵すはなど。ほそ目は細め。たれかへり〳〵。

一おとしあげ　甲乙歟。

一げに一偏によからんのみとは覺しめさずとも。普御心ながらも也。

一いと名だゝしう　名のはづかしきと也。

一女院から　東院のうへの御心也。時々打わたり。今姫君にいつもそひ給はぬ間。うはべばかりよきと覺召也。

一あめつちを袋に　未勘。

一ゑに苗代　柳櫻を寄合よりうせざめれば亂たると也。不失歟。ゑりふかう。ゑり入たるごとくと也。源氏末つむにある詞也。

一わが御心の　母代の心となり。

一よのつねなりと　さ衣覺召也。人の文とは飛鳥井へ通給ふ文なるべし。

一よに侍らじとの給へば　文などよにちらさぬ物をと也。

一なき人の　源氏夕顔の巻の哥に少もかは

らず。心は明也。

一かすまん　引哥未勘。

一ま木ばしら

同わぎも子がきてはよりそふ槇柱そもむつましみ形見と思へば

一かのあふぎ　飛鳥井の今はの時までの扇也。

一つくば山

筑波山はやましげ山しげゝれど思ひ入にはさはらざりけり

一おびたゞしかりし　懐妊ながら水に入心は。こと〳〵しきとなり。

一もゝか　百日也。

一人のまどふ

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬる哉

一とを山鳥　へだてゝある心也。

一あかつきかけて　源氏すまの巻にある詞也。

春はたゞ霞ばかりの山のはに曉かけて月出るころ定家卿

一秋の色は　さ衣のあくかたの心なるべし。

一云何女身　速得成佛　提婆品也。舍利弗龍女に對て。五障の女の身にて。速に佛になる事あるまじとの給へる詞也。

一いづみの　よこ嶽と云山。行者のをこなひ所也。

一太政大臣　御馳走なり。

一よるひる　堀川殿御如在と東院のうへくねり給へり。

一しかる　叱字歟。天下はいだしやらじと。異本あり。

一浦かよふ　みるめはかはらじを。名のるにはをよばじとの心也。聲を聞わけて。浦通

ふとあるにて。西國の守領と思也。

一月日過れど　故院一條院。女院後一條院御母。太政大臣御女。姫君後一條院御妹姫宮。一品成給也。女院。さ衣の御かくしの御息女。飛鳥井君の腹を養給へり。藤壺。いつも御ぐし有てわたり給へると也。

一加茂の川なみ　齋院也。一品宮へ少將命婦して御文通し給へり。

一一條宮　一品宮。飛鳥井姫君を養給也。一條に女院おはします也。

一こうきてん　中務宮の姫君也。

一やみは　春のよのやみはあやなし梅花色こそみえね香やはかくるゝの哥なるべし。

一權大納言　東院のうへの御弟。一品へ心かけ給ふ也。

一中納言君　母は内侍のめのと也。

一大納言ほこりかなる人に　大將見付られたると覺召也。其後大納言へつれなきが。大將へ心ひくと仰らるゝ也。

一にぶ〳〵　異本。きは〳〵しき事をみざらん人のやうにと有。

一此たびばかりあへなん　ありなんの詞歟。似合と云心なるべし。

一おもひやる　身はよそながらぬれ衣をきると也。魂が行てぬれぎぬをきたるかと也。

一さればこそ　こゝもと堀川殿の御心中なるべし。

一かゝりけりさは

一いせの海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定かねぬる

一こんよのあまとなり　入道の宮の御心也。

一芹つみし　哥あり。可勘。

柏手と云。和州多武峯麓に老女貧人あり。子

をほしがるに。或時に如月星降たる下に小女あり。是を養に。貧女に孝ありて。芹を摘て是をそなゆる。聖徳太子行啓にみむきもせず。尋給へるに。養母孝行故と也。

一げに又かゝる　入道の宮とは。何とやらん。自他の御心ゆかざるやうなりしに。一品の宮などは尤と也。さて后に成たると也。上下略。

一もりわづらふ　雨の漏ぬを御覧じて。もらさじと契らざるらんと也。

一戀わびて　撫子にて若宮の事を入道宮へ仰らるゝ也。

一あまのかるもに住むしの我からと音をこそなかめ世をばうらみじ

一さらにしるきことゝも侍らず　いかゞ覺召とも。御けしきのみえ侍らざりしと也。

一はらふべき　むかし物語有べし。

一げにさこそ　大將のおさめぬ好色と覺しめされんがはゞからるれどもと也。又をしはからるゝ心也。

一いとかくいける　ありける事も。心に句を切べし。さなくては心行がたし。

一みづからのつみになすと覺召たれば。いてやことの外に。たど／＼しげに聞侍しに。關の戸をしるべなくても通と也。

一いたくまめだちて　昔にいひなし給と也。さ衣の大かたに思ひたるといひなす。昔も今も同心と也。

一いひむかへなし給ふ　さかふ心也。

一げに袖にはたまらぬ

落瀧つ袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙成けり

一此比から　哥の心は明也。一品の宮の事ふくめり。末こすはきかせ給ふと云こゝろ也。

一夢かとよ　ふるき哥詞也。とはるゝはみしに似たるがつらき也。かくのごとくうきためしは有まじきと也。
一下荻の露きえわびしとは。御命のあるとても。とはるべきとは覺召ぬにて。末こす風の事をも。とはせられぬと也。
一うき身には秋としらるゝ　夕風の音ならねども。こなたにはしられたると也。おれかへりの哥をうけて成べし。
一旅所にて　一品宮へ參り給ひてはとの御心也。
一なにの物がたり　異本。古物語あるべし。
一うきはためし　入道宮さがにての御筆すさびの哥也。
一世はいと　思事一にて。源氏宮ゆへ入道宮にと也。
一たゞこよひ　因果と覺召也。

一たが玉札
秋かぜに初かりがねぞきこゆなる誰玉章をかけてきつらん
一せいたいし　青苔紙。朗詠。碧玉裝箏斜立柱。青苔色紙數行書。
一きかせばや　入道の宮へ也。とこよはさ衣の住給へる一條院成べし。
一鴈の來るみねの朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ
一なにのぜう　左衞門歟。右衞門歟。
一思ひきや　葎は一條院。一品草枕也。心ふかき御心には。おち散てもくるしからざる書ざまと也。
一故郷　一條宮は淺茅が原にならんと也。今こそは。一品への事。院もうれしく覺しめすと也。
一まことに　入道なき時と也。

一まだしらぬ暁おき　さ衣の哥にかくれなし。

一院には　一條院。女院一品宮の御母也。

一しがらみかくる

秋萩をしがらみふせて鳴鹿のめにはみえずて音のさやけさ

色々のさうぞく。めにはみえねどもと也。

一ものもかゝれざり　伊勢がけさう文に。詞かゝずして哥ばかりと也。

一宮はいみもこそ　又御返事有べきに。打すて給へるはいみけると也。御心に入ざる成べし。

一忍草をちかくてみん句　若宮の御事也。

一おとり所にて世を　獨住にて御心安がなぐさみと也。

一そのなぐさめも　又入道の宮もえみ給はぬと也。

一さばかりはあかぬ　入道の宮の事也。

一室八島は前巻の哥也。入道宮に一品はおとり給へると也。室八島歌可勘。

一垣ほにおふる　若宮の御事。前に御哥有し也。

一いとさばかりの　宮に成給へる也。撫子故さがのゝ花は入道宮也。

一なに事かは　大かたにて勝たる一かどもなかりしと思ふと也。さはいへどもけぢかくては大かたならずと思出給ふ也。

一くやしと　殿もくやしと覺さんと也。

一びわことにて夜を明し給ふを。かたはらいたがる人もあらんと也。

一御吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれ家にせん

一よすればなびく芦の根　未勘。

一殿のひとつ　母宮と殿と同やうに。一品

宮へ御うと〳〵しといさめまいらせられぬ
と也。
一ふげんの御出現のよの誦經を覺召いだす
也。
一をのがつま　引哥あるべき歟。
一われもかうのをり物　かれのがさね。此
比不知と也。藤宰相殿へ尋申。
一むさし野の　かくれなし。
一女院　あすか井の御腹。さ衣の御子也。
一おさなき人はかならずほど　ほど〳〵の
差別なしと也。
一なれぬるはうき世なればやすまのあまの鹽
燒衣まとをなるらん
一八重たつ山の　引哥未勘。
一忍ぶ草　かくれなし。
一あせうちあへて　汗歟。
一思はずに　入道宮なるべし。又一品宮歟。

一かげのこ草　心なし。
一かくばかり見えまうく　一品の宮の御心
也。
一空ながら　さ衣の心。うはの空ながら也
げにうと〳〵しくも同。
一思より又　心かくれなし。一品の宮の御
哥也。同。
一是がゆかり　これよりさ衣の心なるべ
し。
一玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心
のうれしげもなし
此心にても可然。省字にても中〳〵はたつ
歟。
一院にもかうに　女院也。さ衣の御子とは
しろしめしながら。もぎのとを仰らるゝ也。
つゐてならずともはさ衣の詞也。
一何かは　女院の御詞。大殿にもゆかしが

り給ふと也。

一げについてよく侍なんとこそ院も　さがの院也。の給はすれど。からうじてことつゞけて。ことばおほくいひつゞけ給也。

一聞給へる　さ衣の御子と云事を。女院きゝ給へると也。

一あまへて　あまゆる。俗語也。

一ついてならずとも　さ衣の心詞也。

一又いかに　女院の御心也。

一院の御方　さ衣の心。さもなどか句。わざとだにこそ。女院にては女子の御ためよからんと也。

一かしこにては　女院にては。誰ぞとことなしびにと。さ衣のいひなし給也。さ衣の御心。女院にての御用意。げに覚したちたるかひなかるべければ。ことなしびに云とも。女院にてと云心也。

一うちつけのたよりならずとも。かたかるべきならずとは。やすからんと也。

一いまは我しも　女院御獨にあらずとも。さ衣の御子なればと也。

一院にうち／＼の　さ衣の御子とは仰られざる也。

一みづからの　天子の御代にと。大殿へ仰らるゝ也。

一たちあかし　炭がしらのごとくなる松明也。源氏になきことば也。

一そのゝち若宮をば母　さ衣の御母なり。

一いますこし　さ衣と似合たると。後見たち思也。

一さこそはあながち　入道宮御連枝はなれがたき御宿執也。心ゆかずながらけふ。異本可用也。のがれがたかりけるぬれぎぬ。前に哥あり。ふところがみは。入道宮にあひはじめ給

ひし時也。
一入道宮と　前齋院。御連枝あひ住なりし時の事也。入道の宮とあひし事は。そらごとゝ云べかりしかと也。
一おなじくばにくからずや　にくからぬとて。尼衣をきたく覺召と也。
一院はすこし　前齋院也。
一小宰相
常磐尼公
小宰相　一條院の女房の官女さ衣時々物の給ひし人長門守女子はあらず
筑前北方
一姫君　さ衣の御子。飛鳥井腹也。過にし。此御女の事なるべし。
一いづかたさまにつけても　さ衣の一品への御志は。いづかたさまにても覺召いれさると覺召也。さる程に宮は心づきなしと思召ながら。物にくみを色にもみせ給はぬと也。
一殿がち　堀川殿がち也。
一齋院　かもへ大將おはします也。
一しのぶ　源氏宮へみだれはじめ給へると也。
一ふせんれう　浮線綾。
一くねくねしく　一品宮に猫を思ひくらべ給へり。
一岩間をくゞる水　引哥未勘。
一ゆかりむつび　一品とさ衣いとこ也。
一おなじさま　源氏宮へ遁世もせんと常々仰られし也。
一かつみれどの哥　一品宮をみれども心に不叶を。源氏宮は人の人と覺しめされんと也。
一七僧　七人僧供養也。源氏に在之。唄散花など七役也

威儀師。
一くらきより　夢中の哥。かくれなし。
一吉野川　前の哥なるべし。
一をくれじと　死出の山を契に。自水なれば三途川ならんと也。
一皆如金色從阿鼻獄　東方万八千世界の光如金色。法花經序品也。法花經を説給はんとての瑞相の中也。佛の白毫相の光。上至有頂。下至阿鼻獄と云々。
一佛だに　普賢の粉川にて。御出現の事なるべし。
一たのめこしはいづくと也。かはりたると云心也。下句は古哥也。
一ことのはを
箸鷹のとかへる山の椎柴のはがへはすとも
君にはかはらじ
私かへるとは十かへりの松と云々。千鳥とかへるははやき心。飛歸歟。
一なをたのむ哥　かくれなし。
一よりゐけん　さ衣の御哥。涙浮木と也。
一あへなん　此詞此物語多し。さあらんと云心也。さて一品宮にてこり給へかし。とかくおほせらるゝゆへ。心にそまぬかと也。
一うす大口
一さくらさうかんのうはぎ
一藤のふせんれう
夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にのみとも思ひけるかな
此哥の心を縫たる也。波よせて。波にひたしたる心など也。
一なをやゝましく　心やましき也。
一さいしさゝせ
一やを萬。　八百万神。さ衣の哥也。
一をのれのみ　我のみながれはせじ。河水

のごとく齋院にておはしまさんと也。源氏宮の御哥也。
一さか木ばにかゝる　さ衣也。源氏物語の面影也。及ばぬ枝もわかなの巻にある哥なるべし。
一わが身　御製也。人とは源氏宮也。
一をさくち　銀細工に可尋。
一おもふ事なるとは　時鳥尋きにけりとは。さ衣に時鳥をなずらへて也。
一かたらはゞ　神も聞いれ給はんまゝ。残らずあらはし給へと也。
一よろづの人に　おとなしきさへ萬人にむかひたる心ちすると申せば。若人さへはづかしく思ふと也。
一そは車にても　さ衣の御詞也。車にてもみゆるはと也。されどうちつけに。六かしき詞也。わびうらむる人々は。心あさきまゝ。心やすく覺しめせ也。おとなしきとある詞より。さ衣の御年たけたるは。恨給ふともすさむる人もなしと見をこせ給へる也。れいまでさ衣の御すがたをほめたる双子の地也。
一みるたびには　さ衣也。源氏の宮の事なるべし。
一よそにやは　昨日の御返哥を齋院へとそゝのかし給へど。御くたびれとてかゝせ給はねば。うへのかゝせ給へる也。よそにやは思ひなるべき。あふひ桂のごとくに影はなれじと也。
一御覽ずるは　天子の御心なるべし。
一みづから　若宮の御身のため。さ衣もたゞ人にてあたらしからんと也。おなじさまよりは。せんようてんにてと思召也。さがの院の御心も。齋院の一條の宮におはしますたよりと覺召たると也。齋院かもへの御跡

におはしますと思ひなさんと。大殿も覺召也。
一とりつきよろこびがほ　さ衣の御心也。心ゆきたるとは。皆人〳〵の尤と思也。
一みづからは前齋院。前齋院と大殿と。大將の御とりもちを也。
一大將の思ひはなち　御出家もと也。おやに成給ふも。心もとなく天子思召也。
一かのやすらひ　前の哥也。夢ぢにまどひしも同心なるべし。
一あかざりし跡や通ふは　入道の宮に似給へるかと也。磯上。ふるきといはん枕詞也。
一なをいかなりし　入道宮への密通しり給はぬ心也。
一磯上ふる野の　みしにもあらぬは。通とあれども。前齋院は御心ゆかざる也。
一しのぶもぢ　前の哥にあり。

一あくがるゝ玉しゐもかへれと也。思ふあたりに結とゞめられなばと也。
一宮の中將　後式部卿御子。宮中將のいもうとの姫君は。さ衣の御位の時。一宮うみ給へり。
一草のかう
さ衣のながめ臥給へるをみ給ひて。人しれず思ひあつかはるゝは。中將のいもうと也。
一玉しゐの　妹方に結びとめまほしきと也。宮の中將哥也。
一おばすて　なぐさまるゝ事は有まじけれども。覺召へだてずばなぐさめんと也。
一いふとも人に　引哥未勘。身にそふかげ。前の哥也。
一いみじう　戀路ならで御遁世ゆへ。物あはれとさ衣の仰らるゝ也。
一すこし心うる　妹と也。

一こゑの秋かぜ
一わがかたに　さ衣也。中將の妹を覺召て也。
一心には忍び給しを。しがらみふする人あるかと也。鹿にしがらむ人を比して也。
一さをしかの入野の薄初尾花いつしかいもが手枕にせん
一さま〴〵の御才覺の中にも。御手跡ゑなど勝たると也。
一まねぐともなびくなよ夢　ゆめ〴〵也。秋かぜ吹とは。方々へ秋かぜをさ衣のふかせ給へると也。
一おしなべて　さ衣のをしなべて御心あだなる間。露もかけじと也。
一色どるかぜ
秋萩をいろどる風の吹ぬれば人の心もいかゞとぞおもふ

一竹の中　竹とりの翁がさ衣へは是非を定かねんと也。
一一かたに思ひみだるゝしのすゝき　かぜのたよりは。中將のつたへられたるかと也。
一中なるには　竹の中なるを妹に比して也。扇をもちらしてはみせたれどもと也。
一一かた　妹も一かたにつゝましく思ふとの返事を。げにいはけなきほどゝ覺召也。
一法花のまんだら　源氏御法の卷にあり。佛檀法花經にての莊嚴也。
一夢のしるべ
一大井川　いせきのごとく。年へても忘給ぬと也。
一及見佛功德　譬喩品也。諸天佛を供養し奉て廻向の文也。我所有福業。今世若過世。及見佛功德。盡廻向佛道。
一宮はほとけの　若宮の御詞也。いざふた

りねんも若宮也。
一うつくしは　若宮の躰也。さゝめき給ふにて句。
一それはなを　かうしもおろさである方は。不動尊にみえんと也。入道宮不動へむかひておはします西方をと。さ衣の仰らるゝ也。
一ふせこの　古物語なるべし。
一かけられ　掛鐵成べし。
一みしにも　ほんぐにかき給へる哥也。
一藻かり船　さ衣。尼といはんため也。
一いかにしにせぬ　此物語におほき詞也。
一袖ぬらすと云　古物語あるべし。
一殘りなくうきめかる　入道宮の御心中哥也。
一心にふかく　源氏の宮なり。
一立（八千イ）かへりくるまの

岩間はくゐまと有。杭間の水。八千かへりくゐまは後悔歟。さる時はくゐまは詞のいはまほしのま歟。杭を悔にして也。又立かへりいひてもなれば岩間もよき歟。よしみよは死なゝむと也。
一後の世のあふ瀬を　後世の逢瀬をたのまんと也。わかるゝ事はいまかぎりなればなり。
一ましばし山のは　月だにもさ衣を世にとどめざらなん。御遁世の有ましにて過る月日と也。
一心より外に　御遁世の事成べし。
一たゞ思ふかた一の　好色のみにもあらず。若宮などのことに情なくあらはさぬゆへ入道有しと也。わが身も誰ゆへぞ。入道の宮の覺召す所により。捨がたき身をもすてんとだに。我心ひとつに思ひなぐさめと也。こゝ

もとことばつゞきがたし。
一かの御心に　入道の宮ゆへ。色々しから
ぬと覺めさるまじけれどゝ也。かの一きは。
入道の宮の母宮也。
一あさむづの橋　うたがひもの也。
一みえぬ山ぢも猶いつしかとかたらひ　中
納言佐に也。
一いのちさへの哥　かくれなし。
一もとの露すゑのしづくや世中のをくれさき
だつためし成らん
一齋院の
一又うちすがひ　松の生すがひてと云は。
生ならびたる心に用來也。同心なるべし。但
如何。
一にがみ　顏をしがむると云心歟。源氏に
ある詞也。
一おぼろげに　かくれなし。

一あかほし　さ衣のうたひ給へるなり。
一よすがのかぎり　御子にてはなし。
一思ふさまには　御遁世の事也。
一御熊野に駒の爪づく青つゞら君こそまろが
ほだし成けれ
一風のまへの
一世皆不牢固　隨喜功德品に。法花一念信
解功德の格量に。小乘無常の法門を說て。阿
羅漢をえせしむる事いへる文也。世は皆不
牢固。如水沫泡焰。
一大井の物語　未勘。
一世やつきぬらん　引哥。
暮ぬれば齋院のおはしますたいへなり。
一音なしの瀧　前に在之。
一院も思はず　前齋院也。源氏宮也。
一いとゞまとに　とは御遁世あらば也。
一いはずともの哥　源氏宮也。ほだしばか

りに思はましかば。さ衣のほだしとも覺しめさじと也。

一行かへり哥　こゝほど異本あり。身は中空に成ねとや。さば。さらば也。世をひたとすてん事さすが也。源氏の宮の御心もとけぬと也。

一忍ぶもぢずり　前の哥也。

一むかし有けん　琴奇特有也。鬼神出たる事。源氏に有。

一法樂莊嚴　法を以て神佛をたのしめ申心也。連哥猿樂の能なども。法味に比して也。論議千部經などは眞實の法樂也。

一こゝにも　殿の詞也。

一大白牛車　法花一佛乘にたとへり。長者は釋迦如來。諸子は三乘の機の舍利弗等の衆生也。火宅此三界也。

一涙のみの哥　かくれなし。

下紐第四

一ひかりうする　賀茂の神詠夢想也。御遁世の心成べし。さるはめづらしきは。御即位有べき事也。

一淨藏淨眼の　妙莊嚴王は惡王にてましましけり。此二人の御子と御母ノ淨德夫人と。雲雷音宿王華智の御もとにてさとりをひらき。父の惡王を道びき奉るべき由申て。神通往反遊行してみせられければ。父王大に歡喜して。邪見をひるがへし。佛所に詣して。共に聖者と成給ぬ。其時の妙莊嚴王は今の花德菩也。淨德夫人は今の佛前光照莊嚴菩也。淨藏淨眼は今の藥王藥上菩也。

一舍利弗劫濁亂時。衆生垢重。慳貪嫉妬成就。諸不善根故。諸佛以方便力。於一佛乘分別說三。十方世界には本躰は二乘三乘の法はなき也。

一院の御まへ　齋院也。
一いそげども　入道尼公へ也。さ衣の御哥。
一いひしにたがふ　不及引哥。御遁世の事三巻に申給へり。
一いかばかり　心ふかく思ひはなち給へる尼ならでは。誰もはなれがたからんと也。
一はかなかりし　引さき給へる手習の紙を御覽ぜし也。
一宮も　一品宮のきかせ給ひて。思ふすぢことなるは。御出家の心ざしあるを。おとゞなどの云によりてと覺召て。はづかしく思ひ給へり。
一あしせん　かための法師を阿私仙人に比せり。
一この比は　御出家あらん物をとさ衣の覺召也。
一みづからの　神人の祝はたのもしげなれど。さ衣の御哥には。此世の榮花は覺しめさぬと也。
一宮におはし　一品宮也。
一さがの院　恨かけさせ給ふを。さ衣の聞給て。さればよと也。
一かゝれば　さ衣のねびまさり給へるを御覽じて也。
一さま〳〵のほだし　若宮など也。
一又うらめしきかたにはすゝみてなん
一山かへる　山より歸ると云名あらんと也。鷹詞歟。
一おばたゞの板田の橋のこぼれなばけだより行むこふなわぎも子 人丸摂州
一行末はをのづから　若宮の御事により。えさりがたく聞えさせ給へるごとくに覺しめさんと也。いとゞから入道の宮の御心を申也。

一いでやかひなきは　好色はかひなけれども。あはれと覺召ばと也。
一いとゞきゝにくゝ　御出家は無用と皆申定らるゝとて出家なき事。入道の宮の御心にはづかしきと也。
一手にふれし　さ衣。かくれなし。
一まことや　院の女御。後一條院御位の時。三卷に。さ衣の御とりもちにて内にまいり給へり。
一齋院　源氏の宮なり。
一かぎりあれば　齋院におはしますまゝ。若宮源氏の宮にはなれ給はぬと也。
一此女御　院の女御と齋院と。うと〳〵しからぬ中となり給へり。
一一重づゝ　齋院御獨吟也。時しらぬは女御殿へ也。哥は明なり。
一このかはらぬ　榊也。
一さか木ばに　もとは齋院にておはしましし心也。齋院におはしましたると覺しめさんと也。
一なをしばしは　齋院を春宮へと覺召たるにと也。
一三千大千世界　一須彌千を小千界と號す。小千界千を中千界と號す。中千界千が三千大千世界也。
一三十二相。佛の身相に殊勝なる相貌が三十二ある也。
一中務　さ衣の大將かひまみの夜。姫宮にやと云し人也。式部卿宮上。
一神のいさむる道は　佛法也。入そといさめ給ふと也。夢ならでは人こそ行末をしらざれ。源氏宮への心を神は知給はゞ。思ふ事なきやうならんとは。位につき給ふ瑞相也。
一さても　心の中に思ふ事あると。神の御

心よせあらば。夢のかなはんと也。
一はかなしや　瑞夢の事也。
一うき木にあはんやうならん　盲龜浮木のごとくと也。
一とりかへす物にもがもな世中を有しながらの我身と思はゞ
神前なればみいれきゝいるゝ人もあらじと也。
一心うの事や　ものから心をおこす也。物おそろしからで。神前にておそるゝあひだ。皆々へ物仰らるゝ事のなき間。神慮に物おそろしからずして。少ながらもくやしくこそいまは思ひ給へると也。
一みかきもる　神垣にてひまもなくまもらるゝと也。
一花ざくら
心かくれなし。さまで神の御いさめはあらじと也。戀しくば神のいかきもこえぬべし大宮人のみまくほしさにの心成べし。
一思ふには忍ぶる事ぞまけにけるにしかへばさもあらばあれ
一あせあへて　あへて。此物語あまたあり。
一太政大臣御子　此巻大納言。三巻権中納言とみえたり。新中納言。當官。此巻兼官宰相中將と云し也。後式部卿宮の御子も今宰相の中將也。
一色々のすがたどもぬぎこぼして　飛鳥井殿へ尋申に。ぬぎこぼすとある詞。近年斷絶か。しろしめさぬと也。
一くつしたる名ざし　くつしたるなり。源氏に。夕霧をまめ人といひしをふくめり。
一かうりたまかへり　かふり歟。愚推。
一かのさくらを　源氏物語わかなの巻なるべし。

一かのあきらか　入道宮をさがにて月に御覧ぜし事ありし也。
一はしがくし　車よせ。源氏にあり。
一有漏無漏ほう　三界の世法は有漏なり。佛法さとりは無漏也。
一けうそくに　卅には式部卿の宮のうへなり。
一おりみばや朽木の櫻　行ふるゝ心也。
一こよひは　双子の注也。
一夜すがら　朽木の花の面影也。
一れいの姫君　入道の宮の心にて。母うへにつかはし給へり。
一ちりまがふ哥　朽木の櫻の心こもる成べし。
一中將　此御妹の姫君。さ衣の御位の時。一宮うみ給へり。
一かゝるかたち　無分別。但かゝるかたちの人を。すがたをやつして。母にはなれてあらん事をおぢて。都の外の栖の事きゝて後は。母にたちもはなれぬ心歟。
一宮の御ためをろか　春宮（一品宮歟重而可見）への事。をろかなるためしにはあぢきなし。道芝の露の哥。前にあり。
一ちる花に　姫君の代に御母なるべし。一ゆきに。一行歟。よべ母上をさ衣ほかげにかいまみ有し也。
一右のおとゞ　宣耀殿と系圖にあり。
一のどかにもたのま　影みゆべくもなき五月雨と也。
一いつまでとしらぬ　さ衣の哥也。理しらぬを。句を切べし。理をしらずして。なぐさめがたくてこそと云心成べし。
一くちおしや　をだえの橋は奥州也。雲井には及ぬ中ながら心は通と也。

一うちさくじり　源氏乙女巻にあり。くじりとて細工者持也。鹿角叉銕にて。大きなるきりににたり。こざかしくとりては御覽なきと云なるべし。

一水あさみ哥　權大納言よめり。左大臣に此巻に成給へり。

一物いひ　わが言いでぬ事は前にも有しと也。

一誰がみする　みする人はあらじと也。

一とりあつめ又も　うしや。うらやめ如何。岡名所なるべし。

一皇太后宮　御母式部卿御娘。春宮の御母。大殿の御むすめ也。

一くらべみよ淺間の　かくれなし。さ衣の哥也。

一けふばかり　春宮への御返しとゝりたがへてと也。

一さしはなちは　春宮へなり。

一あさましや　無御同心哥也。春宮よりさ衣の御思ひは淺きとの心なるべし。

一宰相の心には。さ衣へはいたづらに成たる御返哥也。かうまことしくさ衣の覺召折からゆるし給へと也。

一さやうの御まじらひはならぬまでも　中宮になどゝ思ふゆへに。内のくるしさをもなぐさむと也。思ひがけずば。たゞ人しかるべからんと也。

一上達部はしばしすきまなきやうにて。つゐにくちおしからん。此大將はさ衣也。よからんとあるおちつき也。一品宮御産あれば也。

一一品宮は一條院の御姫宮也。さ衣の北方也。

一一かたに思ひ哥　東宮へと御心が一かたなると也。

一我のみぞ　さ衣御出家御あらましのみ也。

一うき物と　限あれば心の句。そむかんと思ひ／＼て打過ぬるを。今そむける世中と也。

一まがね吹きびの中山おびにせる細谷川の音のさやけさ

一八重葎茂れる宿のさびしきに人こそみえね秋はきにけり

一年のわたり
玉かづらたえぬ物から新玉の年のわたりはたゞ一夜のみ

一へにける年のつもりには　今がはじめにて。物いひかはすと也。

一十市のさと　前にあり。

一我も又　さ衣哥。十市近所也。ねぬ名はたてじ戀はしぬともとある古哥は。いけるかひなしの心也。是は一筋にはあらぬ。姫君勿論。御母もほのかに見給へる也。ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞますだのいけるかひなし。こゝもとこの哥にて也。

一たえぬべき心ち　たえぬべきは御命の事と。又姫君をあづけ給ふとも。中たえんかはと也。

一當得水

一玉のをの姫君

一形代　人形。源氏宇治巻に在之。

一なげきわびの哥　實なき心也。

一あすのふち　飛鳥川の心なるべし。

一とけてねぬは　實なきと也。外にはかゝる丸ねをならはぬと。すこしほゝゑみての獨吟を。めのとの獨はいかゞと。御母上へ申たれば。

一草枕と　御返哥也。

一くわや　源氏の詞にさあと云心也。名殘おしみて。長居をにくむと仰らるゝ心也。

一面かげ　かくれなし。

一もの思ひの花の枝さし　木枯にさきこそまされ物思ひのと。前に注之。
一こゑもせぬ哥　實なき心なるべし。
一よるの衣
いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞぬる
一かたしきに　かさねもせずして。こふる心はいかんと也。
一あながちには　姫君也。はか〳〵しからぬは宰相中將也。
一うかりける哥　かくれなし。
一十躰　十齋。異本。
一かんろ法藥の　前に注之。
一光明不絕
一夢さむる　やゝ過にけり。なく成給ひし時よりやゝ過ると也。心むづかし。
一中將は大納言殿へ通ひ給ふに。御懷妊になやみ給へり。
一ことはりの哥　年つもれどもきえずも有と也。
一たゞそれかと　源氏の宮かと也。
一おとゞ　殿の字。めのと也。
一宰相のゆるさゞらんにはいかてか内外し
一かつらぎの
うば玉のよるの契もたえぬべし明るわびしきかつらぎの神
一ときわびし　さしぬきのひもをさし給間。古中絕もやせんと也。
一雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきておらまし
一ほど〳〵　ほとんど也。姫君の母上へ心うつりし也。さりながら姫君にもとより思ひしめると也。
一行ずりの　かくれなし。もとみし心する

と也。
一よそながら　さ衣。よそながらにてなく成給へる御母のごとくにならでとの哥の心也。
一すゑなどして　俗におすゑと云心なるべし。
一いりと入
いかばかり戀の山ぢのふかければ入といりぬる人まどふらん
一かたもん　片紋。
一かへりしぼみ　色のかへりしぼめる心成べし。
一いけるかひあるは　そばよりみたる躰也。さ衣へさしむかへるめのと也。
一まづかはり　先代を用意してと也。
一殿の御けしき　けさほど御心よくみえ給へばと也。

一心やすくあよぶ　宰相殿踏歩もせずして。荒たる所にみ捨てをきがたさにと也。かはなんにて句を切て也。
一みまくほしさに　一品宮へ行てはいたづらに歸る。さて姫君は見まくほしさに也。本哥引やう奇妙也。
いたづらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいざなはれつゝ
一十五日かゆ　粥の杖にて打。古事可勘。禁中に今粥杖にて女房をうてば。男子を生とて打也。越前などはことごとくしきなり。本文は不知也。
一たづねみる　かくれなし。
一おなじくば　大殿御娘さ衣の御妹哥也。春宮は木高也。さ衣はしづ枝にはとなるべし。
一庭たづみ　春宮よりの哥有し也。
一さらずとも　さ衣ならでは。又別人への御契もあらんと也。

一おばすて山　なぐさむと也。

一ながむらん哥　かくれなし。

一一品宮の　飛鳥井の母の姫君也。

一あかぬ事　宮の姫君めでたきをみながら。飛鳥井君の事を忍びがたく覺召事もりなば。一條院の一品宮を御母と覺召事あさくならんと也。眞實の親としり給ゆへと也。

一宮も　若宮を待遠にれいよりは覺召かと也。さ衣の詞也。あやかるとは。はらへすつれども。かた代か又あやかると也。

一大かたは　みるにてもなぐさまで袖ぬるゝ也。なぐさは紀州也。

一さることのあらばしも　しもはてにはなり。

一さがの院の御時　若宮たゞ人になり給へり。

一いとあまりから　みるをあふにてとの引哥のあたり。

我ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるをあふにてやまんとやする

耳とまらせ給へるまで双子の地也。わが御心はさ衣也。

一等覺　薩埵の極位也。十住。十行。十迴向。十地。等覺。妙覺。是を別教の四十二位と申也。妙覺は佛也。

一水の白波なる御有さま　跡もなき心成べし。源氏宇治巻に有。

一めぐりあはん哥　又返哥かくれなし。

一せりつみし　前にあり。

一戀草をちから車に七車つみてこふらく我こふらくは

七車。此哥にて成べし。

一宿かへて待にもとはず成ぬればつらき所のおほくも有かな

一をくりをかれ　内へ姫君を送りすてさせ給へるを。今上あはれに覺しめす也。
一心もゆかざりし　姫君見付給へる所也。
一かのよな〳〵　源氏の宮の御哥也。
一戀てなく　齋院の事なるべし。
一哀そふ秋の　齋院の袖ならてはと也。
一ゑんしろふ　燕子樓。
一すみぞめだに　ならひはなれ給べきにと也。
一たどそれかと　源氏宮也。
一かくこひん哥　かくれなし。
一名をおしみ　人たえしなれば。あふと云名もおしきとなり。手かくる程の契はたえたるとの御心なり。
一ゐん　堀川院也。
一あふぎてふ　名を惜とてかはらばとは。あはゞつらからんと也。

一引つれて哥　かくれなし。
一かなしさも哀　こは是は也。又子もかねて也。
一ことはりもしらぬ哥　かくれなし。涙もながるべきにては如何。
一げにあるべきとは　げにつらき心と思人あるべきと也。
一物としらずや　引哥如何。
一一蓮托生　夫婦往生同蓮にむまるゝと也。
一かよちやう　駕輿丁。河かむづかしきと聲々申也。此心有。
一思ふ事哥　かくれなし。
一なめげなるは　齋院に成給へる後も心をかくるを。神の御ためにはなめげなるを。とがめ給はで。位にさへ付給へると也。人形にしも見がたきと也。
一八島もる哥　かくれなし。

一神垣の杉　同前。
一此世にはとかや　前巻に身をなぐる時の夢中の哥也。
一みたてまつる　一條院一品の宮にまかせて也。
一一宮　今上の御子。おもてはさがの院御子兵部卿と申奉る也。御元服の夜よりあらはれたる成べし。
一年つもる御哥　かくれなし。
一いにしへになをたちかへる心かな戀しきことに物忘せて
一立かへり　中宮の御哥。今上の入道宮へ御心中さはぐと也。
いにしへの野中のし水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ
一今さらに　えぞしらざらんとも在之。戀如何。無分別。

一あるべかりし人の　あらん事かはのてにはなるべし。
一佛もしゝふしゆせつ　止々不須說。方便品ニ一佛乘の法門を舍利弗の請じ申されけるに。佛のとかじと惜給ふ御詞也。
一きりつぼ　今上の一宮なるべし。
一二宮　飛鳥井の君の御むすめ也。
一故宮　後一條院の御子也。御命みじかくて。かやうに思出奉ると。今上いま覺し召出也。
一いとしも　哀。尤しも。如此の思ひにてはなかりしと也。
一行衛もなくはてもなく覺しまどはせし三河守なれども。母のめのと不便に覺しめす也。
一かへりこし哥　又大貳に成て下りし時のこと也。

一人しれぬ　中宮のうぶぎぬのしるしに。母よめる也。
一さゝのわき葉　蘆のわか葉歟。脇葉歟。
一忘ずば　心あきらか也。
一行末　同。
一をくれじ　同。
一かすめよな　かすめて也。中將の聞もはづかしく覺召。さ衣の御哥也。御遁世の心もむかしは有しに。如此の哥にて御心はみえたり。をくれてくゆるよと也。
一おちたぎつ　涙は波也。過にし方へは歸らぬ世上と也。
一ゑにかける　形さへあるに。ゑなど色々かけると也。
一うちはへたるは　よろしき時も。散飯ばかりとらせ給つゝ。御精進ゆへ御わづらひもよろしからぬ也。源氏に朱雀院の行幸に。いもいの御はち。三衣のけさを。さきへ持せらるゝと也。
一消はてゝかばね　心あきらか也。
一たちかへり　同。
此物語のはても源氏夢のうき橋の面かげなり。少年と書そめて。殘おほくかきとゞめたり。四冊を全部も心あるべし。はかりがたし。後生の人しるさるべし。

流布印本ニ
天正十九年三月九日　臨江齋 法橋紹巴

〔右狹衣物語下紐以流布印本校合〕

續群書類從卷第五百廿二

總檢校保己一集
男源忠寶校

日記部一

はるのみやまぢ 弘安三年

都のすまゐもおもはずにことしよとせになりぬるにや。すぎにし三とせのほどは。うちつゞき心のやみにのみくらされながら。涙のひま〳〵にはいてつかふ事もありしかども。よろづものうくて。しるすともなかりき。

今日は正月の朔日なり。顯官榮職の身ならねば。元三出仕思たゝれずしてこもりゐたり。雲井にちかき宿のしるしには。出仕の人〳〵をぞみいだしつゝなぐさみぬる。故宰相雅有かの時より和哥所とて。その世にはとにはなやかなりし哥のさたなりしを。故かしはぎのよにも。はじめつかたは哥よみおほくて。さかりなりしぞかし。末つかたみ給へりし比は。次第にむかしのすき物ども〻ことの葉ばかりのこしおきて。なかばいづみのもとに歸りにしより。ことのほかに人なくなりゆかましか。又我世となりては。和哥のうらなみたちよるあまもなくなりて。心ひとつになげきかなしめどもかひなし。大かたの世にも。今はすける物もなし。さりながら少々かたらひよせて。今日よりぞ着到の番の哥もすこしむかしにかへる心ちす

る。はじめて入ぬる人〳〵。頭兵衞督爲世朝臣。をとゝの少將爲實朝臣。故土御門の宰相中將の子息侍從具顯朝臣。むかしの手かき哥よみの行成大納言のすゑに。經朝三位の二男前石見守定成。頭督ひとつはらからの律師定爲。又玄覺律師などくはゝりて。柿本もひかりそひぬ。
三日。殿上の淵醉みんとていでたつところに。おもひのほかなる客人どもあまたまうできつゝ。さけのみなどして。とみにもかへらねば。心つきなけれども。うちすてゝたゝむこともわりなくて。よもふけぬれば。ちからなくてみずなりぬ。
四日。今日ぞはじめて出仕せんとて。鳥の時ばかりに。まづとみのこうぢ殿にまいる。かりのよそほいなれば。春宮の御方へはまいらず。くれぬればときは井殿へまいる。こよひは見參はじめとて。人〳〵おほくまいりあつまる。子のはじめ程に。見參にをの〳〵なのりてまかりいでぬ。
六日。衣冠にて春宮へまいる。ともなるともなしよふけてまかりいづ。
七日。ゆき時〳〵うちちりて。のどやかにかすめ(に見歟)り。殿上人上北面少々きたりて。まりけて後。上にのぼりつゝ。さぐりだい五十首よみてあそぶ。かけ物いだしたれば。わかちとりて。心ゆきつゝ歸ぬ。
九日。こよひは法勝寺の修正御幸なり。くるればなをし。たり物のさしぬき。新せいとて。かたびらぞすさまじながらきて。まづ春宮へまいりぬ。時よくなるとつぐれば。ときは井殿へまいりぬ。公卿内府以下十八人少々束帶。その外はみなとのゐすがたなり。左大將直衣のたち笏をもつ。殿上人貫首以下卅よ人。北面のと

もがら廿よ人なり。みだうのとゞもことなければとゞめぬ。あかつきがたにぞ還御なりし。

十日。春宮の御かたの鞠のかゝりうへかへらるべきにて。仰をうけ給りて。木どもみに。神祇のかみの家によき柳ありとて。ゆきてみるに。まとにおほきにもあり。枝さしあしからねば。これもさだめてえだども少々きりてかへらむとするに。家あるじの三位をとゞも。やがて袖をひきて。上にのぼりてあそぶ。連哥連句あり。管絃しつゝ心ゆくさまなり。あまりにあるじのおとゝ康仲といふわか物。もとより舞人なり。消州。三臺。地久。長保樂など舞。折からなればおもしろし。ものゝねどもしみてふけぬれば。をの〳〵あかれぬ。

十三日。かゝりどもうへすかして。くるしければいてぬ。宰相すけのつぼねよりふみあり。内裏のなをしの事御めんのよしなり。日がらよければ。やがてこよひきてまいらんとおもひて。頭兵衛督に此よし申て。御教書をとりて。くゝりさげてまいる。ひさしに殿上人三四人あり。三位殿のつぼねへよろこび申てまかりいてぬ。

十四日。くるゝほどにかもへまいりぬ。たゞすよりみやめぐりして。かみの師のもとにまづたちよりてやすみぬ。御とのひらきにあはんとて。つぼねしつらはせなどするに。忍びて御幸なりぬ。さるほどにならのやしろの御前にねんじゆするほど。そばに女房廿人ばかりむれゐれば。かた〳〵へゐよりつゝみるほどに。むかしの中務卿宮のみやす所の ひと〳〵なり。民部卿のつぼねとて。めいなるひとどもみあひて。ものがたりしつゝ。みなつれたちてつぼねへ入ぬ。とらになりて。みとをひらかんと

するに。あかずして。神供はあらはにぞゝなへける。あやしき事なり。文永にもかゝるとありて。其とし法皇かくれさせ給。京かまくらいくさありしと。宮人など申あへり。これもいかならんとおぼつかなし。

十九日。春宮の御まりはじめなり。まづ參內。其後坊にまいる。女房今日御まりはじめなり。御師匠の身ながら。たゞさらんとほいなかるべし。かつは院の御方よりもしきりに仰あり。いかさまにもたつべし。したうづのそまうは新院の御はからひにてあれば。かなはずばときは井殿の御所にてこそしさいは申されめ。この御所は別の御事なればなど申さるゝを。あながちに申さんも。そのはゞかりありて。たつべきよし申ぬ。さりながら日ごろれいなきよし申て。けふもとのやうにてあらんもけうあるまじければ。かつは其例もあるによりて。したうづははかず。たゞくつばかりゆひてらてたれば。人〳〵めをおどろかしてみあへり。公卿はおほからず。たゞ德大寺中納言。綾のこうぢの三位。たゞ三人なり。殿上人爲世朝臣以下例のひと〴〵なり。あげまりすべきよし。かねておほせあれども。けふはそまうもかなはず。心よからねば。爲世にゆづりてのきぬ。此人したしきうへ。もとより弟子にてあれば。そのやうとふをしへてせさせぬ。よろづとそぎてけふはあれば。二三足けてやがていりぬ。みな人はじめにて。身もたをやかならぬにや。いたくけふなくて。かずさへあがらねば。ことをはりぬ。院の御かたみすのうちにて御らんあり。

廿日。內へまいりたれば。ひさしく出御ありて。きのふの御まりのしだい申べきよし勅定あれば。はじめよりことのやう申ぬ。入御の

後。坊にまいりたれども御まりなし。人〳〵宿所のかゝりにてけるべきよし申て。いざなひていてぬ。日とく暮てなさけなし。後の日をちぎりてをの〳〵あかれぬ。これこそ式の文にかなひ侍ぬれ。

廿二日。とみのこうぢ殿にて。二條大納言入道にまいりあひぬ。一日の御まりの事ども申いだして。したうづはかぬ事。むかしはかゝりけるとかやなどいひつゝ。かんずるよしなりき。大かた此人は當世の有職にて。よろづのとにめ心をとゞむる人にて。かやうの事も申さるゝにこそ。

廿四日。空はかすみながら雪ふりて。木ごとの初はなさかりとみゆ。くるれば坊にまいりぬ。こよひは御會はじめなり。まづ隆博朝臣まいりたれば。この道のことども申いてゝ。今の世のすたれたるよしなど。たがひにかたらひつゝ。ふくれば院の御方も此御かたへなりてのぞかせをはします。東宮御なをしなり。出御あれば。奉行宮司爲方きり燈臺に火ともして御前にたて。御すゞりのふたを文臺にをかる。しだいにすゑより。哥奉行とりあつめつゝをく。傳哥ばかりまいらせられて參なし。讀師花山院大納言。講師隆博朝臣なり。めしによりてちかくまいりぬるこそ。道のものめきてはづかしけれ。哥どもやがて院の御方へまいりぬれば。いふかひなくおぼえずして。かゝずなりぬるこそいとくちをしけれ。さてもすゞりのふたはうつぶけてをくよしきゝをきて侍に。こよひはさもなかりつるこそいかにあるべきとにか。

廿九日。東宮の御いのりとて。としごとに伯三位松尾社にて石のたう一日に八万四千基をたて供養すとて。けふといひていざなへば。定成

と一車にて。松のおがはらへまいりぬ。かすみわたれる河はたのいとひろきしばふの。神さびまさる松のみどりも。いま一しほの色そふけしきみえていとおもしろし。たれも〳〵石とりたてゝ。かずあらそふもけふあり。

萬代をやたびあまりにとる數も君がためとぞ神はまもらん

と心の中ばかりにおもひつゞけ侍し。わかき人どもいづくよりかとりいでけむ。まりをひとつもちいでゝ。これもかずあるいはひの物ぞとて。松のもとにたちよる。こしをこそすらねども。千年のかずはあしにもみちぬべくなんけあへり。石のたうかずとゝのひて社頭へまいる。なにがしの律師とかやくやうして。とのありさま申あぐるも。神の御心もさぞみそなへ給らんとめでたし。さてもあらんやはとて。さけのみ。詩哥連句連歌など。をのがじゝくちすさみつゝ。暮ゆけば歸ほどに。猶しばふの松のもとにて。しひんとするけしきなれば。車はおそくて。ともなるものゝむまをとりて。のりてにぐるに。いまだ心しらぬ馬なるに。人松のかげよりにはかにはしりかゝるに。此馬おどろきてそばざまになぐるに。なじかはたまるべき。をちぬ。ひと〴〵あさましがりてきつゝあれば。いとけうさめて。車にのりてかへりぬ。もとよりこしのそらうあるものが。むまよりをちぬれば。いよ〳〵おこりあひてやみふしぬ。いかなる事ありてか。神の御前にしもかくありつらんとおぼつかなし。

二月

九日。このあすか井のあばらやのわかぎの櫻ほりて。東宮へもたせてまいる。あさがれいの御つぼにうふべきよしさだめられば。四方みなふたがりたる御つぼなれば。たいのやのう

へよりこしてうへぬ。是は日ごろ申をこなふによりてなり。うるはしきかゝりは人ずなき時はかなはず。これは御ひとゝころも又ひと一二人もまいりて。常に御ならしのためなり。やがて神祇かみねこかきまいらせたればしかれぬ。誠や木にむすびつけたう侍しかども。わがもちてまいりはべれば。さもえしはべらで。心のうちにおもひつゞけ侍し。

うつしうふる春のみ山のやまざくら雲井にうつる色をこそまて

やがていてさせおはしまして。いさゝか御まりあり。ことに御時よし。宰相のすけのもとより。内々御鞠あるべしとて。きとまいれといふふみあり。このよしを奏して。藏人佐爲方とあひぐして内へまいりぬ。やゝ久しくして出御有。人數多く内々のぎなり。御まりの御すがた。ありがたくめでたし。御なをしにびの御はかまくゝりをいれてあげらる。建久には五せちの帳だいのよは。御さしぬきめさるゝ事なればくるしからじと。松殿申されしによりて。御さしぬきをめされき。かつは季顯朝臣にかたりしかば。そのよし申さんとぞ。

十日。院の御まりはじめなり。そまう猶とゆかねば。しきりにいなび申せど。たび／＼仰あればまいりぬ。かりぎぬは此道にはとにきるべき物なれば。とのゐすがたはあらためぬ。院御なをし御ゑぼしにていてさせ給ひぬ。人／＼多くまいりあつまれり。露はらひはてゝたゝせ給。おほせによりて御まりあげぬ。此かたのとは例の日記にしるせればおほくのこしぬ。

十二日。雪ふりておもしろければ。内へまいりぬ。御まりのさたあり。暮るほどに坊へまいりぬ。

十四日。東宮の御方。けふより七日。御くすり

の御ゆきこしめさる。入夜てまいりたれど見參なし。內へまいりぬ。出御あり。

十五日。すぎぬる十三日より。本院さがのかめ山殿へ御幸。十七日まで御るすなるべし。番にをられて坊にまいる。こよひは番なればしこうしたり。この曉この御かたの屛のうへに火をつけたり。一らうのはん官說長みてうちけちぬ。いよ／＼番きびしうすべしとて。ひとびとおほくまいりあつまる。

十六日。內へまいりたれば。よべまた火をつけたり。俊光みてけちぬ。かやうに御所／＼火とにて。人／＼おほくしこうしたり。

十八日。雨ふりて御つれ／＼なりとて。南殿にて御鞠あり。かずまりけるべしとて。せめられまいらすれば。としよりてこしのいたはりわづらはしくて。かやうのこまかなるとはかなひがたきよし申せどもかなはねば。南殿東西七間をこまにけて。ゆきかへりてとりぬ。御かんあり。ゑつくの勝負の御まりあり。

廿日。內裏の御まり有。夜に入てはじめて御がくもん所へめしいれらる。詩歌續三十首御會あり。

廿五日。內裏の御鞠なり。あさて新年こくのほうへい使たてらるべきに。一人にはかにことかけたりとて。御前にしてせめらるれば。のがれがたくてりやう狀申ぬ。

廿七日。雨ふる。みの時にまづ內裏へまいりぬ。上卿左府すでに參あるとて。奉行いそぎはべれば。神祇官へまいりぬ。いまだ人もなし。はるかにときうつりてぞまいりあつまる。やはたのつかひ宰相親頼卿。加茂別當親朝卿。松尾資緒卿。平野にさゝれたり。春日公寛卿なり。雨やみて酉のときばかりに。平野にまいりつきたれど。神主まいらず。いと神さびまさる

心地して。櫻木こそすこしけしきつきぬる。松のみえぬぞあやしき。むかしはありけんかし。

廿九日。坊のあさがれゐの御つぼにして。御かへりあしどもならはせ給。ひさしくしたえたるあしなれども。としごろしつけたることにて。けてみせまいらす。ゆゝしき御あしどもあり。内裏よりめしあり。まいりたれば。日ごろさたありし勝負の御まりとて。人々おほくまいれり。左右をわかたる。上の御あひては重代なりとて。やがてさうなくさたありて。まいるべきになりぬ。めんぼく也。左方。内御方。宰相中將公貫卿。頭督爲世朝臣。季顯朝臣。能兼。實敦。爲方。範冬。右方。修理大夫隆康卿。俊輔朝臣。隆氏朝臣。俊光。俊定。業顯。藏人淸顯。しきりに右よりはじむべきよしさたあり。されどかたく申によりて。左よりはじめらる。三度のよし定めらる。左かずなし。右の方やがて百二十あげてをとしぬ。よりて右かちになりぬ。ことにけふあり。

三月

一日。左大弁宰相がもとより御教書あり。無文のふすべがはのしたうづはくべきよしなり。ことによろこび申ぬ。日ごろのそまうたちどころにかなふ。ことの葉もなし。故武衛つゐにそのげちなくてかなはざりしに。そのほいとげぬれば。此道にをきてはのこることなし。車ならねど。此したうづもかけてすゑの世のいさめにもしつべくぞ。今日は東宮坊へ新院御幸なりて。御まりあるべしとてもよをさる。宰相中將公貫卿をもちて内々申入。としごろこの道の前達すでに御めんのうへは。身にとりて又後の春をこし待べきならねば。けふ上よりつかうまつるべくば。おそれながら御所へまいらせ上ばやと申侍しかば。さきこしめされぬと

て。御きそくあしからずと申されき。かたびらは夏の物なれど。先例も三月の中にきたる事もはべり。その上新せいとて。いつもかたびらきるべきよし仰くだされて。元三にもきあひたれば。ましてまりの時かた〴〵よし。かたびらをきる程ならば。あせとり難あらじかしとて。むかしの例を思て。爲世朝臣とふたり。たうしきに直衣にあかゝたびらなり。人〴〵目をゝどろかす。午のなかばかりに新院大宮女院御幸なりぬ。まづ本院の御方にて御たいめん。やがて春宮の御方へなりぬ。まづ露はらいはじめらる。三條宰相中將。公貫卿。あやのこうぢ三位。經資卿。頭兵衛督爲世の朝臣。兼行朝臣。爲雄朝臣。なをしなり。爲實朝臣。爲忠。かりぎぬなり。爲雅朝臣。衣冠。御所の前のをちいたじきに御坐三帖しく。本院。御ゑぼし。なをし。新院。同。東宮。御かぶり。御なをし。露はらひまかりいでぬ。新院御くつ爲世朝臣まいらす。東宮御方おほせによりて御くつまいらず。これはかならずさるべきとならず。このちか比よりかやうになりにたり。新院東宮に御きそくありて御立あり。つぎに東宮御たちなり。其後仰にしたがひて。公守卿。公貫卿。爲世朝臣。爲雄朝臣。爲雅朝臣。たちさだまりてあぐべきよし御目ありて。すゝみいてゝ。まりをとりてきそく常のごとし。あゆみいてさせ給ふ。給時一足にてまいらせたればあそばしつ。今はおもふとなし。院ははじめより御あふぎをもたせおはしますは。長者の御ふるまひなり。けふはいかにもとおもへば。さき〴〵よりははたらかれて。ひと〴〵もかんずるまでこそなけれど。れいよりはよげにぞ思あへるなるべし。かず二百七十にてをちぬ。おもしろきあしども上下おほし。人數に立かはる人〴〵其かず多し。洞院中納言あす内裏にて御まりあるべし。

かならずまいるべきよし申さる。よりてりやう狀しぬ。

二日。しやうぞく昨日のごとし。ひつじばかりに人〳〵まいる。見證に左府昨日けふたゝせ給はず。くゝりさげらる。人數。東宮大夫洞院中納言以下なり。內御なをし紅の御はかまに。御くゝりをいれられてあげらる。奉行洞院申さるゝにしたがひて上まりし侍にき。けふはことにおもしろし。かずぞあがらぬや。

四日。すぎにしころ。めまさりのまけわざの花。あまりせめられまいらせて。やへ櫻一えだ。紅梅一枝。柳のえだに梅櫻の花をとりあはせてつけて。白きうすやうをきりて。さかせつるかなとかきて。つけて內裏へもちてまいりぬ。やがて御所へめしいれらる人〳〵は。思ひおもひに花のえだに詩一あるひは哥一をつく。いとけうあり。けふは內東宮に御鞠あり。身をわけたくはおもへども。かなはねばかひなし。御師匠なれば東宮へまいりぬ。御まりよりさきに。內より頭督と同車して。びさもん堂の花みにわたる。みなまではさきそろはねども。梢どもをくれさきだつ色みえて。いとおもしろし。

五日。東宮のあさがれいの御つぼにて。二人づゝの花つくの勝負の御まりあり。右かちまいらせて。やがてやへ櫻のえだにむめのすゞをかけられて下給はりぬ。ひきこめがたくて。內へもちてまいらせたれば。ことさら色も匂ひもそへたる御心ちすとて。御てづからとらせ給ていらせおはしましぬ。

六日。內の御まりあり。人數なくてあひなし。夜べになりて月おぼろにて。ことにゑんあるよなりとて。女房たち一りやう。おとこ一りやう。予。俊定。業顯。びさもんだう持明院殿までかけあ

りく。女房おとこ連哥も侍しやらん。わすれ侍りてかゝず。くちおし。花の枝てごとにまてこそなけれど。をりて歸まいる。

七日。花山院の右府入道のあはだぐちの山さうへ新院御幸なるとて。御まりあるべし。まいるべしとて。入道のもとよりも。又奉行重清がもとよりも使あり。あしをそんじてまいらず。けふはとに風あらし。あすともたのまれぬ風の前の花なり。夜べのなごりもたへがたし。かぎりの梢ゆかしなど。女房の中より申いださるれば。夜べなかりし殿上人ども。けふみざらんには。此春はさてこそはとて。このおきな一人をなにのゆへとなくせめゐたり。けふは御人すくななり。なまかりそとて。御連句の坐に能發のせうをめしをけとて。とらへられてしこうしたり。のこりの物ども。季顯朝臣業顯等いかゞしてやう〳〵に申。雅藤職事なれど。すき心とにあるものにて。御連句にさふらふも心そらなり。俊光も執筆するそらもなし。やう〳〵にしてにげいてゝ。女房に此翁のくるまをまいらす。隆氏朝臣車にのみのりてせんぼんへゆく。くるゝほどの花のいろいとおもしろし。さるほどに雨おびたゞしくふる。いづくよりかたづねいてたりけん。かさを一もとめいでたり。ぬるとも花のかげにこそとて。猶さらず。しばしてこそあれ。あまりなれば。ぬれじとかさの下にかくれんといひてはしりいりね。其後人〳〵みなかゞまりたてり。あめやみげもなくふれば。長らうのもとへ女房車やりいれておろしつ。はれま待ほど。いざ念佛申させてきかんとて。僧どもそゝのかして。尺迦念佛一時禮讃一時申さす。其ほどにぞはれぬる。この雨は花のためはうけれど。ほだいのたねとはなるらんなど。女房もけうに入て申さる。

思いでなるべし。帰さまにをはりのかみ仲綱入道もとよりこもりゐて侍しがもとへかけてにげはべりし。

くれぬとてけふこざりせば山櫻雨よりさきの色をみましや

みな人〳〵は道よりあかれぬ。今たゞ雅藤顯業ばかりにてかへりまいりぬ。猶雨ふる。さらばとて此ひと〴〵をひきつれて帰て。よもすがら物語してぞあそびぬる。

八日。くるゝほどに。一日のまりの御わきまへこよひあるべし。まづひと〴〵まいりたれば。ねたみあるべしとて。やう〳〵にかゝる。範冬をいだされて。此おきながこしにとりつきてけさせす。かやうにせられまいらせぬれば。いかにおもへどかなはずして。右まけになりぬ。夜にいりて。すみの小御所をしつらはる。かちはひさしにさふらふべしとて。みなしこうしたる。かちのむかへとて。三條宰相中將。頭督以下みなしそくさして前行す。二間のよこしきに御坐をまうく。かちはおくの座にたゝみしかれてこうす。まけ方にはたゝみなし。洞院中納言ばかりぞ同坐にしかうしたる。御所の御分により一白松のえだにつけてたてらる。頭督爲世朝臣櫻のえだにまりこゆみやたてつけて。すりのかみの宰相のまへにをく。御分松の枝にしろきまり。したうづ二足。（一はみなふすべがは。一は紫しどら。）季顯朝臣もちてまへにをく。かしこまりてたまはりぬ。宰相中將公貫。鞠したうづ枝につけて。たかうぢがまへにをく。俊定前に爲方柳のえだにてまりすへ。いしたりのこぎつけてをく。すゑ〴〵みなまり一なり。帰るさまにはみなまいて入。其後せんずまざいのまねたうへんさるがう一なり。洞院中納言しだいとりてこれをはやす。いとけうあり。

九日。内より殿上人三四人。六位一人。一車にてひむがし山の花みる。

十三日。季御どきやうはじめらる。けふはかもの一切經會なりとて。隆氏朝臣。つねお。なりあき。ひとくるまにて内より物みにまいる。まいはつる程に。御所のやのひろひさしにてさけのみてかへるに。猶あかず。いざやいづくにまれゆきてあそばんとて。四條の少將しれるけいせいのもとへゆくに。さしあふとありてむなしく歸るに。さらばとて人〳〵をしいれば。ちからなくてまたゑいすゝむ。つねおあひしれる女房二人。いづくよりかたづね出しけん。ゐてきたり。あくるまであそび物のねならし。ひと〳〵らうゑいし。いひしらずおもしろし。此けいせいもみゝとはなくて一せいなどいふ。けふありしとなり。

十八日。けふはすふくこんがう院の八かうなり。さがへまかりてとりさたすべきに。御鞠のまけわざなれば。代官をやりてをこなはす。夜にいりてひと〳〵まいりあつまる。さきのやうにすみ殿をしつらふ。すこうもとより候はせ給。まけてごとにしそくさして行幸なる。勝坐につきをはりて。まけふねをつくりて。御ひき出物以下をつむ。思のつをはやしてまいる。ふれにろくをしてをしいづ。まづ御したうづのはこをもちてまいりて御前にをく。藏人右衛門佐俊定御まりのひつ。藏人の次官雅藤御くつのはこをもつ。みなまきゑなり。すりのかみ分まりしたうづくつなり。隆氏分すゞりひとりなり。その外みな鞠なり。つねおふねをつくりて。やがてあひてのまへにをく。さるがう五番してみなにげいりぬ。猶おほせあるほど。せうまういてきてうちさましぬ。まけどもよろこびあひぬ。

廿二日。東宮の御會はじめなり。いたはるとあ

りてまいらず。三首うちに庭落花に。

いつよりか庭きよめせん櫻ちる春の宮まの
とものみやつこ

とよみはべりしを。後にきゝしかば。なんずる人もありけるとかや。東宮會をみざるにや。さだめてかゝる事あらんかしとおもひて。花山院の前内府申あはせ侍しぞかし。をかしきとなり。

廿七日。東宮御鞠なり。大柳の懸にてあるべきよしかねてもよをさる。はじめて近衞の內府まいるによりてひきつくろはる。上まりのとによりて。わゝしき事ありしかど。つゐにつとめぬ。いまの世の中いとうるささとなり。人に心をゆるし。たとひしたしき人なりとも。弟子なりとも。うちとくまじきとにこそ。こまかにはむづかしければかゝず。人／＼みなしりたることとなりかし。すぎにし二よの月と花とにともなひし內の中納言のすけのもとへ。ちりのこりたる櫻につけて申をくり侍し。

いかにせん梢あまたにみし花の此一えだに
のこる名殘を

人はいざ忘がたみの思いでは月にみしよの
花の面影

かへし。

わすれめや人の心はうつるとも月と花との
夜はの面影

ちる花の名殘といふも頼まれず梢あまたの
あかぬ詠は

四月

一日。あめしめやかにふりて。ゆふべにやみぬ。內裏へまいりたれば。ひら坐とて。公卿しさじなどまいりあひたり。くれゆくほど東宮へまいりぬ。

十日。ひるつけて東宮にまいりたれば。とに人

すくなゝり。ひさしにてうちこはつくれば。やがていてさせおはしまして。としはいまだ郭公こそきかね。たれかきゝたると御たづねあれば。御もとに女房たちもいまだきかぬよし申さる。いづくになくとだにいまだうけ給り及ばず。その所をさだめ人數をわかちて。はつねの勝負をし侍らばやと申いだしたれば。まとにけふあるべきとなり。院のかたに申あはせて定めんとて。やがてあの御方へなりぬ。とばかりありて。宰相のつぼねにて。まとにさるべきとなりとて。左右の人數をわかちて。左方の奉行はあやのこうぢ三位。右はもよをすべきよしうけたまはる。人々。左方。院の御方。經資卿。邦仲朝臣。爲雄朝臣。兼行朝臣。信有。顯範。右。東宮の御方。雅有。康能朝臣。資行朝臣。長相朝臣。賴成。爲方。女房には左。新大納言さい相。高内侍。右。衛門督。はゝき。せうにんのためにて。女房一人おとこ壹人。兩方にとりかへてめしろたるべし。左の方の所はうこんのむまば。あさて北山殿へ御幸あるべし。右はひんがし山なるべしとさだめられぬ。すなはち右のひと〳〵に此よしをあひふる

十二日。あめふる。ひるほどにはれぬ。けふ御幸なり。やがて勝負あるべしとて。人數みなあつまる。さるのなかばばかりに。右方のひとびと此家にきたりあつまる。女房車一りやう。せうにんのために左の高内侍のりぐす。この車には康能朝臣。せうにんの左信有あり。一りやうには長相。賴成。資行朝臣はこなたのせうにんにて御幸の御供す。先かねて右方あひだんぎするやう。もし一聲もきかでかへりたらんとねんなかるべし。ひとひ後にあらはるとも。一たんろんじたらんは。はるかにけうありなんとて。つくりほとゝぎすをよういす。みな人

〳〵のとものものどもにふかせて是をえらぶに。ともにあるざうしきおとこすぐれて。かねて山にまうけさす。さてわしのおへとてやりつゞくるに。ぎおんはやしにてやがてなきぬ。人〳〵よろこびのゝしるに。左方のひと〳〵すべてとばなし。やがてはやきゝたるよしの哥よめ。おいつかせて御幸に申させんと。やすよししきりに申せど。よからぬ事は中〳〵なるべしと申せば。げにもとてことのよしばかりを使にて申。是よりかへるべきことにあらねばとて。猶わしのおへゆくに。こゝにてもをちかへりなく。これをばしらで。かねてよりまうけたるおとこやつくりごとせんずらん。さらばまともけがれぬべしとて。物どもを山へはしらするさまいとおかし。女房車よりおりて堂〳〵みらる。はてはみねのだうまでよぢのぼりたれば。日はすでに暮て。都の方はげにたゞひとむらのかすみばかりなり。信有侍従山路に日くれぬといふらうゑいを一りやう反す。まとにおりにあひておもしろし。雲間の月はなやかにさし出たる光に歸りまいりて。東宮の御方にてことのよしを申ていづれば。人〳〵せう〳〵おいきたる。よもすがらあそびあかしぬ。

十三日。巳の時ばかりに。北山殿よりとて。兼行の朝臣の文あり。みれば詞なくて。

尋こし山のかひとて郭公人より先の初音をぞきく

返し。

此里にふりにしねをや時鳥山のかひとてけさはきくらん

けさはすこしをくれてや侍らん。還御のゝち。左御勝のよしゝきりに御沙汰ありとてめさる。やがて院の御方へまいりたれば。もとより

東宮おはしまして。御さうろんどもありけんかし。しゆ〳〵の仰どもあれば。左方の人〳〵右方のせう人とめしあはせて。きこしめすべきよし申せば。十六日と御さだめあり。

十四日。けふはかものまつりなり。なをしにくゝりあげて內裏へまいる。つかひは少將みなもとの忠顯なり。れいのさほうなればしるすにをよばず。

十六日。けふはほとゝぎすのもんちうあるべし。いそぎまいるべきよしのもよをしあれば。まづ東宮の御方にまいりぬ。持方はそ狀をかきてけざんにいる。左方に付べきよしうけ給りて。これをつくるに。左方の人申やう。御前にしておきのもんちうのうへは。ちんじやうにをよばず。東宮院の御方へなりてめしあはせらるゝに。右方のせう人すけゆきの朝臣。院より仰をうけ給はるかにて。是非物を申さず。其けしきことにおかし。このうへは猶きゝなをすべきよし御さたあり。右方みなそせうあひのこれども。ちからなくてまかりたちぬ。

十八日。けふなをひんがし山へまかるべきよし御さたあれども。あめつよくふる程に。たゞ御所にして勝負すべきよし御さたあり。左右の人〳〵まいりあつまりて。くるゝ程に院東宮中の御所へなる。ひろひさしにをくはしをわかちて左右の坐とす。かう一寸をかぎりとすべしとおほせ下さる。すなはち左方かうのもゆるほどほとゝぎすをまつほどに。兩方の人〳〵連歌どもあり。すでにかうもえはてゝのち。又右さきのごとし。猶なかざるあひだ。このうへはくじなるべしとてくじをとる。右かちをはりぬ。左方の人まとはちからなしと申てたちぬ。

廿一日。左方のまけわざとてもよをさる。くる

ゝ程にひと〳〵まいりあつまる。しん殿のひがしおもてをしつらはれて。みすをかけられて。りやう御所女院御らんぜらる。右方人數すのこにさふらふ。まづふりうほんしよのもんしやくなり。そのゝちさるがほ碁めまさりにてねたみあるべしとて。御前にしてこれをうつ。右又かちぬ。やがてさるがほ一。いまはいまけたるべきよしおほせくださるゝあひだ。右方りやう狀申てまかりたちぬ。

廿六日。このほとゝ同ことにならしたれども。ゆふさりなればとて。つとめてより人〳〵まうできて。口ぐらしならす。夜にいりておのおのまいる。しむ殿のひがしむき。御しやうぞく一日のごとし。まづふりうむまをさ（馬長）。つぎに本てんがく（田楽）。其後さるがほ碁。各みないそぎまかりいづ。なをすべきよししきりにおほせあれども。あめおびたゞしくふり。よふけぬるほどにまかりあかれぬ。

廿八日。内裏へまいりて。やがて東宮にまいりたれば。常の御所の御えんへめさる。もとより續拾遺集を御らんぜらるゝ程なり。このたび入たる戀のうた。もての外に御さたあり。女房たちいづくのけいせいのもとへよみてやりたりける哥ぞ。たしかに申せとせめらる。めんぼくきはまりなし。内裏さまには。中將におそくなりしうれへの哥を。御口につけらるゝよし。宰相の典侍これをかたれば方〳〵めんぼくなり。

五月

四日。かもへまいりてつやす。あけばまかりいづべけれども。くらべむまみんため。師のもとにたち入。新院御幸おそきによりて。日くれぬれば。のこりをもみはてずいそぎかへる。かねてより六七日は内のかたき御物いみなり。ま

いるべきよし仰あるほどにまいりこもりぬ。きろく所をつぼねに給はる。又あすよりは富のこうぢ殿の供花なり。とりのとき番なるよしもよをさるれども。御物いみにまいりこもりぬれば。致顯朝臣に申あつらへぬ。

六日。ひぐらし御連句。日をかゝせおはしまさずして。六十日ばかりになりぬ。内々は百日の御心ざしながら。其よしを仰いだされざるよし人〳〵おもへり。ゆふつけてこもりたる人〳〵つれ〳〵なりとて。わかき女官とのもづかさあひともなひて。此つぼねへみだれいる。よもすがら連哥し酒のみあそびあかしぬ。

七日。けふぞ空は心ちよげにはれたる。よさりまではこもるべけれども。供花のためにまかりいでゝ。とりのときの番つとめぬ。

十二日。よさりは行幸のあひだ。ひつじの時にまいりて。番をつとめかへてまかりいでぬ。やがて内裏へまいる。出御あり。奉行雅藤。こよひの行幸ことに無人なり。さきのたびも供奉して。今よひも又まいる。しんべうのよし仰あるよし是を申す。ことにかしこまり入てまかりいでぬ。いぬの時ばかりに人〳〵皆參。公卿。大井御かどの大納言信嗣。中御門大納言經任。左大將洞院中納言公守卿。予。仁わじの三位顯名の卿。頭中將基顯。頭兵衞督爲世朝臣。佐左五人右二人。右すくなきによりて。左の下らう右にわたる。子の時に行幸。北白川殿へ御かたゝがひなり。還御とらの時。河原より夜あけぬ。日出る程まで猶さぶらひて。着到してまかり出ぬ。

十四日。あした東宮の女房より文あり。今日藤大納言爲氏卿奉行として御まりあるべし。其むねをぞんぢすべきよしなり。これは上まりわらしの後なればもし思やらなどあらばの

御よういなれば。とにかしこまるよし申す。又二條の左大臣殿より御ふみあり。けふの御まりにまいらむと思に。あゐしらぢをよういしたるが。なまじいにしきがはをゆりたる身にて。此かはをはかんといかゞあるべきとなり。上は下をかぬるとにて候へば。くるしかるまじきよしを申ぬ。藤大納言のもとよりもよをす。きうぢいまだ心よからず侍れども。たまたまの御奉行にて候へば。たすけまいるべきよしを申ぬ。大方人數まいらず。けふの奉行をば爲雄朝臣にゆづりて。後に奉行しなをすべきよし申てまいらず。人數たゞ御所。左府。經資卿。予。範藤。爲雄。兼行。長相。爲實の朝臣。爲忠ばかりなり。御まりとなる事なし。まかりいてゝ又かへりまいりて御とのゐす。御方たがへのために。院の御かたへなりたゞ康仲二人ばかりしこうす。あか月のかねのゝち還御。東宮なを御とのごもらずして御物がたり有。おとこ女あはぬ日ゝいまだしろしめされざるよし仰あるに。むねとの日ゝを申せば。御ときよし。

十五日。あすあさてれいの内裏御物いみなれば。まいりこもらんとて。まづ東宮にまいりて。夜にいりて内りへはまいりぬ。

十六日。あしたとく御がくもんぞへ出御ありて。ひわりごをいださる。みきひとながれのゝち。連哥連句の御せうぶあり。連句のかた。上。民部卿。伊賴卿。親顯。通俊也。連哥の方。予。敎經朝臣。俊定。俊光なり。連哥のかたまけたてまつりぬ。その後此ひと〳〵花山院三位中將あひともなひて。此局へうち入ぬ。もしさるともやと。かねてよりまうけたるとなれば。さけとりいでたれば。人〳〵けうに入て歸りまいりぬ。

十七日。ひさしにして四條中將たかうぢとごをうつほどに。女房のなかより。あさがれいの御えんにまいりてうつべし。御らんぜんとあれば。かほあかむこゝちすれど。いなび申べきにあらねば。もちてまいりてうつにかちぬ。ある人のもとより。御物いみは乙日なればと申をこせたれば。內々女房へいとまを申に。猶かなふまじきよし仰下さるれば。へんじに申つかはし侍。

五月雨の雲のかよひぢ猶とぢていづるそら
なき有明の月

十八日。夜にいりて東宮にまいりたれば御遊あり。御所。洞院中納言。びわ。花山院大納言。しそく宰相中將。ふえ。顯範朝臣。資顯。長もと。しやう。藏人のりなを。ひちりき。ゑもんのかみつぼね。こと。洞院中納言有經の朝臣。のぶあり。らうゑい。てうしはんしきてうことにおもしろし。まとや過にし四月に續拾遺にもいりたる少將のつぼね一首をかけたりしを。その日しも御前に日ぐらしさふらひて。夜にいりたりしに。とみの事いできてかへしえせずなりて。つぎの日たづねしかばまかりいでぬ。その里をもしらずして月日ををくりはべりしに。今宵しもまいりたり。ありし返事藏人兼有してせむれば。たゝうがみのかたつかたに。

いにしへの跡もかひなき和哥のうらしらで
や浪のこゝろよせけん

かの歌は いにしへのあとをたづねしもしほ草しきりによする浪もかひなし。 この哥よりさきつかたもふたゝびまてをくられしゆへなり。

廿三日。れいのあしのけおこりて。心ちわびしければ。出仕にをよばずひれふしたるに。俊定が奉行にて。一よのまけわざことよひなり。まいるべしと申たれば。かなひがたき心地ををこ

してまいりぬ。俊光おそくまいるほどに。夜ばかりに百番の連哥連句をはじめらる。予連哥のほく。其後心ちいよ〳〵わびしくて一句もえつけず。いかなる事ぞと御さたあれどもちからなし。猶まけまいらせぬ。かけ物百也。

廿七日。昨日けふは内裏の御物いみなれば。をとゝひよりまいりこもりたるに。本院御如法經のために昨日かめ山殿へ御かう。御るすのあひだ。東宮の御方にしこうのひと〳〵番をまいる。あすよりしこうすべきよしもよをさるゝあひだ。いとまを申てけさよりまいりぬ。三番にをらる。一番管絃の人數なり。二番は風月しゆなり。三番は哥のしゆなり。番は五日いつよづゝなり。さぐり題は日ごとに百しゆあるべしとて。けふよりはじめらる。人數。御所。長相の朝臣。具顯の朝臣。定成。顯世なり。予十五首これをよむ。とのゐにさぶらふ。

廿八日。さぐり題の人じゆ昨日におなじ。たゞ有嗣。在兼まいりくはゝりて詩をつくる。予けふは十二首。

廿九日。けふは廿二首。三條宰相中將。そのほか人〳〵まうでくべきよし申によりて。いとまを申てまかりいでぬ。こよひはとのゐせず。

卅日。けふはさぐりだいの人數六人なり。予がぶむ廿三首。其後御連哥一折。自朝惟衛心。

六月（一日脱歟）

さぐり題けふけちぐはんなり。すでに五百首なり。いまのこる五百首は。このたびの番の時をはらるべきよしさたあり。けふは十七首よみはべりぬ。とのついでにそともといふ事。日わきの說を申いるれば御けうあり。よりてあすよりしのびて古今の御だんぎあるべしとて。人數さだめらる。予。ともあきの朝臣。定成なり。

二日。ひつじばかりにまいりたれば。定成まづつり殿へんにまちまうけてあり。今日よりは弟子になるべきよし思ひ給ふ。古今のまんなじよさづくべきよししきりに申によりて。一反よみきかせをはりぬ。そのゝち具顯の朝臣まいりたれば。御だんぎをはじめらる。古今は仰によりてひ本をまいらせ入。講師ともあきの朝臣かきて。定成こまかにしさいを申せば。ことに御けうあり。このりやう人のきく事はゞかりありといへど。公平を思てわたくしをかへりみず。ふじの山のけぶりの所にてひと〲あつまれば。みなとりかくされぬ。其後内へまいる。

三日。過にしころ。ぎおんの會の御ぶんのむまをさ御ことかけたり。いかゞあるべきなど御さたありしを。たはぶれに明年のじよゐに御きうをだにもくだされば。雅行かまくらに候といふとも。これにてのせはなんと申たりしに。げに〲といふ御きそくにて。御事かくる所にのせしんずべきよし申と返々しんべうなり。まづせうでんをおほせらると有。さうなくりやう状申がたきあひだ。これよりうけぶみをまいらすべきよしを申ぬ。女房のもとよりむまをさの事公平たり。御きうの事もとよりおぼしめさるゝ所に。かく申うへはさういあるべからずのよしのふみなり。よりてやがてまいりて。女房によろこび申ぬ。

五日。古今の御だんぎ。序の中ばより一巻のなかばにいたるとき。外人まいるあひだ。又さまたげられぬ。

六日。古今の御だんぎ。春の上下おはりぬ。そのゝち内へまいる。

七日。はじめて日吉の社へまいる。

八日。まづ内人まいる。そのゝち東宮へまいり

て。古今の御だんぎ有。夏秋の上のなかばまでなり。
十日。古今の御だんぎ。秋の上よりたびのぶんにいたる。御哥合あり。
十一日。古今の御だんぎ。上でうおはりぬ。いさゝかおもふところあるによりて。しのびて僻案抄。顯昭が古今序のしやくをけざんにいる。今日より又御百首はじめらる。予が分廿一首。
十二日。けふの御さぐりだいに予十首。御心ちわびしきによりて。やがてまかりいでぬ。
十三日。けふは廿一首。夜にいりて御とのゐのために歸りまゐる。御だんぎ第十一のなかばかりなり。藤大納言の弟子しこうのあひだ。きかせられじとてとゞめらる。
十四日。廿一首。こよひは御とのゐせず。内へまいる。
十五日。まづだいりへまいる。御ゑのみゆるあひだ。申いだして東宮へもちてまいる。れいの御百首けふけちぐはん。千首にみちをはりぬ。御製こ今日は人數おほきあひだ十一首なり。めでたきことのほかにあがらせおはします。
なり。人の哥のかずはしらず。予が歌のかずとりあつめて百七十一首なり。
十六日。この日ごろのくたびれ。あつさといひ。たへがたければやすまんとて。けふよりの内裏の五日番にも。いたはりのよしを申てやすむ。
十八日。ゆふかたになりて。内へまいりて。しゆくに候て御とのゐす。月あかく風すゞしき程に。よもすがら御あそびあり。南殿にしてあるひはいねをし。あるひはかちくらべむまをのり。やうやうのくるひどもあり。
十九日。またとく東宮より御使あり。うちつゞ

き三四と御つかひはしりかはる。如法いそぐことあり。すなはち參るべしとあれば。とる物もとりあへずまいりたるに。やがて出御。女房たちはさうどうす。何どやらんとあきれたる所に。この御所はこのあか月より七日のしよくゑなり。無人のあひだ。內裏の番とはしろしめしながらめしいれたるなり。此ことをきゝたらばよもまいらじとて。いだしぬきたるなりとて。わらわせおはします。ちからなければ。ことのよしを申て歸りまいらんとて。內へまいりて殿上口にたちて。しもながら申いれてまかりいでぬ。

廿日。けふは御如法經の中(十歟)種供養なり。見聞のためにさがどのへもまいりたけれども。このしよくゑにちからなくて。坊にしこうしたり。

廿一日。かまくらより使あり。下べきよしなり。おもひまうけたることなれど。さしあたりてはむねひしぐる心ちす。

廿二日。ひぐらし千首のしだひをかさねらる。淸書せらるべきゆへなり。その人數。經資卿。予。長相朝臣。具顯朝臣。すけあき。定成。爲方。いゑ顯。女房。大藏卿のつぼねなり。はしつくりのやう。藤大納言にたづぬべきよし仰あるあひだ。狀をつかはす所に。續百首和哥五月かくべきよし申て。すなはちまいらる。庭にしとみのもとをしきて候。予おなじくさふらふ。八月十五夜に御哥合あるべきよし申をこなひて。人數をさだめらる。

廿三日。千首百首づゝとりわかちてみなきよかゝる。五月つごもりの百首たまはりて。これをかく。よにいりて坊にまいる。古今の御ふしんども。人〳〵に御たづねあるべきよし。內々申をこなふによりて。あむをかきてしんずべきよしうけ給りてまかりいづ。

廿一日。寺のこん堂供養のゆへに。山おこりて寺にむかふ。北の院をやきはらふ。ぶしといくさにをよぶよし聞ゆ。

廿六日。まづうちにまいる。つぎに坊にまいる。ことのついてうかゞいて。としどに百日の哥いまだかゝず。ことしいまだはじめず。らい月の一日よりおもひたつよしを申いてたれば。さらば御所にてよむべし。ないく御所にもあそばさるべきよし仰らる。めんぼくきはまりなし。

廿九日。新院にまいる。いづみ殿になりたるあひだ。げざんをとらずしてまかりいてゝ。日ぐらし坊にしこう。あすより百日の御哥あわせたるべしとて。宗匠題をいだす。おりふし世さはがしきあひだ。しのびやかに人數を定めらる。御所。經資卿。大藏卿のつぼね。範藤朝臣。かねゆきの朝臣。長相朝臣。具顯朝臣。爲方。定成。以上十人なり。外人にをよばず。夜にいりてとし定がもとより。こよひ如此無人なり。御とのゐにまいるべきよし是をもよをす。やがてまいりて。御たづねの後。代官五人をまいらせをきてまかりいてぬ。

七月

一日。內裏へまいる。くろ戶にいてさせおはします。御前に人三四人さぶらひて。御物がたりあるほどに。めし有て東宮にまいりたれば。けふより百日の御哥の題かづく。春夏ばかり。藤大納言これをまいらす。御哥のとも評定あり。百日までは御心もとなし。いまだ御百首なし。此だいにて九月十三夜にえいしんすべし。哥合につがはるべきよしさたあり。さきの千首うたがはしきこともあれば。みなせい狀すべきよしさたありて。右少弁爲方筆をとりてせい狀のこと葉をくはへて。ひとくはんをく

はふ。人數十二人也。又代々の集どものなんぎ家々におほし。これをかきあつめて。よからんには内(閲欤)し。ひがごとあらばかんがへなをしてしたゝめをかれば。後の世のかゞみたるべきよし申いてたれば。ことに御きそくよし。此たびのぼりたらん時。御さたあるべきよし仰らる。古今ばかりはかまへていそぎ人〳〵に御たづねありて。冬まかりくだり侍らぬさきに。御さたあるべきよしを申せば。しかるべきよし仰ごとあり。かやうの事につけても。まいらぬ日は御つれ〳〵なり。下までもよるひるしこうすべきよしおほせ事あり。

四日。まづ内へまいる。つぎに新院へまいり。そのゝち坊にまいりたれば。一日の御哥合のねたみあり。廿五番につがはる。左。御所。のりふち。長相。具顯の朝臣。右。經すけの卿。此おきな。爲方。定成なり。さぐり題の五十首。心地わびしき程に。四首よみてやがてまかりいでぬ。

五日。坊にまいりたれば。昨日の御哥合。大納言はんしてまいらせたり。右方二首まく。よみたりし四首はみな持なり。御百首の事。坊の御百首。そのれいゝまだうけ給はらず。もしはじめならば。人數もともえらび御さたあるべし。たゞはじめの御さたのとをりにて。百首のよしにて。すじごとにたんじやくをまいらせいれば。なんあるべからざるかのよしを申せば。人〳〵も其いはれありとて。そのぎになりぬ。

六日。うちにまいりたれば。あすあさては御物いみ也。こよひよりこもるべきよしおほせらるれど。こしやう申ぬ。又坊にまいりたれば。千首の御哥。はじめ一日の分。爲氏卿てんあひてまいらす。御製に三首。予一首。定成一首なり。句抄と申ものをしかけたるよし申いてた

れば。まいらせよ。御らんぜられんと仰あり。爲兼の朝臣まいりたるよし申。そともと申としりたるよし。人にあひて申侍けり。御たづね有て御らんぜられ候べし。きたとさだめて申侍らんか。それはいかなるゆへぞ。又いづれの文にみえたるぞと。かさねて御たづねあるべきよしを申をこなふ。我ながらはらぎたなき心ちぞする。かの朝臣まかりいてゝののち。そともはあんのごとくにきたと申。かさねてそのゆへを御たづねあればしらざるよしを申。又万えうのとき時代を御たづねあれば。もんむのよしを故入道は申候しかども。いさゝかふしんなるよしを申。いかさまにてもけいこはするとおぼえ候よしを申ていでぬ。

七日。東宮に日ぐらししこう。句抄しかるべき物なり。御さたあるべしとあれば。さらば万葉より續拾遺にいたるまで。その〳〵五ふをかゝせらるべきよし申せば。かきての奉行は具顯朝臣なるべし。したゝめんとは奉行すべきよし仰有。續百首あるべきよし御さたあれば。まかりいてゝやがて歸りまいりぬ。乞巧奠のとぢのさたあるよしにて。院の御方より。たてぬべき人さふらはゞ。たてさせらるべきよし申さるゝによりて。しもなるゑもんのかみのつぼねに御たづねあり。もし御とかけ候はゞ。たつべきよしを申せば。よろづの事をおそろしくししりたりける物かなと仰有ほどに。ゑもんのぼりてたてぬ。つぎ百首はてぬれば。後夜のかねに人〳〵おどろきてまかり出ぬ。つねすけの卿。雅有は猶候べきよしおほせありて。院の御方の女房めして。つり殿にて御あそび有。御心にかゝりたる人なめりかし。二人ははしのもとに候。あけはてぬれば。入御あればまかりいてぬ。

十二日。めしありて坊にまいる。ない〳〵日本紀かうぜらるゝゆへなり。身にあてゝしかるべからざることなり。いまだ師説をうけず。たゞこのむばかりなり。はくの三位すけおの卿。これをよみあぐ。三四まひの程に。圓まん院の宮まいり給とてとりをかる。花山院の前内府ふみあり。花園殿のしきしかたの哥申あはせらるゝふみなり。

まだきより風は秋にぞ通ひける夕日にうつる松の下かげ

十七日。三井寺のとによりて。せけんすこしさはぐ。暮る程に。古今の御ふしん一くはん。一日ころおほせをかぶりてかきてまいらする所なり。これをたまはりて。花山の前内府の御もとにまいりたれば。他行にて空しく歸りまいる。かりのよそをひなる程に。うへゝはのぼらず。もとより爲氏の卿おなじすがたにて。御つぼにしとみのもとをしきて。持明院の二位としこう。おなじく其もとにつく。とばかりありて。兩人まかりいづ。れいの御哥さたあれば。戀とうらみとは詞はかはりて侍れど。其心地はいかにとりわけ侍るべきと申せば。まことに日比はなにとなくおぼしめしわかずとて。女房たちまでやう〳〵わかちさたあり。戀は他事なく人を思。うらみは我は人をおもへども。人はおなじ心ならねば。我身にかへりてなげくなり。又おもふと戀ともおなじことなれども。つよきは戀。よはきは思にてこそあるべけれと御さた有。かうたけ月すさまじければまかりいでぬ。

廿日。申べき事ありて。やすよしの朝臣のもとにいきぬ。物語のついでに。かの朝臣。東宮のおほせには。予がうたのさたほと〳〵人にこえたり。あれ程さたしつらん事よと。御物がたりありしなり。御るすの千首の愚詠あしから

ぬよし申せば。かたはらいたくてかへりぬ。
廿八日。坊にまいりたれば。あぜち殿いてあひて。よろづの道くはしくさたしたりける。ふしぎなり。ことをさへひじまでさたしたりける。過にしきかうてんのとぢのやう申ける。かのことぢはことなるひきよくなるをしりたりける。おそろしと御さたありけるとかたらる。やがて出御あり。御とのゐに候べきよしおほせありてえいです。
廿九日。二條大納言入道。すけすゑの卿のもとにむかひて。日本紀源氏の物がたりなんぎども。また出仕かたのとゞも。日ぐらしたづねきゝて。そよに入て内東宮へはまいりぬる。
卅日。新院の御所のたう番なり。見參のこくげんをまつ程。ほどちかきはくの三位が陣家にむかひて。物がたりのついでに。一日院の御方にまいりたりしに。予おなじ心に坊中のほうこうをいたすこと。返〳〵しんべう。たはぶれとまでも。なをゆへあるとを思てぞ。せんなきとを申さず。よろづの事につけて中をこなふ。忠なりとて。しゆ〳〵かんじ仰下されしなどかたれば。まとにかくれたるとくはやう〳〵あらはれゆくにやと。たのもしくおぼゆ。

八月

二日。いまだ御よるの程にまいりたれば。やがて御ひるになる。御えんにめされて。つくり物のたな一これを給はる。すけおの卿めされてまいりたれば。すゞりどもさたありて。女房のなかより七めん。資雄一めん。予は四めん。あき家一めむ。めしいだされて。一二をたてらる。わたくしのすゞり一番にたてられて。御すゞりにめしかへらるべきよし仰ありて。あを海といふ唐すゞりを下給はる。此すゞりをめさるゝだにめんぼくなるに。御すゞりをさへ

くださるゝ。なかき家の賓なるべし。十五夜の月そくなり。御會あるべし。月いてぬさきにまいるべしとあれば。みなまいりあひて。御てうづのまにしてつぎ百首の御さぐり題あり。哥のはじめおはりにいろはのもじをゝかる。かぶりはらりるれろ。くつはいうあ。これらのもじことに大事なり。人數十人。御所。五首。すけやすの卿。九。經資卿。十一。予。十一。範藤朝臣。十一。爲兼朝臣。十二。長相。四。具顯朝臣。十三。あき家。四。定成。十一。女房大藏卿。八首。ひかうのとき。院わたらせおはしましてきこしめさる。ひかうはてゝ。かけ物わかちとりて。後夜のかねののち。みなまかりいづ。

十六日。內裏のたう番なり。こまひきみんとて。夜に入りてまいりたれば。やがて中門にいてさせおはします。御ひきなをし。女房御ともしにおほくまいる。きんじゆども。民部卿これより。花山院三位中將。師藤。予。これさだ。むねつぎ。さね仲の朝臣。みな中門の下にたちてこれをみる。上卿二條の殿の大納言。宰相中將。公貫卿。すけにはむねちかの朝臣。なり顯の朝臣。少納言。經まさ。あさき沓をはくべきに。くわをはきたれば。人々みなわらふ。こよひは弁官なし。これも先例なり。夜中ばかりに事はてぬ。

十八日。ひごろ御さたありし句抄。いそぎ奉行してかゝすべきよし仰あれば。院の御方の御きそくうかゞはんために。やすよしにあひふる。ふみにて返事す。奉行のと內々相うかゞふ所に。何どかあるべきやのよし仰下さる。

廿日。のりときふみを送る。古今の御ふしんひと〳〵しるして後。內々えらびさだめらるべし。予うけ給はりてさたすべきよし仰あり。其仰とはいかにかくべきにか。はからひ申べしとあれば。しよぞん申ぬ。としごろほたるをあ

つめし。かくれたる光あらはるゝにやとおぼえて。うれしきことかぎりなし。
廿六日。坊にまいりたれども人もなし。出御あれば。れいの御哥さたのついでに供花のあひだ。おとこ女房らうぜきどもはなはだし。かまくらさまのきこえもびんならず侍り。ことしより御せいいろ／＼めでたく候ぬべきよし申せば。やがて女房して院の御方へ申さる。しかるべきよしの御へんじあり。よろこびてまかりいでぬ。女房のふみあり。古今の御ふしんえらびさだめられん時は。一人御手たすけのためにまいるべきよし仰下さる。ことにめんぼくなり。

九月

一日。七月一日よりの百首よみはてぬれば。又今日より百首をはじむ。
四日。坊にまいりたれば。圓まん院の宮御參あり。御いでの時。殿上人四五人相ともないて御おくりす。其後ひさしにかへりまいりたれば。あぜち殿たいめんあり。人／＼おほくほうこうすれども。御師とくありつぐの朝臣と二人ほど。ことにふびんにおぼしめさるゝよし。たび／＼仰あり。ことにこぞよりしこう人にすぐれたり。ありがたきことなり。まいらぬ日は御つれ／＼のよし仰どあり。まして都の外へ下なん後。いかにおぼしめしいでむずらん。いまだ御きびわなる程にて。なにども御心にいらず。されども御哥さたは御心にいりて。古今の御さたまてになりたれば。ひとへにかうみやうなるよし。院の御方さまにも御さたあるよしかたらるれば。こと御ことよりも。御哥かたの御心におぼしめしとゞめらるゝにてこそ。人の中をこなふことにはよるべきにも侍らず。大方世つぎなどぞ坊の御程にてはよく御覽ぜら

れて。世のなりゆくさまも。御まつりどのよしあしもおぼしめしわくべき御事にてぞ侍る。かのふみは御くらゐにては御覧ぜられぬよし。ふるく申ならひて侍れば。いぜんに御らんぜられたらば。よくこそ侍らめなど申程に。御たづねもすきあればまかりいてぬ。

十三日。供花のけちぐはんなり。御だう師けんしち法印。公卿。經任。ときつぐの卿。みななをし、殿上人。もとみつの朝臣。頼成奉行。經雄御ふせをとる。このたびの供花さき〲にもにずらふぜきなし。ことにめでたし。

十五日。坊にまいりたれば。古今の御ふしんどもかきぬく。人〲まいりたれば。さまたげられて又とりをきぬ。夜にいりて歸まいりたるに。東宮は院の御方へなりぬとてあれば。にしの御所にまいりてしばらく候て。東宮の御方に人なければ御とのゐす。大藏卿のつぼねよりとて。すゞりのふたにしゐをいれてをこせたるをみれば。葉に哥あり。

　おり〲は哀ともみよつれ〲のしゐて忘る程はなくとも

返し。あらぬ枝の葉に。

　おり〲はあはれともみん椎の葉のはがへぬ途の長き形見に

あづまのつとにうれしくもとかきて。女官にとらせぬ。

十九日。夜にいりて。うへふしの心づかひしてまいりたれば。をかしきかたさまにさるゆへありて。賞を申たばるゝと侍しを。おぼしめしいだされて。こよひをこなはるべし。候へと仰あれば。もとよりおもふとなれば。なにとてかはいてんや。この程は院は西の御所にて。院のあさゆふわたらせおはしますつねの御所にほどちかくとて。東宮おはします。院わたらせ給

て。此御さたなめりかし。いとわらはせおはしまして。御ぬりごめひらかれて。むかしよりのかなの日記どもとうでさせ給ひて。日ごろゆかしがるなれば。みるべきよし仰くださる。ひさしに候ひしを。めしありてつねの御所とひさしとの中のまへまいる。めもくれ心もまどひながら。かたじけなきをひかりにてみたてまつれば。院東宮をはじめたてまつりて。女房あまた候給。御さうしは御手ばこのふたにいれられてをしいだされたるを。たまはりてまかでなんとするを。しばしあづまのなごりをしまんとて。女房杯さしいだされたり。御扇にくりかんしやうのはこはりこさかづきさしそへられたり。いとかしこきにはとのかきはもおぼゝえず。たゞうちかしこまりてさふらふに。此御てうしみなつくすべきよしたびたびくだれば。七どもちてのみて。かはらけふところに入てまかり出ぬ。かゝるためしたかき人はありもやしはべらん。とを山がつの宮こなれぬ心ちには。めづらしくありがたきことにのみおもひかしこまる事は。ことばを盡しがたう。こと葉は心をつくしがたければ。おもふ程はいかてかしるし侍るべき。後にみん人わきまへ侍れかし。すゝまれぬたびの道は。とこうするに神な月廿六日にもなりぬ。坊にまいりたれば。宮内卿のつぼねにて。院の御方よりおぼしめさるゝやうあり。さしあたりてとがめなどあるまじき程ならば。春まではのびてしこうせよとおほせくださる。御前なればさうなくいなみ申さんとかたじけなくて。あづまよりのぼりて候物に申あはせて。御返事は申あぐべきよし申侍にき。後にやすよしの朝臣にて。とのやう申いるれば。さらば春はとくして上べきよし仰くださる。

十一月

三日。よる坊にまいる。つぎ哥あり。百首人數。上。經資の三位。雅有。範藤朝臣。兼行朝臣。長相朝臣ばかりなり。

寄雪花　御製

嵐吹このもと斗うづもれてよそにつもらぬ花の白雪

暮春

とゞまらぬつらさを誰にかこたまし人やりならぬ春の別路

浦月

こと浦になびきにけりな煙さへ月のためなるよはの鹽風

忍戀

いつまでか思みだれんひとしれぬ心の中の忍ぶもぢずり

不逢戀

はかなしな猶さりともと同じ世にいける命の頼ばかりは

寄夢述懷　經資卿

夢にさへ身のことはりの程みえてうつゝのうさぞ替らざりける

春雨　雅有卿

さえくれし昨日の雲の雪げよりけさ降つゞく春雨の空

寄鏡戀

みせばやな鏡の影の面がはりしらぬ翁の戀の姿を

關鷄

かねてよりゆふつけ鳥の音をぞ鳴こえん日ちかき關の此方に

雪中鶯　範藤朝臣

春きても猶空さゆる雪の中に花やをそきと鶯ぞ鳴

梅風　兼行朝臣

雪消ぬおなじ梢の梅花さく方しるく匂ふはる風

田家秋寒

山田もるかり庵寒み露霜のをくての稲ば秋風ぞ吹

寄衣戀

逢とみし夢ぢもたえてさよ衣返すは何の頼なるらん

夏艸　長相朝臣

しげりあふ庭の夏艸深くとも君につかふる道はまよはじ

みなわすれにたれども。心にのこるばかりをしるしはべれば。よきもおほく殘るらんかし。又あしくかきたがへたるもはべらん。兼行講師にてよみあぐ。文臺のさたにもおよばず。ゝみとりのうへにひあふぎをひろげてぞかうぜられ侍し。中〳〵おもしろかりしとなり。

十一日。下もいくほどなければ。いとゞなごりもおほくて。くるゝほどに東宮にまいりぬ。ひさしに出御あり。いかにおもふらんなどうちしめりおはしまし。しやうとうもまいらず。月御覽ぜられておはします。大方にだにこぼれやすき涙の。いかでかかゝるみけしきにつれなからんや。いひしらぬ袖のうへなり。月をだにやどしてみんには。げにぬるゝひかりにてもあらまし。仲頼といふ新院の上北面。なごりとてまうできたりと申せば。たゞいまいでんもいと口おし。又いでざらんも人のため情なかるべしとはかりて。ちと此よしを申てやがて返まいらんとて。頼成を申てあひぐしていてぬ。さか月めぐるほどなく又まいりぬ。又いでさせ給ひて。こよひはなごりなれば。御とのごもることあらじとて。月をのみながめおは

します。御前にあきのり。のぶあり。頼成ばかりなり。女房。あぜちのつぼね。右衛門の督のきみなり。かうたけよふけて。月入がたになりぬ。御物がたりどもいうにて。人〳〵おもはぬ涙も。おりからにやしぼるばかり也。御びわめしいだされて。かきあはせばかりしのびやかなり。信有かんにたえず。をりにあふらうゑいいまやうしつゝなさけおほし。頼成ふえとりいでゝふく。あきのりしやうもたずしてくちおしがれどかひなし。時々しやうかしかはぶえふく。ふつゝかなるねとかや申たれどいとけうあり。まうしやうくんがえうもんになきけるもおもひしらる。わごんさたなければ。すゝみ申にをよばず。楽一二のちに。右衛門のきみに御びわ給はす。なごりに手一と仰あれば。もとははんしきてうなるを。反風香調にしらめあげて。きうせんか一手。又思ひいでてにと申せん手一あり。身にしみておぼゆ。こよひのしぎ。中〳〵になにとしるしをきがたし。よろしきことこそふでにいひなす事もはべれ。これはとの葉も心もをよびがたければ。むかしの紫式部ならては。たゞの人の心地をよびがたからんかし。たゞうちこめて心にいひあはせて。ゆくすゑもおもひいてんかし。あけてぞいでぬる。

十三日。あか月はたち侍らんとて。かつはよべの御前のしぎも。いま一どまいりて。かしこまり申さんとて。ゆふかけてまいりたれば。かまくらより人のぼりて。すみなれしふるさと。むなしき空のけぶりとなりぬるよしつぐ。大方のこる家すくなくやけ侍よし申せば。下りてもいづくにいかにとおもひやるかたなければ。あか月はのびぬ。まづ人をくだしてしばしばかりのたち入所たづね侍とて。あさてとて

のびぬ。伯三位が御所ちかき所に侍とてよび侍れば。ゆきて物語などしてなごりをしむ。むまなどひき出たり。さがのおひ人いて給へりとてつぐれば歸て。こよひはわたくしのなごりどもおしむ。けふは日よければかどいづべきよし。あきひで申せば。そのぎになりぬ。康能朝臣うけ給はりとてめせば。くるゝ程にまいりぬ。院の御方より仰下さるゝ事どもおほし。まづかたじけなく。身もあらぬかとのみたどらるゝほどのこともまじはれり。やがて東宮御前にて闕のあなたにて申べき事がきなど給ぬ。御さたのやう哀にもかたじけなし。女房めしあれば。つねの御所の御ばんにまいりたれば。高内侍てまり十しろがねの五えふのうち枝につけられたるをゝしいだされて。うすやう二かさねに。御あふぎ廿つゝまれたるもそへてくだされぬ。何と申に及ばず。すゞろに

涙のみぞながれいづるや。月はくもりもはてぬひかりさしながら雪うちちりて。わざとあらまほしき夜のさまなり。やがていでさせおわしまして御らんぜらる。しばしも猶候て。つきぬ御名殘どもゝ申たく侍ながら。中〳〵ゆくみちのさまたげおほく。かずまさりぬべきとなれば。しひてぞまかり出ぬる。かどでの所にて。たび衣つまに別るゝなごり。いひしらずかなし。やがて明がたになれば。心あはたゞしくて。まづきたの内大臣僧都のもとへまかりて。なごりをしみて歸ぬ。ともの物は法勝寺の邊にさきたてゝ。明るまぎれに車にていづ。春の宮のこずゑ。明くれの雲のたえまにほのみゆれば。

馴れ〳〵し宮木の梢けさだにもよそに隔つる明くれの空

たゞ涙のみぞまづゆく道のさきに立ぬる。法

勝寺の南の門にて馬にのりぬ。車はゐてゆくをみるにぞ。かへる浪ならねどうらやましかりける。あはだぐちにて宮このかたをかへりみて。

歸りみる宮古の方はかすみにてそこともし
　らぬ明くれの空

しの宮河原をすぎて。あふさか山にかゝるほどに。かたやぶより重清朝臣うちいてたり。此ほどいたはるとありて入こもりたりしかば。あはてくだりぬるなげきをしつるに。いふべきと葉もおぼえず。うれしくもあはれなり。よ深き露にぬれて。さゝたちてまちけるこゝろざし。いひやるかたなし。これもなをあふさかの名ぞたのまるゝや。むかし神功皇后のみよに。をしくまの王のむほんによりて。武内大臣をいきて。こゝにてゆきあひてうちたりしより。あふさかとは申よし。やまとぶみにはみえたりし水のもとにて。

氷のみ冬はむすびてあふさかの關の清水は
　くむ人もなし

此朝臣なをとゞまらず。こまなめてうちいての濱もうちすぎて。あはづのはまづらなる家にたち入。もとよりおもひまうけたりけるにや。こゆるぎのなだをわけいそぎありく。たがひに名殘をしみて。ゑいなきにや涙をとしつ。これよりぞとゞまりぬる。せたのはしかちにてぞわたる。更科の日記には。むかしみかどの御むすめをぬすみて。あづまへにげくだる物のをはれしとて。此はしをひきたりけりとなん。今は何のためならねど。くちぬるなかはたえまがちなり。野ぢといふ所にてぞ。しゐしば折しきて。かれいひなどひと〱とりまかなふ。日くるゝ程に。かゞみの宿にとゞまりぬ。道すがらはゆきかふたび人。このもかのもの

山河木草などにめうつるだに。猶こしかたはわすれぬならひを。まして取しづめぬる艸の枕のさびしさに。つく〴〵と思ば。雲のうへ。春の宮の中。これにそはれるわたくしのよもぎがもとまで。思ひ残さずこひしく哀也。あそびどもきてうたひのゝしれど。心にもいらねば。人をいだしてぞあそばする。月はいと雲もなく。かゞみの山に影みゆれど。心はかきくらしてぞある。

たちよれば月にぞ見ゆるかゞみ山しのぶみやこの夜半の面影

さにやとおもへど。いかならんとなをおぼつかなきぞわりなき。うちたへてねられねば。夢にだにへだゝりぬるぞうらめしき。

十五日。あくればたつ。昨日をくりし物どもゝかへらんとすれば。袖の中にも入やしぬらん心ちもありとしもなし。しゐて都のかたをかへりみれば。雪いとしろき山のみねのむら雲に。月うすくのこりたるしもかなし。

明のこる光もうすし雲まよふ都のかたの山のはの月

をいそのもりといふ所にて。

かつみてもよそにおもひしもりの名も我身につもるしもの下艸

山のまへといふ所は。こまのひづめかくるゝほどなる水を。ながれのまゝに十よ町もやゆくらん。ふみあげらるゝ水のさはぎに。いたく袖はぬれぬ。ふるきうたにそふといへるは。かやうなる心にや。

たび衣おりたつたごにあらねどもみやこ戀路に袖はぬれつゝ

さる程に時雨ふりきぬ。此あか月のくもりつるけにや。

かゞみ山此あか月のくもりしやけふのしぐ

れのはじめなりけん
ひるゑち川といふ所にたちいる。つく〲とおもひいづれば。たゞいまは御がくもんの程にや。下侍らずば。ひさしに出御まちがほにてながめゐましとまでおぼゆるぞあまりけしからぬ心なるや。河せといふわたりの道。有つる時雨やすぎつらん。たとしへなくあし。人も馬もあしのふみ所もなくすべりてわろきに。このたび人なんうつ〔せ歟〕みのいよのかみよりもてよなふゝとりたるに。馬はいとあしよはきにあぶなけれど。さしもやとおもひたゆみて。なをこしかたのヿおもひつゞけゆくに。かたゝかなる所のヿにすべるに。むまなじかはたまらん。四のあしをひとつになしてたふれぬ。此うはかふきのふとりをきな。さるはわかさかりすこしかやうのヿなれにければ。あはたゞしさながらおりたちけるが。我もあしふみためずしてたふれにけり。身のしろ衣袖もしとゞになりぬ。あさましくおかしけれどいかにせん。さてと馬にのりかへてぞゆきける。いぬかみといふ所にて。とこの山。いざや川など尋れど。そのわたりの民しかはらやうの物もしらずとなんいふ。むかしあるものこれかれなど申侍しも。おいのむもれにわすれにけり。いざとこたへよと。あめのみかどのゝ給せけるも。みてこそしのばまほしけれどかひなし。をぐらといふさとの名ぞ。宮古のにし山おぼえて。すみ馴しとさへおもひいでらるゝ。又時雨してみかさもとりあへずぬる。はれくもり神無月ならねど空さだめなし。くるゝ程にすりはり山をよぢのぼりて。くらめにぞばんばの宿にはつきぬる。けふの道のあしさに。やがてうちふしぬれば。ぬるがうちはたゞもとの宮古にて。さむる空ぞたびのやどりいとくちを

しき。山も三までへだてぬれば。ながめやるかたなし。又うちまどろめばたゞ古郷なり。

艸枕ゆめにぞみゆる故郷のいもが寐ざめに我やこふらん

君やくる我やゆくらん艸枕たびねの夢に逢みつる哉

十六日。けふは道も遠し。又あしき所おほしとて。あか月かけてぞたつ。月みねにのこりていと心ぼそし。

都とて月のゆくゑをながむればたゞ白雲の峯のまつ風

さめが井のし水はゆく人もこほりもけさはむすばず。夏ならましかば。かくすさむるとなからまし。おりにあはぬ身のうへまで思ひしらる。むかしの山(日本)とたけのみとのいぶきの神のけに心ちそこなへり給けるに。このみづにて心ちなをりたまへるによりさめが井となづくるよし。日本紀といふ文にみえたり。されどこし方の戀しさはさむるかたなし。こよひのやどりより一里とぞいふなる。いぶきの山をみれば雪いとしろし。昨日のしぐれは此雪げにこそ。ふはの關ちかくなき(る歟)さまゝに。藤川のはしわたるとて。けきのたびのぼりし時。思しとなど思ひつゞけられて。

今しばと思ひきえにし東路に又ゆきかよふ關の藤川

大車肥馬にのらねど。よにながらへばさすがいかなることもこそと。はかなきゆくすゑのたのみばかりになん。不破の關屋をみれば。東宮のいつとなく待とをにのみおぼしたる御即位の時は。この關をもかためこそはし侍らんかしとおもへば涙ぐまる。このたびかぞふれば。みても十たびにぞなるや。さめが井よりは此關三里なり。

をかやふく不破の關屋は我みても久しくなれる板廂哉

都にもふはの關どをけふこゆと東路ながら人はしるらん

のがみのかたをみやりて。關より此ところへは一里なり。

關こえてのがみのかたをみわたせば霜の艸ばにあらし吹なり

春ならば鶯のこゑもきゝてましとうちながめてやどをかる。ばんばより此宿へは五里なり。ゆくさきはなを道遠しといへば。しばしやすむこともなくいでぬ。あをのといふ名は。春夏のみどりばかりにや。秋は色〳〵の花にこそあるらめと思ひやらる。此ごろは又ひとつ色ながら。たゞ霜がれにてぞあめる。あをはかの宿はむかし其名たかきさとなれど。今は家もすくなう。あそびもなかめり。故宰相の名はおほかたのあをはかの里とよみ給へりしも。げにはかなくあとともみえず。あかさかの宿。いつのたびにか二たびとまりたりしぞかしと思へば。何となくしらぬさとには似ずぞあるかし。住所愛とかやいましむるなるも。げにことはりなりや。かさぬひ川のはしいとせばくて。たゞ板一をわたしたり。ひかせたる馬おち入ぬ。あさましとも目もあやなり。ともなるもの。かやうのかた人にをとらぬ物なりければ。とび入ておよぎつゝひき上ぬ。いつぞやもかゝると此川にてありしこそむつくしき先例なれ。くれてすのまたといふ所につきぬ。のがみよりは五里とかや。猶とをき心ちぞするや。ばんばよりは十里なり。此所のやう川よりははるかに里はさがりたり。まへにつゝみをたかくつきたれば山のごとし。くぼみにぞ家どもはある。里の人のいふやう。水いでたる時は。

舟此つゝみの上にゆく。空にゆく舟とぞみゆるといふをきけば。あまのはとふねのとびかけりけんも。かくやとぞきゝゐたる。
十七日。けふみち近しとてをしのどめたり。夜あけはてゝ。川のつゝみにてみれば。この川はみのとをはりとの中にながれたり。まづ雜人どもをわたす。川はたにゐつゝわだし舟待ほどに。東路のすみ田がはならずとも。ことゝふ鳥もがなとうちながめらる。袖ぞれいのわたらぬさきにひぢぬるや。此わたりちかく河づらに。たかくわの宮とて。雅成親王の御そうにておはしき。宮と申名もむつましくていそぎみやれば。たゞ白砂のきしとをくして。青松のかきのあとのみあり。いとゞなぐさむかたなし。いつにうつろひ給ひにけんと。そのとゝなくあはれなり。くひせ川ははやく深くしておそろしき河なれども。征夷將軍の御だい所ちかきほどに下給ふとて。うきはしわたしたれば。おもふとなくてわたりぬ。たまの井の宿。一とせみしには。みつばよつばにつくりかさねたりしがやけて。わらやのゝき竹のあみど。いまだおろそかなり。是又よべの宿より二里なり。道〳〵はやむまとてはせありく。げに世中のしづかならぬ程もあはれなり。顏回がちまたになきけんもおもひしらる。くろとゝいふ所にたち入。此國をゝはりと申事は。むかし戀する人の此國までたづねきて。これにてしにけるより。をはりと申とかや。をりとゝいふ宿もすぎぬれば。やう〳〵こよひのとまりもちかくなりぬ。けふは道よくてこまもなづまず。日入程よりもとくかやつにつきぬ。はらからならぬおとゝ定有。昨日よりまちけるとて。こゝにもとよりあり。やがて所につけたるあるじして。しゐそしぬ君せう〳〵きたれど

やがてたちいる。いつぞやありしきみのいまだかたなり〳〵しがおいゝてたるよし。このたんごの前司かたれば。ゆかしくてそのやどへぬすみてゆきてあそびぬ。むかし馴侍し物のなごりにもとおもへども。かたみにもなずらふべきならねば。むなしくよもぎのまろねにてあかしぬ。けふよりは松の色もみやこにはにずぞなりにたる。

十八日。よべふくるまであそびて。上下ねすぎぬれば。日いづる程にぞたちぬる。あつたの宮は昔日本武尊東をたいらげ給ひしとき。えびす野に火をかけて。みとをやきころさんとしけるとき。おほきなるかつらの木やけてたふれたりけるに。田中の水あつくなりたりしより。あつたといふなり。其時あまのはやきりの劒にて。艸をなぎてのがれ給ひしかば。其けんを艸なぎのつるぎと申き。そのつるぎを此みやしろにいはひて侍れば。いちはやき神にぞおはしますなる。この夏の比。宮のうちおどろ〳〵しくなりひゞきつゝ。ついまつの火おほく四五千ばかりにて。むかへのいらこがさきまでつゞけり。いにし文永のはじめつかたもかくありけるとかや。もうこ國のゆゑとぞ後にはおもひあはせけるとかや。いよ〳〵あらたにおぼゆれど。精進をせねばまいらず。心のうちばかりに法施まいらせて過ぬ。此丹後のさきの前司なるおとこ。あまの家にをし入て。しほひまつまはうらがくれゐ侍らんとて。さけとりよせつゝ。なごりをしみつゝあそぶ。三百杯ならねど。てをさかづきにわかちて。をの〳〵あざれゐたり。しほひぬと申せばうちいづ。これより此男かへりぬ。なるみがたは今ひはじむれば。馬のひづめつくばかりになみながれて。中〳〵けふあり。

なるみがたおもはぬ方にひく波のはやく都
　にいかでかへらん
みしよのまつもあゝ。しほみつときは。入ぬる磯の草葉ならねど。葉ずゑばかりぞのこるらんかし。五十町といへど。道よくてこまもはやければ。ほどなくなるみの宿につきぬ。このぢぞうだうには安嘉門院の左衛門佐哥かきつけたればみまほしけれど。あまり風吹さむくて。人わぶればみですぎぬ。このたびはかならず其てとみて。物がたりにもさると侍しかなどぞ都のつとにはかたるべき。二むら山のあらしとに寒し。みかはの國になりぬれば。ひとへに野をゆく。霜がれの道しばをのみふみならしつゝすぐるもいと淋し。やつはしは先達どもやう〳〵に釋たり。くもてとはむかしいかにかありけん。今はたゞ二のはしなり。能因法師は谷のはしと申侍けるも。猶いかゞと聞ゆ。かきつばたも今はなし。なにをか句のかしらにをきて哥もよむべき。かやつより此やつはしの宿まで九里とかや。
　かきくらししぐるゝまではなけれども雪げ
　の雲や二むらの山
日たくればいそぎいでぬ。うら路はれいの浪のせきもりゆるすひまなければ。山路にかゝる。さき〴〵の道ならで。あらぬみちにぞ入ぬる。せばき道のかた〳〵はがけにて。海みおろさるれば。あやうきときそぢのはしよりも。猶心ぞうらびれゆく。こえはてゝゆひといふ所すぎて。又あまのしほや五六ばかりなる所にこかげ有。とへばせきさはとぞいふなる。あまのすむ里をばこかねとぞ申。うみづらを四里ばかりゆきて。神原といふ宿にとゞまりぬ。はるかにきかざりし浪の音。たゞ枕のしたにきこゆ。

廿四日。ふじ河も袖つくばかりあさくて。こゝろをくだく波もなし。あまたせながれわかれたる中に家せう／＼あり。せきの島とぞいふなる。又少宿あり。田子のすくとぞ申める。宿のはしに川あり。うるひ川。これは淺間大明神ほうでんの下より出たるみたらしのすゑとかや。かつらぎの神ならねど。はしわたらさ〔しはて歟〕しされば。舟にてぞわたる。とものものどもわたるをまつほど。よしわらとて。少家のあるにたち入て。あまり寒ければ。しばをりくべて。つく／＼とふじの山みやりてぞゐたる。時しらず雪のふるとは。國つくりの神のやどかりけるに。このかみかさどりければ。かのかみの御ちかひにて。かくなんいつも寒く雪ふるとかや。けぶりのたつこと。竹とりのおきなの物語にぞ。ふしのくすりを此山にてたきたりしに。それよりたつとはみえて侍れど猶おぼつかなし。

山のまへのたつみの方なる山は。天人のあまくだりてつきたるよし。富士山の記に見えたり。いとふしぎなることなり。あしがみねともいふ。又すそ山ともいふとぞ土人は申侍る。ひとまちつけていづ。うき島が原はたゞまさごぢにしばのみぞおひたる。北はふじ。すそはひろきぬまなり。うき島がはらのうちなれどこいし多し。あをの。小松原。かしはばらなどもいふ所あり。さのみはしるしがたし。しほやく煙のにしになびきたるをみて。

　こし方になびきにけりなもしほやくけぶり
　にたぐふ我思ひかな

田子のうらなみ。まことにひまなくたちさはぐさまいとおもしろし。沼のいとひろきにむれいる鳥のはをと。をぶねにさをさして通ふ賤の有さま。ゑにかゝまほし。はらなかの宿といふ所にたちいりぬ。くれぬべしといそげば。ま

た心あはたゞしくていづ。くるまがへしの所までは二里とかや。きせ川は足がらへかゝる道なれば。よそにみてすぐる。するがのこふちかくなりてこ川あり。雨ふり川となんいふと申せば。そのゆへをとへば。雨ふらんとては水なくなると申。けふあるとなり。水なしの池こそさやうには清少納言枕さうしにかきたれ。こふにつきぬれば。まことにみたらし河のいさきよき。神の御心もをしはかられてたふとし。これは三島の明神にておはします。いよの三島よりはこの三島を本神と申。これよりは伊與を本社と申なるこそいとめでたけれ。仁德天皇と東宮と位をたがひにゆづりおはしましたりし事もおもひ出られて。今の世の人のわれ〱とあらそひいふこそはづかしけれ。十首述懐哥を詠じて奉恩せんとおもひてぞよみゐたる。この家あるじみこの第四のさとかや。ゆゝしくまさしきわらはかんなぎあるよし申せば。心みんとおもひて。よばせて神をろさせて人してとはす。身のこたへあり。やがてかなふべし。官途のそまうあり。すこし遅くあらんかし。しゞうはよろこびあるべし。又かたじけなき人の御事をかまくらにて申さんとおもふ。いかゞあるべき。めでたかるべし。かまへてよろこびどもして。明年の秋よりさきに京へ歸しのぼせ給へと申せば。やすき事とおほせらるゝと申せば。まづうれしくて。思ふごとくかなひて。秋よりさきにかへりのぼらんときは。よろこび申べし。よく〱いのれとぞ申やる。大方かやうのかんなぎていのとは。みゝのほかにおぼえ侍れど。所にしたがひ。又あまりにのぼりたさといひ。かた〱あらましも心ちよければ。とひてなぐさむぞはかなきや。あか月たつとて御へいまいらせて。此十首の

哥よみあげさせつ。宿のあるじをぞ師とたのむる。

廿五日。よふかき月にはこね山にかゝりぬ。日いづるほどに。高みねにてみまふせば。と山にはいまだ日の光も見えず。空もいまだ匂はぬ程に。ふじのこしより上ばかりにふりたるは。はや雲井に高き程とぞしらるゝ。日と山のたかねをいづる時ぞ。すそのそばたつ程。しば山のふもとなどにかげはみゆる。又雲のと山のいたゝきよりたちわたりたるも。ふじのこしより下さまにぞそびきたるや。いかにたかき山といふとも。これらにておもへば。ふじのすそのひら〳〵とみゆる。しばのほどにぞひとしかるらんとみえたり。ひえのやま廿ばかりかさねたらんやうなりと。なりひらのかきたるは。あまりにやあるらん。又さもやあるらん。しりがたし。昨日けふよく〳〵み侍るに。ひえの山三四ばかりはあるらんかし。はこねは雪いまだふらず。霜ぞ降こほりて。道はことにすべりて。あやうきとかぎりなし。からうじてあしかはといふ山のなかみづ海のはたにたち入ぬ。高き山のいたゝきにひろさ三十町なり。にしのかたなるみづうみにて。雨ふれども水まさらず。日てれども水ひず。ふしぎ也。又此山にはぢごくとかやもありて。死人つねに人にゆきあひて。故郷へとづけなどするよしあまたしるせり。いかなる事にか。いとふしぎなり。あしのうみのゆとて温泉もあり。いかさまにもふしぎおほし。はこねの権現とて。むかしえんのうばそくのをこなひいて給へるとて。いづはこね二所とて。くま野のやうにあらたなる御神になんおはします。その上中宮の御ともにまいりたりしとなど思ひつゞけられて。この海をば御舟にてこそさをさしてわた

りしかなどおもひ出れば哀なり。日くれにたり。ゆくすゑはみちなをはるけしといひて。あはたゞしくいでぬ。さかわの宿にくるゝ程につきたれば。れいのきみあまども。又わかきあそびどもぐしてしゐのゝしる。くたびれぬればふしぬ。

廿六日。とくたゝんとすれば。このものどもきてなをしゐゝたり。日たけて出ぬ。くるゝ程に永福寺の僧房につきぬ。としごろすみ馴しふるさとはやけて。かゝる所にきぬれば。あらぬ世のこゝちして。いとゞ都のみ戀しきといはんかぎりなし。しはすのつごもりの日は精進にて。すぎぬるとしの日かずにあてゝ。滅罪のために光明眞言みて。こんとしの日かずに又心經よみていのりつゝ。くるしければやすまんとする程に。中納言の律師まうできたれば。としのなごりをしまんとて。つもれば老となるさか月さしいてゝ。年のくれともいはず。心のどかに物がたりするに。京より文どもあり。みれば東宮の御方よりとてあるを。まづあはてみれば。右衞門督局のふみこまかにて。下し後の御日記。御さぐり題のたんじやく下給はる。めもくれてよみもとかれねば。りしによませてなきゐたり。かゝらぬにだにゑゐなきはするくせに。ましてかやうに仰下さるれば。とゞめがたき涙ならんかし。さぐり題にたびといふ事をとて。

空にのみ心はゆきて通ふともしらでやこゆる關の旅人

十一月十五日。御てならひに。

旅人はうつりにけらし鏡山みなれし跡に影もとまらず

こよひは二番なれば女房とて。二番はたうばんなり。

かきつけし其名ばかりを水茎の跡にぞ忍ぶ

人の面影

十二月一日。あづまへびんありとて。ふみかく所にて。

今もなをゆふつけ鳥のねをやなくいひしに替心ならずば

此哥は下侍し時御會に。かねてよりゆふつけ鳥のねをぞなくこえん日ちかき關の此方に。とよみ侍しとをおぼしめしいでたるなめり。とりあへぬ涙のまぎれに。

逢坂のゆふ附どりよいつまでと關路へだてゝ音をつくすらん

續群書類從卷第五百廿三

日記部二

高野日記

釋頓阿

たかの山へまかり侍りけるに。つゑのほどしてまたがりたる木に。ころもをつゞらかづらやうのものにてからめつけて。坂をおりくる僧あり。ゆきちがふて。おもかげのみたるこゝちすめれば。立かへりみる。かれもおなじくたちかへり給ふを。よく〳〵みれば綱元なり。いかにといへば。いとふいのたいめんかな。行こゝろはけふならでもありなん。あないせんとてさきにたち給ふ。しりにつきて。むかしいまの事どもきこえあはせ。さてもありしかたちは。ゆめものこらで。法にみをやつしたまへるさま。げにとおもひながら。なみだはふかくにて。しぼるばかりなれば。霧のしめりにまぎらはす。こゝかしこ見侍りて。おくの院にては晴わたり。風みにしみ。とりのこゑなどすめり。

のぼりてはこゝろのきりもはれぬべしたか
のゝやまのみねのまつかぜ

なもしらぬみやまのとりのこゑはしてあふ
人もなし槇のしたみち

かはらにはまつさへ生てふる寺の苔のむし

ろも法にしくらん

あきの日にしになりやすく。尾上にかゝれば。これよりくだりて。綱元のいほに。こよひはあかし侍れかしとあれば。いづくの邊ぞととふ。日のおちゆくかたにしめて侍ける。

ゆきてみよねがひをまつのいほりにはにしにこゝろをかけてむすべる

とあればかへし。

たかのやまいほりむすばゞ我もまたにしこそとおもふおなじねがひを

くれてたどる／＼いほりにいりぬ。綱元火うちをとりいてゝ。ともしつけ給ふをみれば。やゝ七尺四面の庵に。みだと大師の像をかけて。佛具さはやかに。あかたな軒ちかうしつらひ。そのまゝ水むすびはなまいらせて。火かゝげそへ。香にもうつして。このそう周制のふでにておはしますとぞ。よのつねに見えず。西行上人みづからかきたまへる山家集を。周制つたへられけるを。法勝寺僧坊の火の時燒侍ける。そのゝち西行の筆につゆたがはずかゝれて侍りしを。見せられたまひしなり。書畫筆術ひとしといひしも。さる事に侍る。賴朝大將の取苑草。無動寺にて見侍る。西行筆に似たり。このやまにも願文などあり。みなたがはずにて侍る。周制と此三筆ひとつに見え侍る。さなり隆信朝臣の大原の圖六卷。彩色ふてのはへ見所あり。所々のこと葉がき同筆なり。おほかたにては文字かけあふまじきなめり。法性寺殿御筆にまがふばかりに侍りし。かゝる筆づかひ。いまよにみえず。世のへだてはるかならぬほどに。いとくちおしくなりゆくものに侍る。寂光院の北坊にて見侍る。みさせ給ひしやいまだし。信實朝臣のみなせ殿の四季の四卷。とばがき同筆。御製などのあるなるあたりは。御ふて

ゆ。ともにおもひいづるをまゝのものがたりすめる中に。七十にもたけたまへる僧の。我名は海象といへり。くらければ扉ちかうならべてさふらへども見給はじ。こよひかくとゞめ侍る。いかであかさせたまはんとのたまはせしかば。やまずみのまうけにさふらふとて。うちおしきに。あはのいひ。しそびしをなどいふものとりそへ。十二三斗の小僧もてくめり。夜半のあらしをしのぐまでのやどりにとこそ思ひ侍りし。みやこもたび〳〵のさはぎに。世のほかになりゆきて。かゝる御もてなし。すて人の身のうへには。めづらしう侍るとて。四人みをそばめゐてくふ。さて海象の縁ある事どものたまふ中に。大師此やまをきりひらかせさせたまひて。堂たてさせ給ふに。このみちのたくみ。文字の事をしらねば。しるしあはすべきとはりもなしとて。いろはの四十八字をゝしへられたり。尾上殿。瀧殿。田上のいなば殿。かはにのぞめるかやぶきのわた殿。釣殿。所々の岩木の色あひ。水のこゝろばへ。そのおり〳〵のけしきをかきわけられし。いまもめにつきたるやうに侍る。隱岐の國へをもむかせたまふになり侍りしとき。御かたみにとて。この朝臣めして。御影をかゝせさせたまひて。七條女院へまいらせられしといふをも。おがみたてまつり侍る。それにて御影堂はたてられしとか。亂たるよには。いかゞなすべきもはからず。ひとひもはやく。水無瀨へも大原へも行て見させたまへかし。大師このやまの圖をかゝせたまひし。法性院の坊にあり。いづれのゑどころといふとも。をよぶまじう見え侍る。竹は竹と見え。木は木と見え。鳥馬などいふ文字。そのものとみゆるさまにかゝせ給ひしものもあり。たへなるものなりなどきこ

へさせ給しより。すゑの世の人のたすけにもなりぬと。きこえ侍りしかば。さらばと思ひて。いろはを冠にをきて。四十八首をつゞりいだし。影前にそなふ。

いまとても佛のみちをもとめねばたま〳〵人になるかひもなし

ろもかひもわれらはとらで法のみちたゞふなぬしをたのみてぞゆく

はちすばにをきて消なん露の身のいのちを池のみづからぞしる

にしへゆく月日のかげにさそはれて齢かたぶくとしはうれしき

ほの〴〵とあけゆく空をながむれば月もこひしき西のやまのは

へだてなきちかひと誰もたのむらんしるもしらぬも南無阿彌陀佛

とても世のほまれをいとふみなりせば人のそしるやうれしからまし

ちかひにてむまるゝならばたのむべし佛よりなをみだのひとこゑ

りむじゆをも我たしなみにおもふなよむかへとらんのちかひたのみて

ぬるほどは現とおもふよのなかをさめずばいかゞ夢としるべき

るりの池のおもひやられてゆかしきは氷にしづむ水の月かげ

をなじくはみだのちかひをしらせばやとてもとなふる人のこゝろに

わがねがひみつの心をたづぬればたゞひとこゑの御名にこそあれ

かくれがにさかぬならひの花ならば春やうきよのこひしからまし

よのなかはおもきたきゞのやまかへりすてぬる人はくるしみもなし

たりきとて御名ををこたる心にて他力たのまぬこゝろなりけり

れうも臥とらもうそぶく山にてもみなをとなへばをそるべきかは

そしるとてうらみ心のあるにこそ身をすてはてぬほどもしらるれ

つゐに我むまれゆくべきごくらくの近き遠きや命なるらむ

ねざめするあかつきごとにとなふれば老こそみだのたよりなりけれ

なむあみだぶたすけたまへの外はみな思ふもいふもまよひなりけり

らくといひくといふ事をしらぬ身は罪もをそれずみだもとなへず

むらさきの色とおもはゞあきのよの月にや雲をいとはざらまし

うらやましうれしき事もうきともにわするゝ人ぞすて人

ゐまぞしるつみふかき身はなか〱にちかひをたのむたよりなりとは

のちのよをまとにねがふ身なりせばこの世の事はおもはざらまし

おもひやるいまだにもげにさびしきはひとりゆくらんのちのよの旅

くるしみのうみをばたれかわたすべきみだのちかひのふなぢならでは

やまふかき人のこゝろはなか〱にうきよといとふかくれがもなし

まよふとてたれかをしへんかげだにも我身にそはぬ後のよのやみ

げにすつる人はあま夜の月なれややまにいでゝもかくれすむなり

ふくたびにげにうらめしきゆふあらしさてもまたるゝ花のしら雲

ことの葉にいつはりおほきみをしれば我心
さへはづかしきかな
えぬ人もえたるとばもひとつにてとなふる
みだのこゑぞかはらぬ
てすさびにかきをく御名の文字よりもとな
ふるこゑをちかひとぞきく
あはれよのにごりにそまで消なばやうらや
ましきは蓮葉の露
さきだちてねがふ心や生るらむそのみはし
はしこゝにありとも
きけばこそなをいとはるれ捨し世のうきを
とづれはさもあらばあれ
ゆめさむるかねのひゞきのたかのやまその
あかつきをまつまでもなし
めに見しもみゝにきゝしも名のみにてなき
人數の身とはしらずや
みだの名をたのむこゝろのかはらずば身の
よしあしはとてもかくても
しるらめやあはれみもなき人だにもたのめ
ばすてぬならひありとは
ゑらびてはみだの光やてらすらんみだのち
かひをたのむばかりに
ひとこゑにたりぬる御名のかずそふはまと
にたのむしるしなりけり
もとむるにえがたきのりはねがはれておも
へばやすき御名もとなへず
せめてなどうたがひだにもなかるらん御名
もきゝうるこゝろならずば
すむ人のそらにしられてゆかしきはけぶり
に見ゆるやまのかくれ家
京えぬもよく知人もとなふればみなむまれ
ゆくちかひなりけり
あけぬさきにくちとくとせしかば。うたのや
うにもなし。かねのこゑに窓をひらけば。おち

葉がうへのつゆしもにきらめくほし。見るみるかげうすく。木のまよりよこ雲ひく。きのふみのこしつる所々みんとて。わらぐつなどゝりいづ。

〔右高野日記舊本闕今以扶桑拾葉集補之〕

宗長日記

享祿第三元日試筆　　釋宗長

汲てより八十あまりの春のかげ硯にむかふ
今朝の若水

今朝拂曉に京都好便とて歳暮にいひ來たる紫野書狀。逍遙院殿年始の御音信幸にて。目をすり〱若水を硯にうつして。草庵うつしかへ侍らんあらまし一折に。

うつすとも鶯や我宿の梅

八十三年來朝夕末期の希。殊このごろは狂筆にをよぶまで。

ねがはくは風、、の我身にてしなばや物に
くるひ〱も

ねがはくはなき名はたゞじ我しなば八十餘
りを神もしらじよ

末期の祈無油斷侍る事なるべし。

三條殿御方籠中日頃わづらはせ給ひて。なくならせたまへる夕に參りて。

露けさは柳の目にもこぼれつゝなき君こふ
る花の春風

いく程もなく慈廣院殿御他界。御茶毗の夕燒香申侍るとて。

九重の雲井をゝきて契あれや名高き富士の
夕烟かな

御方返し。

朽ぬ名をふじの高ねにとゞめても烟になし

て見るぞ悲しき
四月八日。佛誕生に老懐を。
しなばやと八十あまりの思出に釋迦生れますけふにやはあらぬ
素純法師遠行とぶらひに老懐をかへて。
八十餘りひとひもさきに我こそと思ふに又もをくれつるかな
八十餘りはぢざらめやは思ひやれきのふもけふもつれ／＼として
八十餘り聞つゝ見つゝおどろかぬ我や常なきよの外の人
宇津の山居あまりにくらく心細きに。軒の楓梢をきらせて又薪にも。
秋は染る時雨しとはゞつた楓いかゞこたへんうつの山越
山家霖雨中徒然。爰もとみな蝸屋のみ朋友にて。
五月雨は岩の雫をよ（ニ歟）ひいづるかたつぶりをぞとふ人にする
六月はじめ山居の庵に。田を堀うへさせ。水をせき入て。墨よしの岸を田に堀うへしなど。古語を思ひよそへて。
庭を田に堀うへてだにすむ水の心のなどてならはざるらん
筆にまかせて。
奥州岩城に下侍人。馬一二疋のぼするとて。きららの重荷をおふせて。三河尾張路次の事とあるに。
岩城よりひえさかもとの山ごえのきらゝをいかてつけのぼすらん
折ふし中國邊の人にや。富士見のつゐでとて立よりて。ことづて文など有。物いひかはす程に。打つけなる落涙いかにぞやといへば。不弁の侍侘参らするにはあらず。何となく徒然な

る様かなしく。かつは殊勝にながめ入まで覺えず。狂忽の事とて袖をはらひ侍るに。つれなき老もためらひかねて。

思ひあらず人の袂のもよほしにつれなき老もしぼるとを見よ

客衣かれ是二三人同道。しばらく物語のつゐて。尺八など面白かりしなり。發句所望に。

降暮ぬいづらみな月さ月かな

一時ばかり逗留。何かなど馳走に葛の粉を養て。折ふし人もなくて。我と火を焼侍るを見て感じ侍る。閑居の躰見をよばれ侍る。本望々々。

小原兵庫助昨日山居被尋。食籠一瓶。翌日三條殿御供。河原は水深く。山を歩行にて御尋。種々持せられて。山賤やうのものおどろかし侍り。御物語に日を暮されて御歸しあしたに。

山里は風よりほかのたまさかのとふ人かへる日暮しの聲

七夕に成ぬ。氏輝亭一丶題なしにとてありしを。貞世範政已に爲秀爲尹三十首の題はじめにそへ侍りし。

七夕衣

かり衣あまの河原の一とせにひとそひとなど逢見そめけん

七夕雲

はるかなる神代ながらの妻ごめに立や八雲のあまの川波

七夕毎年手向に七首。

けふならで逢事かたき石川のよどみて今宵ながれざらなん

七夕の織縫糸のすぢ〳〵のめもあやはたれ見てもわくべき

玉章も七葉の梶のとり〳〵の手向にあける星やかへさむ

皆人の折はへてよひかす衣かけてもほしにしぼる老ぞよ

我に今宵天の下人とりわたしかずてふ物をかさゝぎの橋

空は猶いむらん也と老ぬとも思はで星を見つる夜半哉

山岸の竹くらき夜におきゐつゝ見るともしらじ星合の空

今月廿九日。宗祇古人年忌。毎事連哥の吊一折の事も。閑居の秋の庭を題して發句。

庭ぞ秋堀うへし田のみなる世哉

庭のかたはらに田をうへて。やう〳〵ほのめくにや。けふ山居のもてなしの程。中かき左右はみやうかへきしやうかけふのとしみの齋の馳走一膳の内所せかりしや。風をわづらひ侍る祈禱連歌とて。所望の發句に。

夏を手にはらひもてをく扇かな

丸子草庵卅年にをよび住あらし侍る。盂蘭盆過十六日よりとりこぼち。誠に竹を柱。垣壁には松の葉をつけ。庭のかたはらに山畑をつくらせ。大豆小豆鴨瓜抔心地よげ也。田を堀うへ。やう〳〵ほのめきわたる。すこし山かたちをして。芝をつけ朝顔をはゝせ。萩さかりなるに。

おもしろくかりしめかてひいづくへもいにたうもなし住たうもなし

猶雨風やまず。海は高しほあがるべきなどいふもあり。鳴神ひらめき。日にさえぎりて。きも玉しゐもある空なきに。

世はさてもつきぬるにてそ波風のあめつちひゞきさはぐ海山

笆の虫夜一夜雨に打ちらされ。よるかたなげなるを。

打ちらす笆の虫の雨風に軒の下草たのむ聲

々
哀いかに汝もかなしき秋の雨ふり明す夜の
鈴虫の聲

享祿第三庚寅。春の雨より時鳥鳴やさみだれ晴まなく。六月もかつててる日みず。文月八月もかき暮し。十五夜の 空かつ晴て。晴明希宿の道場の起てみゐて見。一折のおほせかしてみ。

月こよひはるかに照すひかりかな

かの當初のことのはの。はるかにてらせ山端を。後世までのひかりにて。道のほどにひなといふためしもこそはこよひなれ。この山岸の客寮は西もひがしも北南八竹九竹の中にして。竹園とつけて。

木のまより心づくしはくれ竹のすゑばにかゝる窓の月影

又いざよひの曉のさりげなかりし空變じ。よこさまに降出て。晴る夜もなく日比へぬ。あるかたはらに客僧の萬句の中に。

空は月すむらん秋の天の下

天上までのおほけなきうらみこそはかなけれ。爰に。

蛭の子の あしたゝぬ老が ためは猶 羊のあゆみ 隙のこま 蝸屋ばかりの 廐にて 柱もたはに よろぼひぬ 君をたのみて このほどは 中々とかく 申さぬも いはぬはいふに まさる世の ことなり負も はづかしな 臨川庵は 客人の うつりたまへば とゝろかへ ふつとの事は にはかにて つくりもあへず いそのかみ 古材木の はし／＼と 手をのかんなに 及ばぬは 藁を結びて 千はやふる 神さびにたる 栖なり まれ／＼人の 出いりも こなたへと打も はらふべき たが

みに絶ぬ　をのづから　肱を枕の　たのしびも　我をろかにて　得がたしや　哀鴛房ぬか粥は　思ひもよらず　秋の野の　おほかる草も　野分して　露の情も　かけ侘ぬ　ことしも今は　暮ぬべし　千里遠村雪ふりて　冬ごもりする　なにはえの　今は春べと　梅ぞさかまし

賓樹院山岸の竹しげく月日ももりこねば。竹園と號する旅宿にて。

木のまより心づくしはくれ竹の末葉にかゝる窓の月影

八月十四日彼岸に入る。春二月にも此庵にありし。

春秋の御法の場のけふにあふやをはりみだれぬえに結けん

氏輝亭九月十三夜。

霜草虫

朝な〳〵色かはる野のはつ霜の夜寒身にしむ虫の聲哉

寄鏡述懷

身につもる雪と波とを忘ればや鏡に見ゆる影拂ふらん

又誰を見る人にせん十寸鏡そこなる影を我身ならでは

九月末まで朝良咲る籬を。

しのゝめの夕霜かけて秋の日の夜さむの朝な朝がほの花

ある知音の人この山の遊山して音なきを。

よそにての恨はなしやきても君たちだによらでかへりつる哉

奥州岩城民部大輔。この十餘年音信。殊この春より及三ヶ度書狀。一度下向の事。たび〳〵あらましのみにて過行。發句を所望に。かならず

この秋はなどいふ心なるべし、
　聞こえんあらましやこの秋のかぜ
しかれば迎などやうに音信あり。
　ながらへてことしも今は末の松まつらんな
　みをこさせずもがな
いかでもせめて今年ながらへて。春はなど申
送るなるべし。去年は迎とてしかるべき馬二
疋送りのぼせらる。一疋は氏綱所望そここの
ごろひかせ下つ。同國會津に和田圖所助千句
とて發句所望。會津物而者音信。發句は春のと
てあり。
　しのぶ山おく見まほしきかすみかな
此こゝろはこゝもとの霞を見て申心なり。か
なのてにをはかなふべしと見ゆ。
　山城の木幡の里の馬はあれどかちにてもゝ(行脱)
　おくぞゆかしき
おく馬ほしげなるにや。たゞ奥の旅行の念願
成べし。
　遠つ國のをとづるゝ人も來てすまば只こゝ
　もとのうときつれなさ
ある歌道代々かりての人。この年月賣買利牛
抄物巨多にして。いまはの後までことたらぬ
よし聞て。
　いか斗つむものならばわが宿のほしさおし
　さの高き藏町
去年の暮にや。歳暮の不弁につきて。歌心の殘
まじきを。
　天の下有とある物なくもがなほしさおしさ
　やつくると思へば
去年の春熱海湯治まかり下りし時。何事も用
捨分別あるべきよし。紀伊守芳言ありしにあ
りがたくて。
　みるがごと哀しらるゝやまさとの霜がれ殘る
　花のひともと

御返し。

山さとの只一もとのあはれよりみな霜がれを君見てしかば

昨日御庭鳥申。まことにわらは心地して。むかしおぼゆるはかなさ。老人とつけて所持の尺八曉をかたらふ。老後の息とゞかず。このごろの閑居の夜長さかぎりなく。隣家の鳥は程とをく。老耳おぼつかなく。こよひ待えたる鳥のうれしき餘りに。火をともして十首筆にまかする。

はるかにてほの〴〵明る鳥の音をこよひ枕の上に聞つる

曉をこよひは鳥も旅ねとやさはなれてなく聲ぞかなしき

汝もぬる夜やながゝらしまたれつる八こゑの時をいそぐ鳥の音

あたりだに旅ねする人まれなれや誰にまたるゝ鳥の鳴らん

今宵より鷄人をわがためは曉人といはんとぞおもふ

このあしたわざとならねど白妙のゆふつけ鳥のしものさむけさ

さと遠みたつたの山かつらころもをりはへて鳴鳥の聞ゆる

打ならす八の鼓におきなれてこよひやひとり鳥の告らん

起馴るゝ寺の庭鳥曉の六の唱を八聲にぞきく

八十餘あかまつことと鳥の音といまはの時の殘りけるかな

いちやうの葉をひろはせて。人につかはすとて。

さもあらばあれと思えど目に耳に聞ても見ても餘る口ぞよ

すべて人のため人わろからぬ事は。たとへば出物とは思ごとく分別あらば。我ためにこそ侍らめ。小田原にてもさる人餘り連歌につきて傍若無人の過言ありし。
此ごろの連歌はよしや射てをかに見るべしかほの弓の本末
是ぞ過言の第一にてもあべけれ。八十餘り存命の故。昔今の傍若無人わがひがことばをば置てかなしき事を。
八十あまり風ゝのわが身にてしなばや西にくるひ〳〵も
小原兵庫頭文やりし返事に。閑居の御音信の返事もむつかしく候由申て候けるとて。
神無月文も無益のことの葉のそむきがたくてかき絶にけり
又かへし。
かきかはす爰もかしこも神な月文こそあらめ牛房大根
何事もまねはいはず。心安き閑居の老懐。
我庵はきかじきかせじとおもひねどみゝなし山のくちなしの花
寶樹院深山の榴りんだう參らする御文の御返し。
あづさ弓いちやうの本のうすくこき落葉をかぜにひろはせぞやる
老の痾病たちゐのかなしさを。
老にけりたつもゐるにも大あらきのいづこも森の下くさゝかな
ある人に双帋綴細工をあつらへ侍る。はしをおくにとぢられて。一丁二丁つゝり侍り。其はしをのりにてつけられて。めをつくさるゝを見て。
おりめをばとぢめになしてとぢめをばきりつき双帋手間や入そろ

十一月七日。ふと山臥府中にて尋つれど。こゝもとのよし聞てとて尋來。いづくの人ととへば。伊豫國にてまことに眞實に見え侍る。

　とはずとも八十餘り君が見んいよの湯桁のかずしらぬかな

萬葉に。伊豫の湯のゆげたはいくつ數しらずかぞへずよまず君ぞしるらん。又翌日來り發句所望に。

　見ずやあらぬいく船みちの富士の雪

伊豫介のぼりぬ。船みちのしわざにや。やつれくろみ侍るなど。其よせにや。何となく面白おぼえて。哥も發句も心をやるかたなるべし。永純法師この曉去秋阿房淸すみへ參詣。みちすがらの海山の物語。あかつき明星の事など聞て。

　波のあはの淸すみわたるあかつきや海よりいづる星に逢ふらん

あらはら〳〵わづらひて日ごろに成ぬ。何事も不弁のかぎりなさに。時茂雜帋二束もたせたぶ。

　有がたの君が雜紙や山さとの柿の落葉を拾ふ折しも

賓樹院鷄所望申。曉毎に老の長夜をなぐさめ侍るに。ふと小田原の下事ありて。府中の一宿にして。

　そば立る枕に聞し鳥の音やかへりてわれにこよひまつらん

遠江熊阿可罷越兼約。ふと相違する事ありて。小田原湯治の文。すなはちまかり下るとて。

　冬がれに越べき山のかひやこれよこほれいづの湯あみにぞ行

十二月一日。あたみの湯治。飼澤より山ごえ。雪降おもしろさむきに。

　いか斗さゆらん日にぞ名もしるきあたみの

湯しもとくる雪哉

何人享祿四年十月八日千句。第一獨吟。二百韻目より追而可有之。

秋冬をときは木の松さかり哉
山も八峯もさむきはつしも
朝ぼらけ有明の月に年くれて
ほしのひかりぞのこるさやけさ
漕かへる沖のいさり火船遠み
いそのむかひのあまのひとむら
いづかたに鹽干の道のつゞくらん
ゆふ日がくれに立る田鶴なく
野邊見れば雪降つゞくした萠て
また折ほどの蕨ともなし
岩そゝぐ雫も春のやまさとに
あれ田の庵も人かよふなり
秋更て野分に月もあひぬらん
又霧わたるそでのさむしさ
高瀨さす遠かた船のほのかにて
今朝のあしたの川づらのみち
山陰や夏の箕のよどみ涼しきに
よしのゝたけはしら雲のそら
春霞たてるやいづこ花咲て
かへる旅ぞといそぐかりがね
なべてはたこしも長閑に成つべし
月もくまなきころの夜な〳〵
世にいとふうつぶし染もうつころも
常は露けき木のもとのやど
立よれば殘るかたなくもみぢして
ふるき砌のむかしおもほゆ
誰なれやかたるもいそのかみさびぬ
過がてにするやまほとゝぎす
いつまでと降五月雨のかき暮し
雲間の空もはるかにぞ見る
俤も宮古のかたやわかるらん
花もかたぶく月ほそくして

春はたゞ明ぼの斗殘る夜に
　清見が波ぞ袖にかすめる
よとゝもにむねこそもゆる富士なれや
　戀の外には何おもふらむ
たづねてもうきはひとしき人もなし
　岩のはざまの中のかよひぢ
角さほふはけしきもよそめ忍らん
　聞ば狩するますらおのこゑ
つもりえぬあは雪しろき嶺越て
　行空おしき月やまた見ん
長き夜をねざめにあかぬ秋の暮
　なけきり〳〵す我もよはらじ
まはしなる壁のいつまで草の露
　はかなき種の常夏にさく
かたはらに打はらはるゝちりはゐて
　ひくばかりだによのつかじとや
下ひものとけぬ心のきぬ〳〵に
　かたしくのみはあたらさむしろ
てる月の光靜にさえ〳〵て霜をく鶴が岡の
べの松
享祿四七月。
宵のまの心をしれば河島の水の行衞を又た
のむ哉
川しまのわかるゝ水を頼むかな八十のよる（ベ誤歟）
の逢せばかりも
言の葉の關とは聞ずもる人はたゞ君なれや
とまる心は
ことの葉の關守といはゞ誰ならんしばし斗
のとまる心よ
別路の詞をつゝむ袂をもいかにたてばかか
く餘るらん
もろとものたもとゆたかに旅衣立ての後は
かはくまもなし
歸るさの道のほだしとなる物をつらぬる哥

のあらましの末

かへるさのみちのほだしのつらね哥ふりにし人も名殘なるらし

宗祇古人年忌七月廿九日毎年興行。此廿九日あらまし。政定廿八日に歸城の事にや。名殘なるらし。御名殘あるべしといふ詞なるべし。

老の波こえても君にこゆるぎの五十を十の上もかぎらじ

老の波こえてもこゝはこゆるぎのいそのもくづの朽んとぞ思ふ

十月三日。政定通礼書加るなるべし。

三田彈正忠殿　長頭在判

この長月中の十日頃。小田原の館出張。門ちかなる旅宿の草庵。隣家あまた所より菊の色々こひもとめ。野菊を堀うへて自愛し侍るとて。

いつつもる菊の下露なが月のきのふかとへしけさの初露

見せまくもおもはざらめやこきまぜて庭もせさける白菊の花

ながゐすと何おもふらん植しより宿は菊こそ老わすれ草

此頃世中さはがしき事有て。草庵へ立寄人も絶々なれば。

霜をけど見る人もなき庭の菊　うつろふのちぞまたるゝ

八月十五夜九月十三夜は都鄙いづくも月にめてあそび。いもまめを手向とて。賤の男賤の女も月見るといふ。爰に八句有餘老拙。夕まどひしてめさめおきて。こよひを名月にやとおもひ出て。南の椽のはしらに。と斗せなかをやはめつゐる侍る。折しも範甫老人まめに德裏をそへもたせ送らる。

こよひ月まめに見よとやことたらぬいも戀しらの一盃としれ

旅宿たすかる一兩輩人をつかはし。小座頭あるに。淨瑠璃をうたはせ興じて一盃にをよぶ。或所より誘引とて。をの〳〵たちあかるゝに。あまりに無下におぼえて。菊はつけてこと傳やる。

たづねてこそよしやせざらめこゝろなどこよひの月の友よびてとる

其名殘の寂しさおもひやるべし。やがて老をなぐさむ心かきくらして。

くまもなき空も見る〳〵かきくらしをば捨山のてる月にして　九月十三日

已下欠

此卷は宗長古人日記にして。享祿三四年の事をあら〳〵しるせり。うつの山居しめ給しより。大永七年八十のくれまでの事は。手記といへる文に見え侍り。今此日記もその末につぐべきものにや。古人うせ給し年のこと。相州建長寺には享祿元年三月六日のよし。しるしの石にもきざみ置て。天源庵主何がし此傳をつくりしるせり。又丸子柴屋寺といへるは。はやう柴ふける菴結び給ひけん所なり。こゝにも墓有て。享祿五年三月六日と侍り。此年のたがひめいぶかしけれど。天源庵柴屋ともに住給ひし所ながら。吐月峯の光に心をすまし。終の住家としめ置給ひし分は柴屋のかたにや。されば鎌倉山にのこれる古つかは。世におはしませしほどのすさみに。あたりの草刈拂はせたてをかせやし給ひけん。ことに手記にも八十までの事しるせれば。かの庵には今もそのまゝいひ傳ふるなる歟。この日記二とせの事侍るを。をとゝしの事にや侍けん。祖父安阿打聞のやうにしるし置る中より見出て。め

づらしう思ひしに。猶うせ給ひし年のほどおぼつかなかりしに。其後宗牧法師の東國紀行を見侍れば。天文十三年都を立て東路に出立よしをはじめにしるるし。さてことしは宗長法師十三回なれば。丸子山家とぶらひぬとあるは柴屋寺の事にて。尋よりて懐舊しきり也とて。見ればみし跡とふ雪の山路哉といへる發句侍り。これを見てかぞへ侍れば。天文十三年十三回忌にて。くりあげて享祿五年うせ給ひし也。享祿は五年に天文に改れり。現存の人かく書しるし給へればゞ。東國紀行によりて。宗長法師享祿五年三月六日終られけるに定まれり。しかれば此三年四年の記も侍るべし。

寛政十二申年　昌成花押

紀行部一

室町殿伊勢參宮記

應永卄一の年極月の十日あまりよつと申に。室町殿伊勢御參宮あり。年々の御願なれば。いく万代をかぎり侍らず。神の御納受さだめて掲焉ならんかしと。ありがたく覺侍るに。わたくしにも老後の敬神ばかりに思ひたち侍て。夜ふかくまかりたつ。いまだ都のうちにて鳥のこゑきこえ侍るに。

都にてまづぞ聞つる逢坂の關のこなたの鳥
の初音を

ほどなくあふさかをこえ侍る。

逢坂の關をばすぎの木の下も山あひくらき
曙のそら

あめなを晴やらで風いとさむし。

風さむみ翌は雪とや降雨のみのしろ衣干あ
へぬまで

みづうみのおもても猶くもりて。とを山まてもみえわかれず。

けさはまた浪より余所に三上山さだかにも
なき雨の浮雲

あはづにて。

旅人の袖にまがひし粟津野のおばなは霜の

下に朽つゝ
霜さゆる枯葉のすゝき今いく日過なば春に
あはづのゝ原
勢田の橋はほどなく雲はれて。さだかにみえ
わたさるゝほどなり。
風わたる跡よりやがて雲はれて浪に横ぎる
瀬田の長橋
草津の宿にしばしたちよりて。人のやすみ侍
るほどに。
枕にもたれかむすばん冬がれて草津の里は
霜深きころ
かしは木と申所にて。
落葉だに殘らぬころのかしは木になにをも
るとて神のますらん
こよひはみなくちに御とゞまりあるにより
て。わたくしにもおなじくとまり侍るに。夜ふ
けて雲間の月きよく出てみえ侍る。
月影もこほれる水のみなくちに同じ宿かる
夜半のさむけさ
十五日。寅刻ばかり御たちのよし承て。いそぎ
たち侍る。みちのほど空もいまだくもりがち
にて。いづくともみえわきがたき野山のけし
き。月はれなば見ところおほかりぬべき所々
過ゆくに。まへ野と申野はまことにはる〳〵
とみえて。月もやう〳〵はれぬるにやとみえ
侍る。おりふし三千世界眼前盡といふ詞ふと
思出られ侍て。
かぎりなき千里の外も今爰に月をみる目の
前野なりけり
つち山と申所をこえ侍るに。山かげに雪のと
ころ〳〵さえのこりてみえ侍るに。又雨のい
さゝかふり侍れば。うつゝなきつゞけやうな
れども。心ひとつの事なれば。ねぶりをさます
ばかりに。

久かたのあめは雨にてあらがねのつち山寒く雪ぞつもれる

夜あけぬれば坂の下につきぬ。そのあたりちかき所に。御ひるの御まうけありて。御とうりうのよしきこへ侍るを。しばしやすらひ侍にき。此所よりはすでにいせの國にて侍ぞかしと。いつしか神にちかづきたてまつるを。たのもしき心地し侍て。

神も見よ君が千とせの坂のしたこえて伊勢路にかゝるはじめを

すゞか川をわたり侍るに。ながらへぬる身のかひありて。御もとにまうづるうれしさ。一かたならぬ心地して。なを行すゑのたのみさへ侍るもおほけなし。

ふりはてゝ又もこえばやすゞか川もしも八十せにかゝる身ならば

鈴鹿姫と申す小社の前に。人々祓などし侍るなれば。しばし立よりて。心の中の法樂ばかりに。彼たてゑぼしの名石の根元もふしぎにおぼえ侍て。

すゞかひめおもき罪をばあらためてかたみの石も神となるめり

とよく野のすゑはるかとかぎりなく過行に。音に聞ゆるむさし野とても。是には過侍らでやなど詠めやり侍るに。兩國の名所もとりかに思ひなされて。例の又狂言もおもひつゞけ侍る。

武藏野に伊勢のとよくのくらぶればなをこの國ぞすゑはるかなる

やうかやう浦のけしき。おきもなぎさもはるかにみわたさるゝに。かのはま荻もこのあたりにやとゆかしくて。冬がれのけしきもおしはかられ侍り。

をとにのみそよときこへて浪風はあらくも

よせじいせのはまをぎ
夕しほも漸みち侍るにやとみへて。たび人もあしをはやめ侍るに。千鳥のおどろきてたち侍る。

かち人もひかたのほどに友ちどりしほみちくれば立わかれつゝ

暮ぬればあのゝつにつきぬ。まづ御宿坊へまいりて。しばらくありてまかりいづるに。雨なをやまず。しかれども月の比なれば。浦のわたりもゆかしく覺え侍るに。こよひは望なりけりと思出侍るに。いとゞ月の光りも殘りなく。しほのみちなん暁がたもおしはかられ侍て。寅刻ばかりに津のやどをたちいづるに。空いと清くすみわたりて。月の光は濱のまさごに雪をかさねたらんもかくこそと覺侍るに。はるかなる浪のうへは。いづくをかぎりともなく見わたし侍るに。ことの葉もをよびがたく。ましてみじかき筆の跡にもつくしがたくなん。

さすしほにこよひは月も影みちて浪吹をくるあのゝはま風

斯て十六日のあけがた。月は猶くまなくすみわたれるに。雲津川にて。

かこたずよ月のしたゆく雲津川名にはさはらぬせゞの光りを

夜の明ゆくほどに。あやゐがさと中所につきぬ。日かげとにあきらかにさし出て。昨日の雨のなごりもなく晴わたりぬ。

雨はれて後はあやなしあやゐがさけさの日影のさす名ばかりか

くした川をわたり侍るに。かのなだのしほやきいとまなみといふふるごとも。櫛の名に思出られ侍て。

浦ちかきいせおのあまのくし田川さゝてや

これもしほやくらん

富士のみゑ侍る所にもいたりぬ。むかしはさしもさだかにみへ侍し事思出られて。いまは中〳〵おもひたへ侍りぬ。

こゝにてもむかしはみゑしふじのねを老のいまこそおもひたえぬれ

さむ風と申所にて。まことに此比の寒嵐相應の名所にて侍りけるとおぼへて。

吹からになをさむかぜの里人はなれてもさすが袖しぼるらし

宮河を見わたし侍れば。こゝかしこに人〳〵なみゐたり。此河にてこりかくと申事は。さしも本說もなきよしを。社家のともがらも申侍るよしうけたまはりぬれども。なを塵勞をすゝぎ。心神をきよめんためにてぞと覺侍れば。人なみに河水をくみて身をきよむ。

をのづからにごらぬ本の心とはたれ宮川にすゝぎそめけん

齋宮の御跡は此あたりにて侍るよし人の申に。よそながらみたてまつれば。木竹いみじくしげりあひたるばかり也。

時しあらばいつかいつきの宮ばしらもとのむかしにたちかへるべき

十七日。巳刻參宮。まづ御池の水をむすび侍るほど。

契ありてむすぶ御池のみづからもとしへて神をたのむしるしと

例のごとく瑞籬の外にて二拜。

神がきの外に宮居もたのもしな法のすがたのかずとおもへば

みもすそ川のながれをみれば。むかしにこえて。いとゞ心もすみわたれるに。

ながらへて又みもすその川なみをわくるたもとにぬれてうれしき

いすゞ川にて。

いすゞ川岸の杉むら影みれば枝にもかゝる
浪のしらゆふ

例のごとく楠木のもとにて二拜。

天照すひかりの内の宮ところいく代かけて
か跡をたれけん

風の宮にて。

神杉はなをき木かげの風の宮枝もならさで
いく千代かへん

さて神馬など拜見して。神にかへり申するほど。過にし比の參宮。とし久しくへだゝりて。いとゞ神さびたる社頭のあたりをつく〲と見たてまつるにも。此たびの御參宮をわたくしのさいわゐとして思ひたち侍るに。そのかひありて。老の坂もわづらひなくまいり侍る事。ことに神の御あはれみもありけるにやといとたのもしくおぼえ侍り。さるに此たびみちすがら思つゞけ侍る歌も侍らば。しるしつけてたてまつるべきよしの仰事あり。これ又此道にいたりてのめいぼく一かたならず。かたじけなく覺侍るに。神たちをまかりいづるほど。御なごりもおしく侍りて。ねがはくはなをゝ老のあゆみをはこび侍らばやと。心の内のことぶきばかりに。

玉の緒のなをながらへば神地山君にひかれ
て又もこえなん

かくてやう田の宿坊にかへり侍ぬるを。又御つかひありて仰事ありつる。みちすがらの歌どもに詞をくはへて。いそぎもちてまいるべきよしうけたまはりぬ。みちのほどのねぶりをさまし侍らんとばかりに。ことばをも心をも沈思におよばず。ふしぎなる口號をはじめて。今日社頭にいたるまで。心にうかびぬる瓦礫どもをしるしつけて。御宿坊へもてまいり

ぬ。夜ふけてまかゝいでぬるに。ことさらの法樂に。寶號を句の上にをきたてまつりて。心ざしをのべ侍らんとばかりに。ともしびのもとにて筆にまかせ侍りて。

なにをかはわがねぎごとゝ思ふべきたゞ神がきにむかふばかりぞ

胸の塵のこさずはらへ神風やいせのちかひにもれぬ身ならば

てるといひくもるとも見しあまつ空迷ひの雲のある世ならぬを

むすびをくはをぞたのまんいせの海やよるべの舟のつなてくちずば

瀬をはやみ又身に越るとしなみや猶宮川に懸てたのまん

うれしさをわが家つとに包むかな頼む神地の山廻りして。

立かへり又よといはゞ老の身の末たのむとや神もおもはん

いは木にもかはらざりける我ぞうき老はつるまで世をすてぬ身は

しばしともなにかおしまんみる夢のさむるかぎりを待身ならずば

無漏として有漏ともなにかわきていはむ正法の道にあひなば

十八日の夜あけゆくほどに。やう田をたち侍る。しばしゆき〳〵て。いづくのほどにてか。富士こそさだかにみへ侍れと。こゑ〳〵に人の申を聞侍れども。おもひたえぬる事ぞかしと覺えながら。もしも又けふは老のよそめにもみえ侍るやとて。しばしとゞまりて。人のをしへをばかりに。めかれもせずみわたし侍れども。浪と日影とにうつりあひて。つや〳〵みへ侍らず。さのみ剋をうつすべきにあらねば。又むなしく過なんとするに。今更老衰のほど

も思ひしられて。
人は見てけふもわが見ぬふじのねは年たかき身をかこつばかりぞ
なをもそなたのゆかしさのあまりにみやり侍れば。浪ごしに山はあまたみへたるに。雪のつもりたる山一とをりみへ侍るあり。せめてたどこれをまことのふじと思ひなして。心をやらんとばかりに。
それと見てよしや心を慰さめんふじのこなたの雪の山のは
ほしあひの里と申所あり。こゝはもともきゝをよび侍しかども。いとめづらかなる里の名ぞかしと思ふばかりにてうちすぎぬるに。ことしも又二たびの御參宮にてありける事のありがたさよと思たてまつるに。一たびきますといふ古哥の心も。ふと思ひ出られ侍て。
ほしあひの里人いかにあふぐらんとしに二たび君を待見て
けふも又浦〳〵のけしき。見所おほからずといふことなし。あのゝ津もちかくなりぬるに。なぎさに松原のつゞきたる所あり。
並たてるいそべの松もあを海のかはらぬ色にしほ風ぞ吹
磯つゞきには舟どもあまたつなぎたるも有。つながぬもあるに。まことのすて舟よとみへたる舟はなし。かの松がうら島のあま人にはかはりてやとみへ侍るに。
こゝろなきあまのすみかもあらはれて世をすて舟はまれにみへけり
しほやはかず〳〵みへわたれるに。海人ども行ちがひて。しほくむもあり。やくもあり。又鹽木はこぶさまも。をのがじゝいとなむけしきいとあはれにみへ侍り。
しほ木こりしほやくあまもくむ人もからき

世わたるわざはかはらじ
あの丶津を過ゆくに橋あり。名をとへばをとめのはしとなん申す。
名にたてるあまつをとめのはし〳〵らこれも代々へて袖やふれけん
こよひはくぼ田と申所につきて。あくれば十九日寅尅ばかりに宿をたつ。ほどなく又すゞか山にも入ぬれば。かの小松の前にてことさらの法楽に。
君をいはふきねが袖ふるすゞか山代々にこへてや神もまもらん
よこた山と申所をみれば。まだ夜ふかくて。在明の月ものこりながら。空くもりてさだかならず。山のけしきはたゞよこおれるすがたよとみわたし侍るばかり也。さやの中山の詞もおもひいだされて。
月をだにさやにもみせずよこた山よこをるみねの雲にへだてゝ
又いづくのほども覺へ侍らぬ所を過ゆくに。こゝは白川と申侍るなり。さして人の家居もみへ侍らず。
東路に又しら川の名はきけど關かとみゆるやどだにもなし
こよひはみな口にとゞまりて。あくれば廿日夜をこめてたつ。しばしありてうへ田と申所を過侍るに。里一村みへて。田の面はるかにみへたり。いさゝ水のたまりたる田のほとりに。しづのめどもこなたかなたゆきかひ侍り。
冬ふかきいまもみしぶにおりたつはなにをうへ田のしづがしわざぞ
野路にもかゝりぬ。
朝霜のとけたる野路のさゝ分て冬をく霜を袖にかけつゝ
あふさかをこへ侍るに。さしもくらかりしあ

けぼのにはかはりて。けふは夕日の影さだかにむかひ侍るに。いつしか都のちかさもうれしきけしきに。たび人どもいさみあへり。

　我も又けふはみやこに入日かげうれしくむかふあふさかの山

松さかにもつきぬ。年々歳々の御參宮に。ことさら此所しも千とせの坂の名をあらはして。たびごとの祝詞にあひかなひぬるも。神慮のしからしむるところなり。

　君はなを千代の花さく松坂をいく十廻かこえてみるべき

右一卷春日社家若宮宮內所藏本

白河紀行

宗祇

つくば山の見まほしかりし望をもとげ。黒かみ山の木の下露にも契りを結び。それよりある人の情にかゝりて。鹽谷といへる處より立出侍らんとするに。空いたうしぐれて。行末いかにとためらひ侍りながら。立とゞまるべき事も。旅行ならひなれば打いでしに。案內者とて若侍二騎道者などうちつれ。はる〲と分入まゝに。こゝかしこの川音なども。袖の時雨にあらそふ心ちして物哀なり。しるべの人も兩人はかへりて。只一人相具したるもいとゞ心ぼそきに。那須野の原といふにかゝりては。高萱道をせきて。弓のはずさへ見え侍らぬに。誠に武士のしるべならずば。いかでかかゝる道には命もたえ侍らんとかなしきに。むさし野なども果なき道には侍れど。ゆかりの草にもたのむかたは侍るを。是はやるかたなき心ちする。枯たる中より。篠の葉のうちなびきて

露しげきなどぞ。右府の詠哥思ひ出られて。すこし哀なる心ちし侍る。しかはあれどかなしき事のみ多く侍るをおもひかへして。

歎かじよ此世は誰もうき旅と思ひなす野の露にまかせて

同行の人々も思々の心をのべて。くるゝほどに。大俵といふ所にいたるに。あやしの民の戸をやどりにして。柴折くぶるなども。さまかはりて哀もふかきに。うちあはぬまかなひなどのはかなきをいひあはせて。泣みわらひみ語あかすに。事かなはぬ事ありて。鬮のねがひもすぎがたきに。あるじの翁情あるものにて。馬などを心ざし侍るを。こしにかゝりて興をなして過行に。よもの山紅葉しわたして。所〳〵散したるなどもえんなるに。尾花淺茅もきのふの野にかはらず。虫の音もあるかなきかなるに。柞原などは平野の枯にやと覺侍るに。古郷のゆかりは侍らねど。秋風の涙は身ひとりと覺るに。同行みな〳〵物がなしく過行に。柏木むら〳〵色づきて。遠の山本ゆかしく。くぬぎのおほく立ならぶも。佐保の山陰大川の邊の心ちして行まゝに。大なる流のうへにきし高く。いろ〳〵のもみぢ常磐木にまじり物ふかく。大井河など思ひ出るより。名をとひ侍れば。中川といふに。都のおもかげいとゞうかびて。なぐさむ方もやと覺えて。此川をわたるに。白水みなぎり落て。あしよはき馬などは。あがくそゝぎも袖のうへに滿て。萬葉集によめる武庫のわたりと見えたり。それより又黒川と云河を見侍れば。中川よりは少しのどかなるに。落合たる谷水に紅葉ながれをせき。靑苔道をとぢ。名もしらぬ鳥など聲ちかき程に。世のうきよりはと思ふのみぞなぐさむ心地し侍るに。はるけき林のおくに。山姫も此一本や

心とゞめけんと。いろふかくみゆるを。輿に乘じてほどなく横岡といふ所に來れる。こゝも里の長をたのみてやどりとし。それよりのりものゝ用意して。白川の關にいたれる道のほど。谷の小河峯の松かぜなど。何となく常よりは哀ふかく侍るに。このもかのもの梢むらむら落ばして。山賤の栖もあらはに。梺の澤には霜がれのあし下折て。さをしかのつまとはん岡べの田面も。守人絶てかたぶきたる庵に引板のかけ繩朽殘りたるは。音するよりはさびしさ増りて人々語らひ行に。おくふかき方より。ことにいろこくみゆるを。あれこそ關の梢にて侍れと。しるべのものをしへ侍るに。心空にて駒の足をはやめいそぐに。關にいたりては中〳〵言のはにのべがたし。只二所明神のかみさびたるに。一方はいかにもきらびやかに。社頭神殿も神〳〵しく侍るに。今一かたはふりはてゝ。苔を軒端とし紅葉をゐ垣として。正木のかづらゆふかけわたすに。木枯のみぞ手向をばし侍ると見えて。感淚とゞめがたきに。兼盛能因こゝにのぞみて。いかばかりの哀侍りけんと想像に。瓦礫をつゞり侍らんも中〳〵なれど。皆思ひ餘りて。

宗祇

都出し霞も風もけふみれば跡無空の夢に時雨て

行末の名をばたのまず心をや世々にとゞめん白川の關

平尹盛。これも都の朋友にて。こゝに伴にも一しほ哀ふかきにや。

思ふとも君し越ずば白川の關吹風やよそにきかまし

穆翁

尋ねこし昔の人の心をも今白川の關の秋風

牧林

木枯も都の人のつとにとや紅葉を殘す白川のせき

此兩人は坂東の人なるが。みな此道に心をよする人にて。したひ來れるなるべし。かくて夕月夜のおもしろきを伴ひて。横岡の宿に歸る程。作りあはせたるやうのゆふべなるべし。

於白川關 應仁二年十月廿二日

袖にみな時雨をせきの山路かな　宗祇
木の葉を床の旅の夕ぐれ　尹盛
さやかなる月を嵐のやどに見て　牧林
夜寒のそらはねんかたもなし　穆翁
下もゐず雲にや鴈の渡るらん　旬阿
白なみあらき沖のはるけさ　祇
しばしだにかよふも船は安からで　盛
一むらさめに人ぞやすらふ　林
柴はこぶ尾上の道の松がもと　翁
かけはし遠くむかふ山里　祇
行袖のあくる戸ぼそにまた見えて　盛
消んはかなし夜半のおもかげ　翁
老が身や此世の月を送るらん　祇
おくるゝ我は秋もはづかし　盛
枯る野にゆふべの露を名殘にて　林
あるかなきかの花の冬草　祇
古郷やとはれし道もたえぬらん　翁
いまはたよりもきかぬ戀しさ　林
もろこしは只うき中の心にて　祇
夢に行ともいとはれやせん　翁
身をかくす人もやどりは聞まほし　盛
たづぬる山は雲ふかきかげ　林
水氷る雪のむら鳥餌に饑て　祇
冬の田づらのくれの哀さ　翁
送りえぬ今年をいかゞ賤の庵　祇
けぶりをたやす袖のあきかぜ　林

おもひ無月に泪もはらはれて　翁
又身をしれる雨の夜長さ　祇
問こぬもことはりなれや我よはひ　盛
いのちつれなくみえんさへうし　林
跡たえて戀路に入ん山もがな　祇
行衞おぼえぬ雪の夕かぜ　翁
果しなき心は花にさそはれて　盛
夢をかぎりの世中の春　林
身はふりぬはや永日もよしあらじ　祇
なげきなつめそ入相のかね　翁
物思ふ袖になみだのつきもせて　阿
人よわすればうきも殘らじ　林
心ある里をとはゞや旅のくれ　祇
たのみてとまる山ぞさびしき　翁
鳥鳴峯の枯木に霜ふりて　林
雲もさはらぬ冬の夜の月　盛
河音の高きや空にながるらん　祇

落くる水ぞ風をつれたる　林
荻のはに軒の筧のうづもれて　翁
野寺にふかき庭の朝霧　祇
道もなき霜にや秋も歸るらん　盛
まれにも人の見えぬ山陰　翁
かゝる身はすつるといふもおろかにて　祇
猶わびつゝぞ交りてふる　盛
袖寒きあしたの雪の市假や　祇
河かぜはらふ三輪の杉むら　林
淸く行水も御祓のしるしにて　翁
神よ心のつらさのこすな　盛
泪をも手向になさばうけやせん　祇
なきが跡とふ苔の下みち　林
山ふかく住しは夢の庵朽て　翁
みやこの月にたれかへるらん　祇
しらぬ野に獨つゆけき草枕　林
かたしく袖はたゞ秋のかぜ　盛

たまさかにかさねしまゝのころもへぬ　祇
濱ゆふほども我な隔てそ　盛
玉づさのかへし斗を契にて　祇
ウいつをまことのあふせならまし　翁
夢なくば古鄕人をたのまめや　盛
まくらをかせな淺ぢふの陰　林
歸るなと花散やらでかすむ野に　祇
春の日數よ思ふかひあれ　盛
年越て名殘なをうき藤衣　祇
きのふになさぬ別れぢもがな　翁
いつのまに遠くも人のかはるらん　林
子ぞつぎ〳〵に生れおとれる　祇
いやしきも大君の代をはじめにて　翁
まなべあさかのやまとのは　祇
花がつみかれど心の色はなし　盛
月に小舟のかへる夕川　林
山本に千鳥鳴江の霧はれて　翁

秋の村には風ぞさえぬる　盛
名ふくるまゝ砧のをとの近き夜に　翁
よそのおもひも聞からぞうき　林
鳥べ野のけぶりに人の名を問て　祇
消なん事を歎く身のうへ　林
望ある道に心やのこらまし　盛
傳へん法の數なおしみそ　祇
松島は舟さすあまをしるべにて　翁
波に苫屋のやどりをぞかる　盛
月も見よかゝる藻汐の小夜枕　祇
衣にふかきあかつきのつゆ　翁
歸るさの身もひやゝかに風吹て　盛
わすれぬ思ひ心にぞしむ　祇
佛になりてや花もうかるらん　林
こずゑかすめるいにしへの里　翁
ウ人も無垣根に鳥の囀りて　盛
夕日かすかにのこる道のべ　林

入山をさそひて鐘やひゞくらん　翁
御たけはるけきみよし野の奥　祇
出ぬべき佛にも身はよもあはじ　盛
たのまば心ふかくあはれめ　林
別ては誰先だゝむけふの友　祇
契りはかなや道芝の露　翁

宗祇卅　穆翁廿四
尹盛廿二　旬阿二
牧林廿二

此一巻古寫本を得て書寫終　坂昌成

さのゝわたり

宗碩

このたび伊勢の國に下侍りしことは。いぬるとしのすゑつかたにや。駿河より宗長禪老たよりの文して申をくられしは。太神宮立願として。獨吟の千句おもひ立とあり。しかはあれど老のつもりことの外にて。沉吟もことつき侍らぬまゝ。二とせみとせとなりぬ。あはれ春のころ參宮のつゐでもあらば。兩吟にもとおもひよりぬるはいかゞと申をくられ侍りき。うちみるより。あるまじきことゝおもふにより。返事をさへをこたり侍るを。さしをかずもよほされしかば。又うちかへしこのみちのおもひいでにもやとおもひなる事にて。さらばまづ山田まで着岸のころまかりむかひて。年月のつもりをもなど申をくりしかば。ほどなくとしかはり。春にもなりぬ。たがひにさはることもありて過行まゝに。いぬる水無月のはじめに。駿河よりのぼられ侍りし。やがて飛脚の人して申のぼせられしかど。草庵とりたつるほどにて。てをのゝ音もほど〳〵しくみだ

りがはしきころなれば。いさゝか連哥などの心ちもせず。からうじて七月廿日ごろにぞ思ひたち侍りし。その比おはりのくによりさる人の上洛ありしを。伊勢のわたりまでといざなひつゝ。まづみやこ出侍し日は。奈良のみやこに蓮花院とて。知人の侍る僧坊におちつきぬ。又の日は大乗院の御門跡に參上のことあり。御さかづきとり〳〵にて。それよりこゝかしこ一見し侍る程に。二日ばかりありて連歌一座あり。ふりはへてくだるみちなれば。とかくいなび侍るも。かなはずしてあひぬ。さて廿四日初瀬路にいてたちて。三輪が崎行ほど。雨にはかにふりきぬ。かの万葉のふるごと。たゞいまのやうに思ひ出られて。あまやどりをなど人々いひしも。いづこにか家もあらんと。ぬれ〳〵行過るに。あかぬ心ちして。返す〳〵さのゝわたりになどうち吟じつゝ。泊瀬寺につきぬ。その夜公坊にやどりて。をの〳〵かれいゐとりまかなひ侍る。ふと三條がいにしへ思ひ出られ侍りき。明れば伊勢の國へたちぬ。けふみちまでは筒井よりをくりの人々ゐて行に。鞍をきたる馬どもあまた行むかへるに。ともなるものにあないして。宮原七郎兵衛尉の迎のよしいへり。かくいふはすがの野などいふあたりなり。これよりをくりの輿馬などかへしつゝ。夜になりて多藝へ行つきぬ。かれへは管領の御文あればつけ侍りぬ。又のあした北畠の少將家に參る。御對面あり。それよりいそぎたちて相可といふ所に行ぬ。けふも又宮原七郎兵衛尉盛孝駒うちならべてをくらせられける。いさはとやらむいふ所にて。をくりのことゞもとゝのへて。けふぞ山田につき侍ぬる。予參宮の館は網代太郎左衛門尉弘貞所也。されどこたびは柴屋老人宗長事。參會のためなれ

ば。高向二郎大夫ところにて。としごろのものがたりしつゝ。やがて千句の有増になりぬ。この法楽はさるこゝろあり。管領の御發句申いだされ侍るに。ひとへに天下安全のいのりなるべし。第十は逍遙院殿聽雪御發句なり。さて八月四日吉日とてはじめつゝ。おなじく八日に事をはりぬ。この會は心しづかに大形事どもきはめなどすべきよし。かねてよりのこと也。さて千句のゝち。光貞興行の一座あり。十五日は橋村新次郎清正張行なり。十六日。やがて柴屋老人は近江の國へ行べきこととありて。鈴鹿の山越に出られ侍り。予は尾張のくにへ船のたよりをまち侍るに。明日十七日。夜をこめて出る船あるよしつげきたれば。すこし夜になりて。大湊といふ所にゆきつきぬ。この日ごろあひなれし人々をくりして。川崎といふわたりより。釣舟をまうけて行まゝに。をくりの人半はたちかへり。もとより友とする人ひとりふたり。船のうちまでしたひ乘て行に。易憚とて禪師なる人。こよろぎのいそにもとめけるにや。伊勢の海には目なれぬさかなどもして。玉だれのこかめさしいでたり。沖にいづる程。このさけをのみ侍らんとするに。いざよひの月やゝさし更て。清光浪にみちたり。これを興じつゝ。盃あまたたびめぐりて。大湊にさしよせぬ。こゝの旅宿は馬瀬のなにがしなり俊ところなり。あすつとめて船出すべきよしかまへ侍るに。曉がたより風かはりて。村雨のやうにふり出ぬ。をくりの人々は歸りて。濱ちかきやどりに。あさゆふ耳なるゝこととては。うらなみのをと。あらましき汐風。まれ／＼ことゝひくる。たづきもしらぬ旅人よりほかなし。つれ／＼なるまゝに。わかき人々いざなひ。これより二見の浦ははひわたる程なれば

行てみるに。浦のさま山のたゝずまひ。まことに蒔繪のかたににたる松のむら立などいへばさら也。渚のかたにうちむれて。貝石など濱つとにひろひつゝかへれば。やどりのかたは。あまのいさりびほのかにみえて。曇になりぬ。今夜も雨しめやかにふり出て。明ればつく〲とながめ侍るに。菅蓑ひきかけて。なにやらんになひたる賤のをのこ。このたびのやどりをさしてくる。なにぞとゝへば。弘貞のをとづれなるよしいへり。そのほか所々よりみちゆきつゝ。瓶子などやうのものさま〲にてあり。又内宮長官よりとて。手向のぬさ色〲して文あり。みれば哥あり。その折ふし易憚老人よりも短冊あり。いづれもとりあへぬ返しども書つけ侍りしも。浪のまぎれに忘れぬるなるべし。さて二日ばかりありて。宮司大中臣基長。外宮第十神主常信。易禪師。高向二郎大夫光定。これかれひきぐして。樽などやうのものをの〲たつさへて。あまもみえぬ道の空。ぬれ〲立よられ侍る。更〲故郷人のこゝちしてうちかたりつゝ侍るに。いま一たび參宮中侍りねかし。さらばこゝかしこのこりおほき會ども興行すべきよしあれど。いまさらたちかへりまいらんも。神慮さへはづかしきこゝちして。たゞこゝながらこゝろしづかにと申とゞめて。ふることのもとすゑなどいひかはしつゝくらし侍るに。雨いよ〲雲間なければ。心ぼそさもいやまさり行に。あるじのあやにくに發句ひとつとあれば。かつはおもひたつ手向にもと。

月や船出す夜さそふみなと風

かやうにかきつけ侍しを。さらばこれにて一折などいひて。百韻の連歌あり。翌日はをのをのたちかへられしかば。名殘こひしくながめ

侍るおり。内宮第四神主氏秀。横地館の當職うちつれて。雨もしとゞにそぼちておはしたり。又この人〳〵の心ざしの程などいひ〳〵。くれかゝる程にひきわかれぬ。さて夜更るまでものがたり。うちふしぬる夢に。老師宗祇存生のこゝちして。會席にのぞめる程に侍りしが。その席まことに玉をしきたるやうにみがきしつらひたるに。發句第三まで出きぬるやうに覺えて。四句めやらん六句めやらん。今度奥州より上洛の人侍りし。その人など申されしかの句に。

松はちとせのみもすそのかげ

と侍りし。面に名所はいかゞなど申と覺て夢さめぬ。ひさしく侍べきにやと思ひながら。かつはたのもしき心ちし侍りし。神のたすけはまことにあらたなることにて。その明がたより雲のけしきかつ〳〵なをりて。追手侍侍けるに。坂中務丞氏安。足代紀三弘宗。このふたりのかたり〔よ脱歟〕。食籠などいふものとり〳〵にて。こま〳〵とかきをくり侍る。一日十六日の夜の後。日々にもきたるべきを。えさらぬさはることにて。心はかなたになどいへり。いまぞ船出もいよ〳〵のび侍れかしとさへ思ふよしのたはぶれ事などいづる。叟柏とて竹田一流の禪師なる。これも朋友にて。興ある家つと藥などやうのものども隨身して。こととひかたられ侍る。これをともなひて。廿三日月待いづる程。空の光すみわたれるに。濱風の夜さむも忘れつゝ。夜とともに酒をのみしつゝゑひすゝみて。をの〳〵みだりがはしきまでぞ侍りし。夜もはやあけなむとする程に。おもふかたの風になりぬと。船子どもこゑ〳〵もよほして乘侍りぬ。こゝろのぬさとりあへぬまではしりゆく。かの伊勢おはりのうみづらなどいひ

し古ごとゞもいひ出て。過にしかたの人〳〵もこひしながら。こゝろはさきにいそぎ侍るまゝに。おなじ國桑名といふみなとにつきぬ。こゝのやどりは矢部五郎兵衛尉主繁宿所なり。このたび日記は。三輪が崎の雨のけしき。忘れがたきにより。しるしつけ侍れば。さのゝわたりとや申侍らん。

美濃路記行

久堅の天たゝしきはじめの年。長月中の十日のころ。ともとする人といざなひて。美濃の國にまかりけるに。いそぐ事侍るゆへ。さきだちて行侍りけるに。關山の間程とをきやうにおぼえて。逢坂山のこなたなるこ關ごえといふなる。つゞら折の所を過て。谷にくだりて。程もなくうちいでの濱より海のおもてはる〳〵と見わたさるゝなかに。みかみの山のさたさたとむかひに見へければ。

あふさかの關をこえきて行すゑはみかみの
　たけぞしるべなりける

三井寺にいたりて。本堂にまうておがみ奉りて。當來もたのもしうぞおぼえ侍る。それより圓滿院にしるよししてやどりもとめけるに。あるじ待とりたまひて。なにくれといとなみ給て。めづらかなるむかし物語などしたまふに。かの坊より比叡山八王子の跡など見わたして。物うきやうにおもほへ侍りけるに。からさきの松はもとよりことはりの一本ながら。今はつれなきさまに見え侍れば。

世のなみに國津見神のうらさびて松のみた
　てるかげのつれなさ

かやうにおもひつゞけけるも。凡慮のなげきなれば。まことの佛神の方便にやとおもひか

へして。

から崎の松もむかしに立かへり七のやしろのみゆきまつらむ

吉水僧正の哥にすがりて。

たつ杣におほひし袖もくちはてゝうき世にたみはいかですむべき

おなじき和尚この浦に山王の跡を垂給ふ事をよめりし哥をおもひいでゝ。

志賀の浦に五の色によせかへるなみのこゝろをしる人もがな

かくしつゝながめ侍るに。秋の日はやく暮て。常燈ともして。養慶僧正むかしの事などかたり侍る程に。十七日の月さしいでゝ。境地よそにはことなれば。又はしつかたにたちいでゝながめ侍るに。湖の上もみぎはのまさごも。さら〳〵としてものさびしくみえければ。あらぬ世にかはれる都の心にうかびて。

くらべみむ月すさまじきさゝなみやしがのみやこも今のみやこも

當寺の鐘をきゝつゝ。月をみるが中に。

契りあらばその曉の月も見むきけばゆへある鐘のこゑかな

あすこんといひし人のをそくやとおもひわづらひ侍るに。僧正行尊同行にをくれて。熊野の道にてよみ侍ける哥の心を。この坊の元祖なればおもひよそへて。

今夜われあふさか山のさねかづらくる人まちてつゐにさねずも

又おき出て月をみるに。さゝなみにうかべる影を見るに。石山寺にて彼式部が心もかくやありけむとおぼえて。

をろかなる心にだにもすまのうらあかしの月のうかぶ水うみ

十八日。あとより契りし人の思ひの外に日た

かく大津にきたりて。玉村齋とかいふ人の心ざしふかゝりしかば。船のまうけ心とけにて。やばせをわたり。やすのの河を過るとて。

しばしだにやすらふ程もやす河の水のみなはのやすからぬ世ぞ

もる山にて。

露時雨ふるやの軒をもる山は下葉も今や色にそむらん

十九日。雨ふりて永原の宿を立とて。あまつゝみなどするに。

人やりの道ならねども立いづるあづまからけに雨つゝみして

途中より雨はれて。淤泥をしのぎて行に。春日山のかたをかへりみ侍りて。憐愍をたれ給へとて。

たのもしないづくを行も春日のゝおどろのみちを分ると思へば

鏡山をはるかに見やりて。よそを過侍れば。

鏡山かけてもよそにはなれ行老はつる身のかげや見ゆると

老曾の森をすぐとて。

もろ人のゆきゝの中に身ひとつのとしを老そのもりの下みち

高宮より廿日のあしたたちて。いざや川にて。

ながれての世のゆくするはいざや川いざと思ふぞたのみなりける

鳥籠の山をみて。

立かへり我やどにしておもひいでむ身にしみわたる床の山川

野路の篠原をかちにて行とて。身の程をかくまではとおもひつらねて。

露分る野路のしの原忍ばるゝそのいにしへはかゝらざりしを

すり針たうげといふ所をこえけるに。むかし

山門の學侶螢雪にたへずして。離山しなむの心にて。此道にをもむきける時。老翁の斧を石にて摺けるをみて。其ゆへをとひければ。これなむ針になすと答へしを。又立かへりて碩學の名を得し事ありしより。この道の名をかくなんいふと言つたへ侍り。たゞ人の心地をばみがくべしとのをしへにてありける。南嶽懷讓禪師も沙門道一のみちをしらしめんがために。取一甎石上にして磨。道一曰。作甚磨。恭按要索師曰。磨作鏡。一曰。磨甎豈得成鏡邪。師曰。磨甎既不成鏡。坐禪豈得作佛とあり。この心を。

思へたゞ人は心のあしきをもよきをもつねにみがくべしとぞ

さめがゐは養老の瀧のながれときゝ侍れば。さりもあへず此水をむすびて。

結ぶ手のしはまでのびむさめがゐの老をやしなふ瀧つせのすゑ

柏原の成菩提院といふ山寺にやどりて。そのかみしたしかりし大とこの年經てたがひに老となりぬれば。再會も稀なるべしと覺へて。

君と我老ての後はあひがたき法のちぎりのくちぬうれしさ

伊吹山のふもとにて。

今よりや更に伊吹の山おろしよ冬をもまたぬ秋のはげしさ

近江と美濃とのさかひに。たけくらべの山といふをみて。たはぶれごとに。

あふみみのいづれひろきとしらまほしたけくらべする山にとはゞや

廿一日。夜をこめて垂井の宿を立とて。

山かげや井つゝのたるひむすぶかとあらしはげしき秋のさむけさ

青野が原をあかつき行に。在明の月の露にやどるを見て。

白露に青野が原の色かへて草葉のうへにあり明の月

不破の關はととひ侍れば。道より外ををしへ侍るに。そのかみさへ。後京極攝政殿のあれにし後と詠じ給ひけんを思ふに。今はさぞと思ひやられて。

昔だに不破の關やはあれぬめり殘るなのみやいひつたふらむ

關の藤川を尋ければ。いづくといふを聞て。

こえやらで春をしぞ思ふ岩波を花にさかなむ關の藤川

濃之一州有城。名岐阜。予秣鞋見之。則現蓬萊於和國之謂也。賦唐律以舒其賀云。

難慰騷人墨客情。　征鞍萬里出都城。
日東一曲景濂後。　添得岐山鳳鳥聲。

又。

岐阜高望勢接天。　近移周室舊山川。
忠肝曾不分支日。　坐致太平八百年。

廿二日。雨のふるに。あすなむまかりのぼらんとおもひて。やどりける家ゐより城郭の見へ侍るに。こゝをなむいなば山といふといひければ。

千里までなびきにけりなそよぎたついなばの山の風のまに／＼

廿三日。雨ふりしきるに。立いでむとして。

雨によりみのより笠をうちきつゝ出るすがたの名にはかくれじ

昨日は大雨なればとゞまり侍りて。けふまかりたつとて。家々を見めぐれば。みつばよつばの殿つくり數をもわかず。おほぢのさまは。平城のはじめもかくやとおもひやられつゝ。岐阜をいでし。かきやといふ所に寺あり。これは持是院と名をえしもの。後成恩寺のおとゞを請じ奉りて。敷島の道をうかゞひ侍しに。後の

世までのしるしをと申けるに。その心ざし淺からぬをや感じ給ひけん。梅津といふ所に。是心寺の住持にておはせし御むすめを。この國にうつし給へり。いまもその政のふるきを尋て。かの家の御むすめ。むかしにかはらずおはします。尋ねまいらざらんも。一家のよしみあさきやうなれば。こと更におとづれ申侍しを。かひあるさまによろこび給ひて。こまかに御物がたりのついでに。此寺は義家自作に刻彫せし肖像を本主なりとて。とばりをひらかれしかば。しづかに回向し侍にき。竊にこのことをおもんぱかるに。源家の權柄も漸々その勢のおとろへぬべき時もやめぐり來にけむ。天が下信公になびかぬ草木もなき有さまは。先代にもそのためしいまだきかざりし事なり。その本系をたづぬれば。小松のおとゞ第二の後胤なれば。暑往寒來ことはりにて。今四百年の後立かへり。平氏の再榮ゆべき世にやとおぼえて。

　おさめしるその源もながれずばすみかはるべき時やきにけん

かくて都のありさまなどとはせたまふに。のぼらせ給へなどゝすゝめ申とて。

　あれぬとて思ひなすてそ春秋の花と月とはみやこなりけり

かうと河とやらむにて鵜舟をみて。

　鵜飼舟つなでを今はひきかへてなつなき水のすさまじきかな

みゑじといふ所にとまりて。夜もすがら思ひつらねてまかりたつとて。

　うきことを思ひながらもいとひえぬわがこころさへしらぬ世ぞかし

けふは廿五日。天神の緣日なれば。旅泊などのうれたきことを。

あはれとは神もしるらんそのかみにくるし
さたぐふたびの心を

小野の宿のはにふのこやにとまりて。萬葉集に玉しける家もなにせむとあるを思ひ出て。

いく夜われ葎のやどをかりつらんつゐにいもとしいねぬものゆへ

廿六日。多賀大社にまうでゝ。八乙女の袖をかへすを見て。

八乙女のかへす袖よりいさめけれ神のめぐみはいまもかはらじ

道より雨ふり。からうじて永原にて。

あづまやのまやのあまりのいぶせさもながき夜すがら雨さへぞふる

永原よりは都へは海山かけて七里と聞て。

宮古人あすはあふみのうみ山をこえむとたのむ程になりぬる

廿七日。永原よりしなまで深泥をしのぎて。

數日旅程霖雨霽。　志公野馬爲誰題。
路頭官客今何愧。　湖上清蓮豈深泥。

しなより船出せしに。日さしのぼりて。浪もなくしづかなりしかば。

船出するあさ日の影はしなてるやにほの水うみなみぞなぎたる

濱を過るには。大津までの海づらは住よしの浦にまがひておぼえ侍りければ。

志賀の浦に鹽もみたなむ眞砂地をゝりつゝゆけばすみよしの濱

廿八日のあかつき。月の出るを圓滿院の椽よりながめて。

峯こえて明はみやこに歸りなむあかつき月よみちしるべせよ

兎庵老人

紀行之一軸。如十歩九移日。詩中有千山万

水。不出卷而知天下。豈金玉乎。

樗散老翁實澄

續群書類從卷第五百廿五

紀行部二

湯本記行

［右舊本闕］

小堀遠州辛酉記行

元和七酉の九月廿二日。天快晴。午の時斗に武藏の江戸を立。したしき人々爰かしこ馬の餞別すとて。申の時斗に品川を出。急ければ酉の時ばかりに神奈川の里に着。一宿。秉燭程に亦友達の名殘惜みて馬のはなむけす。酒肴小壺に茶を入。文添ておこせたり。其返事取集たる言葉種いひやる次に。別といふ心を。

かへりこんとちぎるもあだし人こゝろ
　さだめなき世のさだめなき身は

永夜も燈に向て聽鷄鳴。しも人共の聲してうちしわぶきて。夜も早曙なんと云を聞て。旅行別後朝思と云事を。

日數經ば末は都やちかからん
　別れものうききのふけふ哉

と書て使は返しぬ。

廿三日。天晴。神奈川を立。帷子の里。藤澤を過て。舟渡し經て大礒にかゝる。そこを行すぎて

礒邊を通る。風靜に浪の音おだやか也。人に問ば爰なんこゆるぎの礒といふを聞て。寄名所別といふ心を。

こゆるぎのいそがぬ旅も過て行
わかれ路とめよ足がらの關

猶ゆき〳〵て夕陽山の端にかゝるとき。きく河の里を過。川を渡りて小田原に着。一宿。思ひの外友だちの來り。獨ふたりして語て。其夜も更ぬ。聽鷄鳴より雨降。風はげしく浪の音高し。忍別旅宿の枕と言こゝろを。

よる浪のこゑにめさますかり枕
忍ぶ別の夢ぞみじかき

廿四日。雨降風やまず。けふは爰に留るべき抔いふ。巳の時斗に晴。風も靜る。小田原を立。湯本早雲寺を過て。足がらの山にかゝる。遠近に見へる山々谷々の梢。色々に染なす錦をさらすかとうたがふ。あまりの面白さに行もやらず。とある岩ヶ根にたすけられて。獨見山の紅葉といふ心を。

おもふかいなき世成けり足柄の
やまの紅葉も君しなければ

漸々山をよぢて。あし川の新宿に着。しばらく休息して。夫より山中の里を過て。夕陽と共に山を下り。三島の里に着。一宿。折ふし思ひ出る事有て。轉寢の夢さめて。

かり枕かたぶくるよりうたゝねの
夢をみしまの人の面かげ

この歌の詞書。思ふ子細ありて不委。

廿五日。晴天なりといへ共。風なゝめならず。三島を立。沼津を通りて。原の宿にかゝる。面前砂吹かけ行歩叶がたし。友にさふらふ人の。かく浮島ヶ原よと言を聞而。實かぎりなき旅をもする哉。何國を宿と定べきかたもなし。行とまるをぞやどゝさだむるの歌の心。おもへ

ば風雲流水の生涯なる哉と心細く。
住はてん宿はいづこと白浪に
身を浮しまのよるべしられず
又友なる男の馬に乗たるが風にふかれて。たへがたさのあまりにや。かくいふ。
むさし鐙こにだにかけて大風に
乗ぬもつらし乗もうきしま
笑敷思ひて。此まぎれにやう〱浮島原を過。吉原の里に着。暫休息して風些静る程に此宿を出て。富士のすその河の邊に着ぬ。渡守はや船に乗と言。此山を見れば。白雲山をかくさむとすれ共。はるかのすそ野にたなびき。雪一むらの高き事は目も及がたし。時の間に色々に移りかはる景氣詞に述がたし。折節友とする人の云。此山を都の邊におきて。我おもふ人々に見せてなど戯てかくなん。
見ても又またもおもひを駿河なる
富士の高根を都なりせば
亦山の頂よりけぶりの立を見て。寄富士思といふこゝろを。
我おもひいざくらべ見む富士の根の
けぶりはたゝぬひまやありなむ
此歌も夢を三島のこゝろにや侍らん。とかくまぎらはして蒲原の里に着。まだ日高けれ共。けふは風のさわぎもくるし。行衛もおなじ旅のやどりならんかしとて。此里にとゞまりぬ。戌の時斗に知る人尋來りて語て。其夜も更ぬ。あくれば。
廿六日。天快晴。風靜なり。きのふの空に似ず。蒲原を立。由井の鹽屋はる〲の渚を過て。淸見ヶ關に至りぬ。寺に登りて見れば。後は山高聳。岩松無心といへども嵐に吟。石ばしる瀧の音に調を合たるは廣長舌におなじ。前には海上まん〱として。霧こもれる松原は。帯のご

とくにて波上にうかむ。つりの小船は浪間に見へかくれ。かの明石の浦のしまがくれ行といゑる事を思ひ出て。詞にのべむとするにものいわれず。昔は言葉を盡さず。詞は心を盡さずといへり。寔これならんかしとて。あきれて時もうつりぬ。

　東路のいづこはあれど清見がた
　　浪間にうかぶ三保の松ばら

いつまで爰にあるべきぞ。日もはやかたぶくと言。此せきは心なき人の爲にこそ扉結けんと語て。やう／＼寺を下りて江尻の宿に着。此國の預り人我したしければ來て。此里にてまうけなどして。はるかに程經てこの里を出て。うは原吉田の里を越て府中に着。昔住なれたる府なれば。懷敷おぼえて。我ありし宿を立寄見るに。門前草深く。見しにもあらず。

　住なれしやどは葎に閉られて
　　秋風かよふ庭の蓬生

それより河原に出る。木枯の松詠めやりて。

　今更に猶うらめしきたび衣
　　きてはうき身を木枯の松

ゆき／＼てまり子の里にかゝる。駒の口引たる男。沓と言ものをかわんといふ。童の立出て價を高く言。などたかくいふぞと咎れば。内よりも女房のこゑして。爰はまりこの里にて。くつのねのたかき也と言。口引の男是を心得ねばいらへせず。よしありて覺ければ。爰にてかわずとも有なむ。あすかいとく／＼。さきにもあり／＼と。戯て行過てとへば。しか／＼の人の家居たる成とかたる。さもあらんかし。そこを行過てうつの山に至りぬ。此里を見れば。白き餅の丸雪のごとく成を器に入て。是めせと云。とへばとゝふ團子迚此里の名物なりと云。扨はもろこしより渡りたる餅にやあむなるとい

ふ。さにはあらず。十宛杓によりてとを團子とかたる。さらばすくはせよといへば。あるじの女房手づからいひかひとりて。心のまゝにすくふ。是に慰て暮にけれ共。うつの山にかゝる。元よりつた楓葉しげりてとある所なれば。いとくらふ道も細きに。うつゝともわきまへ侍らず。

　さらでだに夢の浮世の旅の道
　　うつゝともなきうつの山越

行衛は岡部の里に着。一宿。其夜は岡部の松風にゆめをおどろかし。明れば。

廿七日。天晴。曉月と共に岡部を出て。藤枝。瀬戸。十島。島田を過て大井川の邊に着ぬ。住なれたる都の大井川思ひ出て。

　名にしおはゞいざ事とわん大井川
　　やまの紅葉は有やなしやと

河の面をみれば。水はやう淵瀬の數々をみるに。ゆきわづらひて。

　越わぶるあらしの淵瀬大井川
　　浪かけ衣ほしぞかねぬる

からふじて川を渡りて。金屋の里に着て。暫休息して衣をほす〳〵。さよの中山にかゝる。としたけてまたこゆべしの歌。おもひ出てあわれなり。過にし年月。此山を越るたび〳〵。哀なりけりと詠てぞ越し。今また越るもしかなりと。こし方行先おもひ續て。

　思ひきや過にし年も幾度か
　　小夜の中山またこへんとは

漸山をこへて日坂の里に着。それより掛川の宿にかゝる。昔年見しあるじ立出てしばしと止る。

　しばしとてとむれば腰を掛川の
　　やどのすのこに尻はひへけり

とて土器取揚て立出ぬ。袋井の里を過。見附の

國府え着ぬ。里人に逢て。此所をなにゝよりてかく云と問ば。富士山を初めて見付けるによりてと語る。扨は是よりも見へ侍るか。ふしぎさよといへば。此男空目をつかひて。いまも見へ侍る事もや候わん。あの白雲のうちなりといふ。

白雲のたへまく〳〵をそれかとて
終にふじをば見付たり鳬

宿に入。此所に一宿。知る人尋來て。酒のませ物をくわせなどして。取集たる物語に。長夜もとり〴〵にしきる。臥程もなく明れば。

廿八日。朝天晴。あたり近き濱松の城主知人なれば使おこせたり。見付出て中和泉を過。天龍の舟渡り經て濱松にかゝる。城守また使を出す。あないせさせて城に入。はるかにありて。午の時斗に細雨降出ぬ。けふは止るべきよし懇に云。され共今夜はいま切の邊迄とおもふとて立出ぬ。城主名殘惜て。遙〳〵おくりて別れぬ。細雨なれば風さへ靜成。誠に名にしおふ濱松ならびたり。汀によりくる浪の音も松の響も聞に妙也。

浪の音に濱松風の吹あはせ
折から琴のねをやしらぶる

細雨なれば濡る程もなく。荒井の渡りに着。俄に風烈なりて浪の音高し。雨も頻也。

山風に秋の時雨を吹來ては
浪もあらゐのわた渡かな

（のイ）（わたし舟哉イ）

袖もほしあへず舟より揚り。此所に一宿。秉燭程に京より文持來。故鄕の事ども聞に夜も更ぬ。雨風やまず。

廿九日。曉天晴。風はまだ。あらゐの里を出て夜深し。白須賀の里を通る。

よをこむる道の便の竹の杖
行衞をとふに白須賀の里

夜もほの〴〵とあくるに。汐見坂を登り。はる〴〵谷行細き川有。問ば是より三河國といふ。そこを行て里有。二タ川といふ。

國は三河里は二タ川あわすれば
いつかは登りつかんふるさと

是より輿に乗て一睡眠。夢覺て問ば。はや吉田の里にも着ぬと云。夢のうちにはる〴〵の道をも來ぬる事よとおもふて。

ゆめとてもよしや吉田の里ならん
さめてうつゝもうき旅の道

此所の城主殊に我したしき人なれば。立寄て對面せん事をいゝやる。城主例ならぬに寄て京へと云程に。そこを過て橋渡りて。小さか井と云所に至る。友とする人の中に。攝泉堺の津を知る人有。あふ坂の關より西の名津なり。此所も堺といふ名は同じけれども。所がらは似ず。是は實に小さかい也と戲ければ。里人きゝて此里の端に小坂有によりて小坂井なりと語る。そこを行過て五位の里に至る。東地に里の名多けれども。かく位の高き里はなしと云ば。またある人云。鳥にも似たる里の名哉と。色々におかしき事共。しも人の云を聞。赤坂の里に着。續の里を長澤と云。

空はれて日は赤坂の里はなれ
たびの行衞の道の長澤

ゆき〳〵て二村山に至りぬ。此山の中に寺第法藏寺といふ。立寄一見。

三河なる二村山をはこにして
中へ入たる法藏寺かな

此山を見るに。青葉にまじる紅葉の嵐にさそわれて。さながら錦をたつがごとし。

二村の山の秋風はげしさに
紅葉の錦きてもこそ見れ

夫より藤川と云所に着。一宿。明れば。

三十日。天快晴。あたり近き岡崎の城主知人にて消息有。其書に。はるかに音づれを聞ず。此頃もやと待侍りしに。藤河に着ぬときくより。對面せん事を悦と。懇に云おこせたり。返事に。

今朝は猶いそぎ出ぬる草枕
　我岡さきに人のまつやと

やがてと書て使は返しぬ。日出程に岡崎に着ぬ。城主迎とて出る。ともなひて城に入。暫物語して巳ノ時斗に城を出ル。はし渡りて矢はぎの宿に入。城主名殘おしみて。此宿迄おくりて來る。たがひに馬を止て。

武士の矢はぎが宿に入よりも
　猶たのみある人こゝろかな

城守かへし。

武士の矢はぎが宿に入弓も
　おしてかへればかひやなからん

とて城主も歸りぬ。立わかれて八ッはしと云所に至りぬ。杜若の名所なれば。おほくあるらんと思ひて見れどもなし。

八ッ橋にはる〳〵と來て三河なる
　花には言を杜若かな

と云ければ。ともなふ人々限りなく笑がりて。是に興じて池鯉鮒の里に着。ゆき〳〵て川のありけるをとへば。三河の國と尾張の國との境河と云。はや尾張の國にも入ぬるよと云。けふは九月晦日なれば。

東かた道をば行もつくさねど
　秌はけふこそ終なりけれ

と口すさびて。いも川。阿野。あり町宿をも過て。鳴海の里に着。ともなふ人の中に。

年毎に登りては又くだれども
　なにと鳴海のはてはしられず

夫より笠寺山ざきの里を越。あつたのみやに

着。一宿。
神無月一日。天遠晴風靜也。人々宮へ參るべしといふ。

　里の名もこゝは熱田の宮なれば
　　けふより冬の神無月かな

とて神前江は參らず。此國の守の御もとへさして言べき事侍るによりて。今日はとゞまりぬ。國守の御許より殊に懇にいたわり給て。御舟など給わりて。暮かゝる程にあつたを出て。はるばるの海路を經て。伊勢の國桑名の里につく。船より上りて。

　舟人のこがれて伊勢につく里を
　　桑名ときけば旅はくるしき

とて夜もあくる程に此里を出る。
二日。天晴。風すさまじく。巳の時斗に風も靜る。四ヶ市場と云所に着。此里に知る人有。立寄て午の時斗に出ぬ。濱松の里を過て。ひながの里にかゝる。

　里人は日ながの宿とおしがれど
　　おりしも冬の日こそみじかき

とて駒を早めて程なく杖つき野にかゝる。歩行人のくるしきにやかくいふ。

　かち人のあづまの旅の草臥に
　　杖つき野とや人のいふらん

漸々此野を過て。石藥師と云所に着。つゞきの里を庄野といふ。此所を通るに。下モ人のかたる。歌とは何事を言ぞとゝへば。その中に歌知る人や有けん。我おもふ事を三十一字にていふとおしへければ。さらば歌よむとて。

　ひだるさに行事かたき石藥師
　　なにと庄野の燒めしをくふ

とて。其所の名物なれは。手毎に是を求めてくふ。下人の歌にはよしやあしや。なをゆきゆきて龜山と言所に至りぬ。山のかたを見れば。時

雨の降やうに見へけり。

名にしおふ都のにしの龜山の
やまにもけふや時雨ふるらし

程なく關の地藏に着。此關のならいとて。顔白擣誠地藏がほしたる女共の。錫杖にはあらて。杓子と云ものを手毎に打ふつて。旅人とまり給へ〳〵。つかれたすけん〳〵。日暮ぬ。是より先の里はなし。通すまじとこへ〴〵にいふ。

梓弓はる〴〵來ぬる旅人を
こゝにて關の地藏がほする

我には罪科もなし。頼まじ。教外別でんかし。南無阿彌の鹽辛。はらもふくるゝ程喰たれば。杓子にてすくわずともと。聲もはやりかにいひて。なを馬をはやめて。坂下里に着。一宿。

三日。天晴。風靜なり。此坂の下は四方に山を戴。溪ふかく水の流目なれぬ様の所。山の紅葉はさながらからくれなゐをかざしたる心地して行もやらず。

色〳〵の紅葉をかざす坂の下を
ふりすてがたき鈴鹿山かな

漸坂をよぢて。はる〴〵の山路をしのぎて。土山を過。水口の里にかゝる。過し三月の初め通りし事おもひ出て。左右の田面を見やりて。

みな口を苗代に見し近江路を
かへればしものおくて田となる

夫より和泉川渡りて。石部の里過る程に。京よりせきむかへとて人々來る。語て行々鏡山を見れば。時雨の雲にかくれたり。

心ありて時雨にくもる鏡山
やつれぬる身の影を見せじと

かくいふと雲はれて曇りなし。

旅衣やぶるゝかげを見られじと
かさ着て腰も鏡山かな

ぬきあしになりて急ぐ。草津の里を過て。矢橋

の渡りに着。あたりの人々來りて舟に乘。折節追風吹。大ひえを詠て。

追風に舟は矢ばせの渡なれど
　やぶれ衣に身はひへの山

と戯てうちかたらいこがれ行。唐崎の松ながら山ながめやりて。

唐崎の松ときくより歸り來て
　昔ながらの山をこそ見れ

程なくうち出の濱に着。此所のあづかり人殊に我したしき人なれば。常の人より懇にいたわる程に。はや故郷にをきぬるこゝちし侍る。秋の夜のちよを一夜の心にて。此夜は寢もせてあかす。

四日。天晴陰。されども里はうち出なれば。逢坂の關にかゝる。せき山の紅葉一きわ勝たり。少時ながめいたり。

花ざかりうち出の里に立かへり
　けふあふ坂の紅葉をぞ見る

關こゆるに人々多くならびいたり。みればみし人なり。夫かかれかなどいひて。かち人の渡るにぬれぬ花のしら浪とながめてぞ越し。今は又かへりあふ坂の關ふみならすとうちかたらひ行程に。追分を過て山科の里にかゝる。また京なる人來る。珍らしさにそこなる庵に立寄て。しか〳〵物語して。夫よりひの岡のさかのぼる。住なれたる都なれども。はる〳〵の田舍わたらひに。今歸りて見れば。めなれぬ心地して侍る。東山のもみぢ殊更なり。是まで旅の向後のつれ〳〵なるまゝに。なにならぬおかしきことども筆にまかせ侍る。今はゝやおほやけ事などさしつどひて。きのふのうきも戀しき程におぼえて都に入ぬ。

〔右遠江守政一紀行舊本闕今以黑川眞道氏藏本補之以一本加校合畢〕

續群書類從卷第五百二十六

總檢校保己一集
男源忠寶校

紀行部三

丙辰紀行

武藏野

名におふむさし野は。月の入べき〔山脱〕月もなしといへば。まとにそくばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり。此國の稲毛。葛西。越谷。岩筑。河越。鴻巣。忍なども。皆むさし野の内にて侍る。いづれも御獵場なれば。毎年爰にならせ給ふ。

國野同名稱武藏。尋常旅客宿春粮。雨餘草色連天地。郊外雲烟沒邑莊。富士雪遙花稍小。筑波陰茂薺猶長。殘星點々夜叢火。微月纖々照射光。共往蒭蕘多幾許。齊飛梟鷹百千行。豫遊兼習驅馳範。養放皆知鷹鶻方。雲夢青丘倶芥蔕。子虚烏有本荒唐。班鳩入網風前戯。白鵠罹黏泥上霜。暴虎何曾逢太叔。非熊庶幾載師望。薮蔬任見宜應採。耕穡於時亦不妨。仁愛只今覃物處。豈論五柞與長楊。幸逢四海爲家日。處々風烟似故郷。

春風にまたおひそふる若草の色や霞にまがふむさしの

淺草

爰に寺あり。たふとき觀音ましますとて。人の多く參詣すと申ければ。大士の日人にさそは

れ。余もまかりける。げにも人のいふやうに。男女の群集する事。京の清水よりもおほく見へける。むかし此所牛鬼の出てはしりありきし事を。心に不圖おもひ出て。馬こそ大士の化現なれ。何とて牛は出けるぞとおかしかりき。爰の觀音院しる人なりければ。しばし立よりてやがてかへりぬ。

法威能救衆生憂。小白華山彼岸舟。若把馬郎令渡水。應同海底有泥牛。

神田

此社は平親王が屍骸をうづみし所にて。其靈をまつるとかたりつたへ侍る。

昔聞鐵額是蚩尤。何事將門廻逆謀。草木山川無寸土。一堆埋骨幾春秋。

愛宕

いづれの時にか。京なる愛宕を遠江國なるこ坂に勸請し。それより駿河國うつのやにうつし。又武藏國にうつして侍りし。是は勝軍地藏の法おこなはるとて。とに武士の崇敬する故に。始はわづかなるほこらなりしを。漸つくりひろげて。今は大厦になりぬ。

京洛移遷坐武州。築壇構閣陟山丘。誰知幣帛神封物。却作沙門活命謀。

增上寺

髣髴給孤園。飛廉倒大門。遠公名已久。善導法猶存。悲願雖扶女。哀鳴屢繫猿。始知蓮社內。更有國師尊。余入寺時。庭前有猿。

隅田河

都鳥は角田河の物なれば。好色の人とりて家に飼て侍るを見るに。まとにはしとあしとあかき鴫の大さなる。この鳥蛤を好みてよく食けるなり。

漾々溶々一葉身。河邊秋景只懷春。自從在五詠歌後。流水飛禽愁殺人。

金澤

金澤の絶景は東州の佳境にて。事好むもの丹青の手をかりて屏風にうつし。市杵島天橋立にも。いかでかおとるべきなどもてなしあへり。北條氏天下の權をとる時に文庫を建て。金澤文庫といへる四字を。儒書には黒印をおし。佛經には朱印をつきておさめ置ける。越後守平貞顯この所にて。淸原敎隆に群書治要を讀せける。余が見侍りしも。文選。淸原師光が左傳。敎隆が群書治要。齊民要術。律令義解。本朝文粹、續本朝文粹。續日本紀などのたぐひ。其外人家に所々ありけるも。一部と調たるはまれなり。一切經も取ほごして。纔殘りて今に金澤にあり。古記典籍の厄に逢る事。いにしへより今にいたるまで。いくたびといふ事をしらず。蘇我氏が亂は我朝の一秦とも申べき。宅嗣が芸亭は名をだにもきかず。宇治の寶藏蓮華王院の寶藏なども跡さへぞなき。誠に祝融にうばはれ。陽侯におぼるゝのみならず。兵燹にほろび馬蹄にふみ散さる。心あらん人むかしをおもひ出ざらんや。されば人のかたりしは。先聖先師九哲の影。六經の注疏。いまに足利にあり。小野篁が東國へまかりける時に。足利に讀書の堂を作りしが。今に殘りてあるぞ是なるとなん。余もまかりて見むとのみあらましにて年月をすぐしぬ。

懷古涙痕羈旅情。腐儒早晩起蒼生。人亡書泯幾回歲。境致空留金澤名。

鎌倉

鎌倉にいたりて。あなたこなた見ありき侍りしに。賴朝の墓とて人のをしへければ。鴨の長明が草も木もなびきし秋の霜さへてといへる事を思ひ出て。

滿目鎌倉城郭亡。雲烟漠々樹蒼々。逍遙昔聽

遊龜谷。報賽今無詣鶴岡。草偃匣中三尺水。苔深墓上五更霜。君公不識包桑計。千載英雄涙濕裳。

江島

藤澤より馬にまたがり。海濱ちかき所にて。漁父の舟をかり。江島に渡りて見れば。あなたの海の岸の本に大なる岩窟あり。たい松をともしてふかく入ほどに。百步あまりにてやみぬ。むかし龍神の棲ける所となんいひ傳る。この島の辨才天女は世にかくれなき事なり。

借問島中人。不知此孰神。蜿々遺蹤在。君其問水濱。

江島從來神女居。風鬟霧鬢駕雲輿。遊人若有登仙意。水宿應傳柳毅書。

神世いかに今むつましみわたつ海の八重の鹽路に言傳やらん
大礒

此所に曾我十郎が妾虎が舊跡ありとて。一の石を人々あつまりみて。もたげころばしなどして。むかしより虎石と名づけ今にあり。

十郎慷慨愛於䓁。血氣武人犀甲軀。妾婦當時誓星否。隕成此石似望夫。

箱根

永仁四年に此山の鐘を鑄て銘をきざみし其序に。當山葢山嶽之神秀者也。孝謙皇帝御宇。天平寶字年中。萬卷上人草創擇地。三所權現松㯕並甍といへり。中頃炎上せしを。北條氏再興して十二州の鎭守とす。山上に湖水あり。神靈のすむ所なりとて。いにしへより人のつゝしみおそれて。今に入事も侍らず。舟をうかべてめぐりありく事はありとなん。彼別當のかたりしは。仙人四代この山に住て。駒形の深秘をあらはし。役小角も爰に來りて其跡をのこし。熊野權現と此神と一体にてましますくはしき

事は縁起にありと申き。

長坂脩途不可攀。惟天設險甲東關。回頭木末待吾僕。信足湖邊濯容顏。鯨背浪高伊豆島。馬蹄雲起筥根山。相逢盡道歸耕事。歳々年々幾往還。

雪か花かあけぼのかすむ筥根路を越れば峯のあとのしら雲

走湯山

走湯山は伊豆の山の事にて侍る。爰にましますす神をば走湯權現とぞ申ける。昔鎌倉右大將伊豆箱根を信じ。常に蘋蘩の禮をいたし給ふ。二所參詣といへるは是なり。此ところに出湯あり。石ばしる瀑のごとし。走湯の名も溫泉によりての故にや。又一里斗西に溫泉あり。その所を熱海と名づく。人のよろづの病あるもの。浴すればたゞ驗あり。先年余も人にさそはれて湯に入侍りし。其湧所をみるに。潮の進退によりて。岩の間より烟むしあがりて。人の近づくべくもあらぬほどあつきに。熱湯わき出て流れはしるを。筧をかけて家々にとり。槽に滿へて人々に入せけり。

絶境靈蹤亘古今。尋名吾輩亦登臨。走湯權現救人處。便是驪山神女心。

三嶋

伊豆の三嶋はむかし伊豫の國よりうつして。大山祇神といわひまつる。いつぞや相國の御前にて。三嶋と富士とは父子の神なりと。世久しくいひ傳たりと沙汰ありければ。さては富士の大神をば木花開耶姫と定申さば。日本紀のこゝろにもかなひ申べきなり。竹取物語とやらんにいへるかぐや姫は。後の代の事にてや侍らん。凡三嶋といへるは。豫州攝津この國と三所にあらはれましますよし。神名帳にありと覺へ侍る。

祭儀如在幾千年。青幣相連引白綿。天下神明垂跡處。流行似得地中泉。

蛭小島

平治の亂に兵衞佐源賴朝この所に流されて。廿余年の間仇を報む事をはかりしに。治承壽永の頃兵をおこし。平氏を攻滅し。安德帝福原を落させ給ひて。西國にてうせ給ひし事を思出て。

包羞忍恥左迁身。養虎遣患只此人。吹起多年東國燼。福原城闕作烟塵。

大島

術ありとてたのむべからず。役優婆塞が鬼神をつかひしも。廣足が讒によりて流されし。力ありとてたのむべからず。鎮西の八郎が大弓をひきしも。信西がはかりごとにてうつさる。されば此島は伊豆の沖にありて大島と名づけ。いにしへより風浪のたよりまれなれば。迁客投荒の所とす。近頃　仙洞脱屣ましまさゞりし時。宮女の和姦の罪によりて幽閉し。死を給ふべきなど。天氣しきりにありしを。大相國寛仁の心まし〳〵しかば中宥られて。あまたの宮女をながしつかはれし新島も此澳にあり。松浦佐用姫か玉島山にひれふり。御息所の淡路の武島に住給ひしも。かくやらんと人々いひあへり。

迢々南海濱。擧目不知津。小角來驅鬼。八郎謫化神。土人畜獸類。風浴（俗歟）混魚鱗。寄語一漁叟。天涯奈汝身。

富士沼

相國の御前にて平家物語の事のありしに。平氏鳥の羽音に驚てにげさりしは富士沼の事にて。今の善德寺は其所なり。齋藤別當が東國に精兵の多き事をかたりしによりて。平家の兵ども臆病神のつきて。かくのごとくありける

なり。御前に侍りける某を御覧じて。辯士をして敵の美を談しむる事なかれと。兵法にいへるは是なりと仰せける事も。只今の樣に玉音耳にとゞまりて覺へ侍る。

閤國中分源與平。東方氣勢盡豪英。何須禱八公山上。竿是旌旗木是兵。

富士山

富士山の名ひとり我朝に鳴のみなのず。遠く中華まてきこゆ。赤人が歌は萬葉にのせ。都良香が記は文粹に見へたり。徐福藥をたづねてこの山にとゞまり。是を蓬萊山と名づくる事は。義楚六帖にあらはし。六月雪花飜素毳。何所深林覓白鷴といへるは。宋濂が曲にあらずや。加之羽客釋流の此山に跡を殘す事は。役處士がはじめて攀躋しより以來。空海圓珍岩石をきざみて佛軀を彫もの山上におほかり。白衣天女の形をあらはし。淺間大神の跡を垂まします。誠に我朝無双の名山なり。近代叢林の詩僧この山を題せし中に。富山千仞雪峻嶒。幾度思登病未能。迸汝錫飛三伏裏。歸來分我一壺氷といへるは信義堂なり。大地撮來無寸土。當空還見此山成。海潤纔浸半邊影。多少漁舟載雪行といへるは乾峯なり。絶頂雪殘春夏秋。莘烟一抹畫眉修。吾疑上有望夫石。不耐閑愁獨白頭といへるは岩惟肖なり。六月雲間積雪新。東遊未蹈玉嶙峋。畫師今有移山力。一洗京塵困暑人いふへるは惺瑞岩也。富士峯高宇宙間。崔嵬豈獨冠東關。唯應白日青天好。雪裡看山不識山といへるは彥希世なり。富士耳聞身未遊。畫圖相對與悠々。東關千里吟鞍上。晴雪赴人三五州といへるは沅南江なり。五須彌外有須彌。呼作士峯吁是誰。六月雪飛寒徹骨。擘開芥子欲藏之いへるは澤天隱なり。莫言北闕隔東關。富士朝々如對顏。四海一家皆帝力。千秋白雪御前山とい

へるは三横川なり。士峯秀出海之東。名在景濂詩句中。若把白鵬論白雪。扶桑六十一雕籠といへるは九萬里なり。天台四萬八千丈。若在吾邦立下風といへるは瑾雪嶺なり。工拙は具眼の人の知事なれば。書ならべてをき侍るなり。其外騷人墨客の詠しもらせるはあるまじきにや。此比人の作れるとて。青天忽見素羅笠。檐中十五州といふ句を聞はんべるぞめづらしきにや。我輩の今更口をひらかむ事は。人の涎を舐て事あたらしきやうなれど。さりとていはざらんも。懶墮のおそれあれば。聊申つゞけ侍る。かの不與浮雲齊といへるは此たかきにや。嵌空大始雪とあるは此雪にや。衆山之峛崺なるをしるは。此山にのぼりての事にや。天下をすこしきに歩する人もあるべきにや。蓮花は早々崆峒は薄といへるも。此山に對しての事にや。

一山高出衆峯巔。炎裡雪氷雲上烟。大古若同仁者樂。蓬萊何必覓神仙。

富士川

我國に名を得たる大河はあまたあれど。とに富士川は海道第一の急流なり。舟に乘て渡るに。わたし守ちからを出して竿をさし。櫓をおしいだすとき。岸より見るものはあはやとあやうくおもひ。船中の人は目まひ魂の消る心地ぞしける。

往來停馬此踟躕。天下滔々豈獨吾。河畔爲通名利路。涪陵慚愧一樵夫。

薩埵山

尊氏直義中あしくなりて。此所にて合戰ありし事をおもひ出て。

弟兄爭國亂如麻。萬馬奔馳薩埵涯。一樹東西枝指後。海山風雨棣棠花。

奥津

奥津は多胡の浦の事にて侍るべし。湯井より薩埵を過。爰にいたるまでに。海濱鹵斥の地にて。小民賤女の鹽燒しわざを見るに。老杜が汲井歳榾々。出車日連々といへるは。げにさる事にや。盤中の飡の皆辛苦たる事もおもひあはせられて。いよ〳〵ありがたくぞ覺へはんべる。

蚩々海畔氓。鹵裡若煎烹。昔汲孔明井。今調傳說羹。

清見關

延暦の比。奥州の逆賊高丸駿河國までせめ入。この關に陣をとりしを。坂上將軍打破りて。高丸奥へ逃退し事。久ければ語りもつたへ侍らず。此所に寺あり。京なる惠日山の爾長老の弟子開聖この寺をひらき。淸見寺となづけ。又は巨鰲ともいへり。近頃妙心寺に屬するやうに聞え侍る。

經歴巨鼇山。入門心自閑。禪徒今住寺。寇賊昔攻關。三保窓櫺裏。大洋机案間。起鞭征馬去。斜日照人顔。

三保

此所にまします明神は。神籍にのする所の美穗神社是なり。羽衣の松とて。むかし天より乙女のくだりて。此松原に羽衣をわすれしを。漁父のひろひ得たる事。いづれの文に有やらんと人のたづねしに。かの能因法師が有度濱に。天の羽衣むかしきてとよめるはこれなるべし。三保は駿河國有度郡にあればなり。

綽約冰肌神女容。聞名自古問遺蹤。漁人洗耳是何曲。仙袂飄々風入松。

久能山

この山の狀を見るに。海岸孤絶の所にて。觀音老人堅坐の地なれば補陀洛山とも申なり。一里あまり東に寺あり。久能寺となづく。聖一國

師藁科の産にて。この寺の堯弁法師を師として台教を學びしが。入宋後達磨宗をつたへて。東福寺の第一祖たり。世の人猶も久能の衛長老とて稱しける。宋より渡しける瑪瑙の羯鼓を此寺へ送られける。又源豫州も薄墨といへる横笛を寄進せられしが。いづれも池魚の殃にうせけるとなん。寺僧の書をけるとて。勸進帳のありけるを見侍りしに。あら〳〵かくなむありける。其外推古天皇の御時草創せしなどあれど。大やう疑しければ。よく心をとめずわすれ侍ぬ。

遠尋幽寺到斜陽。過客居僧談兩忘。身是此山清淨色。何求無垢在南方。

久能宮

寂然長隱久能宮。明德惟馨神國風。億兆小臣望不及。帝鄉路遠白雲中。

何圖忽輟國中春。哀慕憑誰寫御容。臣妾叩頭將伏拜。雲車高駕鼎湖龍。

駿河文庫

餘烈遠遺賢聖風。能令術業有專攻。誰言馬上治天下。只聽爐前讀雪中。寒水月明千歲意。日星道行六經功。請君更勿問他事。人是儒門五尺童。

狐崎

源頼家の梶原平三景時を誅せんとせられければ。正治二年正月。梶原相模國一宮を逃出て。駿河國淸見關にいたる。折節的場よりかへりける甲乙人行あひてあやしみおもひ。矢を射かけ追ければ。梶原狐崎にて返し合せ。蘆原小次郎。飯田五郎。吉香小次郎とあひ戰て。景茂うたれぬ。國内の兵どもあつまり責ければ。景國。景宗。景則。景連も死ぬ。景時。景季。景高はうしろの山にてうたれしを。山中より其首をさがし出して。道路に梟しける。梶原は弁口あ

りとて武勝の近習なりしが。廷尉の事を常にあしく申せし事。人のあまねくいふ事なり。

源君兄弟本連枝。何事一朝恩愛衰。猶有讒人
遺誡在。不投豺虎死狐崎。

淺間

和歌に志豆機山とよめるは是なりと聞へし。醍醐帝の時。富士本宮を爰に迁して。新宮と申よしかたり侍る。

乘輿時々詣淺間。黄昏唯見一僧還。風光應是
靈神愛。前有淸流後有山。

臨濟寺

蘭若隔林隣府閾。遊人眼裡對孱顔。立談不及
世間事。亦是浮生半日閑。

建穂寺

此寺はむかし役行者の草創せしやうにいひつたへなり。中比より密家の者移りゐて。今にいたるまであり。

此地元來法界宮。水雲心性似虚空。吟眸所々
不知暮。石徑霜深古寺楓。

八幡

此神の垂跡國々にあり。とにいちじるきは。宇佐。筥崎。男山。譽田。鶴岡。その外もあまたおほし。此駿河國に勸請しけるは。いつの事にか侍るやらん。此秋河内の譽田の緣起を社僧江戸へ持下しを見侍る。神功皇后の緣起二卷。譽田の宗廟の緣起三卷。永享年中普廣院寄進せらる。五卷ともに土佐が繪にて。宗廟の三卷は普廣院親筆に事書をうつされけり。唯今爰の八幡をみて。かの緣起の事を思ひいだし聊しるし侍る。

無方變化本非恒。五彩靈鳩金色鷹。神不惑人
々却惑。唯嫌巫祝有依憑。

久佐奈伎

延喜式に駿河國草薙神社といへるは是なり。

むかし日本武尊吾嬬國に下給ひし時。この所にて夷賊おこり。原野に火を放て。尊を燒殺さんとしければ。尊はき給へる劍をぬき。遠かたやしげきがもとをやい鎌のと。鎌をもちて打はらふ事のごとく唱へ祓ひて。劍をふりたまひければ。あたりの草とく／＼なぎはらはれて。夷賊のかたへ烟りなびきて。尊は恙もましまさず。さてこそ初は天のむら雲の劍と申せしを。草薙の劍とは名づけけれ。尊これより奥へ下りて。東夷をたいらげのぼり給ふ時に。かの劍を熱田の神宮へおさめ給ふ。我國歷代傳寳の三種の神器の其一なり。其尊を燒むとしける所をば燒津と名づけ。草をはらひたまふ所をば草薙と名づけて。何も駿河國にあり。

欲爲黎民解倒懸。東征到處幾山川。腰間一自蚰龍動。雲氣吹消蔓草烟。

宇都山

在原業平この山を過し時。蔦楓いとしげりて道もなし。修行者にあひて。歌をよみて言傳ける事。人のあまねくしれる事なり。俗に内屋ともかけり。

山中回首費吟呻。遺愛蔦楓秋又春。今古冥々名與境。業平謌後更無人。

大井川

大堰河は駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど。霖雨ふれば淵瀨かはる事たび／＼なれば。東の山の岸を流れて。島田の驛海原の中にある事もあり。西のかたに流れて。金谷の山にそふ事もあり。一すぢの大河となりて大木沙石をながす事もあり。あまたの枝流となりて。一里ばかりが間にわかる事もあり。さればいにしへより徒杠輿梁もなりがたきゆへに。往來の人馬。川の瀨をしらざれば金谷に待もあり。島田にとゞまるもあり。わたりかゝりて

さぼるゝ者もあり。辛ふじてむかひの岸にいたるもあり。島田の民をのが家ゐたゝよひ流るれども。旅客の嚢をむさぼるゆへに洪水をよろこぶ。賣炭翁が單衣にして年の寒きを待がごとし。河水の家をながし田をそこなふゆへに。防鴨河使。防葛野河使をゝかれしむかしの事も。唯今おもひ出ざらんや。

尋常揭厲必過腰。叱馬呼奴魂欲銷。來往就中何處苦。無舟無筏復無橋。

小夜中山

圓位法師がいのちなりけり佐夜の中山と詠しは。爰にての事なり。

坂道升降是早天。夢殘馬上不成眠。此山無限西行壽。能使詠歌千古傳。

西坂

西坂を新坂とも書り。此所の民わらび餅をうる。往還のもの飢を救ゆへに。いにしへより新坂のわらび餅とて。其名あるものなり。或は葛の粉をまじへて蒸餅とし。豆の粉に鹽を加へて旅人にすゝむ。人その蕨餅なりとしりて。其葛餅といふ事をしらず。諸越に茯神を買て老芋を得たる人もありけるとや。

婆呌焦兮婦喚烘。停人部食在途中。憑誰救得西山餓。馬首吹來餅餌風。

中泉

見付濱松の間に中泉といへる所は。梟鴟の多き所にて。遊獵によろしき地なれば。大將(軍)國としどに放鷹せさせ給ひてありしが。余も御供に侍りしに。芒碭雲一去。鳫鶩空相呼と。此たび打誦すべしとは思べしやは。駿遠二州いまは中將殿のしらせ給ふ國なれば。封建のむかしも今にあらざらめかも。

春蒐冬狩跡猶遺。霜露凄々野草衰。鴻鴈自來還自去。更無人放決雲兒。

池田

美濃の青墓。遠江の池田。駿河の手越。いづれも長者遊君ありて。鞍馬を門につなぎ。千金わらひを買ところなれば。彼江口の津にもいかでおとり侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も。此池田の宿のむすめにてはんべる事世にかくれなし。今は此宿天龍の河の東のはたに形ばかり殘りて。わづかなる小民どもわたりを守りて居侍りける。大天龍小天龍とて二の河ありけるが。新田左中將の尊氏と戰負てのぼられける時。うき橋の桁のなかりけるを飛越られけるも爰のことなり。江都が輕捷の有けるにや。濱松のそばなる細流を小天龍の事なりと今ぞいふめる。

池田驛長本倡家。處子嬋娟天下誇。腰似楚王宮裏柳。面如巫女廟前花。古今不盡洪河水。淵瀨相移兩岸沙。治亂興亡非我事。征鞍暫憩且嘗茶。

今切

遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり。海となりて大舟も出入る。むかしは山につゞきたる陸地なりしが。中比山よりほらの貝おびたゝしくぬけ出て海へ入ける。其跡かくのごとく海となりて。今切と名づくるよし。古老いひつたへたり。我國は伊弉諾伊弉冊のうみ給ひ。大已貴少彥名のつくられけりといへば。其むかしいかゞ侍りけむ。もろこしの華山を巨靈が擘開して水をやりける事も侍るにや。

一葉扁舟寄旅身。潮波通信遠州濱。海山何借巨靈手。我國元來造化神。

潮見坂

白須賀より西のかたへのぼる一ツの坂あり。大洋眼前にあれば潮見坂となづく。余嘗詩を

作りて云。

波浪雲天倶一色。東南溟海更無山。聖門有術人何敢。潮見坂頭停馬看。

律にかゝらはず快活のやうなれども。山看の韻。世俗の思ところ。通韻はひろきがゆへにやすく。切韻はせばきゆへにかたしとなん。三百篇楚人の詞には協韻のみおほかり。いかんぞ聖人の删修屈宋が文をしたはずして。沈約江老のいやしきを學むとや。世間流布の韻鏡にも協通の音を專とし。洪武正韻洪武韻府にもむかしにかへり。中比の韻をあらためたらずこゝろざしあらん人のいかでか我に同じからざらん。しかはあれど初學の律偶に拘る者は。先なやみて後にうべき事とおぼへ侍る。されば不律にあらんよりは先律をまもるべし。絶句を學むよりは先八句をつゞるべし。意いたらず風高からざれば古にあらず。句いたらず情深からざれば律にあらず。是詩學の捷徑なりと。さる人のかたりしは。まとにげにもとおぼしくて。耳にとゞまり侍る。

天地豈識幾會瀾。舒卷古人方寸端。滿月不遮潮見坂。大鵬飛盡水漫々。

參河國

しほ見坂より二河のあいだに幾なる溝あり。是なん遠江三河の境なりといふ。いつぞや菅野の眞道が史を見侍りしに。持統天皇三河國に行幸ありとしるせれど。いづれの郡鄕いづれの村里といふ事をしらず。眞道は光仁桓武の時なれば。世久敷してしらざるにや。事略して書もらせるにや口惜。

先王若要慰民生。定有壺漿簞食迎。遺恨翠華巡狩跡。未聞行在頓宮名。

吉田

江戸より京までの間に大橋四あり。武藏の六

郷。三河の吉田。矢矯。近江の勢多なり。ひとり矢矯のみ土橋なれば。洪水によりて絶る事もあり。此比新に板ばしとなりけるにや。爰にしも誰か周處が三害をやめて。留侯が一編を傳むや。

行々何日窮。相送數州風。馬過曉霜上。龍横道路中。川流無晝夜。人物有西東。一枕還郷夢。家書久不通。

長澤

昔在轅門見玉鞍。豈圖今日涙闌干。林間應是甘棠意。遺愛歲寒千百竿。

矢矯

矢作は岡崎の西一里ばかりにあり。建武の時。足利氏鎌倉にありて。天子の命にたがひしかば。新田氏節刀使を奉て東征し。此所にて鎌倉の軍兵と戰勝て。鷺坂まで逃るを追打て。官軍利を得し所なり。後に箱根竹下の戰に官軍敗績して。中書王のはしり給ひし事こそまとに不幸ならずや。

森々白刃是昆吾。波激河邊千萬夫。恩賜旌旗如日色。東隅雖得失桑楡。

八橋

三河國八橋は杜若の名所なる事。在中將の歌にてかくれなし。今岡崎より池鯉鮒にいたる道より北の方一里ばかりに。それなんむかしの八橋なりとて。所の人はるかに指をさしてをしへ侍る。久敷田となりて今は杜若なし。三四年前余が作りける詩にも。古人遺跡鐵鞋歩。只有三河杜若名となん。

六々歌中第幾仙。風流千歲慕幽玄。世間一瞬皆陳迹。杜若爲薪澤作田。

熱田

日本武尊東よりかへり給ふ時。尾張の稻種宿禰がむすめ宮簀媛が家に宿しましますより。

此社の神といわひ申なり。然るに世俗の說に。熱田を蓬萊といふなればば楊貴妃を祭るといふ。されば宋大史が日東の曲にも。國に楊妃が祠ありといへり。是社のみならず。巫覡の託宣世間の傳說はおもふやうおぼつかなき事おほかる。

東征功就凱旋時。宿所曾徵宮簀姬。誰道馬嵬坡下鬼。一朝來此立靈祠。

桑名

熱田より海路七里渡りて伊勢國桑名にいたる。むかし淸見原天皇吉野より濟幸ありし時。皇后も伴なひたまひて。天皇は此所より美濃國不破關に赴かせ給ひ。皇后は此地にとゞまり給ふ。天皇大伴の王子と位をあらそひ。不破の關にて東西の兵相戰しに。天皇利を得させたまひて位につかり皇なせ給ふ。天武天皇是后は天智天皇の娘。大伴王子と連枝にてましますます。女主にて後に持統天皇と申しゝなり。桑名におはせし頓宮。今はいづれの所なる事を。人にとへどもしれる者なし。又聖武天皇時。藤原廣繼西國にて野心をおこすと聞へければ。官軍をつかはし退治し給ふ。天皇は伊勢太神宮に參詣ましまして祈らせ給ひ。それより此桑名に渡御ありて。美濃にかゝり。近江路をへて還幸なりぬ。その間に廣繼伏誅のよし。捷書を馳て奏しける。日本紀續日本紀を見侍りし事を聊爰にしるしける。

曾聞二帝此停車。憾在吾邦未見書。今問先蹤人不識。誰賡風土補方輿。

石藥師

四日市場より三里ばかり西に。藥師の石像ある所を石藥師と名づく。余が心に不圖おもふやう。浮圖をかさね五輪をきざみ。退凡下乘をたて。佛菩薩を石にて造るは所〳〵におほけ

れど。碑銘墓誌、表などは一もなし。嵯峨の二尊院に。源空沙門が行狀なりとて。苔蘚の間に文字纔に殘りて侍る。誠に今の人の祖先を問に。曾高の名をだにもしらず。遠を追の心なきよりかなしき事なれ。諸州諸郡をありき見侍りしに。寺院佛閣はいかなる小民村里にもあまた侍れども。庠序學黌とては名をだにも聞ず。ましてむかしの礎もなし。延天の比までは。都には大學を建て。國郡には國學を立て。二仲の釋奠行はれしに。いつの時にかかくすたれけるぞや。足利の學校さへ。近頃まで講にても得業の人居侍りしに。此四五十年より僧法師の住所のやうになりぬ。浮圖五輪のために名をきざまんよりは。螭首鬼趺を建よかし。蒸神黙祠の爲に堂を造らむよりは。精廬家塾をせよかしと。心あらん人の腹ふくるゝほどおもへども。いひ入べき穴をほらずや。

一地(切歟)衆生承願思(恩歟)。温公曾比藥師尊。若磨此石作鍼去。甘草人參不足言。

庄野

石藥師の西亀山の東に庄野あり。此所の民家に火米をちいさき俵に入て。毎戸ならべてをく。其俵の大さこぶしのごとく。又は槌のごとくなるもあり。輪子のせいに包み縛へてあるを。旅人買とりて家つとにすといふ。先年余僮僕馬のあとにかけて來りしを見て。昔の伏波は薏苡を一車にのせ。伯顏は梅花を檐頭に挿みしに。今此小俵あまた取來ること。ほほゑむばかりおかしくて。彼法道仙人越智の大德が俵米を飛せし事も思ひ出られてありしか。今又都にのぼり包苴の物とし。我をまつ小兒の歡笑を見むとのみにて行ぬ。

唐人詩句漢人書。記得燒耕火米畬。可慰孩提求口實。終朝咀嚼齒牙餘。

鈴鹿

關の地藏より鈴鹿の坂の下まてあまたの河あり。八十瀨の河とは是なり。爰にましますす明神は。天武天皇の行逢たまへる老人にてや侍らん。世の婦人小子の口遊める鈴鹿御前の物語とやらむはおぼつかなし。此所にありし鬼を苅田丸が討したがへたりといふ。是もまたおぼつかなし。むかしより山賊ある所といひつたふれば。それを鬼とはいふにや。伊勢三郎も鈴鹿の山賊なりけるとなむ。

九折盤紆鈴鹿坡。行人征馬恐蹉跎。祇今四海恩風遍。八十瀨河無白波。

土山

土山といへど山はなし。鈴鹿より西の坂を下りて。二里ばかりにあり。釋詁毛傳などに。石山を土の山とよみ。土山をいしの山とよむ事をおもひて。

行李東西久旅居。風光日夜憶鄉閭。梅花繫馬土山上。知是崔嵬知是岨。

水口

去歲八月四日。大相國二條の御所を出御ありて。翌日此所に宿せ給ふ。其日より打續き雨ふりければ。三日逗留ましまし〳〵けるに。夜更るまて御前に余も侍りし時。學而の篇をよめと仰ければ。跪きひらきはんべりしに。能竭其力。能致其身とある所をみづから御讀ありて。能といふ字に心をつくべきなり。なをざりにては忠孝たちがたし。親には力をつくし。君には身をいたすといつぱ。いづれかまされるといふ評論あるべしと仰けるに。余もかの趙苞が故事を引て答へ奉りしが。只今わすれがたくて。すゞろに袂をしぼり侍る。

愛生從子親。義立自君臣。侍讀古年雨。淚痕今日人。

草津

石部より草津にいたりしに。馬につきたる奴隷共のかたりしは。近江國は本より相撲の者おほく有て。石邊。草津出合相撲をとるに。石邊かつ時もあり。草津かつ時もありといふを聞て。事のおこりを人のたづねしかば。當麻の蹶速野見宿禰より初て。那都羅良雄力をくらべ。俣野河津にいたるまで其名聞へ侍る。年中行事にも相撲の節會とて。内裏にも行はせ給ふなど。やう〳〵物がたりし行ほどに。勢田になりぬ。相撲の詩を作れと人のいひければ。

氣似烏菟出野堨。力如蹯背戴方壺。龍紋絕臏今猶古。聞否少年相撲徒。

勢田

勢田は古戰場なり。承久の役には。皇輿の敗績して外に蒙塵ありし事をかなしみ。孝謙の御寓には。内相が奔らんとするに。橋絕て高島にて亡し事をよろこぶ。是のみならず。日本紀を見れば。天智帝崩御あらむとする時。大弟は沙門とならせ給ひて吉野山に入せ給ふ。大友皇子その時は大政大臣にてありしが。天智の讓りをうけられしに。大弟吉野より潛に出て。和州伊賀いせを過。濃州不破關にて尾州の兵を召あつめ。皇子の兵と戰勝て。近江の瀨田まで責のぼり給ふ。皇子みづから此橋の邊に陣をとつて合戰ありしが。大弟の兵かつにのりて。皇子敗北して竹中に入て。伯林雉徑の跡をふめり。大弟は淸見原天皇是なり。壬申の亂とは此時の事をいふなり。懷風藻は勝寶年中に編集せしが。其中に大友皇子は天智帝の長子なり。壬申の役に天命遂ずして薨ぬといへり。舍人親王は皇考王父のために文を婉て。南臺が筆をいかゞおもひけん。懷風藻は親王の時をさる事遠からざれば。其事の實を隱さるゝに

や。近頃大明に燕王が建文をころして。白帽子を戴けるも。異域同日の物語なるべし。

勝敗興亡憂更憂。千年人事落棊楸。積骸爲帶血爲水。都入勢多橋下流。

比叡山

湖水の邊より比叡山を見て。いつぞや八の和韻をし侍る詩を爰にしるして。

貝公昔作四明遊。能使遺文後世留。杉洞窟深蚍蟒動。竹生島泛浮萍幽。三朝烟草君王殿。一夜風波内相舟。只有舊時今不改。山雲湖影日悠々。

一二は孫貝公が天台山の賦の事を用ひ。三四は登覽の景をいひ。五六は懷古の感慨をのべ。尾句は景情を合せていふ。此詩を作りし時は。余が年二十七八にてやありけん。久しく公務の暇なくて。吟咏する事もなし。古人三日の間にも舌本こはしとこそいふに。まして余が筆硯塵積てとしへぬれば。口中のむばら。いかてか詞林にまじはらむ。しかれども江山のたすけもあれかしとおもふ心のゆくにまかせて。紀行の詩今日までにて若干首に成ぬ。

艮嶽從來守紫宸。先王立作國家鎭。雲波五色三津浦。星斗千年七社神。湖水朦朧空得月。山櫻寂寞自過春。好風美景非無意。吾亦東西南北人。

大津

大津をすぎて相坂にいたり。肩輿より清水の流れを見て。

九陌大津隈。忿々繁往來。一亭群馬聚。十里遠帆開。鮒上任公釣。鱠傳張翰盃。潺湲相坂水。烏帽掃塵埃。

元和二年十一月日　　羅浮子

〔右丙辰紀行以賜蘆拾葉校合〕

高野の道の記 資慶卿

あすか河のながれてはやき月日も。又愁人のためにとゞまらず。いつしか五七の日數も過ぬ。木をきざみておもかげをしたひ。つかにふして孝心をわすれずといへども。猶慈恩の報じがたき事を思ふ。今こゝにしれり。流轉三界中。恩愛不能斷。棄恩入無爲。其實報恩者と云事を。天暦の御願文を後江相公のかけるにも。去年初心只契延齡。今朝新鬟欲開出世之門こそ有けり。紀伊國高野の嶺は。弘法大師瑜迦定に入て。就卒をまち給ふ所[たう院書]にて。本朝の靈場最上の山なれ。されはにやときさとなくいやしきえらまず。老たるも若きも。菩提にこゝろ有ものゝ。かの山に結縁むすばずといふ事なし。いまたらちめのなきあとに。おさめをくべき物などもあれば。たつさへもてまうでんとす。除服の宣たまはりて。おほやけにつかへば。をのが袖の色をだに心にまかせてしたひ見るべくもあらじ。五旬はてざらんほどよとおもひたちぬ。永源の僧立印。法雲の住祖因は。此ほどの喪にこもりて。やう〳〵山にかへりいりなんといへるを。よしなをともなひてこそといざなひて。けふ卯月廿日あまり二日といふに都をたつ。空はれたり。難波わたり迄は舟にてくだるべければ。伏見よりとて人々いざなひゆく。めづらしくもあらぬ道のほどなれど。そこゝとりあつめて。思ひ出る事おほかるに。げになにとかは人のかたみならざらん。いまさらふり出るなみだに。袖はしぼりつゞけぬ。みすといふところより。舟にのりてさしいづるほど。水とをく見渡す川波に。見し世の春さへ霞のこりて。こゝろにうかぶ事のみおほし。汀の芦あを〳〵おひしげれる中に雉子の啼を。是だに折ふしあわれにて。

資慶

たらちめのむかしをしればこをおもふ野邊
のきゞすのなくねかなしき

とひそかにずしなどするに。けふみちのほど
にて賦しけるとて。

祖因

欲往南州探舊蹤。　農騎鞭殿出河東。
今隨長者多奴僕。　不與昔時行脚同。

伏見は金湯の地なりといふ事をおもひて。

祖因

禾黍離々歩不通。　城隍何處認遺蹤。
豐臣曾失苞桑計。　蓋代功名也作空。

淀のわたりを過行ほどに。時鳥はなどいひて。

泉南僧

ひとこゑはむかしをおもへほとゝぎすきゝ
はやすべきよどのわたりに

狐河にいたりぬ。こゝは壽永のみだれに。平忠度朝臣駒引かへして。和哥のなげき申されし所とかやいひつたふるとて。

立印

ひとすぢに引かへしける弓とりのあとをた
づねてけふきつね川

資慶

和韻す。

決死更回鞭。　留歌意雅然。
莫疑千載後。　名籍泛狐川。

全。

後衆著歸鞭。　勇心最凜然。
功名流不盡。　(千歲)十載在斯川。

かくいへば。はやおとこ山のふもとを行。

立印

おとこ山和光のかげもうつりけりたれもの
り見よよどの川ふね

資慶

いはし水にごりにしまぬちかひあれぱあを

かざらめやいむ身なりとも

水無瀬の洲崎を過ぬれば。うとの丶あし。葉分涼しく風渡りて。はる〴〵とみへわたるに。ひんがしはなぎさの院なり。

立　印

をりかざしながめしひともさく花もいまはなぎさのあとのしら波

舟中にてつくれる。

祖　因

刺舟下渡頭。　人與　悠々。
觸石灘聲惡。　沈波山影流。
鯉魚搖尾樂。　鷗鳥浴翎浮。
縱有逝川欲。　勝遊好解愁。
魚水操舟兩岸中。　瀲青徹底鑑塵容。
回眸回顏蓬窻下。　是盡雲山幾萬重。

資　慶

見るほども波にまかするふねよりもつゐにとまらぬ身をばわすれて

やう〴〵ながれゆくほどに。佐太の宮を一里斗過て。川の西にちいさき森のみへたるは江口なり。遊女の舊跡とてなんあるといふを見むとて。指寄てのぼりぬ。川堤を一町ばかり行て。わかやのこなたに二間四面の堂あり。普賢堂なるべし。前にふりたる碑有。よりてみれば彌陀の名號をすへて其下に。世をいとふ人とし聞ばかりの宿に心とむるなと思ふばかりぞとかけり。右には攝州西成郡中島江口と見ゆ。左は文字きえたり。

資　慶

おもへたゞたれもさこそはかりのやどにて丶ろをとめず名をばとゞめじ

立　印

こ丶ろある人のつらさはなか〴〵に聞つたへてもなさけとぞなる

祖因

江口渡頭繫小船。各催感慨古墳前。
姓人亦有出塵心。一首和哥百世傳。

大坂にさしつけたれば。日は三竿ばかりになりぬ。久寶寺といふ所に知人有て待となん聞ば。いそぎ馬よせて行ほどに。やゝ暮渡る田面のさなへはやうへわたして。末葉風になびくほどなるを。都のほとりにはいまだなわしろにてこそとおもふに。こゝはみなみなればにや。

資慶

むめがへもまづさくかたぞむべこゝにさつきもまたてさなへとりけり

くれすぐるまゝに。螢ほのかにともしそめて。あぜつたひのしるべがほなり。

祖因

難波城外夜行時。村落縱橫多路岐。
螢火亂飛井田水。琉璃盤上引金糸。

やどりにつきぬれば。あすの道のほどなどとはせぬ。よろしきついでなれば。〔たちはな殿歟〕かわの太子にまうづべきよしいへば。あるじさこそ道のたよりもよしあり。譽田の御陵もそこのあたりなり。あない申さんといふ。やがてまくらをとる。

廿三日。けふも空はれたり。都のやどりに霞日亭とてかまへ置たるにのぼりて。

祖因

苔竹叢中處士居。奇花異草遶庭除。
村名久寶價無盡。檐外風光盡〔畫歟〕不如。

久寶寺を出て道明寺の前をすぐ。十町ばかりゆきぬれば八幡宮なり。友まちて樓門のほとりにやすらふほどに。年四十にたらぬとみゆるかたいのふしたるが。人のをとにめさまして物こはんとす。けふはことに片岡山のむか

しさへおもひいてずしもあらねば。うちより
て物語などして。もと何人にかとゝへば。やが
て此ほとりの寺に出家して佛につかへし〔か歟〕は。
十年ばかりがほど。中風になやみてなんかく
なりぬるなどゝいふ。今雨風にはだへをまか
せ。土にふし石をまくらとす。やめる事いかに
と問。今は中々さも侍らずといふ。さらばなど
かむかしの身にならざらん。僧は慈悲の行あ
れば。もとめによりて薪こり水汲わざのみは
さこそゆるしもあらんを。さおもはゞ我いま
そのてらに此よしいひてといへど。さる事い
でや〔こ歟〕これしともおもはぬけしきなれば。今の
ほどの命つぐべき施行してわかれぬ。調達が
地獄の樂しみ思ひつゞくるに。今煩惱苦海の
衆生さえに遠離の心なく。昨日を送りあすを
待なん。なにか是にことならむと。はかなき事
を思ひてやすらへば。みな來れり。宮は南むき
なり。はゞかりあれば本地彌陀堂などおがみ
めぐり。廻廊の西よりおくの院にまいる。御は
しのうちの院はみな律の僧すめるになん。御
廟も南にむかひて樓門あり。うちに常灯ほの
かにかゝげて。惠日のひかりをつげり。門のそ
なたに扉をたてゝ。そのうしろは山なり。山は
はるかに見しも。たゞひとつはなれて。みさゝ
ぎにつきたるなるべしと見ゆ。これ長野のみ
さゝぎなり。樓のほかよりかよひて御廟にま
うづ。山の中央に三重の石の塔あり。こけしろ
くたかさひて。幾世の宿といふ事をしらず。あ
となきに小篠を分入。しゐておがみ奉りぬる
に。いともかしこければ。

資愛

いまもなをみつのころもにかげとめてこの
山のはにありあけの月

印立

月かげはながのゝみねにいりぬれどひかり
をのこすのりのともしび
祖因

聞說先王曾此崩。　松杉陰翳譽田陵。
窓鶯悽愴神如在。　廟裡長挑一點灯。

下向すとて。かたはらの僧に物がたりなどして。そもこれはかしこくも吾國第一の宗廟。百王の御守り。いづれの靈跡かこゝにしかん。再興のさたなどもなきにやといへば。いまはさる事おもひたつ事にも侍らず。むかし頼朝卿尊氏卿などは信じ参らせられたるよし聞傳へたりといふ。石淸水の社僧等もまうずる事なしとかたる。それより伊駒のたけを左に見て。するに國府の川ながれ出たり。川にのぞみてちいさき山あり。これなん片岡山なりとをしゆ。行はかのそばづたひなり。

ふぢごろもかたおかやまのふるごとをきて
とふわれもあはれおやなし
資愛

このたびはとはてすぐるもはかなしなかの
かたおかののりのみちしば
立印

頓阿法師は大和國に有よししるしたり。片岡の達广寺といふも大和國とぞ聞。哥枕名所には河内の國に入たり。斑鳩富緒川も河内なり。太子につきぬれば。まづ別當なにがしの院にもとめよりたるに。靈寳もとり出らる。其中に多寳塔の下より。回祿ののち堀出たりとて。佛舍利十二粒ふたつにはかりて。一方は黄金蓮肉形三の足あり。一方は水晶の塔に安置せり。各たかさ一寸ばかり。ふたつをあはせて。ひとつ銀のうつはもの。蓮房のかたちにして入たり。八方に銘をほりたり。其銘に云。

每日作是念。　以何令衆生。

得入無上道。　蓮(速疾)成就佛心。
建暦元年四月廿三日　沙門證空造之。
其外は青銅なり。おなじ蓮房なり。銘云。
是法住法位。　世間相常住。
於道傷知己。　導師方便說。
又外の二重蓮花形鐵なり。すべて五重にしてうづみ置たり。二重の鐵は朽て。中に水のたまりてありけるとなん。銀はすこしさびたり。黄金は不變なり。古人の心ざしはかくあさからざりける事を感ずるの銘の。四月廿三日と有をおりしもあれとて。

資慶

しるしをくあとも卯月の廿日あまりみつる
えにしをおもふけふかな

やがて法ゑうちかけて御廟にまうづ。入よりいとかしこく。すゞろになみだうかびて廊門をいりぬ。檜長後といへり。まへに拜堂ありて。御廟は小山のこたかく物ふりたうときけしき。見ぬ人のはかりしるべくもあらず。神前は岩窟のうちに石壇を疊みたる廊に。かはらのやね軒山につけておくへ入事三丈餘り。常灯しづかにてらして。不滅の惠光をあらはす。香をたき禮拜して。西行法師がかたじけなさにといひけんなみだに。しぼらぬ袖はなし。まして緇衣の身をやとて。

立印

此國につたへし法のまもりぞとおもへばぬ
るゝ墨染の袖

祖因

庭僧兼創寺。　万世別無人。
南嶽再生祖。　東漸應化身。
瑞楠枯又茂。　古碣倒長泯。
靈廟戀瞻久。　拜來淚濕巾。

資愛

法の水わが國ひろくつたへ置て末の世めぐむ人のあとぞみれ〔こ歟〕

御山はひとつはなれたり。上宮太子のこゝをきれかしこをきれと宣ひしはこの陵なり。めぐりを石のそとばにてかこへり。爪字をすくられたり。四十九院と云。弘法大師千日參籠して。三地の薩埵にのぼり給ふ。そのときにて給ひしとなん。行めぐる石疊みは幾世の人のふみならしけん。影うつるばかりみがゝれてみゆ。廟廊のやねにそひふして楠のあるを。これなん大乘木といへり。太子の御はゝをほうぶり參らせられし時。太子みづから御棺をかきまいらせて。その木のはしをさしをかれたり。吾大乘法此國にさかへば。此木根を杭せよとちかひ給ひしとなん。終に枝葉繁榮せり。世にたえぬみのりの寶樹ぞと。

立印

立よりてあふげばいとゞかげたかしくちぬしるしの法のこのもと

この木回祿の時もえて。いとなりて中はうつろにてぞあんなる。ひこばへ立さかへて皮肉くひぜをつゝめり。後の五百年いまだなかばなるにやとたのもし。かの火は惟任日向守光秀が惡逆となん。鎮守九所權現御廟の東なり。其南に淨土堂とてあり。彌陀の三尊を安置す。弘法大師の御廟の內へ入て見給ふに。池水ありておくに石の座あり。石の奧三所を安置す。是太子と母后と夫人となり。三尊の化身なる事を石壁にしるしをかれける文を。大師うつし取て出給ひぬとなん。この御廟の圖は眞言に相傳する事となり。偖此三尊をつくりをかれけるこそ今は新佛なり。御影堂聖靈堂はくはしく畫圖して前にしるす。けふは河內國三日市といふ所にとまり。

廿四日。空くもる。やどりを立とて三日市と云事を。

すつる身はうき立雲かゆくみづかいちのもりやのみくしとまらで

立　印

行路迢々日欲昏。　指呼同友宿山林〔村歟〕。
晨炊蓐食假〔裝歟〕裝閙。　又逐晴嵐出市門。

祖　因

是より山路なり。やう／＼入山のあはひ。うつの山におもかげおもひあはせられて。いづれ夢ぞとたどる。若ばあをやかにしげりたるに。うの花咲まじりてかぢかなく水のおちあひなり。涼しく山はたゞは色付て。秋の霜をいそくそひへたる峯の庵。世はなれたる賤が柴のかこひ。ゑにもおよぶまじく。たゝめる山の入あひたるは。山鳥のおをかはせるがごとし。

祖　因

一條徑路傍溪斜。　過了羊腸又犬牙。
倒嶺横峰景千變。　山河處々有人家。

こえ行峰のかくれに。炭がまのかりほあれて。たきさしたる跡などみて。

資　慶

ふみ分て雪にはあとや見へつらん草葉に埋むすみ竈の庵

さかしき所にまさごすれおちて。一筋見ゆる道有。是は山人の柴きりためて岑よりくだすなり。柴みちとてそいへとて。

立　印

あやうきにこりはてぬ身をいかゞせんみねよりくだす賤がしばみち

資　慶

山がつの峰よりくだす柴くるまとゞむるかたもなきこゝろかな

又　立　印

みねつとふしば人よりもなか〳〵に世にいづる身はあやうかりけり

紀の見の峠にこえかゝる。道に木たかくふりたる松三本ぞたてる。故あるさまなるをとへば。紀の國河内の境のしるしといふ。

　　　　　　　　　　　　　　　　賚　慶

たよりあらば紀のぢのさかひけふこえてしるしの松もみきとつげばや

峠にのぼりぬれば。旅人の爲にむすびをけるいほりあり。やすらひてそこらとひきけば。此山なんかつらぎの峰つゞきにて。むかひのしげれる嶽にても。行者のおこなひすなるといへば。

　　　　　　　　　　　　　　　　賚　慶

しら雲のよそにかけこしかつらぎのみねのつゞきをけふぞこえぬる

　　　　　　　　　　　　　　　　立　印

かつらぎや峰のしら雲分てこしよそにのみしてうらみはてじと

　　　　　　　　　　　　　　　　祖　因

人倦馬疲懶躋攀。途中遙見葛城山。溟濛雲雨晴何晩。又似靈神掩醜顏。

橋本のすくにひるの舍りに誂らひて行末の事などとふ。雨は猶やまず。高野の峰にのぼらむは。九折いとはげしく人馬やすからず。けふは此所にやどりて。あすなんはるべきをなどいふ人々もあれど。しゐてのぼらんとす。

　　　　　　　　　　　　　　　　賚　慶

たかの山さらでも袖はしけるべきけふふる雨ぞわがこゝろなる

　　　　　　　　　　　　　　　　立　印

なにをしておやのみしょのむくひけんと思ふにぬるゝ墨ぞめのそで

時のまもあふぎみるべきねがひとて山にも

こゆるやま路なりけり

雨ふればあやうきみちといさむれどやどしてわたるはしもとのさと

とて出て。紀の川のわたり舟にのる。是よりぞ高野の麓なる。慈尊院ははるかに南のかたなるべし。道八方よりのぼるといへり。やゝのぼりてかぶろのすくを過て。乗といふ所に至る。雨猶やまず。やがて白雲の中に分入ぬ。左右茫々と白て。さきだつはかへりみる友をうしなひ。をくるゝはしるべにまよふ。風のゆきゝにやまきの梢お(を歟)とかげばかり見へかくれて。しるべにせん松だにもなし。まして一鳥の聲だに聞へず。御山はいづこならんとあふぎて。

資慶

ねがひこしこゝろのそらは晴行をたかのゝ峯のなにくもるらむ

すこしくだりてかみやといふ所に至る。爰はかみすく所なり。猶のぼれば行末やゝ晴て。感應のしるしがほなり。かつは隨喜す。

祖因

あまの川せきくだしゝもとゞむるもいのれる人のこゝろなるらん

不動坂を見やれば。杉檜雲にそびへて峨々と聳たり。こなたに四寸五分と云難所あり。輿も通ず。まして馬などは此道よりはのぼらぬ成べし。かちより行に。巉巖左右にいでゝ道をさしはさめるほど。やゝふみ渡りて不動坂にいたる。

祖因

九折盤回路險危。目眩足流歩行遲。
巍然不動碧山面。千載散[illegible]人仰大臥[illegible]。

行めぐれば。吹すかしたる雲のはづれより。しげれる嶽の顯たれる。金剛峯なるべし。かく山

ふかく入居給ひて。道侶いくばくの人をわたし給ふらんと思ふに。いとかたじけなしといへば。

立　印

たか野山こゝろふかくもわけをきてたれも
入べき道となしける

此あたりは杉ひの木さて槙など。末をあらそひ雲をしのぎ。所せくおひたちて松はなかりけり。下葉のもとよりよそひあらためて峻德院といふ坊に入ぬ。

廿五日。空はなをくもれり。

立　印

吾くにの山ともさらにおもはれずやへたつ
空を分てきぬれば

晴間まちてけふはまづ御堂にまいる。中門は南にむかひたり。入て兩所（明歟）御神の御前過て。次第におがみめぐる。所から堂塔のふりたうときに。大塔高く九輪雲をすぎて。莊嚴さらにうるはし。三鈷の松は陰ふりて。御影堂の前に枝しん〳〵そなれたれ。所々のつとめ今にたへず。三昧堂は美福門院の御願にて。西行上人いまだ良淸といひしとき。奉行して建られたる（なし）下知の狀など寶藏にのこれり。庄園にともよせられしとなり。常に供僧ありて日行おこたる事なし。道長公夢想を感じて一歩三禮して參詣し給ひて。終に大師に逢奉られしとなり。其後白河の法皇匡房卿の執奏により御幸をぞ催されける。慈尊院より御步行。三日にしてまいりつかせ給ひけり。龜山後宇多の法皇も參り給ひしと聞ぞいともかしこきや。巡禮をはりて後院にかへりぬ。

蹈斷白雲登絕嶺。　箇中境致別開天。
凌空鳫塔翼然聳。　架谷僧房鱗次連。
兜卒梵宮移下界。　廬峰精舍在那邊。

大師貳化密非密。　遺德煥今八百年。

立　印

わがやまをふかしとみてややみなましたか
のゝおくにたづねいらずば

白雲はうづむとすれど聲すなりたか野のて
らのいりあひのかね

（六葉）廿二日。雨やみて雲はれず。けふおさめ奉るべき物の箱など。よくしたゝめたるに。

立　印

なき人を思ひみだるとくろかみにそのきは
よりも袖しぼるらん

とあれば。

資　慶

たのもしなながき世迄もをちかみのおはり
みだれぬすぢをみつれば

奥の院にまうづ。院々の前を過て。橋よりおくにはいほりもなし。道をさしはさめる杉の木立末にゝふれ行雲の雫雨よりもことなり。左右はみな塔婆にて立ならべたるは。山の草木に數をあらそひ。（七葉）貴いきとなく賤きとなく。咫尺の地をあます事なし。ふりたるはたふれこけむし。其名もさながら消うせ。又幽に殘るもあり。大方はみな此ごろの人とぞ見ゆる。こゝにみるだにかくそひゆくらん。なき數にいましてもれにける身の。かつはあはれに猶更に生死事大に參壽。

祖　因

新舊纍々幾變途。　半傾半倒石浮圖。
可憐大小英雄士。　空沒蘚苔名亦無。

資　慶

立ならぶ名もしら露のふるあとにかたぶく
石もなをあはれなる

立　印

高野山しるしの石も苔ふりてあはれたれと

も名だにしられず

左の山より細く流れ出て。道のかたはらを行水有。大師玉川の水と詠じ給ひしを是ぞといへど。さだかにさこそとも見えず。かくて三十余町が程はみなおなじことにて。山のそば谷のかげ。見る物はたゞふるあとなり。卒都婆はつみて山をかさね。きのふのはさながらけふうづめり。

立　印

たれとてもつゐにはきえん露の身をたかの ゝ苔に契りをかなん

御供所のうしろに木しげき峯あり。姑射山と云。人跡絶てふかし。此山に人の分入事なし。入ものはかへらずとなんかたる。そこを過ぬれば御廟の橋なり。世人あやまりて無明の橋といひて。無明煩悩の業ふかき人は渡る事をえずして罪障懺悔すとす。此川は御山廻りてながるゝ清浄の靈水なり。參詣給へ流灌頂と云とをしをきたるが。ながれよりたるは木隱れの岩根にたゝめり。水のきよければにや。さながら折すけにうつくつもうかびぬべし。燈籠堂は東西行二十間計とぞ見ゆる。四方格子にて敷瓦也。其中に堂にしたがひてすぢとをし。重々にかゞやきたり。中央に護广の壇あり。めぐりて塗香して廟前にまいる。杉たかく生かこみたる中にぞおはします。玉がきの中には尋常に入事なし。石壇にかりに香爐すへて香燒。三拜して先妣精靈速證菩提。次にはをのが心願など申て。いとかしこければ。露のいのちあらんほどに。今一度とぞむすびをきける。

祖　困

ふかきよりふかきにいりてたか野やま妙なるかどをたづねみしかな

松檜森々山更深。　那伽定裡自安心。
却觀一念萬年事。　慈氏下世也即々。

立　印

收影高山待下生。　那伽定裏六根清。
寂然堂内灯千點。　照破人間愚暗情。

さておさむべき箱取出て。いづくのわたりかといへば。引導の僧此所をかまへ置つとて。三十一町としるせる石のもとより西の山のかたに。杉のふる葉を分入てみれば。所もさりぬべしと。みづから地を成して納つ。しるしの石に哥仙大姉と刻み入たるわきに。

資　慶

むすびをくえにしくちめやたかのやまその
あかつきをまつのした露

頌曰。

壽量未必比仙家。　長保法身意若何。
爪髪併埋靈地程（程歟）。　化爲土塊待龍華。

我遺骨の後（か脱歟）ならず此山に來らむ事を契りおきて。枝の下道わけいづるほど。いとゞ名殘さへそひぬ。ちかき代には甘露寺大納言親長卿此山にふたゝび參詣して入堂のつゐでに。

さきの世のちぎりやふかきたかのやまふた
ゝびわくる峯のしら雲

とよみけるよし。日記にしるしをかれたるをみしなども。うらやましく思ひあはせられて。かたはらの杉の本をけづりてかきつけける。

薩戒修行者

おなじくはいのちある世にふたゝびとちぎ
りていづる杉のしたみち

おなじところに。

立　印

たかの山ふかきこゝろの月かげはそのあか
つきをまたでしも見む

かへるさの行てなれば。金剛三昧院にありと

いふ寶積經の短尺を披見す。それより南院にまかり。大師唐土にて歸朝の願につくられたる不動をおがみ奉る。又五筆禮讃は寶性院にあり。益田池の碑銘。釋迦文院の什物となり。うるはしく眞蹟なるべし。かへりぬれば日くれぬ。

資慶

たか野山なき名の數にけふもまたもれてききつるいりあひのかね

廿七日。今朝もはれず。けふこの山を別るべければ。峻德院の廟に參りて。いさゝか心ざしをのべて。手向の香にそへぬ。其詞。

資慶

洛西常磐森の法に法雲といふは。院をかまへて我祖の遺跡とす。井伊拾遺直滋朝臣おなじ所にあとをしめらる。今こゝろざす事ありて此山に分入ぬるに。かの緣にひかれて峻德院と云によりて。とふべき人のしるしなどたてをくとて。一むらさめのかげならぬ事を思ひて。いさゝか手向する事になれり。

たかの山こけのしたまでむすびけりときはのもりの露のちぎりを

立印

なきあとに名のみのこりてたかのやまたれあらそはん弓矢とる身の

祖因

元是一輪天上月。野山太阜各分光。神靈來格有緣處。爲向廟前撮辨香。

あるじに余波などいひて出るとて。

立印

こゝを出ていづくの山にとしふともかゝるあはれをわするべしやは

資慶

むすびをくこけぢの露のかり枕ながきよま

てのえにしともなれ

祖　因

泣雨杜鵑催不驚。　野山投宿忘歸程。([illegible])
再來預恐易經歲。　佛閣僧房細聞名。

下乘のもとまで院の僧ども送り出て名殘をしみなどす。此あひだいたづらにしのびつるは。いつのほどにあらはれぬるなり。花の水ともてはやすも。おもてにかきすへてこそ。やゝくだりぬれば。今朝をくりせし法師の中に。了玄といひし人の哥讀しは。かたくなゝる事にもこそあれ。ひそかに申たりしかばとて。即叟ふところより短尺とりいでたり。みれば。

　おもひきやこの柴の戸を稀にあけておほみ
　や人の袖をみんとは

やさしかりつるを。返しもせてといへどかひなくてやみぬ。猶空晴てかへり見る峯さやかに。又いつかはとしぼらぬはなし。不動坂に至りて見れば。晴ぬとみしは空よりうへなればにや。しもはたゞ白雲漫々とみてり。谷をうづむとみゆるは山々のたかねにて。みらくすくなきいその石の。しほひにあらはるゝやうにぞ有ける。

資　慶

山うづむ雲をふもとの海にみてつゞらをり
ゆく道のはげしき

祖　因

雨醒岑頭翠聳天。　雲埋山腹色始綿。([illegible])
忽然參得樊川句。　暗認人家下絶巓。

又。

多謝輿儓勞隻肩。　山程路滑歩難前。
只因自己脚跟定。　歩嶮蹈危終不顚。

分つくして又橋本のすくにつく。やどりのまへに紀の川ながれていと興ありとぞみるに。やゝ暮行空猶雲まよひて雨もよほすけしきな

るに。

立印

いかなれば五月を空よりいそぐらむはれ間だになき夕暮のあめ

といへるに。今日雲わけし道のほどにて思ひをきし題あるを。いざよまんとて。白雲盡處見人煙といふ事を。

資慶

晴行かいほみへそめて山がつのゆふげのけぶり雲にわかるゝ

立印

しら雲は風にうつりておちかたのけぶりぞのこる山がつのいほ

祖因

白雲重疊掩山巓。遠近失程樵路懸。
忽着剛風何處去。夕陽村落見炊烟。

又綠色江聲暗結愁といふ句の心を。

立印

夕ぐれははれぬながめとなりにけり谷のひゞきも山のけしきも

資慶

水のをとは袖のあめにもまさるかとながむる嶺に雲ぞかさなる

猶やみがたくて半夜灯前十年事。一時和雨到心頭といふを題にて。

資慶

こしかたをかきつらねつゝよるの雨をすゞりにつくすともし火のもと

立印

こしかたをいかにおもへどあめもよのあくるもおそきともしびのもと

祖因

夜雨蕭然欹枕頭。旅簷起座一灯幽。
通宵耿々難成夢。記得新愁與舊愁。

なをねられずなどいひて。即叟硯をなし(出歟)て言
葉をかく。
むかし世をのがれて高野の山に上りし時。ゆ
き暮てこのさとに一夜のやどりをかる。比し
も秋の空なれば。夕のあらし身にしみ。夜半の
月心をすまして。いとゞ旅寝の哀に。袖しぼり
し事を又。

立　印

おもひ出ていまだにぬるゝたもとかなひと
りたびねの夜半のむかしを

廿八日。雨そぼふる。橋本を出て山路をゆく。

祖　因 三首

數日行程山色奇。吟望處々欲題詩。
歸郷風景人如問。把比(此實歟)實囊附與伊。
河内津陽桀(泉歟)紀間。回頭指點幾孱顔。
野翁不解風流事。問我那心苦見山。
山路連朝帶雨行。幾多羈客促愁情。
我儂不是貪程切。只爲風光祈快晴。

ぬれ／＼て三日市につきぬ。ありしやどり尋
てやすらふ。あるじ出てけふぞ下向し給ける。
又は待いでん事もかたし。物かきてこゝに殘
し給へといふ。いざやさるものには侍らず。修
行者のさすらへにいざなはれて。かく嘯きあ
りき侍れども。物かきをしわざなどはしらず
とけちやれど。しゐてゆるさゞりければ筆取
て。

資　慶

笹のやのひと夜のふしをわすれじとかきの
こさんもあだし言の葉

かきすてゝいづみのかたへたどり行。山はつ
きて野べ廣し。末はるかに海原の見へ渡りた
るを。いとめづらしげなり。此野を小野芝と
云。

立　印

太山わけはやまも今はつきぬらしながめはれ行をのゝしばみち

祖因

雨晴山亦盡。　忽忘路行難。
出野回吟睇。　笠檐天地寛。

みやこのかたも雲はれてみゆ。

資慶

山ふかみはれぬゆふべのながめをしみやこは雲もかゝらざりける

福町といふところのみちのほとりに。五劫思惟彌陀石の像あり。

祖因

何年離淨國。　獨座此村邊。
稽首彌陀佛。　願輪與石堅。

堺にいたりてやどりもとむとて。同行のしるべまどひして。

同

宜哉楊子哭。　岐路誤東西。
認得長安道。　決然不復迷。

廿九日。からうじて晴行。いそぎ立いづとて。海のかたをながめて。

同

泉南一都會。　比屋近汀洲。
借問賈商客。　風光能愛不。

すみの江を行ほど。こぎ行舟のほの〴〵とあけゆく浦波。松のひまに見へて。社のかたやうやう日影さしそむるにおりてやすらひぬ。思ひ出る事松のはのかず〳〵にて。

資慶

すみの江の松のむかしとなるひとによるてふ貝をひろひわびつゝ

かたみとて人の殘さぬうみやまもみればみしよを忘れやはする

可悦叟松かげより出きて。我いほは此わたり

にこそ。立より給はずやといへば。

立　印

そむく身はこゝにはすまじ住の江やえもとおはてじうらのけしきに

ひらかたにて渡しまつほど。過行舟をみて。

祖　因

百丈操舟附魚流。(舎缺)　激湍波惡上遲留。
可憐易退却難進。　恰似吾徒參話頭。

こよひはうとのゝこやにやどりて。あくれば都にいりぬ。

以宮內省圖書寮所藏塙氏原本再校了　芝葛盛

明治四十四年十月廿一日印刷
明治四十四年五月廿十日發行
昭和十六年五月十一日六版發行

發行者　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市豊島區西巣鴨二丁目二五七四番地
丹羽誠次郎

印刷所　東京市豊島區西巣鴨二丁目二五七四番地
忠義堂印刷所

發行所　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七・電話大塚七一八